

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—55—

朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査 II

1999

福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—55—

朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査 II



(1) 7号石棺墓



(2) 4号石棺墓出土仿製鏡・鹿角装刀子



(3) 石棺墓出土管玉・ガラス玉

## 序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施してまいりました。発掘調査は平成2年度の朝倉町外之隈遺跡の2次調査をもちまして無事完了しております。また、発掘を行いました遺跡の調査成果をとりまとめた報告書を昭和57年度より刊行いたしておりますが、本年度をもちまして完了する運びとなりました。

本報告書は、昭和57・62年度に発掘調査を実施しました朝倉郡朝倉町所在の長島遺跡についての調査成果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第55集としてとりまとめたもので、長島遺跡の第2冊目にあたります。

長島遺跡は、縄文時代から中世にかけての集落・墓地群を主体とする複合遺跡で、多数の遺構・遺物が調査されました。本書が、甘木・朝倉地域における文化財及び歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査・整理報告にあたり、多大なるご協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係各位に深く感謝いたします。

平成11年3月31日

福岡県教育委員会  
教 育 長 光 安 常 喜

## 例　　言

1. 本書は、昭和57・62年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施した長島遺跡の第2冊目の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第55集にあたる。
2. 本書は先に刊行した長島遺跡Ⅰ（C地区）の続編で、今回は長島遺跡Ⅱとして昭和57年度に調査したB地区及び昭和62年度に調査した第2次調査分を掲載した。
3. 遺構の実測は、調査担当者の他に高田一弘・武田光政・日高正幸・高山浩一・目修二・目修三・中村光恵・矢野静子・後藤カミヨ・牟田冴子・渡辺輝子・高瀬セツ子・本石セツ子諸氏の協力を得た。
4. 出土遺物の整理・復原作業は、岩瀬正信整理指導員のもとに九州歴史資料館復原室及び福岡県文化財保護課甘木発掘調査事務所において行った。  
鉄器の保存処理には、九州歴史資料館学芸二課長横田義章氏の協力を得た。
5. 出土遺物の実測は、大野愛里・西田美代子・辻啓子・田中洋子・木下・小池・小田による。
6. 製図作業は、塩足里美・江上佳子・秋吉邦子・小池・伊崎・小田による。
7. 本書掲載の写真は、遺構を石山・木下・小池・小田が撮影し、遺物は石丸洋・北岡伸一の撮影による。
8. 1・7号石棺墓出土人骨の鑑定は、九州大学大学院比較社会文化研究科一中橋孝博助教授による。
9. 挿図で使用する方位は、平面直角座標の第2系にもとづく座標北である。
10. 遺跡分布図は、昭和62年国土地理院発行の「甘木」1/50,000を使用した。
11. 図版1の航空写真は、国土地理院の撮影である。
12. 図版・挿図では、D：土坑、M：溝、S：石棺墓、K：甕棺墓の略号を用いた。
13. 本書の執筆は、旧石器・縄文時代の遺構・遺物を小池が担当し、それ以外は小田による。
14. 本書の編集は、小田が行った。

## 本文目次

I 調査組織と調査経過 .....	1
II 遺跡の位置と歴史的環境.....	6
III 検出遺構と出土遺物 .....	9
1. 遺構の概要 .....	9
2. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物 .....	11
(1) 旧石器時代の遺物 .....	11
(2) 円形竪穴 .....	12
(3) 屋外炉 .....	14
(4) 集石土坑 .....	14
(5) その他出土の遺物 .....	16
3. 弥生時代の遺構と遺物 .....	31
(1) 竪穴住居 .....	31
(2) 土 坑 .....	50
(3) 溝 .....	51
(4) 通 路 .....	72
(5) 落 込 .....	84
(6) 石棺墓 .....	113
(7) 瓢棺墓 .....	122
(8) 土壙墓 .....	124
(9) その他出土の遺物 .....	128
4. 古墳時代の遺構と遺物 .....	135
(1) 竪穴住居 .....	135
(2) 掘立柱建物 .....	154
(3) 土 坑 .....	154

(4) その他出土の遺物	157
 5. 奈良時代の遺構と遺物	158
(1) 壁穴住居	158
(2) 掘立柱建物	194
(3) 壁 穴	197
(4) 土 坑	199
(5) 溝状遺構	201
(6) その他出土の遺物	202
 6. 鎌倉時代の遺構と遺物	205
(1) 掘立柱建物	205
(2) 柵	210
(3) 壁 穴	210
(4) 土 坑	213
(5) 溝	241
(6) 通 路	243
(7) 落 込	249
(8) 土壙墓	250
(9) その他出土の遺物	253
 IV 自然科学的分析	257
－1・7号石棺墓出土の弥生時代人骨－	257
 V まとめ	
－長島遺跡の集落変遷－	259

## 図 版 目 次

卷頭図版	(1) 7号石棺墓	
	(2) 4号石棺墓出土彷彿鏡・鹿角装刀子	
	(3) 石棺墓出土管玉・ガラス玉	
		本文対象頁
図 版 1	長島遺跡周辺航空写真（国土地理院 KU-76-2X）	6
図 版 2 (1)	長島遺跡遠景（航空写真 南西上空から）	6
	(2) 長島遺跡 2次調査区全景（気球写真 東上空から）	9
図 版 3 (1)	1号円形竪穴（南から）	12
	(2) 2号円形竪穴（南から）	12
図 版 4 (1)	1号屋外炉（北から）	14
	(2) 1号集石土坑（北から）	14
	(3) 旧石器とみられる石器	11
図 版 5 (1)	円形竪穴・屋外炉・集石土坑出土縄文土器	12
	(2) 包含層等出土縄文土器①	16
図 版 6 (1)	包含層等出土縄文土器②	16
	(2) 包含層等出土石器	27
	(3) 包含層出土植物遺存体	28
図 版 7 (1)	61号竪穴住居（南西から）	31
	(2) 66号竪穴住居（北東から）	32
図 版 8 (1)	66号竪穴住居遺物出土状況（北西から）	32
	(2) 73号竪穴住居、2号溝（東から）	32
図 版 9 (1)	75号竪穴住居（北東から）	36
	(2) 遺物出土状況（北西から）	36
	(3) 屋内土坑遺物出土状況（北西から）	36
図 版 10 (1)	77号竪穴住居（南から）	36
	(2) 屋内土坑砥石出土状況（北から）	38
図 版 11 (1)	78号竪穴住居（北東から）	38
	(2) 87・88号竪穴住居（北西から）	45
図 版 12 (1)	92号竪穴住居（西から）	47
	(2) 1号土坑（北から）	50

図 版 13 (1) 7・8号溝、4号通路（西上空から）	51
(2) 7号溝周辺部（西から）	51
図 版 14 (1) 7号溝（南東から）	51
(2) 南端部遺物出土状況（北から）	51
(3) 中央部遺物出土状況（西から）	51
図 版 15 (1) 8号溝（南から）	63
(2) 北端部遺物出土状況（旧1号土器溜 西から）	63
(3) 南端土層断面（北から）	63
図 版 16 (1) 4号通路（南東から）	72
(2) 北端部遺物出土状況（旧3号土器溜 南西から）	72
(3) 北端土層断面（北西から）	72
図 版 17 (1) 4号通路出入口部、4号落込（北西から）	72
(2) 4号通路南端土層断面（北から）	72
図 版 18 (1) 2号落込周辺部（西から）	84
(2) 遺物出土状況（北から）	84
図 版 19 (1) 3号落込土層堆積状況（西から）	95
(2) 遺物出土状況（北から）	95
図 版 20 (1) 4号落込（東から）	113
(2) 土層堆積状況（北東から）	113
図 版 21 弥生時代墳墓群全景（北東から）	113
図 版 22 (1) 1~7号石棺墓、20・21号土壙墓（北東から）	113
(2) 1~6号石棺墓、18号土壙墓（北西から）	113
図 版 23 (1) 1・2号石棺墓（北西から）	113
(2) 1号石棺墓蓋石除去後（南西から）	113
図 版 24 (1) 1号石棺墓人骨出土状況（南西から）	113
(2) 2号石棺墓（南東から）	114
図 版 25 (1) 3号石棺墓（北西から）	116
(2) 蓋石除去後（南西から）	116
図 版 26 (1) 4号石棺墓（北西から）	116
(2) 仿製鏡出土状況（南西から）	116
(3) 仿製鏡出土状況（北から）	116
図 版 27 (1) 5号石棺墓（南から）	117
(2) 蓋石除去後（南から）	117

(3) ガラス玉出土状況（東から）	117
図 版 28 (1) 6号石棺墓検出状況（北東から）	120
(2) 完掘状況（北西から）	120
図 版 29 (1) 7号石棺墓土層断面（北西から）	120
(2) 標石の状況（北西から）	120
図 版 30 (1) 7号石棺墓、21号土壙墓（北西から）	120
(2) 人骨出土状況（南西から）	120
図 版 31 (1) 管玉出土状況（南西から）	120
(2) 8号石棺墓（南東から）	120
図 版 32 (1) 1号甕棺墓（南西から）	122
(2) 1号甕棺墓埋置状況（北東から）	122
図 版 33 (1) 18号土壙墓（北西から）	124
(2) 19号土壙墓（北から）	125
図 版 34 (1) 20号土壙墓（南西から）	126
(2) 21号土壙墓（北東から）	126
(3) 遺物出土状況（北西から）	126
図 版 35 堅穴住居出土土器①	36
図 版 36 堅穴住居出土土器②	43
図 版 37 7号溝出土土器①	53
図 版 38 7号溝出土土器②	53
図 版 39 7号溝出土土器③	53
図 版 40 8号溝出土土器①	64
図 版 41 8号溝出土土器②	64
図 版 42 4号通路出土土器①	72
図 版 43 4号通路出土土器②	72
図 版 44 4号通路出土土器③	72
図 版 45 4号通路出土土器④	82
図 版 46 2号落込出土土器①	84
図 版 47 2号落込出土土器②	84
図 版 48 2号落込出土土器③	84
図 版 49 3号落込出土土器①	95
図 版 50 3号落込出土土器②	100
図 版 51 3号落込出土土器③	105

図 版 52	3号落込出土土器④	111
図 版 53	3号落込出土土器⑤	112
図 版 54 (1)	1号甕棺	123
	(2) 土壙墓出土土器	125
図 版 55 (1)	Pit出土土器	128
	(2) 4号石棺墓出土副葬品	116
	(3) 石棺墓出土玉類	116
図 版 56 (1)	出土石包丁他	131
	(2) 出土砥石	131
	(3) 出土台石	132
図 版 57 (1)	出土鉄器（鎌・鎌・斧）	133
	(2) 出土鉄器（鑿・斧・鋤先）	133
	(3) 出土鉄器（鎌・鋤先）	133
図 版 58 (1)	出土ミニチュア土器他	134
	(2) 出土柄杓形土製品	134
	(3) 出土土版他	134
図 版 59	西端部古墳時代竪穴住居群（東から）	135
図 版 60 (1)	56・57・59・60・71号竪穴住居（東から）	135
	(2) 56・57号竪穴住居（東から）	135
図 版 61 (1)	56号竪穴住居カマド（南から）	135
	(2) 57号竪穴住居カマド（南から）	135
図 版 62 (1)	59・69号竪穴住居（南から）	139
	(2) 59号竪穴住居カマド（南から）	139
図 版 63 (1)	60・71号竪穴住居（南から）	140
	(2) 60・71号竪穴住居貼床下部（東から）	140
図 版 64 (1)	60号竪穴住居カマド（南から）	140
	(2) 62～65号竪穴住居（北から）	143
図 版 65 (1)	62号竪穴住居カマド（南から）	143
	(2) 64号竪穴住居カマド（南から）	145
	(3) 65号竪穴住居カマド（南から）	146
図 版 66 (1)	68号竪穴住居（南東から）	148
	(2) 68号竪穴住居カマド（南西から）	149
図 版 67 (1)	68号竪穴住居遺物出土状況（北西から）	148

(2) 3号土坑（北東から）	154
図版 68 壺穴住居出土土器①	141
図版 69 (1) 壺穴住居出土土器②	151
(2) 出土鉄器・土製品	139
図版 70 (1) 81号壺穴住居（南から）	158
(2) 81号壺穴住居カマド（南から）	159
図版 71 (1) 83・84号壺穴住居、12・14・18号土坑（南西から）	160
(2) 83号壺穴住居（西から）	160
図版 72 (1) 84・86号壺穴住居（南から）	163
(2) 84号壺穴住居カマド（南から）	163
図版 73 (1) 85号壺穴住居（南から）	163
(2) 85号壺穴住居カマド（南から）	163
図版 74 (1) 90号壺穴住居（南から）	164
(2) 98号壺穴住居（東から）	166
図版 75 (1) 98号壺穴住居カマド（東から）	167
(2) 99号壺穴住居カマド（南から）	168
(3) 101～103号壺穴住居（西から）	171
図版 76 (1) 101号壺穴住居カマド（西から）	171
(2) 102号壺穴住居カマド（西から）	173
(3) 103号壺穴住居カマド（西から）	173
図版 77 (1) 104号壺穴住居（南から）	173
(2) 104号壺穴住居カマド（南から）	173
図版 78 (1) 105号壺穴住居（南から）	174
(2) 106～109号壺穴住居（北西上空から）	175
図版 79 (1) 106号壺穴住居（南から）	175
(2) 106号壺穴住居カマド（南から）	175
図版 80 (1) 107号壺穴住居（南から）	178
(2) 107号壺穴住居カマド（南から）	179
図版 81 (1) 108号壺穴住居（南から）	181
(2) 108号壺穴住居カマド（南から）	181
図版 82 (1) 109号壺穴住居（南東から）	183
(2) 109号壺穴住居カマド（南東から）	183
図版 83 (1) 110～112号壺穴住居（南から）	184

(2)	110号竪穴住居カマド（南から）	185
図 版 84	(1) 113号竪穴住居（南から）	187
	(2) 113号竪穴住居カマド（南から）	187
図 版 85	(1) 114号竪穴住居（南から）	189
	(2) 114号竪穴住居カマド（南から）	189
図 版 86	(1) 115号竪穴住居（東から）	189
	(2) 115号竪穴住居カマド（東から）	190
図 版 87	(1) 116号竪穴住居（東から）	191
	(2) 120号竪穴住居（東から）	193
図 版 88	(1) 17・18・20号建物（南から）	193
	(2) 17号建物柱掘形断面（東から）	193
	(3) 18号建物柱掘形断面（東から）	193
図 版 89	(1) 19号建物（東から）	195
	(2) 20号建物柱掘形断面（東から）	196
	(3) 41号土坑（北西から）	200
図 版 90	(1) 竪穴住居出土土器	167
	(2) 竪穴出土土器	197
	(3) Pit 出土土器	202
図 版 91	(1) 18号建物出土墨書き土器	194
	(2) 竪穴住居出土鉄器	162
	(3) 竪穴住居他出土製塙土器①	168
図 版 92	(1) 竪穴住居他出土製塙土器②	171
	(2) 竪穴住居他出土土製品	162
図 版 93	(1) 中世遺構群（東から）	205
	(2) 13・14号建物周辺（東から）	205
図 版 94	(1) 13・14号建物（東から）	205
	(2) 12・15・16号建物（東から）	208
図 版 95	(1) 12号建物（東から）	205
	(2) 15号建物、1号柵列（東から）	205
	(3) 16号建物（東から）	208
図 版 96	(1) 2・4号竪穴（北西から）	210
	(2) 4号竪穴（北から）	210
	(3) 遺物出土状況（南東から）	211

図 版 97 (1) 4号土坑(西から) .....	213
(2) 土坑内Pit(南から) .....	213
(3) 石臼出土状況(北から) .....	213
図 版 98 (1) 5号土坑(北から) .....	219
(2) 6号土坑(西から) .....	219
(3) 8号土坑(北東から) .....	221
(4) 9号土坑(北から) .....	223
図 版 99 (1) 12号土坑(北から) .....	223
(2) 18号土坑(東から) .....	226
(3) 19号土坑(北から) .....	226
(4) 22号土坑、5号竪穴(東から) .....	228
図 版 100 (1) 24号土坑(西から) .....	228
(2) 26・27号土坑(西から) .....	232
(3) 28号土坑(西から) .....	232
(4) 30号土坑(西から) .....	235
図 版 101 (1) 32号土坑(南から) .....	235
(2) 33~36号土坑(西から) .....	235
図 版 102 (1) 35号土坑遺物出土状況(西から) .....	238
(2) 52号土坑(東から) .....	239
(3) P455(南東から) .....	239
図 版 103 (1) 2~4号通路周辺(北西上空から) .....	243
(2) 2号通路(南から) .....	243
図 版 104 (1) 3号通路(西から) .....	243
(2) 川原石出土状況(北から) .....	243
図 版 105 (1) 3号通路(北から) .....	243
(2) 3号通路最下部遺物出土状況(北西から) .....	243
(3) 5号通路(南東から) .....	248
図 版 106 (1) 15号土壙墓(南から) .....	250
(2) 16号土壙墓(東から) .....	250
(3) 17号土壙墓(東から) .....	250
図 版 107 (1) 4号竪穴出土土器 .....	213
(2) 土坑出土土器① .....	219
図 版 108 土坑出土土器② .....	226

図 版 109 (1) 溝・通路・P i t 他出土土器 .....	242
(2) 16号土壙墓出土土器 .....	250
(3) 土坑他出土鉄器 .....	232
(4) 出土フイゴ羽口 .....	241
(5) 出土土製品① .....	243
(6) 出土土製品② .....	226
図 版 110 (1) 土坑他出土石器 .....	213
(2) 土坑他出土石鍋① .....	228
(3) 土坑他出土石鍋② .....	228

## 挿 図 目 次

第 1 図 九州横断自動車道路線図	
第 2 図 長島遺跡調査区割図 (1/4,000) .....	1
第 3 図 長島遺跡周辺地形図 (1/10,000) .....	5
第 4 図 長島遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	折込
第 5 図 長島遺跡地形図 (1/2,000) .....	折込
第 6 図 旧石器とみられる石器実測図 (3/4) .....	11
第 7 図 1・2号円形竪穴実測図 (1/60) .....	13
第 8 図 屋外炉・集石土坑実測図 (1/30) .....	14
第 9 図 円形竪穴・屋外炉・集石土坑出土土器拓影 (1/3) .....	15
第 10 図 包含層等出土縄文土器拓影① (1/3) .....	17
第 11 図 包含層等出土縄文土器拓影② (1/3) .....	18
第 12 図 包含層等出土縄文土器拓影③ (1/3) .....	19
第 13 図 包含層等出土縄文土器拓影④ (1/3・1/4・2/9) .....	20
第 14 図 包含層等出土縄文土器拓影⑤ (1/3) .....	22
第 15 図 包含層等出土縄文土器拓影⑥ (1/3) .....	23
第 16 図 包含層等出土縄文土器拓影⑦ (1/3) .....	25
第 17 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図① (1/3) .....	26
第 18 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図② (3/4・1/2) .....	28
第 19 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図③ (1/2) .....	29
第 20 図 61・66・74・76号竪穴住居実測図 (1/60) .....	折込
第 21 図 61号竪穴住居出土土器実測図 (1/4) .....	31

第 22 図	72・73号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	32
第 23 図	73号竪穴住居、2号溝実測図（1／60）	33
第 24 図	74号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	34
第 25 図	75号竪穴住居実測図（1／60）	35
第 26 図	75号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	37
第 27 図	77号竪穴住居実測図（1／60）	38
第 28 図	78号竪穴住居実測図（1／60）	39
第 29 図	78号竪穴住居出土土器実測図①（1／4）	40
第 30 図	78号竪穴住居出土土器実測図②（1／4）	41
第 31 図	78号竪穴住居出土土器実測図③（1／4）	42
第 32 図	80・95～97号竪穴住居実測図（1／60）	44
第 33 図	80号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	45
第 34 図	87・88号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	46
第 35 図	87・88号竪穴住居実測図（1／60）	折込
第 36 図	92号竪穴住居実測図（1／60）	47
第 37 図	95号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	48
第 38 図	96・97号竪穴住居出土土器実測図（1／4）	49
第 39 図	1・16号土坑実測図（1／40）	50
第 40 図	4～6号溝実測図（1／80）	51
第 41 図	7号溝遺物出土状況・土層断面実測図（1／60）	52
第 42 図	7号溝出土土器実測図①（1／4）	54
第 43 図	7号溝出土土器実測図②（1／4）	55
第 44 図	7号溝出土土器実測図③（1／4）	56
第 45 図	7号溝出土土器実測図④（1／4）	57
第 46 図	7号溝出土土器実測図⑤（1／4）	58
第 47 図	7号溝出土土器実測図⑥（1／4）	59
第 48 図	7号溝出土土器実測図⑦（1／6）	60
第 49 図	7号溝出土土器実測図⑧（1／4）	61
第 50 図	7号溝出土土器実測図⑨（1／4）	62
第 51 図	7号溝出土土器実測図⑩（1／4）	63
第 52 図	8号溝南端土層断面実測図（1／60）	63
第 53 図	8号溝出土土器実測図①（1／4）	65
第 54 図	8号溝出土土器実測図②（1／4）	66

第 55 図	8号溝出土土器実測図③ (1/4) .....	67
第 56 図	8号溝出土土器実測図④ (1/4) .....	68
第 57 図	8号溝出土土器実測図⑤ (1/4) .....	69
第 58 図	8号溝出土土器実測図⑥ (1/4) .....	70
第 59 図	4号通路実測図 (1/80) .....	71
第 60 図	4号通路南端土層断面実測図 (1/80) .....	72
第 61 図	4号通路出土土器実測図① (1/4) .....	73
第 62 図	4号通路出土土器実測図② (1/4) .....	74
第 63 図	4号通路出土土器実測図③ (1/4) .....	75
第 64 図	4号通路出土土器実測図④ (1/4) .....	76
第 65 図	4号通路出土土器実測図⑤ (1/4) .....	77
第 66 図	4号通路出土土器実測図⑥ (1/4) .....	78
第 67 図	4号通路出土土器実測図⑦ (1/6) .....	79
第 68 図	4号通路出土土器実測図⑧ (1/4) .....	80
第 69 図	4号通路出土土器実測図⑨ (1/4) .....	81
第 70 図	2~4号落込土層断面実測図 (1/60) .....	83
第 71 図	2号落込出土土器実測図① (1/4) .....	85
第 72 図	2号落込出土土器実測図② (1/4) .....	86
第 73 図	2号落込出土土器実測図③ (1/4) .....	87
第 74 図	2号落込出土土器実測図④ (1/4) .....	88
第 75 図	2号落込出土土器実測図⑤ (1/4) .....	89
第 76 図	2号落込出土土器実測図⑥ (1/4) .....	90
第 77 図	2号落込出土土器実測図⑦ (1/6) .....	91
第 78 図	2号落込出土土器実測図⑧ (1/6) .....	92
第 79 図	2号落込出土土器実測図⑨ (1/4) .....	93
第 80 図	2号落込出土土器実測図⑩ (1/4) .....	94
第 81 図	3号落込出土土器実測図① (1/4) .....	96
第 82 図	3号落込出土土器実測図② (1/4) .....	97
第 83 図	3号落込出土土器実測図③ (1/4) .....	98
第 84 図	3号落込出土土器実測図④ (1/4) .....	99
第 85 図	3号落込出土土器実測図⑤ (1/4) .....	100
第 86 図	3号落込出土土器実測図⑥ (1/4) .....	101
第 87 図	3号落込出土土器実測図⑦ (1/4) .....	102

第 88 図	3号落込出土土器実測図⑧ (1/4)	103
第 89 図	3号落込出土土器実測図⑨ (1/4)	104
第 90 図	3号落込出土土器実測図⑩ (1/8)	105
第 91 図	3号落込出土土器実測図⑪ (1/4)	106
第 92 図	3号落込出土土器実測図⑫ (1/4)	107
第 93 図	3号落込出土土器実測図⑬ (1/4)	108
第 94 図	3号落込出土土器実測図⑭ (1/4)	109
第 95 図	3号落込出土土器実測図⑮ (1/4)	110
第 96 図	3号落込出土土器実測図⑯ (1/4)	111
第 97 図	弥生時代墳墓群配置図 (1/150)	112
第 98 図	1号石棺墓実測図 (1/30)	113
第 99 図	2号石棺墓実測図 (1/30)	114
第 100 図	3号石棺墓実測図 (1/30)	115
第 101 図	4号石棺墓実測図 (1/30)	117
第 102 図	5号石棺墓実測図 (1/30)	118
第 103 図	6・8号石棺墓実測図 (1/30)	119
第 104 図	7号石棺墓実測図 (1/30)	折込
第 105 図	石棺墓出土副葬品実測図 (1/1)	121
第 106 図	1号甕棺墓実測図 (1/30)	122
第 107 図	甕棺実測図 (1/10)	123
第 108 図	18号土壙墓実測図 (1/40)	124
第 109 図	19号土壙墓実測図 (1/40)	125
第 110 図	20号土壙墓実測図 (1/30)	126
第 111 図	21号土壙墓実測図 (1/30)	127
第 112 図	土壙墓出土土器実測図 (1/4)	128
第 113 図	P i t 出土土器実測図① (1/4)	129
第 114 図	P i t 他土土器実測図② (1/4)	130
第 115 図	出土石器実測図① (1/3)	131
第 116 図	出土石器実測図② (1/3・1/4)	132
第 117 図	出土鉄器実測図 (1/3)	133
第 118 図	出土土製品実測図 (1/2)	134
第 119 図	56・57号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	136
第 120 図	56～58・70号竪穴住居実測図 (1/60)	折込

第 121 図	56号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	137
第 122 図	57・59号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	138
第 123 図	59・69号竪穴住居実測図(1/60) .....	140
第 124 図	60・71号竪穴住居実測図(1/60) .....	折込
第 125 図	59・60号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	141
第 126 図	60・62号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	142
第 127 図	62・63・72号竪穴住居実測図(1/60) .....	143
第 128 図	62・65号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	144
第 129 図	64・65号竪穴住居実測図(1/60) .....	145
第 130 図	64号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	146
第 131 図	63・64・65・69号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	147
第 132 図	68号竪穴住居実測図(1/60) .....	148
第 133 図	68号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	149
第 134 図	68号竪穴住居出土土器実測図①(1/3) .....	150
第 135 図	68号竪穴住居出土土器実測図②(1/3) .....	151
第 136 図	79号竪穴住居実測図(1/60) .....	153
第 137 図	91号竪穴住居実測図(1/60) .....	153
第 138 図	23号掘立柱建物実測図(1/60) .....	154
第 139 図	3号土坑出土土器実測図(1/3) .....	154
第 140 図	2・3・40号土坑実測図(1/40) .....	155
第 141 図	P i t 他出土土器実測図(1/3) .....	156
第 142 図	出土石器・鉄器・土製品実測図(1/2) .....	157
第 143 図	81・89号竪穴住居実測図(1/60) .....	158
第 144 図	81・89号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	159
第 145 図	83号竪穴住居実測図(1/60) .....	160
第 146 図	81・83・86号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	161
第 147 図	84~86号竪穴住居実測図(1/60) .....	162
第 148 図	84・85号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	163
第 149 図	89・90・98号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	165
第 150 図	90号竪穴住居実測図(1/60) .....	166
第 151 図	98~100号竪穴住居実測図(1/60) .....	折込
第 152 図	98号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	167
第 153 図	99号A・B竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	169

第 154 図	99・100・101・104・106号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	170
第 155 図	101~103号竪穴住居実測図(1/60) .....	172
第 156 図	104号竪穴住居実測図(1/60) .....	174
第 157 図	104号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	175
第 158 図	105号竪穴住居実測図(1/60) .....	176
第 159 図	106号竪穴住居実測図(1/60) .....	176
第 160 図	106号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	177
第 161 図	107号竪穴住居実測図(1/60) .....	178
第 162 図	107号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	179
第 163 図	107~111・113~115号竪穴住居出土土器実測図(1/3) .....	180
第 164 図	108号竪穴住居実測図(1/60) .....	181
第 165 図	108号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	182
第 166 図	109号竪穴住居実測図(1/60) .....	183
第 167 図	109号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	184
第 168 図	110~112号竪穴住居実測図(1/60) .....	185
第 169 図	110号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	186
第 170 図	113・114号竪穴住居実測図(1/60) .....	188
第 171 図	115号竪穴住居実測図(1/60) .....	189
第 172 図	116号竪穴住居実測図(1/60) .....	190
第 173 図	116号竪穴住居カマド実測図(1/30) .....	191
第 174 図	117号竪穴住居実測図(1/30) .....	192
第 175 図	120号竪穴住居実測図(1/60) .....	193
第 176 図	竪穴住居他出土鉄器・土製品実測図(1/2) .....	193
第 177 図	17号掘立柱建物実測図(1/60) .....	194
第 178 図	18号掘立柱建物実測図(1/60) .....	195
第 179 図	墨書き器実測図(1/3) .....	195
第 180 図	19号掘立柱建物実測図(1/60) .....	196
第 181 図	20号掘立柱建物実測図(1/60) .....	197
第 182 図	3・7号竪穴実測図(1/60) .....	198
第 183 図	3・7号竪穴出土土器実測図(1/3) .....	199
第 184 図	10・15・41・43号土坑実測図(1/40) .....	200
第 185 図	10・15・41号土坑出土土器実測図(1/3) .....	201
第 186 図	10号溝出土土器実測図(1/3) .....	201

第 187 図	P i t 出土土器実測図① (1/3) .....	202
第 188 図	P i t 他出土土器実測図② (1/3) .....	203
第 189 図	豎穴住居他出土製塙土器・フイゴ羽口実測図 (1/3) .....	204
第 190 図	13・22号掘立柱建物実測図 (1/80) .....	206
第 191 図	12・15・16号掘立柱建物、1号柵列実測図 (1/80) .....	折込
第 192 図	14A・B号掘立柱建物実測図 (1/80) .....	207
第 193 図	14・21号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3) .....	208
第 194 図	21号掘立柱建物実測図 (1/80) .....	209
第 195 図	1・2号豎穴実測図 (1/60) .....	211
第 196 図	1・2・6号豎穴出土土器実測図 (1/3) .....	212
第 197 図	4~6号豎穴、22号土坑実測図 (1/60) .....	214
第 198 図	4号豎穴出土土器実測図 (1/3) .....	215
第 199 図	4号土坑実測図 (1/80) .....	216
第 200 図	4・6号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	217
第 201 図	4号土坑出土石臼実測図 (1/3) .....	218
第 202 図	5・6・8号土坑実測図 (1/60) .....	220
第 203 図	7号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	221
第 204 図	7・13・17・20・21号土坑実測図 (1/60) .....	222
第 205 図	9・11・12・14・18・19号土坑実測図 (1/40) .....	224
第 206 図	8・9・11~14号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	225
第 207 図	18~21号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	227
第 208 図	22号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	229
第 209 図	24・25・32号土坑実測図 (1/60) .....	230
第 210 図	24号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	231
第 211 図	26~30号土坑実測図 (1/40) .....	233
第 212 図	26・27号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	234
第 213 図	33~37号土坑実測図 (1/60) .....	236
第 214 図	28~30・32~34号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	237
第 215 図	35・36・44・54号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	239
第 216 図	38・44・46・47・50~52・54号土坑実測図 (1/40) .....	240
第 217 図	9号溝実測図 (1/60) .....	241
第 218 図	2・5・9号溝出土土器実測図 (1/3) .....	242
第 219 図	2号通路実測図 (1/120) .....	244

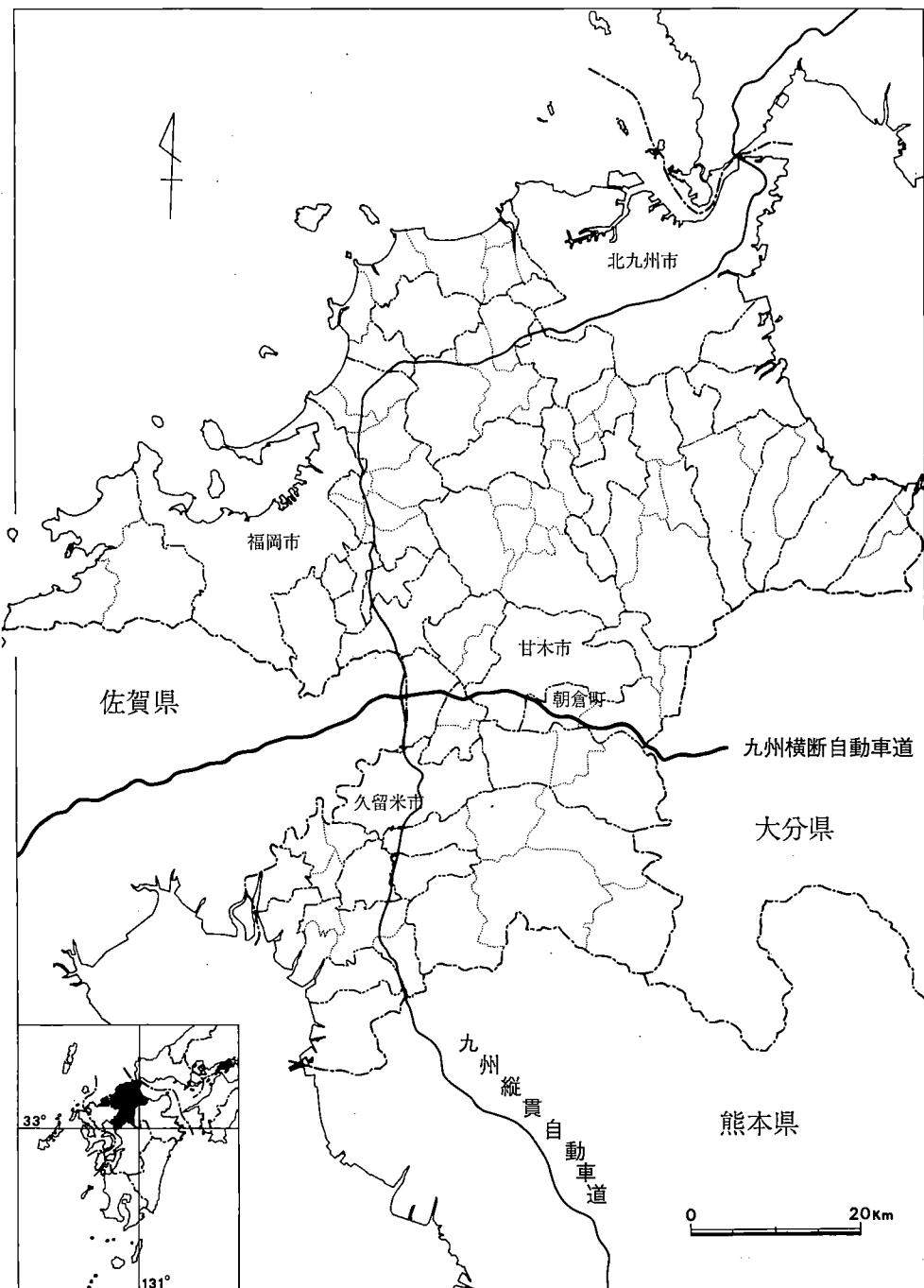
第 220 図 3号通路実測図 (1/120) .....	245
第 221 図 3号通路出土土器実測図① (1/3) .....	246
第 222 図 3号通路出土土器実測図② (1/3) .....	247
第 223 図 5号通路実測図 (1/80) .....	248
第 224 図 2・5号通路出土土器実測図 (1/3) .....	249
第 225 図 15~17号土壙墓出土土器実測図 (1/3) .....	250
第 226 図 15~17号土壙墓実測図 (1/30) .....	251
第 227 図 P i t 他出土土器実測図 (1/3) .....	252
第 228 図 出土砥石実測図 (1/3) .....	253
第 229 図 出土鉄器・土製品実測図 (1/2) .....	254
第 230 図 出土石鍋実測図 (1/3) .....	256
第 231 図 長島遺跡集落変遷図 .....	262

## 付 図 目 次

付 図 長島遺跡遺構配置図 (1/300)

## 表 目 次

表 1 新旧遺構番号対照表 .....	10
表 2 長島遺跡 2 次調査出土縄文時代の石器類一覧表 .....	30
表 3 石棺墓出土玉類計測表 .....	121
表 4 出土人骨一覧 .....	257
表 5 頭蓋計測値 .....	258



第1図 九州横断自動車道路線図

# I 調査組織と調査経過

## 1次調査の経過

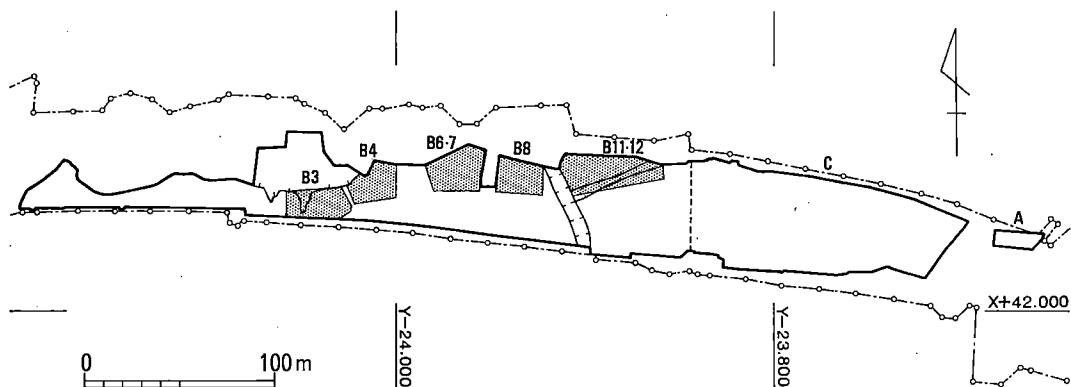
九州横断自動車道関係遺跡（以下、横断道）の第27地点（建設工事区のSTA198+50～STA203+80）－長島遺跡－は、朝倉低山地から筑後川方向に派生した丘陵先端部にあたり、STA198とSTA204付近には谷が入っている。長島遺跡の立地する丘陵は基部幅100m程の細長い形状を呈し、平野部に島状に突出している。横断道の路線はこの丘陵の北半部を通過する格好となり、試掘調査の結果、遺構の存在が確認された長さ約540mが調査対象となった。

長島遺跡の1次調査は昭和57年10月1日から開始し、一年後の昭和58年10月3日に終了した。調査は、山田採土場から本線内の盛土工事用の土砂を搬出するための工事専用仮設道路－パイロット道路部分が急がれていたためB地区のパイロット道路部分に一等最初に取りかかった。B地区では便宜上12の小区に分けて調査を行い、B-3区では鎌倉時代の落込（3号通路）、B-4区では弥生終末期の竪穴住居・溝、B-6・7区では鎌倉時代の掘立柱建物・柵列・土坑、B-8区では縄文時代の屋外炉・集石土坑及び奈良時代の竪穴住居、B-12区では奈良時代の竪穴住居及び鎌倉時代の土坑などの遺構を検出した。

C地区ではパイロット道路部分の調査に続き本線部分の調査を行い、7世紀前半～8世紀中頃の竪穴住居51軒、掘立柱建物11棟、土壙墓14基が調査され、鎧帶（丸鞆）・製塩土器などの特産品が出土している。なお、C地区の調査内容については、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－34－（長島遺跡）として刊行されており、詳細はそちらを参照されたい。

## 2次調査の経過

長島遺跡の2次調査は、昭和62年4月22日から本調査を開始した。西端部から遺構検出を行ったが、竪穴住居が多数重複しており、検出作業に手間取った。竪穴住居の時期は6世紀後半代



第2図 長島遺跡調査区割図 (1/4,000)

のもので、1次調査においては検出されていない時期のものであった。また、当該期の遺構はこの部分に集中している。検出当初、土坑としていたSTA199+80付近の遺構は、掘り下げた結果、鎌倉時代の通路と判明した。そのすぐ東側にある遺構も1次調査では落込としていたが、再度調査した結果、通路であることが判った。また、調査区の中程で検出した1次調査で弥生終末期の土器溜としていた遺構は溝となり、丘陵を分断する形となった。溝内及び通路北側の落込からは多量の弥生土器が出土しており、パンコンテナー200箱にも上った。

表土剥ぎと発掘調査は並行して行ったが、面積が広く、遺構面まで割と深いこともあって3ヶ月程の日数を要した。7月中頃にはSTA201付近の掘立柱建物・土坑の調査を行った。この付近には鎌倉時代の遺構が密集し、土坑内からは陶磁器類がまとまって出土した。8月に入って東端部の遺構検出にかかったところ、地元の人が通称“馬洗い場”と呼んでいる溝状の段落ち東側で石棺墓を2基検出した。最終的には8基となり、4号石棺墓からは小型仿製鏡と鹿角装刀子が出土した。1号石棺墓の南西側を拡張したところ、7号石棺墓を確認した。この石棺墓は遺存状態が良好で、副葬品の期待が高まったが、玉類が出土したのみであった。また、縄文土器が出土していた方形の竪穴は、縄文時代の所産かと思っていたところ、弥生終末期の甕棺墓となり、周囲を驚かせた。調査は昭和62年10月27日に大した事故もなく、無事終了した。

昭和57・58年度の調査関係者及び平成6年度の整理関係者については、長島遺跡Ⅰに掲載されているので、ここでは昭和62年度の調査関係者と平成10年度の整理関係者について掲載する。

昭和62年度		平成10年度	
日本道路公団福岡管理局		日本道路公団九州支社	
局長	杉田 美昭	支社長	青木 秀朗
次長	菱刈 庄二（前任）	吉岡 康行	用地部長 原賀 寛
業務部長	安元 富次	管理課長	松尾 俊昭
管理課長	森 宏之（前任）	副島 紀昭	管理課長代理 酒井 正弘
管理課長代理	三野 徳博	担当	豊住 正哉
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所		担当	上別府 黥
所長	風間 徹	日田工事事務所	
副所長	西田 功	所長	藤木 和哉
副所長（技術）	友田 義則	庶務課長	大野 誠治
庶務課長	徳永 登（前任）	大河 尋光	
用地課長	松尾 伸男		
工務課長	後藤二郎彦（前任）	豊里 栄吉	
杷木工事区工事長	小沢 公共		

## 福岡県教育委員会

総括 教育長	竹井 宏	光安 常喜
教育次長	大鶴 英雄	藤吉 純一朗
		理 事
指導第二部長	大平 岩男	総務部長
文化課長	窪田 康徳	文化財保護課長
		文化財保護課参事
文化課長補佐	平 聖峰	同
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	文化財保護課長補佐
		角 伸行
		文化財保護課長技術補佐
		井上 裕弘
		文化財保護課参事補佐
		橋口 達也
		同
		川述 昭人
		同
		佐々木隆彦
		同
		児玉 真一
		同
		中間 研志

### [庶務・管理]

文化課庶務係長	加藤 俊一	文化財保護課管理係長	角 伸行
文化課主任主事	竹内 洋征	文化財保護課事務主査	鶴我 哲夫
		同 主任主事	田中 利之
		同 主任主事	佐藤 雅二

### [調査]

#### 文化課調査班

同 総括	柳田 康雄
同 技術主査	井上 裕弘
同 技術主査	木下 修 (調査担当)
同 主任技師	中間 研志
同 主任技師	佐々木隆彦
同 主任技師	伊崎 俊秋
同 技師	小田 和利 (調査担当)
同 文化財専門員	木村 幾多朗 (現大分市歴史資料館長)
同 文化財専門員	日高 正幸 (現小石原村教育委員会)
調査補助員	高田 一弘

武田 光正（現遠賀町教育委員会）

佐土原逸男

[整 理]

福岡県立美術館普及課長 木下 修

京築教育事務所参事補佐 小池 史哲（執筆担当）

南筑後教育事務所技術主査 小田 和利（執筆・編集担当）

文化財保護課整理指導員 岩瀬 正信

同 北岡 伸一

〈実測補助〉

高瀬セツ子 本石セツ子 中村光恵 後藤カミヨ 矢野静子 牟田冴子 渡辺輝子 目修二  
目修三

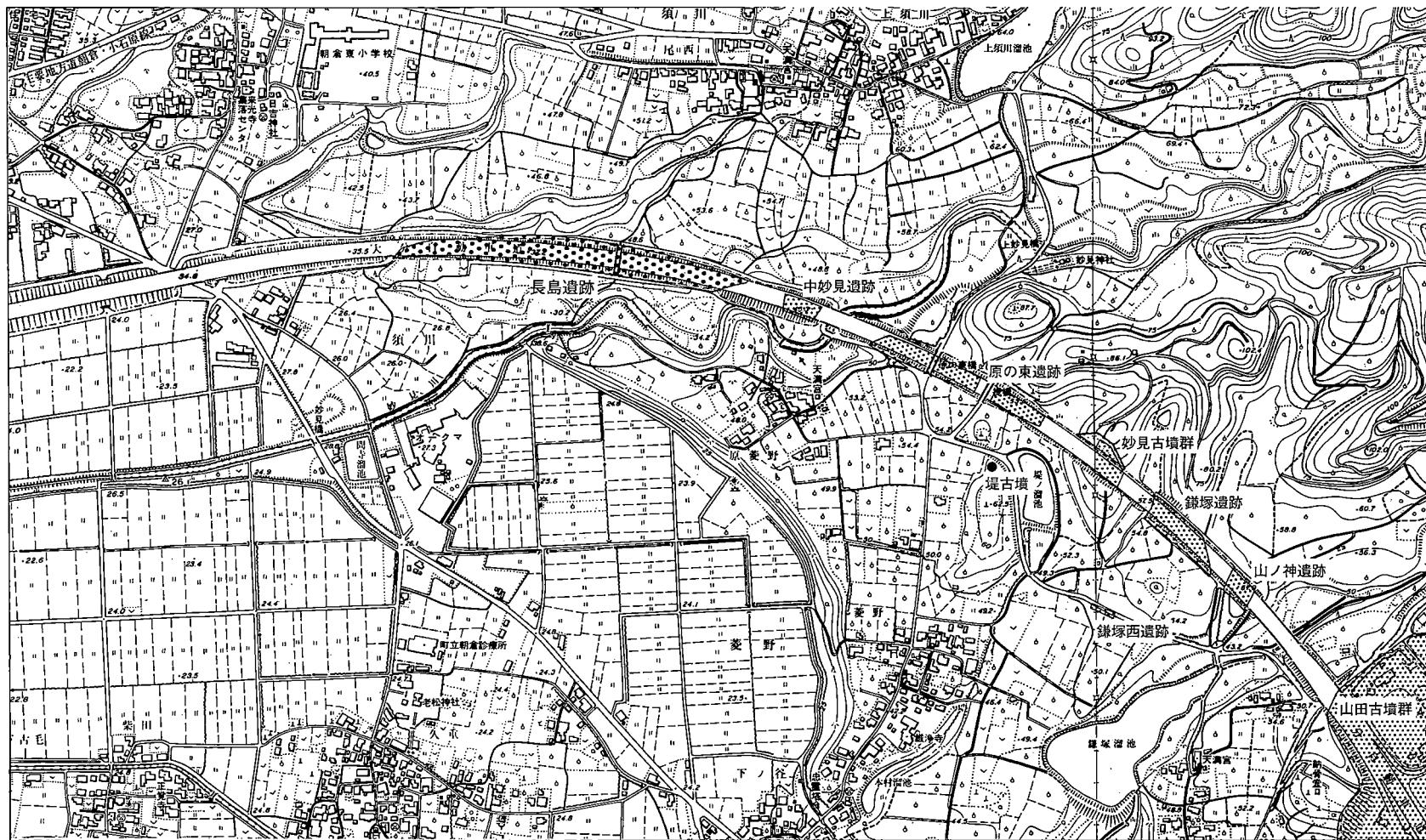
[発掘作業員]

石松又二郎 浦塚義則 国武昌治 篠原清彦 足立シズカ 天野ヨシエ 石田美智子  
石田米子 一の宮通子 稲葉博香 井上キヨノ 井上シズエ 岩下スミ子 岩下タマエ  
岩下陽子 岩下キヨ子 岩下トミ子 岩下ヨシ子 岩下テル子 岩下チズ子 上田ヒサ子  
上野チエ子 上野ミツ子 大田ミヨ子 小林あい子 古賀フミエ 古賀サワ子 目広子  
竹井みさえ 竹内タツ子 田中サツキ 土井イト 仲山シズカ 野村けい子 半田久子  
半田松子 星野宏子 星野美代子 星野ミエ子 星野禮子 松尾テル子 本園セツ子  
森君子 森部ツヤコ

[整理作業員]

塙足里美 渡辺輝子 大野愛里 西田美代子 辻啓子 岡泰子 原富子 丸山小夜子  
秋吉邦子 江上佳子 大場佐世子 石井紀美子 窪山頼子 窪田恵美子 秋山美枝子  
平塚もなみ

なお、出土鉄器の保存処理は、九州歴史資料館学芸二課長横田義章氏の協力による。出土遺物の写真撮影は、同館学芸二課参事補佐石丸洋・整理指導員北岡伸一氏の撮影による。



第3図 長島遺跡周辺地形図 (1/10,000)

## II 遺跡の位置と歴史的環境

本題に入る前に、当遺跡の所在する朝倉町について若干紹介しよう。

朝倉町は、福岡県の中央やや南で、日本有数の穀倉地帯である筑後平野の北東部に位置する。町域の東縁は朝倉郡杷木町と接し、北縁及び西縁は甘木市と接し、町域の南端は筑後川に限られ、浮羽郡田主丸町・吉井町と対峙する。人口約12,000人、面積34.56km<sup>2</sup>の農業を主体とする町である。かき・ぶどう・もも・なし・りんごなどのフルーツは当町の特産品であり、国指定文化財の三連水車は力強く水を汲み上げ、フルーツ狩りの観光客の目を楽しませている。主な交通網としては、筑紫野市と大分県日田市とを結ぶ国道386号線のみであったが、横断道のインターチェンジを擁し、近年は企業の進出も増している。

### 遺跡の位置

長島遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字須川字長島1943番地他に所在する。遺跡は朝倉低山地の鬼ヶ城山（標高464.5m）から派生した中位段丘の先端部に立地し、標高は西側先端部で40.6m、C地区東端側で51.4mを測り、丘陵南側の水田面との比高差は16～18mを有する。丘陵は調査区中央での基底部幅が約100m程で、平野側に向かって細長く突出している。

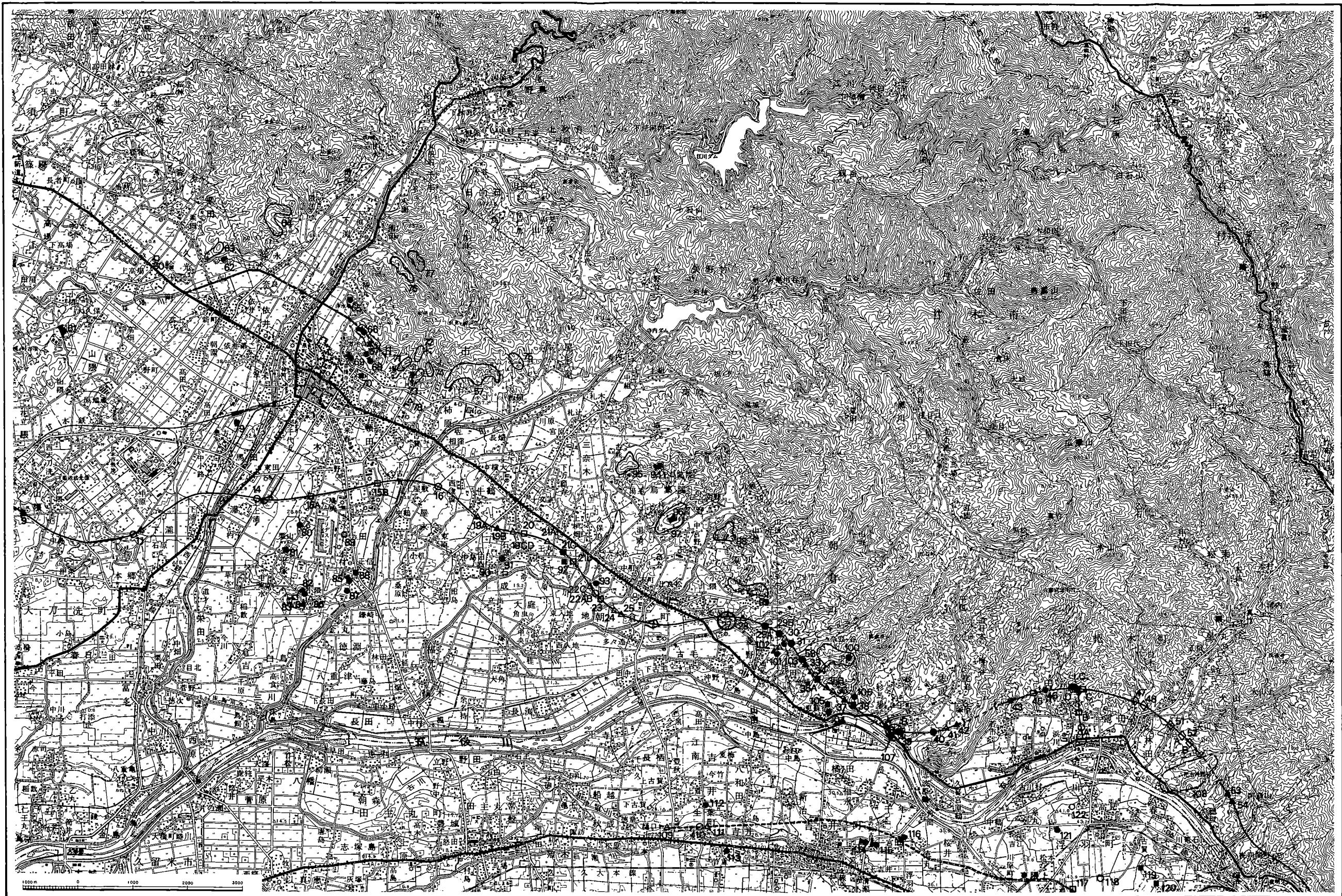
長島遺跡では縄文時代晚期、弥生時代終末期、古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代にかけて集落・墓地が連綿と営まれた複合遺跡であることからも判るように、集落を営むのには格好の立地条件であった場所といえる。また、遺跡の南側直下には妙見川が西流し、さらには筑紫二郎の異名をとる筑後川が滔々と流れ、太古より広大な筑紫平野に潤いを与え続けてきた。

### 歴史的環境

本跡を特徴付けるのは、縄文時代から鎌倉時代に至る複合遺跡ということであるが、縄文時代の遺跡については『楠田遺跡他』（横断道第49集）（註1）で詳述されている。また、弥生時代終末～古墳時代の墳墓遺跡については、『外之隈遺跡Ⅰ』（横断道第35集）（註2）でまとめられており、そちらを参照して頂きたい。ここでは、主として横断道関係で調査された朝倉町内の古墳時代～鎌倉時代の集落遺跡についてふれることとした。

横断道は、朝倉町内においては大字石成～入地にかけての朝倉扇状台地群を通過し、大字菱野～山田にかけては朝倉低山地を通過する。弥生～奈良時代にかけての遺跡は、この扇状台地群に展開をみせる。「三奈木一十文字一中島田」台地には、高原遺跡・塔ノ上遺跡・中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡などの主要な集落遺跡が立地する。

高原遺跡は扇状台地群の西端部に立地する。弥生時代後期と古墳時代後期～奈良時代を主体とする集落遺跡である。奈良時代の竪穴住居からは、転用硯・墨書き土器（「恵□」）・製塩土器・



第4図 長島遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

9	春園遺跡	65	持丸古墳群
11	立野遺跡	66	菩提寺古寺古墳群
	宮原遺跡	67	古寺墳墓群
14	上上浦遺跡	68	池の上墳墓群
15A	西原遺跡	69	鬼の枕古墳
15B	下原遺跡	70	宗原遺跡
16	高原遺跡	71	大岩西部古墳群
19A	塔ノ上遺跡	72	大岩追谷古墳群
19B	大還端遺跡	73	大岩南部古墳群
19C D	石成久保遺跡	74	大岩東部古墳群
20	中道遺跡	75	洗田古墳群
21A	西法寺遺跡	76	下澁名子古墳群
21C	大庭久保遺跡	77	下澁宮の前古墳群
21D	上の原遺跡	78	柿原野田遺跡
22A B	治部ノ上遺跡	79	上川原遺跡
22C	狐塚南遺跡	80	大願寺遺跡
23	座禪寺遺跡	81	栗山遺跡
24	才田遺跡	82	神藏古墳
25	東才田遺跡	83	小隈宝満遺跡
27	長島遺跡	84	小隈出口遺跡
28	中妙見遺跡	85	小田茶臼塚古墳
29A	原の東遺跡	86	小隈松山遺跡
29B	妙見墳墓群	87	小田小塚古墳
30	鎌塚遺跡	88	小田正信遺跡
31	山ノ神遺跡	89	小田集落遺跡
33	長田遺跡	90	金川中島田遺跡
34	金場遺跡	91	石成古墳
35A	上ノ宿遺跡	92	乙王丸遺跡
35B	恵蘇山遺跡	93	狐塚遺跡
36	稗畠遺跡	94	鳥集院1号墳
37	大迫遺跡	95	古熊古墳群
38	外之隈遺跡	96	宮地嶽古墳
39A	杷木宮原遺跡	97	宮地嶽古墳群
39B	中町裏遺跡	98	長安寺古墳群
40	志波桑ノ本遺跡	99	須川古墳群
41	志波岡本遺跡	100	山田長田古墳群
42	江栗遺跡	101	劍塚古墳
43	大谷遺跡	102	鎌塚西遺跡 (工事用道路)
45	笛隈遺跡	103	鎌塚古墳
46	夕月・天園遺跡	104	恵蘇八幡古墳群
47	上池田遺跡	105	恵蘇山古墳群
48	畠田遺跡	106	本陣古墳
51	楠田遺跡	107	志波宝満宮古墳
52A	小覚原遺跡	108	杷木神籠石
52B	二十谷遺跡	109	鷹取五反田遺跡
53	陣内遺跡	110	堺町遺跡
54	上野原遺跡	111	大碇遺跡
57	柿原古墳群	112	生業1号墳
58	山田古墳群	113	富永古墳
杷木 I C		114	月岡古墳
A	鞍掛遺跡	115	日岡古墳
B	前田遺跡	116	塚堂古墳
C	西ノ迫遺跡	117	日永遺跡
D	クリナラ遺跡	118	沖出遺跡
60	栗田遺跡	119	沖出岩野遺跡
61	小隈古墳	120	杉山段々遺跡
62	仙道古墳	121	田島南遺跡
63	阿弥陀峯古墳群	122	北淀遺跡
64	隈江古墳群		

凡

時代	集落	墓地
縄文時代	△	
弥生時代	□	
古墳時代	○	
奈良・平安時代	▲	■

鉄製品・鉄滓等の特殊品が出土しており、特に製塩土器は同時期の竪穴住居の約5割から出土しており（註3）、水田耕作の他に製鉄・製塩作業もなされたものと推測されている。

塔ノ上遺跡は扇状台地群の中央部に立地する。奈良時代後半の極めて短期間で営まれた集落遺跡で、竪穴住居74軒・掘立柱建物9棟・区画溝・土坑などが検出された。特殊品として、墨書き土器（「財マ□□」・「□國」）・転用硯・製塩土器及び製鉄関連のフイゴ羽口・鉄滓・鉄製品がある。製塩土器は約8割の住居から出土しており、塔ノ上遺跡においても製鉄・製塩作業がなされていたものと考えられている（註4）。

上の原遺跡は扇状台地の東端部に立地する。弥生時代中期と古墳時代後期及び奈良時代を主体とする集落遺跡で、弥生時代の集落は大庭久保遺跡の墳墓群と対をなすものとみられる（註5）。弥生時代の竪穴住居からは鋳造鉄斧・鉈などの初期鉄器が出土しており、奈良時代の竪穴住居からは転用硯・墨書き土器・ヘラ書き土器・製塩土器等の特殊品がみられる（註6）。

近年、これら内陸部に位置する奈良時代の集落遺跡からは、多量の製塩土器の出土が報告されており、律令期における鉄製品と塩の生産及び流通を考える上で貴重な資料を提供した。

長田遺跡は麻底良山より派生した八つ手状に拡がる丘陵に立地し、長島遺跡の1km北西に位置する。6世紀後半を主体とする集落遺跡で、竪穴住居15軒が検出された。2・8・13号竪穴住居カマド内からは、手捏ね土器・模造鏡・土玉などの土製品が出土しており、カマド<火>に対する祭祀行為がなされたものと考えられる。また、奈良時代と推定される製鉄炉・砂鉄貯蔵穴も検出されており、付近には金場という小字が残っており、非常に興味深い（註7）。

当地域の7世紀後半の歴史的事件の筆頭に挙げられるのは、『日本書紀』にその名を残す朝倉橋広庭宮であろう。齊明天皇七年（661）百濟救済のため九州に行幸した齊明天皇は朝倉宮に崩じた。朝倉社は麻底良山とみられ、朝倉町大字須川・同町大字山田・杷木町志波の3地区が麻底良山の山麓部に位置することから朝倉宮の候補地として挙がっている。

志波台地に立地する杷木宮原遺跡（註8）・志波桑ノ本遺跡（註9）・志波岡本遺跡（註10）の3遺跡からは、桁行方位を等しくする大型の掘立柱建物群が検出され、大迫遺跡の火葬墓群の下層から検出された7世紀後半の建物と同一企画の下に築造されており（註11）、その築造年代は大迫遺跡の建物群と同時期とみられる。志波地区は三方を麻底良山と高山で囲まれ、もう一方には自然の濠ともいるべき筑後川が流れる天然の要害であり、その南には肥沃な平野が拡がる。軍事的側面からすると申し分のない占地であり、宮本体は志波台地の中心部に存在する可能性が最も高い（註12）。

また、7世紀後半代の集落は横断道関係では高原遺跡・上の原遺跡・鎌塚遺跡（註13）・稗畑遺跡（註14）でも調査されており、当該期の遺跡が急増するのも朝倉宮が当地に築造されたことと全く無縁ではないであろう。

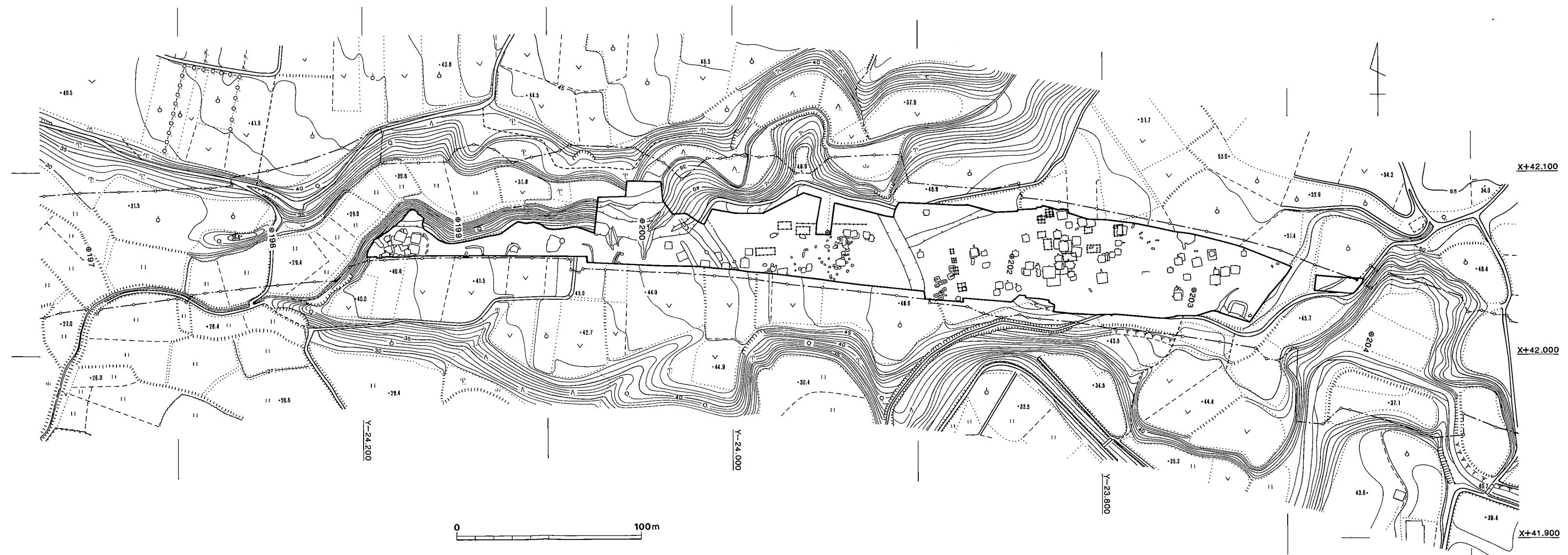
鎌倉時代の集落は、西法寺遺跡（註15）・狐塚南遺跡（註16）・治部ノ上遺跡（註17）・才

田遺跡（註18）で調査されている。西法寺遺跡の7号土坑からは手錫杖と短剣が出土しており、鎌倉時代前期に比定されている。これらは、鎮壇具もしくは墓の埋納品と推測されている。

才田遺跡は扇状台地群南側の扇状低地に立地し、11～12世紀を主体とする掘立柱建物20棟・土坑・井戸・区画溝・木棺墓などが調査された。土坑からは多量の舶載陶磁器類が出土しており、長淵荘の荘園領主の居宅跡と推定されている。

以上、横断道関係遺跡の調査は、両筑平野北半部に大きなトレンチを入れる結果となり、縄文時代から鎌倉時代期に至る膨大な資料を蓄積し、これまで不明瞭であった古墳～中世期の集落がヴェールを脱ぎつつある。今後は、蓄積された資料をいかに生涯学習の場に還元していくかが我々に課せられた責務であろう。

- |  |   |
|--|---|
| 註 1 中間研志他編「楠田遺跡他」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－49－』 1998 福岡県教育委員会 |
| 註 2 伊崎俊秋編 「外之隈遺跡Ⅰ」                                     | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－35－』 1995 福岡県教育委員会 |
| 註 3 伊崎俊秋編 「高原遺跡他」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－31－』 1994 福岡県教育委員会 |
| 註 4 伊崎俊秋編 「塔ノ上遺跡」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－9－』 1987 福岡県教育委員会  |
| 註 5 佐々木隆彦編「大庭久保遺跡」                                     | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－36－』 1995 福岡県教育委員会 |
| 註 6 井上裕弘編 「上の原遺跡Ⅰ」                                     | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－18－』 1990 福岡県教育委員会 |
| 小田和利編 「上の原遺跡Ⅱ」   | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－27－』 1993 福岡県教育委員会 |
| 高橋・小田編「上の原遺跡Ⅲ」   | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－33－』 1995 福岡県教育委員会 |
| 註 7 井上裕弘編 「長田遺跡」                                       | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－30－』 1994 福岡県教育委員会 |
| 註 8 小田和利他編 「杷木宮原遺跡他」                                   | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－21－』 1991 福岡県教育委員会 |
| 註 9 小池史哲編「志波桑ノ本遺跡他」                                    | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－45－』 1997 福岡県教育委員会 |
| 註10 註 9 に同じ  |   |
| 註11 小田和利編 「大迫遺跡」                                       | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－24－』 1992 福岡県教育委員会 |
| 註12 拙著「福岡県朝倉町大迫遺跡と朝倉橋広庭宮について」『北部九州の古代史』 1992 有明文化を考える会 |   |
| 拙著「朝倉橋広庭宮の再検討」   | 『九州歴史資料館研究論集 18 』 1994 九州歴史資料館          |
| 註13 井上裕弘編 「鎌塚遺跡他」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－22－』 1992 福岡県教育委員会 |
| 註14 井上・木下編「稗畑遺跡他」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－20－』 1991 福岡県教育委員会 |
| 註15 佐々木隆彦編「西法寺遺跡他」                                     | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－47－』 1997 福岡県教育委員会 |
| 註16 小池史哲編 「狐塚南遺跡」                                      | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－20－』 1991 福岡県教育委員会 |
| 註17 岐玉・中間編「治部ノ上遺跡他」                                    | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－28－』 1994 福岡県教育委員会 |
| 註18 伊崎俊秋編 「才田遺跡」                                       | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－48－』 1998 福岡県教育委員会 |



第5図 長島遺跡地形図(1/2,000)

### III 検出遺構と出土遺物

#### 1. 遺構の概要

今回は、長島遺跡2次調査としてB地区のパイロット道路調査分及びC地区以西の調査分を報告する。以下、各時代の遺構と土器以外の遺物の概要を列挙する（遺構と出土遺物は対応）。

なお、遺構番号は先に報告したC地区に統けているが、B地区調査分は遺構番号を変更しているので、新旧遺構番号対照表を参照されたい。

遺構	出土遺物
〈旧石器時代〉	剥片尖頭器・ナイフ形石器・搔器
〈縄文時代〉	・円形竪穴 2軒 石鏃 ・屋外炉 1基 石鏃 ・集石土坑 1基
〈弥生時代〉	・竪穴住居 16軒 石斧・石包丁・砥石・台石・鉄鎌・鉄鋤先・土製品 ・土 坑 2基 ・溝 4条 石包丁・鉄鏃・投弾 ・通 路 1本 台石・鉄鑿 ・落 込 3基 砥石・鉄斧・鉄鋤先 ・石棺墓 8基 仿製鏡・鹿角装刀子・管玉・ガラス玉 ・甕棺墓 1基 ・土壙墓 4基
〈古墳時代〉	・竪穴住居 16軒 鉄鏃・鉄鎌・鉄滓・土製品 ・掘立柱建物 1基 ・土 坑 3基
〈奈良時代〉	・竪穴住居 28軒 転用硯・製塩土器・鉄製品・鉄滓・フイゴ羽口 ・掘立柱建物 4棟 墨書き土器 ・土 坑 5基 鉄滓

〈鎌倉時代〉・掘立柱建物 7 棟	
・柵	1 列
・竪穴	5 基
・土坑	43基 鉄鋸・鉄滓・フイゴ羽口・石鍋
・溝	1 条 鉄滓・フイゴ羽口
・通路	3 本 鉄滓・土錘・石鍋・砥石
・落込	2 基
・土壙墓	3 基 鉄釘

表 1 新旧遺構番号対照表

遺構名	新番号	旧番号	遺構名	新番号	旧番号
竪穴住居	77号	B3区1号住居跡	土坑	1号	2次16号土壙墓
	78号	〃2号住居跡		7号	B4区1号土坑
	98号	B8区1号住居跡		8号	〃2号土坑
	99号	〃2号住居跡		9号	〃4号土坑
	100号	〃3号住居跡		10号	〃6号土坑
	101号	〃4号住居跡		13号	B6・7区3号土坑
	102号	〃5号住居跡		37号	B8区1号土坑
	103号	〃6号住居跡		38号	B6・7区1号土坑
	119号	B11区1号住居跡		41号	B4区5号土坑
	120号	B6・7区住居跡		42号	欠番
				43号	B8区1号円形土坑
				44号	B11区1号円形土坑
掘立柱建物	12号	B6・7区2号建物		45号	欠番
	15号	〃1号建物		46号	B11区3号円形土坑
	16号	〃3号建物		47号	〃4号円形土坑
	23号	2次 11号建物		48号	B11区5号土坑→欠番
竪穴	1号	2次91号住居跡	溝	49号	欠番
	2号	〃93号住居跡		50号	B8区P-8
	3号	〃82号住居跡		51号	〃P-9
	4号	〃23号土坑		52号	2次 P-398
	5号	〃22号土坑東側		53号	B6・7区2号土坑→欠番
	6号	〃31号土坑		54号	B6・7区4号土坑
	7号	〃39号土坑		7号	B3区4号土器溜
				8号	B4区1・2号土器溜
円形竪穴	1号	2次118号住居跡	通路	3号	B3区落込→土坑
	2号	〃119号住居跡		4号	B4区3号土器溜
屋外炉	1号	B11区2号土坑		5号	2次1号通路
			土壙墓	16号	2次14号土壙墓
集石土坑	1号	B8区縄文石組			

\* PはPitの略号

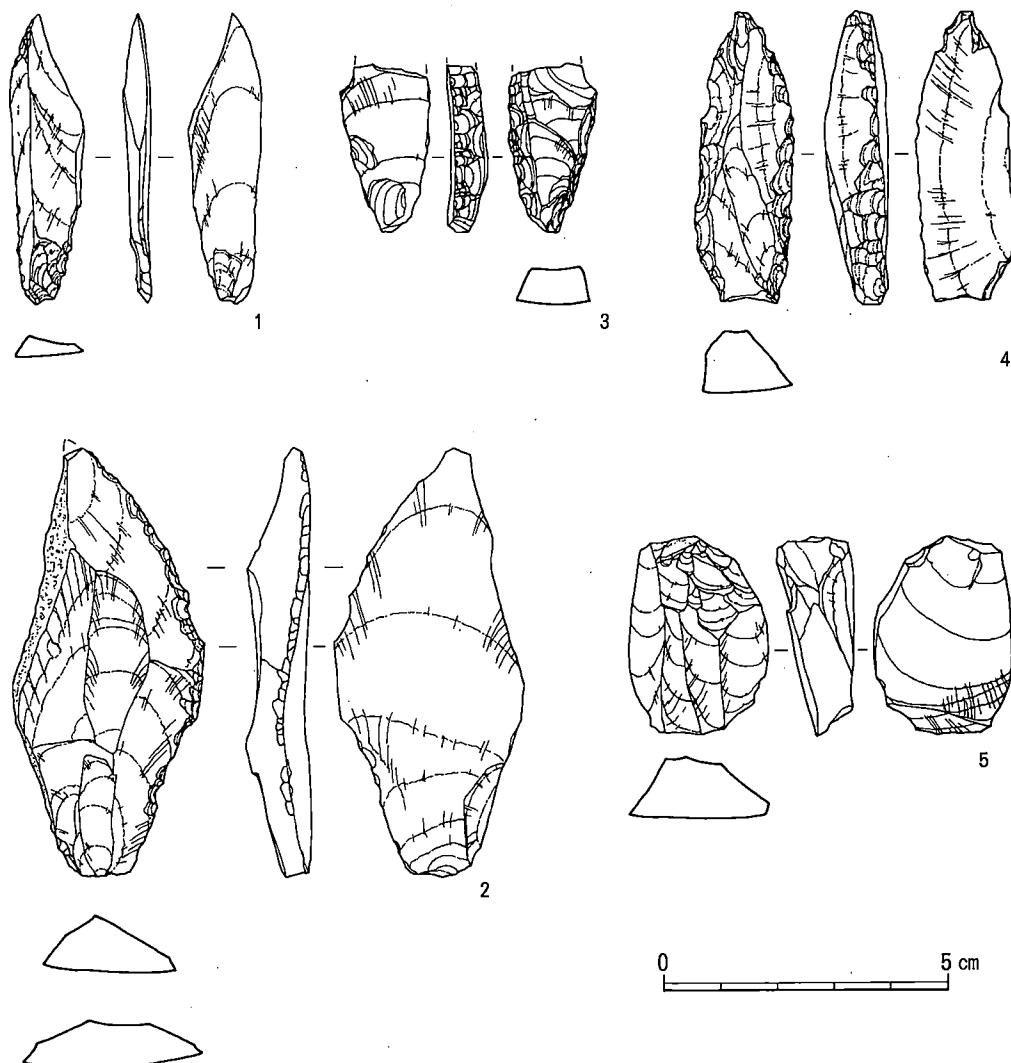
## 2. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物

### (1) 旧石器時代の遺物

出土石器類のうち、石材の風化度や形態からみて、旧石器時代に含まれる可能性の高い例がある。なお、旧石器時代の遺構は確認されていない。

#### 出土石器（図版4-3、第6図）

**剥片尖頭器** (1・2) ともにサヌカイト製で風化が進む。1は杭53東側で発見された完形品で、長さ5.11cm、幅1.3cm、厚さ0.43cm、重さ2.5gを測る。縦長剥片の打瘤の厚みを減じ、基部



第6図 旧石器とみられる石器実測図 (3/4)

側縁と先端部の片側に調整剥離を加えて、均整のとれた形状をなす。2は83号住居跡で発見されたほぼ完形品だが、先端部を極僅かに欠き、現存長7.6cm、幅3.33cm、厚さ1.06cm、重さ23.2gを測る。一方の側縁に原面を残すやや幅広の縦長剥片の基部端の厚みを減じ、原面と反対側の側縁に刃潰し状の調整剥離を加えて、左右対象に近い形状に整えられている。なお、1はナイフ形石器、2は搔器に似た使用法も可能である。

**ナイフ形石器（3）** 黒色を呈する黒曜石製でやや風化が進む。先端側を一部欠損するが、基部側両側縁と先端側の片側縁を刃潰し調整している。現存長2.94cm、幅1.57cm、厚さ0.71cm、重量3.4gを測る。P77付近で出土した。

**搔 器（4）** サヌカイト製で、やや風化が進む。三稜尖頭器に形状が似るもののが搔器であろうか。1号甕棺墓墓壙内に混入して出土した。完形で、長さ5.15cm、幅1.76cm、厚さ1.1cm、重さ10.1gを測る。

**剥 片（5）** 茶褐色を呈する珪岩質石材の厚みをもった剥片で、長さ3.51cm、幅2.48cm、厚さ1.8cm、重さ11.6gを測る。背面の剥離痕と主要剥離面の剥離痕は、打面を同一にした單一方向であるが、使用痕は確認できない。

## （2）円形竪穴

### 1号円形竪穴（図版3-1、第7図）

2次調査区の東端側に位置し、奈良時代の17・20号掘立柱建物に切られる。平面形は楕円形を呈し、長径6.48m、短径4.82mの規模で、壁高は北壁側で0.34mの遺存状態である。竪穴内部はピットが9個あるが、柱穴としてはまとまらない。埋土から粗製土器片が若干出土した。

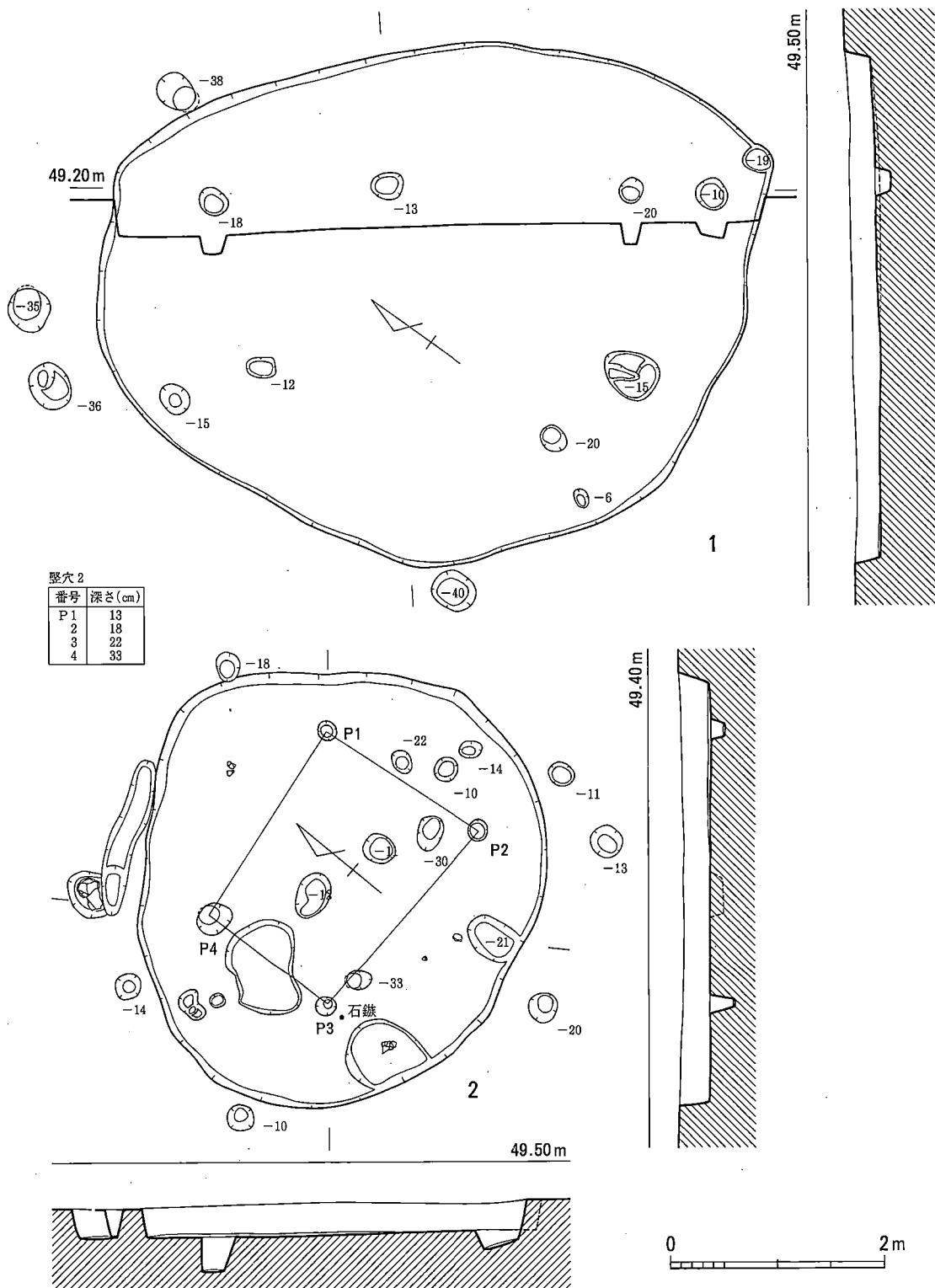
### 2号円形竪穴（図版3-2、第7図）

1号円形竪穴の2m北側に位置する。平面形は扁円形を呈し、長径4.08m、短径3.73mを測る。壁高は北壁側で0.27m遺存する。一応、P1～4の4個を主柱穴とみなした。柱間はP1～2間1.7m、P2～3間2.16mで、柱間を結ぶ線は長方形を呈する。なお、図示していない資料には内外をナデ調整する粗製土器片などがある。

### 出土遺物（図版5-1・6-2、第9・18図）

**縄文土器（11・12）** 丸みをもって膨らむ胴部破片で、内外面ともにミガキ調整され、外面の文様帶に縄文R Lを施文して平行沈線で区画された部分を交互に磨消す手法をとる。幾分か広めの縄文部分には波状沈線を加えている。後期後半の西平式に相当する。

**打製石鎌（19）** 黒色を呈する黒曜石製で、広義の剥片鎌。完形で、長さ・幅とも1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。



第7図 1・2号円形豊穴実測図 (1/60)

### (3) 屋外炉

#### 1号屋外炉（図版4-1、第8図）

長径1.45m、短径1.15m規模の楕円形をなす土坑で、P 14に一部を切られるが、長軸はN45°Wを向く。坑内には炭化物と焼土粒を含んだ茶褐色土が詰まり、中央部西側に赤化してやや硬化した焼土がみられる。周壁は緩やかに傾斜し、中央部で深さ0.35mを有する。

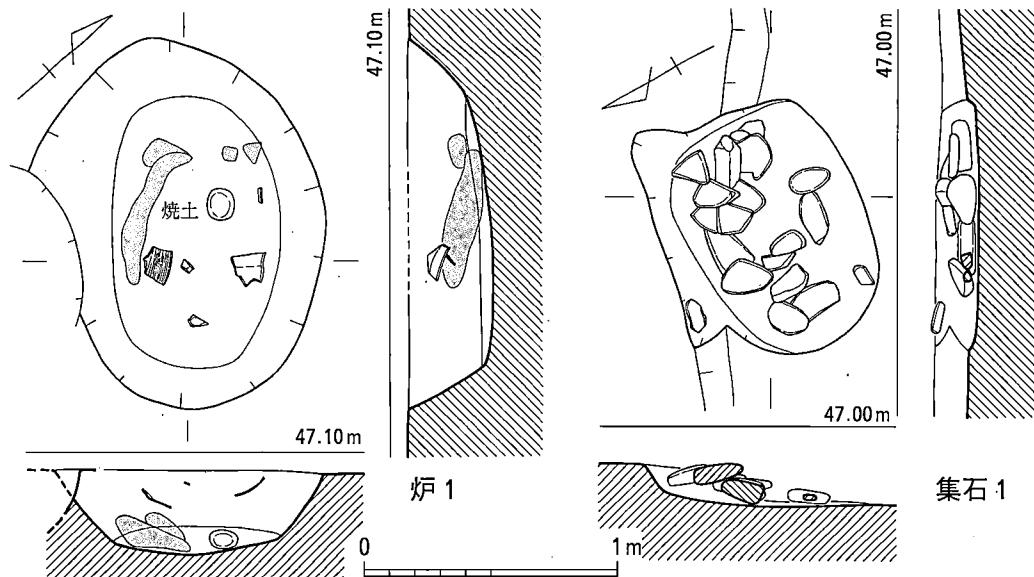
#### 出土遺物（図版5-1、第9図）

縄文土器（1～5） 1・2は外面を板状或いは二枚貝腹縁を原体にした条痕、内面をナデ調整する粗製の鉢ないし深鉢で、胴部は丸みをもって膨らみ、口頸部との境目に凹線状の段をもつ。やや直線的に開く口縁部は端部に丸みをもち、外面に煤が付着する。3・4は外面を条痕、内面をミガキ調整される口縁部破片である。3の口縁部外面は僅かに屈曲気味。4の口縁部上面には鰭状或いはリボン状らしい突起が付く。5は外面に簾状の編み物らしい組織圧痕のある胴下部破片で、内面はナデ調整される。1・2には後期後半代まで遡る要素がみられるものの、5の特徴は晩期中頃～後半頃の特徴である。

### (4) 集石土坑

#### 1号集石土坑（図版4-2、第8図）

調査区北端にあり、南側半分は表土除去時に上部を失う。長径1.0m、短径0.8m規模の楕円形をなす土坑で、長軸はN89° 30' Eを向く。坑内には茶褐色土と拳大から人頭大の結晶片岩

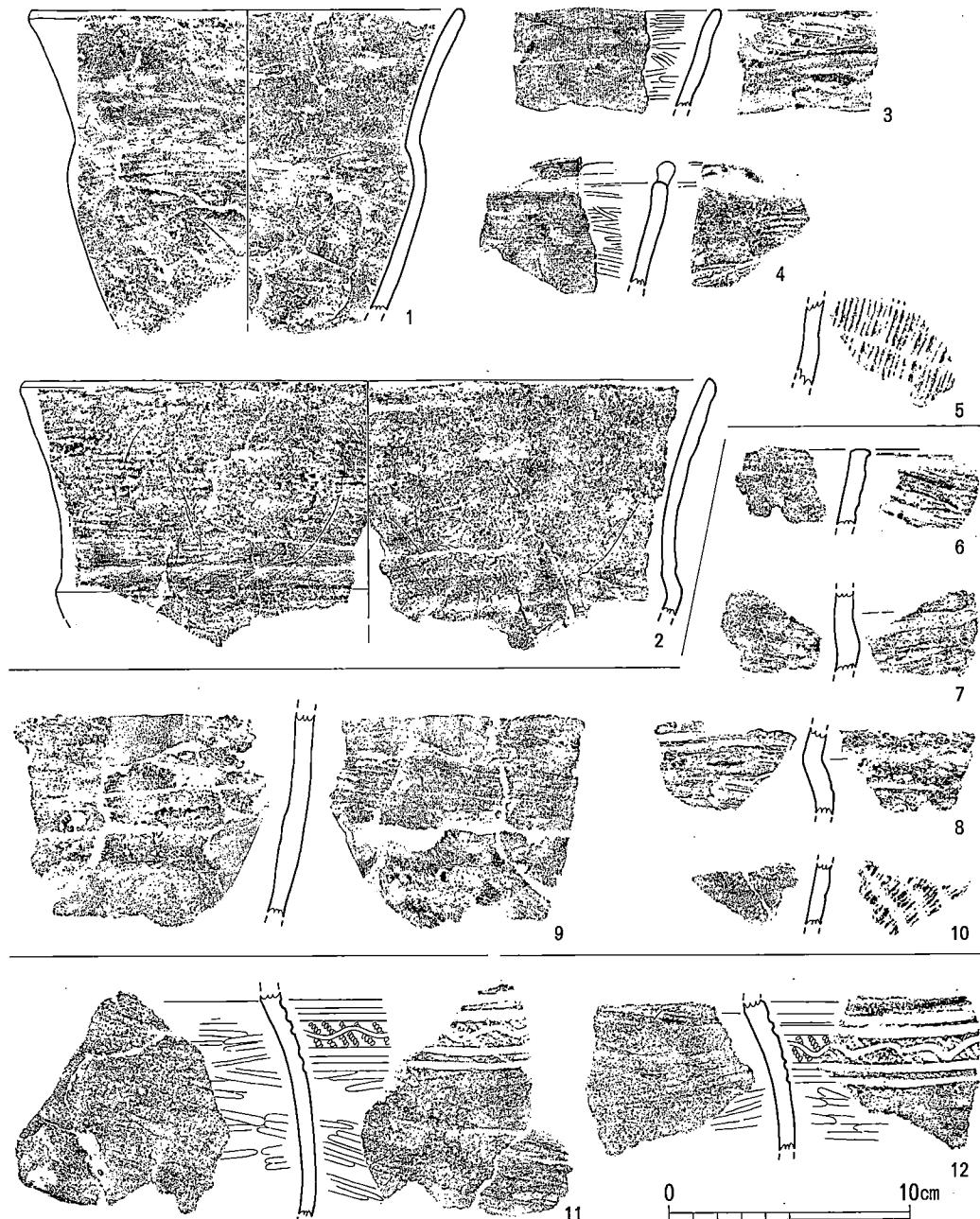


第8図 屋外炉・集石土坑実測図 (1/30)

系の川原石が詰まり、中央部に空間を開けて集石されている。僅かに火熱を受けた石もみられるが、焼土は検出できない。周壁は緩やかに傾斜し、中央部で深さ0.15mを有する。

#### 出土遺物（図版5-1、第9図）

縄文土器（6～10） 6は外面を条痕、内面をナデ調整する口縁部破片で、口唇部は平坦面を



第9図 円形竪穴・屋外炉・集石土坑出土土器拓影（1/3）

なす。7~9は外面を条痕、内面を条痕とナデ調整される粗製深鉢或いは鉢の胴部破片で、7・8は口頸部と反転して胴部が膨らむ。10は外面に簾状の編み物らしい組織圧痕のある胴部破片で、内面はナデ調整される。6・8には後期後半代まで遡る要素がみられるものの、10の特徴は晩期中頃～後半頃の特徴を示す。

**打製石鏸**（図版6-2、第18図13）先端側を失うが、抉りの浅い凹基式の鏸で、全面に調整剥離が及ぶ。

#### （5）その他出土の遺物

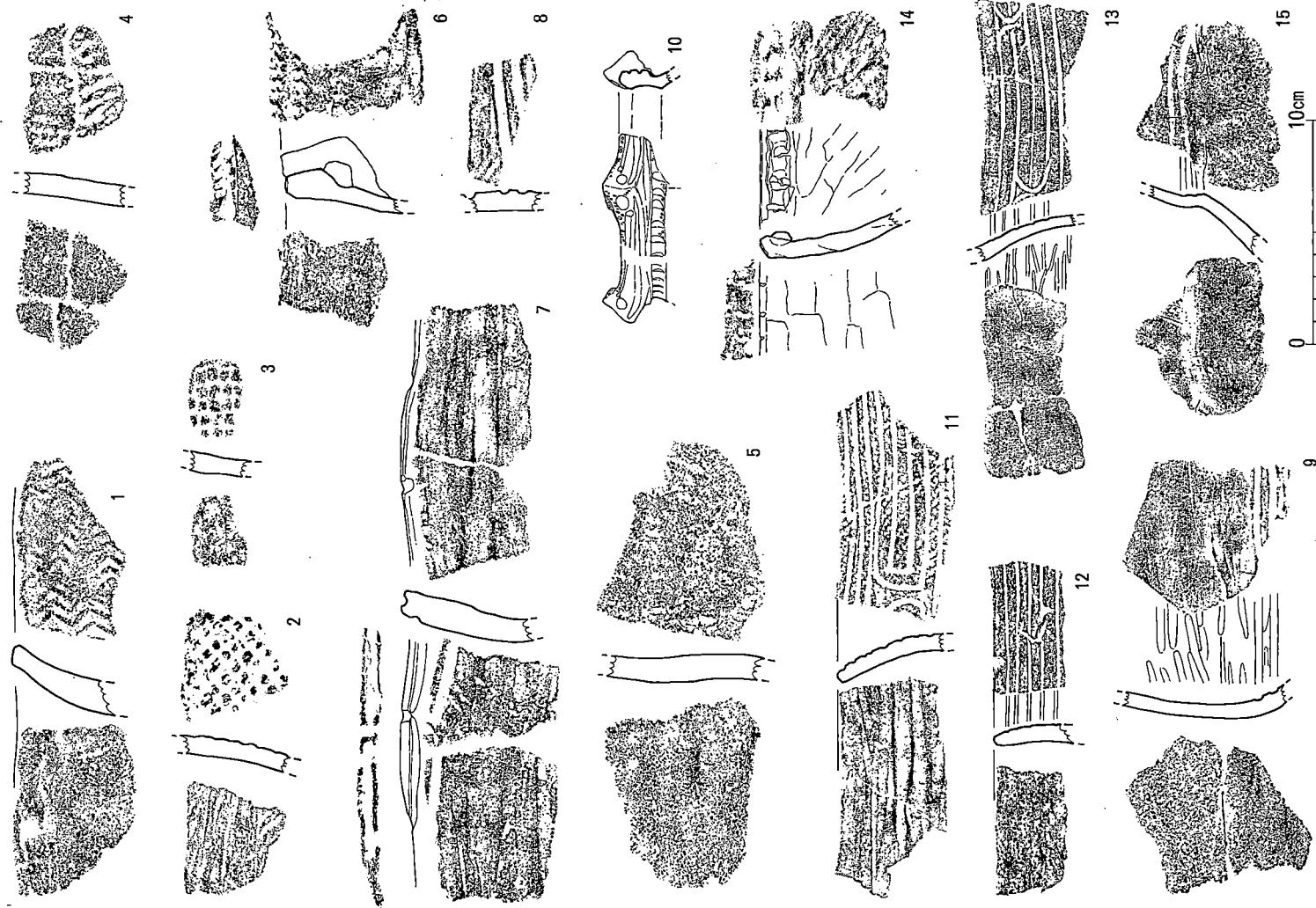
弥生時代以降の遺構内に混入した縄文時代の遺物や、遺構として確認されないものの淡茶褐色土の包含層などから出土した縄文時代の遺物を一括するが、図示し得ない資料も多い。

#### 出土土器（図版5-2・6-1、第10~16図）

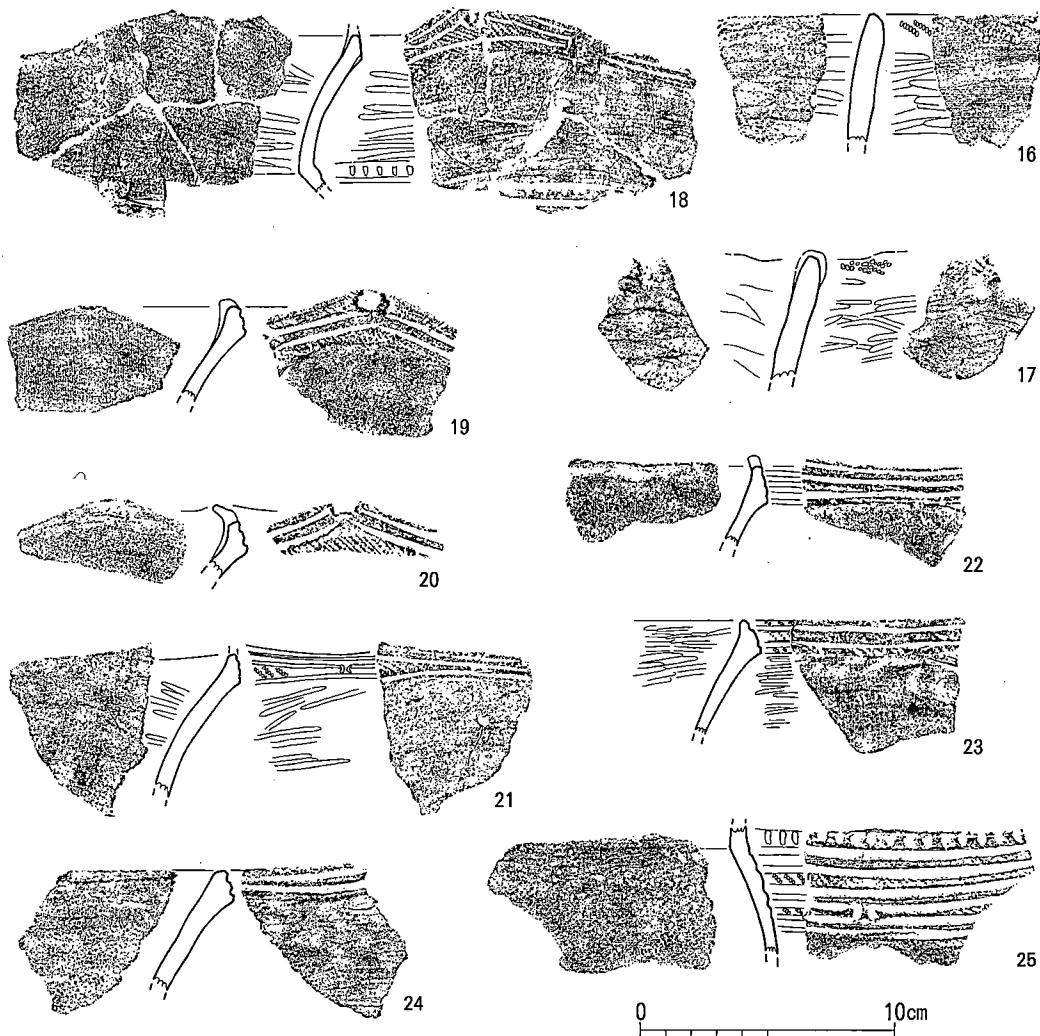
**早期の土器（1~5）** 1は包含層出土の外反する口縁部破片で、器壁は厚い。外面に粗めの山形押型文が施文される、内面は条痕後にナデ調整が加わる。2は19号土坑、3は71号竪穴住居に混入して出土した破片。ともに外面に粗粒の楕円押型が回転押捺され、内面はナデ調整される。4は包含層出土の外面に粗い縄文が施文される器壁の厚い破片で、押型文に共伴するタイプと思われる。5は101号竪穴住居に混入していた器壁の厚い胴部破片で、内外面ともに条痕がみられる。これらの土器は、早期後半頃の所産であろう。

**後期の土器（6~38・51）** 6~14は包含層から出土した。6は橋状把手を有する口縁部破片で、口縁部外面側にアナグラ属貝殻腹縁の連続刺突文、内面側に押し引き状の連続刺突がみられる。7~9は内外面をナデ或いはミガキ調整する沈線文系土器で、鐘崎II式ないしIII式であろう。10は波状突起を有する精製の小形鉢口縁部破片で、口縁端部に縄文が施文され、波状頂部内外に円形の刺突点が付く。波頂間の口縁部外面に沈線が横走し、頸部にはC字形の刺突列点がみられる。11は内湾する精製鉢の口縁部破片で、外面は縄文施文後に横走する沈線文を描くが、コ字形に反転する文様を構成して、一部磨消縄文手法がとられる。12は内湾する精製鉢の口縁部破片、13は頸部下から反転して丸く膨らむ胴部破片で、両者とも外面に横走する沈線文様が描かれて逆C字形の文様が加わり、13ではつこ字状に折り返す。11は北久根山式期、12・13はこれに後続する時期のものであろう。14は内傾する口縁部外面を折り畳んだように肥厚させて突帯文になる破片で、口縁部内面側と突帯状部分にアナグラ属貝殻腹縁の刺突列点を付す。器面は軽くナデ調整されて、内傾する器形からみて晩期後半の突帯文土器に似るが、難な調整の突帯状突起と列点の原体からみて後期段階の可能性もある。15は3号落込出土の精製鉢の胴部破片。胴部外面に浅い沈線が巡る。

16・17は厚めの器壁をもつ口縁部破片で、内外面ともミガキ調整されて、口縁部外面に縄文が施文される。



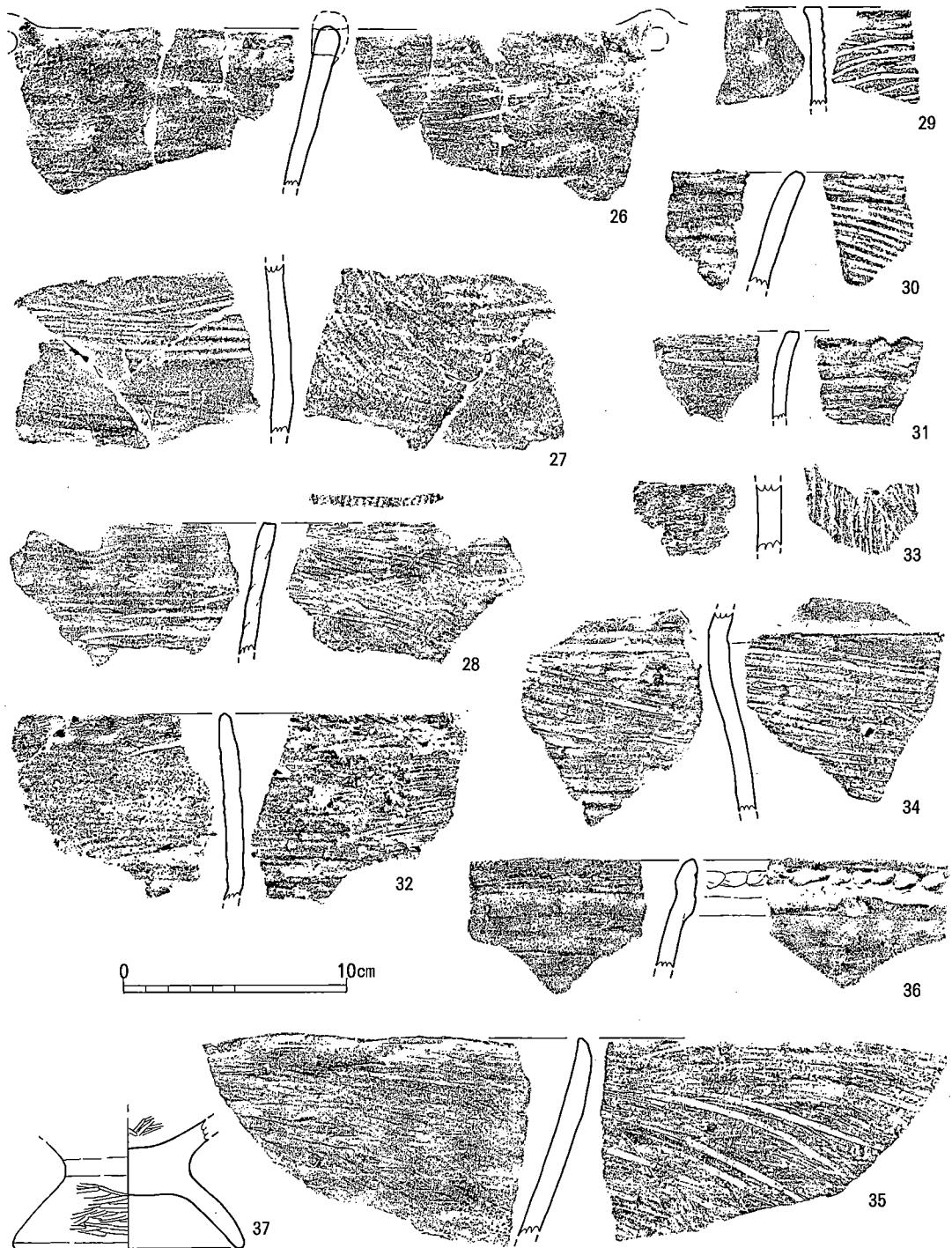
第 10 図 包含層等出土縄文土器拓影① (1/3)



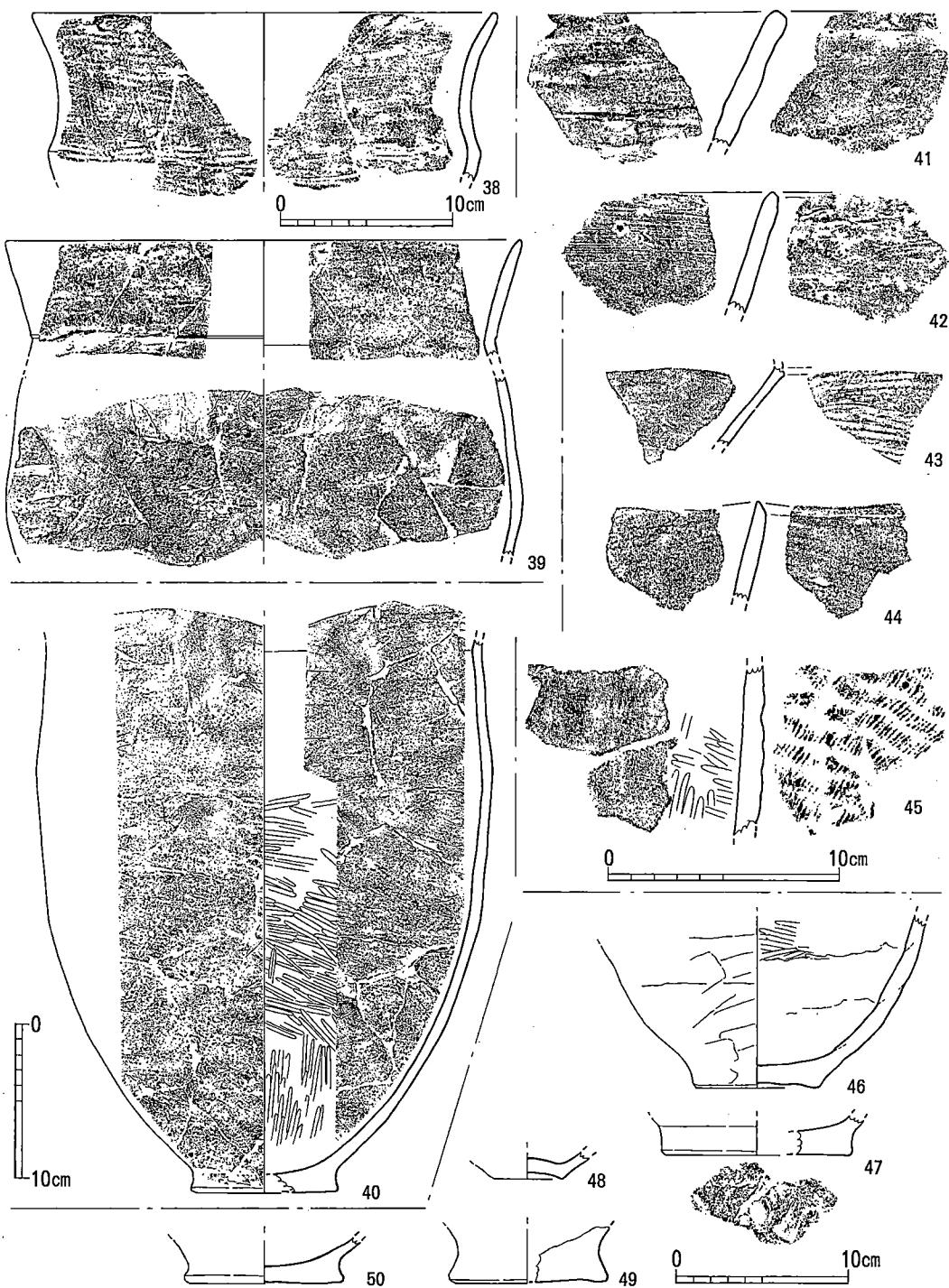
第 11 図 包含層等出土縄文土器拓影② (1/3)

18~25は磨消縄文手法をとる例で、「く」字形に内傾する口縁部と丸みをもって膨らむ胴部上半の文様帶に地文として縄文R Lが施文され、やや細めの沈線で区画された部分を交互に磨消す。18~20の波頂部には凹点が付され、波の谷部に相当する部分には18ではコ字状の折り返しや、21のようなつこ字状の折り返しがみられる。口頸部と胴部の境目には18で小さな列点、25で逆C字形の連続刺突の列点がみられる。胴部文様では25でつこ字状の折り返しをもつ。いずれも内外面ともミガキおよび丁寧なナデで調整される。これらは西平式の特徴を有している。

26は肥厚気味の口縁部に付いた突起状の波頂部で円孔が内外面を貫通する。器面は内外面ともに条痕の後にナデ調整が加わる。27・28は内外面ともアナグラ属二枚貝腹縁による条痕で調整され、28の面取りされた口縁部上面にはアナグラ放射肋の疑似縄文が施文される。29~32は



第 12 図 包含層等出土縄文土器拓影③ (1/3)



第 13 図 包含層等出土縄文土器拓影④ (1/3・1/4・2/9)

外面をアナダラ属貝殻使用らしい条痕、内面をナデ調整されたもので、29の面取りされた口唇部にアナダラ放射肋らしい疑似縄文がみられる。精製土器に近い類である。33・34は内外面を板状原体使用らしい条痕で調整され、34の胴肩部外面には沈線状の段が設けられている。35は内外面をアナダラ属貝殻条痕で調整した後にミガキ調整を加えた半精製土器で、内面側の調整がやや丁寧である。バケツ状に開く器形らしいが、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は幾分か波状をなす。36は内外面ともにナデ調整され、「く」字形に屈曲した幅広の口縁部外面に浅い凹線を巡らせ、凹線の上側は指頭圧痕を連続させキザミ目風の文様効果を与えている。37は台付鉢の脚台部で、内外面ともにミガキ、脚部内面をナデ調整される半精製の類である。38は復原口径30cm弱の大きさの膨らんだ胴部から緩やかに口縁部が外反する器形で、口縁端部は丸みをもつが、内外面ともアナダラ属貝殻条痕で調整された後に内面にはナデ調整が加わる。51は内外面を小巻貝条痕で調整し、内面をナデ消すが、内傾すると思われる口縁部との境に沈線が横走する。34は後期末ないし晩期初頭頃の可能性もあるが、アナダラ属貝殻条痕の使用や口縁部の穿孔、疑似縄文の併用、半精製の類などは後期中頃の北久根山式期を前後する時期に近いもので、51は後半～末頃であろう。

**晩期の土器** (39～45・52～69・73～90) 39・40は18・19号土坑から出土した外面に煤の付着する鉢および深鉢。39は復原口径・胴最大径ともに33.5cm前後の大きさの鉢で、頸部で僅かな段をなして口縁部が直線的に開く器形をなす。内外面ともにナデ調整される。40は口縁部を欠くが残存高36cm、胴最大径30cm弱の大きさの長胴になる深鉢で、外面に板状原体の条痕を残すが、内面はミガキと丁寧なナデで調整される。41・42は内外面を板状原体の条痕とナデで調整する口縁部破片。43は薄手の胴部片で、上半部との境に沈線が横走するものとみられる。外面は条痕、内面はミガキ調整される。44は稜をなして短く屈折する口縁部に細い沈線が横走する。内外面ともに丁寧なナデで調整される。前半期のものであろう。

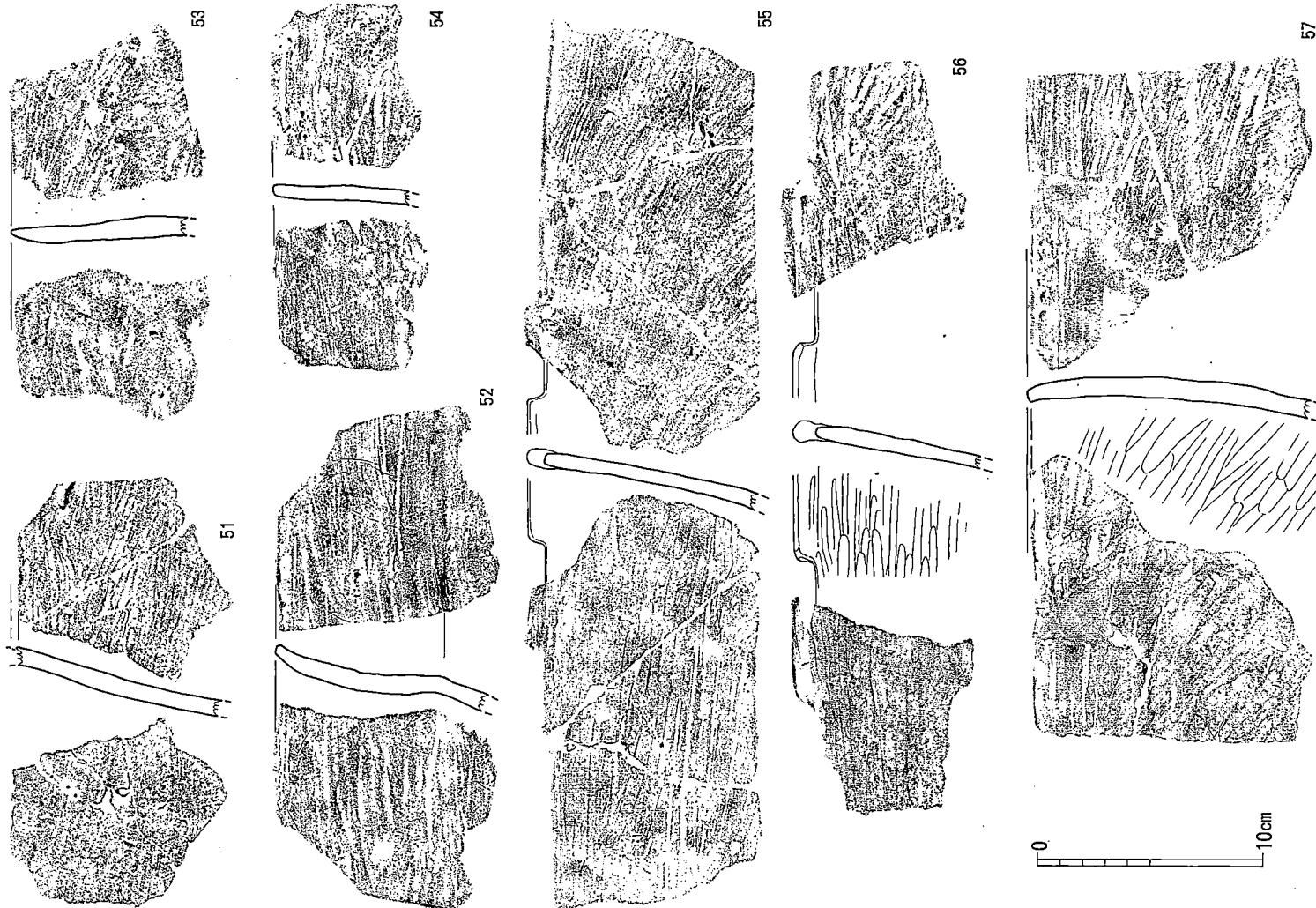
45は外面に簾状の編み物らしい組織圧痕のある胴部破片で、内面はナデ調整される。中頃。

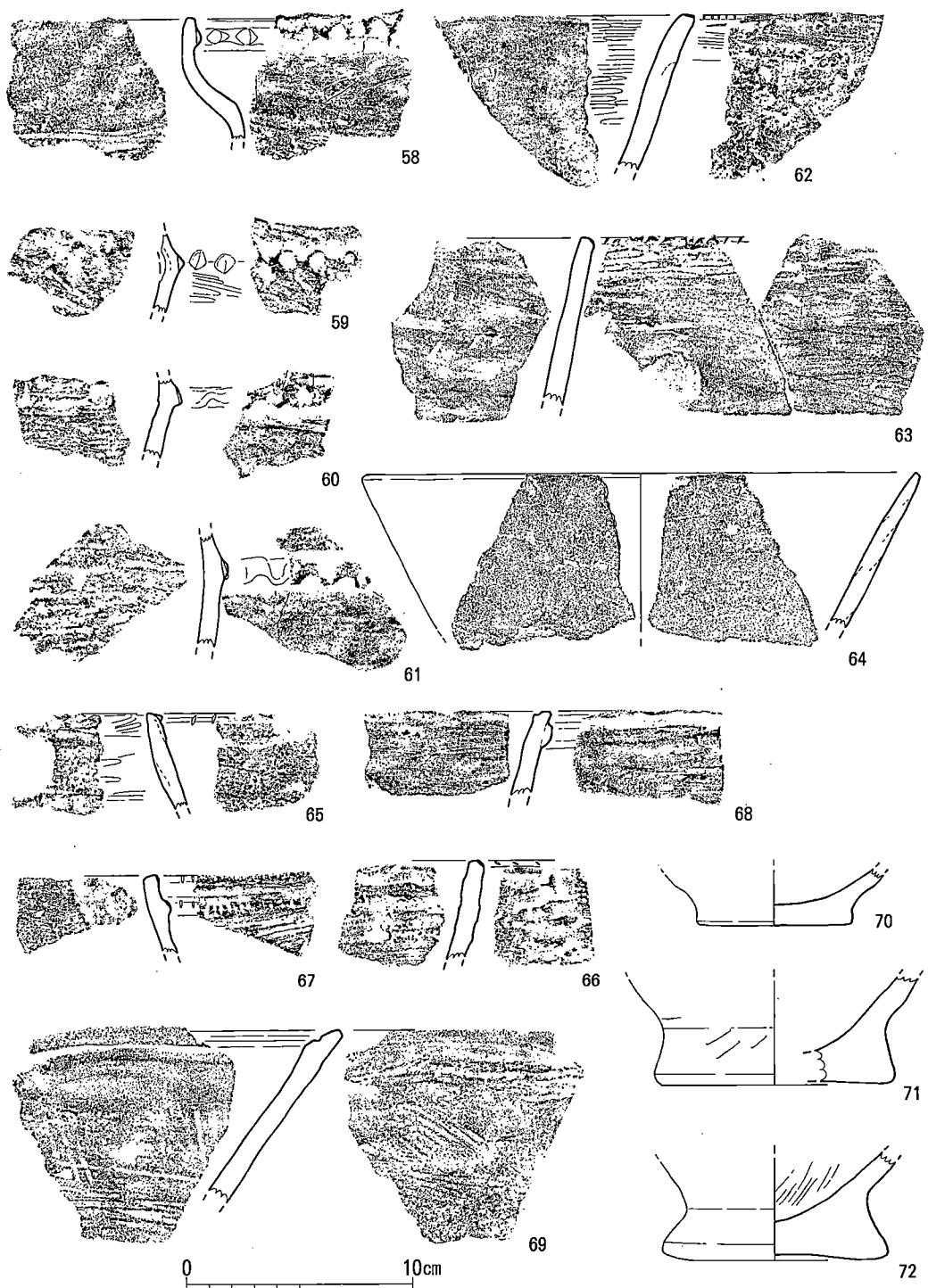
52～54は内外面が板状原体の条痕で調整され、内面がナデられるもので、口縁部は緩やかに外反する。54の外面は調整がやや雑で、口縁部も殆ど反らない。55～57は外面が板状原体の条痕で調整され、内面がミガキ調整される。口縁部は直線的に立ち上がり、55・56では口縁部に鰐状もしくはリボン状の突起が付く。57はやや内湾気味の器形をなし、口縁端部は軽く面取りされる。

58～61は指頭程の大きさに刻まれる突帶を有する破片である。58は口頸部がナデ調整されて窄まるが、膨らんだ胴部内外面には板状原体の条痕が残る。口縁部直下にキザミ目突帶が巡る。59・60は胴部最大径の部分が突出して屈折した部分にキザミ目が付される。61は胴部最大径らしい位置に突帶が貼付けられて、上方から押し付けるように刻まれている。

62はバケツ状に開く鉢で、内外面ともナデ調整される。63～67は口縁端部がヘラ先のような

第14図 包含層等出土繩文土器拓影⑤ (1/3)





第 15 図 包含層等出土縄文土器拓影⑥ (1/3)

もので刻まれる例である。66以外はいずれも外面は板状原体の条痕で調整されナデ調整が加わるが、内面は丁寧なナデ或いはミガキで調整される。64外面の拓本が粗く見えるのは厚く付着した煤のためで、66は本来調整が粗い内湾気味の口縁部である。67は口縁部が内傾し外面に板状痕が残る。口縁下に突帯を巡らせて、口縁端部と突帯が細かく刻まれる。

68は内外面ともに板状条痕の後ナデ調整され、口縁下に突帯が巡らされるがキザミ目は付されていない。

69は直線的に開く鉢で、口縁部内面側が縁帶状の面をなし、段状の沈線が横走する。内外面とも条痕の跡を残すがナデ調整される。外面には煤が付着する。

73~90は精製土器で、浅鉢が大半を占めるが、鉢も一部みられる。73は復原口径20.8cm、器高9.0cm弱の大きさの浅鉢で、屋外炉の1.8m西側から出土した。丸みを持った体部から頸部が外反して開くが口縁部は短く屈折して立ち上がる。器壁は薄く、内外面とも丁寧にミガキ調整される。74~77の破片は73に似た器形だが、器壁はやや厚めで、74・77の口縁部は軽く摘み上げたような形状をなす。

78・81・82は丸みをもって立ち上がる鉢の口縁部で、内外面ともミガキ或いは丁寧にナデられる。78は口縁端が内側に屈折して内面に段を生じるが、81では口縁端部外側が摘んだように突出して上面と外面に沈線状の段が生じ、82は外側に拡張気味に開く。

79は復原口径15.2cmの大きさの小形鉢で、口頸部は緩やかに外反して、口縁端部に鰭状或いはリボン状の突起が付く模様である。内外面ともミガキ或いは丁寧なナデで調整されて器壁は薄い。80は同様の器形ながらやや大形の鉢である。

83~85は胴部が誇張気味に膨らむ器形の浅鉢で、内外面ともミガキ調整される。口縁部は短く外反して、内外面に沈線状の段を生じるがバリエーションがある。87は胴部最大径の位置に稜があり、算盤玉のような形状をなす。

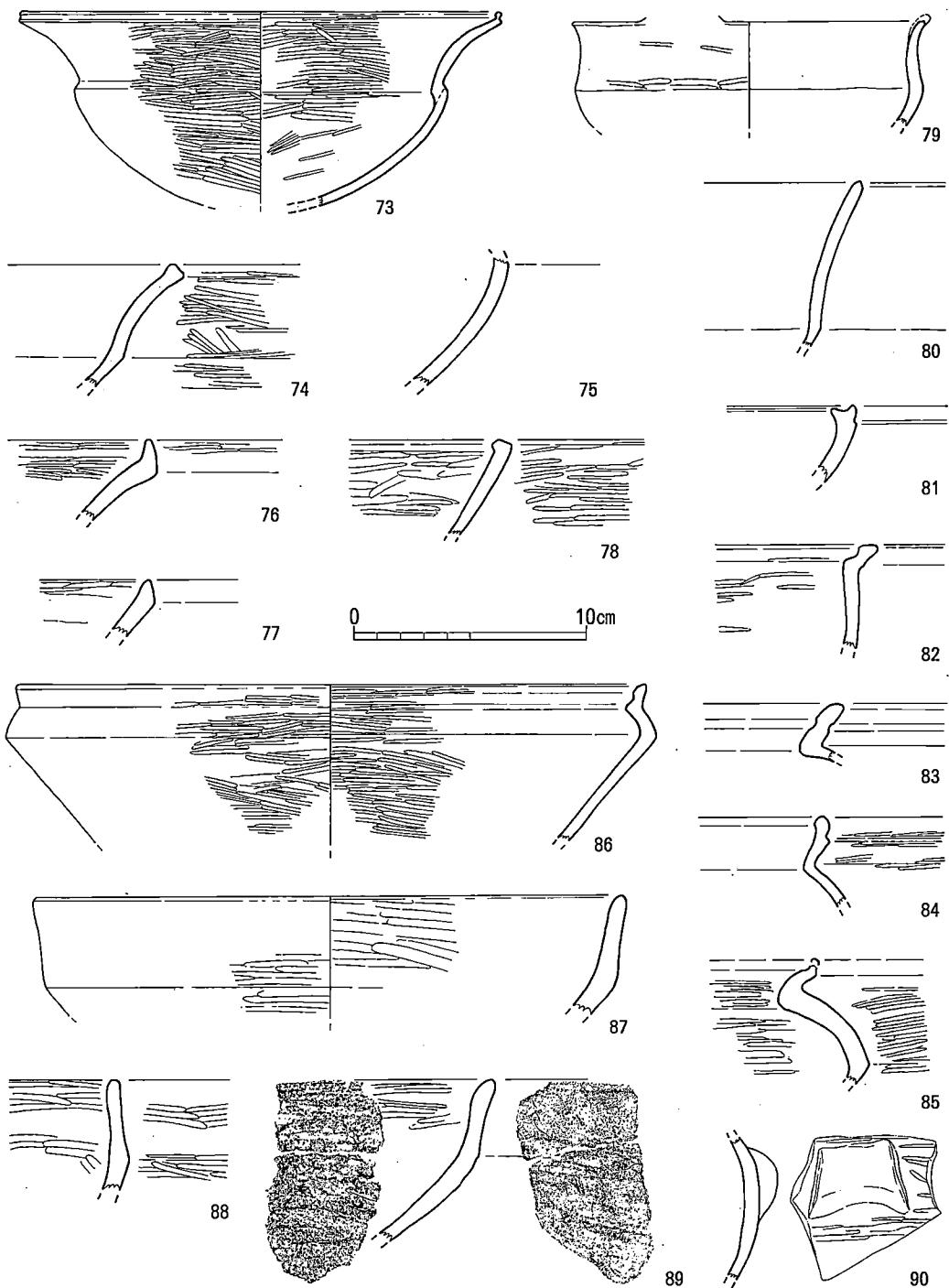
86は復原口径27cm程の大きさの浅鉢で、口頸部が短く屈曲し、口縁部内面に沈線状の段がみられる。内外面とも丁寧にミガキ調整されて器壁は薄め。

87~89は口縁部が僅かに外反気味ながらも直線的に立ち上がる器形の鉢で、内外面ともミガキ調整される。87は復原口径25.5cm前後の大きさ。器壁はやや厚めで、外面に煤が付着する。

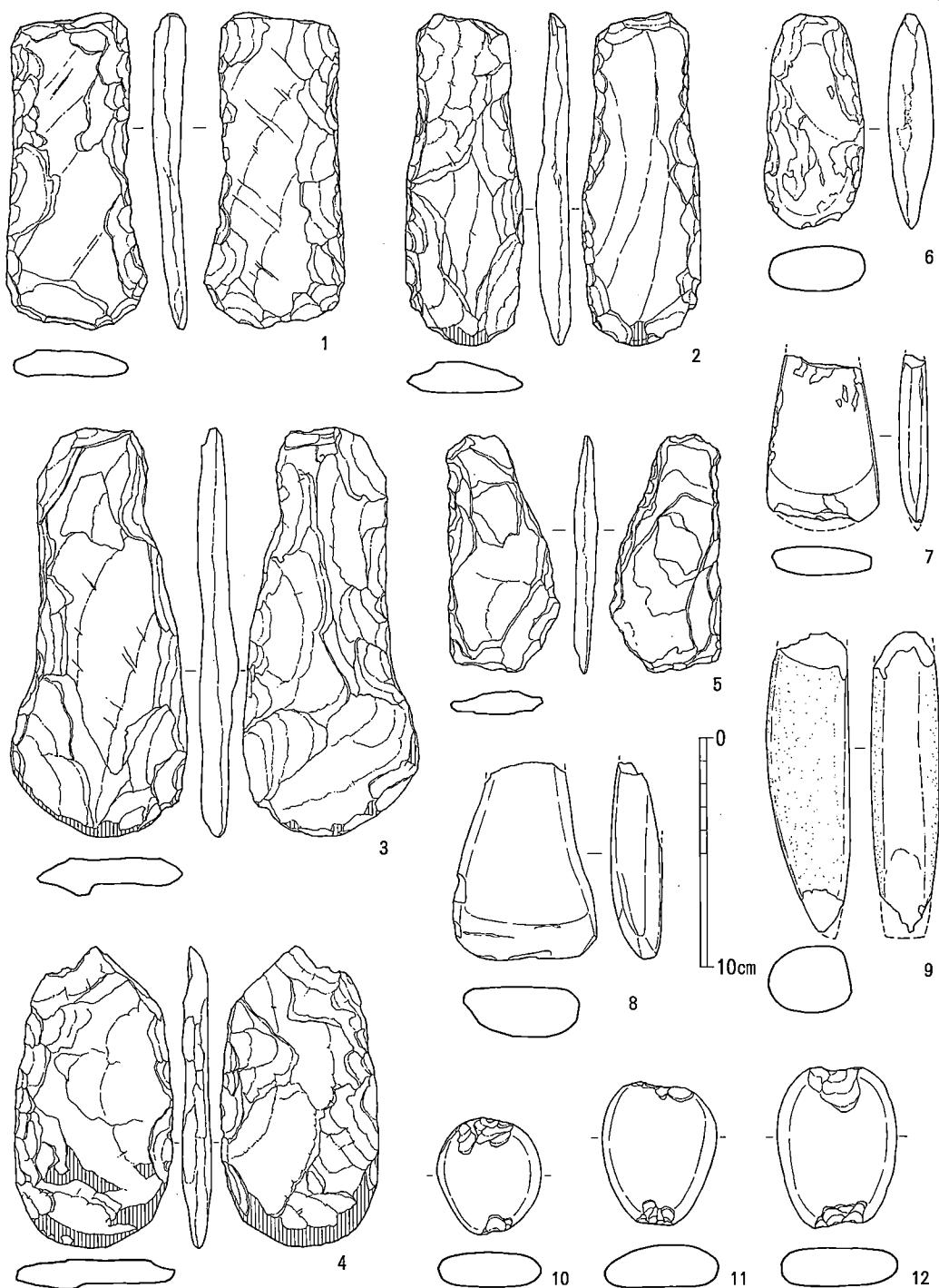
90は鼓を半載したような把手状突起の付く胴部破片で、内外面ともミガキ調整される。

晩期土器のうち大部分は中頃を前後する頃であり、組織痕土器もこの頃に該当する。また、キザミ目突帯を有する土器は後半で、細かめの刻み目をもつ土器などは更に時期的に下降するものであろう。

**底 部 (46~50・70~72)** 47は後期中頃前後のものであろうが、外底面に $1.6 \times 1.2$ cm大の種子圧痕がみられる。48は後期後半の西平式精製鉢の底部で、56・60・80は後期に属する精製或いは半精製土器の底部、49・71・72は晩期粗製深鉢の底部であろう。



第 16 図 包含層等出土縄文土器実測図⑦ (1/3)



第 17 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図① (1/3)

## 出土石器（図版6-2、第17～19図、表2）

図示した石器類以外にも多数の石器類が出土しているが、紙数の都合で割愛した。図示しない資料では、緑泥片岩など結晶片岩製の打製石斧23点、蛇紋岩製磨製石斧片1点、黒色を呈する黒曜石製打製石鏃片5点、結晶片岩製の打欠石錐1点、サヌカイト製の搔器片4点をはじめ、黒曜石製の搔器・削器・使用痕のある剥片・残核などの剥片石器類が多数出土している。

**打製石斧（1～5）** 緑泥片岩などの結晶片岩を素材にしている。1・2のような短冊形、3のような撥形が殆どで、一部に撥形でやや抉れが強く有肩形に似た例がある。法量では長さ20.8cm、幅6.2cm、厚さ2.0cm、重量377gを測る例が最大だが、殆どの例は長さ12.0～18.0cm、幅5.0～7.0cm、厚さ2.0cm以下の大きさ。刃部の磨耗が進行して滑らかになった例もみられる。5は最も小振りな例で、欠損を重ねた後に収穫具などに転用された可能性がある。

**磨製石斧（6～9）** 5点出土し、4点を図示する。緑泥片岩・蛇紋岩を用いるのが殆どで、定角式或いはそれに似たタイプもみられるが、9のように硬砂岩を用いた柱状片刃石斧に似た例がある。

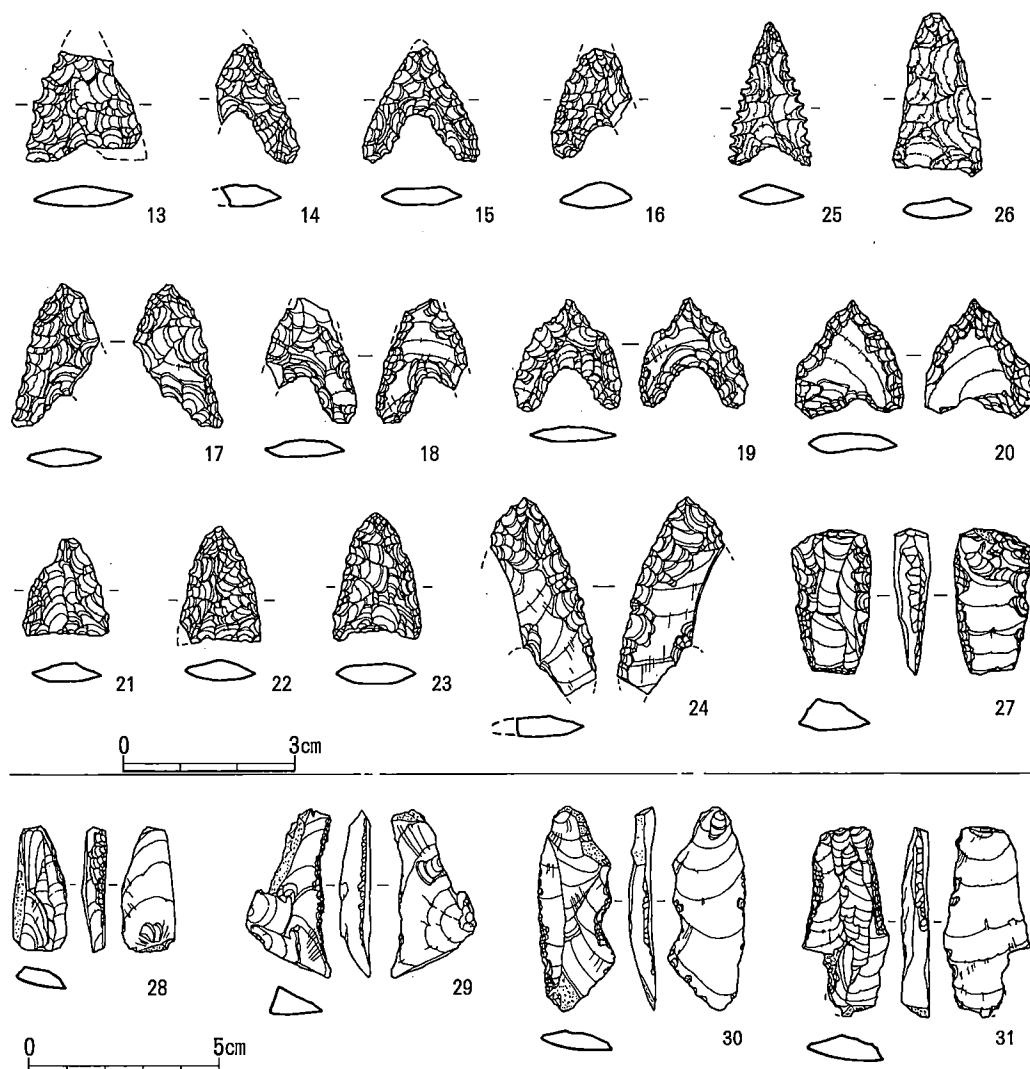
**打欠石錐（10～12）** 5点出土し、3点を図示する。安山岩の川原石の長軸端部を打ち欠いて紐掛けにする例が多く、重量は100g以下であるが、図示しない緑泥片岩製の例は大振りで重量203.8gを測る。

**打製石鏃（14～18・20～26）** 14点出土し、12点を図示する。伊万里湾周辺産の黒色黒曜石製とサヌカイト製がある。後期中頃に盛行する狭義の剥片鏃はみられないが、広義の剥片鏃に近い例は18・20である。21～23の平基式の例は、晩期後半～弥生時代中期の所産の可能性が高い。24は大振りな例で、25は鋸歯鏃である。

**搔器・削器（27～35）** いずれも黒色の黒曜石製である。27は縦長剥片の打瘤部分と両側縁に調整剥離を加えた搔器で、剥片の打点部分に原面が残る。28・29は刃部と反対側の側縁に原面を残す搔器。30～33は縦長剥片の両側縁を刃部に使用する削器で、30では抉入部をもつ。34・35は打瘤部分の厚みを利用したエンドスクレイパーである。

**縦長剥片（36～38）** いずれも黒色の黒曜石製である。36・37は背側に原面を残したやや厚みのある剥片である。図示しない剥片には、原面を残さず厚みの薄い例も多いが、削器に用いられる縦長剥片と同タイプの例が多数ある。36は主要剥離面の剥離時に背側の遠位端側に剥離が及んで長さが短くなっている。37では先端側の側縁に使用による刃こぼれ痕がみられる。38は両側縁と先端側に原面を残す例であり、原石の比較的端部を使用した剥片であるが、側縁を削るための刃部として使用できなかったため搔器のように使用されたような痕跡が一部にみられる。

**石匙（39～41）** いずれもサヌカイト製で、39・40は縦型、41は横型の石匙である。39はやや風化の進むもので、剥片の先端側の両側縁に抉りを設けている。40は不純物を多く含み、

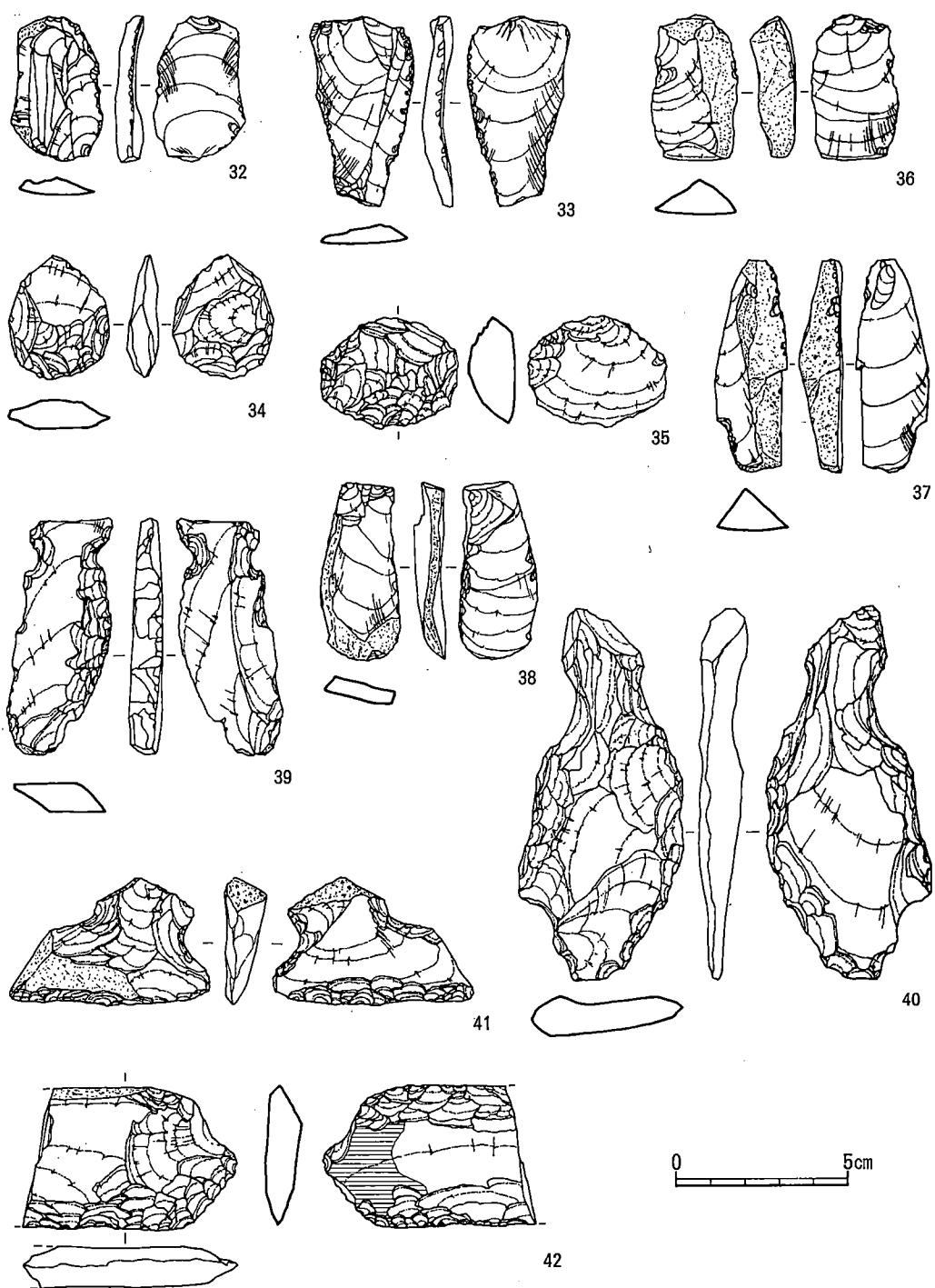


第 18 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図② (3/4・1/2)

剥片剥離時の打面側を背側の側縁にして、打瘤部分を調整して抉りを設けている。41は原面を多く残す剥片で、打瘤部脇に抉りを設けている。

**収穫具 (42)** サヌカイト製の横剥ぎ剥片を利用したもので、片面の一部に顕著な磨耗痕がみられることから、打製石斧欠損品の再利用かも知れない。

**植物遺存体 (図版6-3)** 屋外炉周辺の調査区北部の包含層で、炭化した堅果類種子が幾らか出土している。正円の球形に近いものもみられるが、殆どは楕円球形が半載されたもので、長さ0.7~1.3cm×幅0.6~0.8cm、厚さ0.3~0.4cm前後の大きさ。未同定であるが、コナラあるいはイチイガシなどの類であろう。



第 19 図 包含層等出土縄文時代の石器実測図③ (1/2)

表2 長島遺跡2次調査出土縄文時代の石器類一覧表

No.	器種	形態	出土位置	残存状態	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石材
1	打製石斧	短冊形	道4南中位	完形	134.0	60.0	12.2	140.1	緑泥片岩
2	打製石斧	短冊形	道3埋土下位	完形	143.6	51.0	14.5	144.0	緑泥片岩
3	打製石斧	撥形	溝8下面	完形	177.0	76.1	16.0	226.7	緑泥片岩
4	打製石斧	短冊形	道3西落込み	完形	130.3	68.5	12.1	165.3	緑泥片岩
5	打製石斧	撥形	道3西落込み	完形	48.0	13.1	10.1	56.3	緑泥片岩
6	磨製石斧		土壙41	ほぼ完形	92.7	42.5	20.0	114.9	緑泥片岩
7	磨製石斧	定角式	道3西落込み	基・刃部欠	73.0	48.1	12.8	77.0	蛇紋岩
8	磨製石斧		道2上層	基部欠	86.2	62.4	22.7		緑泥片岩
9	磨製石斧	柱状片刃?	先端部掘り下げ	基・刃部欠	130.3	29.5	36.8		硬砂岩
10	打欠石錐	長軸打欠	住60埋土	完形	50.4	45.7	15.0	44.4	安山岩
11	打欠石錐	長軸打欠	溝7A群	完形	61.2	50.0	17.8	72.0	安山岩
12	打欠石錐	長軸打欠	道4下位埋土	完形	69.5	52.0	16.3		安山岩
13	打製石鎌	凹基式	集石土坑	先・基部端欠	19.5	20.1	3.9		黒曜石
14	打製石鎌	凹基式	東北端搅乱土坑	先・基部端欠	20.5	14.1	3.9	0.7	黒曜石
15	打製石鎌	凹基式	表採	先端一部欠	20.2	19.9	2.9	0.7	黒曜石
16	打製石鎌	凹基式	表採	先・基部端欠	19.2	14.1	4.5	0.8	黒曜石
17	打製石鎌	凹基式	表採	片脚欠	25.2	15.5	3.0	1.0	黒曜石
18	打製石鎌	凹基式	表採	先・基部端欠	22.2	16.8	3.0	0.8	黒曜石
19	打製石鎌	凹基式	円形竪穴2	完形	19.5	19.0	2.9	0.7	黒曜石
20	打製石鎌	凹基式	住106	完形	21.1	21.3	3.7	1.3	黒曜石
21	打製石鎌	平基式	表採	完形?	17.2	15.0	3.2	0.7	黒曜石
22	打製石鎌	平基式	溝7東	一部欠	20.4	14.5	3.5	0.9	黒曜石
23	打製石鎌	平基式	道3西落込み	完形	22.1	15.8	3.8	1.3	黒曜石
24	打製石鎌	凹基式	溝7埋土	片脚欠	34.1	22.1	3.3	1.3	黒曜石
25	打製石鎌	凹基鋸齒鎌	土壙墓21	完形	25.0	14.5	3.5	0.8	サヌカイト
26	打製石鎌	平基式	p68付近	完形	28.3	15.2	3.9	1.6	サヌカイト
27	搔器		道3	完形	25.7	13.7	6.0	2.0	黒曜石
28	搔器		p398	完形	32.2	14.1	6.4	2.5	黒曜石
29	搔器		道4	完形	45.2	20.7	7.1	5.0	黒曜石
30	削器		東端部掘り下げ	完形	54.2	19.1	4.8	5.1	黒曜石
31	削器		住64	一部欠	51.0	22.5	6.3	5.9	黒曜石
32	削器		土壙19	完形	42.6	26.1	7.8	6.3	黒曜石
33	削器		土壙39	完形	55.0	27.8	5.1	9.7	黒曜石
34	搔器	エンドスクレバー	p68付近	ほぼ完形	35.9	28.4	9.1	8.9	サヌカイト
35	搔器	エンドスクレバー		完形	31.8	40.0	13.4	15.9	サヌカイト
36	縦長剥片	使用痕剥片	屋外炉	完形	41.5	25.0	12.2		黒曜石
37	縦長剥片	使用痕剥片	道4	完形	61.0	20.0	11.9	11.0	黒曜石
38	縦長剥片	使用痕剥片	石棺墓3掘り方	完形	51.6	22.9	4.1	9.1	黒曜石
39	石匙	縦長石匙	杭87脇近世溝	完形	68.6	27.1	8.9	20.0	サヌカイト
40	石匙	縦長石匙	p401	完形	17.8	45.8	13.0	49.0	サヌカイト
41	石匙	横長石匙	溝8	完形	37.1	58.1	12.0	19.5	サヌカイト
42	収穫具?		p777付近褐色土	刃部片	62.5	41.2	12.1	34.2	サヌカイト



第 20 図 61・66・74・76号竪穴住居実測図 (1/60)

### 3. 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 壁穴住居

総数16軒検出した。大略、調査区の西端部と7・8号溝付近にまとまるものの8号溝以東には拡大せず、居住域と墓域が区別されていたことが窺われる。

#### 61号壁穴住居（図版7-1、第20図）

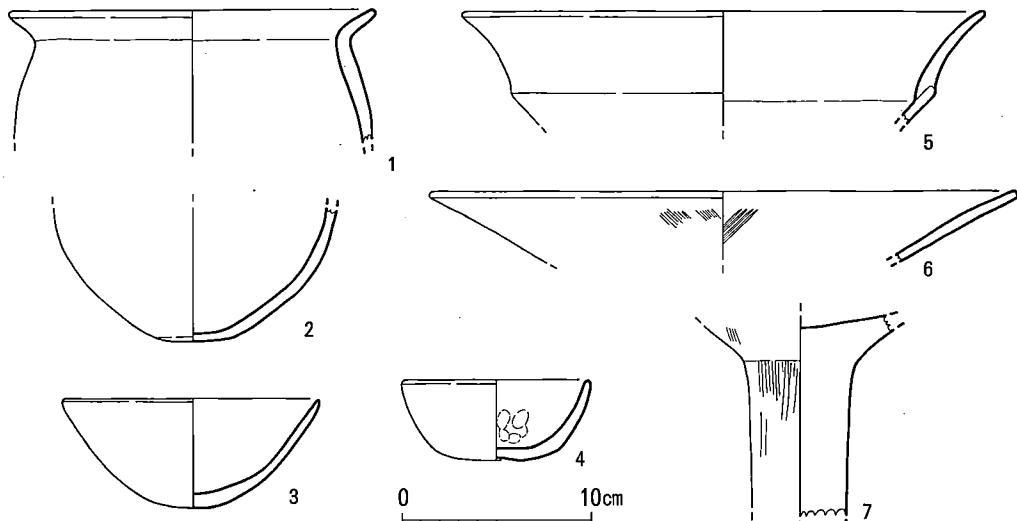
西端部に位置し、66・74号壁穴住居を切っている。古墳時代の57・59・60号壁穴住居に切られるものの規模の把握は可能である。平面形は長方形を呈し、南壁長4.98m、中央幅4.15m、壁高は0.22mを測る。東壁側には地山削り出しのベッド状遺構を付設し、幅1.06m、高さ0.12mの規模を有する。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は2.20mを測る。炉は主柱穴間の中央にあり、50×70cmの楕円形を呈する。また、南壁中央には長方形の屋内土坑を有する。

#### 出土遺物（図版35・58-2、第21・117・118図）

**土器（1～7）** 1・2は甕で、1の口縁部は「く」字形に屈曲する。復原口径19.4cm。2は胴下半部の破片で、底部は平底の名残を持つ。3・4は椀で、3の底部は丸く、4は平底風。口径は3が13.6cm、4が10.0cmに復原した。5～7は高坏で、5・6が坏部、7は脚柱部の破片。6の坏部は脚部からそのまま開くが、5は一旦屈曲してから外反する。何れも埋土中の出土。

**鉄器（3）** 3は残存長3.4cm、幅0.6cmを測る棒状の製品で、断面形は方形を呈する。

**土製品（6・7）** 6は手捏ねの椀で、器高5.0cm、復原口径6.6cm。器面には指頭痕が付く。7



第21図 61号壁穴住居出土土器実測図（1/4）

は柄杓形土製品の取手部小片。

#### 66号竪穴住居（図版7-2・8-1、第20図）

西端部に位置する。61・74号竪穴住居及び古墳時代の57・60号竪穴住居、23号掘立柱建物に切られ、南壁付近を残す程度である。地山削り出しのベット状遺構は南東壁に付設されており、長さ4.24m、幅1.56m、高さ0.1mを測る。主柱穴は2本柱と思われるが、61号竪穴住居下層で検出した▲印を付したピットが主柱穴になろう。

#### 72号竪穴住居（第127図）

西端部に位置する。古墳時代の62・63号竪穴住居に切られ、大半が調査区外にあるため西壁の一部を僅かに残す程度である。北壁長は5.15m程になるか。主柱穴・炉など詳細は不明。

#### 出土遺物（第22・117図）

**土 器 (1)** 1は高壺の脚柱部破片で、径は4.0cm。

**鉄 器 (14)** 14は手鎌の破片で、折返しは斜めに立つ。幅は2.5cm。

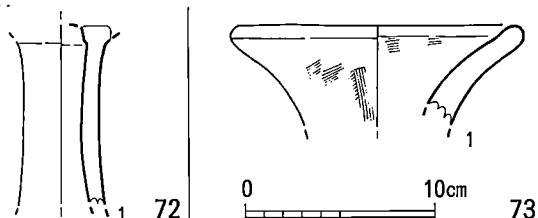
#### 73号竪穴住居（図版8-2、第23図）

4号溝と西端部住居群との中間に位置する。中央部を鎌倉時代の2号溝に切られるため遺存状態は悪く四周を留める程度である。平面形は台形を呈し、東壁長3.84m、北壁長3.6mで、壁高は北壁側で0.1mの遺存状態である。柱穴・炉など詳細は不明。

#### 出土遺物（図版56-2、第22・115図）

**土 器 (1)** 1は器台の口縁部破片で、口縁部はラッパ状に開く。口径は15.4cmに復原した。

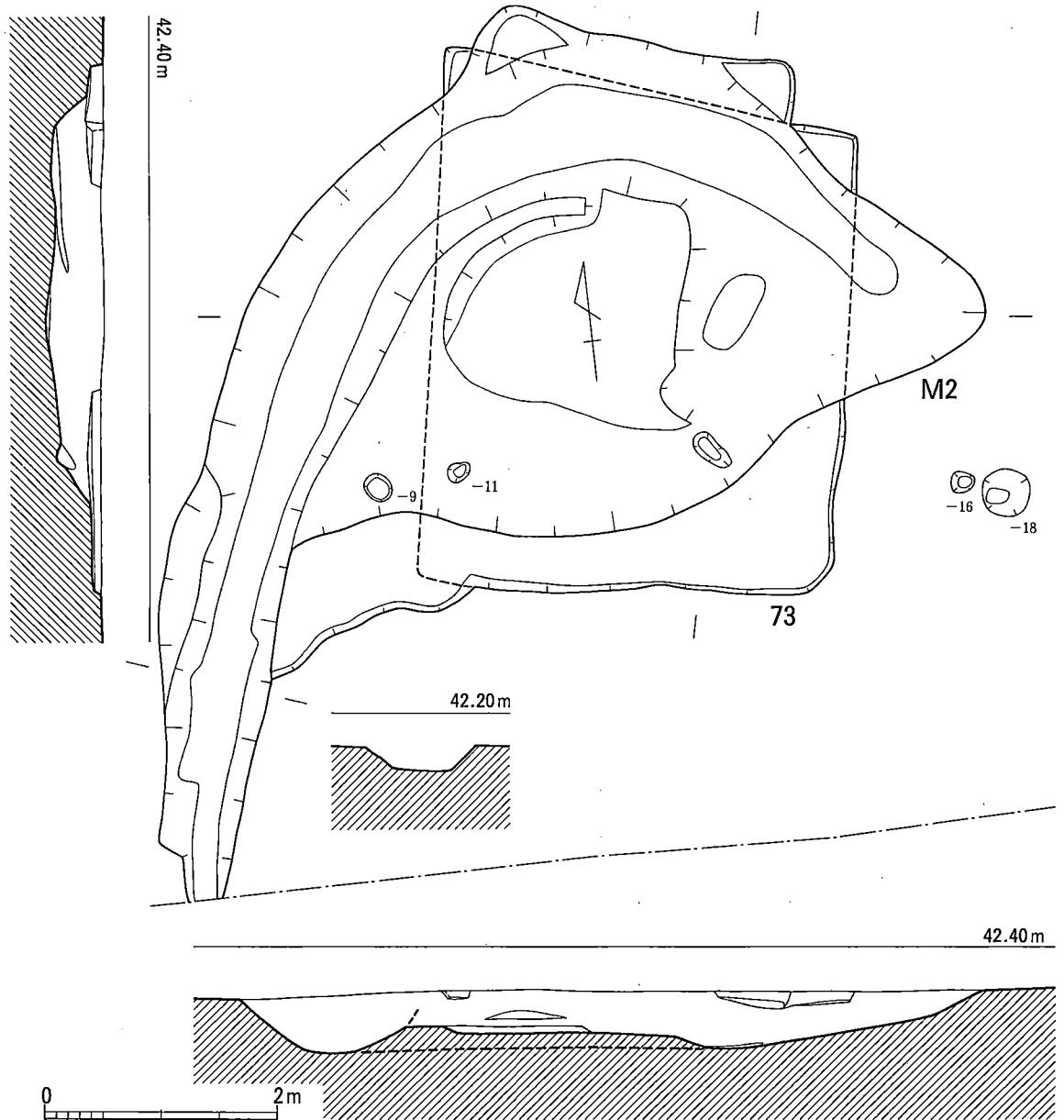
**石 器 (8)** 8は砥石片で、四周を欠損する。残存部での長さ6.1cm、幅3.8cm、厚さ1.7cm。



第22図 72・73号竪穴住居出土土器実測図(1/4)

#### 74号竪穴住居（第20図）

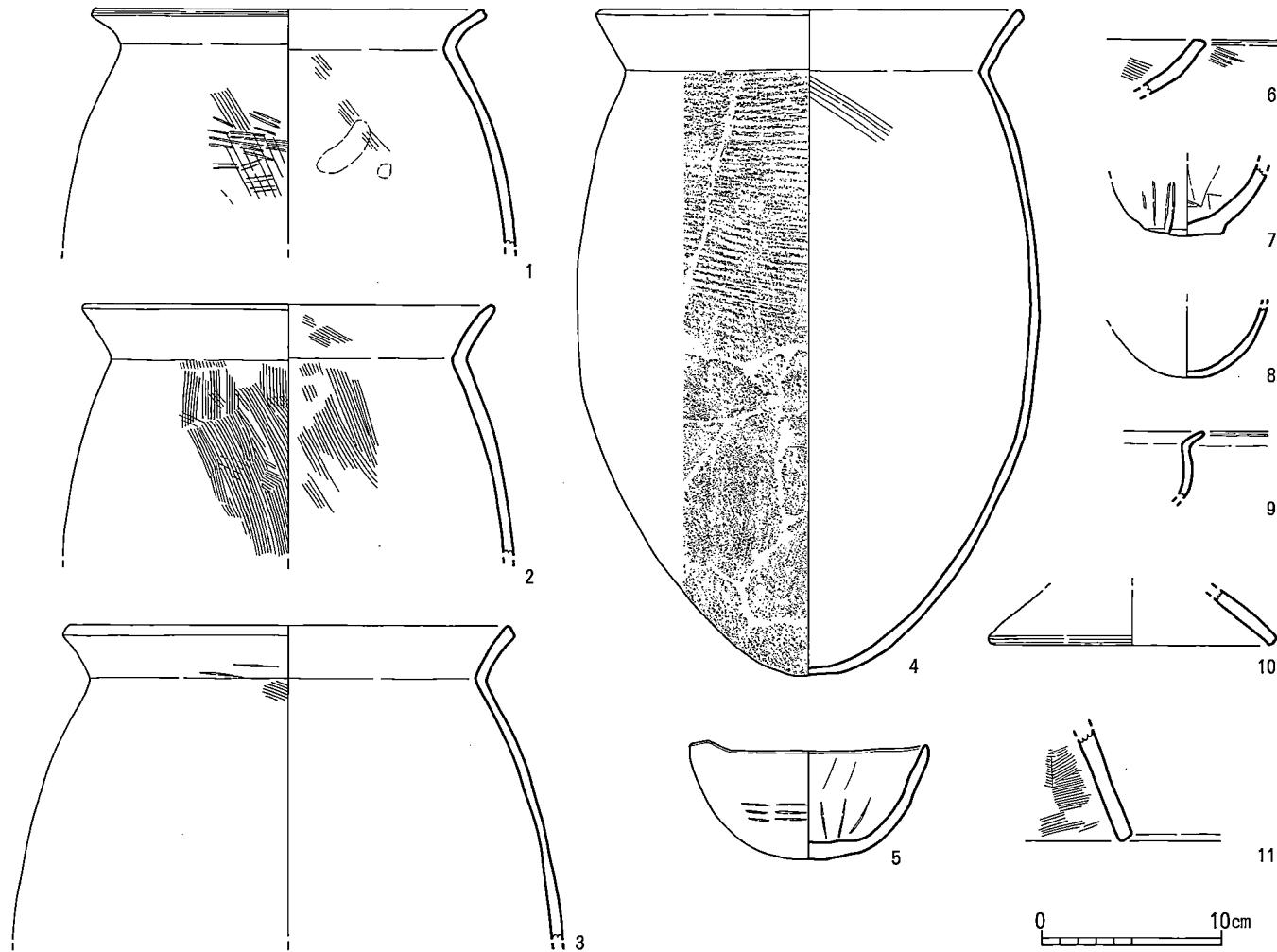
西端部に位置する。61号竪穴住居及び古墳時代の60号竪穴住居に切られ、66・76号竪穴住居を切っている。60号竪穴住居に大半を切られるため詳細は不明であるが、平面形は長方形を呈し、南壁長5.78m、西壁長4.60mで、壁高は南壁側で0.15mを測る。主柱穴は貼床を掘下げたものの判然としなかった。炉は60号竪穴住居の南壁側にある浅い橢円形の穴が該当するものと思われる。また、北壁の中央際に焼土がみられるが、当住居に伴うものではなく、67号住居として番号を付した。地山削り出しのベット状遺構は東壁側に付設されるが、詳細は不明。屋内



第23図 73号竪穴住居、2号溝実測図 (1/60)

土坑は南壁中央にあり、埋土内には土器が入っていた。その東側のPit内からは据えた状態で甕(4)が出土している。

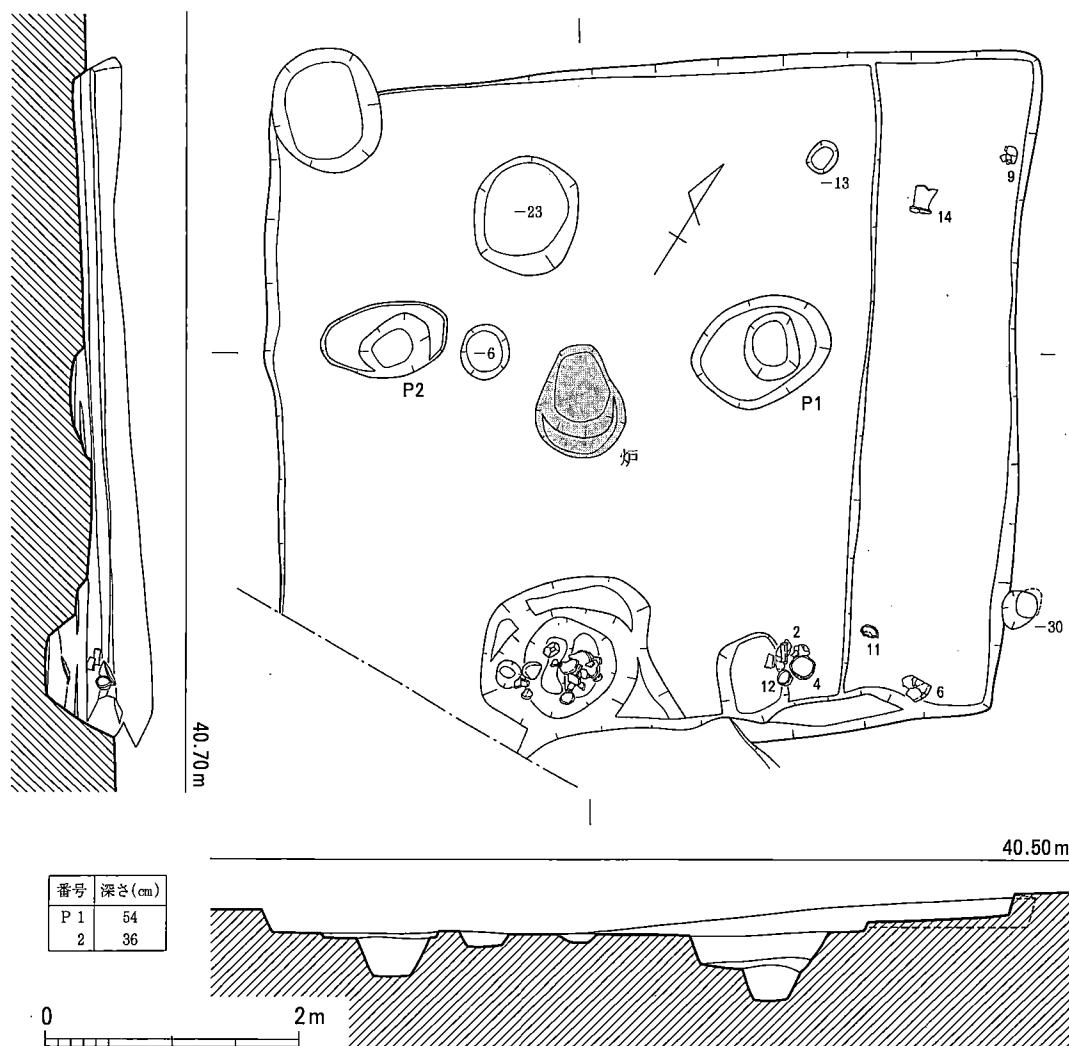
出土遺物 (図版35・58-3、第24・118図)



第 24 図 74号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)

**土 器 (1~11)** 1~4は「く」字形口縁甕で、1~3は胴下半部を欠損する。4は完形品で、器高37.3cm、口径23.0cmを測る。屋内土坑横のピット内から据えた状態で出土した。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目による。5~9は椀で、5の口縁部はそのまま開く。7・8は口縁部を欠損する。7の底部は平底気味で、8は丸底。9の口縁部は短く屈曲する。10は高壺の脚裾部破片で、端部は丸く收めている。11は器台の裾部破片。

**土製品 (13)** 13は弥生土器片利用の土版で、径2.7×3.0cm、重さ6.9gを測る。



第 25 図 75号竪穴住居実測図 (1/60)

### 75号竪穴住居（図版9、第25図）

西端部に位置し、古墳時代の64・65号竪穴住居に切られ、66・74号竪穴住居を切っているものの規模の把握は可能である。平面形は長方形を呈し、北壁長6.10m、東壁長5.14m、壁高は東壁側で0.32mを測る。東壁側には地山削り出しのベッド状遺構を付設し、幅120cm、高さは8cm。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は3.0mを測る。炉は主柱穴間の中央にあり、72×90cmの楕円形を呈する。また、南壁中央には長方形の屋内土坑があり、川原石が入っていた。ベット状遺構の北側と南側からは土器が出土しているが、浮いた状態である。

### 出土遺物（図版35・56-1・57-1、第26・115・117図）

**土 器（1～16）** 1は直口壺の口縁部小片。2は「く」字形口縁甕で、器高19.5cm、口径12.5cmを測る。全体的に肉厚の土器で、底部は丸みを帯びる。3も「く」字形口縁甕で、復原口径は27.6cmを測る。4・5は底部破片で、5は平底をなす。6・7は鉢で、6の器形は樽形を呈する。底径は6.8cmに復原した。8～13は椀で、8の口縁部は小さく屈曲する。9・10は浅めで、11～13は深めの椀。口径は8が16.8cm、11は10.0cm。12の器面には指頭痕が付き、手捏ね風である。14は完形の器台で、器高19.5cm、口径16.4cm、底径15.4cmを測る。15・16は支脚で、上部に焼成前穿孔の円孔をもつ。

**石 器（1・9）** 1は小豆色を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁で、両刃半月形をなし、背側の双孔は両面から穿孔される。端部を欠損するが、残存長11.0cm、幅4.7cm、厚さ0.6cm強、重さ45.2gを測る。9は輝緑凝灰岩製の仕上げ砥石で、屋内土坑の出土。両端部を欠損するが、残存長25.3cm、中央部幅3.6cm、厚さ2.1cmで、四周を砥面としている。重さ354.1gを測る。

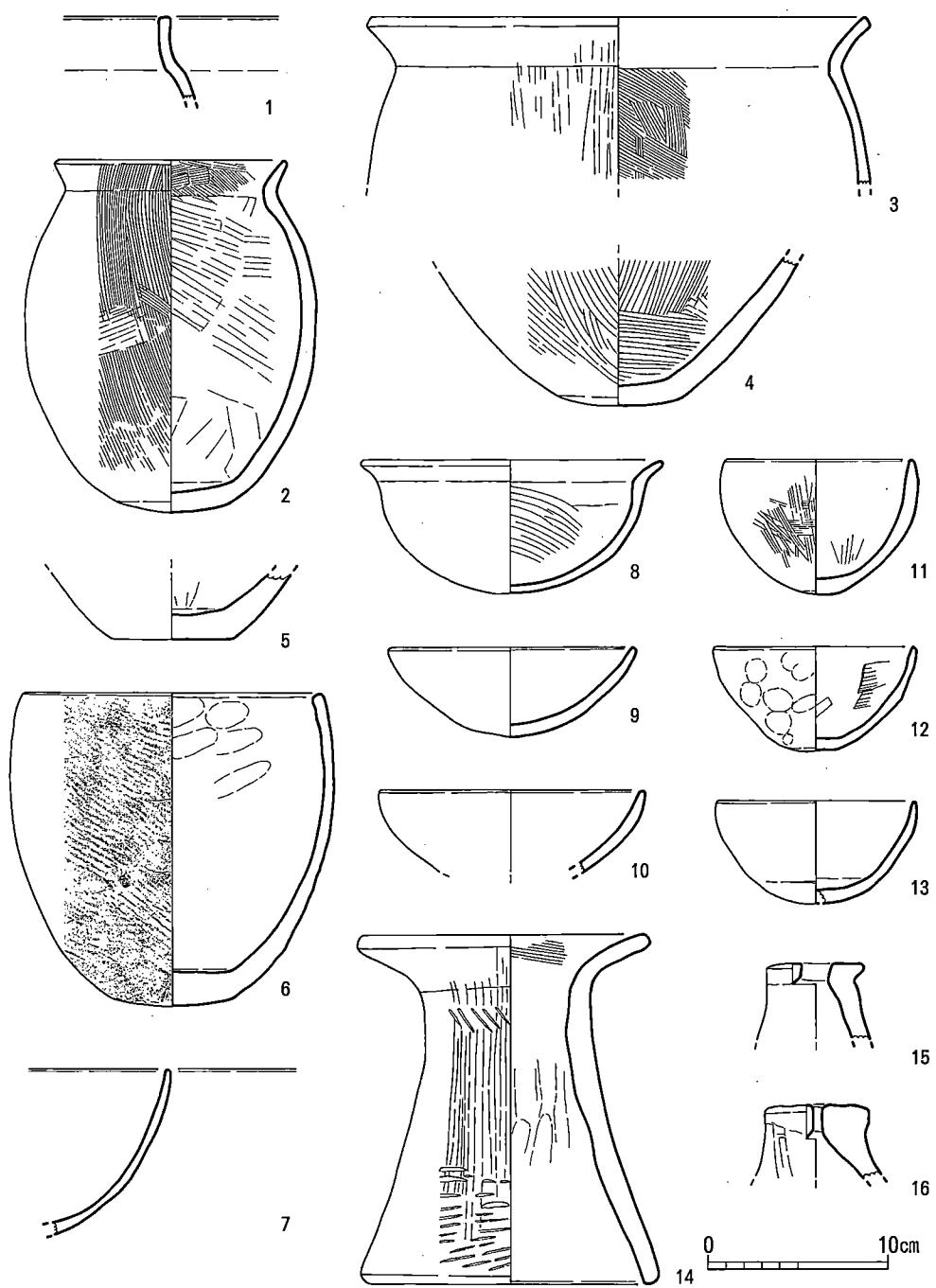
**鉄 器（11）** 11は鎌で、先端部を欠失する。基部幅2.9cmで、右側につく端部の折返しの度合いは顕著ではない。

### 76号竪穴住居（第20図）

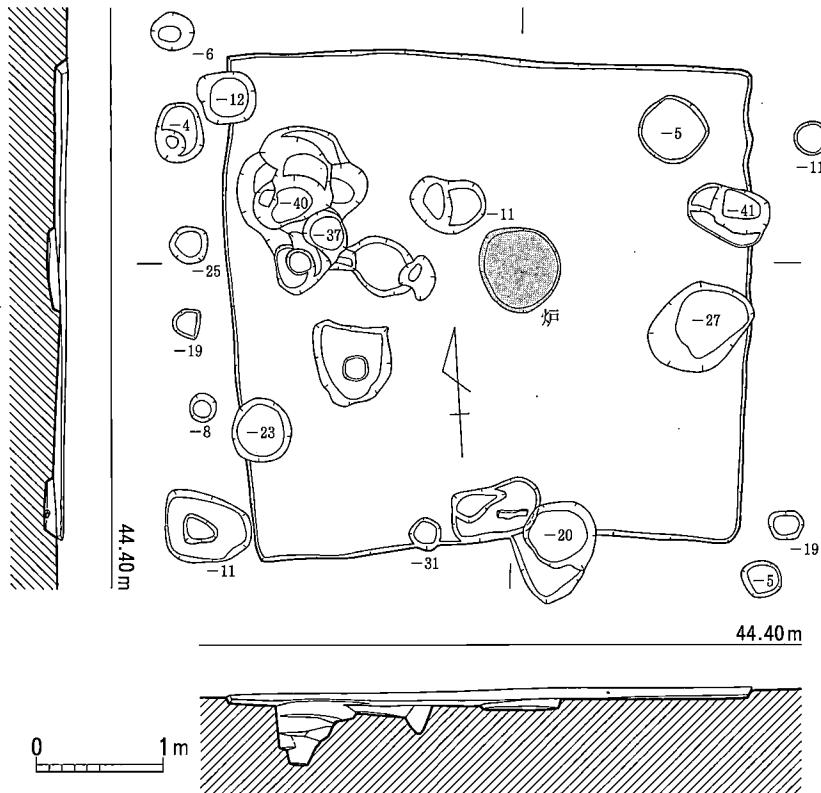
西端部に位置する。74・75号竪穴住居に切られ、東壁コーナー部を残す程度であるため規模・柱穴・炉など詳細は不明。出土遺物はないが、弥生時代に帰属するものであろう。

### 77号竪穴住居（図版10、第27図）

調査区の中央部に位置し、二次調査で再度調査を行った。平面形は寸詰まりの長方形を呈し、北壁長4.12m、東壁長3.72m、壁高は壁側で8cmと遺存状態は悪い。主柱穴は2本柱であろうが判然としない。炉は床面中央やや東側にあり、62×70cmの円形を呈する。ベット状遺構は竪穴内部では確認されていないが、壁高の遺存状態が悪いことから削平された可能性がある。屋内土坑は南壁中央にあり、底面に密着した状態で砥石が出土している。埋土中から土器片が出土しているが、図示に耐えない。



第 26 図 75号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)



第27図 77号竪穴住居実測図 (1/60)

#### 出土遺物 (図版56-2、第117図)

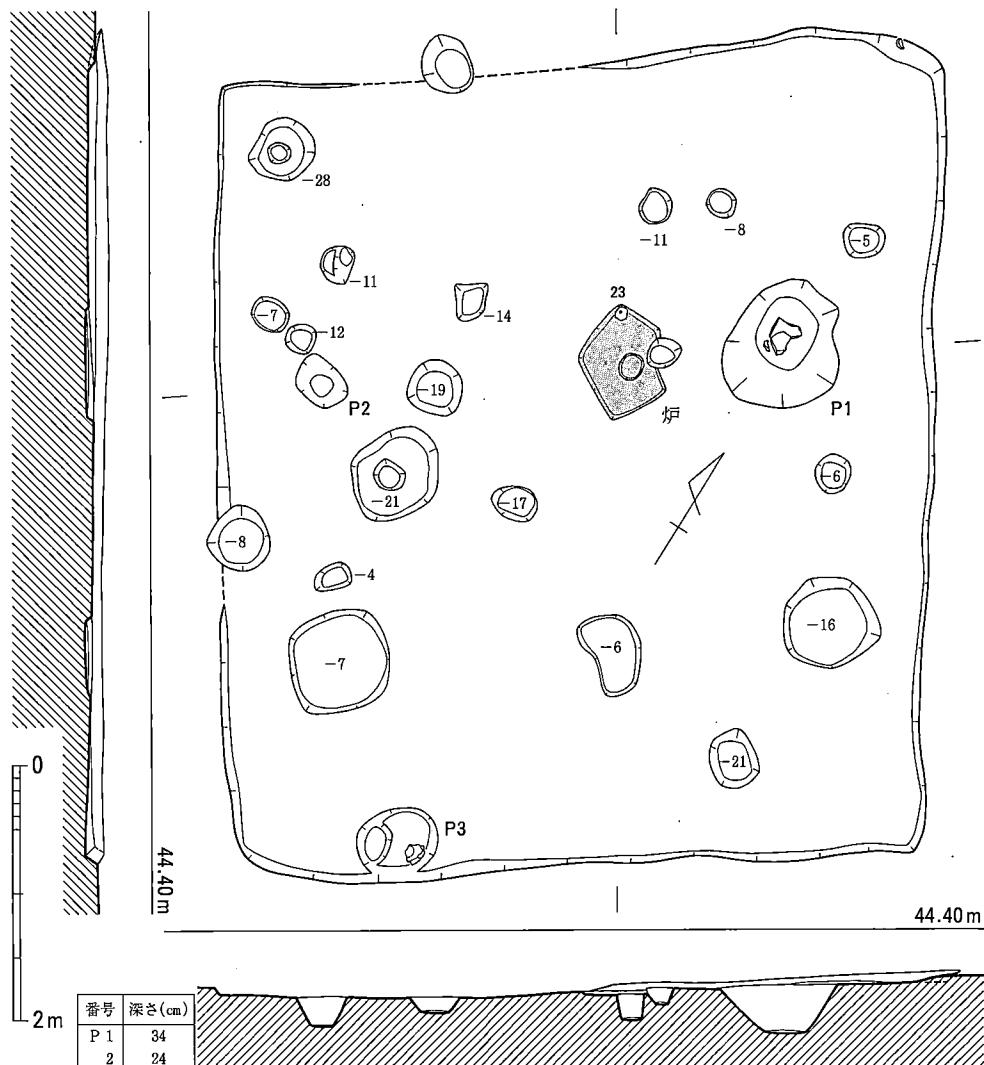
**石 器 (10)** 10は輝緑凝灰岩製の仕上げ砥石で、屋内土坑の出土。細長い形状をなし、長さ23.4cm、中央部幅4.6cm、厚さ2.0cmで、四周を砥面としている。重さ379.3gを測る。

#### 78号竪穴住居 (図版11-1、第28図)

調査区の中央部で、当竪穴住居も再調査を行った。77号竪穴住居の1m南東に位置し、7号溝を切っている。平面形は寸詰まりの長方形を呈し、東壁長6.30m、北壁長5.70m、壁高は東壁側で0.17mと遺存状態は悪い。炉と直線的に並ぶP1・2を主柱穴とした。柱間間隔は3.70mを測る。なお、P1内からは多量の土器が出土している。炉はP1側に寄っており、埋土中から甌(23)が出土した。ベット状遺構は竪穴内部では確認されていないが、壁高の遺存状態が悪いことから削平された可能性がある。屋内土坑については不詳。

#### 出土遺物 (図版35・56-2・58-1・2、第29~31・115・116・118図)

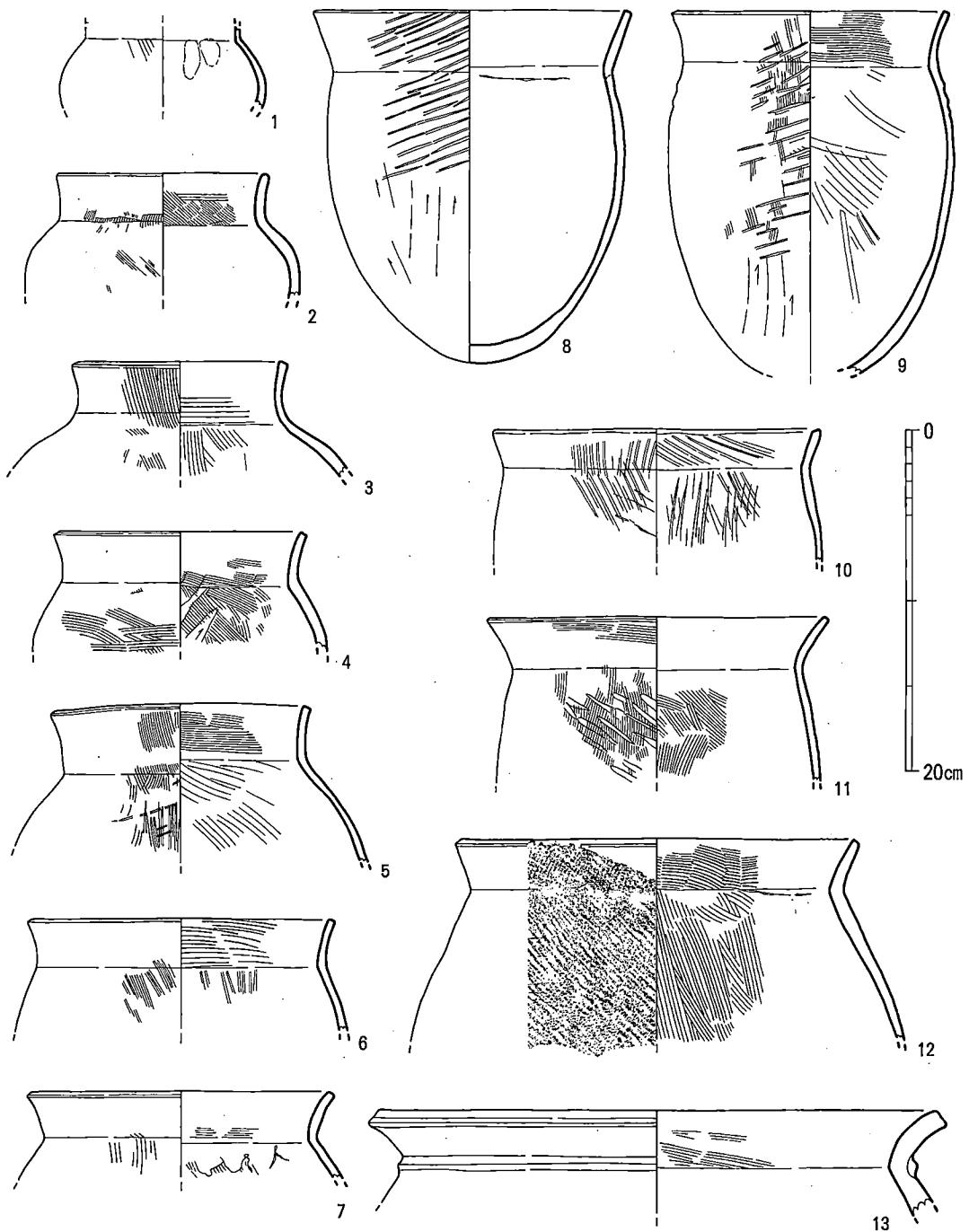
**土 器 (1~51)** 1~3は直口壺の口縁~肩部で、4・5も頸部が締まっているので直口壺としておく。6~13は甌で、6~9・11・12は「く」字形口縁甌。10の頸部の締まりは弱い。8は器



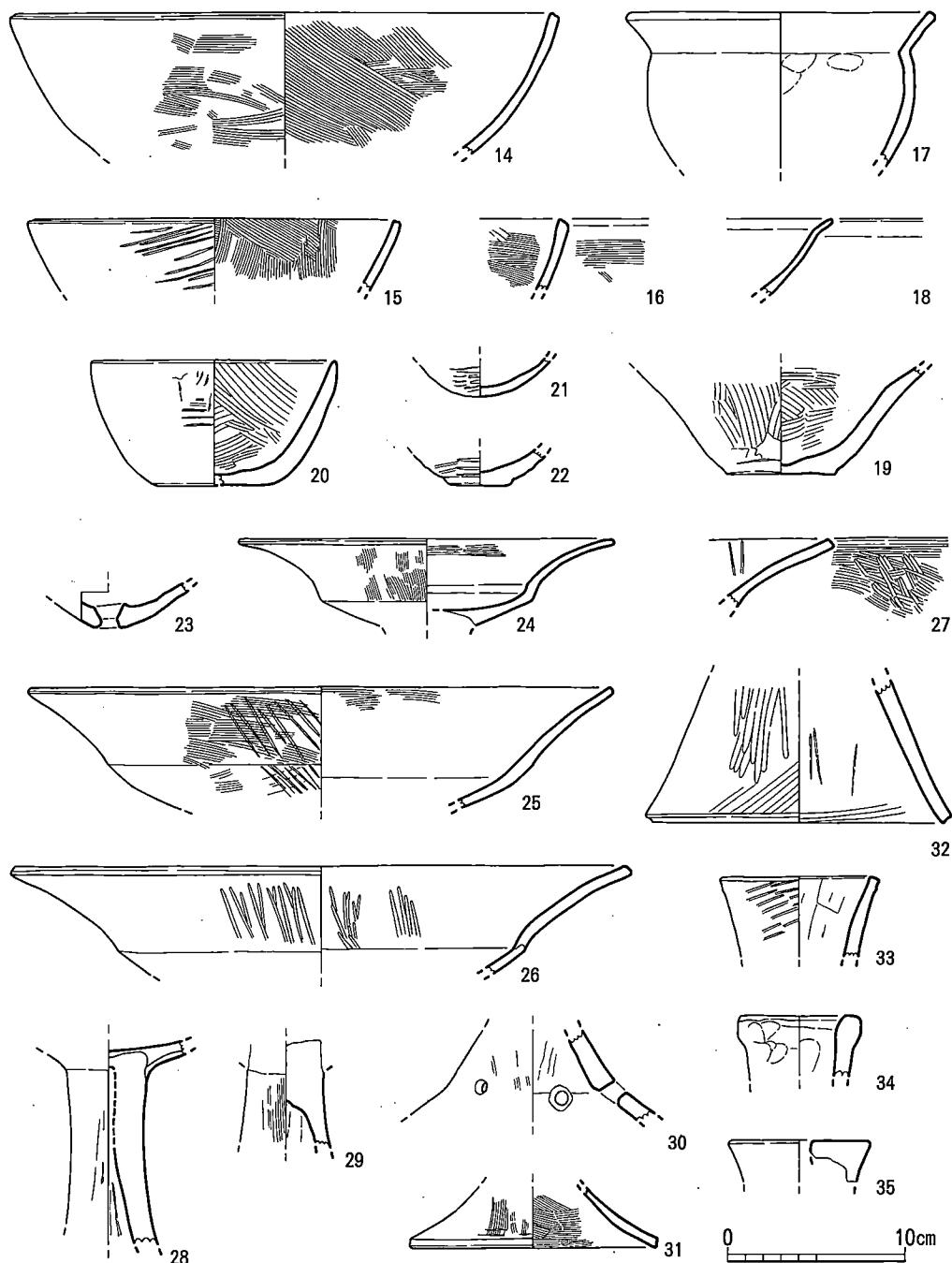
第 28 図 78号竪穴住居実測図 (1/60)

高20.7cm、口径18.3cmを測る。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目による。13は中型の甕で、頸部に三角凸帯を貼付する。14～19は鉢で、14～16は口縁がそのまま開くもの、17～19は口縁部が屈曲するもの。20～22は椀で、20・22は平底。23は甕の底部破片で、炉内の出土。24～31は高壺である。24～27は壺部で、口縁部は大きく開く。28・29は脚柱部破片で、30・31は脚部。30は焼成前穿孔の円孔を4ヶ所に施している。32～34は器台で、33・34は小型品。35は支脚の破片で、頭部中央には円孔を穿っている。

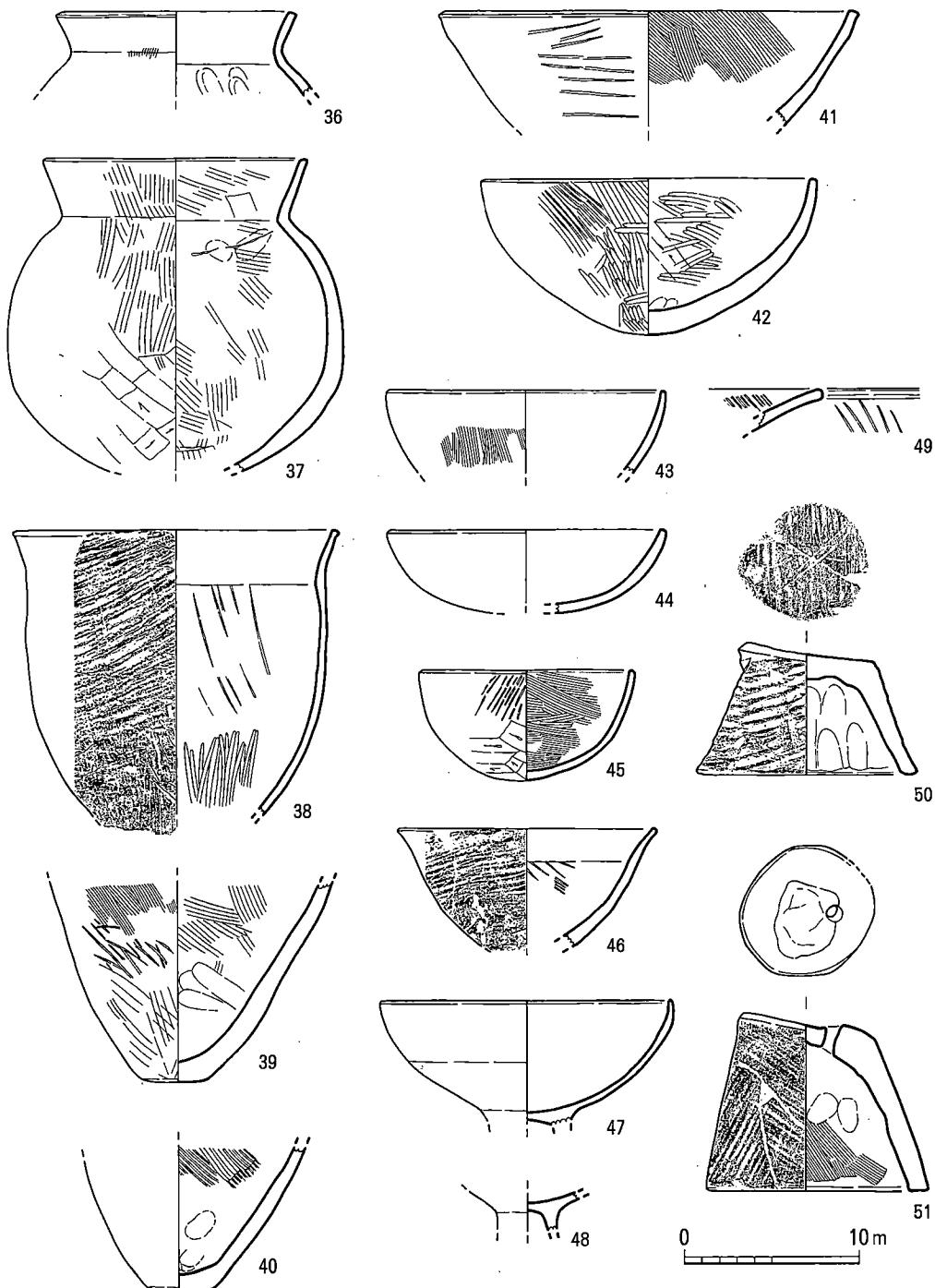
36～51は一次調査で土坑1 (P1)・土坑2 (P3)としていたピットから出土した土器であるが、整理段階で混合してしまい何れの土坑から出土したか判らなくなっているが、一応掲載し



第 29 図 78号竪穴住居出土土器実測図① (1/4)



第30図 78号竪穴住居出土土器実測図② (1/4)



第 31 図 78号竪穴住居出土土器実測図③ (1/4)

ておく。36・37は小型の広口壺である。38は「く」字形口縁甕であるが、頸部の締まりは弱い。39・40は口縁部を欠くが、器肉が厚く、胴部は直線的に開くことから鉢になろう。41・42は鉢。43～46は椀で、43・44は浅めの器形。46は口縁部が開くタイプ。47は台付椀の坏部破片で、48も台付椀になろう。49は高坏の口縁部小片。50・51は支脚で、51は上部に円孔を穿つ。また、51の外面には煤が付着している。

**石 器 (11・16)** 11は凝灰岩製の砥石で、下端を欠失する。残長5.0cm。16は砂岩製の砥石で、欠損品である。断面形は台形状をなし、残存長11.4cm、欠損部での幅8.2cm、厚さ3.7cm。

**土製品 (4・8)** 4はミニチュアの椀で、器高4.15cm、口径4.8cmを測る。内外面とも指オサエによる。8は柄杓形土製品の取手部破片。

#### 80号竪穴住居（第32図）

7号溝と4号通路との間に位置する。この付近は黒色土が厚く堆積し、遺構の重複が著しかった。また、80号竪穴住居の炉に伴う焼土をカマドと誤認し、古墳時代の住居として線引きを行い周囲を掘り下げたため、結果的に80号住居の竪穴部をとばしてしまった。

主柱穴はP1・2の2本で、柱間は3.7mを測る。炉は柱穴間のやや北側にあり、65×75cmの円形を呈し、よく焼けていた。ベット状遺構に関しては、前述の理由で不明。床面からは鉄斧・鎌などの鉄器が出土している。

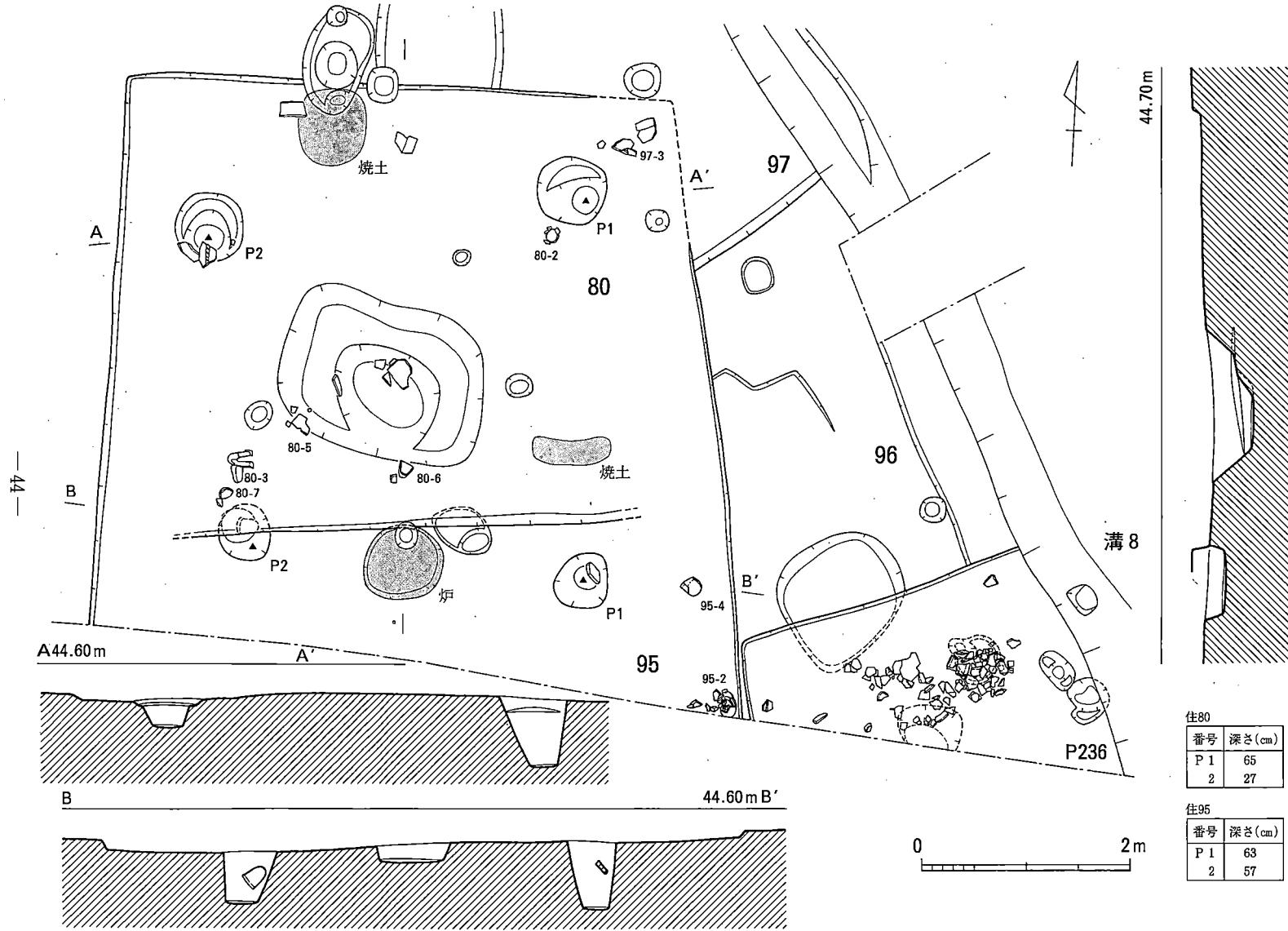
#### 出土遺物（図版36・56-3・57-2・3・58-3、第33・116～118図）

**土 器 (1～9)** 1・2は直口壺である。2はほぼ完形で、器高13.9cm、口径14.8cmを測る。3は「く」字形口縁甕で、器高21.9cm、復原口径19.3cm。4は平底の底部破片。5・6は鉢で、6は深めの器形である。7は椀で、内外面ともハケ目調整による。8は脚部を欠くが、台付椀になろう。9は高坏で、坏部と裾部を欠く。焼成前穿孔の円孔がみられるが、3～4ヶ所に穿孔していたものであろう。

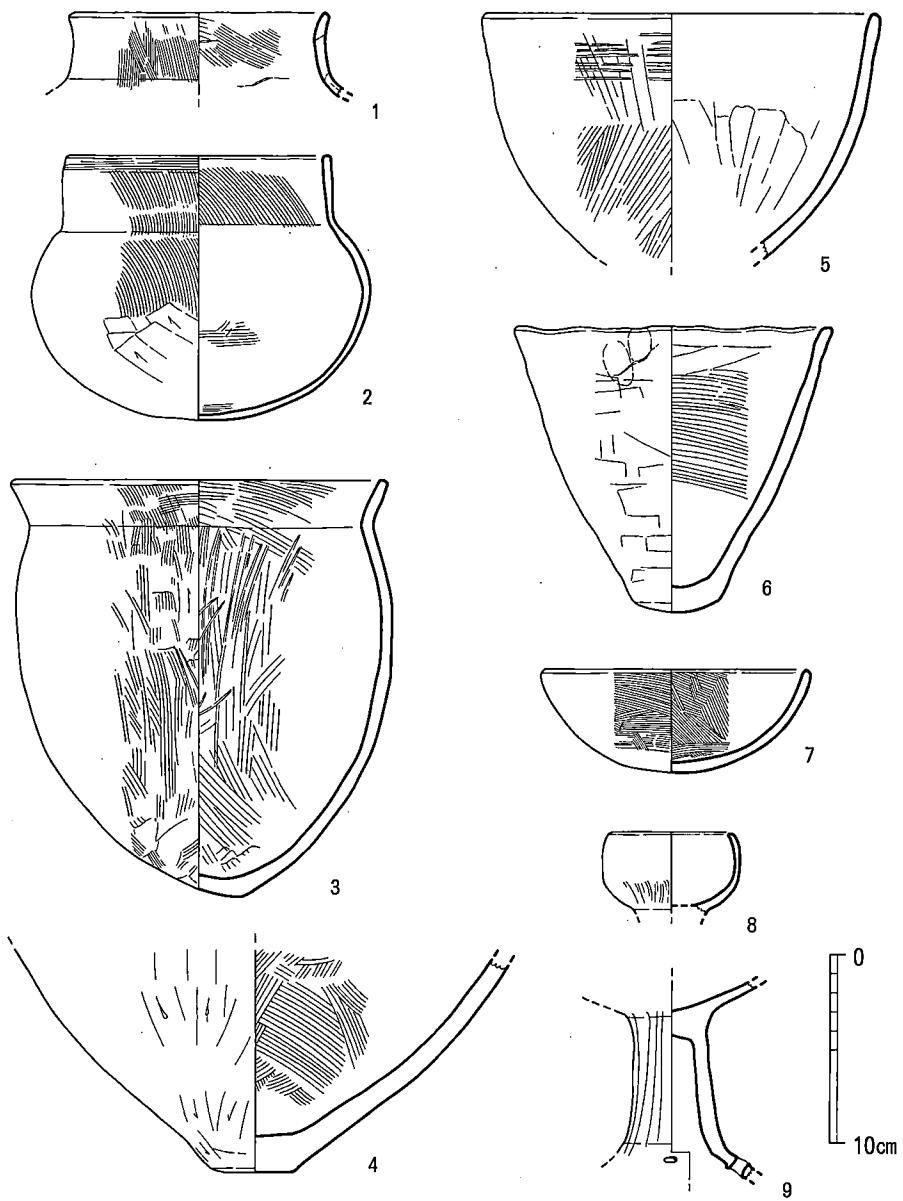
**石 器 (19)** 19は緑簾片岩の板状の扁平な素材の片面が使用によって磨耗し、中央部が窪み加減になる。一部欠損するが、長さ23.2cm、幅12.2cm、厚さ1.9cm、重さ828.0gを測る。作業台になるか。

**鉄 器 (4・5・9・17)** 4・5は袋状鉄斧で、4の長さ8.0cm、刃部幅4.5cm、袋部径1.9×4cm、重さ111.8g。5は長さ6.2cm、刃部幅3.4cm、袋部径1.4×2.9cm、重さ50.7gを測る。5は袋部に縦方向の木質が遺存しており、柄を装着した状態での出土。9は完形の鎌で、長さ20.5cm、基部幅4cm、重さ114.5gを測る。折返し部が斜めになっており、130度の角度で柄に付くものと思われる。17は鋤先で、長さ11.5cm、中央部幅5.7cm、重さ86.3g。刃部は外湾している。

**土製品 (14・15)** 14・15は弥生土器片利用の土版。14は径2.3×2.7cm、重さ6.0gで、外縁を擦っている。15は径3.9×4.3cm、重さ22.5gで、外縁を打ち欠いている。



第32図 80・95~97号竪穴住居実測図 (1/60)



第 33 図 80号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)

#### 87号竪穴住居 (図版11-2、第35図)

80号竪穴住居の東側に位置する。4号通路及び古墳時代の81・89号竪穴住居に切られ、88・96号竪穴住居を切っている。南北に長い長方形を呈し、短軸5.7m、長軸は8m程であろうか。壁高は東壁側で8cmと遺存状態は悪い。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は3.5mを測る。炉は4号

通路により削平されて存在しない。また、ベット状遺構がみられないのも削平によるものであろう。床面から浮いた状態で甕・椀が出土している。

#### 出土遺物（図版36、第34図）

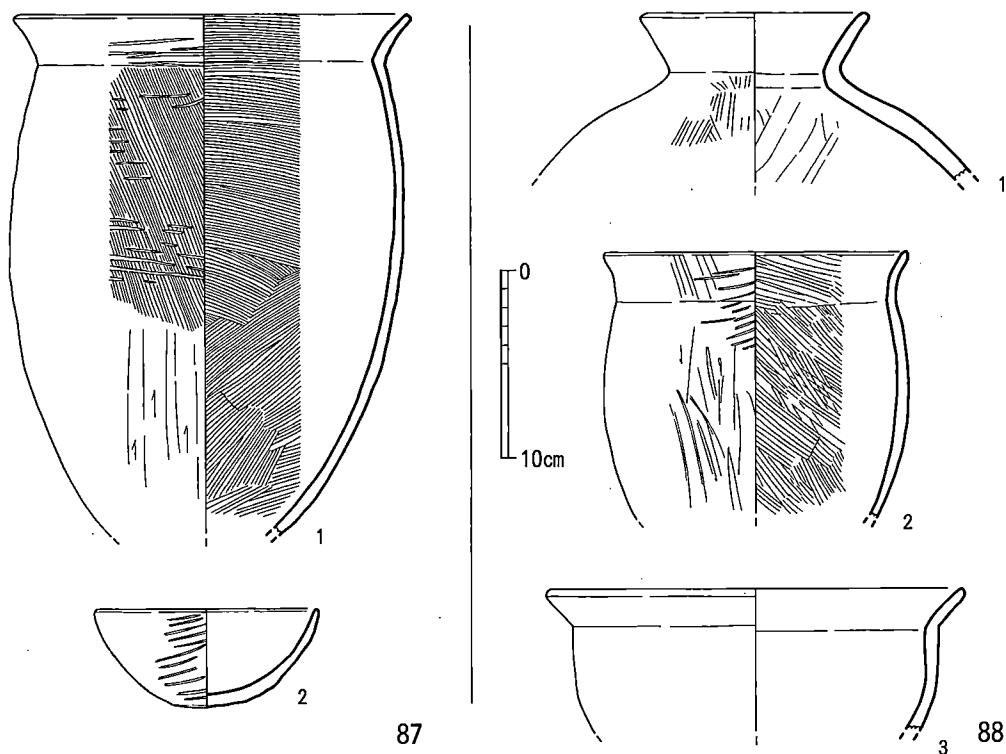
**土 器 (1・2)** 1は長胴の「く」字形口縁甕で、胴下半部外面は板状工具による擦過。2は椀で、若干の平底をなす。器高5.1cm、口径11.6cm。

#### 88号竪穴住居（図版11-2、第35図）

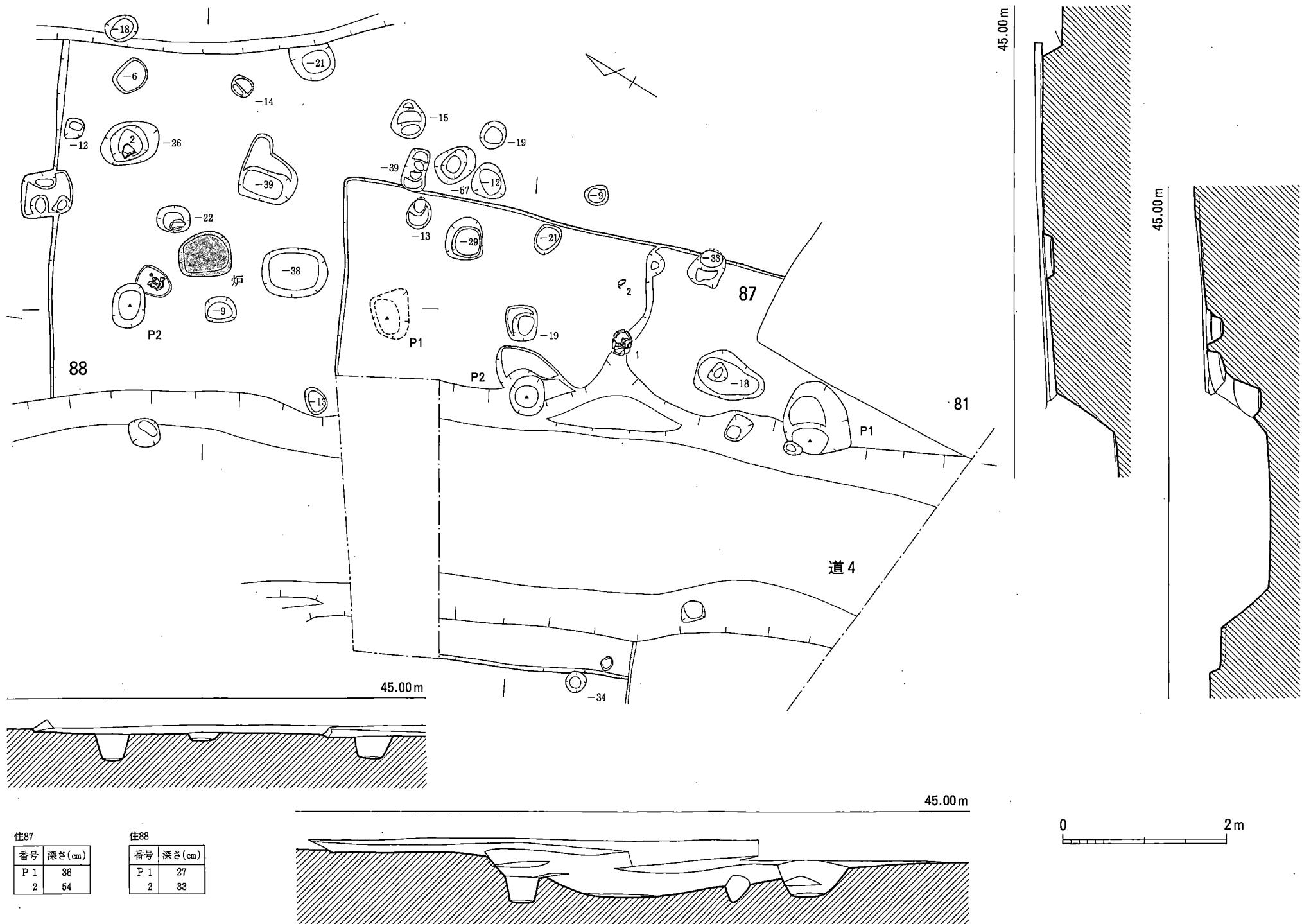
8号溝・4号通路に挟まれる格好で位置するため、北壁は遺存するものの規模は不詳。主柱穴が南北に配されることから当竪穴住居も南北に長い長方形を呈するものであろう。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は3.15mを測る。炉はP2寄りにあり、54×65cmの円形を呈する。ベット状遺構がみられないのは削平によるものか。2の甕はピット内から浮いた状態で出土した。

#### 出土遺物（第34図）

**土 器 (1~3)** 1は広口壺で、頸部は強く締まる。器肉が厚く、重量感がある。2は「く」字形口縁甕であるが、頸部の締まりは悪い。3は口縁部が屈曲する鉢。



第34図 87・88号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)



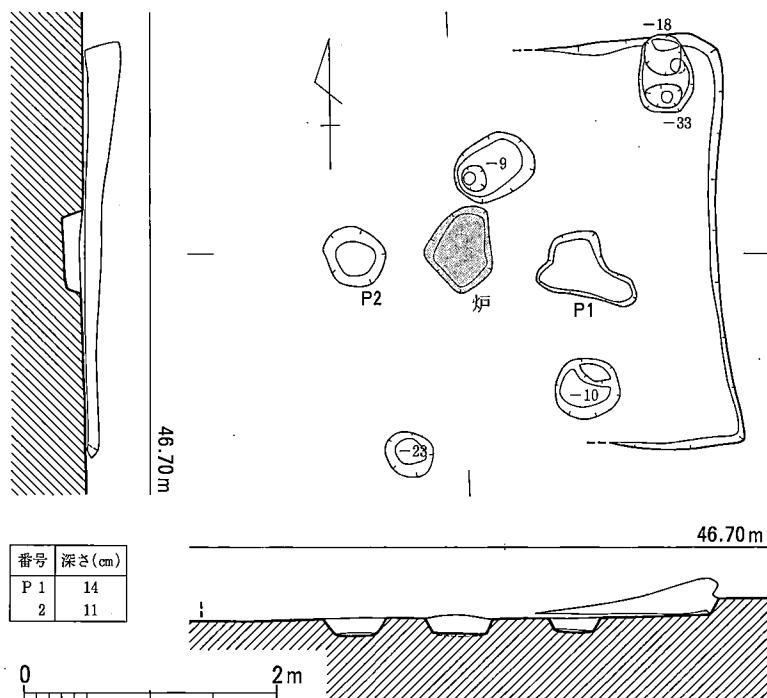
第35図 87・88号竪穴住居実測図 (1/60)

### 92号竪穴住居（図版12-1、第36図）

調査区の東寄りで8号溝の35m東側に位置する。壁高の遺存状態は悪く、東壁を残す程度である。東壁長は3.23m、壁高は北東コーナー部で0.28mを測る。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は1.8mを有する。炉は主柱穴の中央にあり、52×68cmの不正方形を呈する。屋内土坑・ベット状遺構については削平され判然としない。土器は小片が出土したのみで、図示に耐えない。

### 出土遺物（図版58-3、第118図）

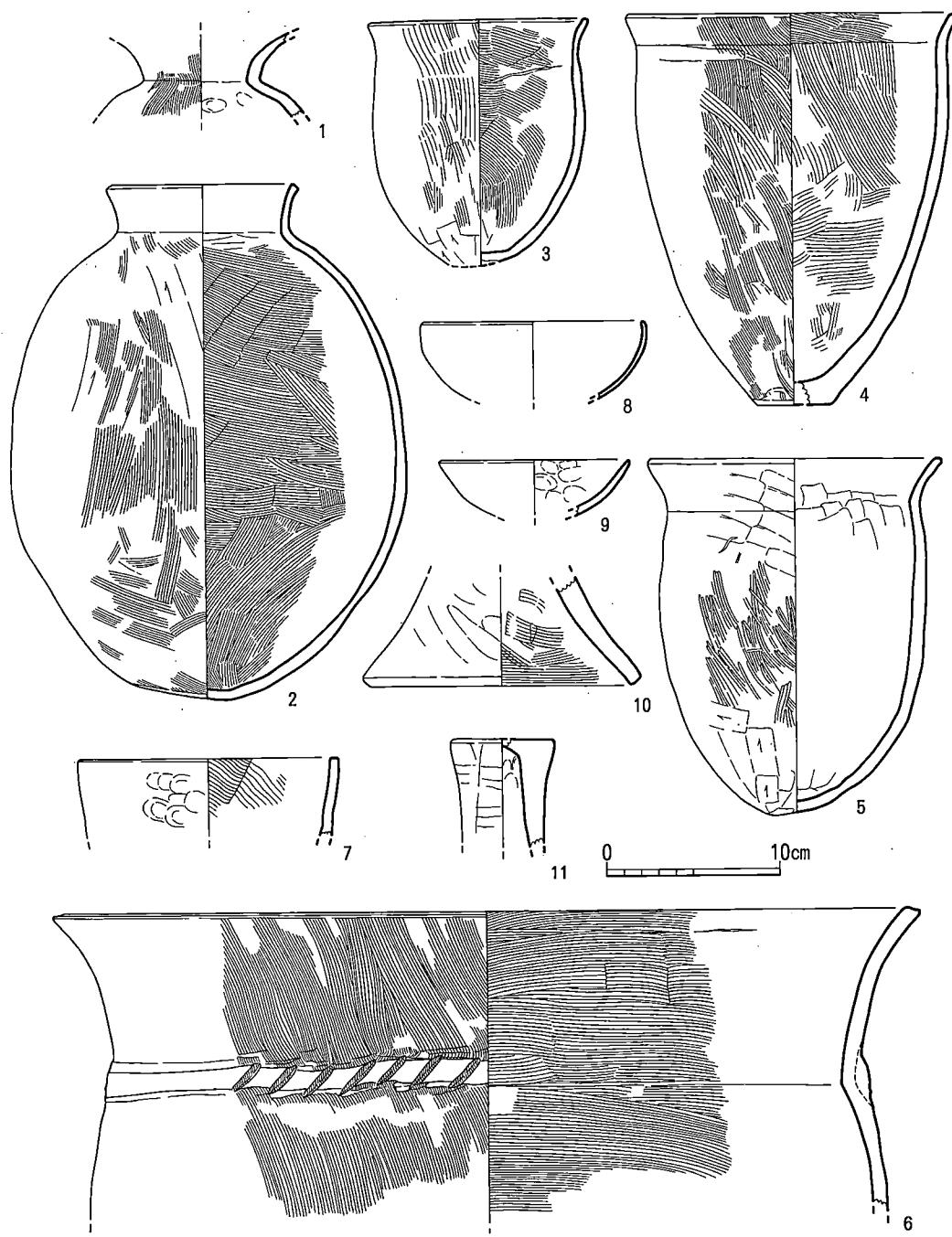
**土製品（16）** 16は弥生土器片利用の土版で、外縁は打ち欠いている。



第36図 92号竪穴住居実測図 (1/60)

### 95号竪穴住居（第32図）

80号竪穴住居の南側で、同住居の床面下部より検出した。96・97号竪穴住居を切っている。実線で示したラインは、当初95号のプランとしていたものであるが、主柱穴の配置から考えて無理があり、別遺構が絡んでいる可能性がある。主柱穴はP1・2の2本で、柱間は3.40mを有する。しっかりと掘り込まれた穴で、深さは0.4~0.6m程もある。炉は主柱穴間の中央にあり、70×80cmの円形を呈する。屋内土坑・ベット状遺構については判然としない。また、柱穴の北側には長軸1.0m、短軸0.74mの隅丸長方形の土坑があるが、当住居跡に関連するものか不明。P-2内から図示した5の甕が浮いた状態で出土した。



第 37 図 95号堅穴住居出土土器実測図 (1/4)

### 出土遺物（図版36・58-1、第37図）

**土 器（1～11）** 1は広口壺で、口縁端部を欠くが、かなり開くようだ。2は長胴の直口壺で、頸部はよく締まる。器高29.5cm、口径10.4cm。内外面ともハケ目調整。3～5は「く」字形口縁甕で、3の頸部の締まりは悪い。4の底部は肉厚の平底である。5は外面にミガキを施している。6は大甕の口縁部破片で、口径は48.6cmに復原した。頸部には幅広の扁平な凸帯を貼付し、ハケ状工具によるキザミ目を付している。7は鉢の口縁部小片。8・9は浅めの椀である。10は器台の裾部破片で、11は小型の支脚片。

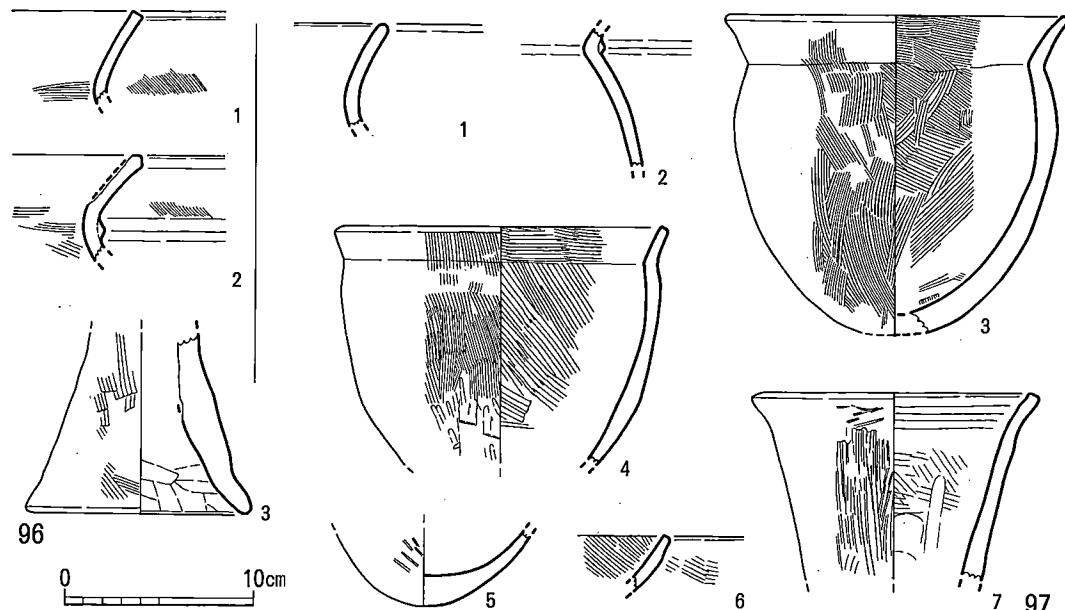
**土製品（1・5）** 1はミニチュアの甕で、器高4.8cm、口径4.7cm。口縁部は大きく開く。5は鉢のミニチュア品で、器高2.3cm、口径4.9cmを測る。

### 96号竪穴住居（第32図）

80・87・95・97号竪穴住居、8号溝、P-236に切られており、主柱穴・炉は判然としない。或は住居ではない可能性が強い。

### 出土遺物（第38図）

**土 器（1～3）** 1・2は「く」字形口縁甕の口縁部小片で、2は頸部に三角凸帯を貼付する。3は器台の脚部破片で、肉厚品。



第38図 96・97号竪穴住居出土土器実測図（1/4）

### 97号竪穴住居（第32図）

80・95号竪穴住居、8号溝に切られて位置する。竪穴住居としたものの主柱穴・炉も判然とせず、住居ではない可能性が高い。床面から浮いた状態で土器が出土している。

### 出土遺物（図版36・58-2、第38図）

**土 器** (1~7) 1は広口壺の口縁部小片。2は壺の頸部破片で、頸部に三角凸帯を貼付する。3・4は「く」字形口縁甕で、ともに肉厚品。5・6は椀の小片。7は器台の口縁部破片。

**石 器** (12) 12は輝緑凝灰岩製の砥石の小片で、両端部を欠く。幅1.7cm、厚さ0.4cm。

**土製品** (9) 9は柄杓形の土製品で、先端を欠く。取手に比し、坯部は大きめ。

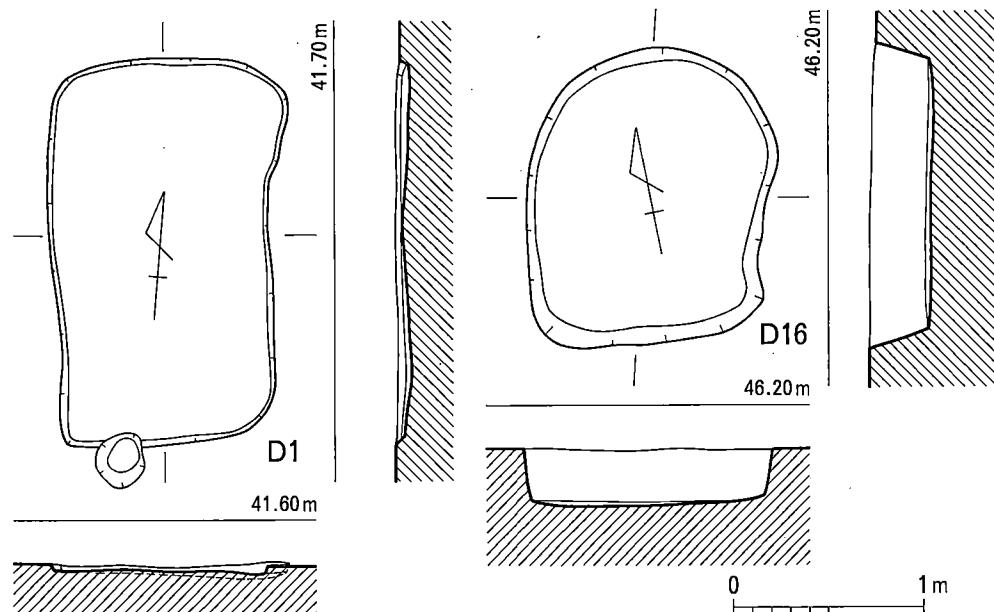
## (2) 土 坑

### 1号土 坑（図版12-2、第39図）

西端部住居群と73号竪穴住居の中間に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸2.05m、短軸1.12mを測る。壁高は4cmと著しい削平を受ける。埋土は黒褐色土で、弥生土器小片が出土した。

### 16号土 坑（第39図）

8号溝の20m東側に位置する。平面形は不整長円形を呈し、長軸1.56m、短軸1.30m、深さ0.32mを測る。埋土中から弥生土器片が出土しているが、図示に耐えない。



第39図 1・16号土坑実測図 (1/40)

### (3) 溝

調査区の西侧から中央部にかけて4条検出した。

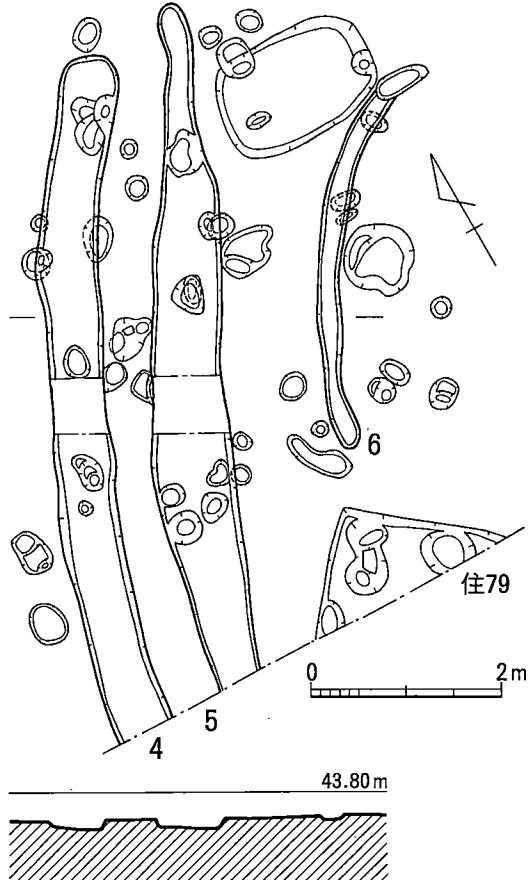
#### 4号溝（第40図）

調査区の西侧で、77号竪穴住居の26m西側に位置する。丘陵を北東—南西方向に走る小規模な溝で、長さ7.2m分を調査した。南端部での幅60cm、深さ7cmを測る。また、鎌倉時代の5号溝と併走しているが、埋土中からは弥生土器が出土しているので、一応当該期に含めたが、後出する可能性がある。

なお、出土した土器は小破片であり、図示に耐えないので割愛した。

#### 6号溝（第40図）

調査区の西侧で、4号溝の2.5m東側に位置する。北東—南西方向に緩く弧を描く。当溝も小規模なもので、長さ3.8m、中央部での幅24cm・深さ10cmを測る。埋土中から弥生土器の小片が出土しているが、図示に耐えない。



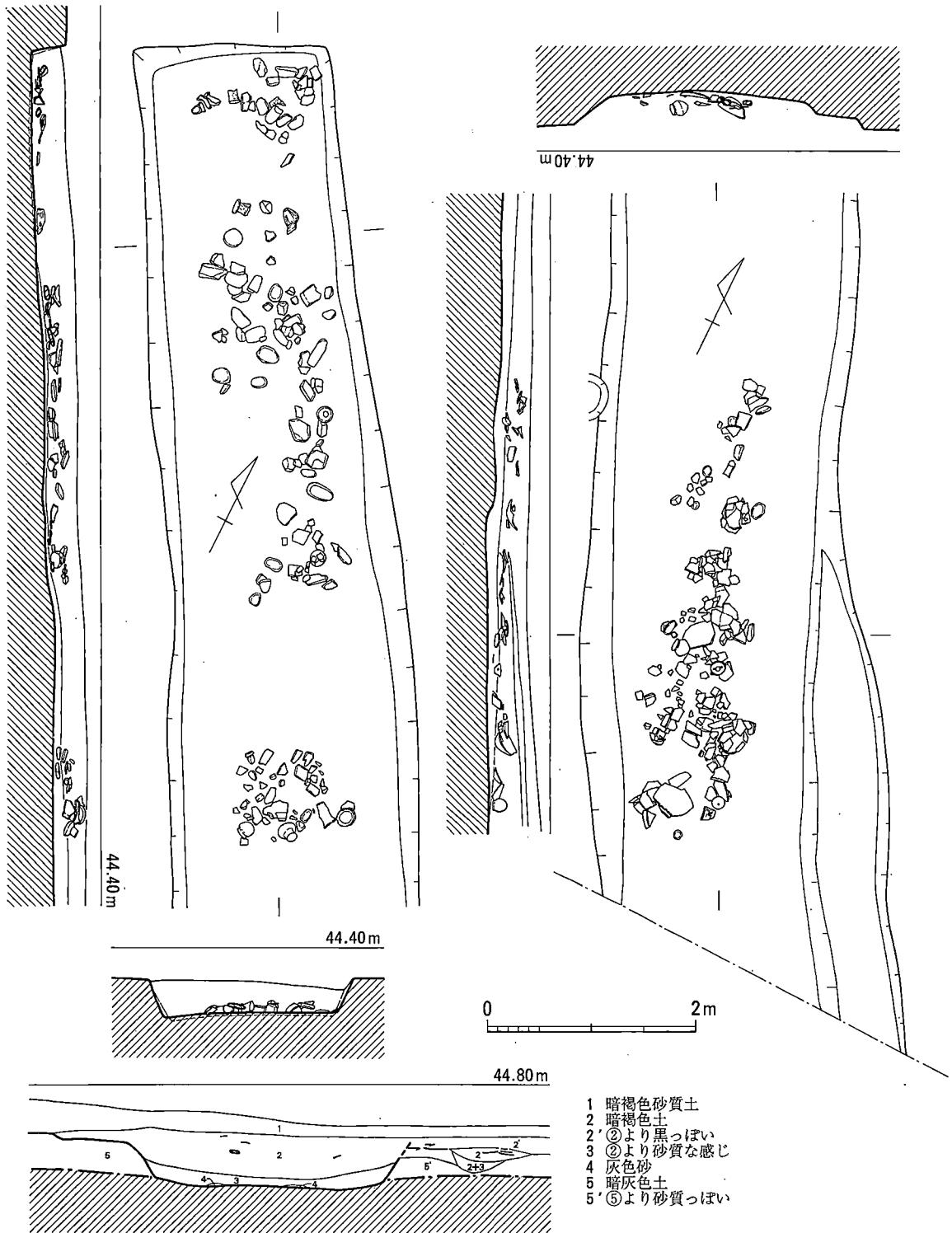
第40図 4~6号溝実測図 (1/80)

#### 7号溝（図版13・14、第41図）

調査区の中央部に位置し、78号竪穴住居に切られている。丘陵を北西—南東方向に走る大溝で、長さ16.4m分を調査した。溝の北端は竪穴住居付近で終焉しているが、溝の南側延長線側には等高線が通路状に巡っているので、或いは通路として連続するものかもしれない。北端部の幅1.83m、深さ0.35mで、断面形は逆台形を呈する。南端部は二段になっており、上段幅2.75m、下段幅2.10m、上段までの深さ0.50mを測る。溝内からは底面より10~20cmほど浮いた状態で多量の土器、円礫が出土しており、溝の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

#### 出土遺物（図版37~39、56-2・58-3、第42~51・115・118図）

**土 器** (1~91) 1~18は壺で、1は小型品で、2~12は中型品。1は直口壺で、底部を欠く。



第 41 図 7号溝遺物出土状況・土層断面実測図 (1/60)

2・5は直口壺で、2は肩部以下を欠く。5の胴下半部外面は籠状工具によるケズリ状の強い擦過。器高13.3cm、口径11.0cmを測る。3・4は長頸壺で、3の口縁部は開くが、4は直立する。3は内外面とも丁寧なミガキ調整。器高は3が15.6cm、4は16.7cm、口径は3が10.5cmで、4は9.8cmを測る。7～10は短頸壺で、7の口縁部はやや内湾する。器高は5が13.3cm、7は13.9cm、8は12.7cm、9は14.7cmで、口径は5が10.9cm、7は10.7cm、8は13.5cm、9は11.2cmを測る。6・11～13は広口壺で、口縁部は「く」字形に開く。また、13は頸部に籠状工具によるキザミ目を付した「コ」字形凸帯を貼付する。14～18の形状は甕ともつかないが、口縁部が大きく開き、頸部がよく締まり球状の胴部を有することから壺とした。14～16は底部を欠き、17は口縁部を欠く。18は頸部に三角凸帯を貼付している。調整は外面タタキ目の後ハケ目、内面はハケ目調整による。口径は14が14.2cm、15は15.6cm、16は19.0cm。

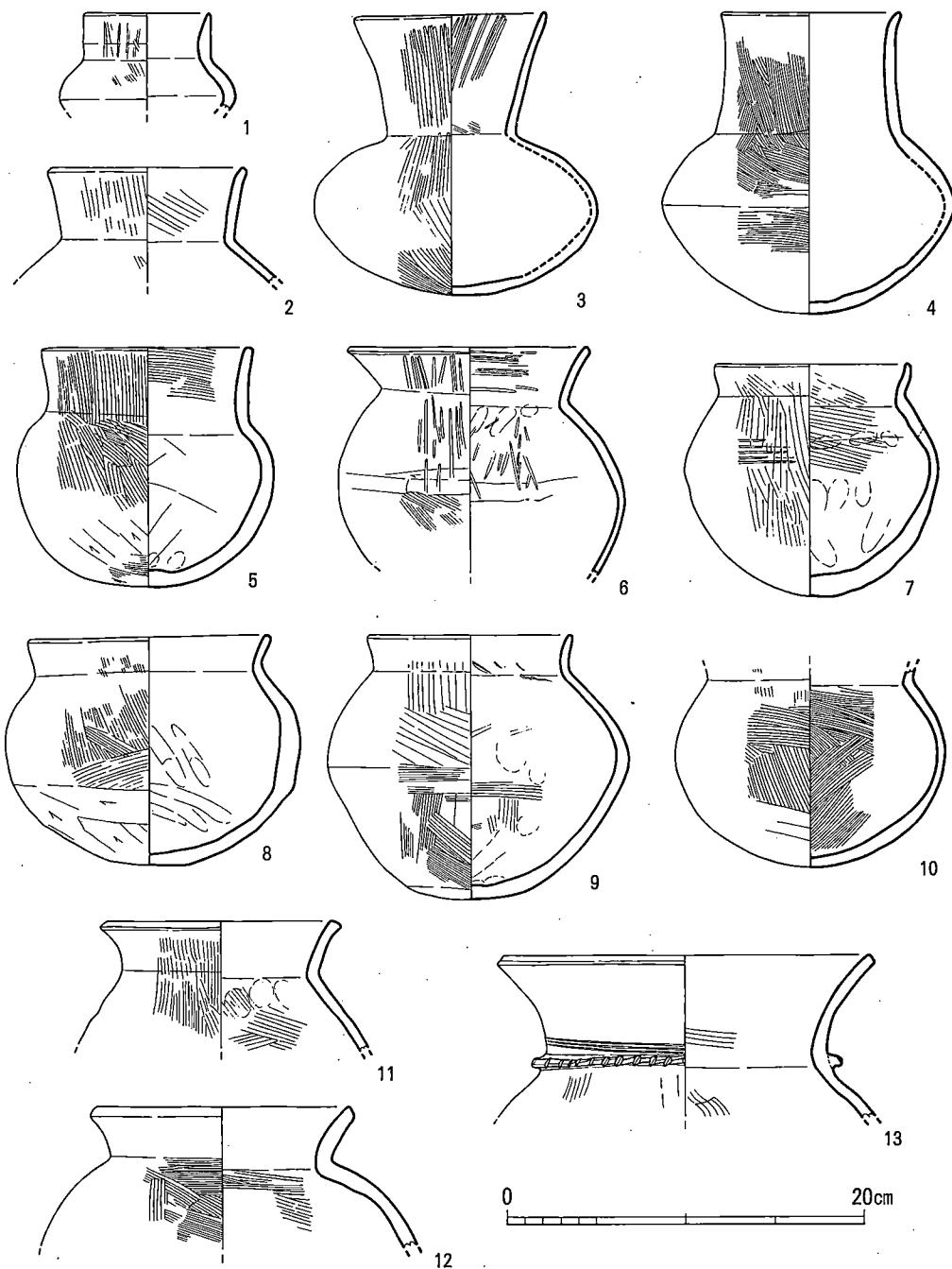
19～43は甕で、19～29は口径が15cm前後の小型品。30～33は口径が20～23cmの中型品で、35～39・42・43は口径が25～30cmの大型品。19は頸部に締まりがなく、口縁部は如意状をなす。20も締まりが悪く、口縁部は直立する。21は肉厚の甕で、底部の厚さは1.7cmと重量感がある。器高17.0cm、口径12.7cmを測る。22～33・35～43は「く」字形口縁甕であるが、23の頸部の締まりは悪く、25の頸部はよく締まっている。調整は外面タタキ目の後ハケ目、内面ハケ目を主体とするが、19・20・23～26・34の胴下半部外面は籠状工具による擦過を施している。24は器高20.5cm、口径16.6cmを測る。40・41は底部破片で、40の外底面には籠先でF字状の記号？を描いている。43は頸部に三角凸帯を貼付している。

44～47は大甕で、44は頸部と胴下半部に太めの三角凸帯を貼付している。45は頸部に三角凸帯を、胴下半部には扁平な「コ」字形凸帯を貼付している。46・47は胴部破片であるが、46は胴下半部に「コ」字形凸帯を、47は頸部にハケ状工具によるキザミ目を付した「コ」字形凸帯を貼付している。45は器高57.3cm、口径35.4cm、底径6.6cmを測る。調整は何れも外面タタキ目の後ハケ目、内面ハケ目による。

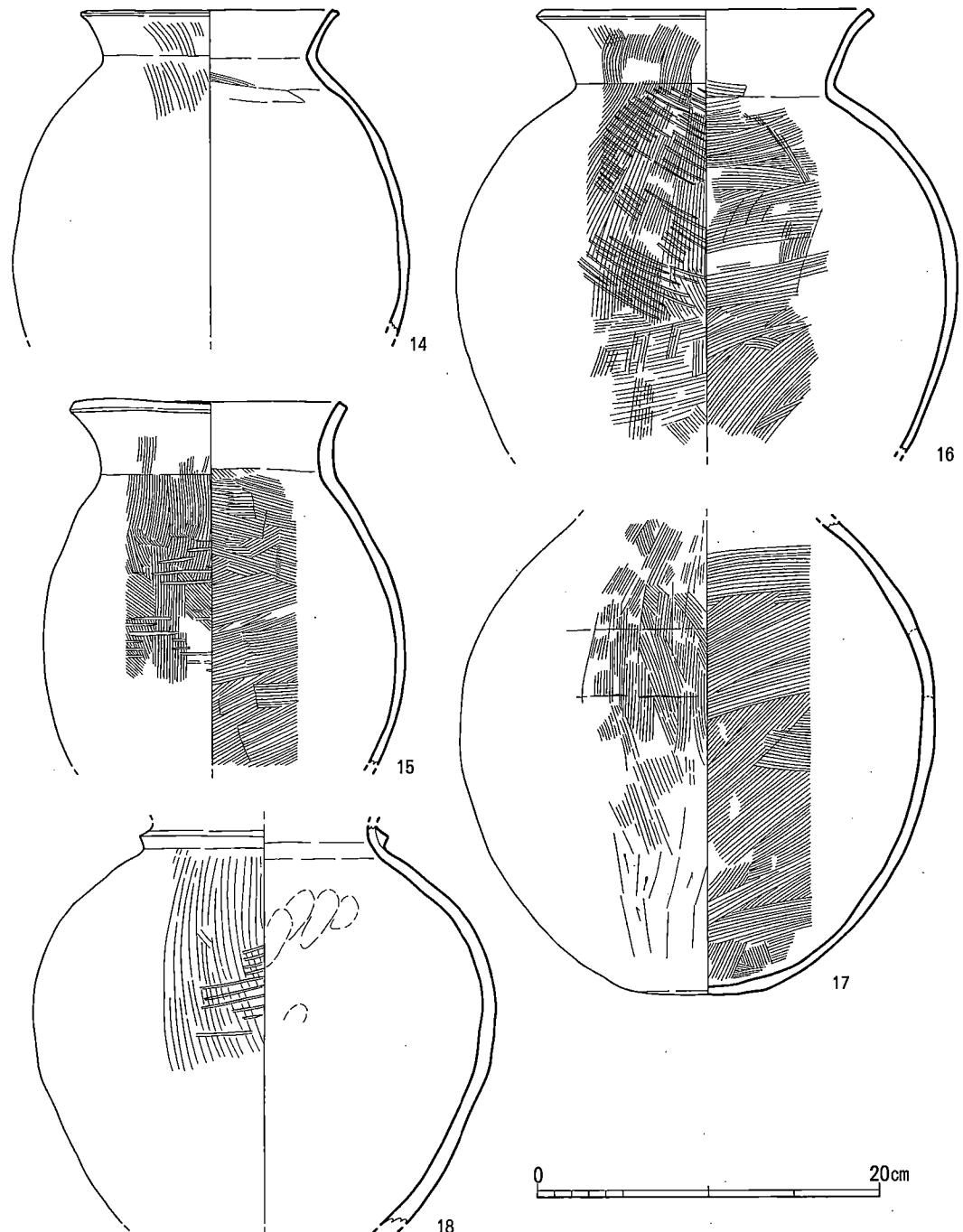
48～51は鉢で、48は口縁部が屈曲するタイプ。49～51は口縁部が内湾するもので、50は深めの器形をなし、底部は平底風である。器高は48が9.4cm、50は18.5cmで、口径は48が18.3cm、50は15.6cm。52～55は台付鉢の脚台部破片で、脚径は52が13.2cm、53が14.3cmを測る。

56～63は椀で、56・57は浅めの器形。58～63は深めの器形で、60・63は小型品。58・62の底部は丸く、57・60・61・63の底部は平底をなす。器高は59が7.8cm、62は7.4cmで、口径は59が11.8cm、62は8.8cmを測る。

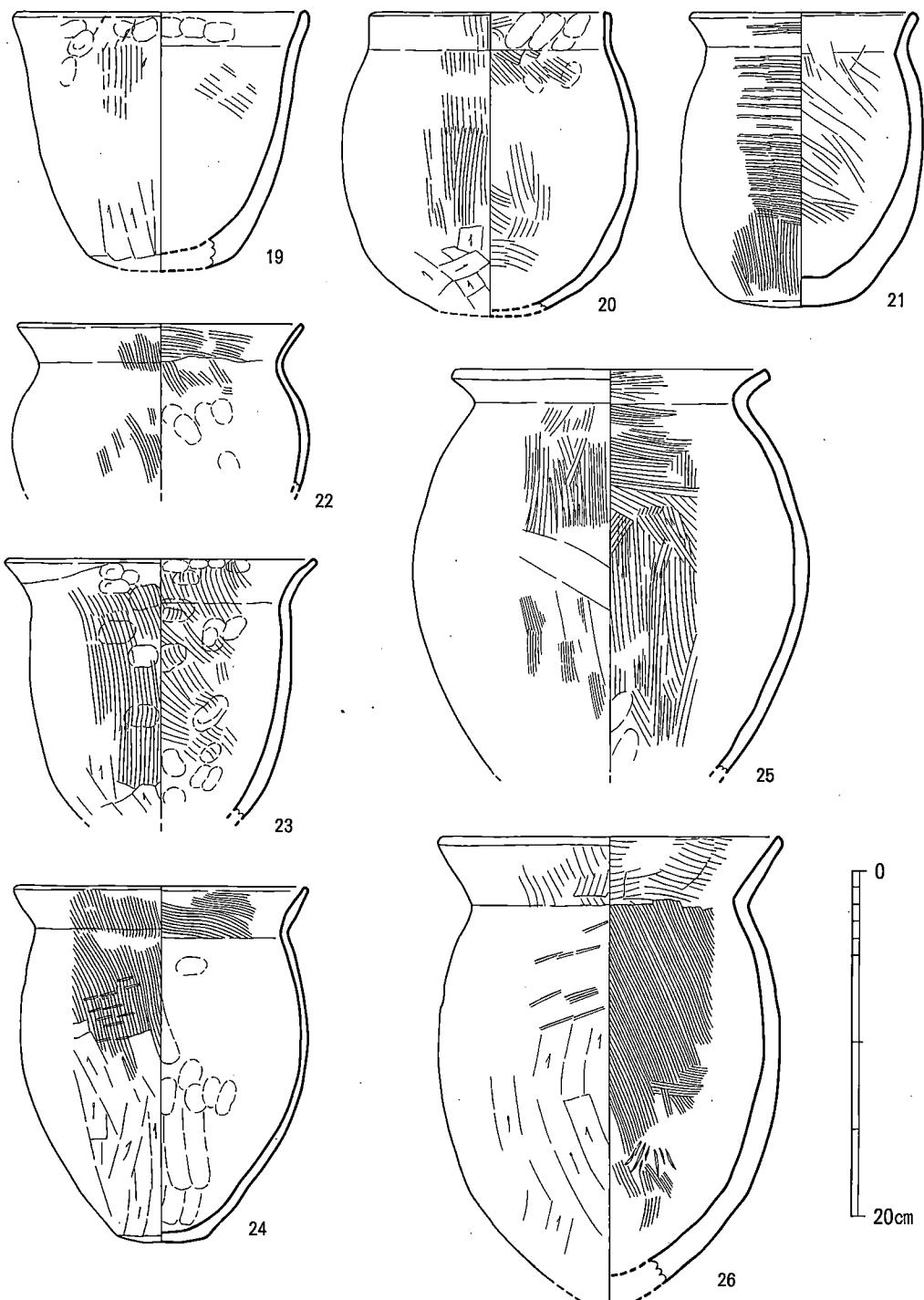
64～75は高壺で、64～68・73～75が壺部で、69・70が脚柱部、71・72は脚裾部の破片。64～67の壺部は一旦屈曲してから大きく外反する。口径は64が32cm、65が32.2cm。73は深めの壺部から口縁部が伸びるタイプで、74の口縁部は短く外反する。75の口縁部は内側に短く屈曲する。何れもミガキ調整を行っている。71は二段に円孔が穿たれるが、72とも破片であるため何ヶ所



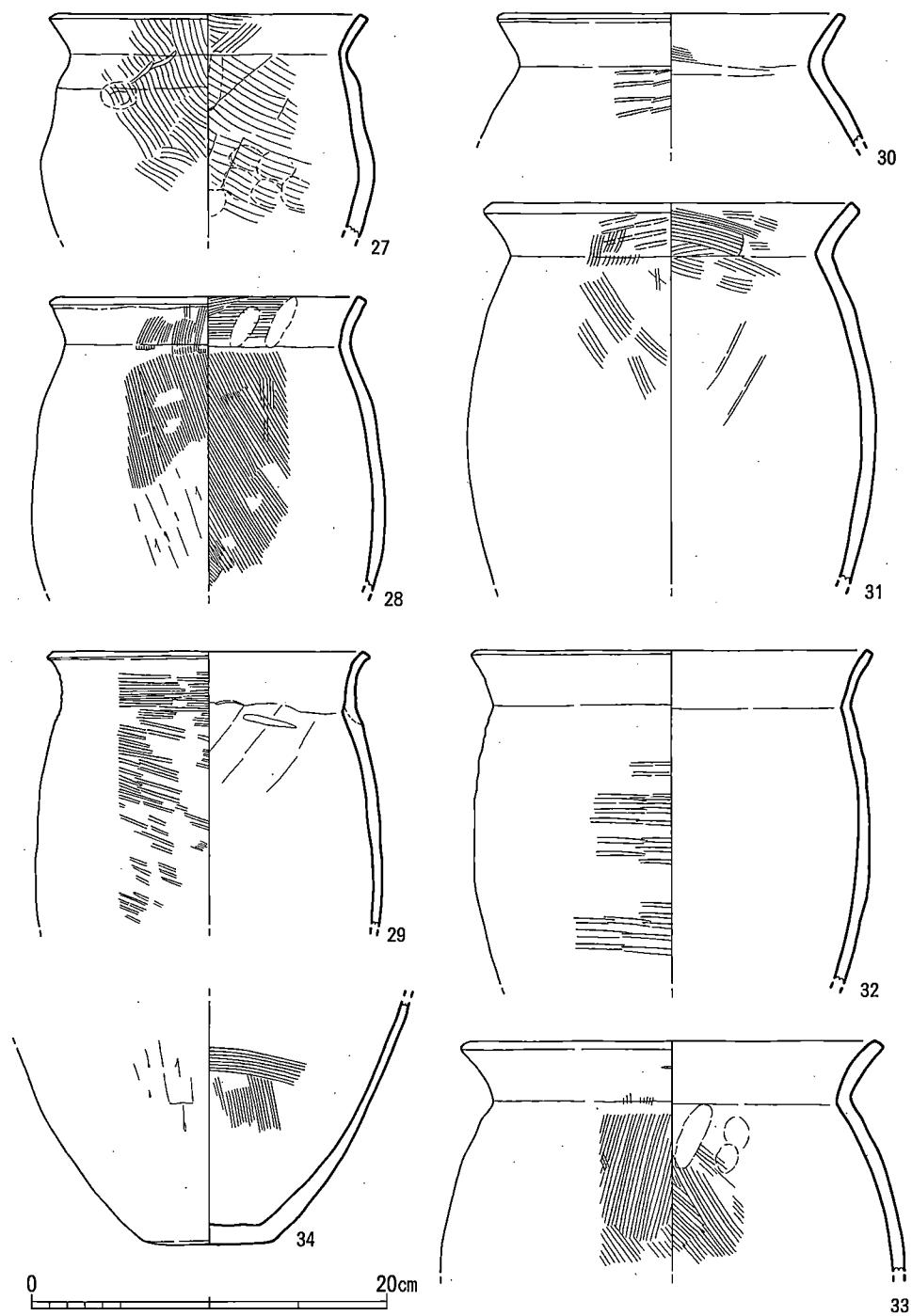
第 42 図 7号溝出土土器実測図① (1/4)



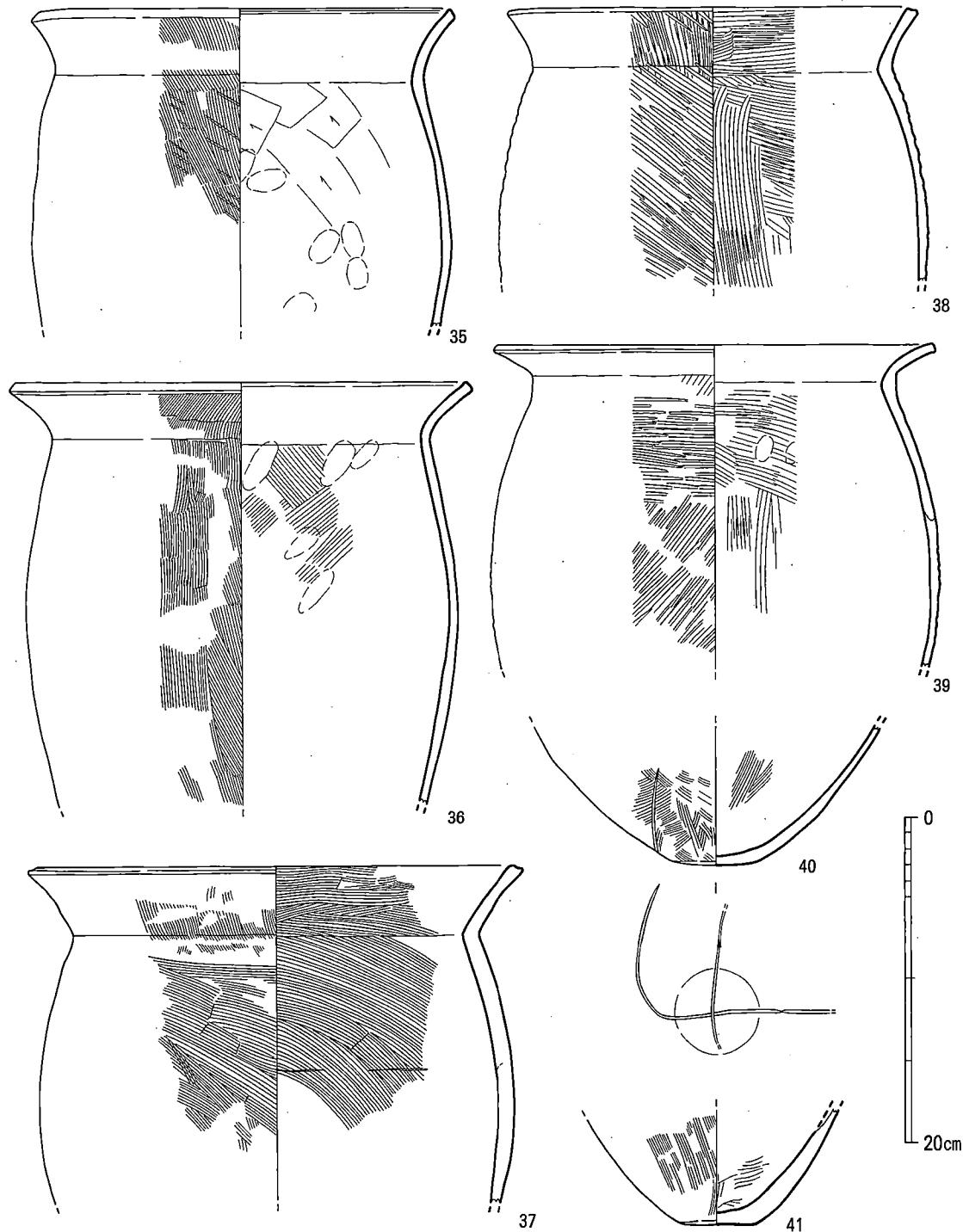
第 43 図 7号溝出土土器実測図② (1/4)



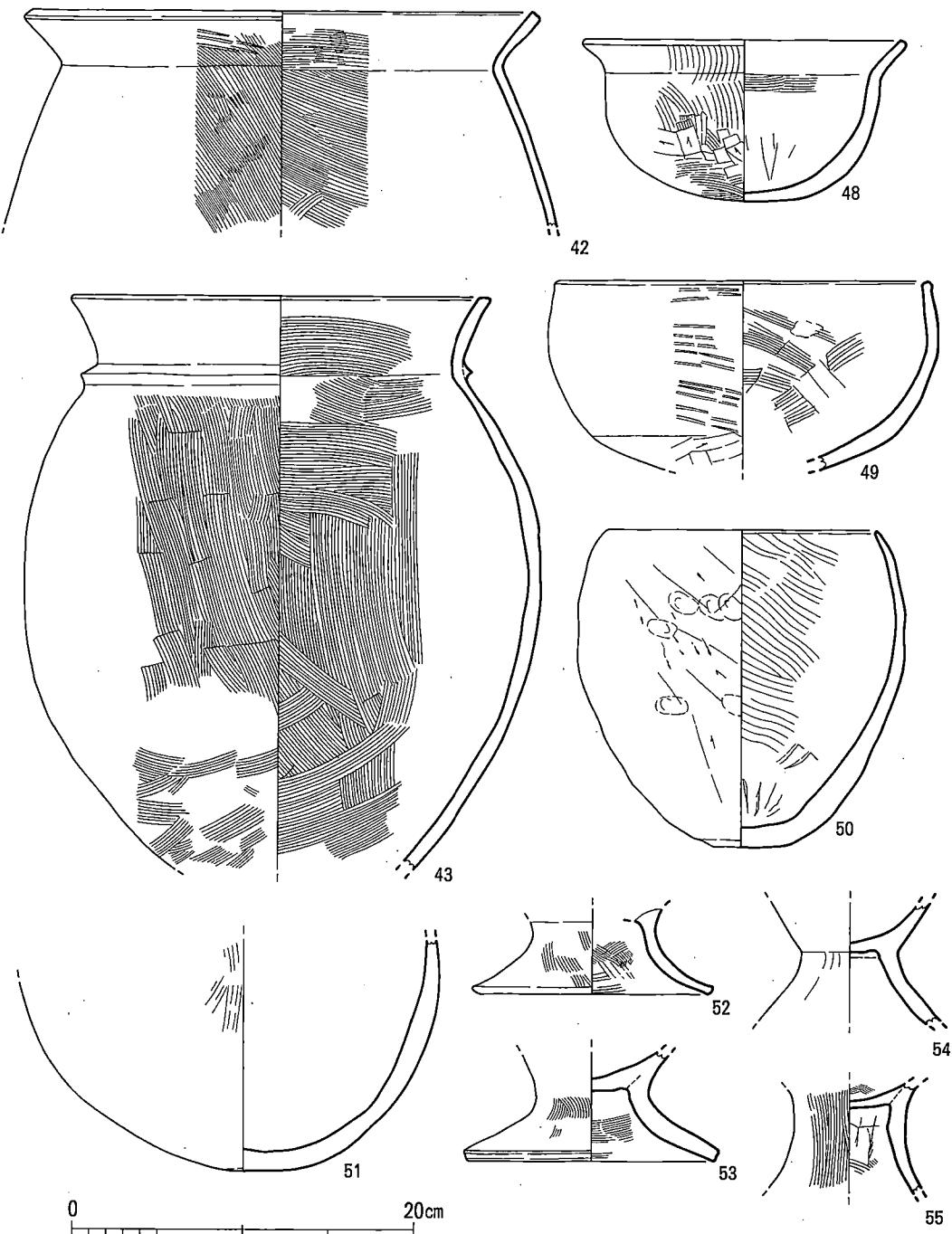
第 44 図 7号溝出土土器実測図③ (1/4)



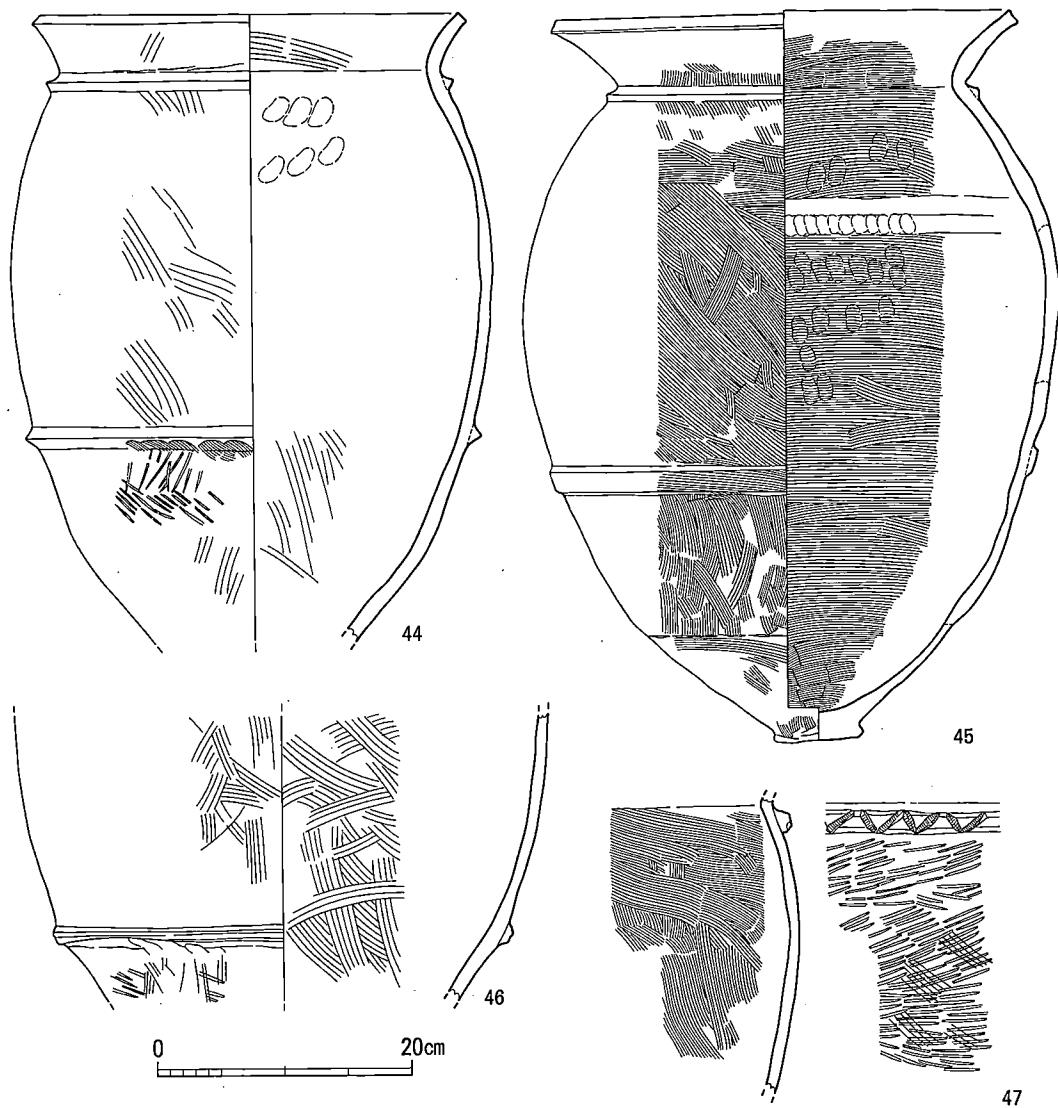
第 45 図 7号溝出土土器実測図④ (1/4)



第 46 図 7号溝出土土器実測図⑤ (1/4)



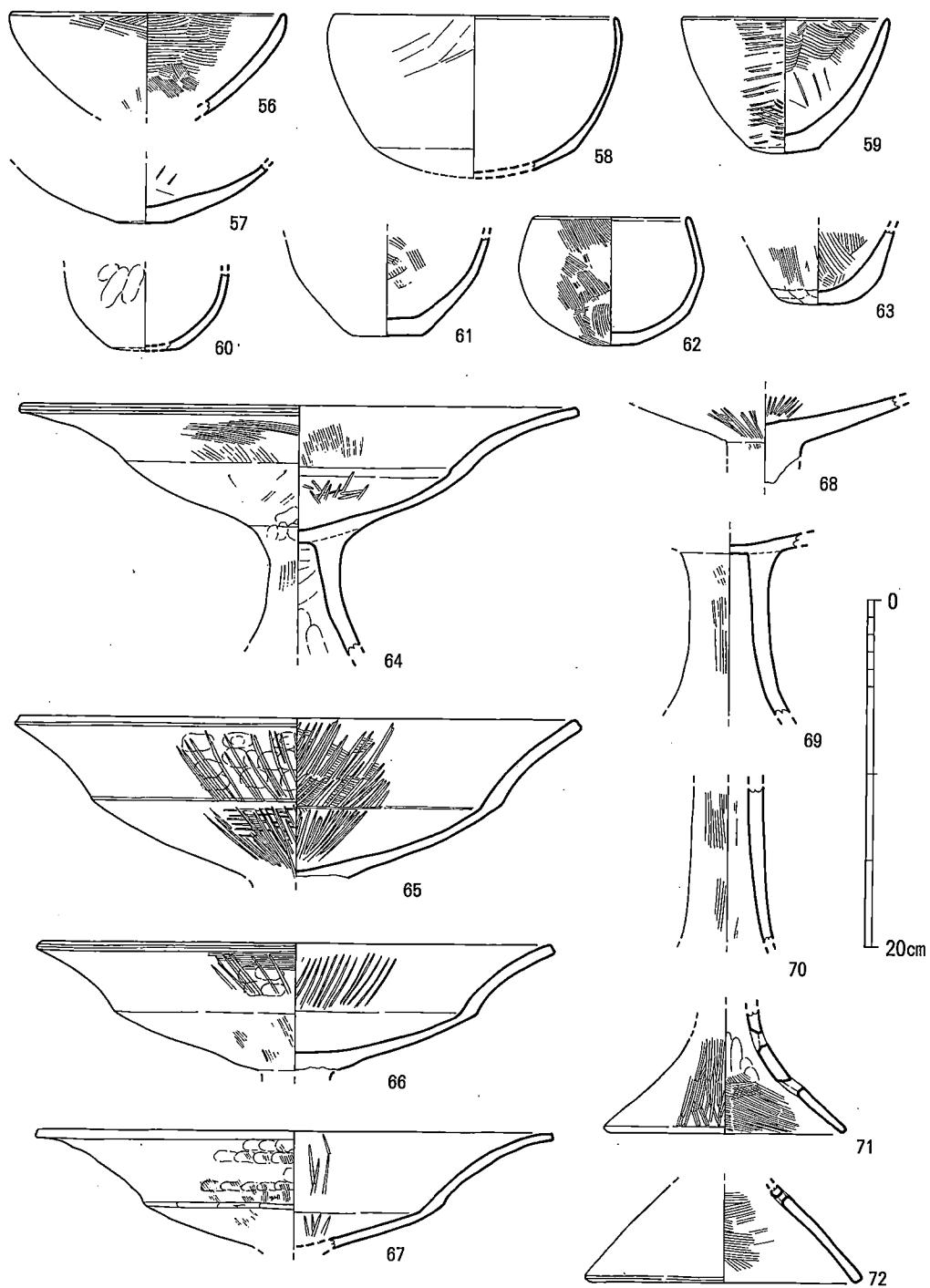
第 47 図 7号溝出土土器実測図⑥ (1/4)



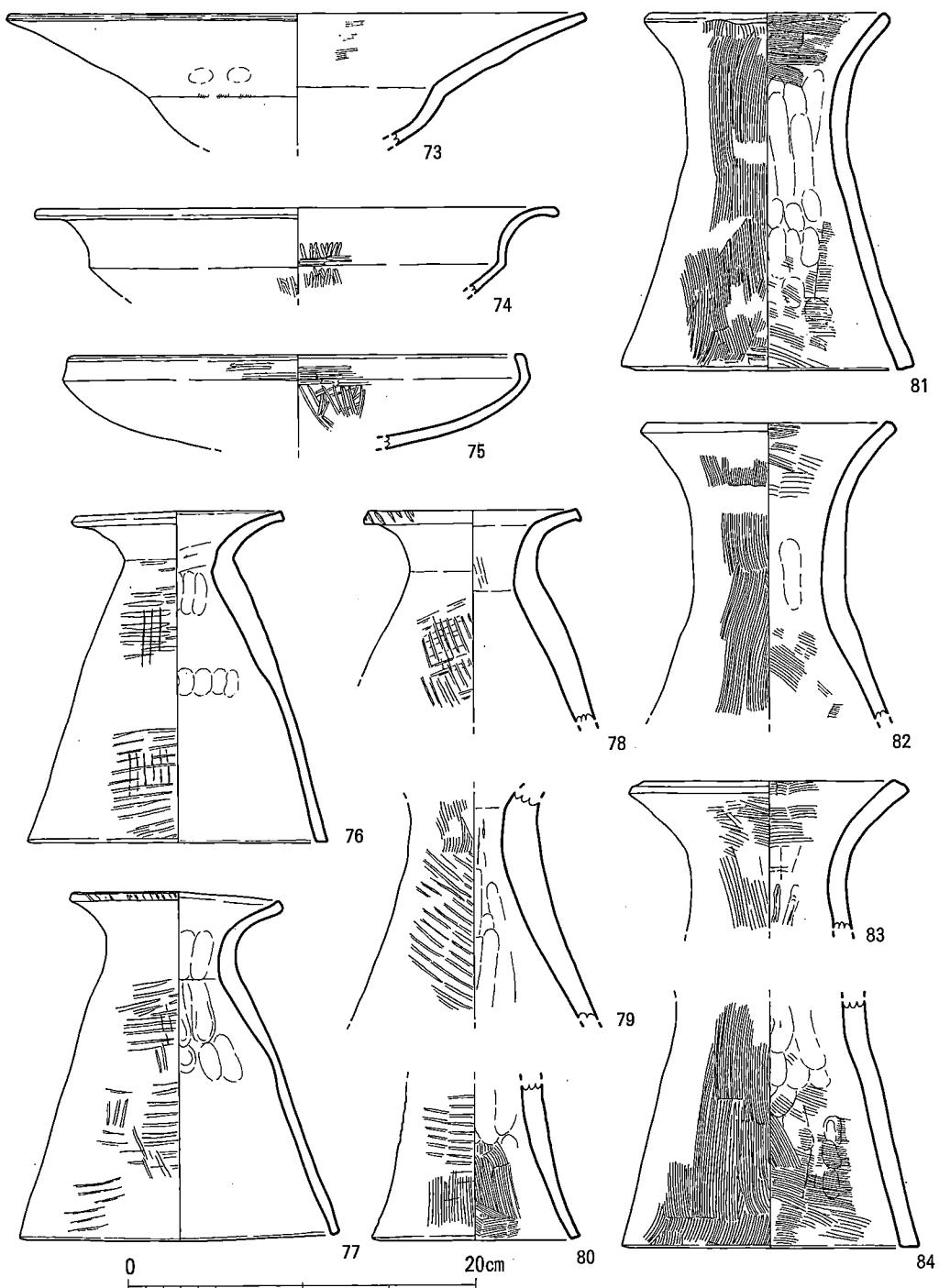
第 48 図 7号溝出土土器実測図⑦ (1/6)

に穿孔されていたかは不明。

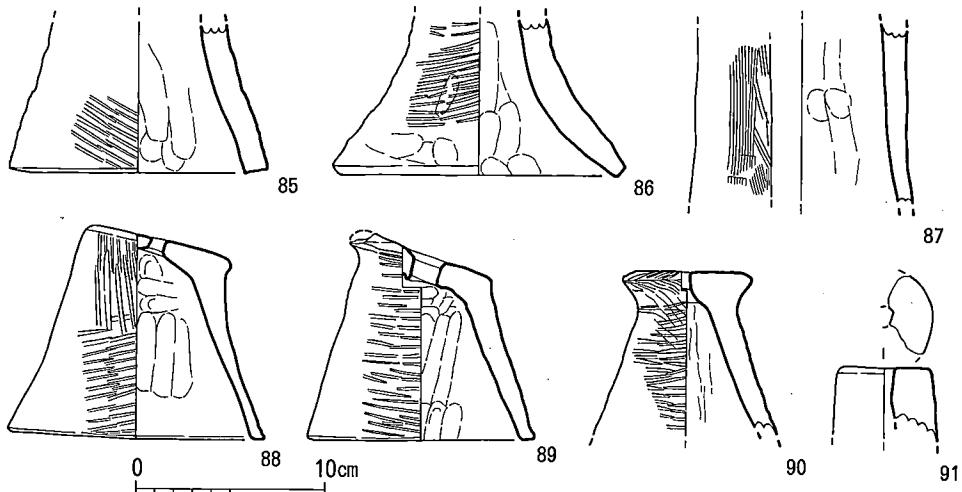
76~87は器台で、76~79は頸部が良く締まるタイプで、81~84・87は鼓形の器形をなす。77 81・84は外面に煤の付着がみられる。器高は76が19.0cm、77は20.1cm、81は20.5cmで、口径は 76が11.6cm、77は11.7cm、81は13.3cmで、脚裾径は76が17.2cm、77は18.3cm、81は15.7cmを測る。76~79のタイプは器面にタタキ目を残すが、鼓形の器形をなすものはハケ目による。85・86は 裙部の破片。



第 49 図 7号溝出土土器実測図⑧ (1/4)



第 50 図 7号溝出土土器実測図⑨ (1/4)



第 51 図 7号溝出土土器実測図⑩ (1/4)

88~91は支脚で、何れも上部に焼成前穿孔の円孔を有する。88~90は裾広がりであるが、91の裾部はさほど広がらないようである。器高は88が11.1cm、89は10.9cmで、脚裾径は88が13.5cm、89は12.0cmを測る。また、88・89の外面は二次加熱を受けて赤変している。

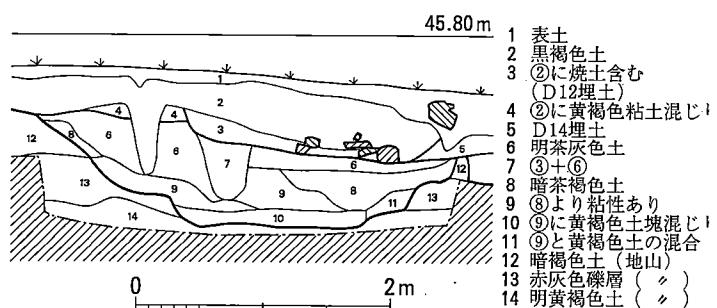
**石 器 (13・17)** 13・17は扁平な砥石で、17は凝灰岩製の仕上げ砥石で、13は砂岩製の中砥石。17は両端部を欠損するが、3面を砥面としている。13は四周を砥面としている。

**土製品 (17)** 17は弥生土器片利用の土版で、径3.2×3.6cm。外縁を丸く擦っている。

#### 8号溝 (図版13・15、第52図)

調査区の中央部に位置し、4号通路と5mの間隔を有し並走する。また、88号竪穴住居とは切合い関係にあるが、前後関係は不詳。奈良時代の3号竪穴及び中世の7・8・12・14・18号土坑に切られる。丘陵を北西—南東方向に走る大溝で、長さ約33m分を調査した。北端部での幅1.25m、深さ0.43mで、中央部での幅2.70m、

深さ0.53mを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。また、南端から9m北側部分にかけては2段に掘り込まれており、上段幅2.40m、下段幅1.65m、上段までの深さ0.75mを測る。溝内には礫混じりの明茶灰色土が堆積しており、土器も多量に出土している。



第 52 図 8号溝南端土層断面実測図 (1/60)

**出土遺物（図版40・41、56-1・57-1・58-3、第53～58・115・117・118図）**

**土 器（1～70）** 1～13は壺で、1・2は小型の直口壺で、4は中型の直口壺。3は小型の広口壺で、器高15.7cm、口径11.2cmを測る。5～11は口径が15～23cmほどの中型の広口壺である。調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、1の外面は籠ミガキによる。12は袋状口縁壺で、屈曲部には稜を有する。頸部にはハケ状工具によるキザミ目を付した三角凸帯を貼付している。13は二重口縁壺で、頸部から大きく開いた後直立し、さらに外方に短く屈曲する。口唇部と屈曲部とに籠先によるキザミ目を付している。15・16は頸部の締まりが強いことから短頸壺としておく。何れも頸部に籠先によるキザミ目を付した「コ」字形凸帯を貼付している。16・19は胎土・色調からして同一個体の可能性がある。

20～34は「く」字形口縁壺で、20～25が口径15cm前後の小型品。20～22の底部は尖底をなす。器高は20が14.2cm、21は16.6cm、22は17.7cm、口径は20が12.7cm、21は15.9cm、22は15.0cmを測る。26～28・30が口径20cm前後のもので、29・31～34は口径25～30cm前後の中型品。31は頸部に割とシャープな三角凸帯を貼付している。何れも器面調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、20・22・24の胴下半部外面には雑なミガキを施し、21・27は擦過による。35は頸部以下の破片であるが、底部は若干平底を残す。36は復原口径40.0cmの大壺で、頸部に幅広の「コ」字形凸帯を貼付している。

37～42は鉢で、37～39は底部が丸い料理用のボール形を呈する。器高は37が11.8cm、38は11.6cm、39は11.2cmで、口径は37が24.0cm、38は20.2cm、39は17.2cmを測る。40は深めの器形で、41は浅めの器形。41は器高7.2cm、口径17.2cmを測る。37・38は胴下半部外面に籠状工具による擦過を施している。42は口縁部が「く」字形に屈曲するタイプ。

43～54は小型の碗で、43～46が浅めの器形で、47～53はやや深めで、54は筒状の器形をなす。調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、46・50の外面には籠ミガキを施している。器高は44が5.0cm、47は7.0cm、51は6.8cm、54は10.4cmで、口径は44が13.2cm、47は13.6cm、51は10.2cm、54は8.8cmを測る。

55～61は台付鉢で、55は口縁部がそのまま開く器形で、56～58は口縁部が屈曲するタイプ。55は器高12.3cm、口径17.8cm、脚裾径12.8cmを測る。59～61は脚台部破片で、59は焼成後の円孔を4ヶ所に施している。

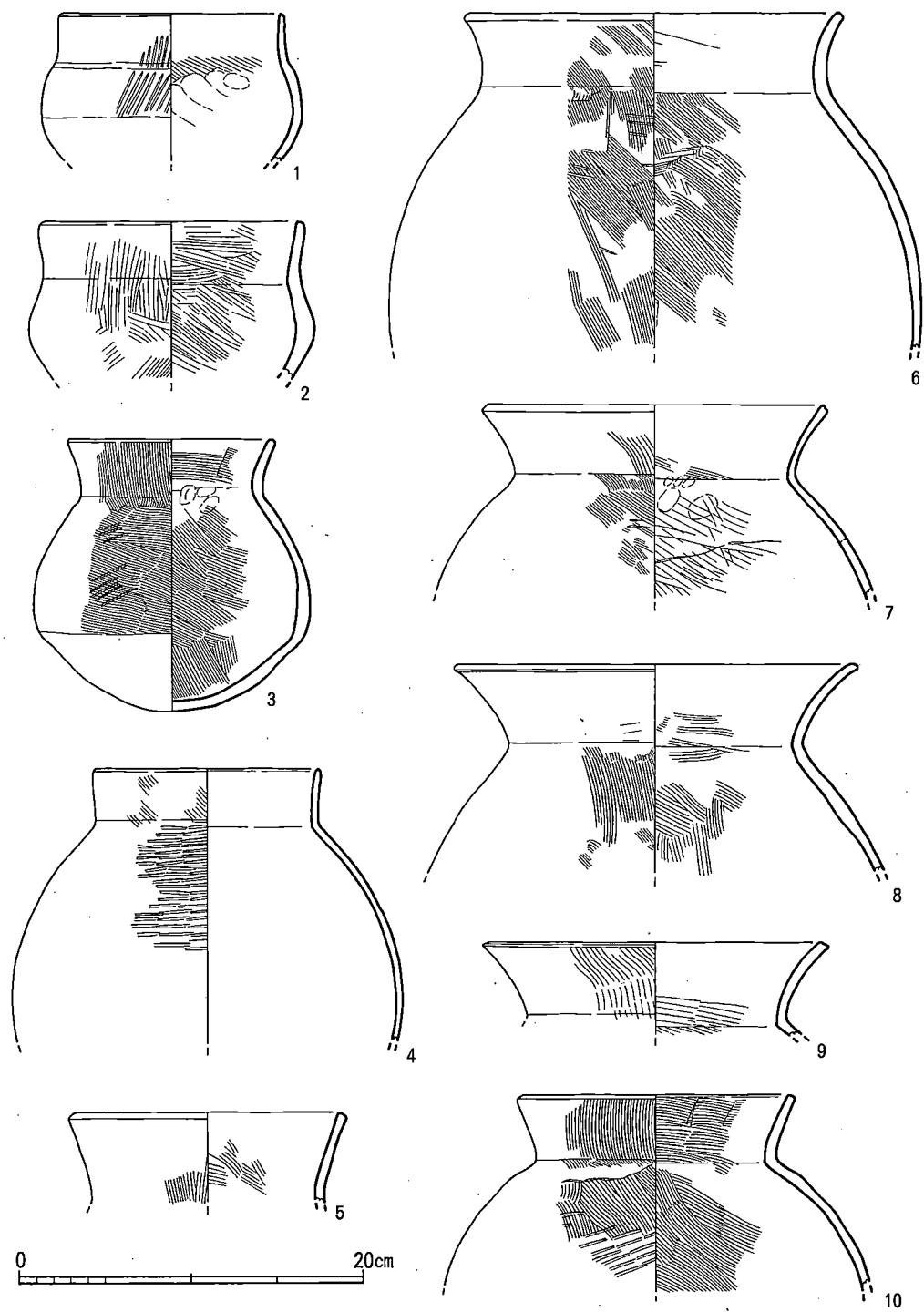
62・63は高壊で、62が壊部、63は脚柱部の破片。ともにミガキ調製による。

64～66は器台で、64は鼓形、66は袋状をなす。65は裾部の破片で、内面には指頭痕が付く。

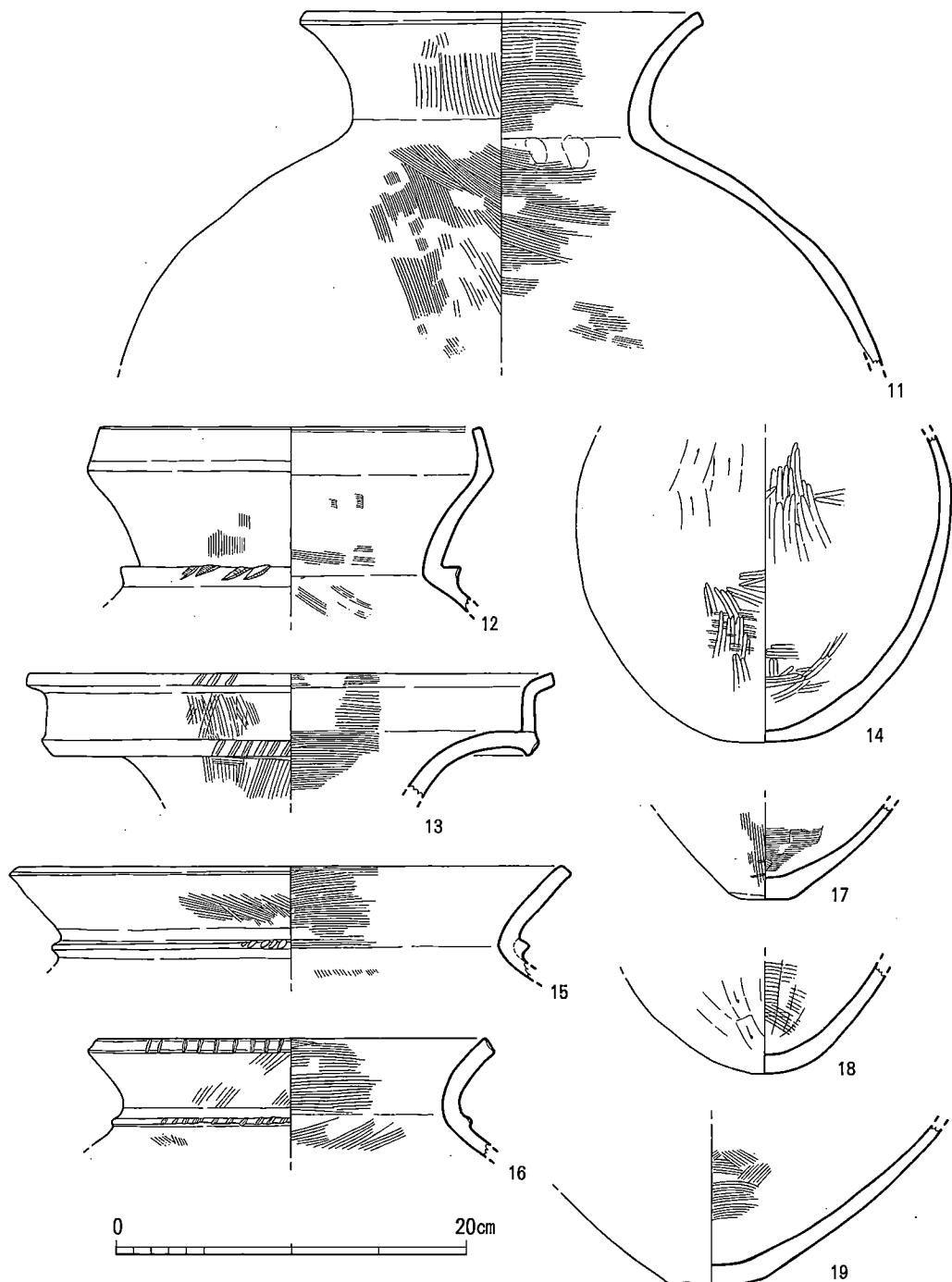
67・68は支脚片で、67は頭部に円孔を穿っている。68は肉厚の脚裾部の破片。

69・70は蓋のつまみ部として図示した。何れもつまみ部は肉厚である。

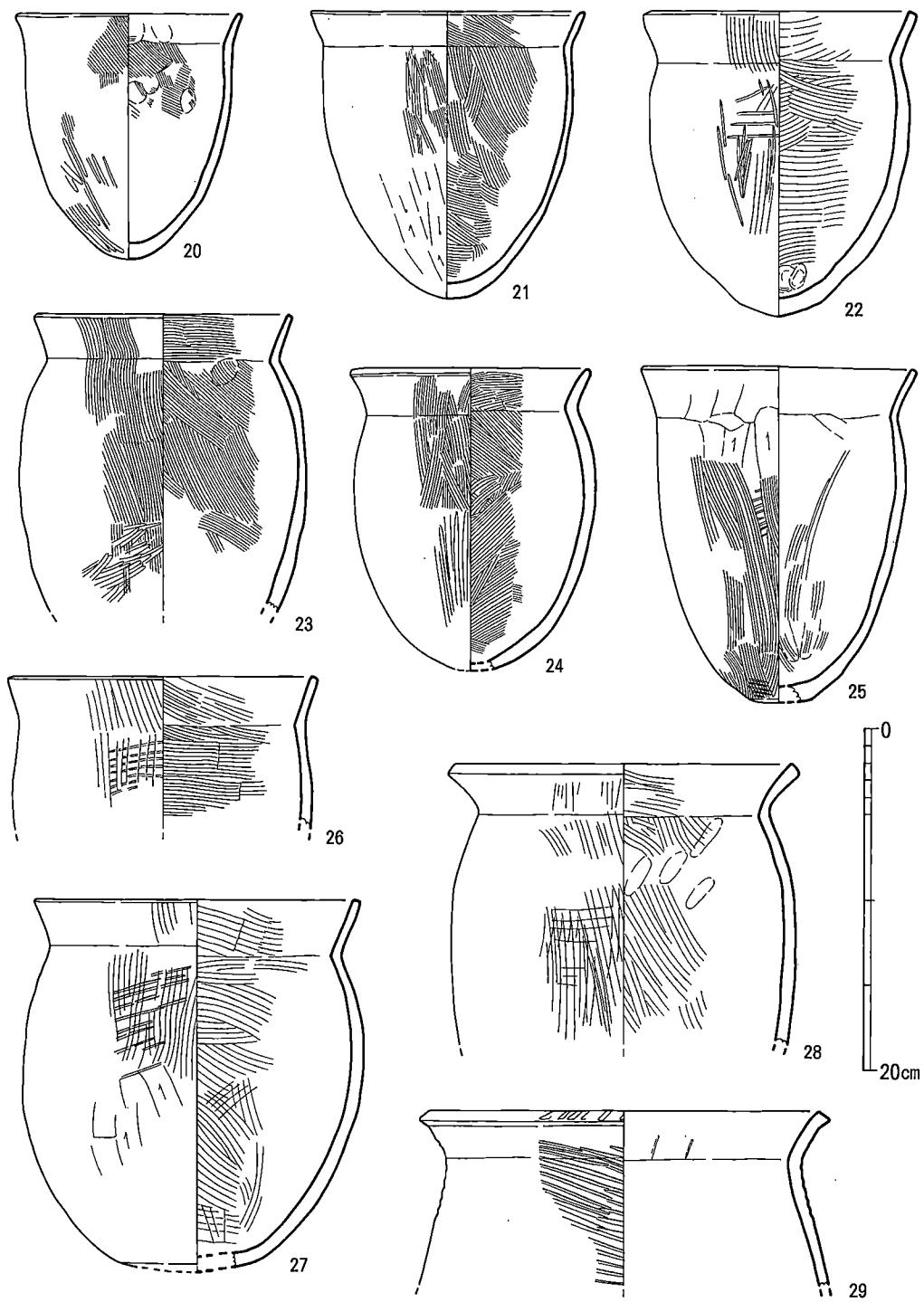
また、1・3・4・7～10・14・18・25・27・34・35・37・41・44～49・51・52・54・55・65～68はB4区2号土器溜の出土で、2・13・15・43・64はB4区南包含層の出土で、5・6・12・17・



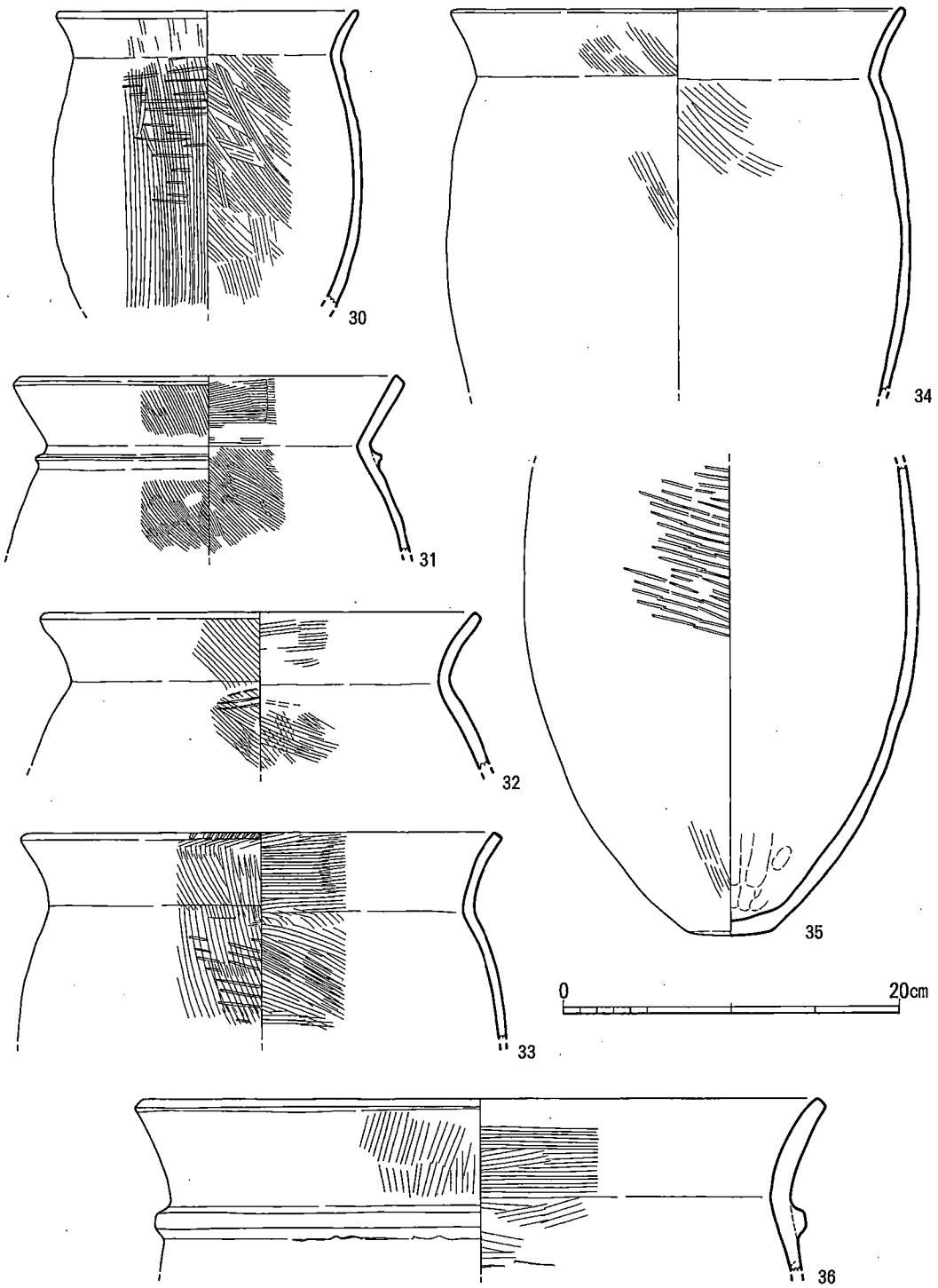
第 53 図 8号溝出土土器実測図① (1/4)



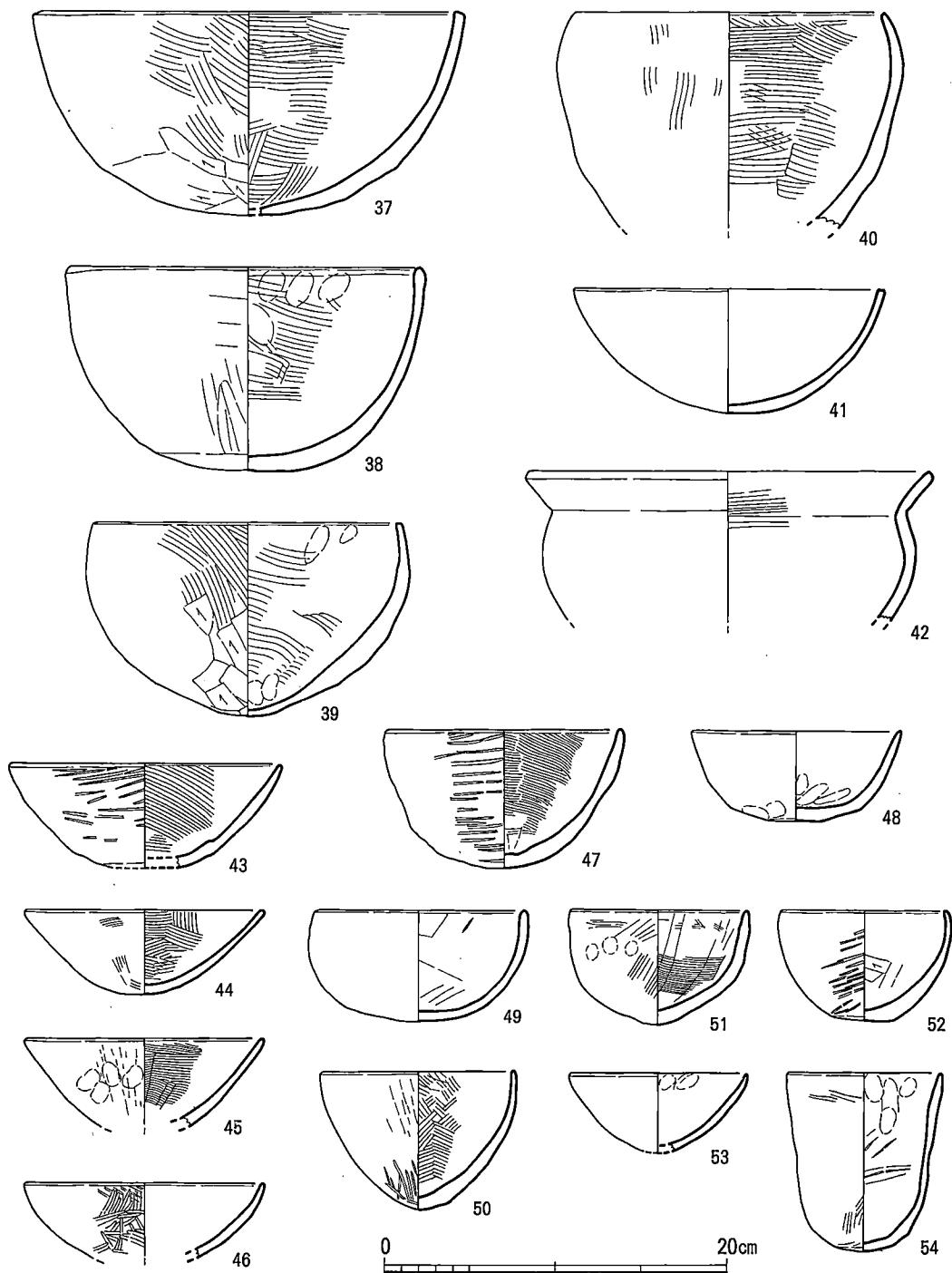
第 54 図 8号溝出土土器実測図② (1/4)



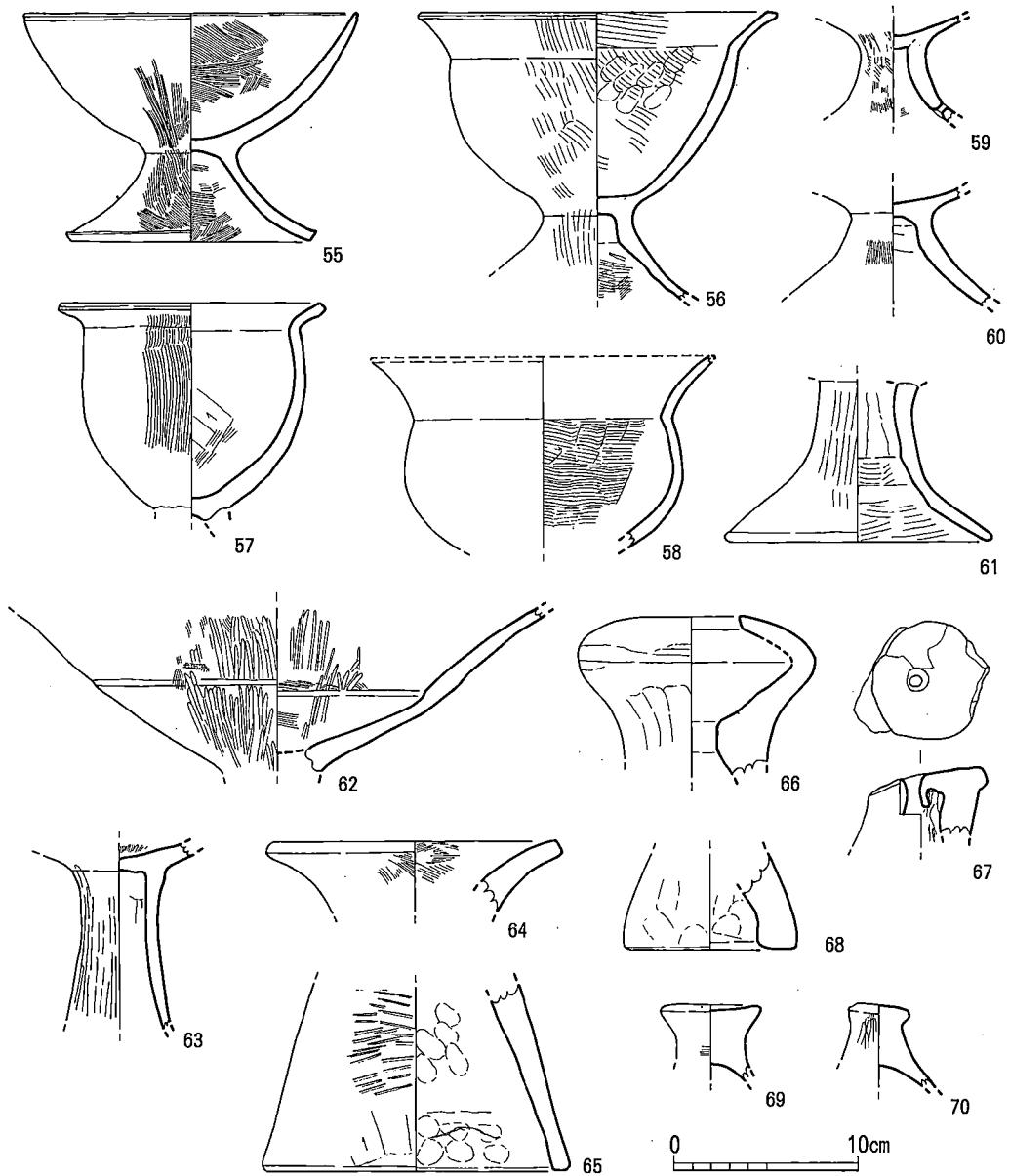
第 55 図 8号溝出土土器実測図③ (1/4)



第 56 図 8号溝出土土器実測図④ (1/4)



第 57 図 8号溝出土土器実測図⑤ (1/4)



第 58 図 8号溝出土土器実測図⑥ (1/4)

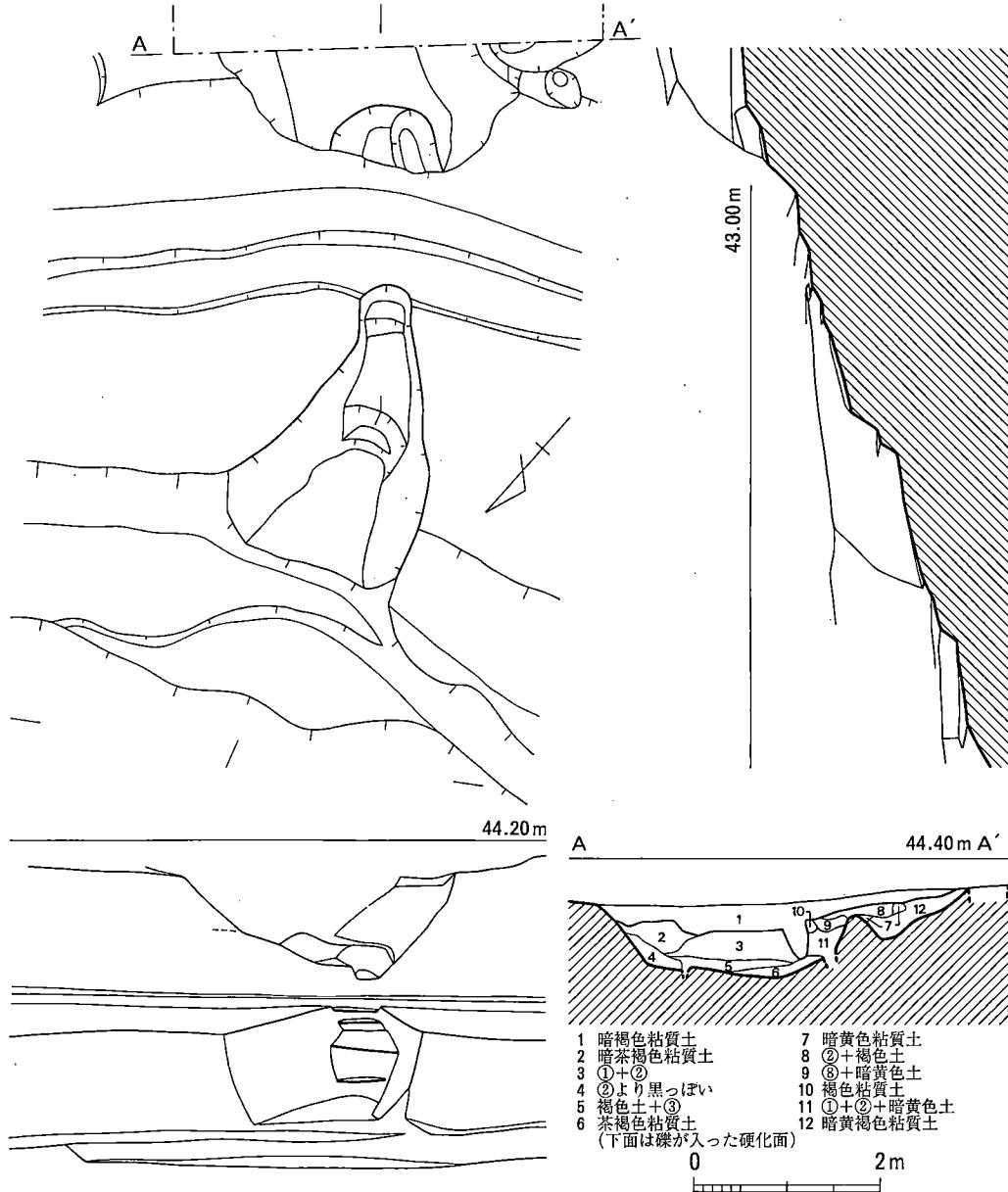
20・24・29・31~33・36・38・59・60・63・66は7号土坑の出土、68は8号土坑の出土、30は80号堅穴住居東側掘り下げ時の出土であるが、元来8号溝に帰属するのでここで掲載した。

**石 器 (2・3)** ともに緑泥片岩製の両刃半月形の石包丁で、埋土下層の出土。2は使用による片減りが顕著で、背側の双孔は両面から穿孔される。一方の端部を欠損するが、残存長7.3

cm、幅4.5cm、厚さ0.7cm、重さ38.4gを測る。3は背側一ヶ所に両面から中途までの穿孔痕がみられるが貫通しない。刃部を一部欠損するが長さ12.7cm、幅5.5cm、厚さ0.7cm弱、重さ80.5g。

鉄器(1) 1は剣菱形の鉄鎌で、残存長6.3cm、刃部最大幅2.6cmを測る。南上層の出土。

土製品(3・18・19) 3は高環のミニチュア品で、復原脚径4.8cm。18・19は弥生土器片利用の土版で、長径は18が3.3cm、19は3.5cm。外縁は打ち欠き後に擦っている。



第59図 4号通路実測図 (1/80)

## (4) 通路

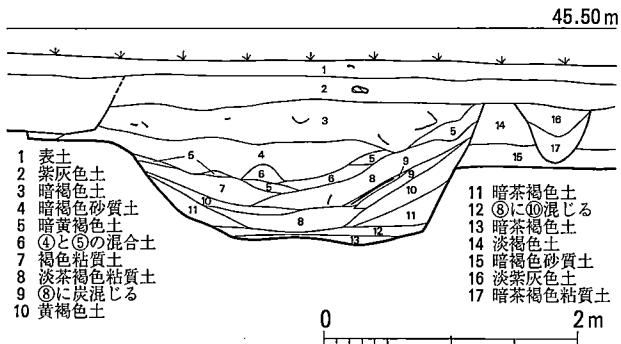
### 4号通路 (図版16・17、第59・60図)

調査区の中央部で、7号溝と8号溝に挟まれる形で位置する。7号溝とは5.5~8.5m、8号溝とは5.0mの間隔を有する。丘陵を北西—南東方向に走る通路遺構で、長さ35m分を調査した。北西端部にはステップが4段ほどあり、蹴上の高さは20cm前後である。通路の北端は4号落込となつており、さらに谷部へと続く。通路の規模は北端部での幅3.50m、深さ0.85mで、中央部での幅2.80m、深さ0.50m、南端部での幅2.50m、深さ0.62mを測る。通路底は若干南側に傾斜している。通路の埋土は暗茶褐色土を主体とし、東西両方向から土砂が堆積している。7・8号溝ほどではないが多量の土器が出土している。また、ステップを有することから通路としたが、後述する2・3号通路のように丘陵に取り付くに従つて細くなつておらず、本来の機能は“溝”にあつたものと理解したい。なお、8号溝の北端部も谷部に傾斜しており、通路として利用していた可能性も考えられる。

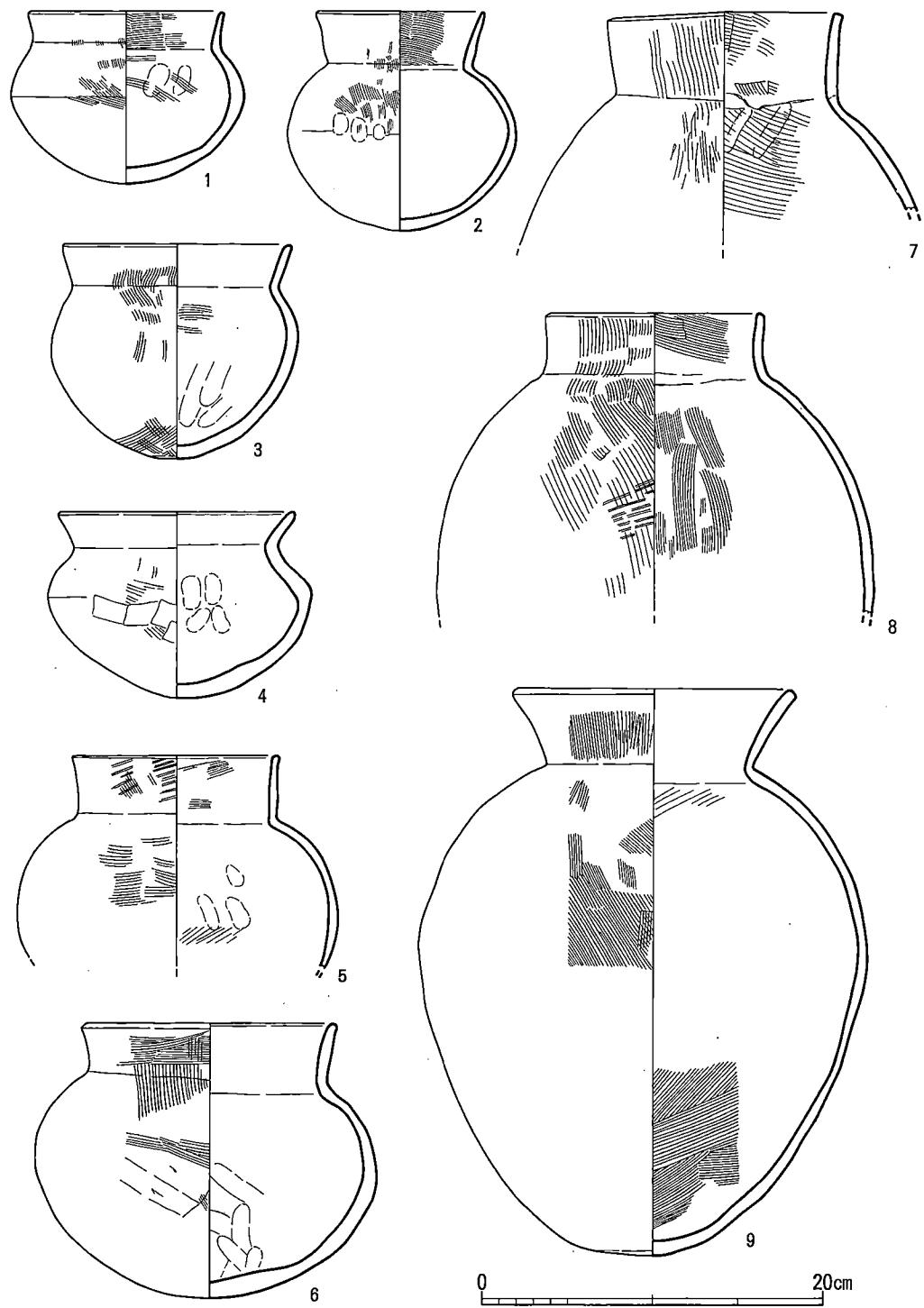
### 出土遺物 (図版42~45、56-3・58-2、第61~69・116~118図)

**土 器 (1~85)** 1~18は壺で、1・3・4は小型の短頸壺で、2は小型の広口壺。2は器高12.8cm、口径9.8cmの完形品。5~8は直口壺で、5・6は小型品。5は器高16.1cm、口径14.4cmを測る。9~14は広口壺であるが、9の頸部は他に比して短めで、10の頸部は長めである。13は頸部にキザミ目を付した三角凸帯を貼付する。また、凸帯の直下には箆先でキザミ目風の線刻を施している。14も頸部に三角凸帯を貼付しているが、極めて細身で削り出し風である。9は器高が33.2cm、口径は16.0cmを測る。15・16は二重口縁壺で、大きく開いた頸部から口縁部が直立する。17・18は袋状口縁壺で、ともに口縁部の屈曲部にキザミ目を施している。また、17は頸部にキザミ目を付した三角凸帯を貼付し、18は頸部と胴部に「コ」字形凸帯を貼付し、タタキ目原体を叩打して付けたキザミ目風の文様を施している。18は器高37.4cm、口径21.6cmを測る。何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、4・6・18の胴下半部外面には擦過がみられる。

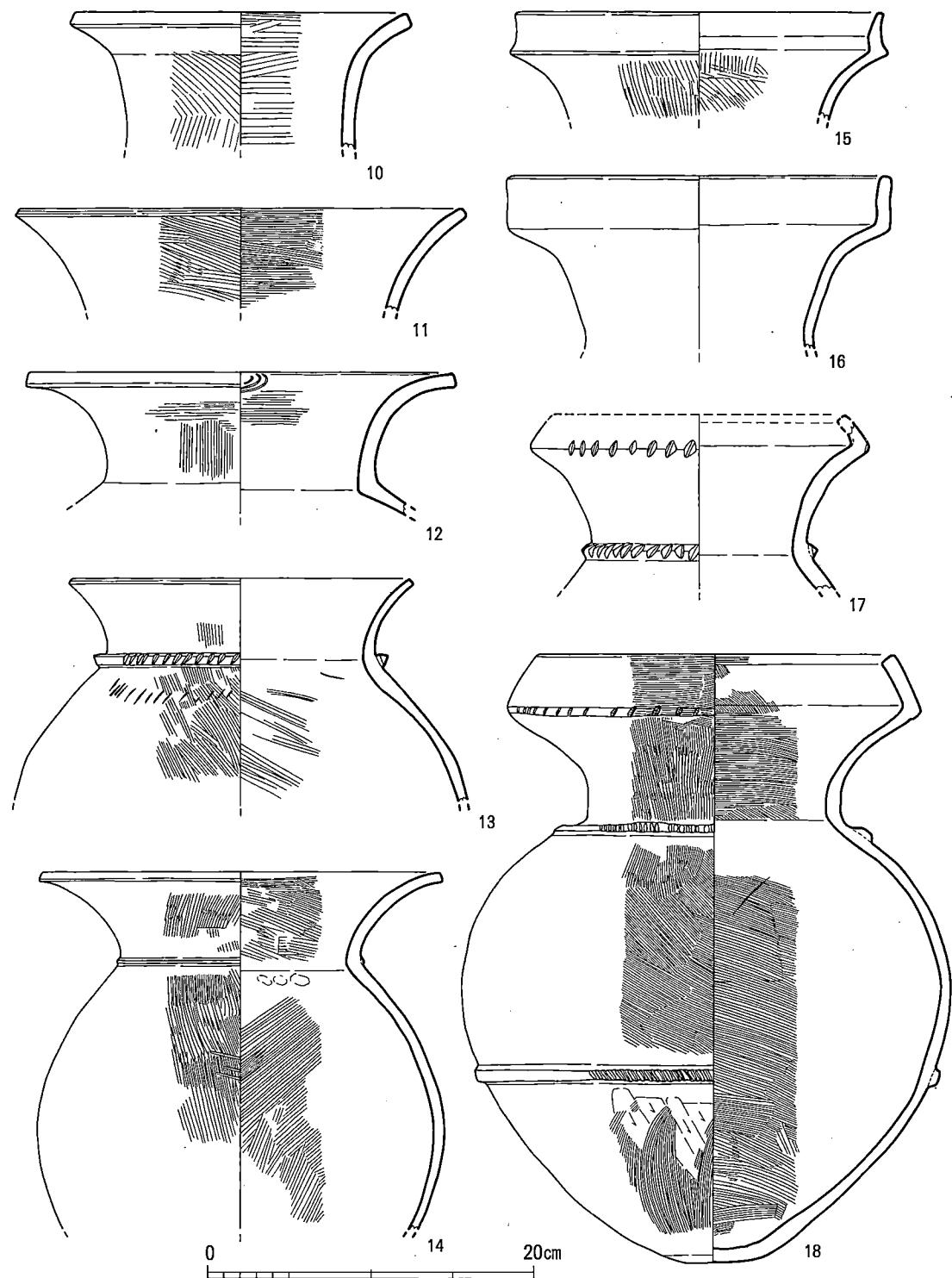
19~43は「く」字形口縁壺で、34・35・41は胴下半部の破片。19~24は口径が15~20cm前後の小型品で、20・21・23の底部は平底を残している。器高は19が15.4cm、21は17.6cm、24は27.4cmで、口径は19が15.1cm、21は17.3cm、24は21.2cmを測る。26~33・36~40・43は口径が23~



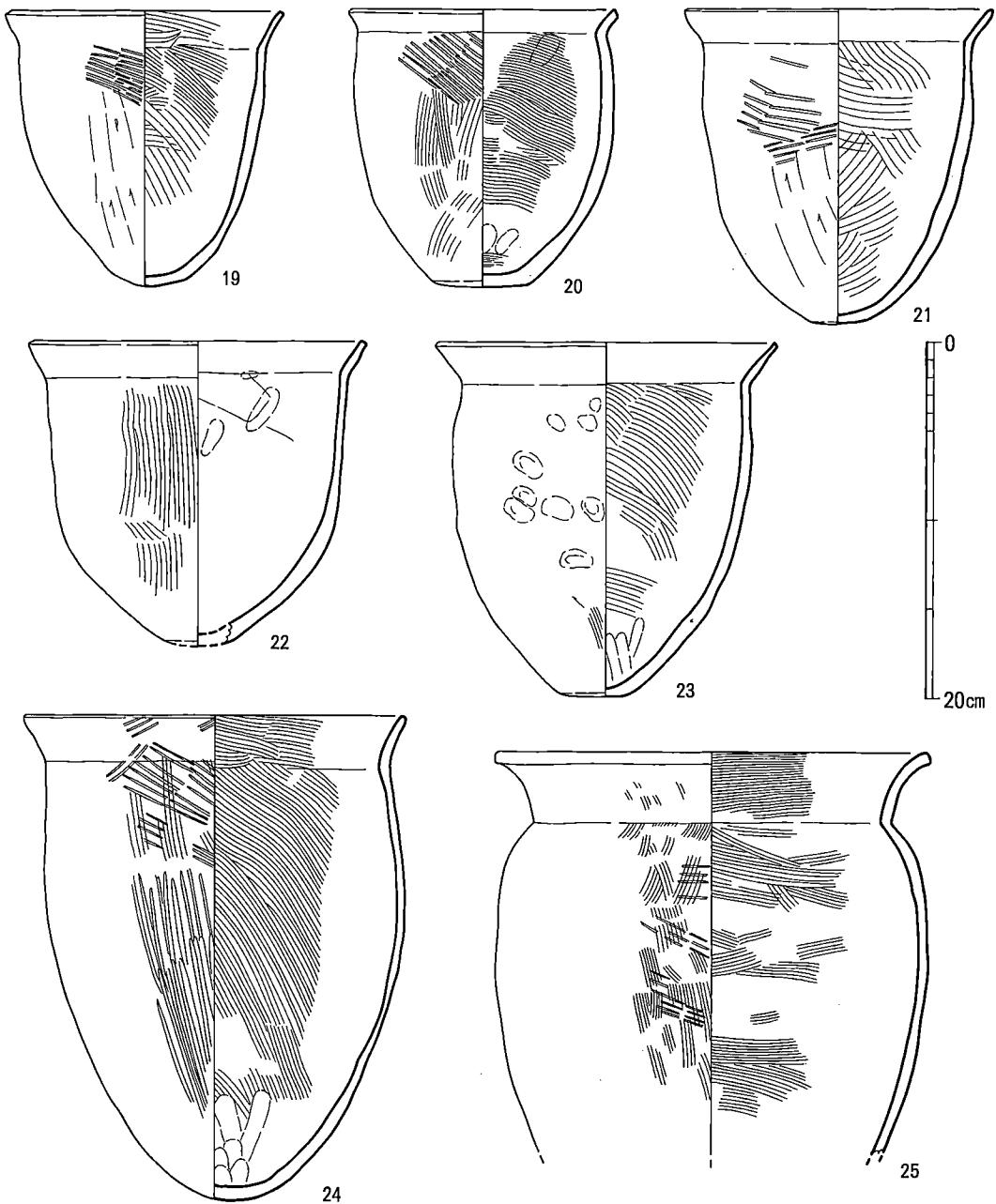
第 60 図 4号通路南端土層断面実測図 (1/80)



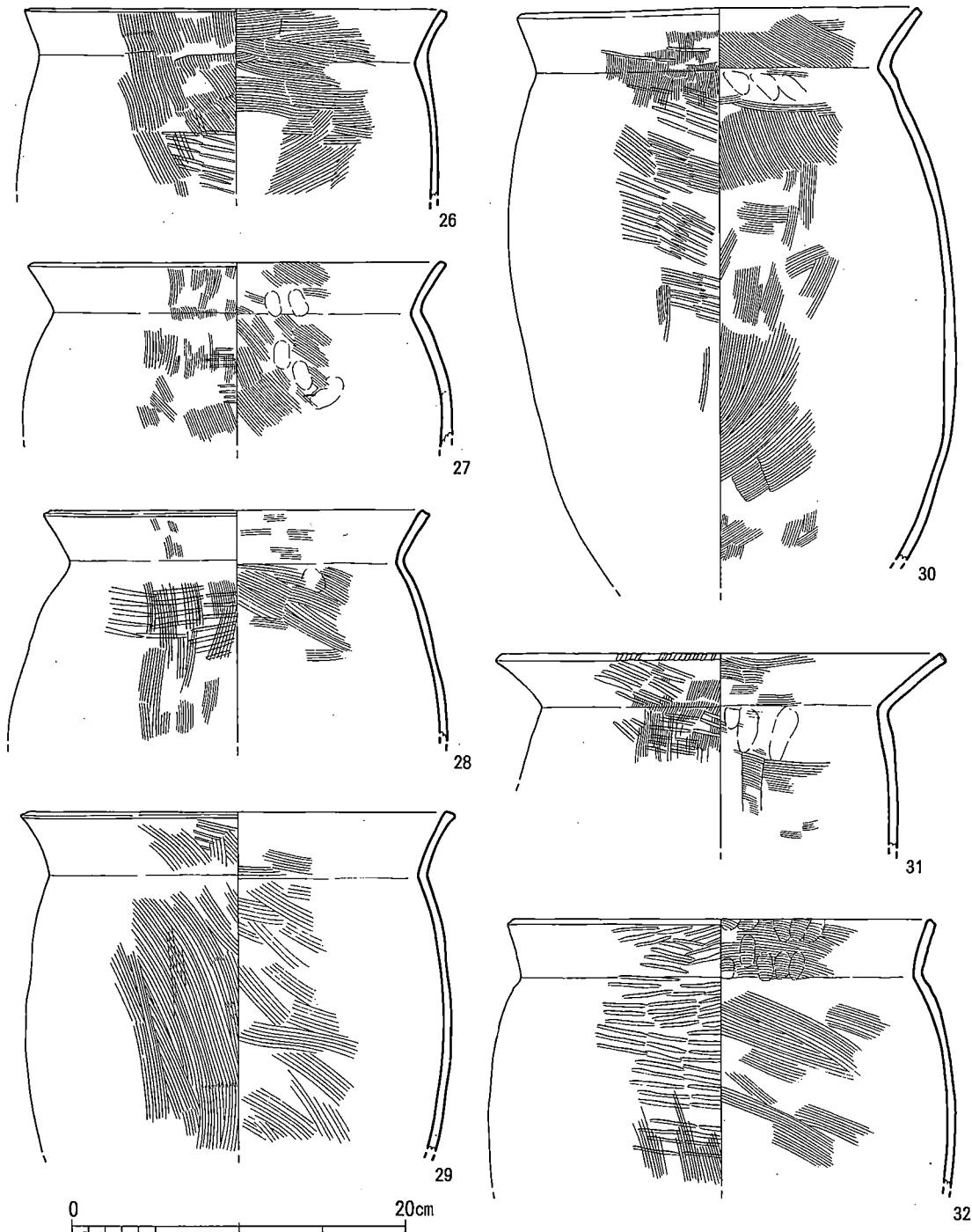
第 61 図 4号通路出土土器実測図① (1/4)



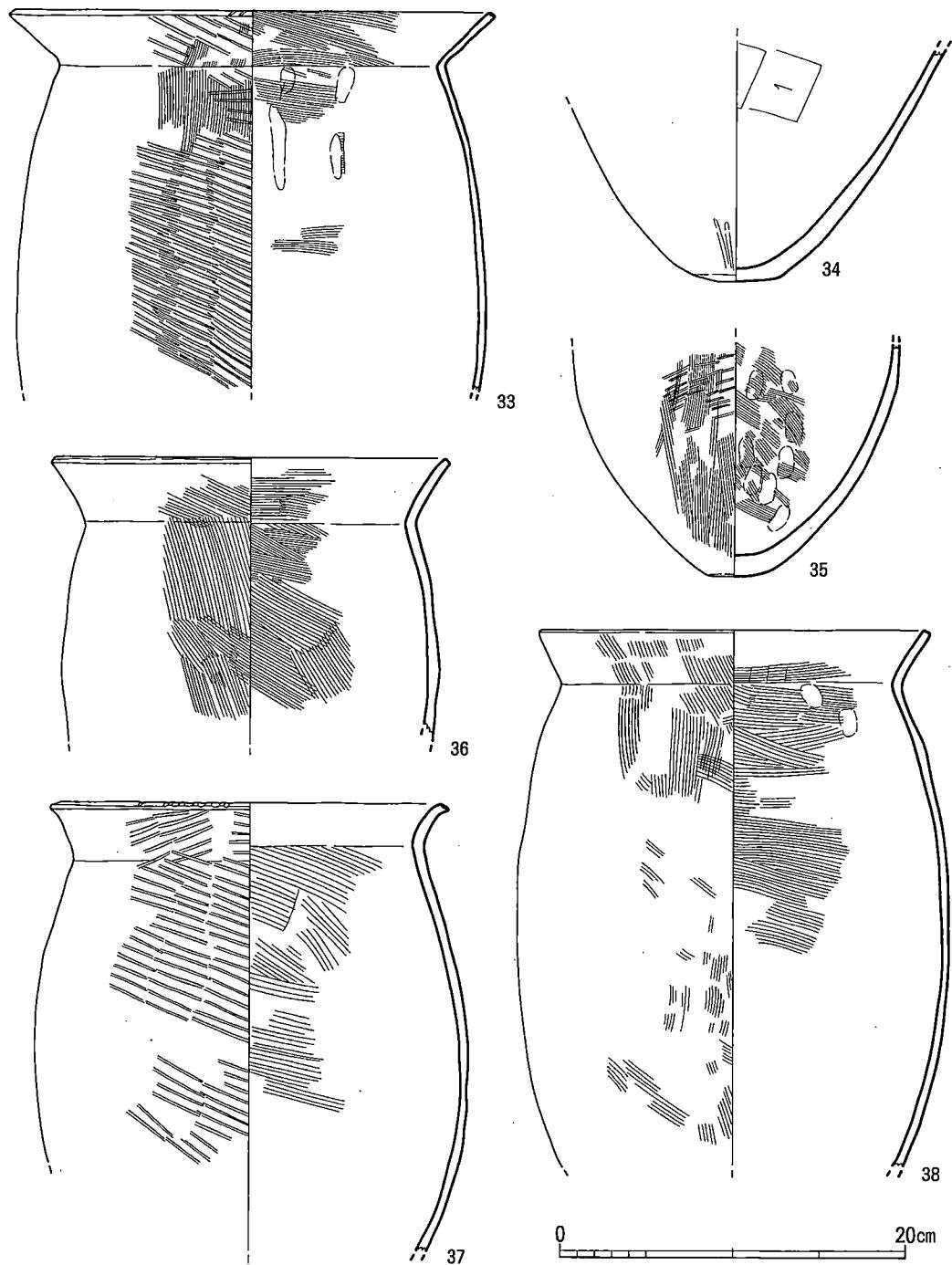
第 62 図 4号通路出土土器実測図② (1/4)



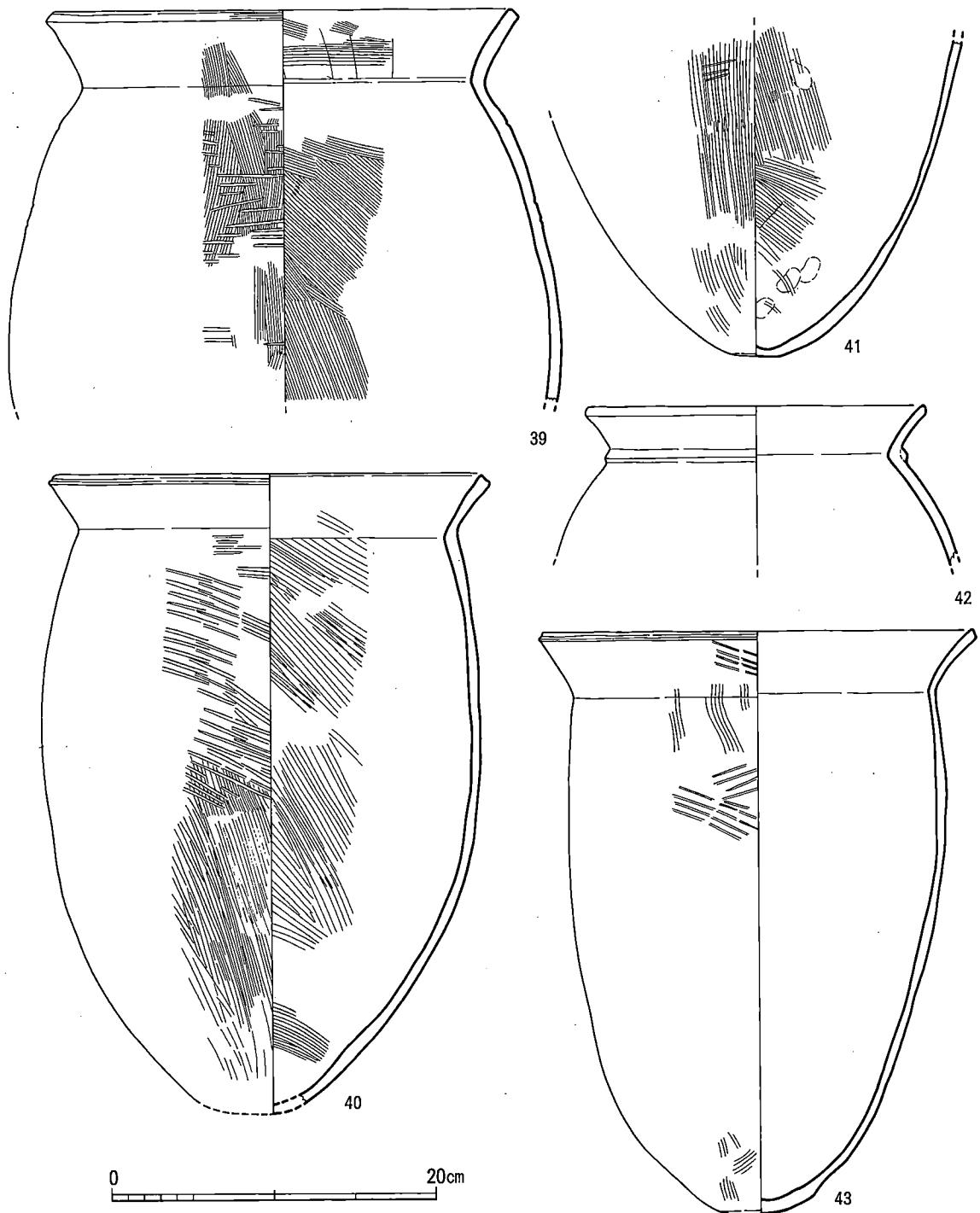
第 63 図 4号通路出土土器実測図③ (1/4)



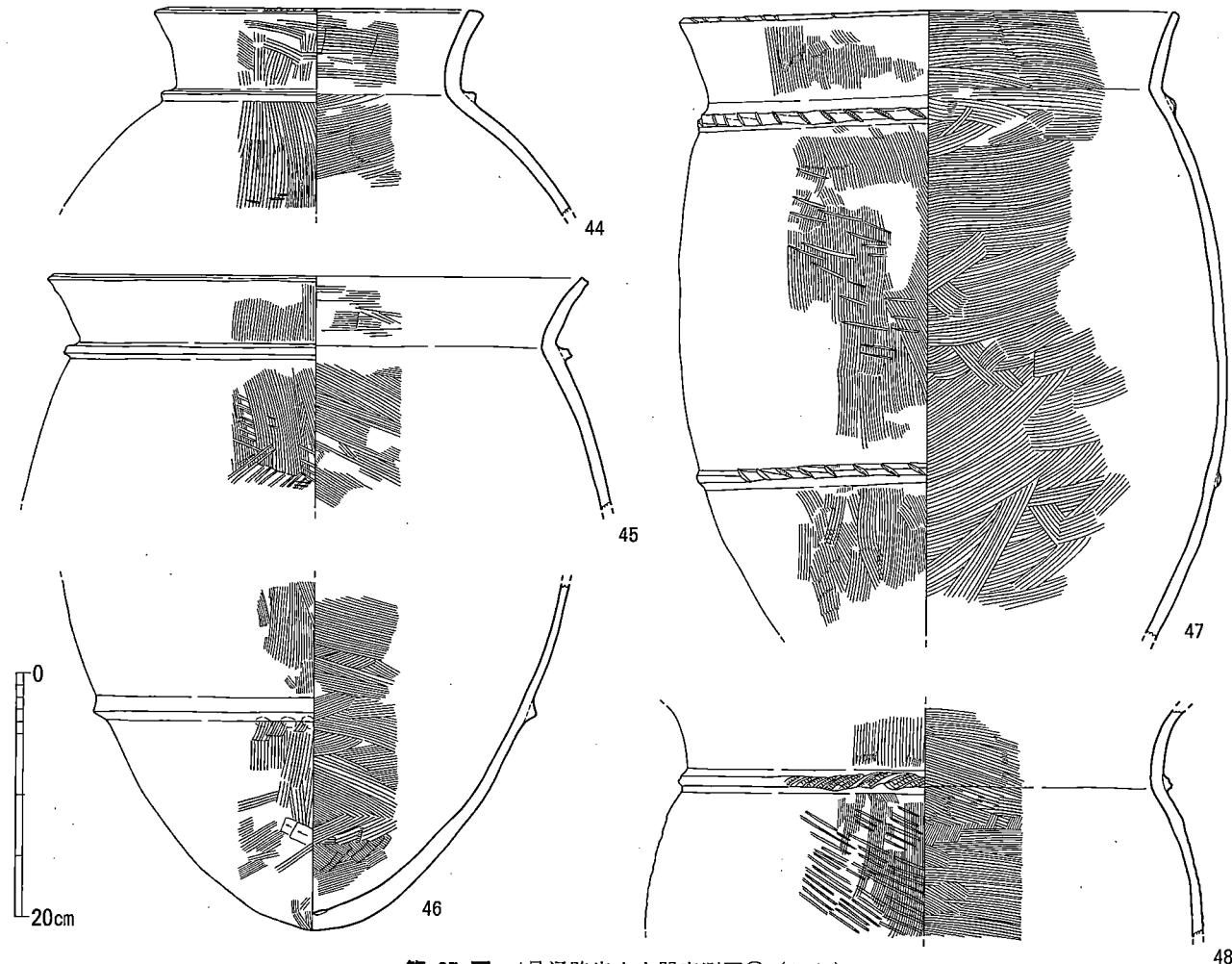
第 64 図 4号通路出土土器実測図④ (1/4)



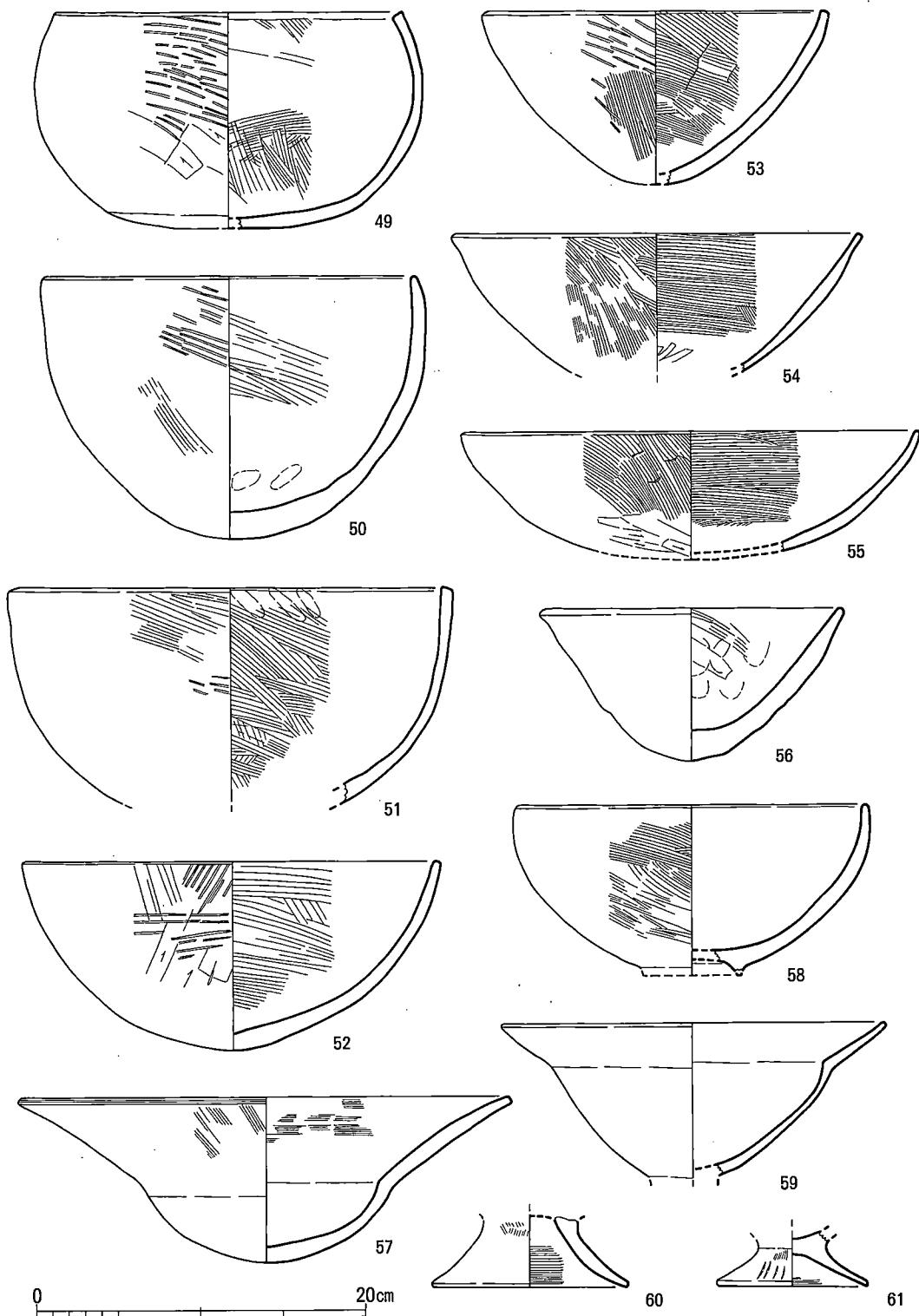
第 65 図 4号通路出土土器実測図⑤ (1/4)



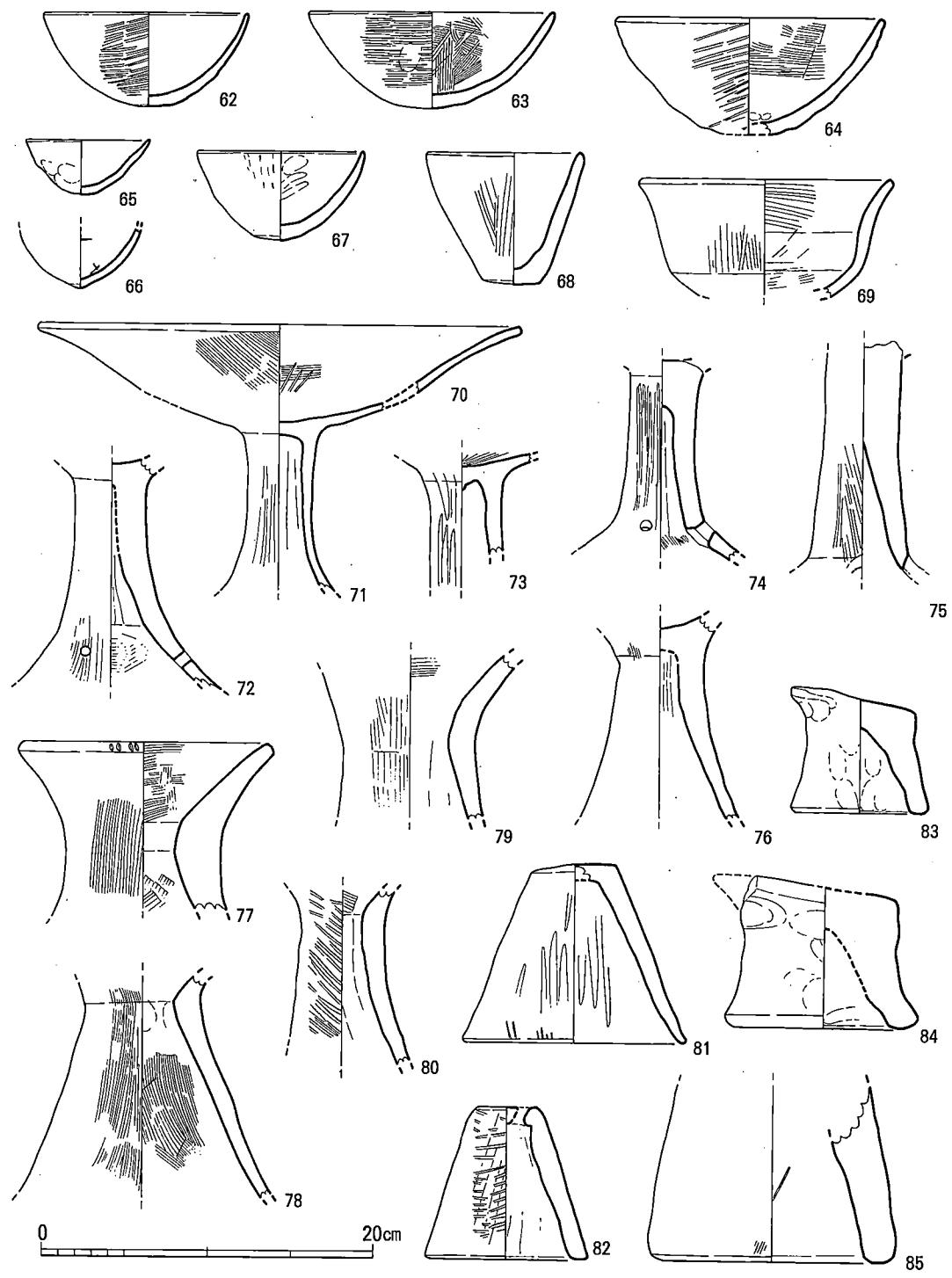
第 66 図 4号通路出土土器実測図⑥ (1/4)



第 67 図 4号通路出土土器実測図⑦ (1/6)



第 68 図 4号通路出土土器実測図⑧ (1/4)



第 69 図 4号通路出土土器実測図⑨ (1/4)

28cmほどの長胴甕で、29・37の口唇部は外方に若干突出する。43は器高36.0cm、口径26.5cmを測る。42は頸部に三角凸帯を貼付している。何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、19・21の胴下半部外面には擦過がみられる。また、21・22・25・26～32・36～38・40・41・43の外面には煤が遺存している。44～48は大甕で、44の頸部は良く締まり、壺形をなす。45・47・48の頸部の締まりは悪い。46は底部の破片。44・45・48は頸部に「コ」字形凸帯を貼付し、48はキザミ目を付している。46は胴下半部に三角凸帯を貼付する。47は頸部と胴下半部にハケ状工具によるキザミ目を付した「コ」字形凸帯を貼付している。

49～58は鉢で、49～52がボール形を呈し、49の口縁部は内傾する。54・55はやや浅めの器形で、53・56は尖底のもの。57は口縁部が屈曲するタイプのものであるが、口縁部は高坏みたいに長く伸びる。器高は50が16.0cm、52は11.6cm、56は9.3cm、57は10.0cmで、口径は50が22.3cm、52は24.7cm、56は18.0cm、57は29.6cmを測る。また、56の外面には煤の付着がみられる。

58～61は台付鉢で、58は口縁部がそのまま開くもので、59は口縁部が屈曲するもの。60・61は脚台部の破片で、裾部は「ハ」字形に開く。

62～69は椀で、62～64・67は浅めの器形で、66の底部は尖底。65は手捏ねによる。68は深めで、底部は平底を呈する。69は口縁部が屈曲して開くもの。器高は62が5.6cm、65は3.3cm、68は7.9cmで、口径は62が12.0cm、65は7.3cm、68は9.2cmを測る。

70～76は高坏で、70が坏部で、71～76は脚柱部の破片。また、70と71は胎土・色調からして同一個体と思われる。72・74・75は焼成前穿孔の円孔を有し、72・74は3ヶ所に施し、75は4ヶ所に施している。外面調製は72・75がハケ目で、71・73・74はミガキによる。

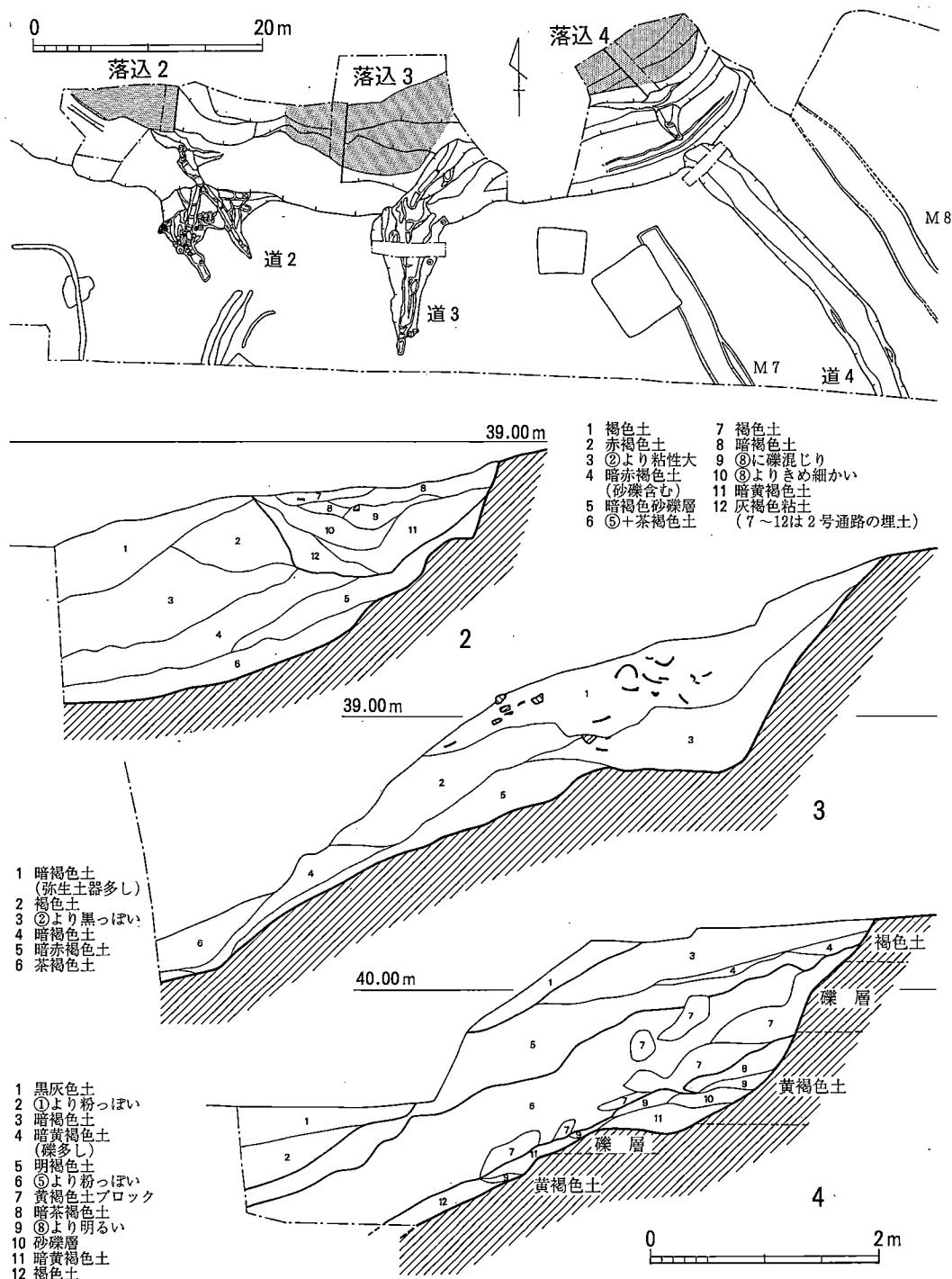
77～80は器台で、77・79が鼓形を呈し、78は頸部が締まるタイプ。80は外面にタタキ目を残している。77の復原口径は16.6cmで、口唇部にキザミ目を付している。

81～85は支脚で、81の裾部はシャープである。82は上部に焼成前穿孔の円孔を有する。83～85は肉厚のもので、83・84の上面は傾斜している。器高は82が9.2cm、83は7.5cm、上面径は82が3.4cm、83は6.3cm、裾部径は82が9.8cm、83は8.3cmを測る。

**石 器** (14・20) 14は粘版岩製の仕上げ砥石で、砥面の大半を欠損する。20は緑泥片岩の板状の扁平な素材の片面が使用によって摩耗し、中央部が窪む。裏面は一部剥落し、長さ18.3cm、幅16.9cm、厚さ2.6cm、重さ1225.9gを測る。縄文時代に帰属する石皿の可能性もある。

**鉄 器** (13・23) 13は鎌の破片で、基部幅2.9cm。折返しは上方に立つ。23は鋤先の小片で、折返し部分をとどめる程度。

**土製品** (10・11) 10・11は柄杓形の土製品。10は完形品で、柄の長さ4.6cmで、断面形は丸い。11は柄の破片で、断面形は橢円形を呈する。



第 70 図 2~4号落込土層断面実測図 (1/60)

## (5) 落込

2~4号通路遺構西側の落込を各々2・3・4号落込とした。

### 2号落込（図版18、第70図）

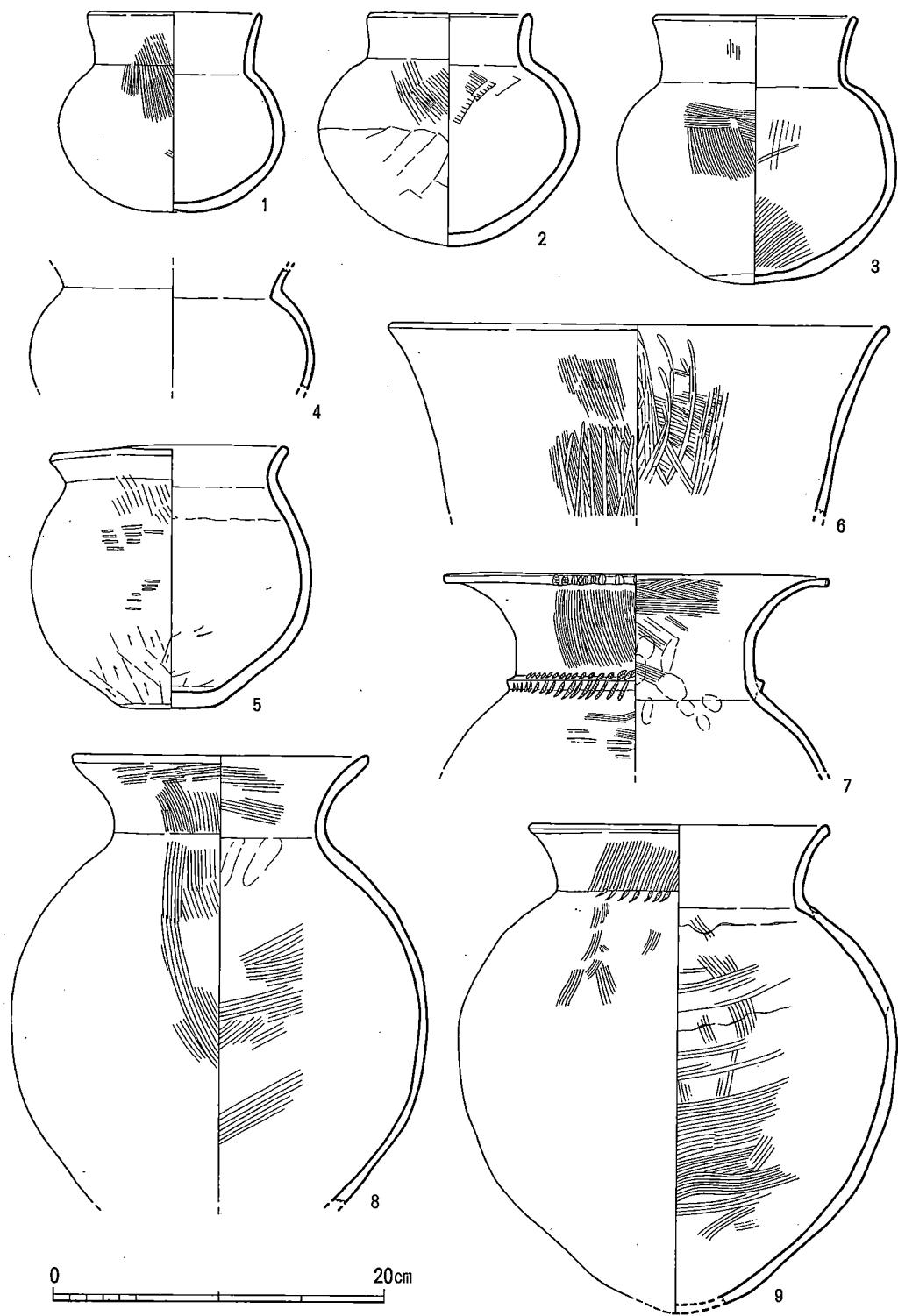
2号通路最下段の西側一帯（網掛け部分）には弥生土器が多量に落込んでおり、この部分を2号落込として出土土器を報告する。落込の堆積土は赤褐色土を基調とし、土層図の7~12層は2号通路の堆積土であることから当該期には落込自体は既に埋没していたことになる。

### 出土遺物（図版46~48、57-1・58-1、第71~80・117・118図）

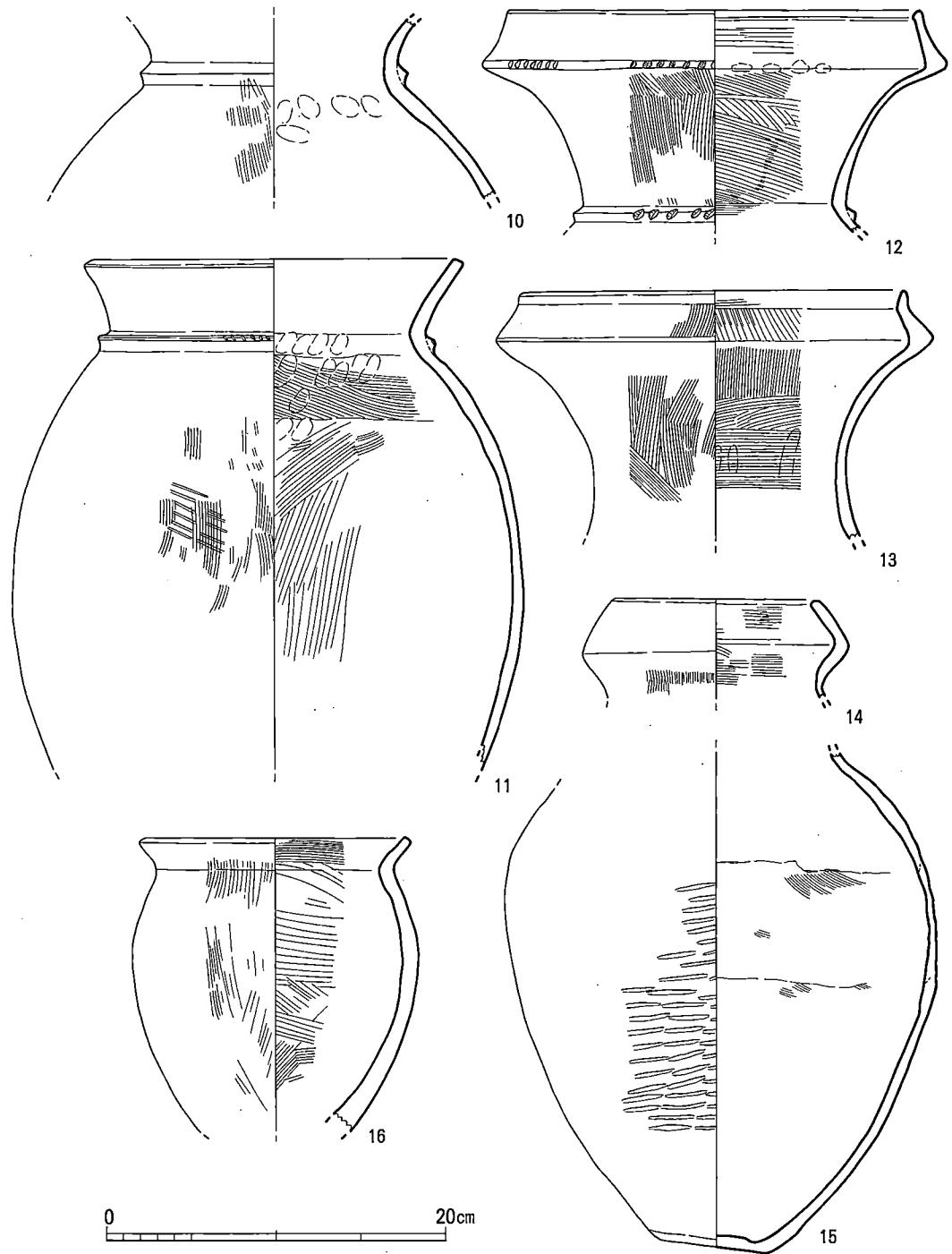
**土 器** (1~91) 1~15は壺で、1~3は小型の直口壺で、4・5は小型の短頸壺。1~3は丸底を呈するが、5は平底である。器高は1が12.0cm、3は16.2cm、5は15.8cmで、口径は1が10.2cm、3は11.8cm、5は13.8cmを測る。6~11は広口壺であるが、11の口縁部は他に比して短めで、6の口縁部の立上がりは大きい。7・10・11は頸部に三角凸帯を貼付しているが、7は凸帯にキザミ目を付している。9は頸部に範先によるキザミ目を施している。9は推定器高29.5cm、口径は17.6cmを測る。12~14は二重口縁壺で、大きく開いた頸部から口縁部は内傾する。12は口縁部の屈曲部にキザミ目を施している。13は袋状口縁壺の口縁部破片。15は口縁部を欠くが、頸部が良く締まっているので壺とした。何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、2・5の胴下半部外面には擦過がみられる。

17~34・36~39は「く」字形口縁壺で、35・40は胴下半部の破片。17~21は口径が15cm前後の小型品で、21の底部は平底を残している。21は器高19.0cmで、口径16.4cmを測る。22~25・27は口径が20cmほどの長胴壺で、26・28~34・36~39は口径が25cmほどの大型のもの。26・34の口唇部は外方に若干突出している。36は推定器高31.7cm、口径23.6cmを測る。41は頸部に三角凸帯を貼付している。42の頸部はさほど広がらず、頸部と胴部にだれた「コ」字形凸帯を貼付し、ハケ状工具によるキザミ目を施している。何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、17・18の胴下半部外面には擦過がみられる。また、23・25・26~33・36~40の外面には煤が遺存している。43~49は甕棺用の大甕で、43・44が完形に近く、45~48は口縁から胴部にかけての破片で、49は底部の破片である。43・44は平底を残しているが、49は丸底を呈する。何れも頸部に「コ」字形凸帯を貼付し、43・48は通常のキザミ目、44は「X」字形、45は「L」字形、46は「V」字形のキザミ目を付している。また、46・48は口唇部にもキザミ目を付し、45の口縁端部にはタタキ目原体による叩打を施し文様としている。器高は43が58.7cm、44が58.6cmで、口径は43が48.0cm、44が53.0cmを測る。

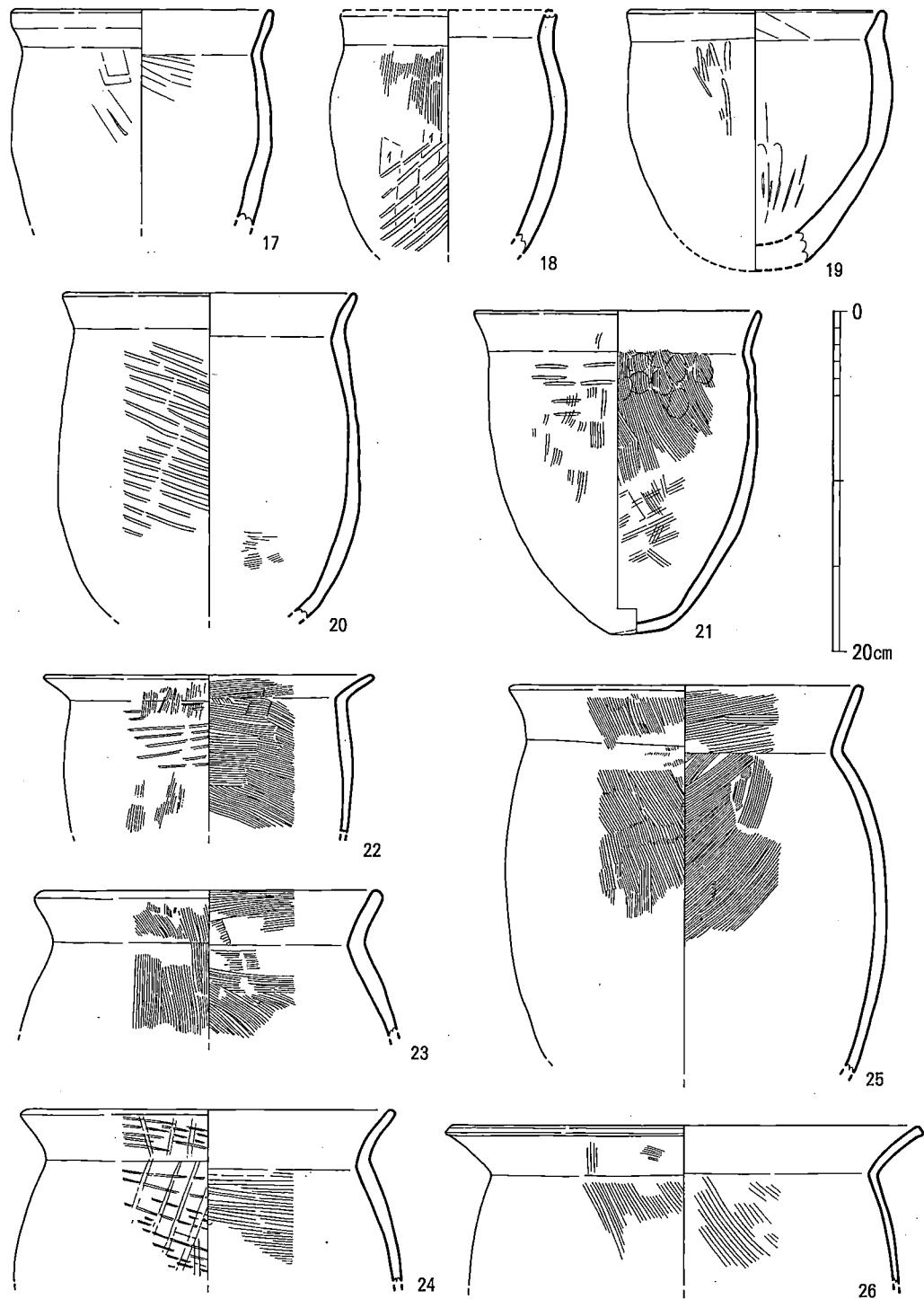
50・51は鉢で、50の口縁部は直立するが、51の口縁部は内傾している。51の底部は若干の平底を残す。また、外底部付近は二次加熱を受けて赤変している。51は器高11.8cm、口径14.3cmを測る。



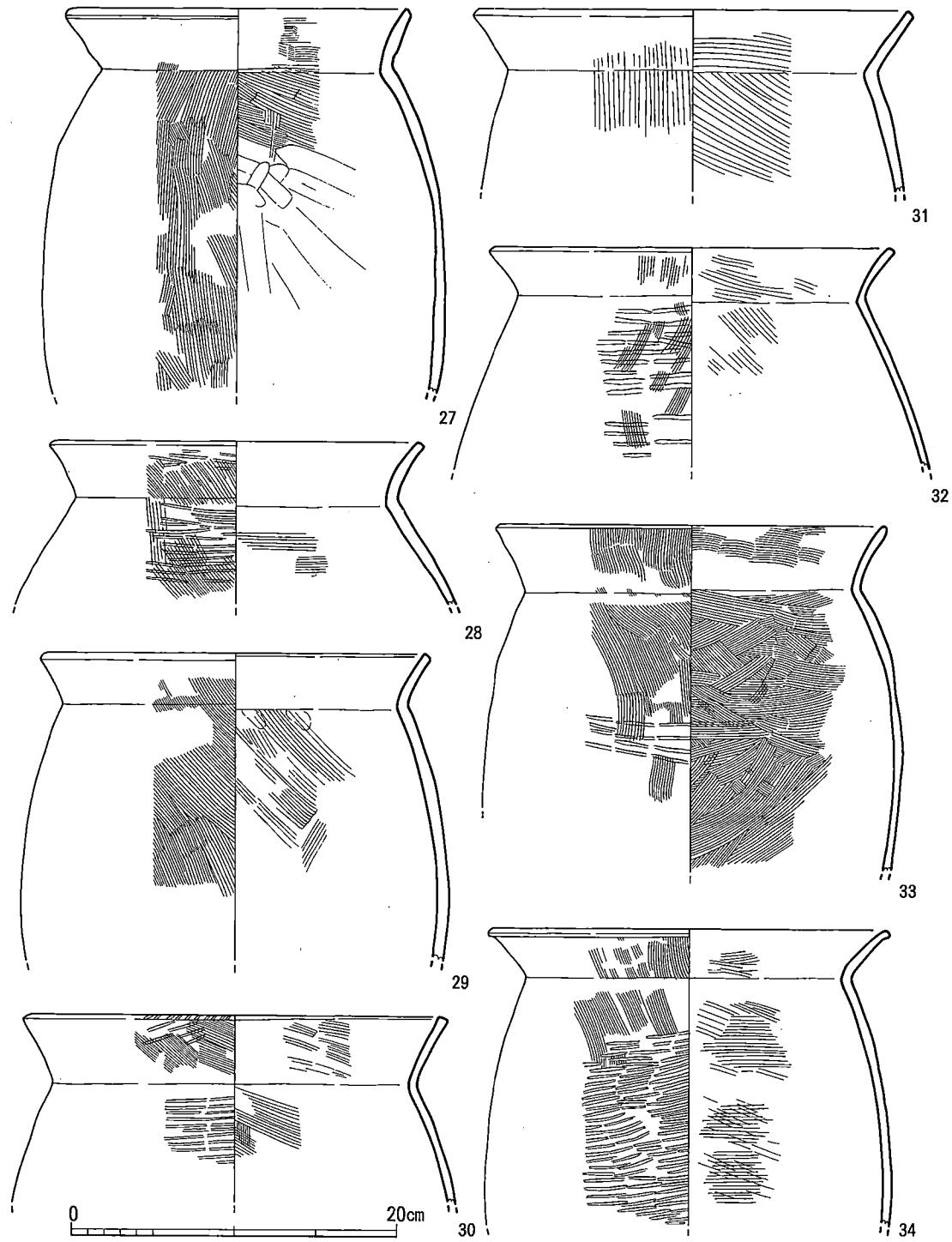
第 71 図 2号落込出土土器実測図① (1/4)



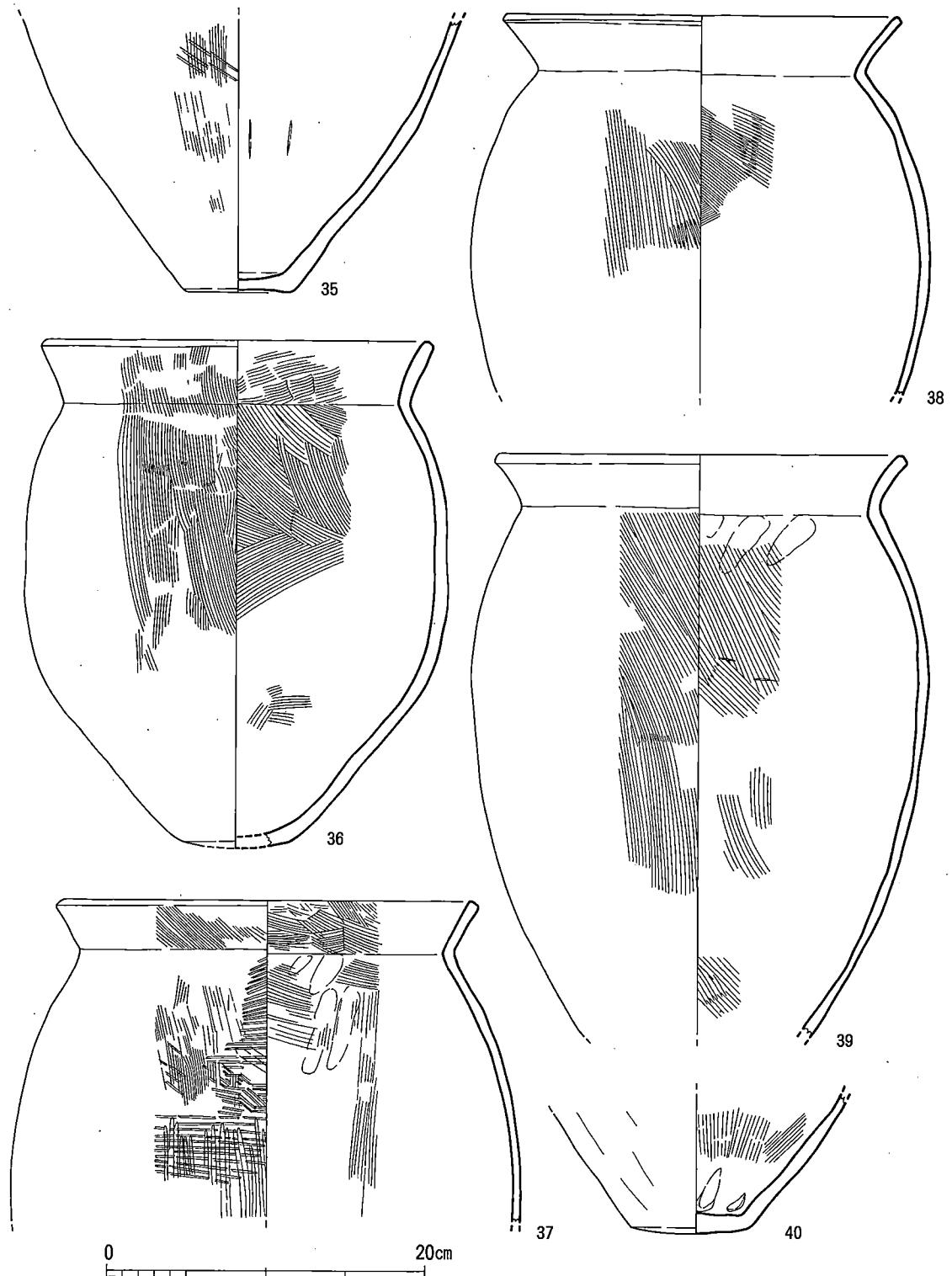
第 72 図 2号落込出土土器実測図② (1/4)



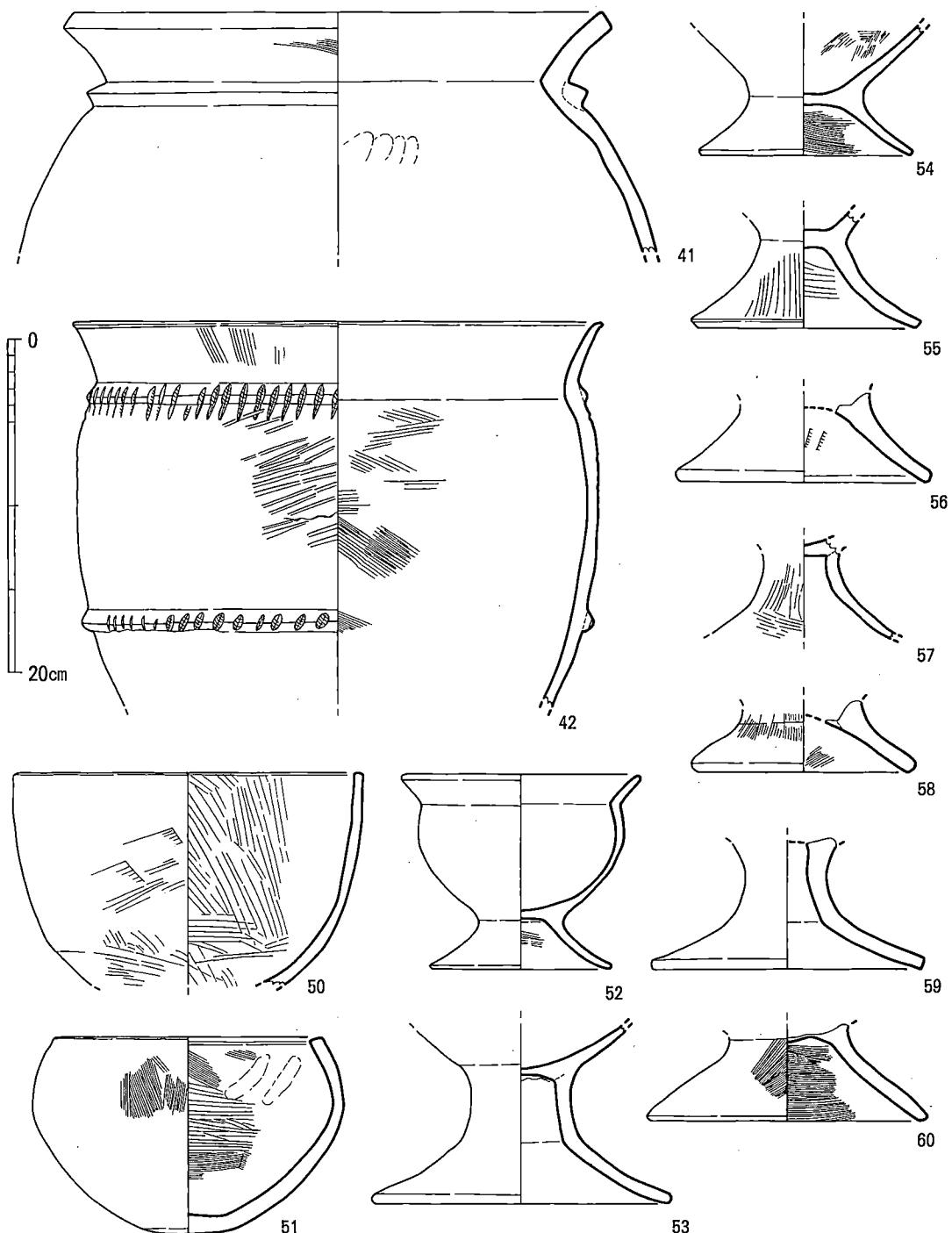
第 73 図 2号落出土器実測図③ (1/4)



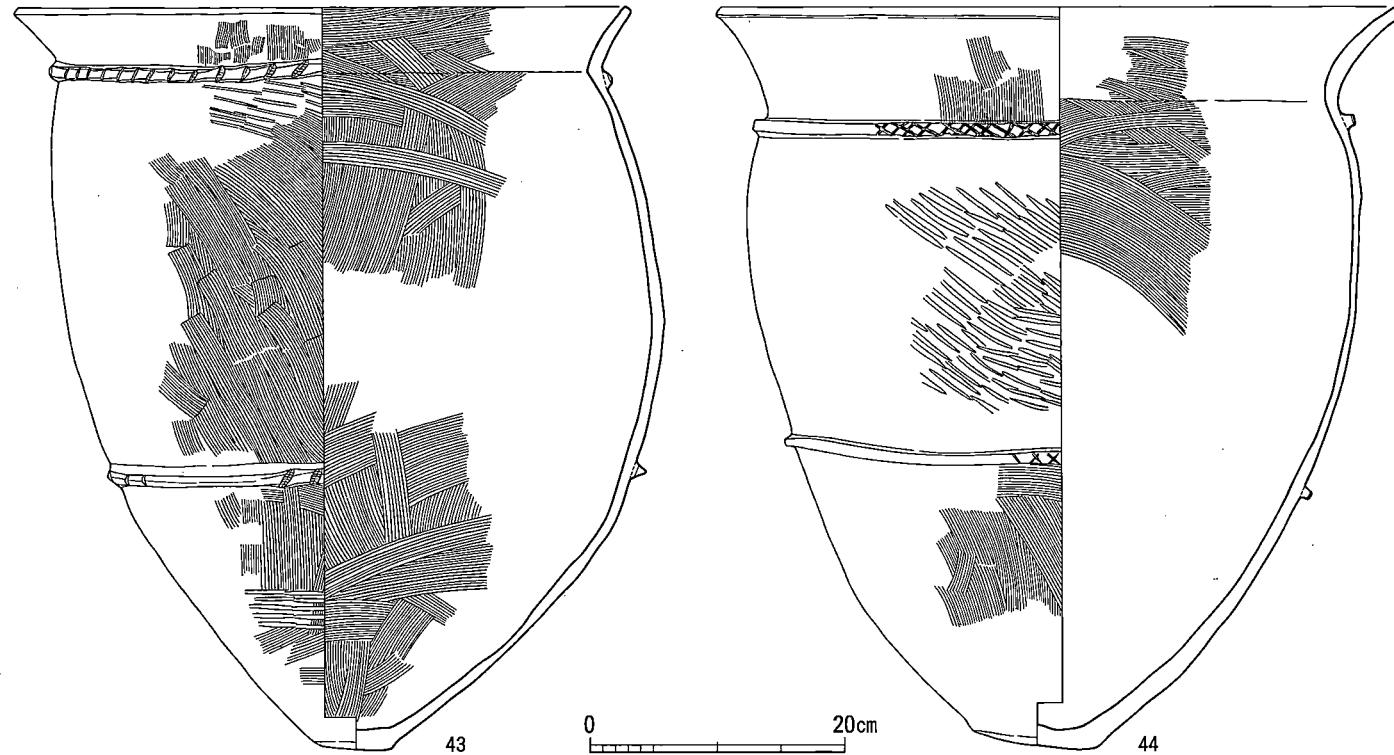
第 74 図 2号落込出土土器実測図④ (1/4)



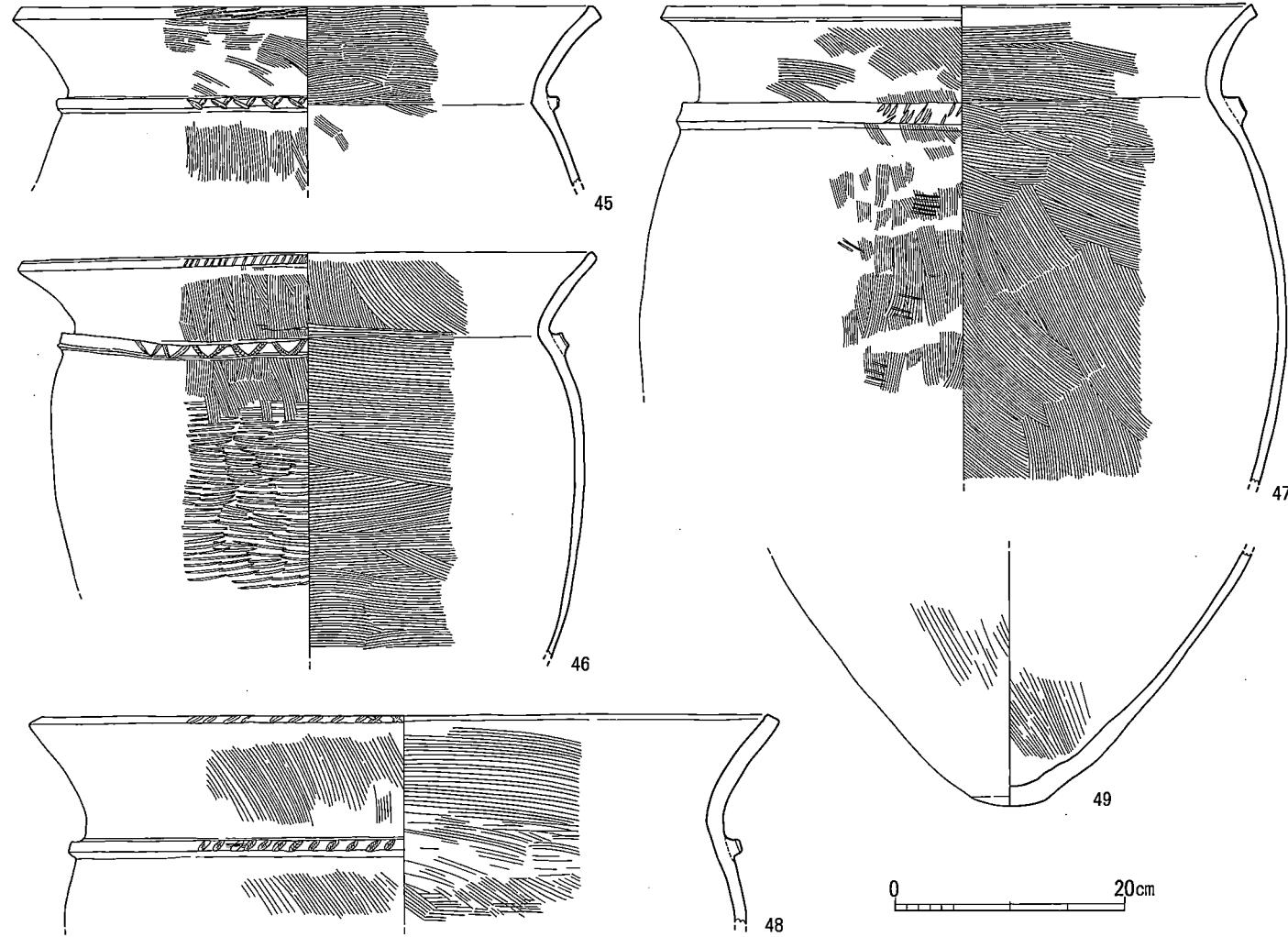
第 75 図 2号落出土土器実測図⑤ (1/4)



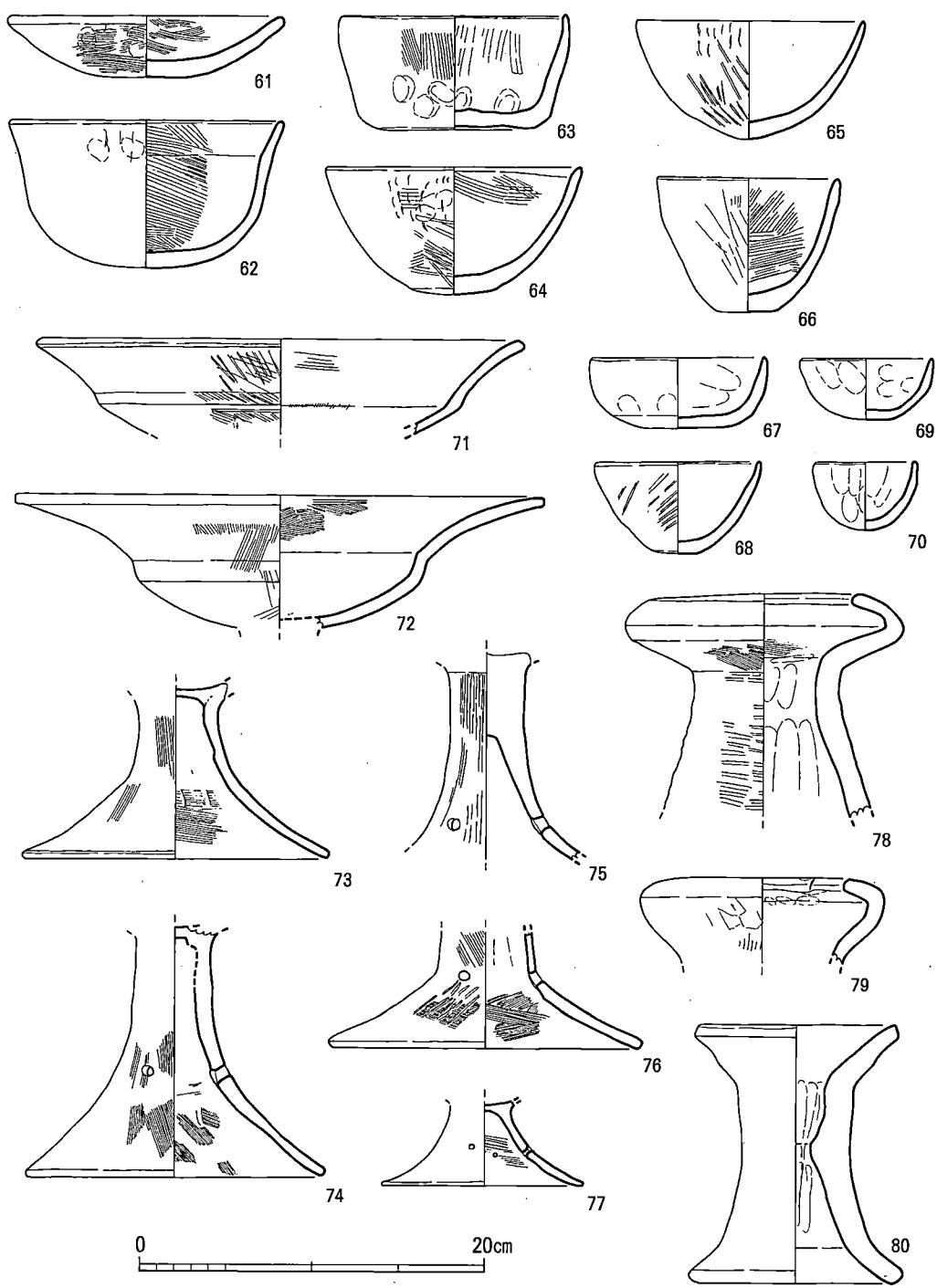
第 76 図 2号落出土土器実測図⑥ (1/4)



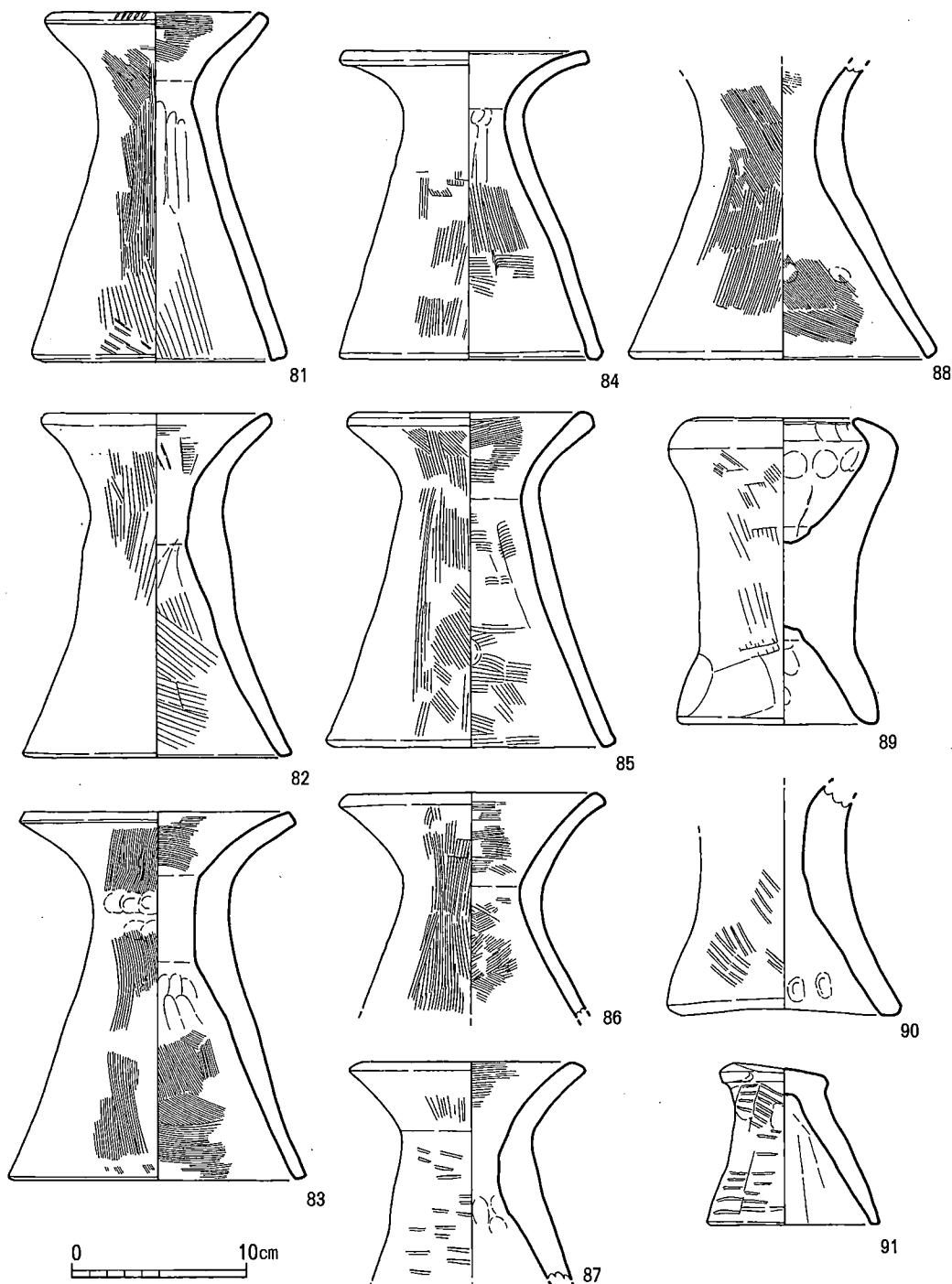
第 77 図 2号落込出土土器実測図⑦ (1/6)



第 78 図 2号落込出土土器実測図⑧ (1/6)



第 79 図 2号落出土土器実測図⑨ (1/4)



第 80 図 2号落出土土器実測図⑩ (1/4)

52～60は台付鉢で、52は口縁部が屈曲するもの。53～60は脚台部の破片で、裾部は「ハ」字形に開く。52は器高11.8cm、復原口径14.0cm、脚裾径10.7cmを測る。また、53・56・59の外面は二次加熱を受けて赤変している。

61～70は椀で、61は浅めの器形で、63・66・67が平底を残し、62・64は丸底で、65は尖底をなす。69・70手捏ねによる。器高は62が8.5cm、66は7.7cm、70は3.9cmで、口径は62が15.5cm、66は10.3cm、70は5.6cmを測る。

71～77は高杯で、71・72が杯部で、73～77は脚裾部の破片。72の口縁部は大きく開いている。74～77は焼成前穿孔の円孔を有し、74・75は3ヶ所に施し、76・77は4ヶ所に施している。73・74・77はハケ目で、75・76はミガキ調製による。

78～88は器台で、78・79が袋形を呈し、80は鼓形、81～88は頸部が締まるタイプ。78・87は外面にタタキ目を残している。また、81は口唇部にキザミ目を付している。器高は80が15.0cm、81は20.2cm、84は17.8cm、85は19.3cmで、口径は80が11.2cm、81は11.8cm、84は13.8cm、85は12.7cmで、脚裾径は80が11.2cm、81は13.0cm、84は14.4cm、85は15.3cmを測る。また、84の外面には煤が遺存している。

89～91は支脚。89の頭部は袋状を呈し、裾部は短脚である。肉厚で、重量感のある器形。89の器高は17.6cm、口径は8.4cmで、脚裾径は11.3cmを測る。90は肉厚のもので、裾部径13.2cm。91の裾部は割とシャープで、上面は傾斜している。外面にはタタキ目を残している。器高は9.3cm、上面径は6.3cm、裾部径は9.8cmを測る。

**鉄 器 (6)** 6は袋状鉄斧で、長さ6.3cm、刃部幅3.8cm、袋部径2.1×3.9cmを測る。

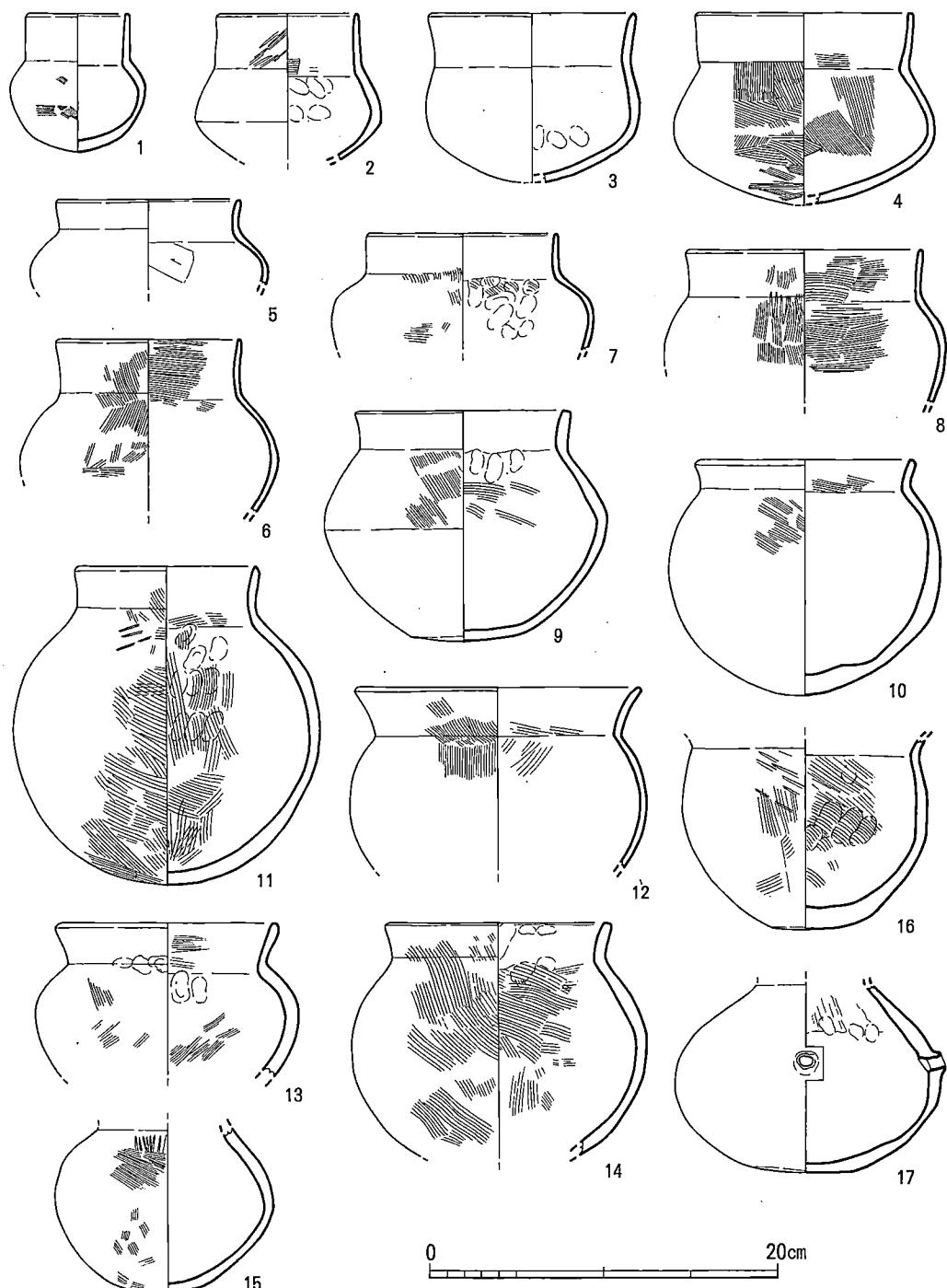
**土 製 品 (2)** 2は甕のミニチュア品で、器高4.9cm、口径4.15cm。

### 3号落込（図版19、第70図）

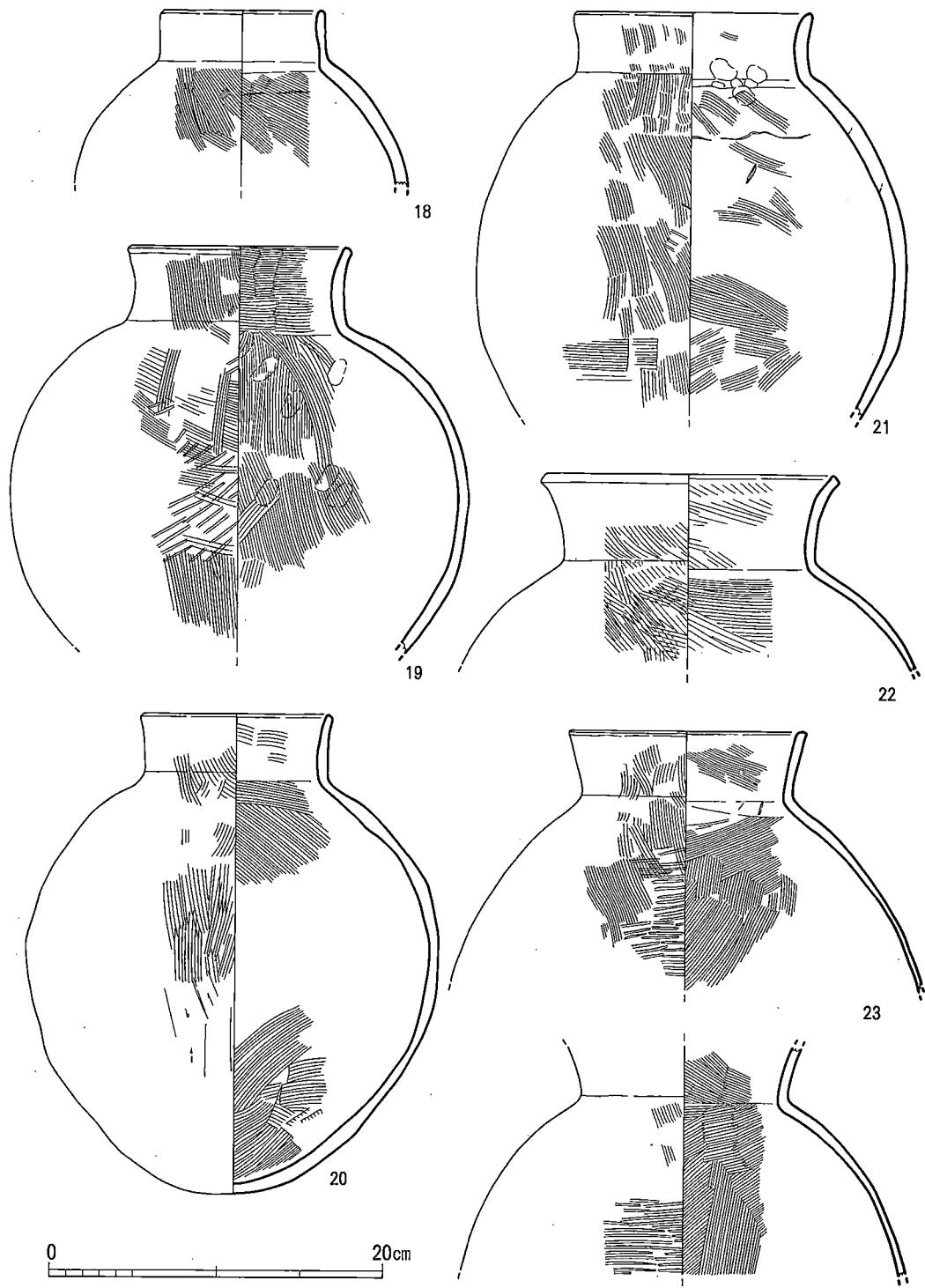
3号通路最下段の西側一帯（網掛け部分）には弥生土器が多量に落込んでおり、この部分を3号落込として出土土器を報告する。落込の堆積土は暗褐色土を基調とし、土器の大半は土層図の①層中の出土である。

### 出土遺物（図版49～53、56-1・57-2・57-3、第81～96・115・117図）

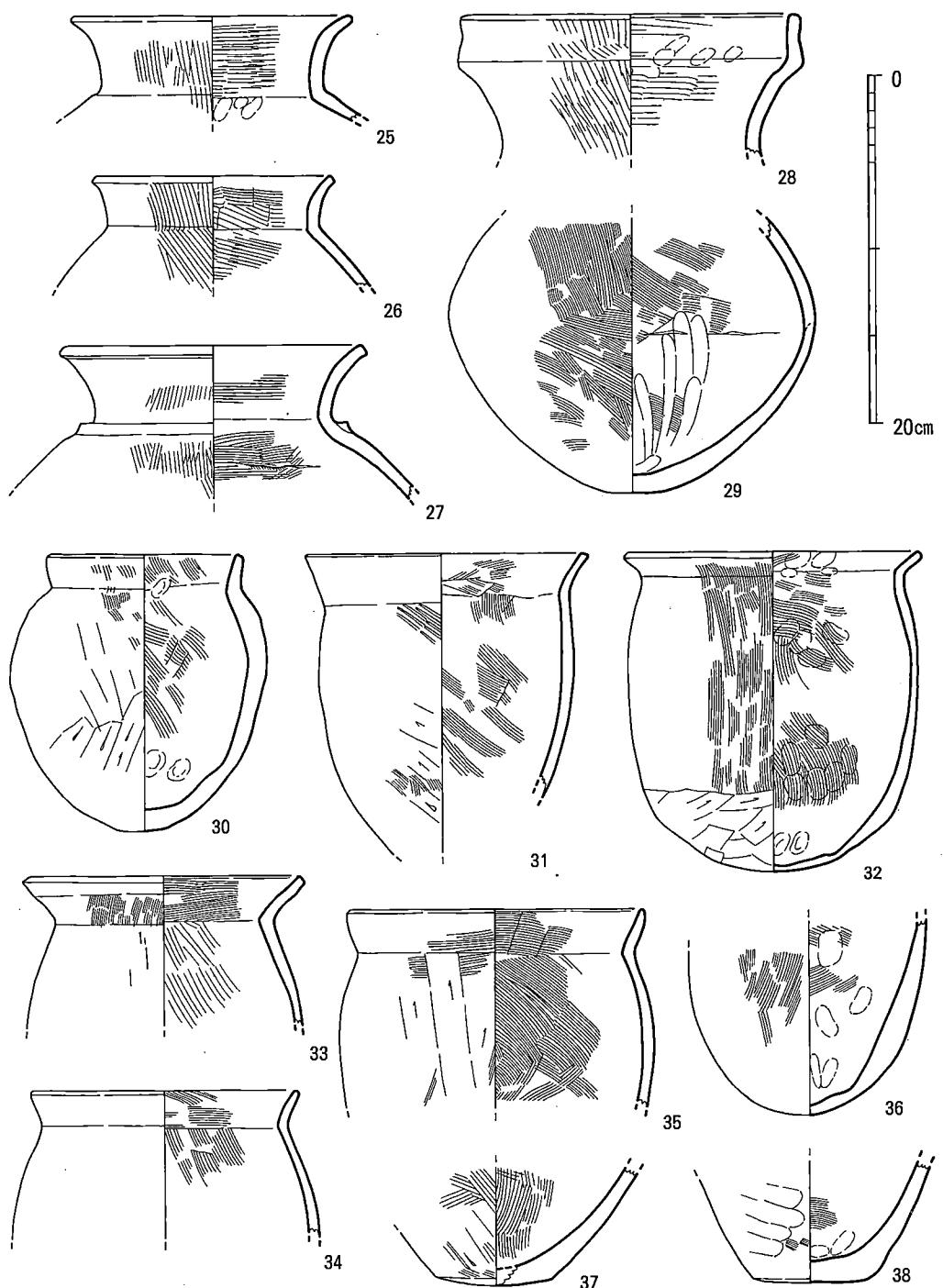
**土 器 (1～167)** 1～28は壺で、1～4・6・11は小型の直口壺で、器高は1が7.8cm、4は11.0cm、11は18.2cmで、口径は1が5.6cm、4は12.0cm、11は10.2cmを測る。1の胎土は割と良好である。5・7～10・14は小型の短頸壺で、器高は9が13.2cm、10は13.5cmで、口径は9が11.4cm、10は12.0cmを測る。12・13は小型の広口壺で、14・15は口縁部を欠く。17は注口土器で、胴部の中程に8cmほどの円孔を有する。頸部の締まりは良く、長頸を呈するものか。18～21は口径10～15cmの直口壺で、19の胴部は球形を呈する。20は器高28.8cm、口径11.0cmを測る。また、18の外面には煤が付着している。22～27は広口壺であるが、23の口縁部は直線的に開く。27は頸



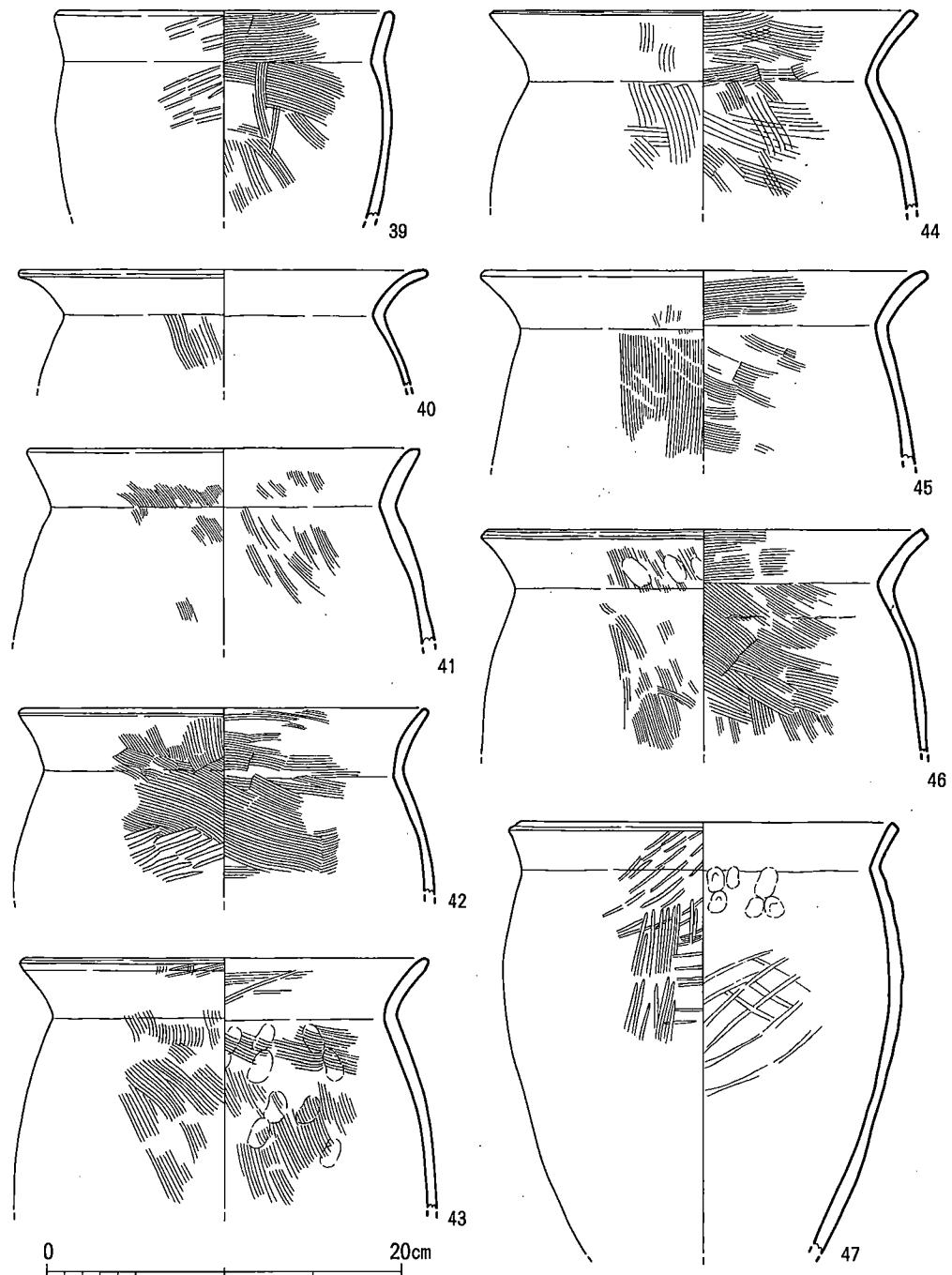
第 81 図 3号落出土土器実測図① (1/4)



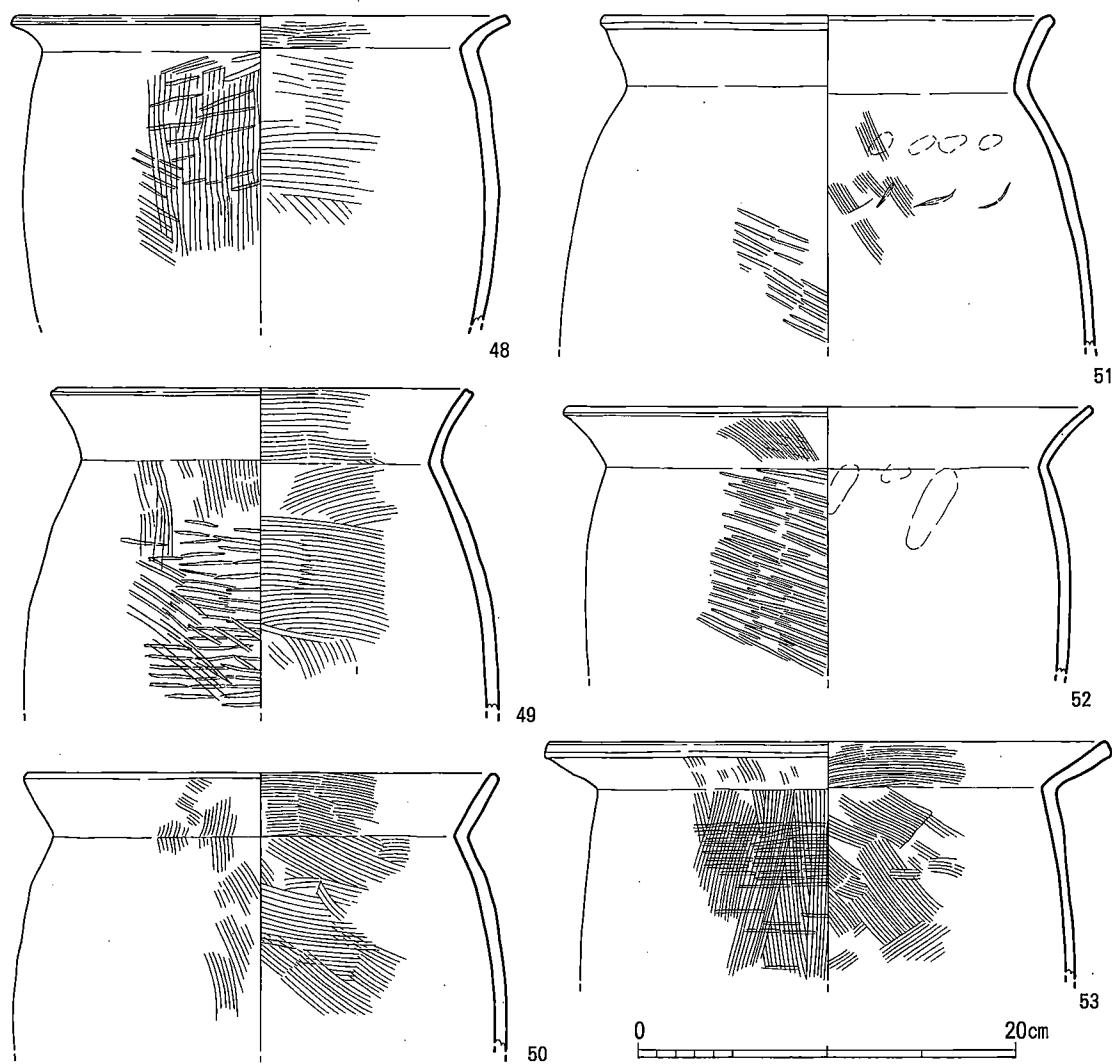
第 82 図 3号落込出土土器実測図② (1/4)



第 83 図 3号落出土器実測図③ (1/4)



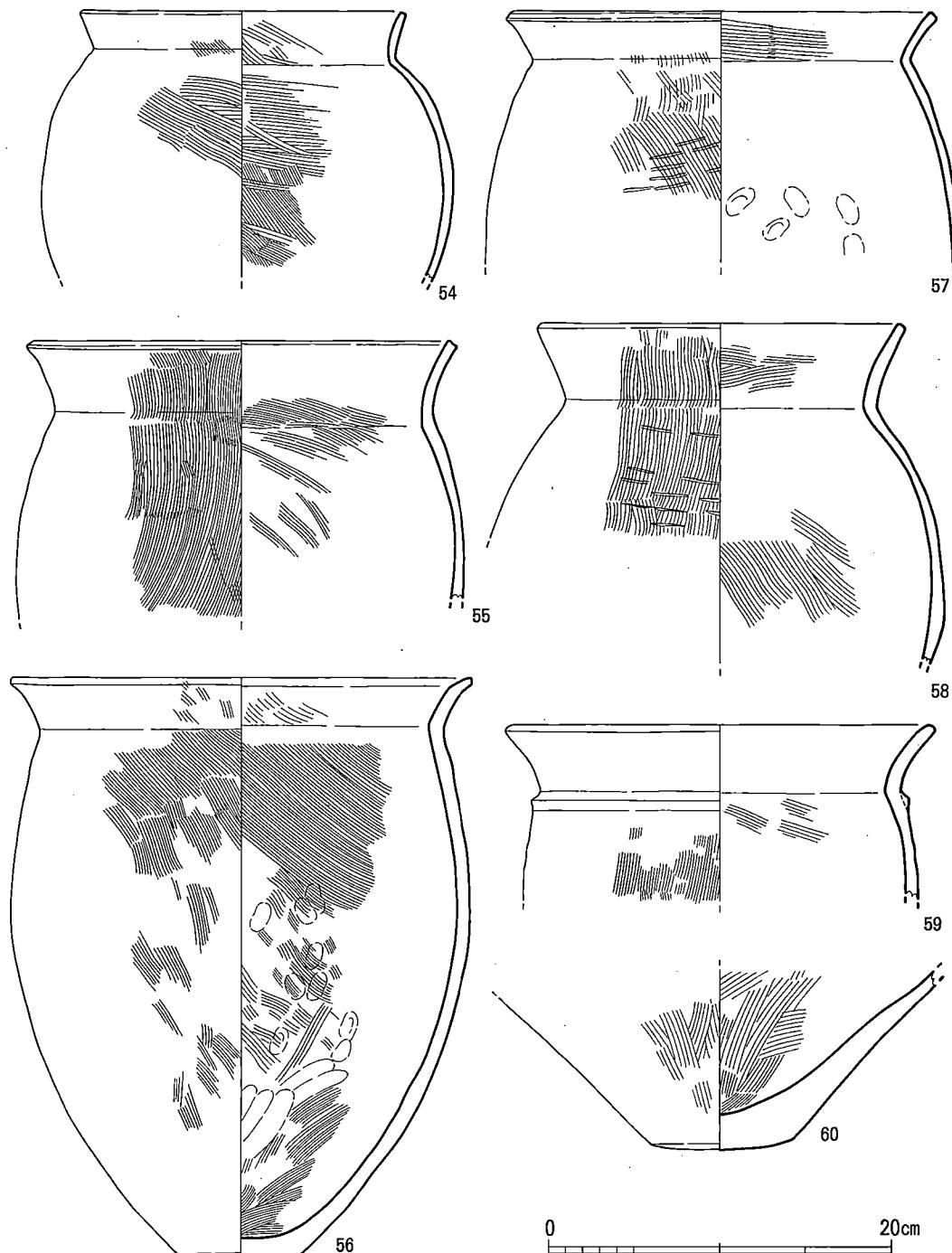
第 84 図 3号落込出土土器実測図④ (1/4)



第 85 図 3号落込出土土器実測図⑤ (1/4)

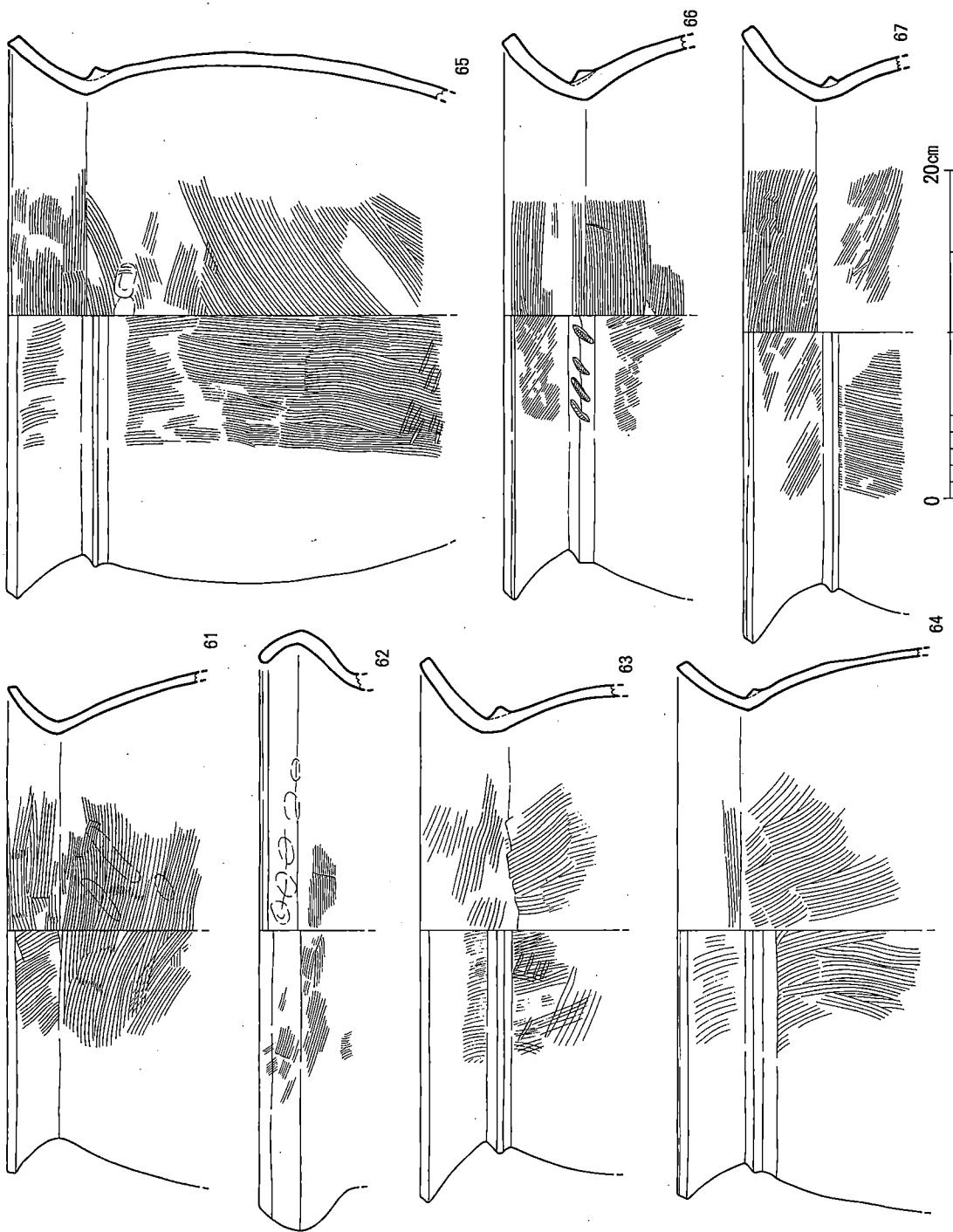
部に三角凸帯を貼付している。28は二重口縁壺で、大きく開いた頸部から口縁部が直立する。29は口縁部を欠くが、頸部が締まっていることから壺とした。何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、2・15の外面調製はミガキにより、20の胴下半部外面には擦過がみられる。

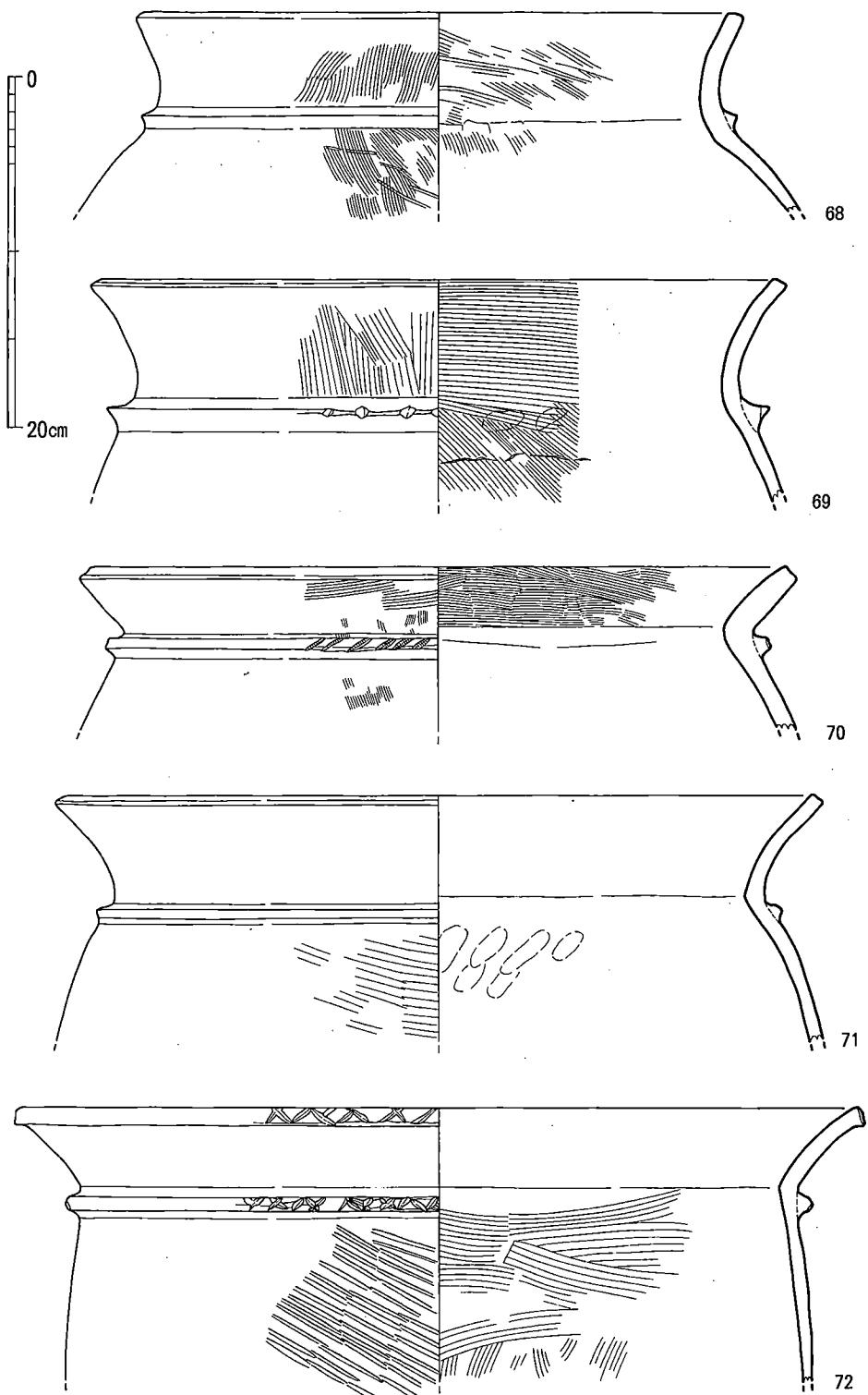
30は小型の甕で、口縁部は短く外方に立つ。肉厚の器形で、器高15.8cm、口径10.6cmを測る。31～35・39～58・61は「く」字形口縁甕で、36～38は底部付近の破片。31～35は口径が15～17cm前後の小型品で、32の底部は丸底である。32は器高18.4cmで、口径は16.6cmを測る。39の頸



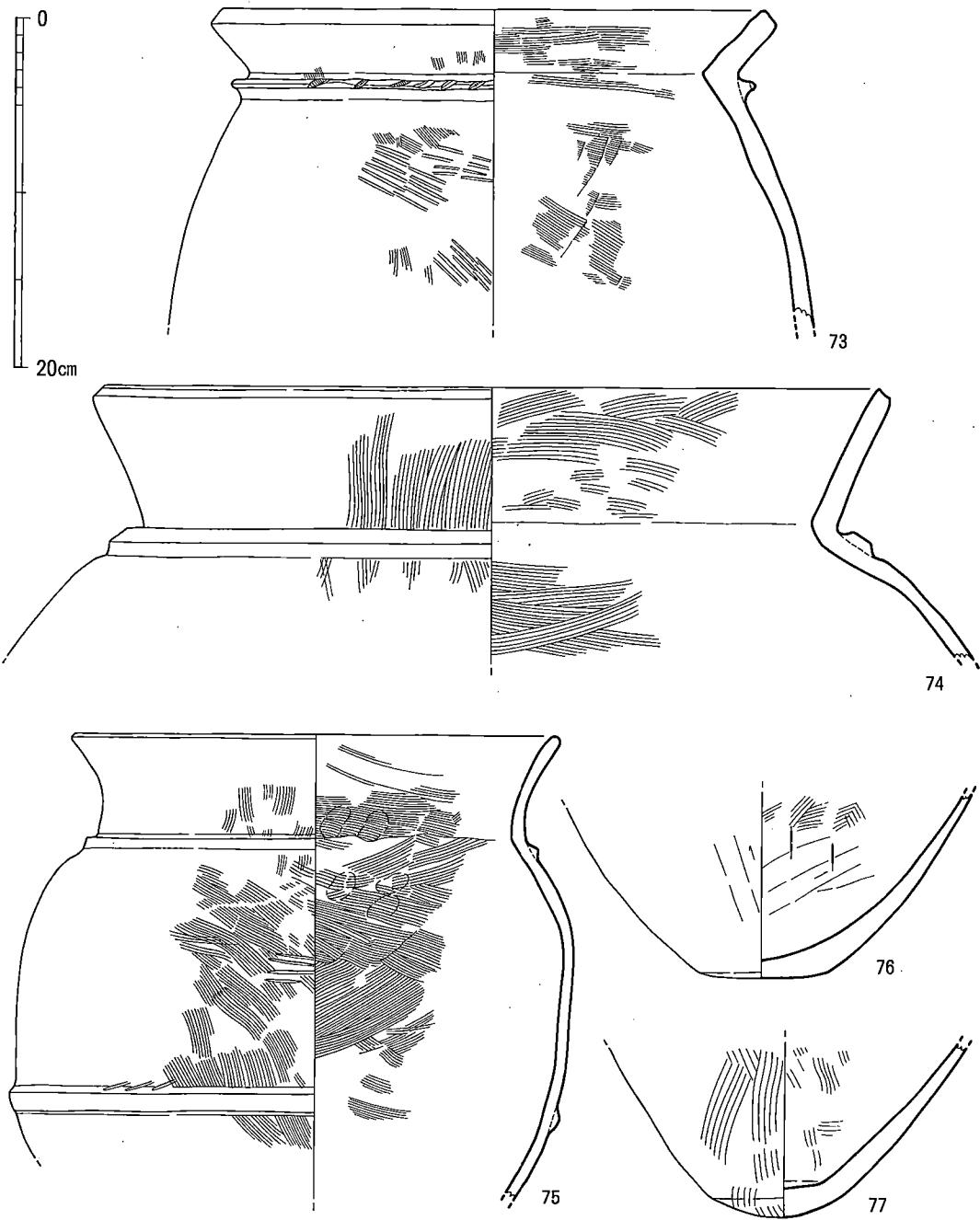
第 86 図 3号落出土土器実測図⑥ (1/4)

第 87 図 3号落込出土土器実測図⑦ (1/4)





第 88 図 3号落出土土器実測図⑧ (1/4)



第 89 図 3号落出土土器実測図⑨ (1/4)

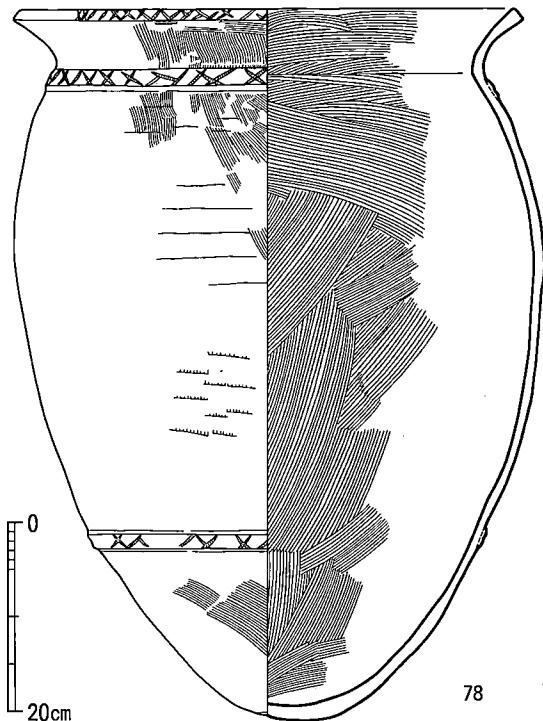
部の締まりは悪い。40～58は口径が22～28cmほどの口縁部から胴部上半部にかけての破片であるが、胴部は長胴を呈しよう。54の胴部は球状に張っている。56は器高34.0cm、口径26.8cmで、平底の底部は6.6cmを測る。

何れも調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目を基調とするが、30～32・35・37の胴下半部外面には擦過がみられる。また、39～46・48～50・52・53・55～58の外面には煤が遺存する。

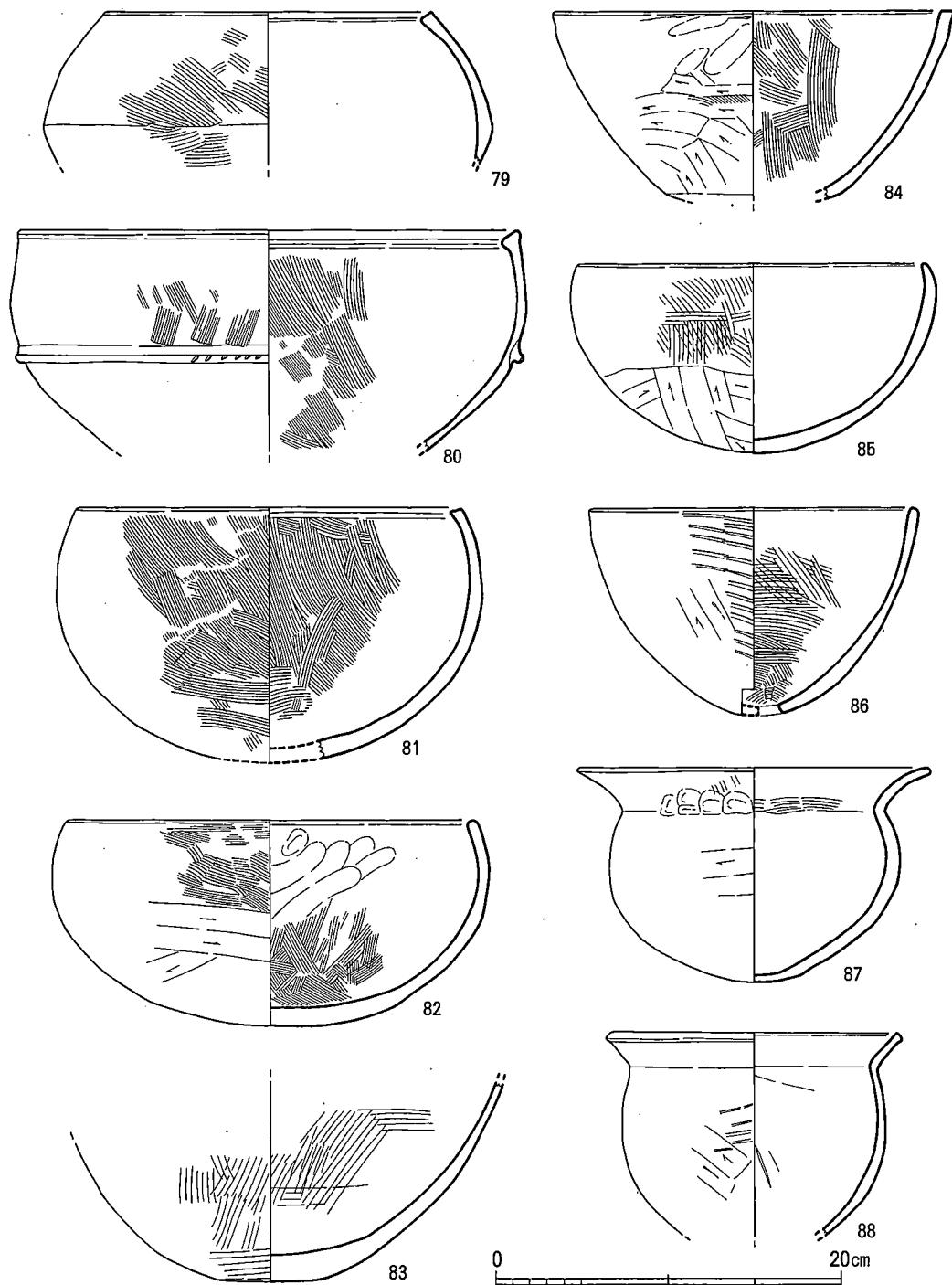
59・63～75は頸部に凸帯を貼付する甕で、口径は59が24.0cmで、63～66・68・73は33cm前後、67～70は36～39cm前後で、71・72・74は口径が40cmを越えるもの。59・63・64・67・68は三角凸帯を貼付し、66・69はキザミ目を付した三角凸帯を貼付する。70・73はキザミ目を付した「コ」字形凸帯を貼付し、72は頸部凸帯と口唇部にも「X」字形のキザミ目を施している。74の凸帯は断面台形の扁平な凸帯。75は頸部に三角凸帯を貼付し、胴下半部には扁平な凸帯を貼付している。62の口縁部は袋状を呈するが、頸部に締まりはなく甕に含めた。78は甕棺用の大甕で、器高74.8cm、口径52.2cmを測る。底部は尖底状をなす。頸部と胴下半部に扁平な凸帯を貼付し、口唇部も含めて「X」字形のキザミ目を付している。調整は外面タタキ目→ハケ目、内面ハケ目であるが、胴部中位のハケ目を撫で消している。

79～90は鉢で、79は口縁部が内傾する。80は口縁端部が肥厚するもの。81・82・85は料理用のボール形を呈し、ともに口縁部は内傾している。84・86は口縁部が開くタイプで、86は底部に穿孔を施し、瓶としている。87～90は口縁部が屈曲するタイプのもの。器高は82が12.0cm、85は10.8cm、86は12.0cm、87は12.4cmで、口径は82が23.4cm、85は19.8cm、85は18.4cm、87は20.1cmを測る。また、87・90の外面には煤の付着がみられる。

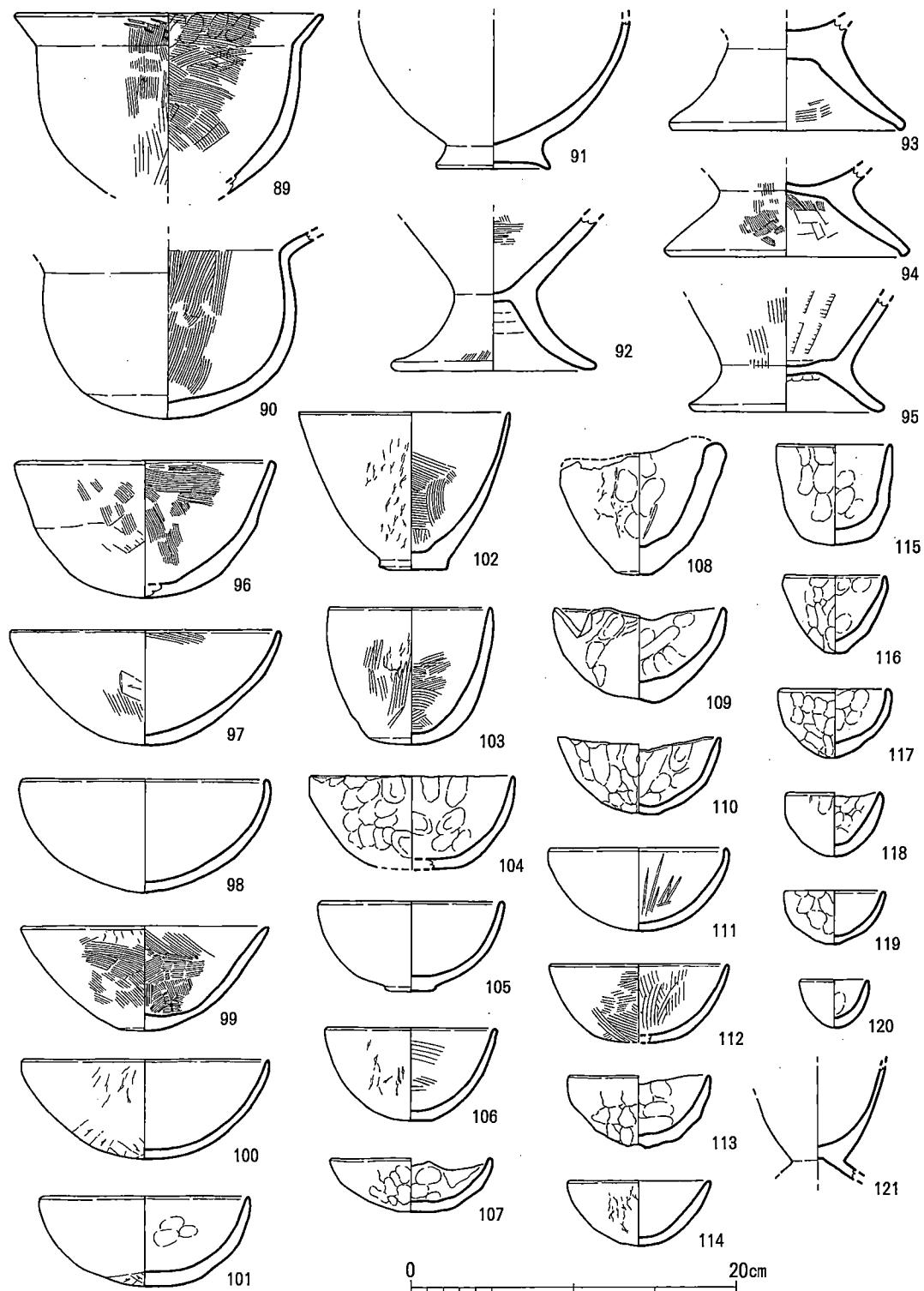
91～95は台付鉢。91は口縁部がそのまま開くもので、脚台部は高台状をなす。92～95は脚台部の破片で、裾部は「ハ」字形に開く。95は他に比して短脚である。



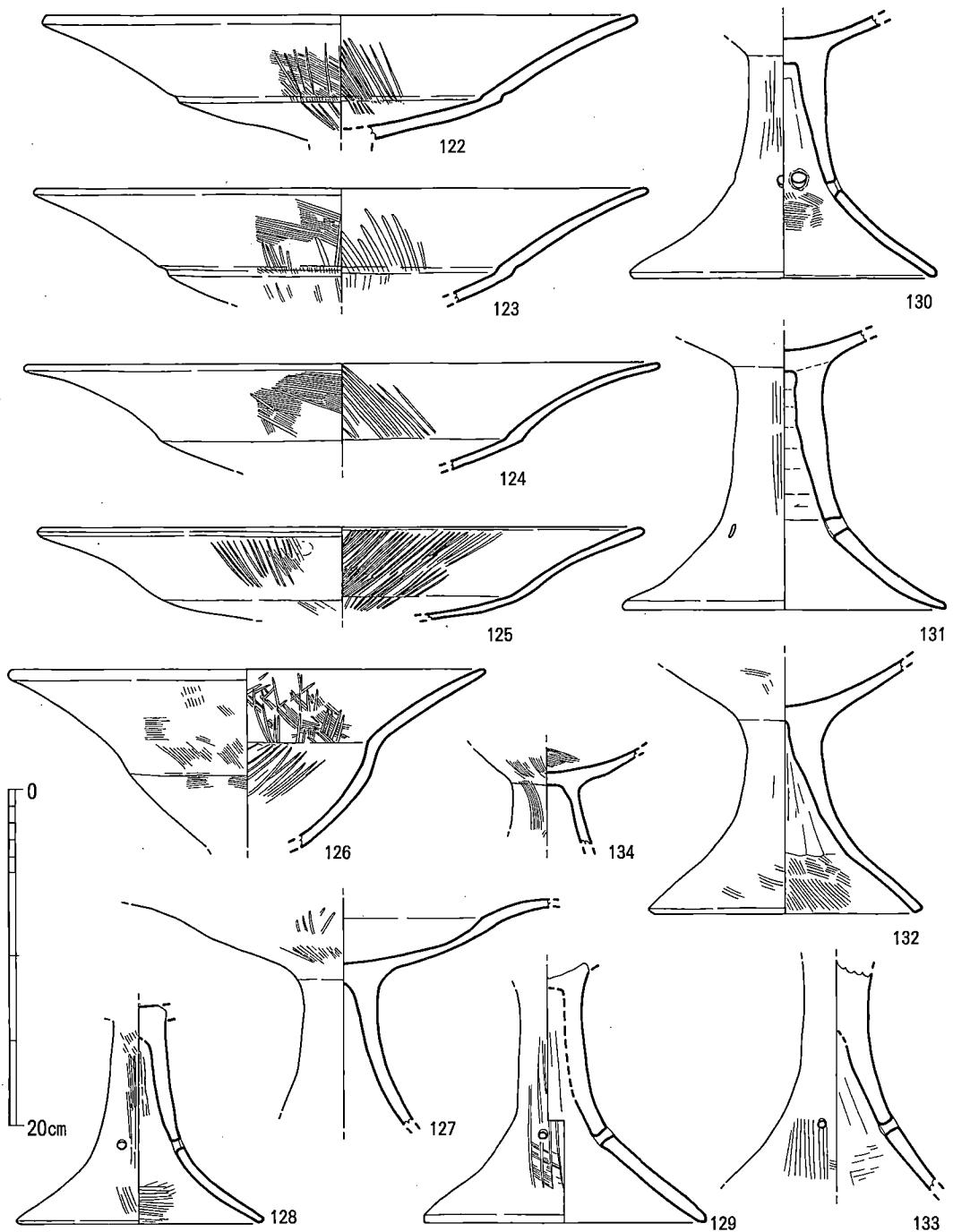
第90図 3号落込出土土器実測図⑩ (1/8)



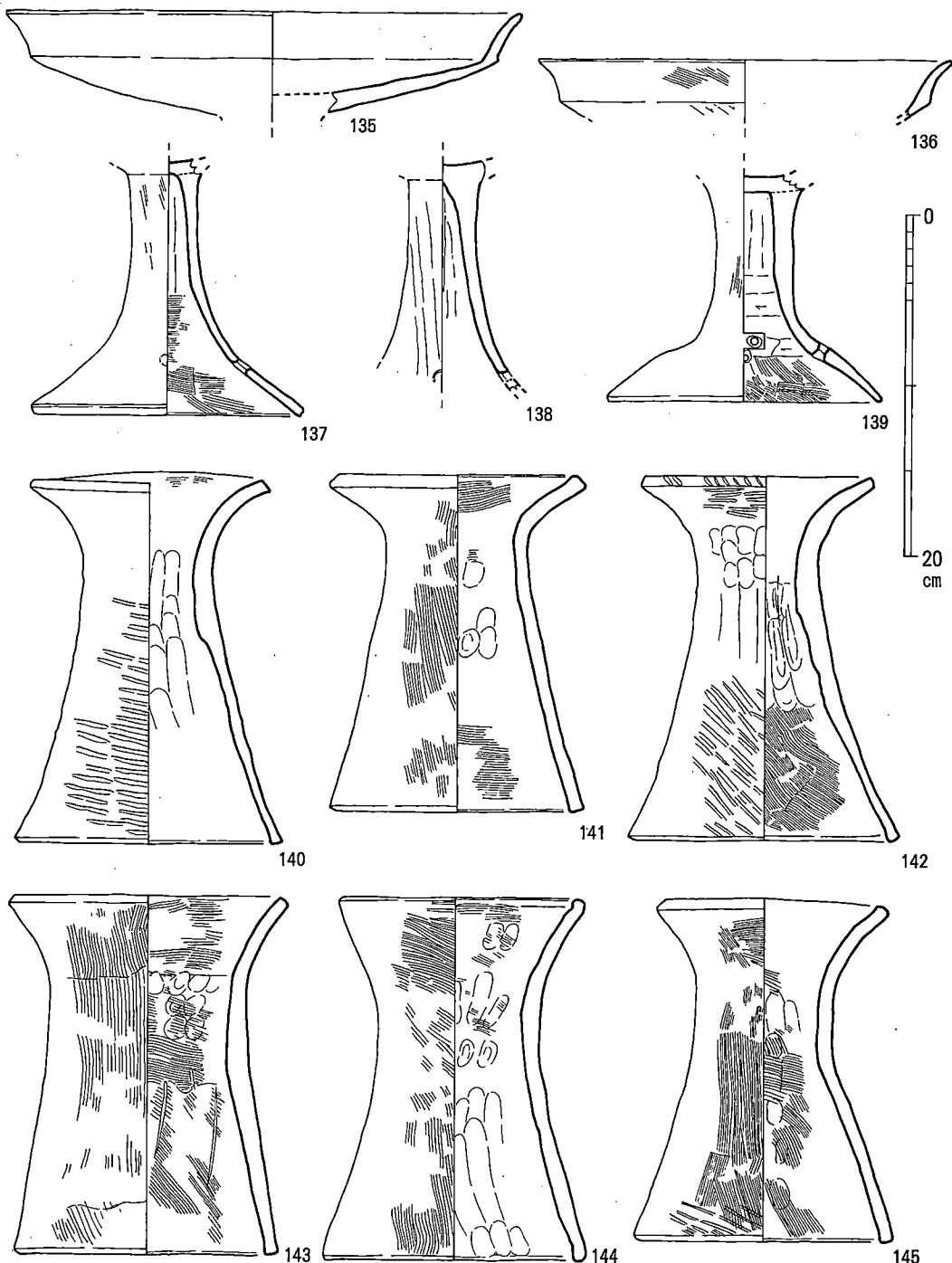
第 91 図 3号落出土器実測図⑪ (1/4)



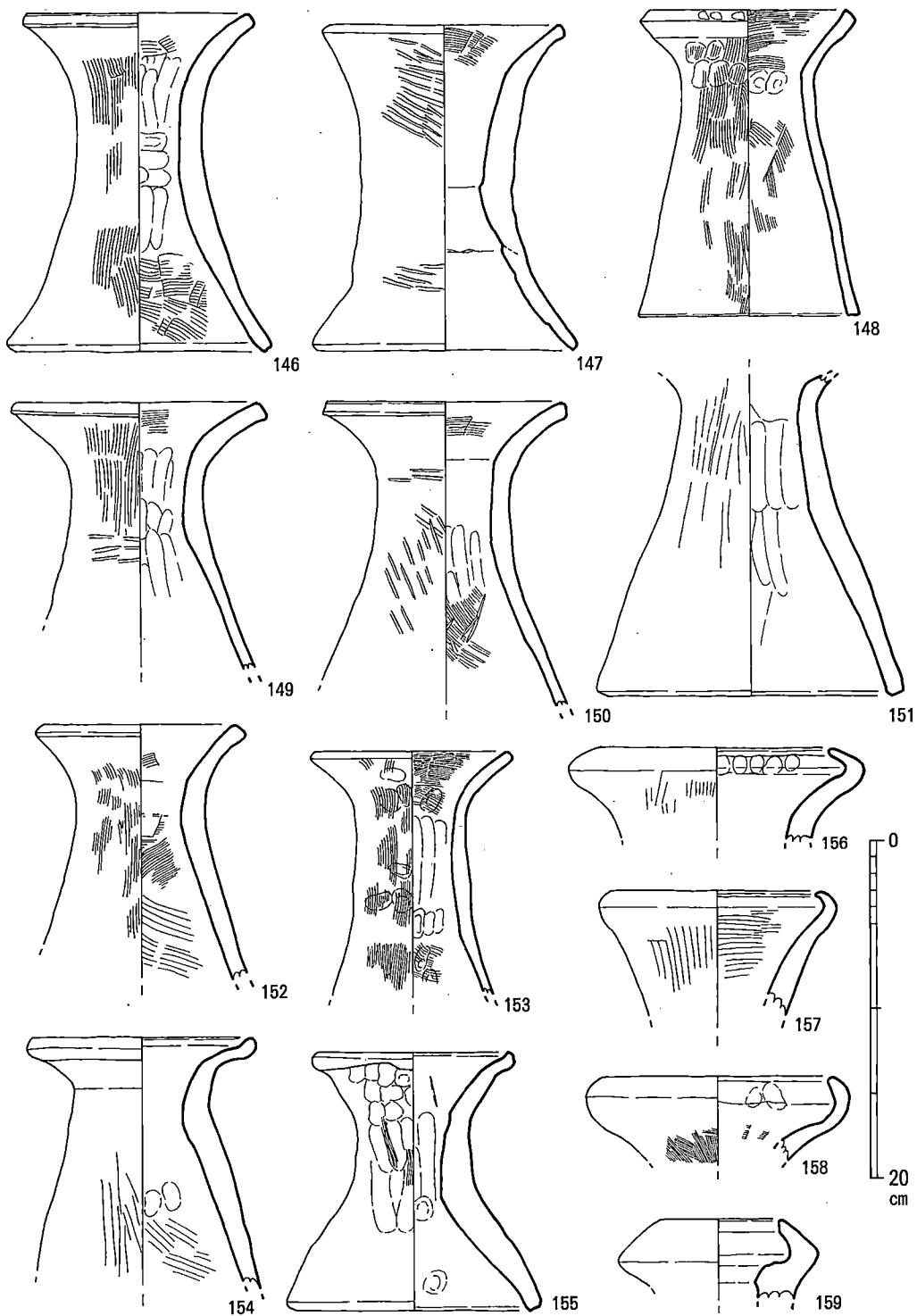
第 92 図 3号落出土土器実測図⑫ (1/4)



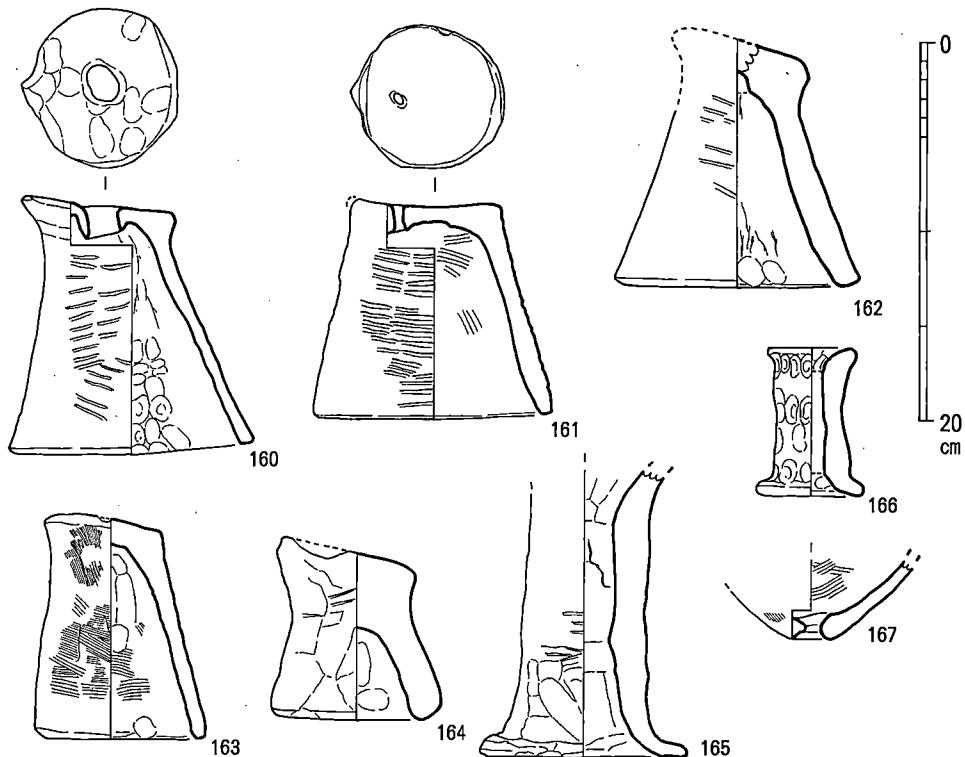
第 93 図 3号落込出土土器実測図⑬ (1/4)



第 94 図 3号落出土器実測図⑭ (1/4)



第 95 図 3号落出土土器実測図⑮ (1/4)



第 96 図 3号落込出土土器実測図⑯ (1/4)

95~120は椀で、97~101・107は浅めの器形。102・103は深めの器形で、102の底部は平底を呈する。104・107・108~110・113・115~120は手捏ねにより、内外面に指頭痕を残す。器高は97が7.0cm、100は6.0cm、102は9.7cm、105は5.7cm、114は4.0cm、119は3.3cmで、口径は97が16.3cm、100は15.0cm、102は12.9cm、105は11.1cm、114は8.6cm、119は5.8cmを測る。

121は台付椀で、口縁端部を欠くが、口縁部はそのまま開くものであろう。割と精良な胎土を使用しており、色調は黄橙色を呈する。

122~139は高坏で、122~126・135・136が坏部で、127~134・137~139は脚柱部の破片。122~125・127は坏部が浅く、口縁部が大きく広がるものであるが、126は坏部が深めで、前者ほど広がらない。135・136の坏部は屈曲部から外反して口縁部が立つもの。何れも坏部の調整はハケ目の後に籠ミガキを施している。128・129~131・133・137~139は焼成前穿孔の円孔を有し、128は3ヶ所に施し、129~131・133・137~139は4ヶ所に施している。

140~159は器台で、140・142~147・149・152・153が鼓形を呈し、141・148・150・151・154・155は口縁部が締まるタイプ。156~159は頭部が袋状を呈するもので、口縁部は鉤形に折れ曲がる。140・142・147は顯著にタタキ目を残している。また、142・148の口唇部にはキザミ目

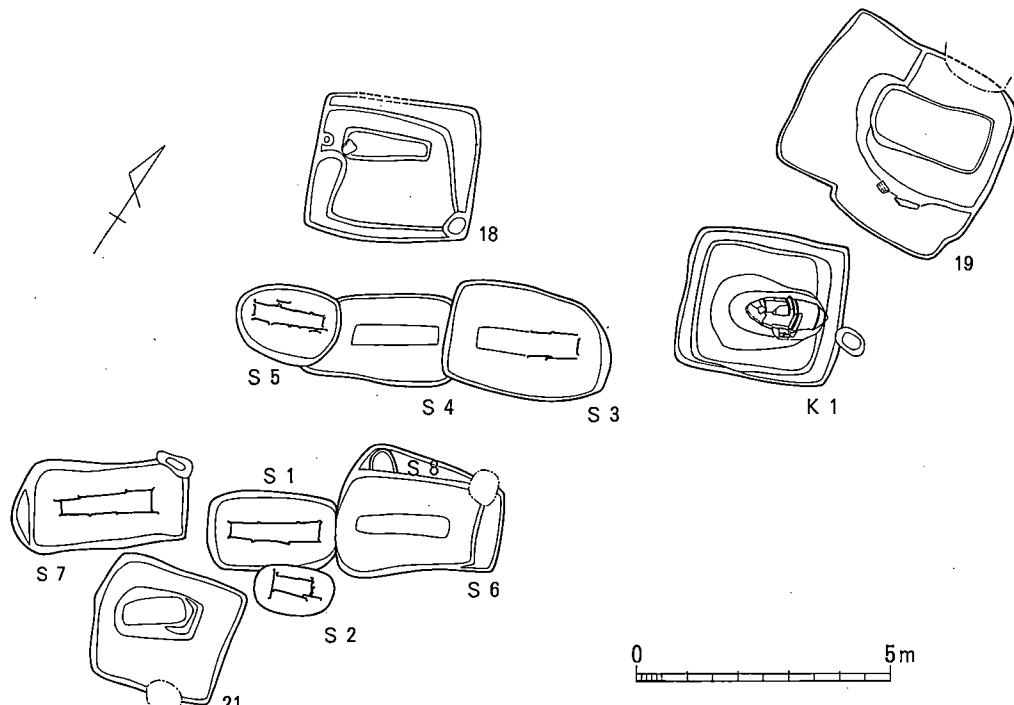
を付している。器高は146が20.0cm、148が18.1cm、155は15.2cmで、口径は146が13.0cm、148が1.4cm、155は11.2cmで、脚裾径は146が14.6cm、148が12.9cm、155は13.8cmを測る。

161～166は支脚で、160・161・163の裾部は割と細身であるが、162・164の裾部は肉厚。161・162は上部に焼成前穿孔の円孔を有する。161～164の上面は傾斜している。器高は160が13.7cm、161は11.3cm、163は11.8cmで、上面径は160が8.4cm、161は7.4cm、163は6.2cmで、裾部径は160が13.0cm、161は12.4cm、163は8.4cmを測る。165・166は中空の器形をなすが、器高が低く小型であることから支脚とした。ともに手捏ねにより、指頭痕を残す。166は器高7.8cm、口径4.2cm、脚径5.2cmを測る。

167は甕若しくは鉢の底部を穿孔し、甕としたもの。

**石 器 (7)** 砂岩製の中砥程度のきめをもった有溝砥石。長さ7.1cm、幅5.0cm、厚さ2.0cm規模の不定型な破片を用い、片面の中央部に最大幅0.5cm、長さ6.5cmに直線的に伸びた1状の溝が砥面をなす。重さは75.6gを測る。

**鉄 器 (8・10・12・18～22)** 8は鑿で、長さ7.6cm、刃部幅1.3cm、袋部径1.6×1.9cmを測る。10・12は鎌で、10は残存長13.7cm、幅3.4cm。12は基部付近の小片になろう。幅2.5cm。18～22は鋤先で、18は長さ10.2cm、中央幅4.8cm。20は長さ10.9cm、幅6.4cmで、刃部は使用により曲がっている。19・21・22は欠損品で、幅は19が5.4cm、21は5.1cmを測る。



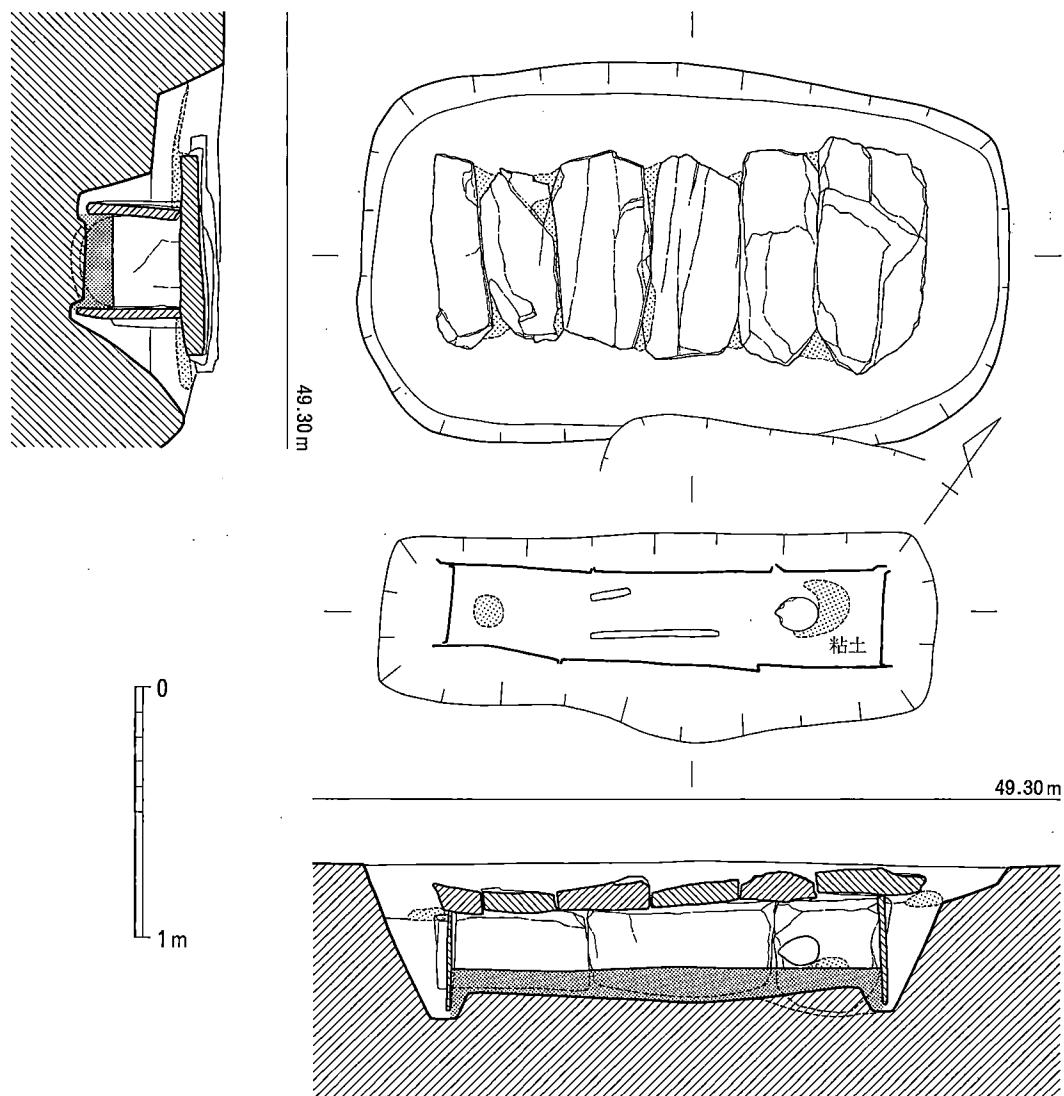
第 97 図 弥生時代墳墓群配置図 (1/150)

#### 4号落込（図版20、第70図）

4号通路最下段一帯（網掛け部分）を4号落込としたが、2・3号に比して弥生土器は殆ど包含されていない。土層の堆積状況は流れ込みの様相を呈し、北端部は谷部へと連続する。

#### （6）石棺墓

2次調査区の南東端部で石棺墓（8基）・甕棺墓（1基）・土壙墓（4基）からなる墳墓群を検出した。石棺墓は1・6・7号-A列と3・4・5号・K1-B列が2列に埋葬されている。



第98図 1号石棺墓実測図 (1/30)

### 1号石棺墓（図版23・24-1、第98図）

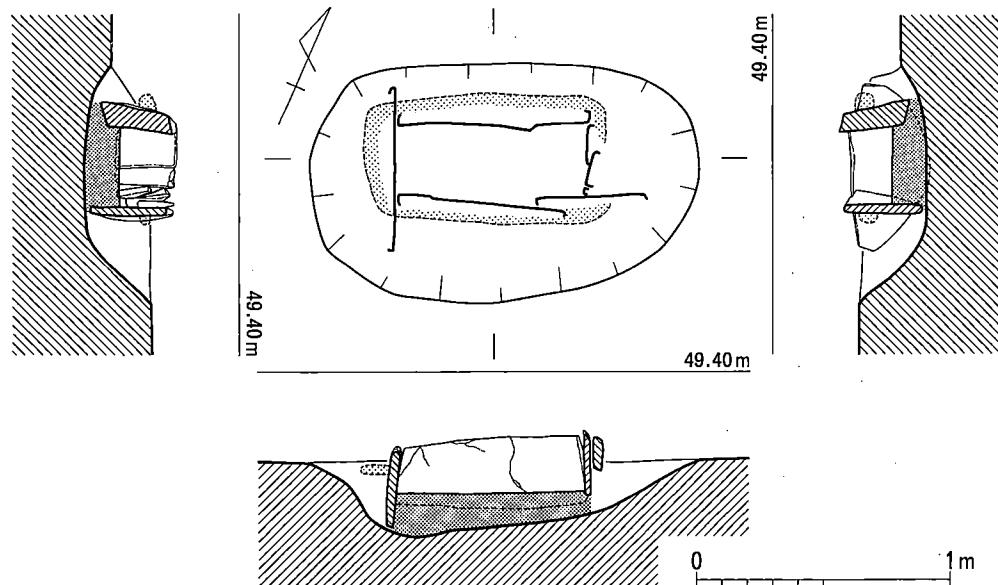
A列中央で、6・7号石棺墓との間に位置する。2号石棺墓に切られ、6号石棺墓とは墓壙を接する。墓壙は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込まれている。上段は長さ250cm、幅149cm、残高25cmで、下段は長さ219cm、幅77cm、高さ28cmを測る。蓋石は扁平な緑泥片岩を6枚並べ、石の隙間には灰白色粘土の目張りを施している。小口石は各1枚で、側石は各3枚で、小口石を挟み込むタイプである。小口に使用している石材は非常に薄く、2cmほどの厚さであった。また、側石の繋ぎ目は縁を打ち欠き細くして重ね合わせている。石棺の内法は長さ170cm、頭部側38cm、足下側31cmを測る。下段掘形に小口・側石を立てた後、12cmほど埋め戻し死床面としている。東小口側には粘土枕があり、遺存状態は悪かったものの頭骨・大腿骨が遺存しており、伸展葬であったことが窺われる。蓋石・側石・小口石の内面には赤色顔料を塗布しており、床面にも認められた。頭位方向はN34°Eを示す。副葬品として死床面から管玉が出土している。

### 出土遺物（巻頭図版、図版55-3、第105図、表3）

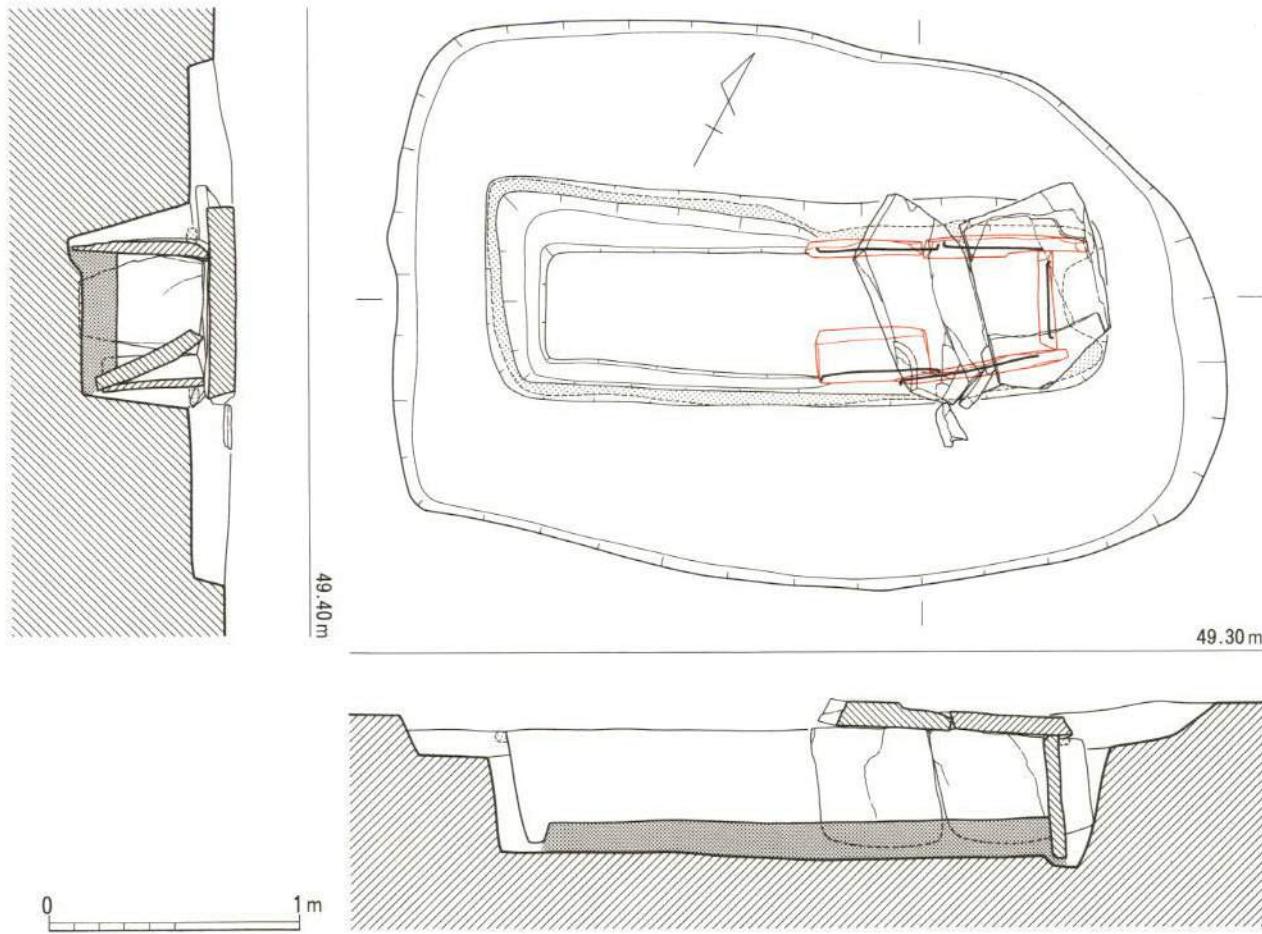
**管 玉（1~8）** 碧玉製の管玉で、床面から8点出土した。長さ5.5~12.5mm、径3.0mmほどで、個々の法量については表3の玉類計測表を参照されたい。

### 2号石棺墓（図版23-1・24-2、第99図）

A列中央で、1号石棺墓の墓壙を切って南側に位置する。墓壙は楕円形を呈し、長さ154cm、幅95cm、残高30cmを測る。2段に掘り込まれていたかは、蓋石が跳ばされているので不明。側



第99図 2号石棺墓実測図 (1/30)



第 100 図 3号石棺墓実測図 (1/30)

石の周囲には灰白色粘土の目張りが遺存している。小口石は東側が2枚、西側が1枚で、側石は北側が1枚、南側が2枚であったが、東小口の北側にも板石があり、北側石も2枚であった可能性がある。石棺の内法は長さ76cm、西小口幅28cm、北小口幅29cmを測る。床面は掘形を一旦埋めて水平にしている。人骨は遺存していなかったが、法量的に小児棺であり、小口石の状況からみて西側が頭位になるか。長軸方位はN 23° Eを示す。副葬品の出土は無かった。

### 3号石棺墓（図版25、第100図）

B列中央で、5号石棺墓と1号甕棺墓との間に位置し、4号石棺墓を切っている。墓壙は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込まれている。上段は長さ325cm、幅220cm、残高18cmで、下段は長さ244cm、幅84cm、高さ48cmを測る。蓋石は東側に2枚残っている状態であるが、5枚ほど被せていたものか。石の隙間には灰白色粘土の目張りを施しているが、蓋石のない西側にも巡っている。小口石は各1枚で、側石は左右2枚残っているが、抜き跡から判断して各4枚で、小口石を挟み込むタイプである。石棺の内法は長さ192cm、東小口側41cm、西小口側41cmを測る。死床面は1号石棺墓同様、掘形下段に小口・側石を立てた後、15cmほど埋め戻して水平にしている。規模的に成人棺であるが、他の例からして頭位は東側であろう。長軸方向はN 29° Eを示す。副葬品の出土は無かった。

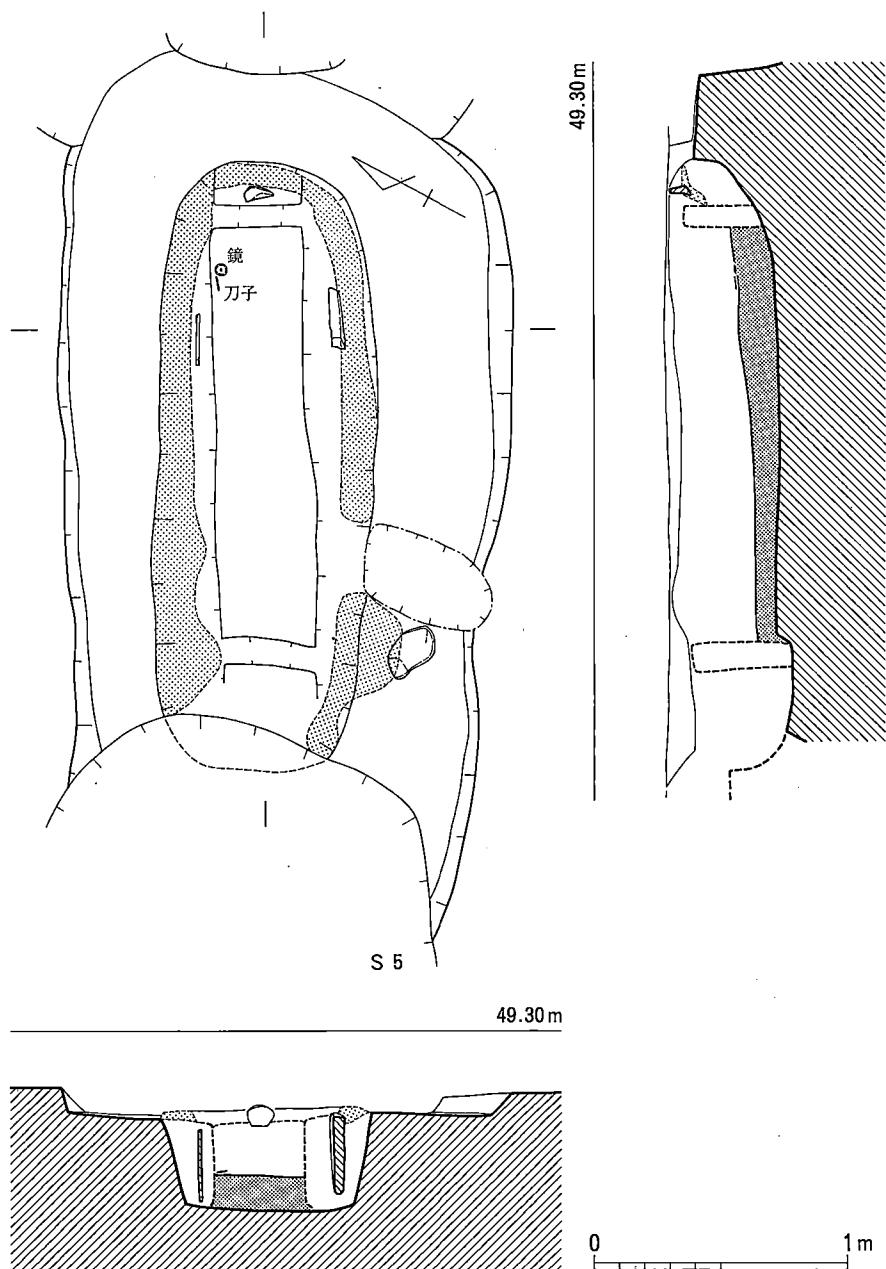
### 4号石棺墓（図版26、第101図）

B列で、3・5号石棺墓に挟まれる格好で、両者に墓壙を切られている。墓壙は楕円形を呈していたか。2段に掘り込まれており、上段は残存長350cm、幅180cm、残高10cmで、下段は推定長240cm、幅86cm、高さ42cmを測る。蓋石・小口石・側石は完全に抜き取られていたが、痕跡から判断して小口石は各1枚、側石は各4枚で、小口石を挟み込むタイプである。石棺の内法は推定で長さ160cm、幅35cmほどになろう。死床面は西側に下がっており、東側で15cm、西側で8cmほど土を埋めている。床面には赤色顔料があり、東小口側から小型の仿製無文鏡と鹿角装刀子が出土していることからこちらが頭位と考えられる。頭位方向はN 27° Eを示す。

### 出土遺物（巻頭図版、図版55-2、第105図）

仿製鏡（1） 1は無文の小型仿製鏡で、鏡面を下にして出土した。鋳上がりは比較的良好であるが、正円ではなく、径は3.9～4.15cmと歪む。縁の厚さ0.25cm、重さ8.9gを測る。鈕の上部は擦り切られており、鈕孔がみえている。また、外縁の2ヶ所には、繊維が遺存しており、布などにくるまれていたものであろう。鏡面には赤色顔料が付着している。

鉄器（2） 2は鹿角装刀子で、先端部を欠損する。刀子部分の残存長6.1cm、刃部残長3.8cm、茎部幅0.8cm、鹿角部の残長4.3cm、柄の径1.5×1.7cmを測る。刀子の幅が茎より狭くなるほどによく使い込まれている。

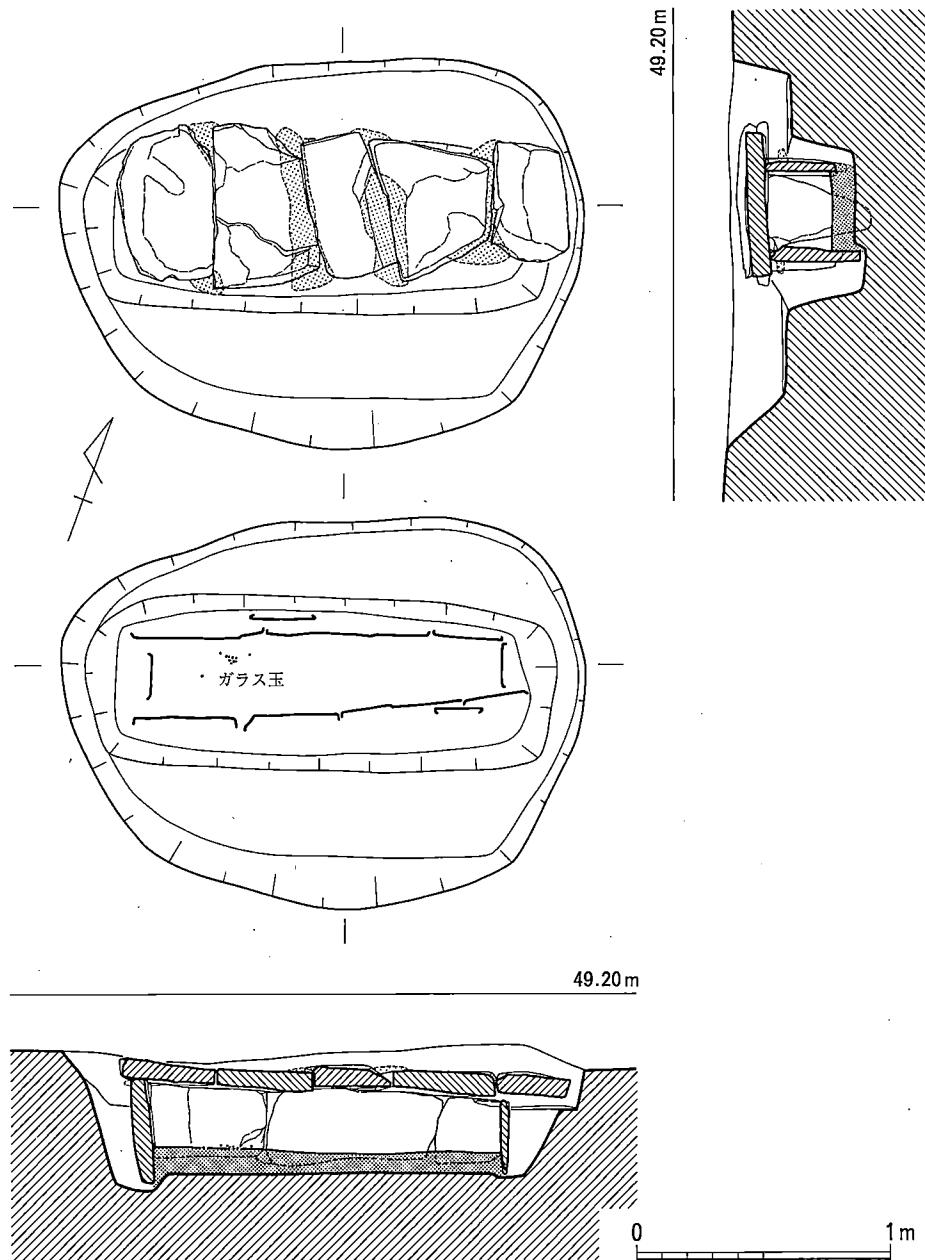


第 101 図 4号石棺墓実測図 (1/30)

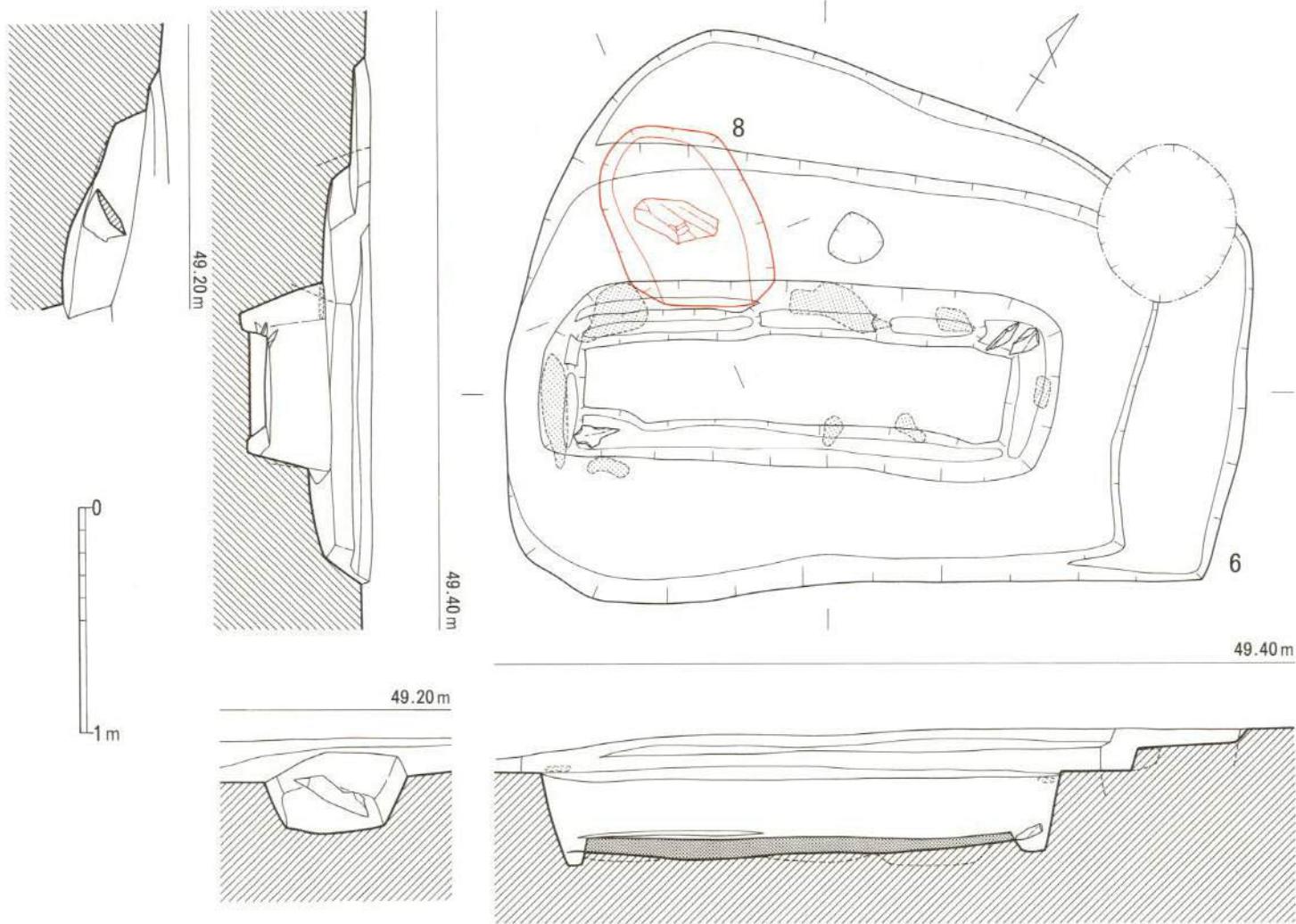
**5号石棺墓 (图版27、第102図)**

B列西側で、4号石棺墓の墓壇を切って位置する。墓壇は楕円形を呈し、2段に掘り込まれている。上段は長さ207cm、幅152cm、残高22cmで、下段は長さ186cm、幅68cm、高さ28cmを測る。

蓋石は扁平な緑泥片岩を5枚並べ、石の隙間には灰白色粘土の目張りを施している。小口石は各1枚で、北側石は3枚、南側石は4枚で、小口石を挟み込むタイプである。石棺の内法は長さ138cm、西小口側31cm、東小口側21cmを測る。掘形下段に小口・側石を立てた後、10cmほど埋めて死床面としているが、東側に若干傾斜している。また、ガラス玉が西側から出土しており、



第 102 図 5号石棺墓実測図 (1/30)



第 103 図 6・8号石棺墓実測図 (1/30)

頭位は西小口側と考えられる。頭位方向はS70°Wを示す。

**出土遺物**（巻頭図版、図版55-3、第105図・表3）

**ガラス玉**（1~14） 1~14は死床面北西側出土のガラス玉で、色調はコバルトブルーを呈する。個々の法量については表3の玉類計測表を参照されたい。

**6号石棺墓**（図版28、第103図）

A列東側で、1号石棺墓とは墓壙を接する。墓壙は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込まれるが、北一東側がL形を呈する。上段は長さ325cm、幅250cm、残高22cmで、下段は長さ227cm、幅83cm、高さ33cmを測る。石材は完全に抜き取られていたが、痕跡から小口石は各1枚で、側石は北側が3枚で、南側も3枚であろうか。石棺の内法は現状で長さ185cm、東小口側45cm、西小口側35cmを測る。死床面は10cmほど土を埋めて水平にしている。頭位方向は小口の広い東側になろう。頭位方向はN32°Eを示す。副葬品の出土は無かった。

**7号石棺墓**（巻頭図版、図版29・30・31-1、第104図）

A列西側で、1号石棺墓の直ぐ西側に位置する。墓壙の西側には板石をL形に立てて標石としており、蓋石から20cmほど浮いてた。墓壙は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込まれている。上段は長さ350cm、幅165cm、残高35cmで、下段は長さ250cm、幅63cm、高さ30cmを測る。蓋石は扁平な緑泥片岩を3枚並べ、石の隙間に灰白色粘土を充填し、目張りとしている。小口石は各1枚で、側石は各3枚で、小口石を挟み込むタイプである。石棺の内法は長さ180cm、頭部側43cm、足下側27cmを測る。下段掘形に小口・側石を立てた後、5cmほど土を埋めて死床面としているが、頭部側を4cmほど高く盛って土枕としている。棺内には遺存状態は悪かったものの頭骨・大腿骨が遺存しており、伸展葬であったことが窺われる。また、蓋石・側石・小口石の内面には赤色顔料を塗布しており、床面にも認められた。頭位方向はN37°Eを示す。副葬品として死床面から管玉・ガラス玉が出土している。

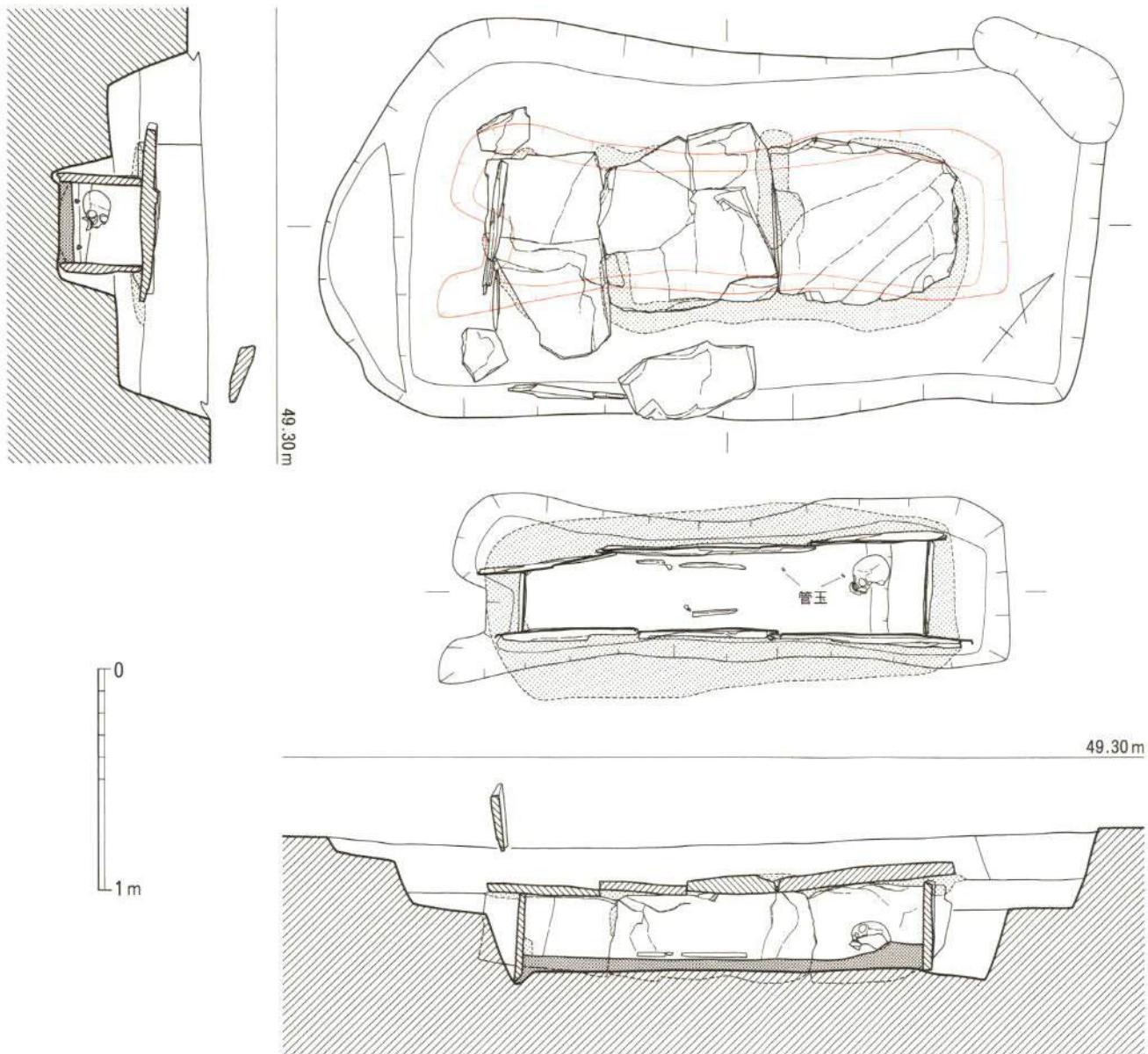
**出土遺物**（巻頭図版、図版55-3、第105図・表3）

**管玉**（1・2） 1・2は碧玉製の管玉で、死床面東側の出土。

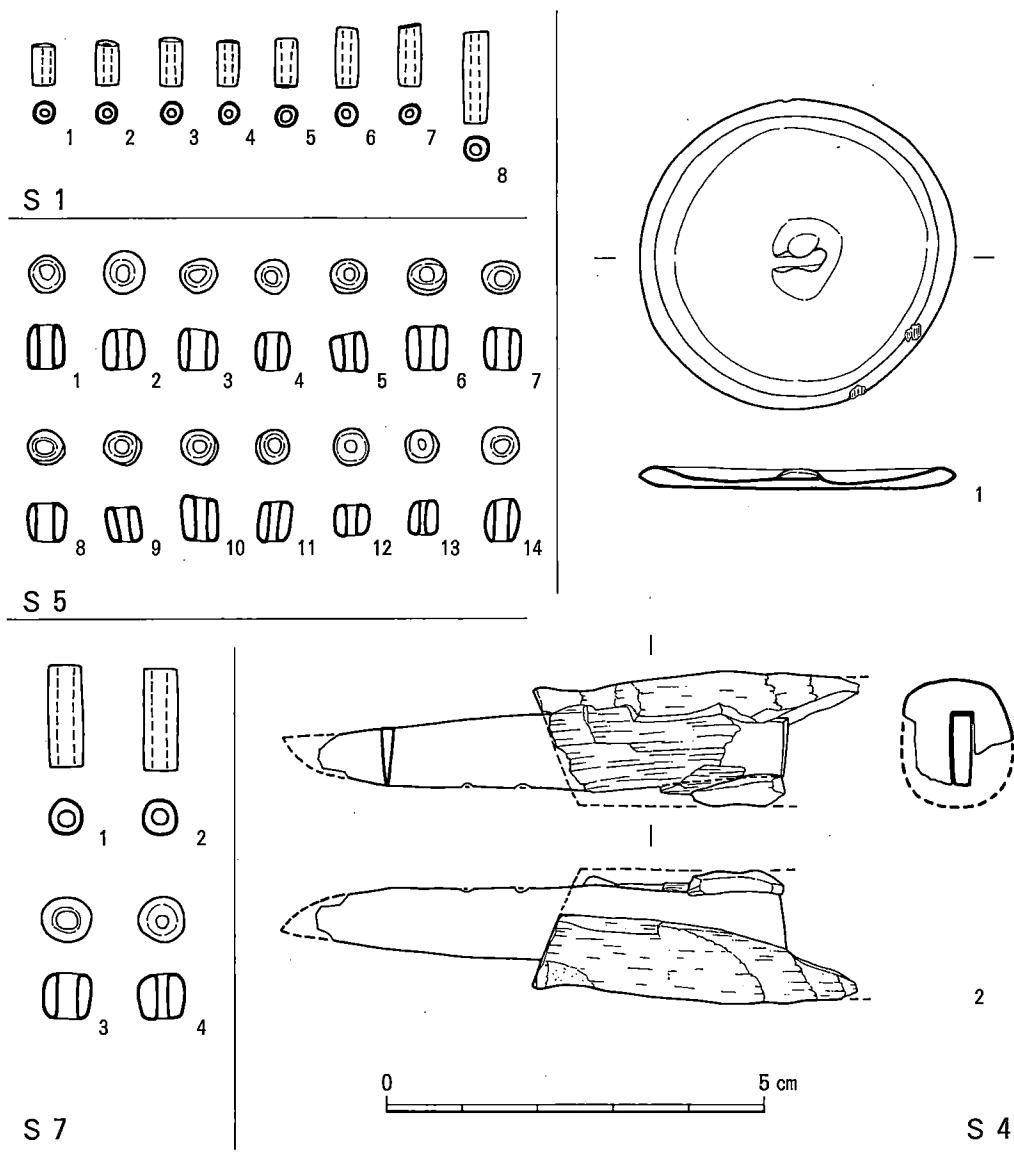
**ガラス玉**（3・4） 3・4はガラス玉で、色調はくすんだコバルトブルーを呈する。管玉・ガラス玉の個々の法量については表3の玉類計測表を参照されたい。

**8号石棺墓**（図版31-2、第103図）

6号石棺墓の墓壙内に切られて位置する。埋土中から扁平な石材が出土しているので小児石棺墓とした。墓壙は残長92cm、幅64cm、残高27cmを測り、底面は6号石棺墓側に傾斜している。遺物の出土は無かった。



第 104 図 7号石棺墓実測図 (1/30)



第 105 図 石棺墓出土副葬品実測図 (1/1)

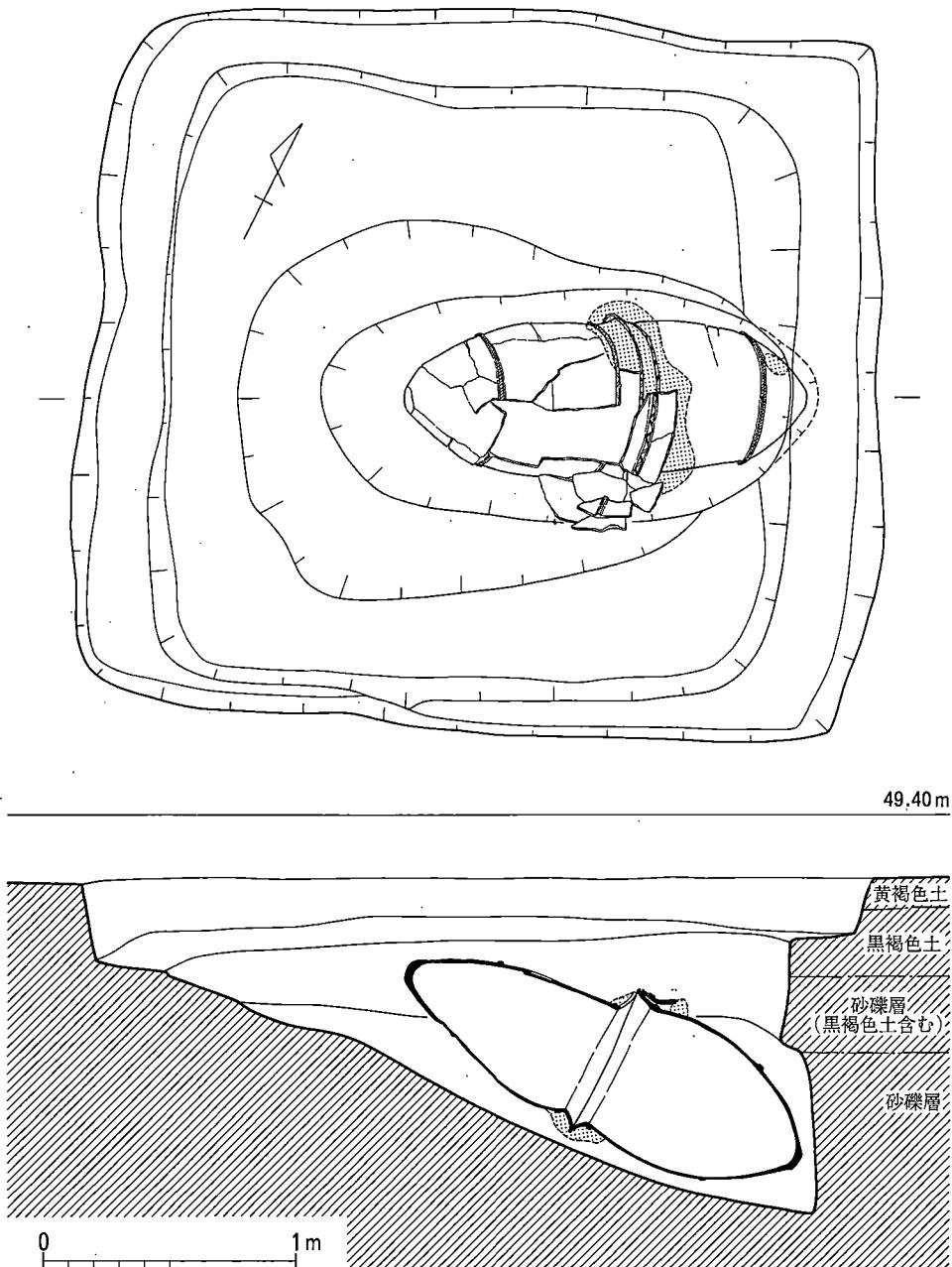
表 3 石棺墓出土玉類計測表

長さ・径 (mm)

	1 (9)	2 (10)	3 (11)	4 (12)	5 (13)	6 (14)	7 (15)	8 (16)
S 1	5.4 · 3.0	6.0 · 3.0	6.2 · 3.0	6.1 · 3.0	6.6 · 3.0	8.0 · 3.0	8.2 · 2.9	12.5 · 3.1
S 5	6.0 · 5.0	5.1 · 6.0	5.4 · 5.0	5.0 · 4.5	5.0 · 4.8	6.0 · 5.0	5.5 · 5.0	5.0 · 4.6
S 7	4.6 · 4.5	6.0 · 4.6	5.1 · 4.5	4.0 · 4.5	5.0 · 4.0	5.8 · 5.0		
	13.9 · 4.5	13.5 · 4.8	6.0 · 6.4	6.0 · 6.0				

(7) 龫棺墓

1号甕棺墓（図版32、第106図）



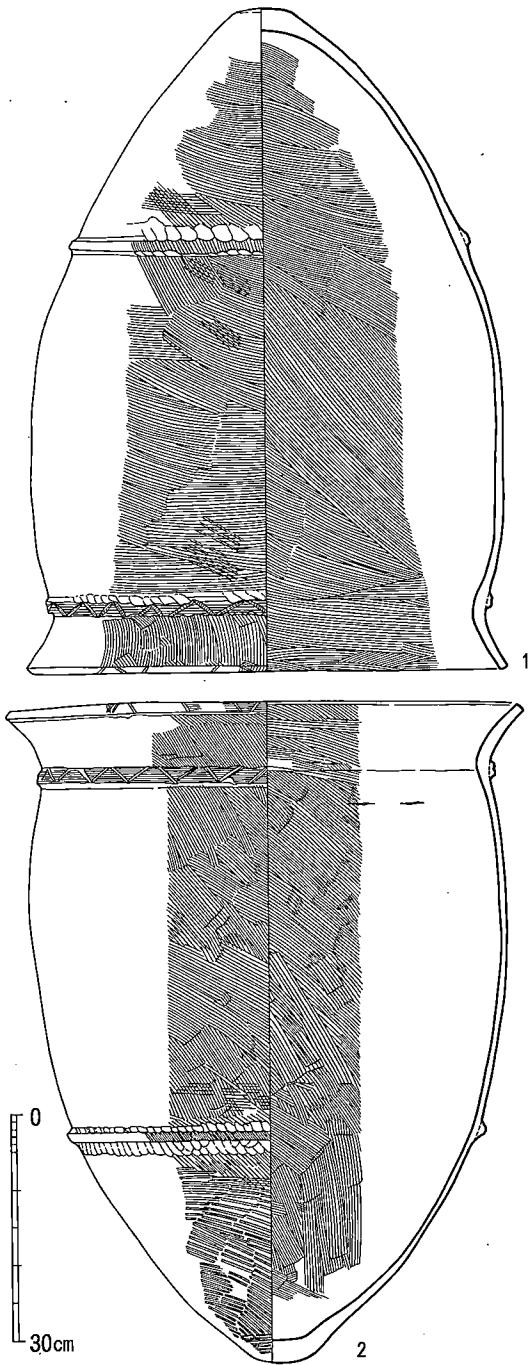
第106図 1号甕棺墓実測図 (1/30)

B列の東側で、3号石棺墓の1.3m東側に位置する。墓壙は隅丸方形を呈し、長軸3.14m、短軸2.88m、深さ1.24mを測る。3段に掘り込まれ、上段は幅0.2~0.25mでテラス状に巡る。中段は緩やかに傾斜しており、甕棺の埋設穴に続く。接口式の成人棺で、口縁の合わせ口には粘土の目張りを施している。甕棺の内面には赤色顔料を塗布していた。主軸方位はN27°Eを示し、甕棺の埋置角度は+26°を測る。甕棺内からの出土遺物は無かった。

#### 出土甕棺（図版54-1、第107図）

**上 甕 (1)** 器高87.0cm、口径61.4cmを測る大型の埋葬用甕。口縁部は「く」字形に緩やかに開き、張りをみせない胴部から丸底の底部に移行する。頸部と胴下半部には扁平な凸帯を貼付しており、頸部凸帯には「ハ」字形のキザミ目を付している。胴部凸帯はタタキ原体を叩打してキザミ目風の模様としている。また、口唇部にも部分的にキザミ目を付す。調整は外面タタキ後ハケ目で、内面はハケ目による。

**下 甕 (2)** 器高87.0cm、口径66.0cmを測る大型の埋葬用甕で、口径は上甕よりやや大きい。口縁部は「く」字形に緩やかに開き、張りをみせない胴部から丸底の底部に移行する。頸部と胴下半部には扁平な凸帯を貼付しており、頸部凸帯には「ハ」字形のキザミ目を付している。胴部凸帯はタタキ原体を叩打してキザミ目風の模様としている。また、口唇部にも部分的にキザミ目を付している。調整は外面タタキ後ハケ目で、内面はハケ目による。



第107図 甕棺実測図 (1/10)

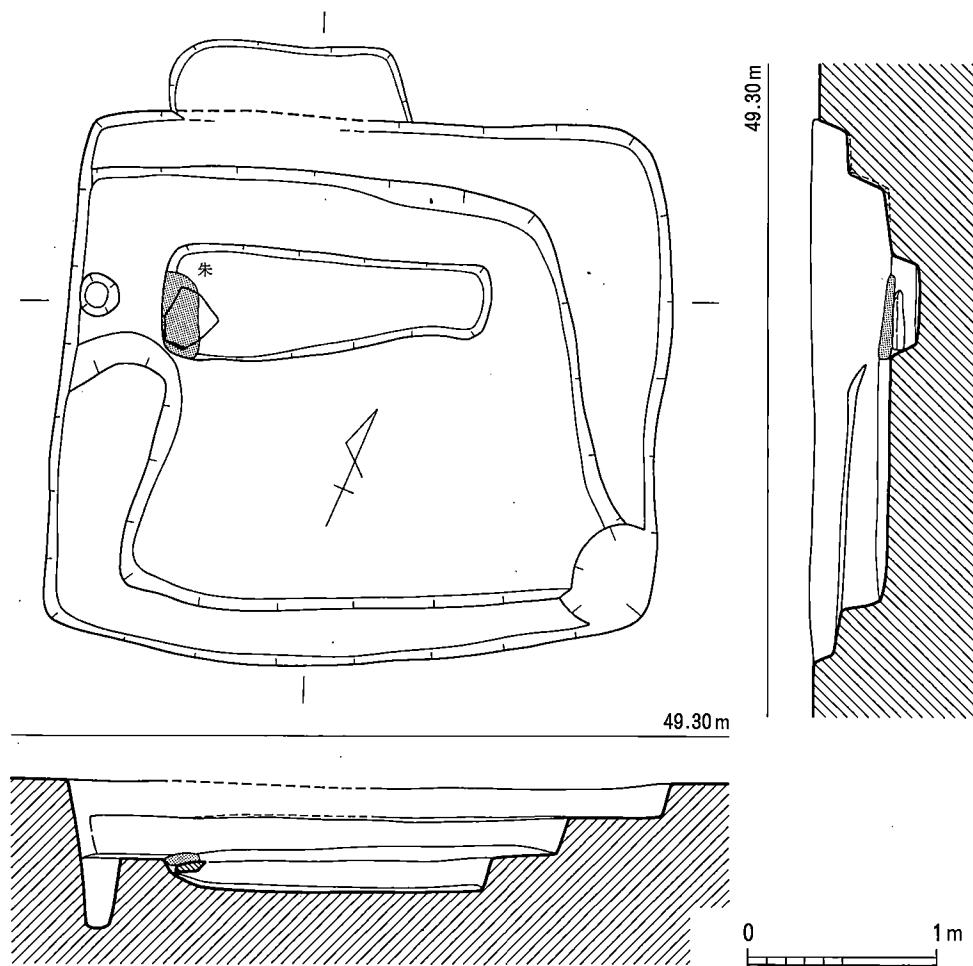
## (8) 土壙墓

石棺墓を取り巻くように埋葬され、4基検出した。

### 18号土壙墓（図版33-1、第108図）

4号石棺墓と平行して1m北側に埋葬される。墓壙は隅丸方形を呈し、3段に掘り込まれている。上段の長軸3.20m、短軸2.87m、残高0.16mで、埋葬部本体は長軸1.74m、頭部幅0.6m、足下幅0.4mで、深さは0.15mを測る。頭部には扁平な板石があり、赤色顔料がみられた。主軸方位はN23°Eを示す。埋葬部本体からの遺物の出土は無かった。

### 出土遺物（図版54-2、第112図）

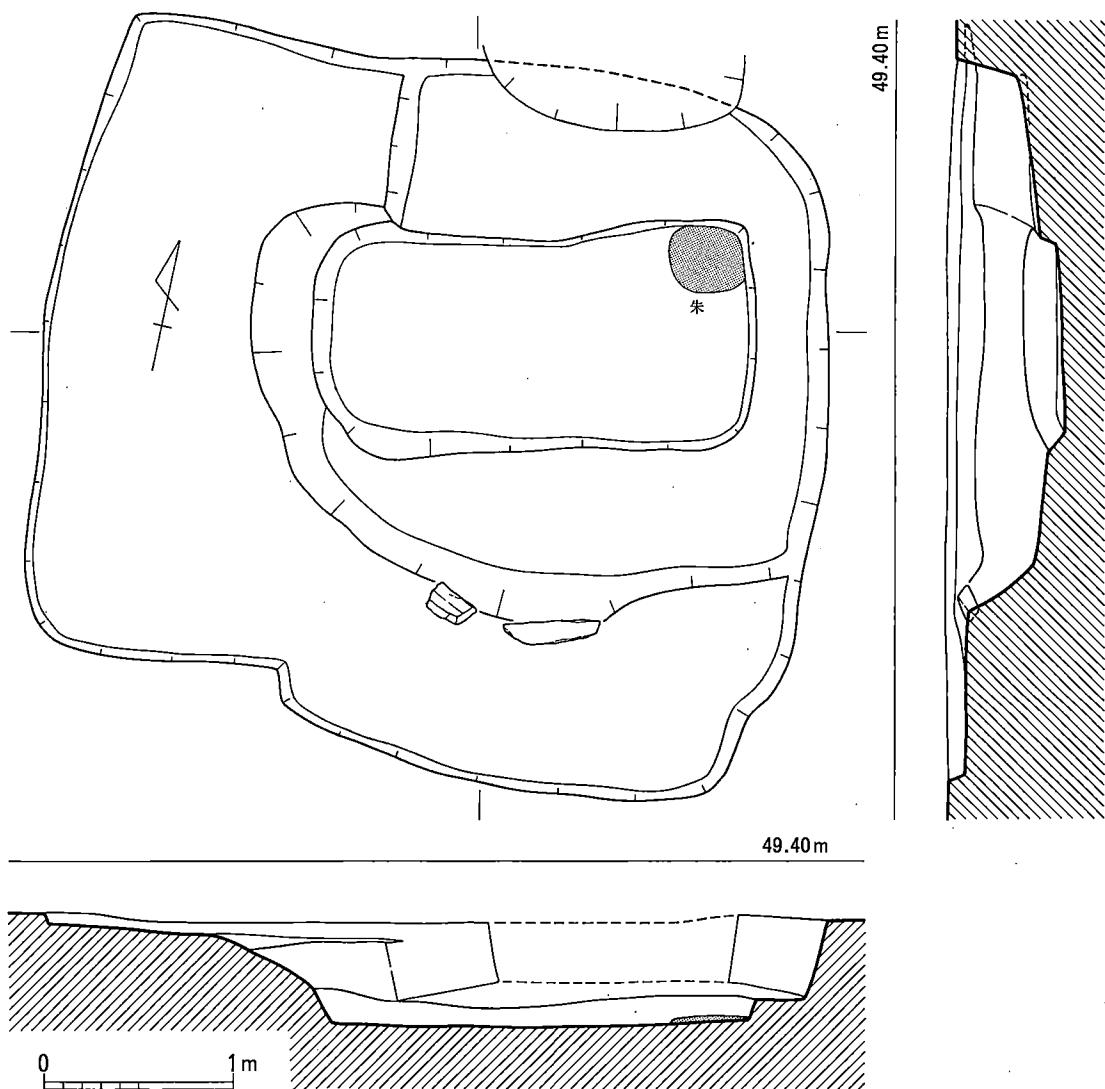


第108図 18号土壙墓実測図 (1/40)

**土 器 (1・2)** 1は浅めの椀で、器高4.6cm、口径15.5cm。口唇部はシャープで、底部は丸底をなす。2は高壙の脚柱部の破片。ともに墓擴埋土中の出土。

**19号土壙墓 (図版33-2、第109図)**

1号甕棺墓の直ぐ北側に埋葬されている。墓擴は隅丸方形を呈し、3段に掘り込まれている。上段は長軸4.16m、短軸3.75m、残高0.10mで、埋葬部本体は長軸2.35m、短軸1.10mで、深さは0.15mを測る。東側には赤色顔料があり、こちらが頭位になろう。埋葬部本体内からの遺物の出土は無かった。



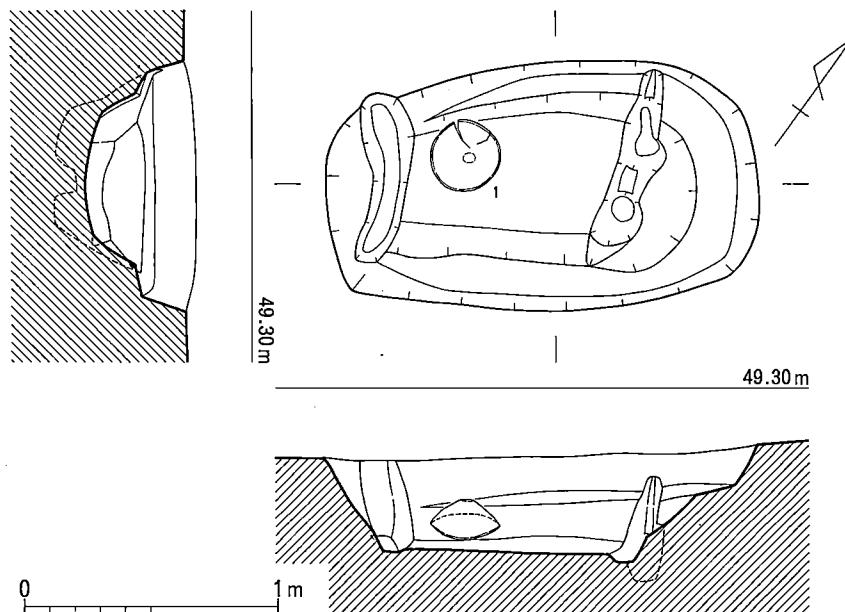
第 109 図 19号土壙墓実測図 (1/40)

## 20号土壙墓（図版34-1、第110図）

6号石棺墓の1.5m南側に並葬される。墓壙は橢円形を呈し、東側にテラスを有する。長軸1.71m、短軸0.98m、深さ0.4mを測る。東側と西側は溝状に掘り込まれ、埋土は締まりのない暗黄褐色土であることからこの部分に小口板を立てていたことが考えらる。主軸方位はN30°Eを示す。床面からやや浮いた状態で鉢が出土している。

## 出土遺物（図版54-2、第112図）

**土 器 (1)** 1は大型の鉢で、器高11.6cm、口径28.8cmを測る。口唇部はシャープである。底部の2ヶ所に焼成後穿孔の穴が空く。調整は外面タタキ後ハケ目で、内面はハケ目による。また、内面には赤色顔料の塗布がみられる。



第 110 図 20号土壙墓実測図 (1/30)

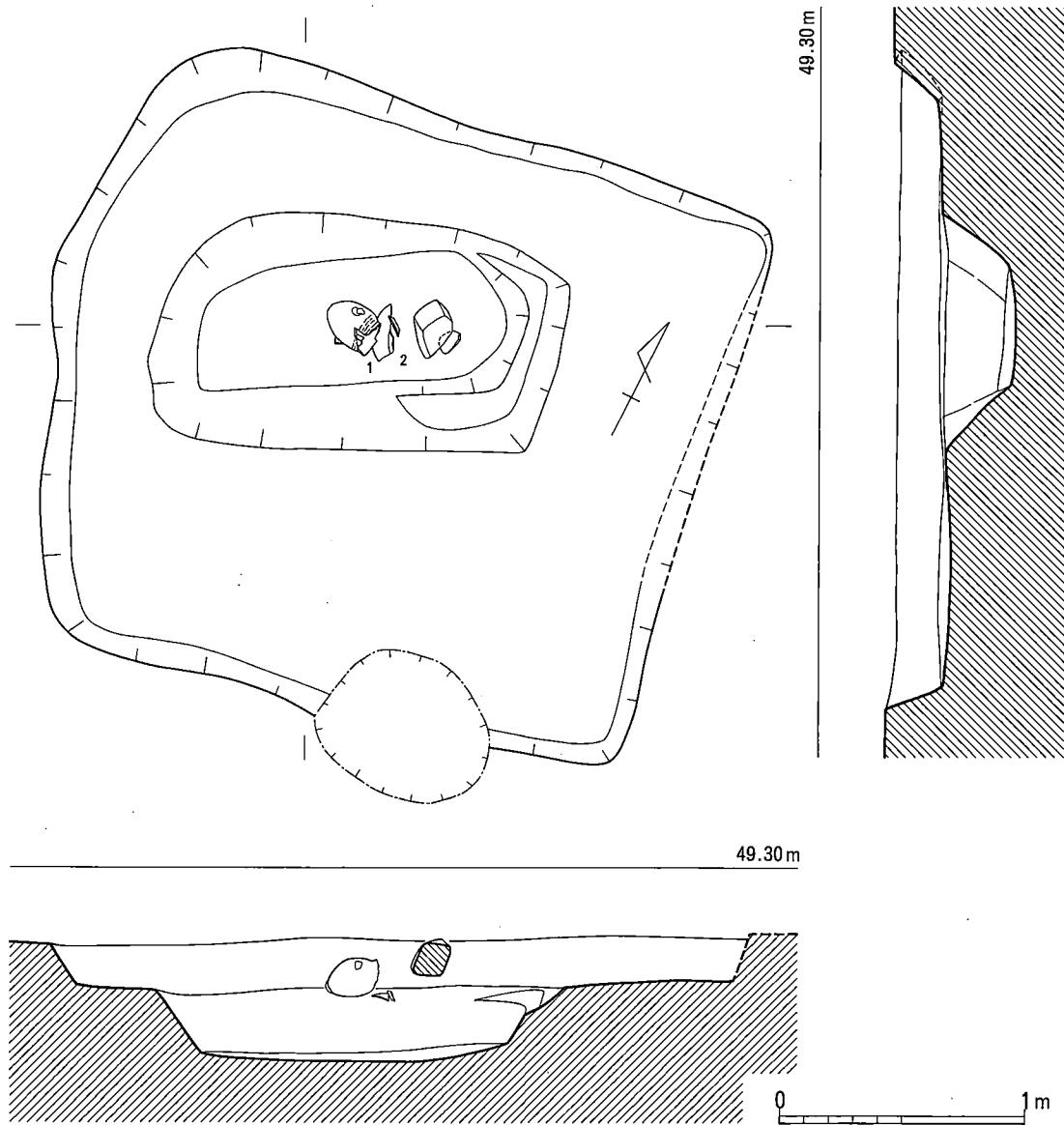
## 21号土壙墓（図版34-2・3、第111図）

7号石棺墓の直ぐ南に埋葬される。墓壙は隅丸方形を呈し、2段に掘り込まれている。上段は長軸2.9m、短軸2.45m、深さ0.20mで、埋葬部本体は長軸1.66m、短軸0.95m、深さ0.28mを測る。また、東側にはテラスがあり、床面は東側にやや高くなっていることからこちらが頭位になろう。頭位方向はN27° Eを示す。

## 出土遺物（図版54-2、第112図）

**土 器 (1~3)** 1は肉厚の甕で、口縁部は短く外反する。底部は平底をなす。器高22.2cm、口径14.3cm、底径3.4cmを測る。調整は外面タタキの後ハケ目で、胴下半部は粗いミガキによ

る。内面は粗いハケ目。2・3は別個体の高坏で、2が坏部、3は脚柱部の破片。2は坏部の屈曲部から口縁部が大きく開く。ハケ目の後にミガキを施している。



第 111 図 21号土壙墓実測図 (1/30)

(9) その他出土の遺物

ここでは、ピット出土土器及び弥生時代に属する石器・鉄器・土製品などを報告する。

**出土土器** (図版55-1・56~58、第113~118図)

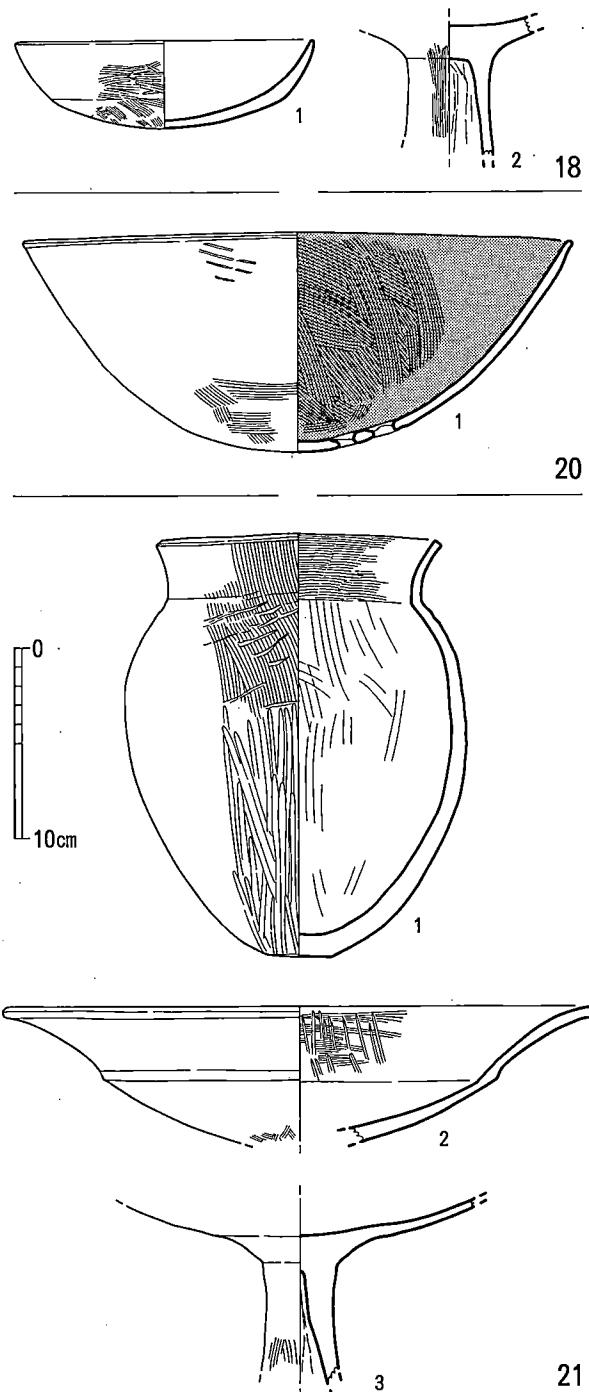
**土 器 (1~19)** 1は短頸壺の口縁部破片で、口径は17.0cmに復原した。2は「く」字形口縁壺の口縁部破片で、復原口径は21.6cmを測る。3は頸部に三角凸帯を貼付した壺で、4の底部と同一個体。5は口縁部が屈曲する鉢。6は高壇の脚柱部破片。1~6はP 171の出土。

7は長胴の壺で、器高31.0cm、口径20.4cm、底径6.7cmを測る。口縁部は「く」字形に屈曲し、底部は平底をなす。8・9は頸部が締まる壺で、9は頸部に三角凸帯を貼付している。10は深めの碗で、口径は13.0cmを測る。11は器台の口縁部片。7~11は4号通路南端西側のP 236の出土。

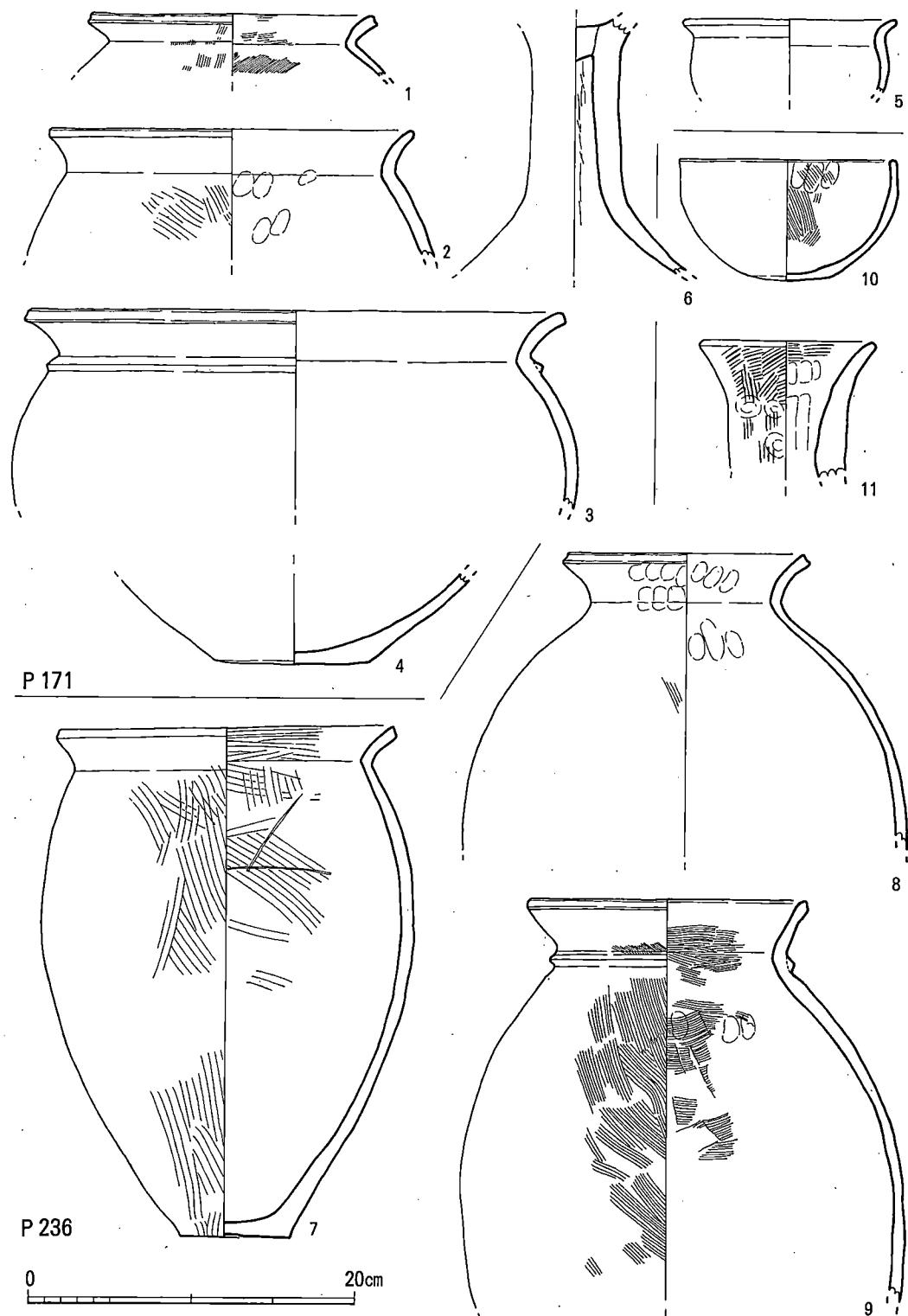
12は壺で、口縁部は直立する。P 22の出土。13は無頸壺で、底部は丸底をなす。P 63の出土。

14は器肉の厚い壺で、器高18.8cm、口径16.2cm、底径7.0cmを測る。P 75の出土。15は直口壺で、器高8.2cm、口径8.6cmで、P 219の出土。16は壺の底部破片で、P 253の出土。

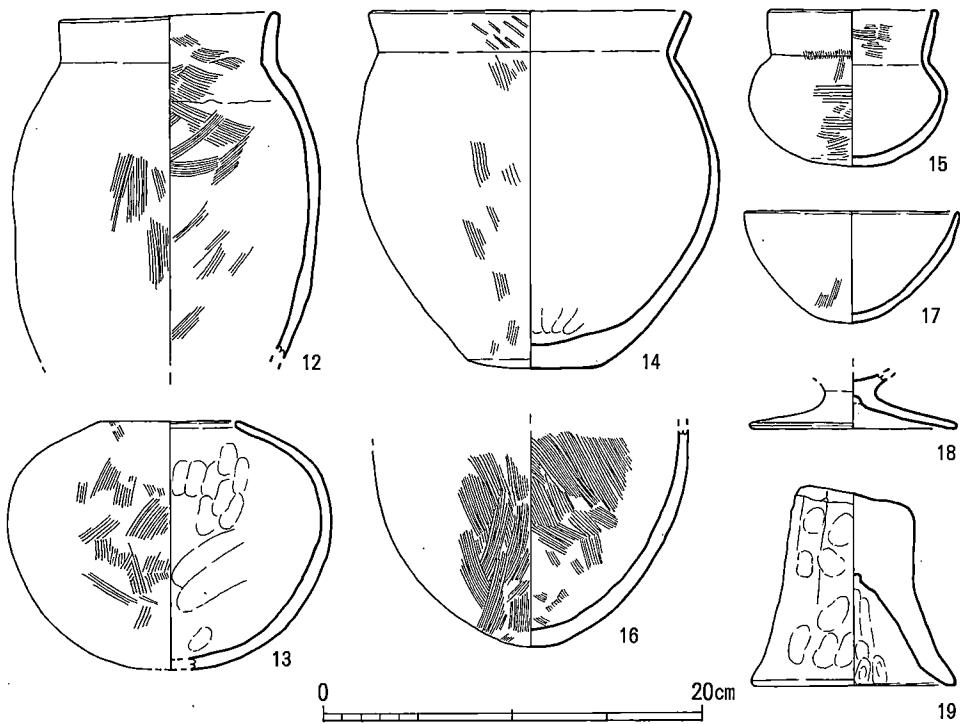
17は碗で、口径11.2cm。18は台付碗の脚台部破片で、17・18はP 181



第 112 図 土壌墓出土土器実測図 (1/4)



第 113 図 p i t 出土土器実測図① (1/4)



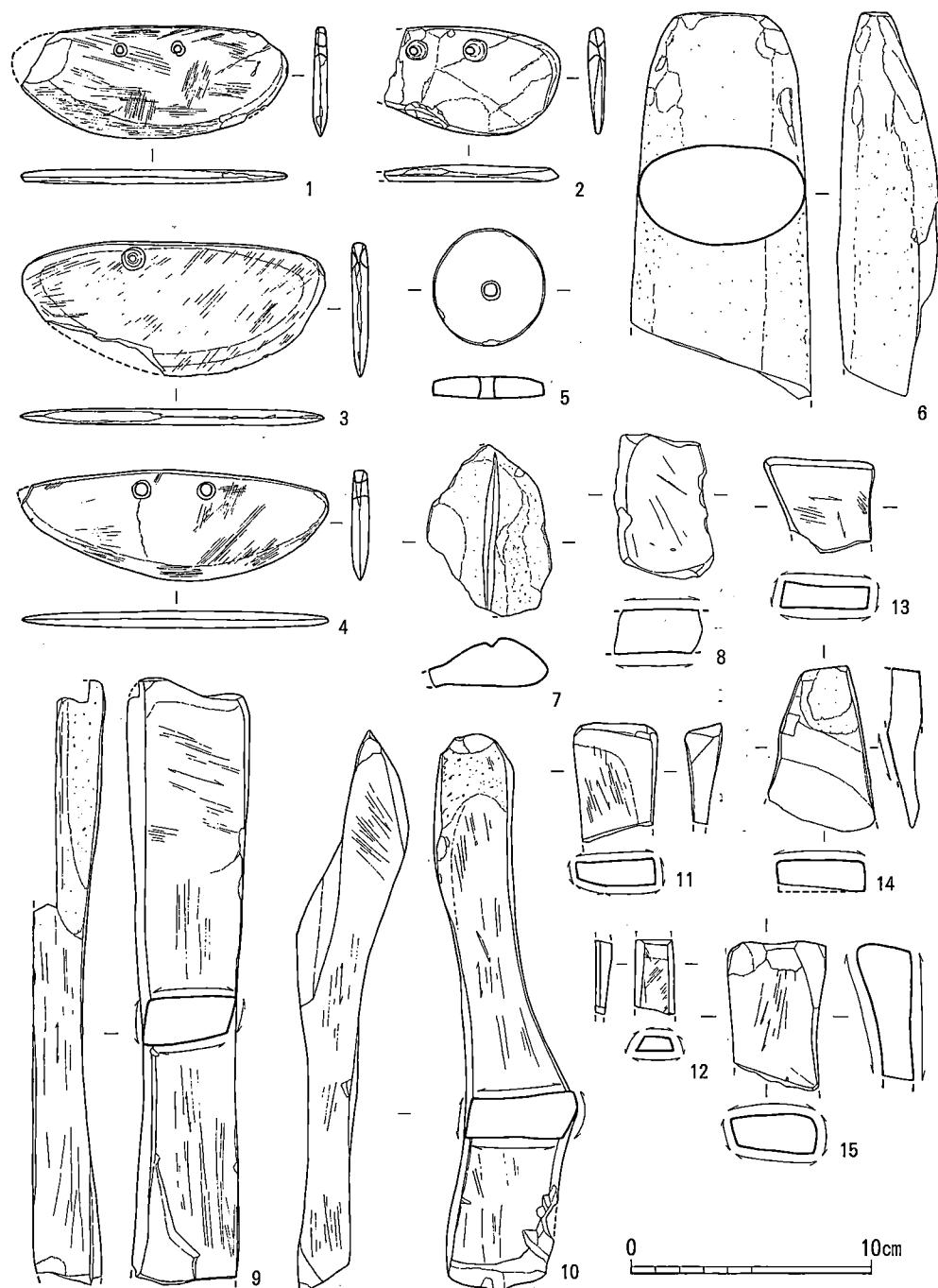
第 114 図 Pit 他出土土器実測図② (1/4)

の出土。19は支脚で西側先端部掘り下げ時の出土。

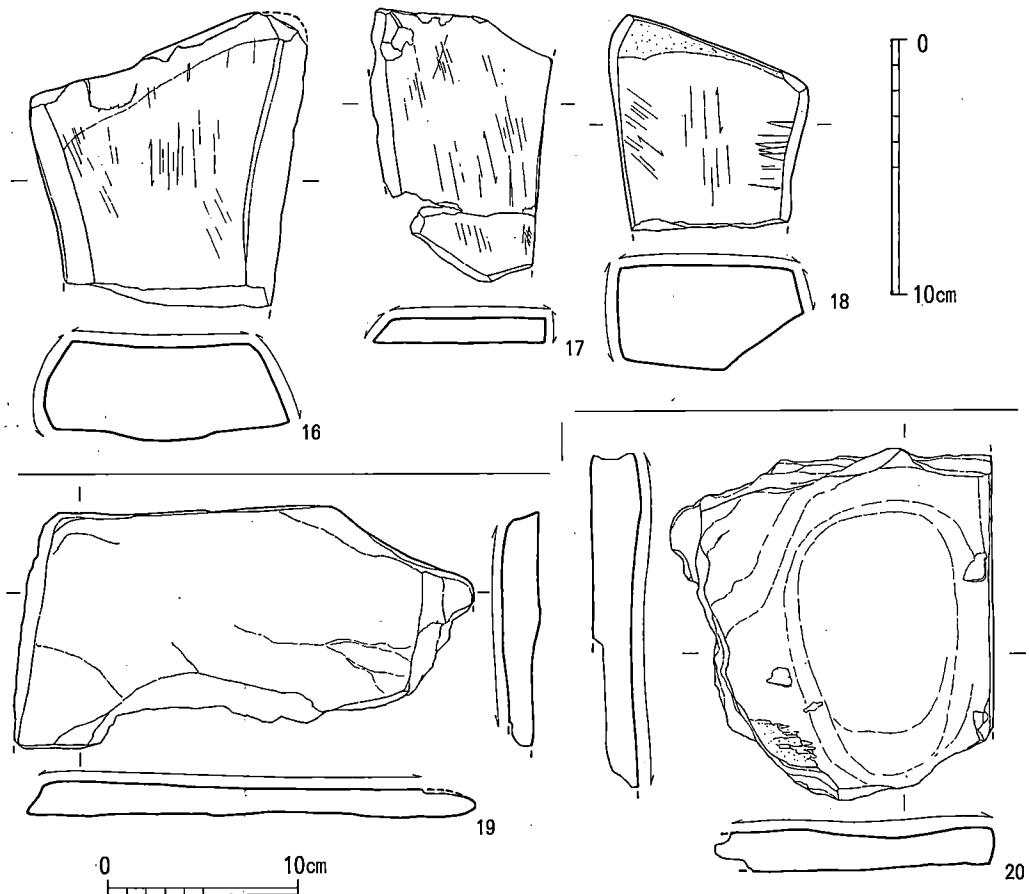
**石 器 (4~6・15・18)** 4は小豆色を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁で、両刃半月形を呈する。ほぼ完形で均整のとれた形状をなし、背側の双孔は両面から穿孔されて孔径が大きめ。長さ12.8cm、幅4.5cm、厚さ0.7cm、重さ57.4gを測る。ピット内の出土であるが、番号不明。5は雲母片岩製の紡錘車で、両面・周縁ともに丁寧に研磨調整される。直径4.9cm、厚さ0.9cm、孔径0.6cm弱、重さ31.4gを測る。6は安山岩系統の砂岩製で、弥生時代にみられる太形蛤刃石斧らしいが刃部側を欠損する。残存長15.9cm、幅7.4cm、残存厚4.2cm、重さ747.9gを測る。奈良時代の104号竪穴住居カマド内の出土で、支脚として転用されていたものか。

15・18は砥石で、ともに欠損品。15は砂岩製で、断面形は長方形を呈する。残存長6.2cm、幅3.5cm、厚さ1.6cm。80号竪穴住居付近の遺構検出時の出土。18は硬砂岩製で、4面を砥面としている。欠損部位での幅6.5cm、厚さ4.1cmを測る。7号溝付近の掘り下げ時の出土。

**鉄 器 (2・7・15・16・24)** 2は鎌で、残存長4.7cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。P 193の出土。7は袋状鉄斧で、長さ7.8cm、刃部幅3.8cm、重さ89.6g。袋部の上部を欠損するが、袋部は扁平で、袋部径 $2.0 \times 3.2$ cmを測る。S T A 199+20付近の採集品。15は手鎌で、基部幅3.2cm。端部を「L」字形に折り曲げる。7号溝東側の遺構検出時の出土。16も手鎌の破片で、身の残



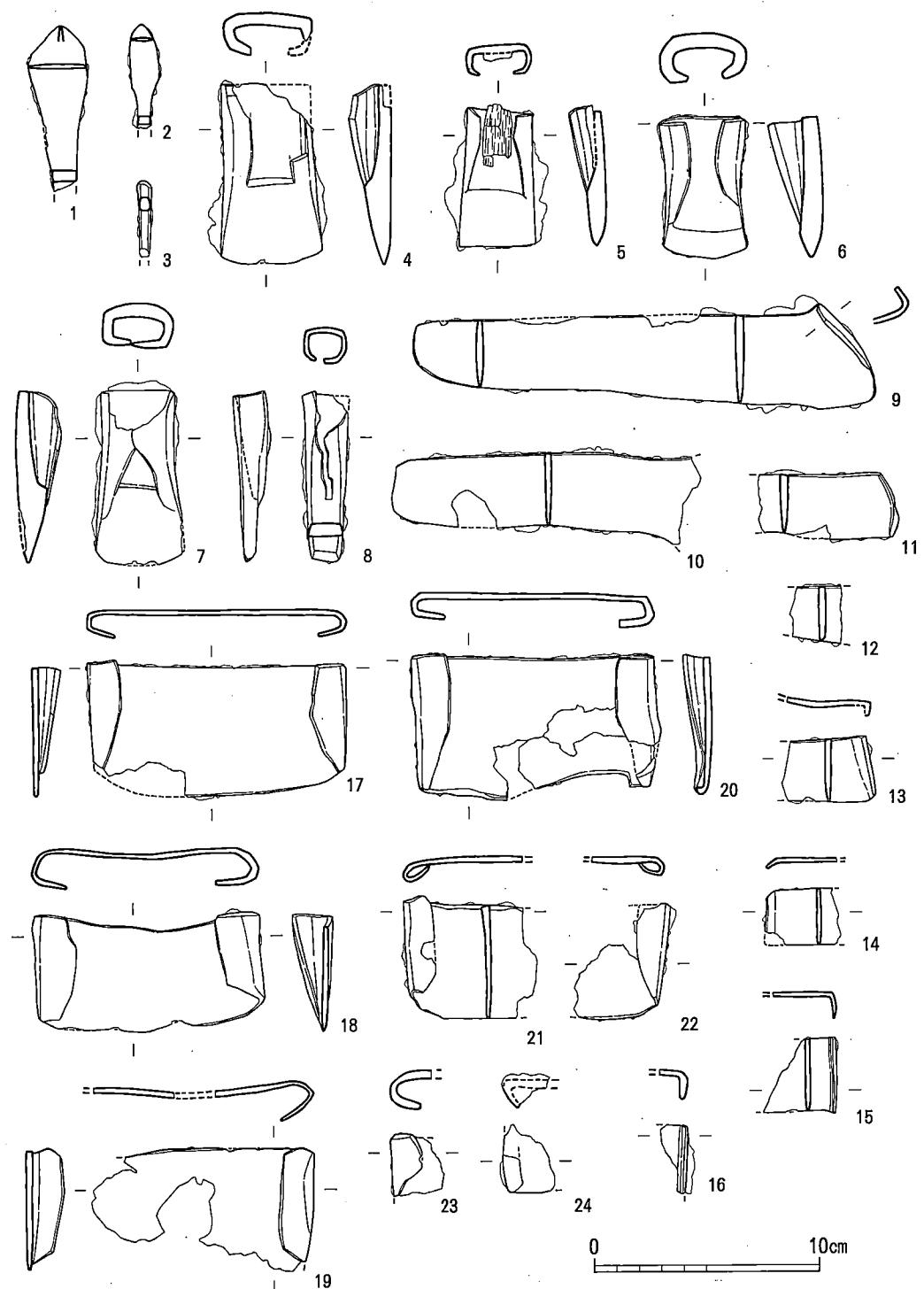
第 115 図 出土石器実測図① (1/3)



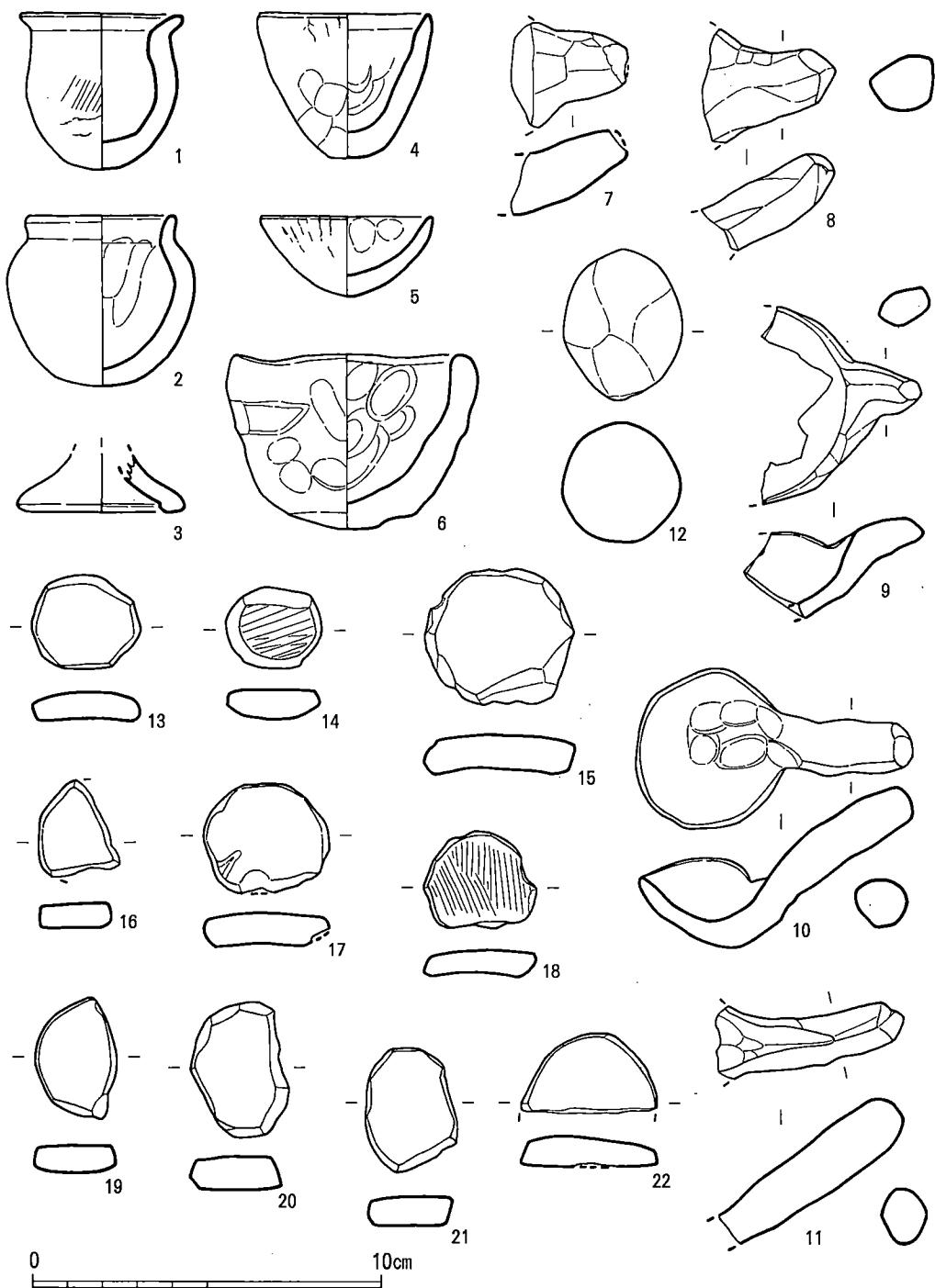
第 116 図 出土石器実測図② (1/3 · 1/4)

存幅2.9cm、厚さ0.2cmを測る。端部の折り曲げは「L」字形をなす。3号通路内出土で弥生時代の混入品。24は2号通路出土の小片で、鋤先であろう。弥生時代の混入品と思われる。

**土製品 (12・20~22)** 12は投弾で、7号溝付近の採集品。焼成は良好で、赤橙色を呈する。長さ4.3cm、径3.4cm、重さ44.2gを測る。20~22は土版で、22は弥生土器片の転用品でP 42の出土。半欠品で、径は4cmほどになろう。20・21は縄文土器片の転用品で、3号石棺墓掘形内の出土。20は径2.6×3.9cm、重さ11.5gを測る。21は径2.7×3.6cm、重さ8.4gを測る。



第 117 図 出土鉄器実測図 (1/3)



第 118 図 出土土製品実測図 (1/2)

## 4. 古墳時代の遺構と遺物

### (1) 壇穴住居

総数16軒検出した。6世紀代の壇穴住居も西端部に集中している。

#### 56号壇穴住居（図版60、第120図）

西端住居群中に位置し、57・58号壇穴住居を切っている。住居壁の遺存状態は悪く、南壁は2.6mの遺存状況で、カマドが北壁中央にあると仮定して北壁は3m程の長さになろう。東壁長は2.44mで、壁高は6cmと著しい削平を受ける。壇穴内部には主柱穴は配置されておらず、所謂小型無柱穴住居である。

#### カマド（図版61-1、第119図）

突出型で北壁に付設される。遺存状態は悪く、辛うじて両袖部を留めている。カマドの構築方法は壁体の掘形を掘り、掘形下部から住居壁にかけて暗黄褐色土を貼付し、壁体を構築している。右袖は長さ65cm、基部幅24cmで、左袖は長さ53cm、基部幅27cmを測る。焚口前面がピットに切られているが、焚口幅60cmで、奥行は95cmになろう。支脚は遺存せず不明。カマド内からは土師器甕が2個体浮いた状態で出土している。

#### 出土遺物（図版68、第121図）

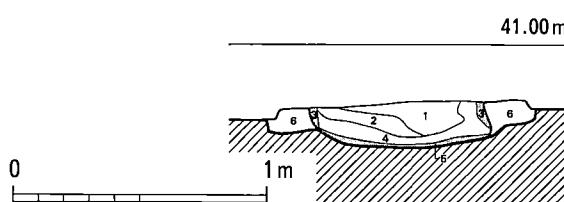
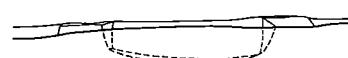
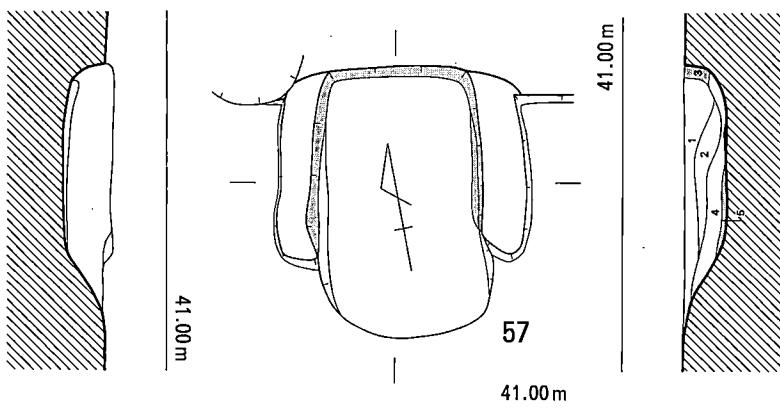
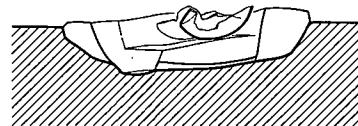
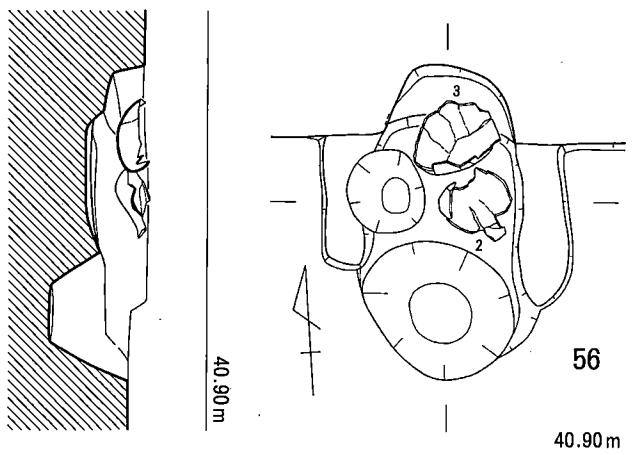
**土 器（1~3）** 1~3は土師器。1は壺蓋の口縁部小片で、口唇部は丸く収める。内外面には漆状の黒色物を塗布している。2・3は甕で、3の頸部は良く締まっている。器高は2が26.4cm、3は33.6cmで、口径は2が17.6cm、3は14.6cmに復原した。内面ヘラ削り、外面ハケ目調整。

#### 57号壇穴住居（図版60、第120図）

西端住居群中に位置し、56号壇穴住居に南西隅部を切られ、58号壇穴住居を切っている。平面形は横長長方形を呈し、北壁長5.54m、東壁長4.34mで、壁高は北壁側で10cmを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径0.6m、深さ0.6mと確りした柱穴である。柱間はP1~2間1.98m、P1~4間2.93mで、柱間を結ぶ線は不整長方形を呈する。埋土中から土器が出土している。

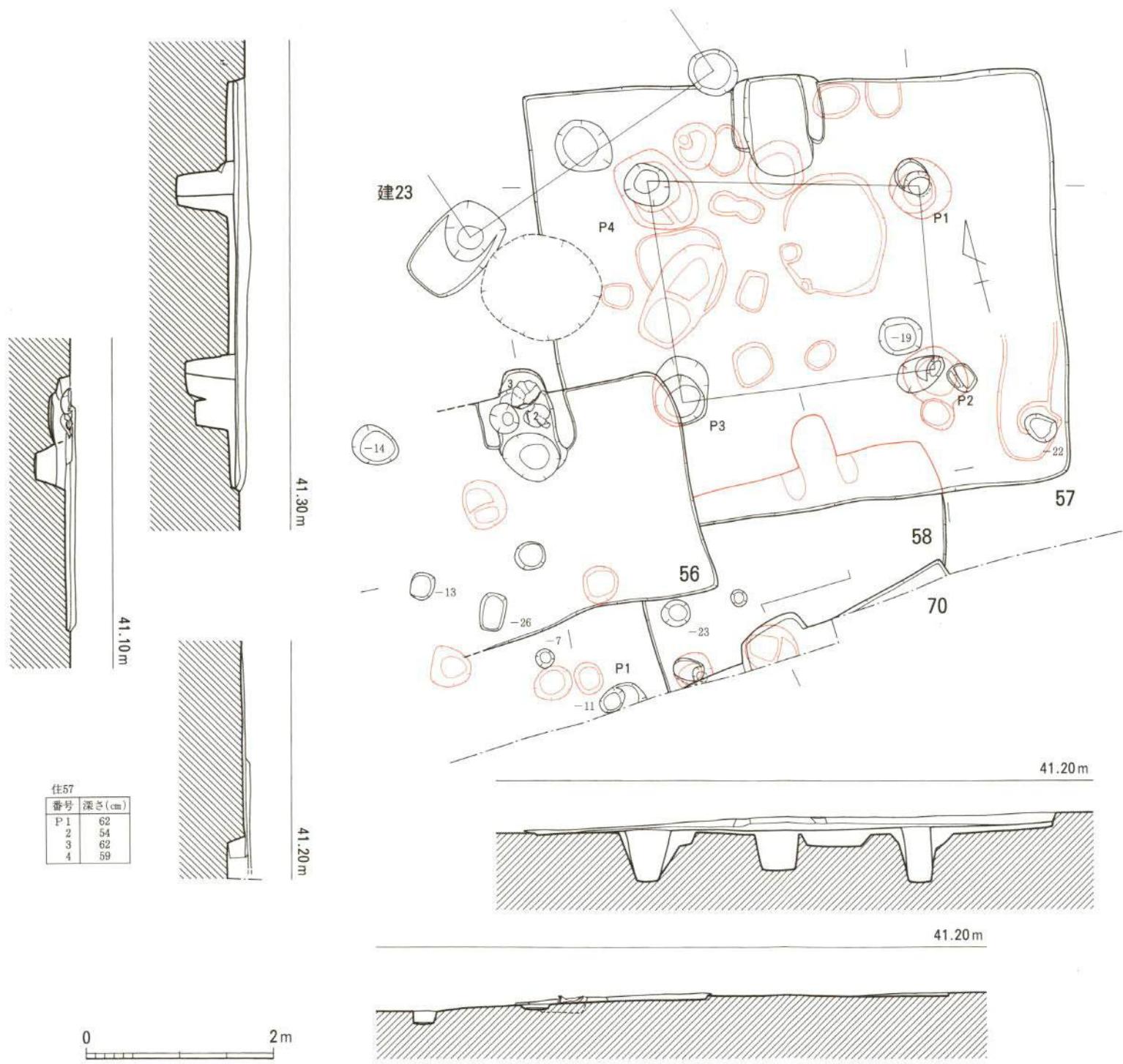
#### カマド（図版61-2、第119図）

突出型で北壁に付設される。遺存状態は悪く、辛うじて両袖部を留める。住居壁を12cm掘り込み壁体の掘形とし、掘形下部から住居壁にかけて暗黄褐色粘質土を貼付し、壁体を構築している。右袖は長さ73cm、基部幅20cmで、左袖は長さ79cm、基部幅19cm。焚口幅は60cmで、奥行は104cmを測る。壁面・床面は良く焼けていた。また、支脚は遺存しておらず不明。

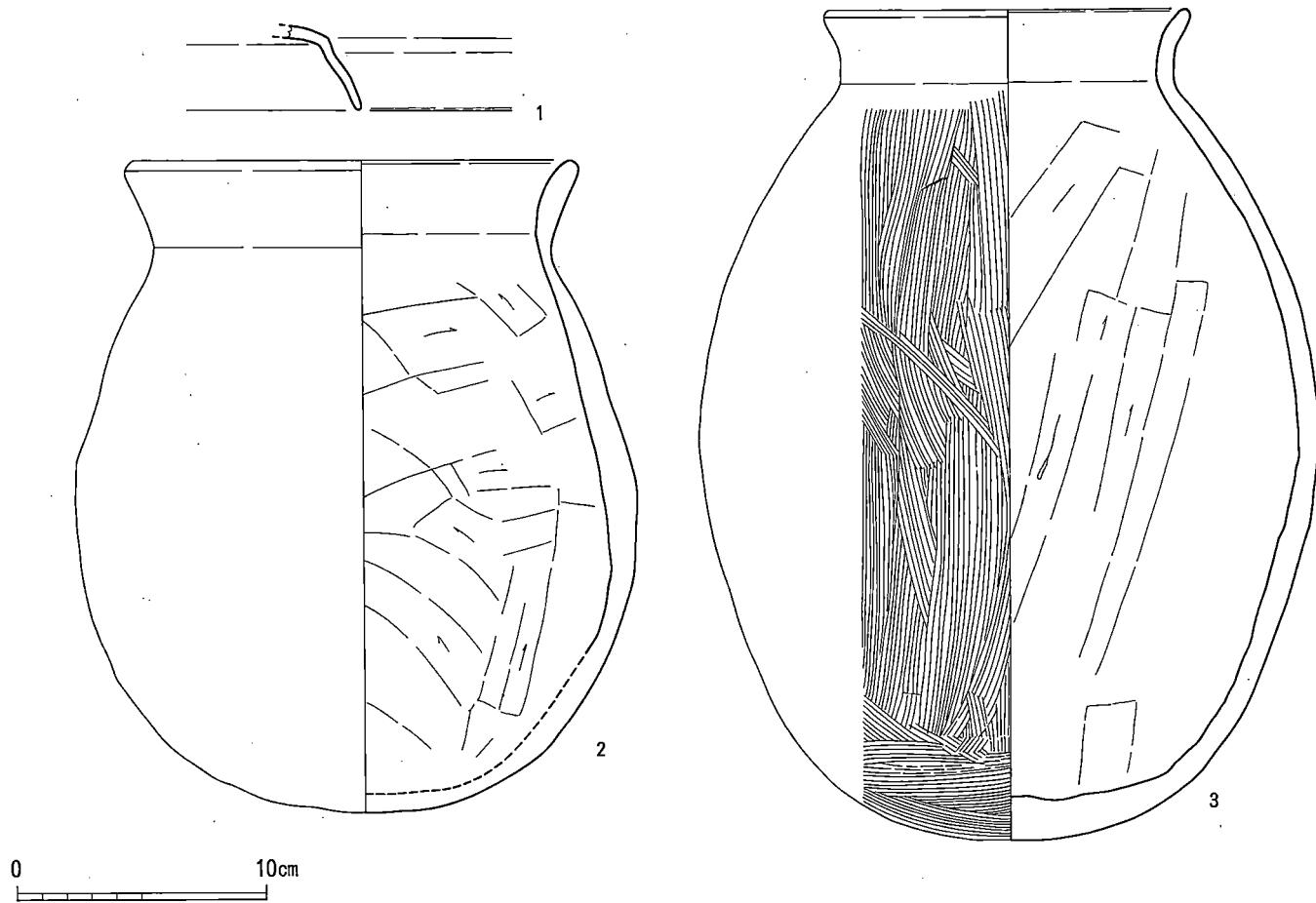


- 1 茶褐色粘質土
- 2 暗赤褐色土（焼土多く含む）
- 3 焼土
- 4 黒褐色土（炭多し）
- 5 焼土層
- 6 暗黄褐色粘質土（裾部）

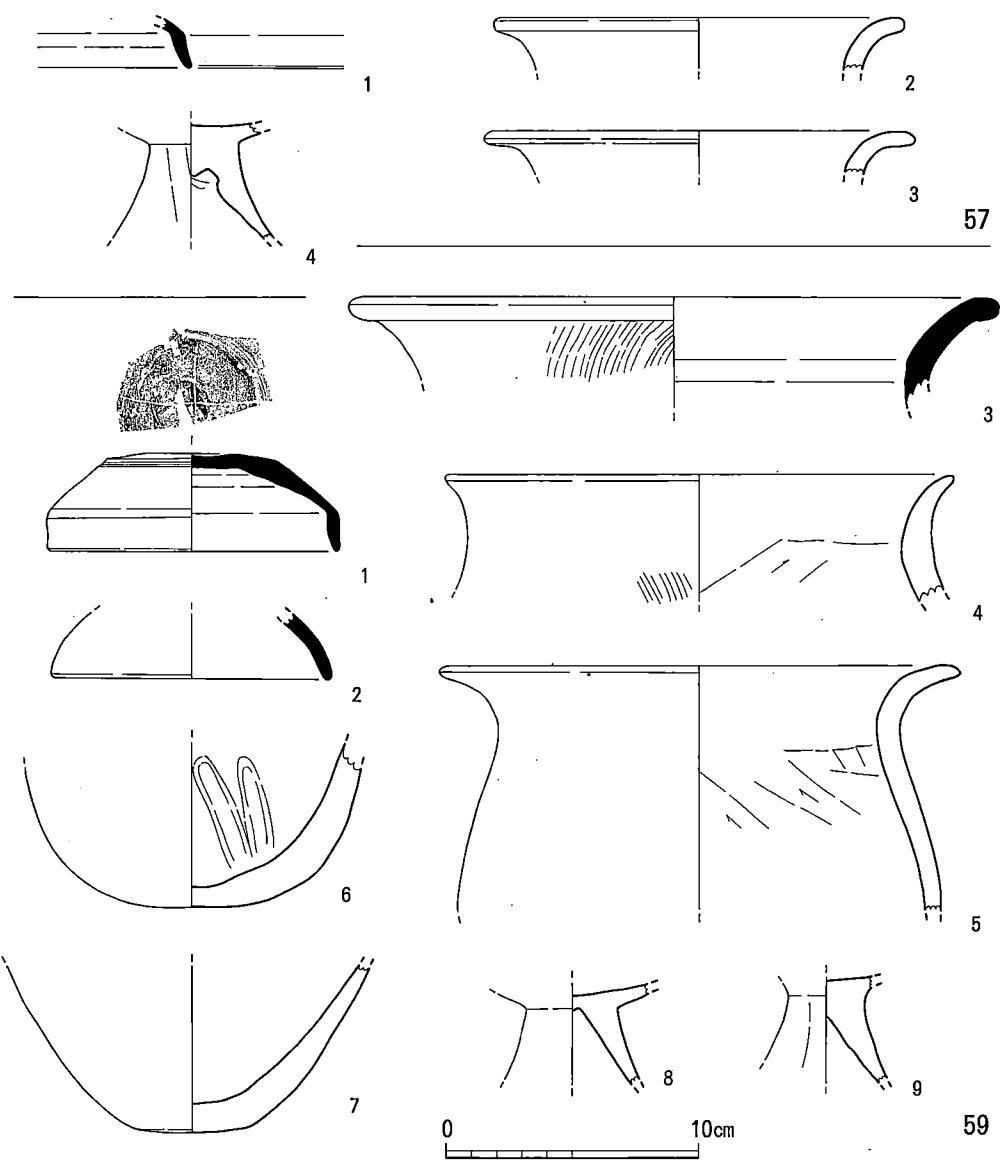
第 119 図 56・57号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第 120 図 56~58・70号堅穴住居実測図 (1/60)



第 121 図 56号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)



第 122 図 57・59号堅穴住居出土土器実測図 (1/3)

#### 出土遺物（第122図）

**土 器 (1~4)** 1が須恵器、2~4は土師器。1は壺蓋の口縁部小片。口唇部は丸く收める。2・3は甕の口縁部破片で、口径は2が16.2cm、3は17.0cmに復原した。2はカマド内の出土で、3は床面の出土である。4は高壺の脚部破片で、埋土中の出土。

### 58号堅穴住居（第120図）

西端住居群に位置し、56・57・70号堅穴住居に切られているため堅穴部の一部を残す程度である。東西長3.42mで、南北長は2m程度の検出状況。壁高は4cmと削平が著しい。当住居も堅穴内部に柱穴を有していない。P1内から須恵器甕片が出土している。

### カマド（第120図）

57号堅穴住居の貼床下部で検出した。突出型のカマドで、北壁の東寄りに付設される。壁体・袖部は殆ど遺存しておらず、僅かにカマドの痕跡を留める程度である。袖部の長さ32cm、焚口幅44cm、突出長50cmを測る。カマド内から遺物は出土していない。

### 59号堅穴住居（図版62-1、第123図）

西端住居群で、57号堅穴住居の1m北側に位置し、69号堅穴住居を切っている。平面形は南北にやや長い方形を呈し、東壁長5.05m、北壁長4.42mで、壁高は北壁側で11cmと住居壁の遺存状態は悪い。周囲には幅10cmほどの壁小溝が巡る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径0.5m、深さ0.5mと確りしたものである。柱間はP1~2間2.45m、P1~4間2.13mを測る。また、貼床下部にはピットが多数あり、数回建て替えられた可能性がある。埋土・床面・貼床中から土器が出土している。

### カマド（図版62-2、第125図）

突出型で北壁に付設される。遺存状態は悪く、辛うじて両袖部を留める程度。構築方法は住居壁を18cm掘り込み壁体の掘形とし、掘形下部から住居壁面にかけて暗黄褐色粘質土を貼付し、壁体を構築している。右袖は長さ88cm、基部幅35cmで、左袖は長さ78cm、基部幅20cmを測る。焚口幅は65cm、奥行は95cmで、右袖内壁は良く焼けていた。支脚は遺存しておらず不明。

### 出土遺物（図版69-2、第122・142図）

**土 器** (1~9) 1~3が須恵器、4~9は土師器。1・2は壺蓋で、1は器高3.8cm、口径11.3cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、平坦な天井部に移行する。1・2ともに埋土中の出土。3は甕の口縁部破片で、復原口径は25.6cm。カマド内の出土で、69号堅穴住居出土品と接合関係にある。4~7は甕で、4・5が口縁部破片で、6・7が底部破片。5の口縁部は大きく外反する。口唇部は何れもシャープで、復原口径は4が20.0cm、5は20.6cmを測る。6は丸底、7は平底気味の甕底部。6は貼床中の出土。8・9は高壺の壺部破片で、8が埋土下層、9は貼床中の出土。

**鉄 器** (3) 3は手鎌で、残存長4.4cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmを測る。端部は幅1.0cm折り曲げている。また、背部には木質が背と平行に遺存している。弥生時代の混入品か。

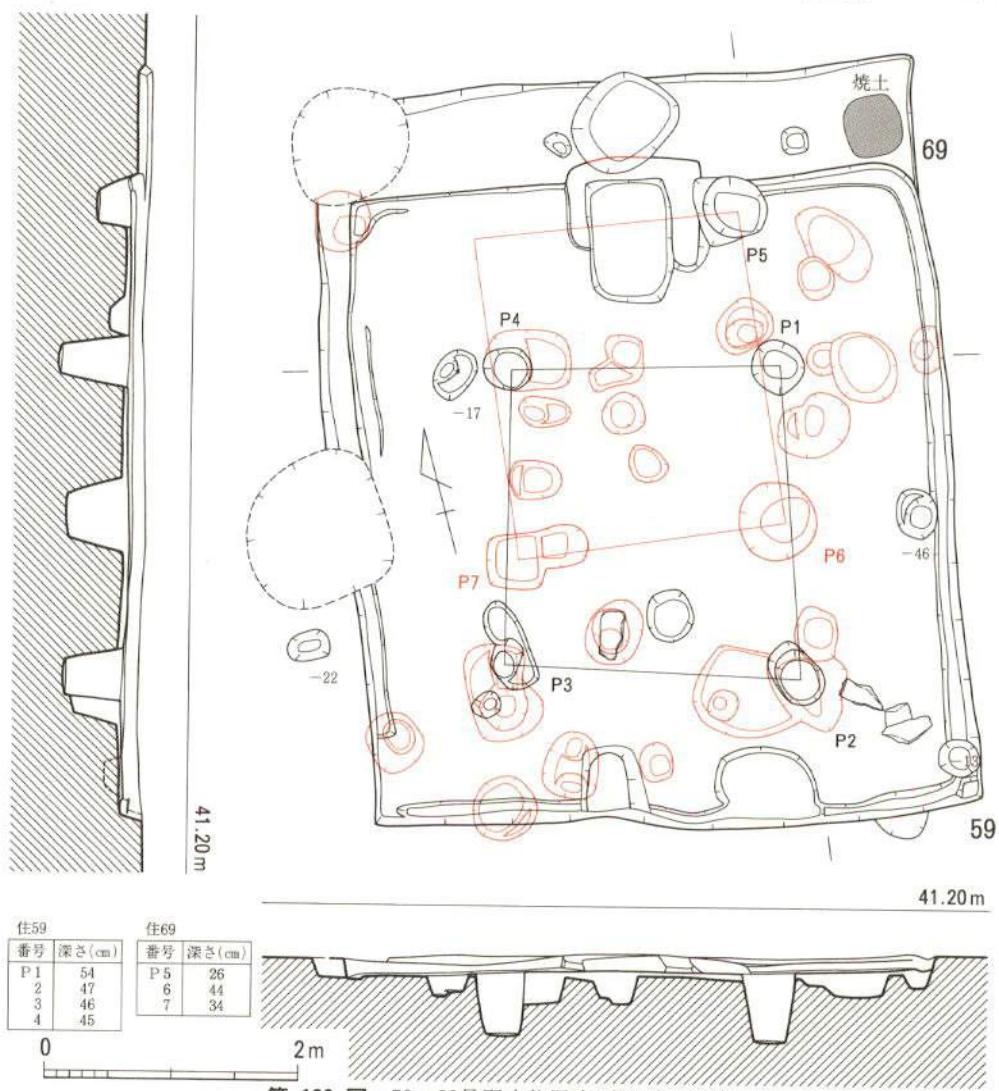
### 60号堅穴住居（図版63、第124図）

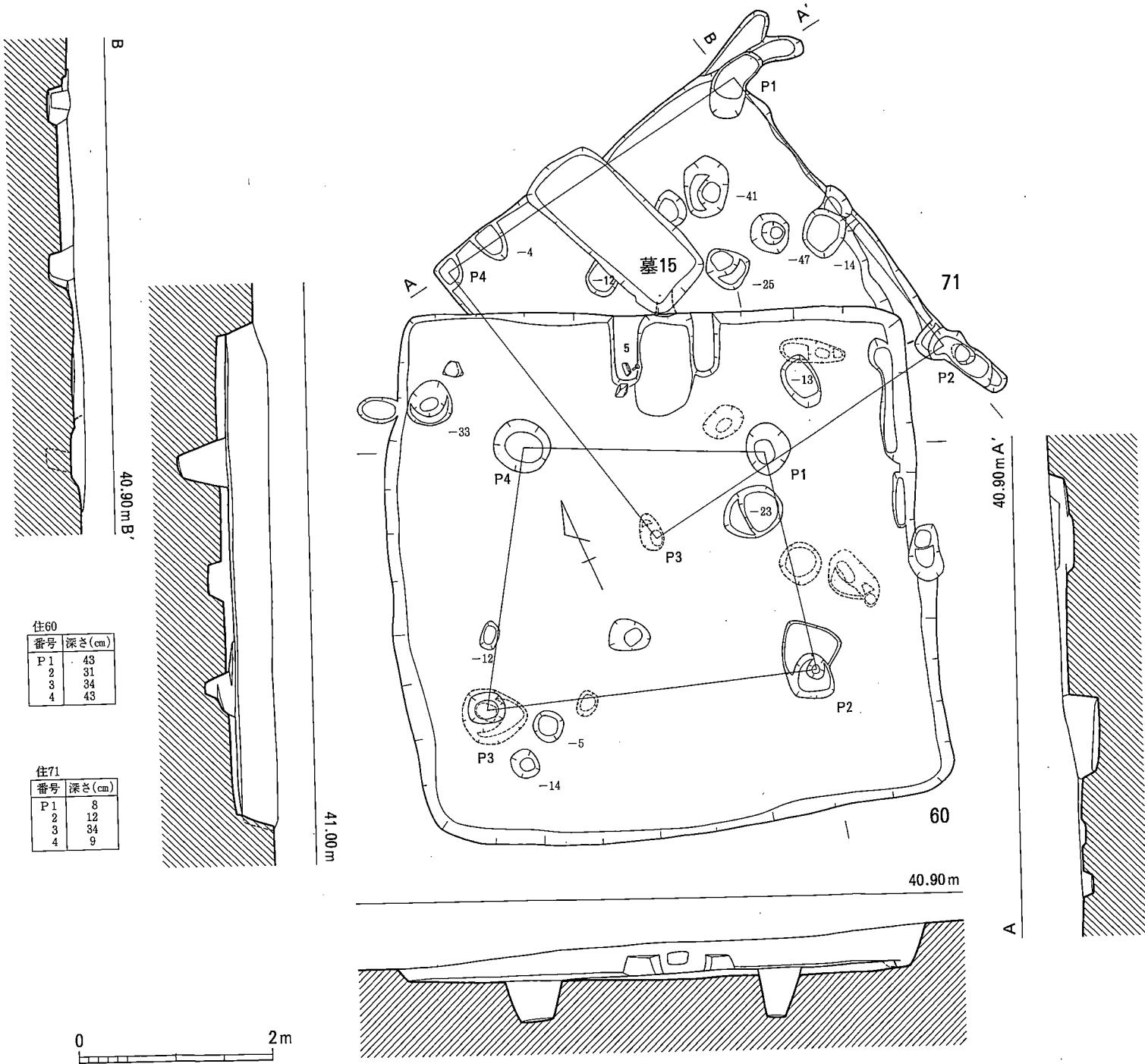
西端住居群で、59号堅穴住居の2.5m西側に位置し、71号堅穴住居を切っている。平面形は

隅丸方形を呈し、東壁長4.95m、北壁長5.05m、南壁長5.32mで、壁高は東壁側で45cmと比較的の住居壁の遺存状態は良い。東壁側には幅10cmほどの壁小溝がある。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径0.45~0.6m、深さ0.35~0.5mと確りしている。柱間はP1~2間2.35m、P1~4間2.48mを測り、柱間を結ぶ線は台形を呈する。埋土中からは土器が出土している。

#### カマド（図版64-1、第125図）

北壁中央に付設される作り付型のカマドで、遺存状態は比較的良好。床面を若干掘り込んだ後、暗黄褐色土を竪穴壁面に貼付し、壁体を構築している。右袖は長さ64cm、基部幅45cm、残高11cmで、左袖は長さ72cm、基部幅37cm、残高20cmを測る。焚口幅は62cm、奥行は96cmで、壁





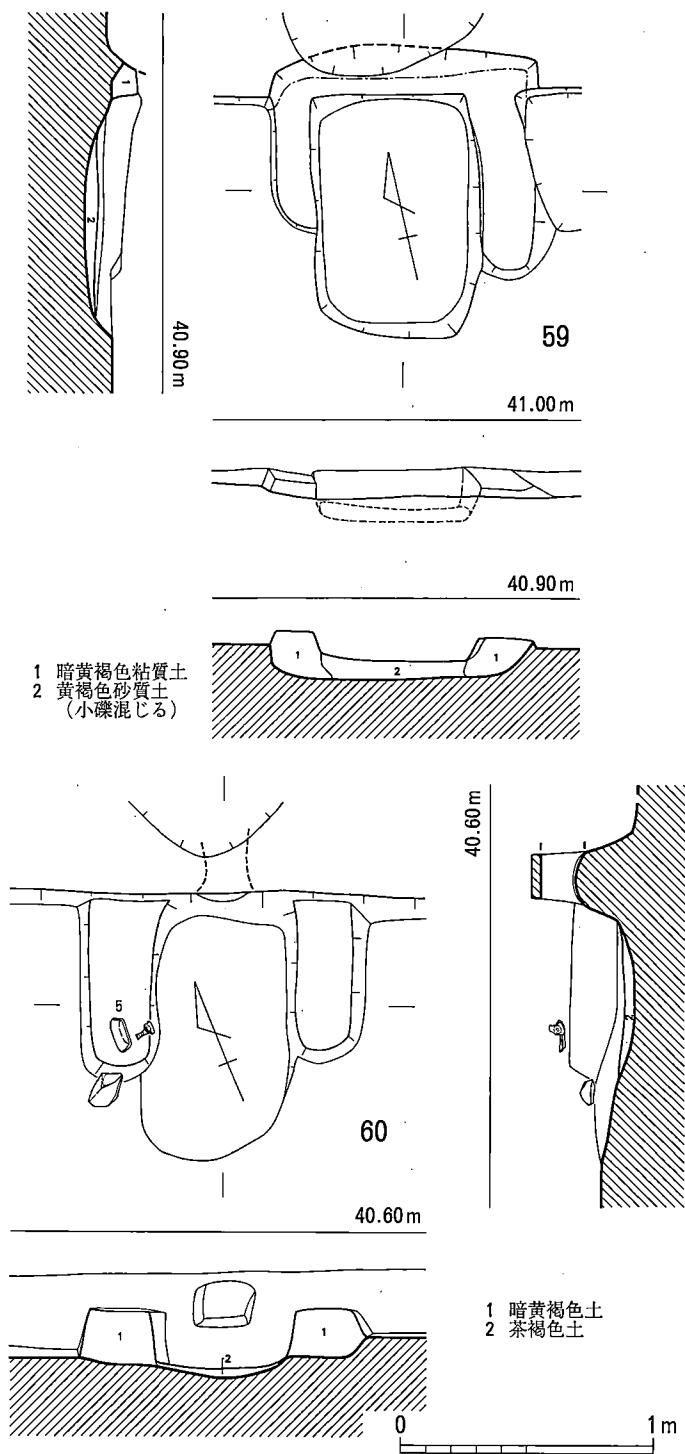
第 124 図 60・71号竪穴住居実測図 (1/60)

面・火床はさほど焼けていなかった。煙道はトンネル式で、カマド床面から12cmの高さに設けられ、ピットに切られるが20cmほど遺存している。また、左袖上部から須恵器高坏が出土している。

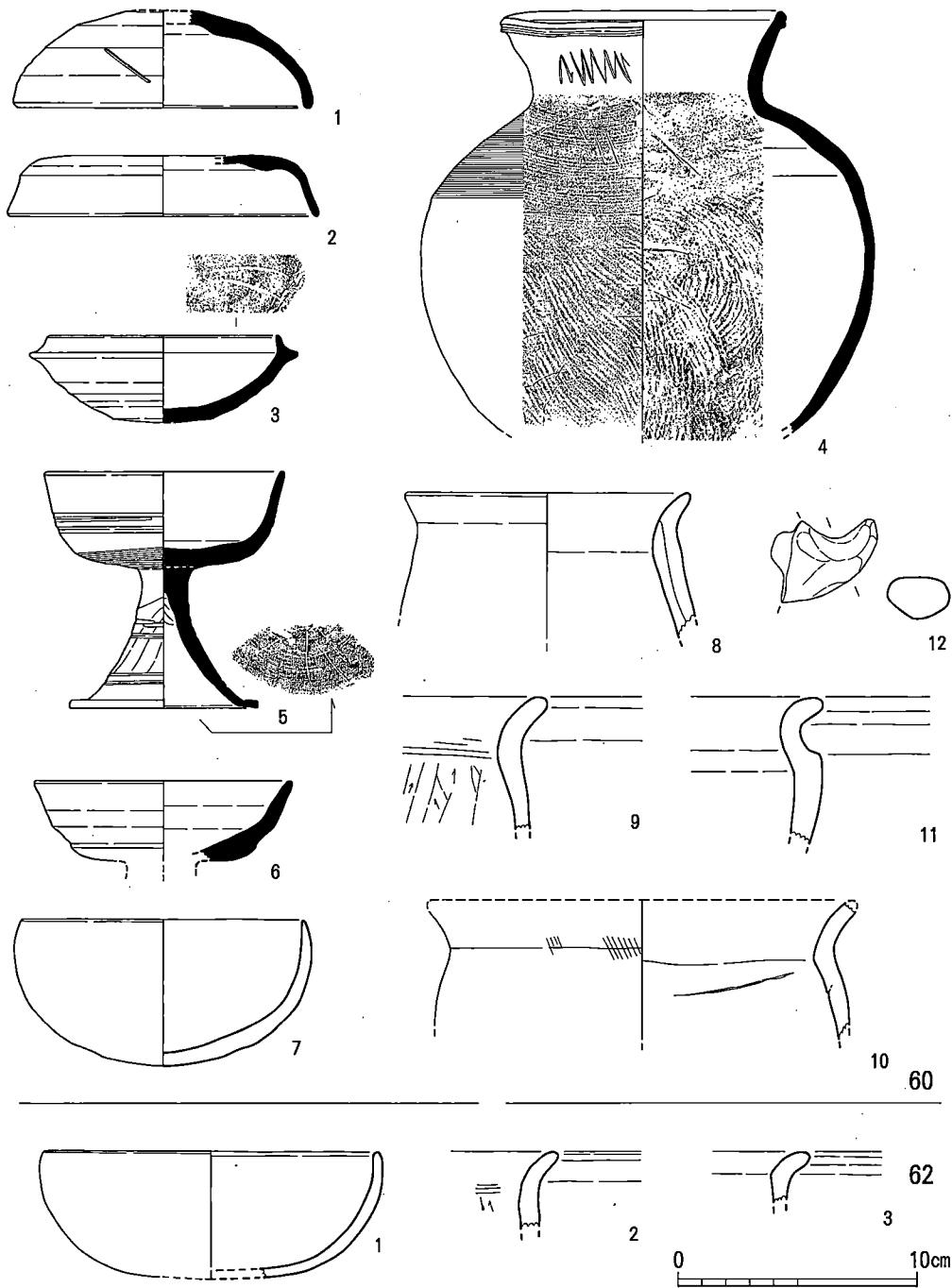
**出土遺物（図版68・69-2、第126・142図）**

**土 器（1~12）** 1~6が須恵器、7~12が土師器。1・2は壺蓋で、1の天井部はドーム状をなす。2の天井部は低平である。ともに端部は丸く收めている。3は壺身で、口縁部は短く上方に立つ。器高3.6cm、復原口径9.5cmを測る。4は広口の壺で、復原口径11.6cm。頸部外面には簡略化した籠描波状文を施している。肩部はカキ目による。5は無蓋高坏で、壺部に2条、脚部に4条の籠描沈線を巡らしている。器高9.9cmで、口径は9.8cmに復原した。6も無蓋高坏であるが、器肉は厚い。

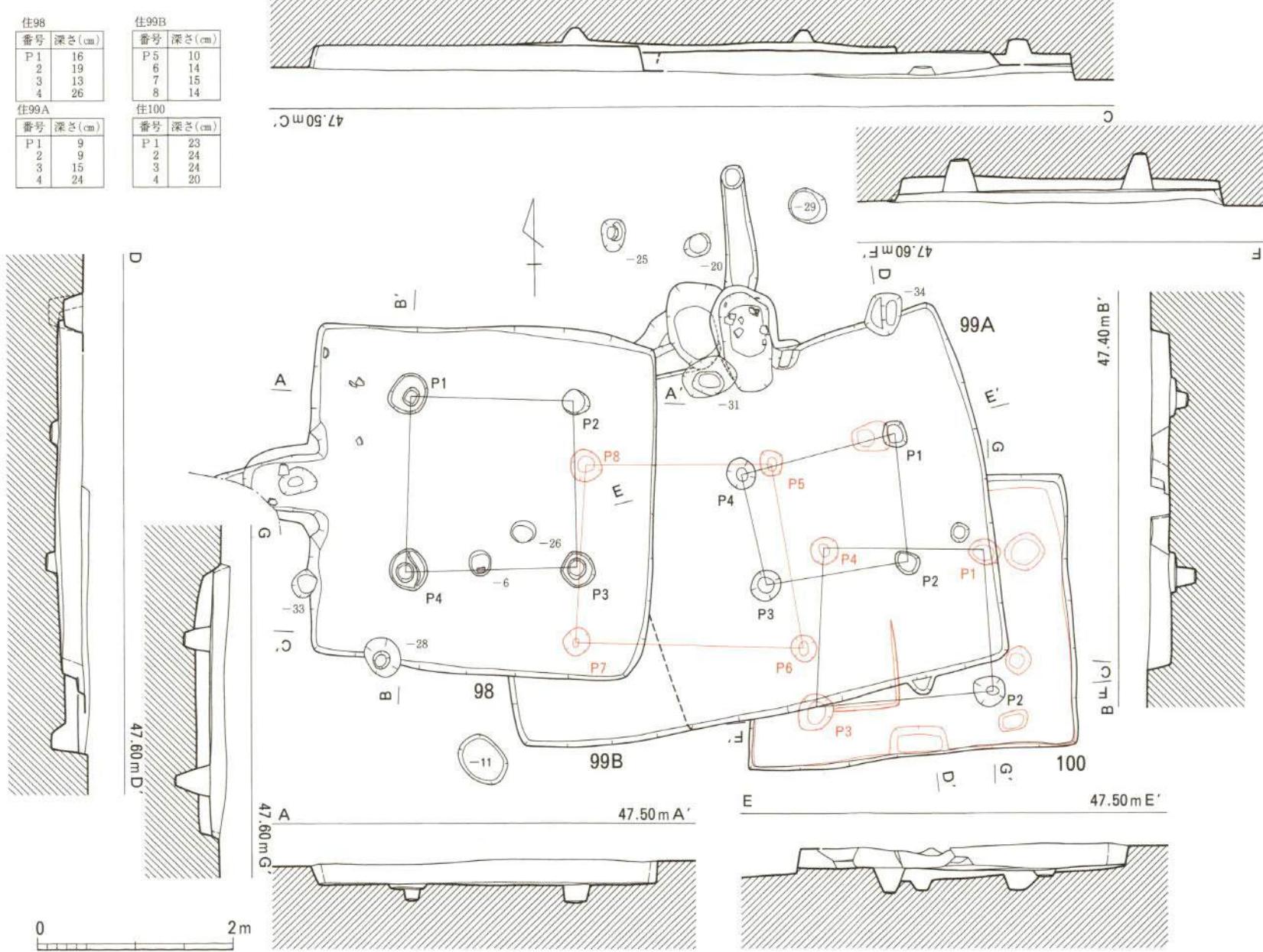
7は椀で、底部は球状をなす。8~10は壺の口縁部破片。10の口径は18cmほどになろう。11は肩部に稜を有し、鉢になるか。12は甌若しくは取手付き甌の取手部破片。5がカマド左袖上部の出土で、他は埋



第 125 図 59・60号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第 126 図 60・62号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)



第 151 図 98~100号竪穴住居実測図 (1/60)

土中の出土。

**石 器 (4)** 4は砂岩製の砥石で、残存長3.1cm、残存幅1.9cm、厚さ2.5cm。右側面に自然面を残し、上・下端と左側面は欠損する。2面を砥面としている。

**土製品 (5)** 5は算盤玉形の紡錘車で、径3.25cm、厚さ2.4cm、重さ16.9gを測る。中央に径0.3cmの孔を穿つ。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。

#### 62号竪穴住居（図版64-2、第127図）

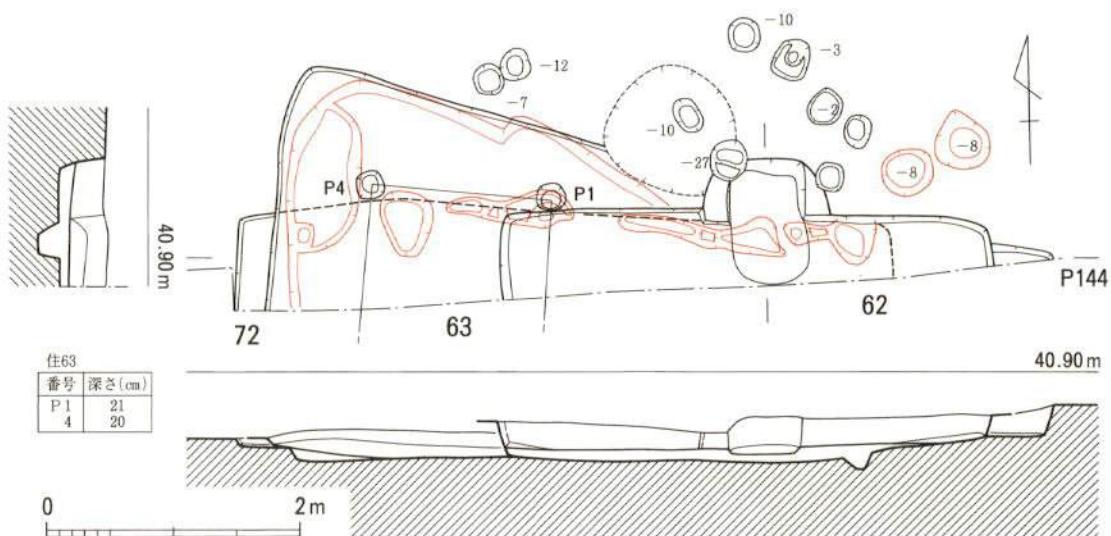
西端住居群に位置し、63号竪穴住居を切っている。また、大半が調査区外にあるため詳細は不明。北壁長3.77mで、西壁は0.7m分の検出状況である。壁高は北壁側で0.25m遺存する。規則的に竪穴内部に主柱穴を有すると思われるが、調査区外にあるものと思われる。

#### カマド（図版65-1、第128図）

突出型で北壁中央に付設される。遺存状態は悪く、左袖部を僅かに留める程度。住居壁を「コ」字形に42cm掘り込み壁体の掘形とし、掘形下部から住居壁面にかけて黒褐色粘質土を貼付し、壁体を構築している。左袖は長さ14cm、基部幅26cm、残高18cmを測る。焚口幅は55cm程になろう。壁面及び床面は良く焼けていた。支脚は遺存しておらず不明。

#### 出土遺物（第126図）

**土 器 (1~3)** 1~3は土師器。1は椀で、口径は13.8cmに復原した。2は口縁部に締まりがないので甌になるか。3は小型甌の口縁部小片。何れもカマド内より出土した。



第 127 図 62・63・72号竪穴住居実測図 (1/60)

### 63号竪穴住居（図版64-2、第127図）

西端住居群に位置し、62号竪穴住居に東壁側を切られている。また、大半が調査区外にあるため規模など詳細は不明。北壁は2.40m、西壁は1.95m分の検出であるが、柱穴の配置からして壁長は3m規模であろう。壁高は北壁側で12cmと削平が著しい。

P1・4が主柱穴で、径・深さとも20cm前後で、柱間は1.44mを測る。残存部にカマドは見当たらないので、東壁に付設されていた可能性が高い。埋土中から鉄器が出土している。

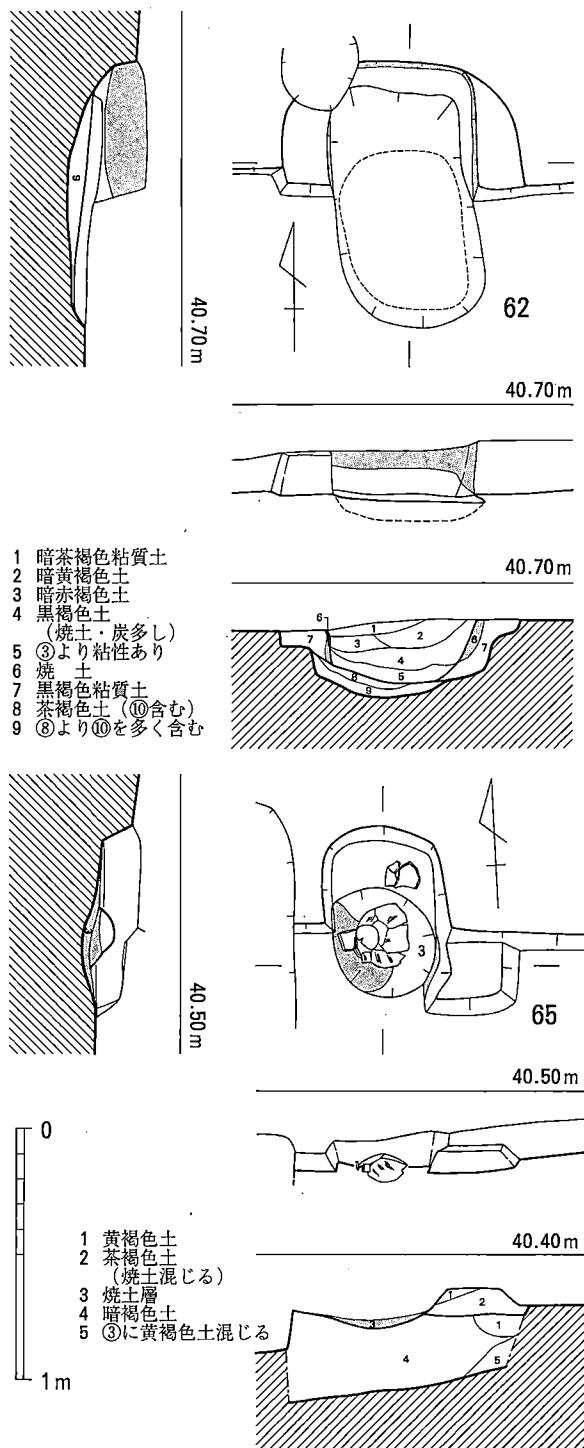
### 出土遺物（第131・142図）

**土 器 (1・2)** 1は須恵器坏身の口縁部小片。口唇部は断面三角形状に肥厚する。また、口唇部には打ち欠きがみられる。2は土師器甕で、復原口径は16.8cmを測る。口唇部は丸く收めており、須恵器の模倣形態を呈する。1は埋土中の出土で、2は貼床下層の出土。

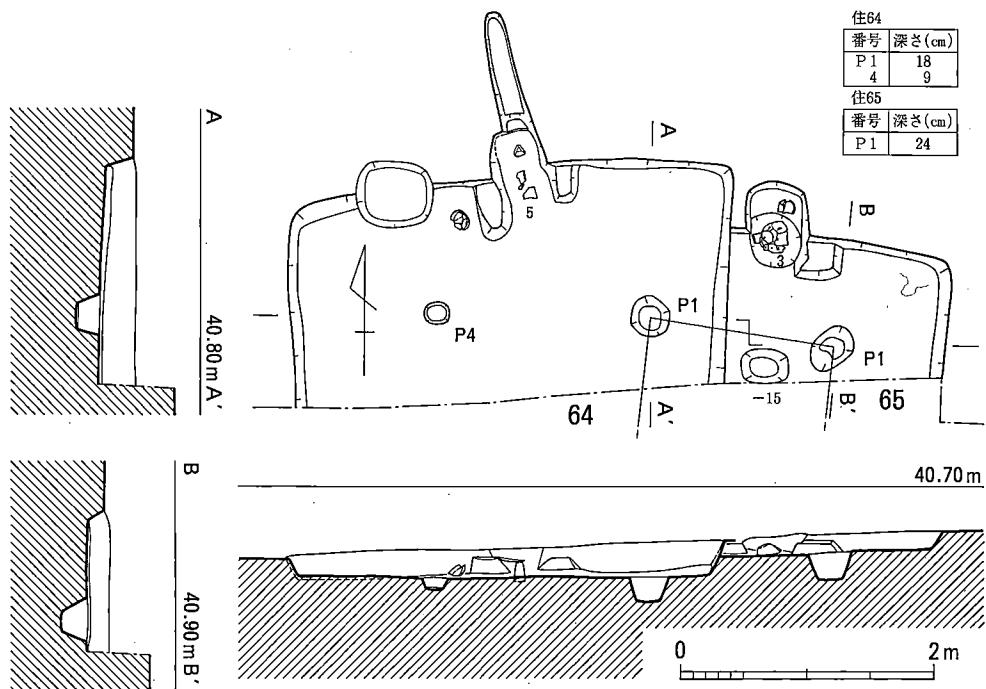
**鉄 器 (2)** 2はブーメラン形に屈曲し、断面形は楔形を呈し、刃部が認められる。所謂、弓削刀子で、身の幅2.1cm、背の厚さ0.3cm。

### 64号竪穴住居（図版64-2、第129図）

西端住居群に位置し、65号竪穴住居を切っている。また、南半部は調査区外にある。北壁長3.47mで、東壁は1.7m分の検出状況である。壁高は北壁側で0.23m遺存する。P1・



第 128 図 62・65号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第129図 64・65号堅穴住居実測図 (1/60)

4を当住居の主柱穴とみなしたが、大きさ・深さとも極端に異なり、P1は65号住居の主柱穴と考えた方が良さそうである。ちなみにP1-4の柱間は1.7mである。カマド内とカマド左袖脇から土師器が出土している。

#### カマド (図版65-2、第130図)

突出型のカマドで、北壁中央に付設する。遺存状態は比較的良好で、煙道部を留めている。壁体は住居壁を「コ」字形に42cm掘り込み、掘形下部から住居壁面にかけて暗茶褐色土・茶褐色土を貼り付けて構築する。右袖は長さ24cm、基部幅27cm、残高12cmで、左袖は長さ44cm、基部幅25cm、残高12cmで、焚口幅は35cmを測る。煙道は火床面から高さ15cmの部位に設けられ、長さ95cm、幅25cmを測る。壁体と煙道との間には幅8cmのテラスがある。また、煙道底面は焚口側に若干傾斜している。壁面及び床面は良く焼けて赤化していた。支脚はカマド奥壁から10cmの位置にあり、長さ19cmの川原石を立てている。カマド内から浮いた状態で土師器甕片が出土した。また、左袖脇から土師器壊が出土している。

#### 出土遺物 (図版68・69-2、第131・142図)

**土 器 (1~5)** 1~5は土師器。1は壺蓋で、器高4.8cm、復原口径14.4cmを測る。天井部はやや低めで、口縁部との境の稜も不明瞭。内外面とも範ミガキ調整による。2は壺身の口縁部

小片。口縁部は斜め外方に立ち上がる。1は外面に、2は内面に黒漆状の黒色物を塗布している。3は壊で、器高2.5cm、復原口径13.6cm。口縁部は平底の底部から斜め上方に立ち上がる。外底部は手持ちヘラ削りによる。4は頸無壺で、口縁部は直立する。口径は13.8cmに復原した。5は甕で、頸部の締まりはよい。口縁部は若干肥厚している。復原口径16.0cm。4はP1の出土で、2はカマド内の出土で、1は左袖部脇からの出土である。

**鉄 器 (1)** 1は鉄鎌で、錆膨れが著しい。残存長6.6cmで、頭部幅1.0cm。茎部は断面方形を呈し、厚さ0.6mmを測る。

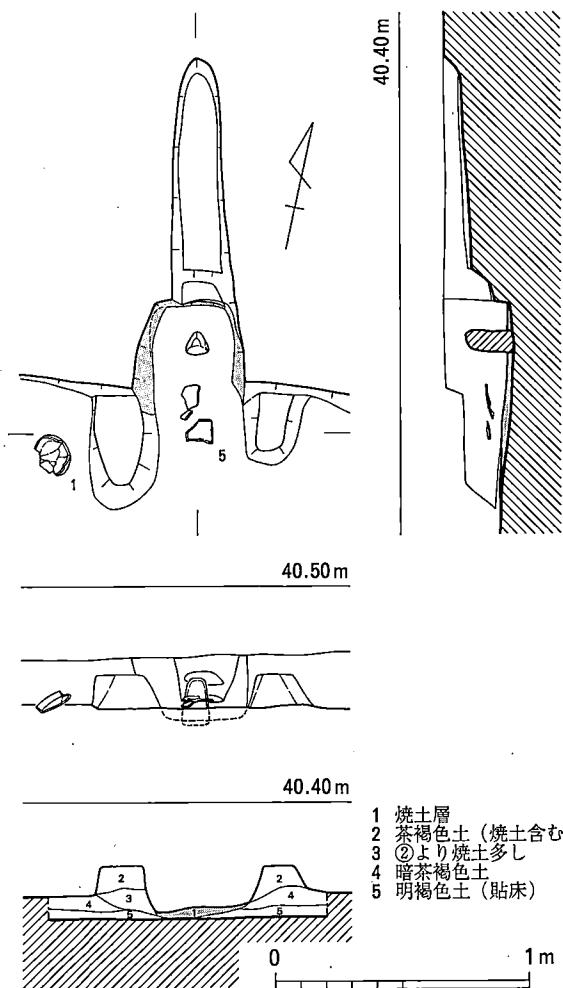
#### 65号竪穴住居（図版64-2、第129図）

西端住居群に位置し、64号竪穴住居に西壁側を切られている。また、大半が調査区外にあるため規模など詳細は不明。64号住居のP1と当住居のP1を主柱穴とすると住居の規模は3m程になる。大きさ・深さ的にも当住居の主柱穴とみなした方が納得がゆく。P1-1間の柱間は1.45mを測る。カマド内から土器が出土している。

#### カマド（図版65-3、第128図）

突出型で北壁に付設されている。遺存状態は悪く、右袖部を留める程度。壁体の突出は大きく、竪穴外部を「コ」字形に40cm掘り込んでいる。袖部は床面を若干掘り込んで茶褐色土を貼付し、壁体を構築している。右袖は長さ29cm、基部幅33cm、残高7cmを測る。焚口幅は35cm程であろう。カマド床面には焼土が堆積しており、その上に土師器甕の底部破片が伏せて置かれしており、支脚として使用していたものか。

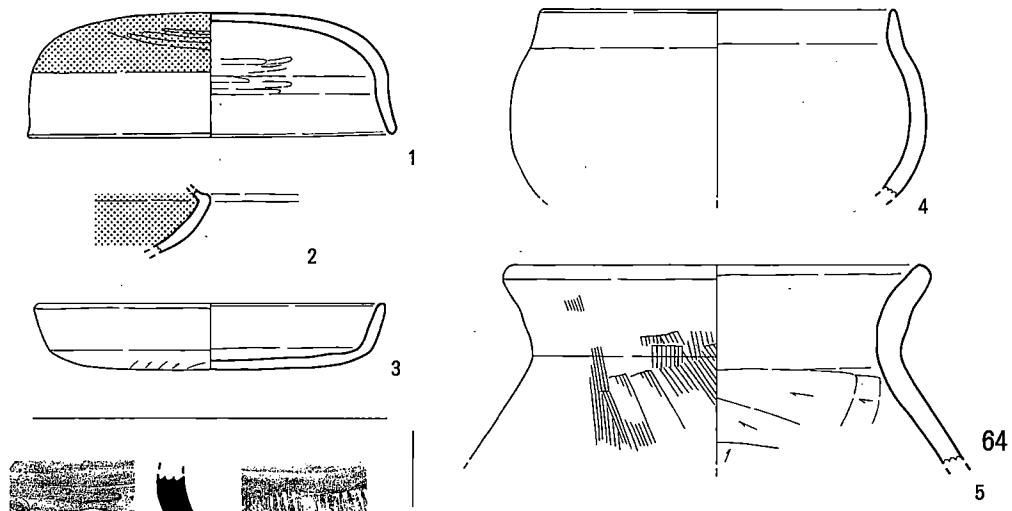
#### 出土遺物（図版68、第131図）



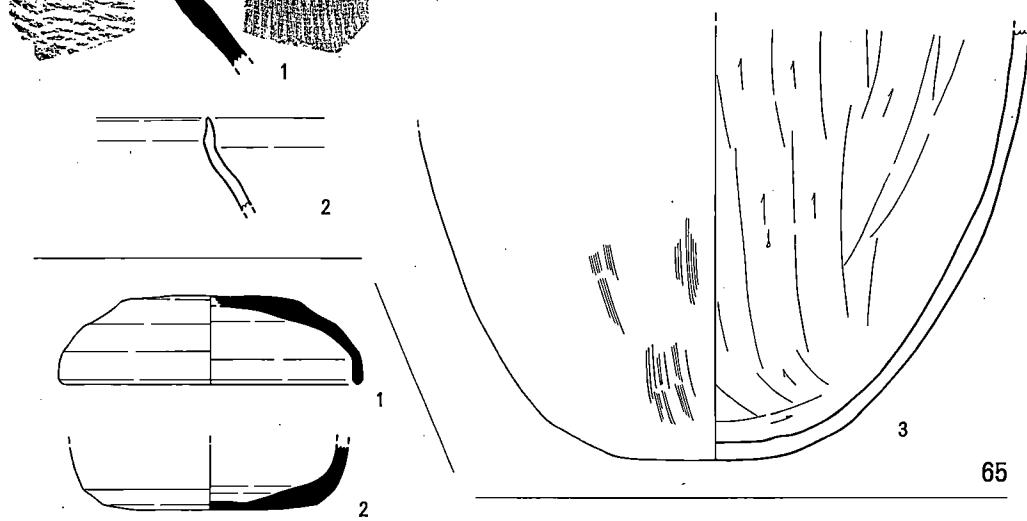
第 130 図 64号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



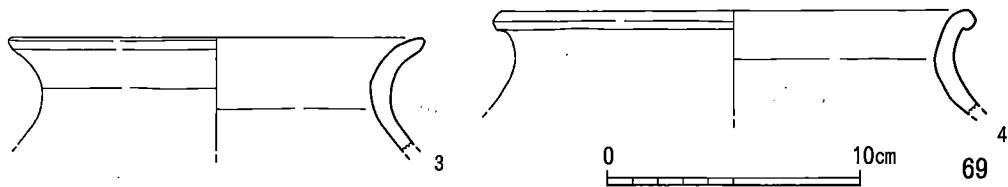
63



64



65



69

第 131 図 63・64・65・69号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

**土 器 (1~3)** 1は須恵器甕の肩部破片。2は無頸壺の口縁部小片で、カマド内の出土。口唇部はシャープで、直立気味に立ち上がる。3はカマド内に伏せてあった甕の底部破片。外面は二次加熱により、脆弱になっている。

### 67号竪穴住居

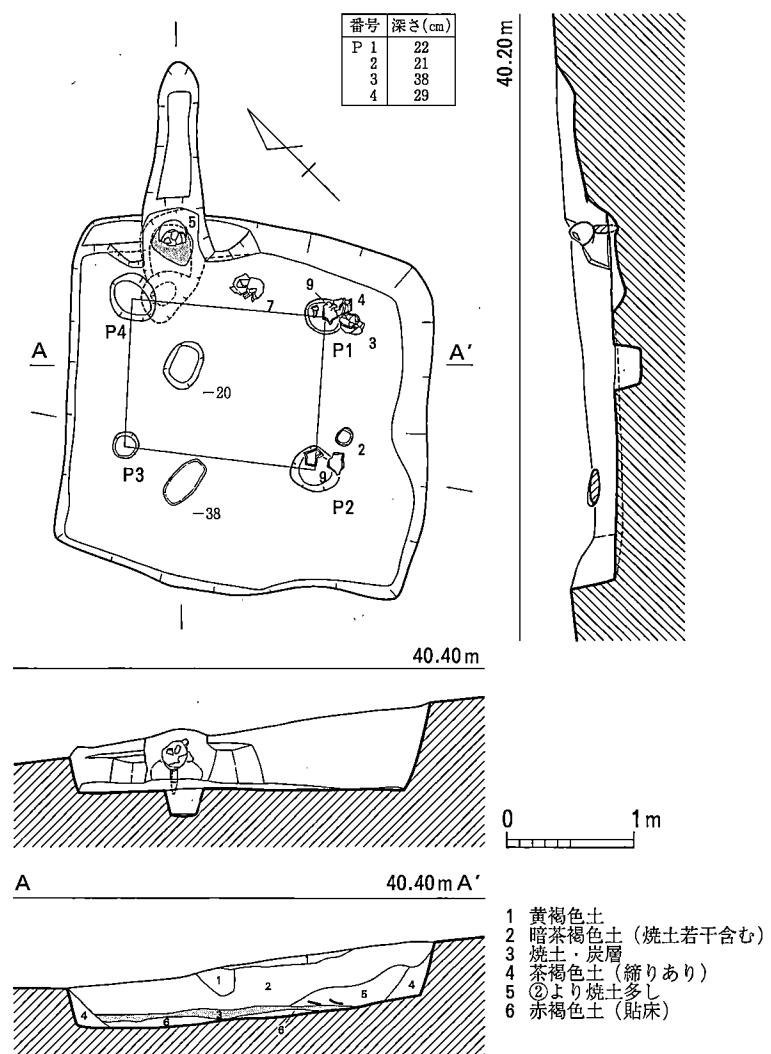
西端住居群内で、60号竪穴住居の直ぐ西側で50×70cmの範囲で焼土を検出した。竪穴住居として番号を付したもの柱穴などは確認できず、詳細は不明。

### 68号竪穴住居 (図版66-1・67-1、第132図)

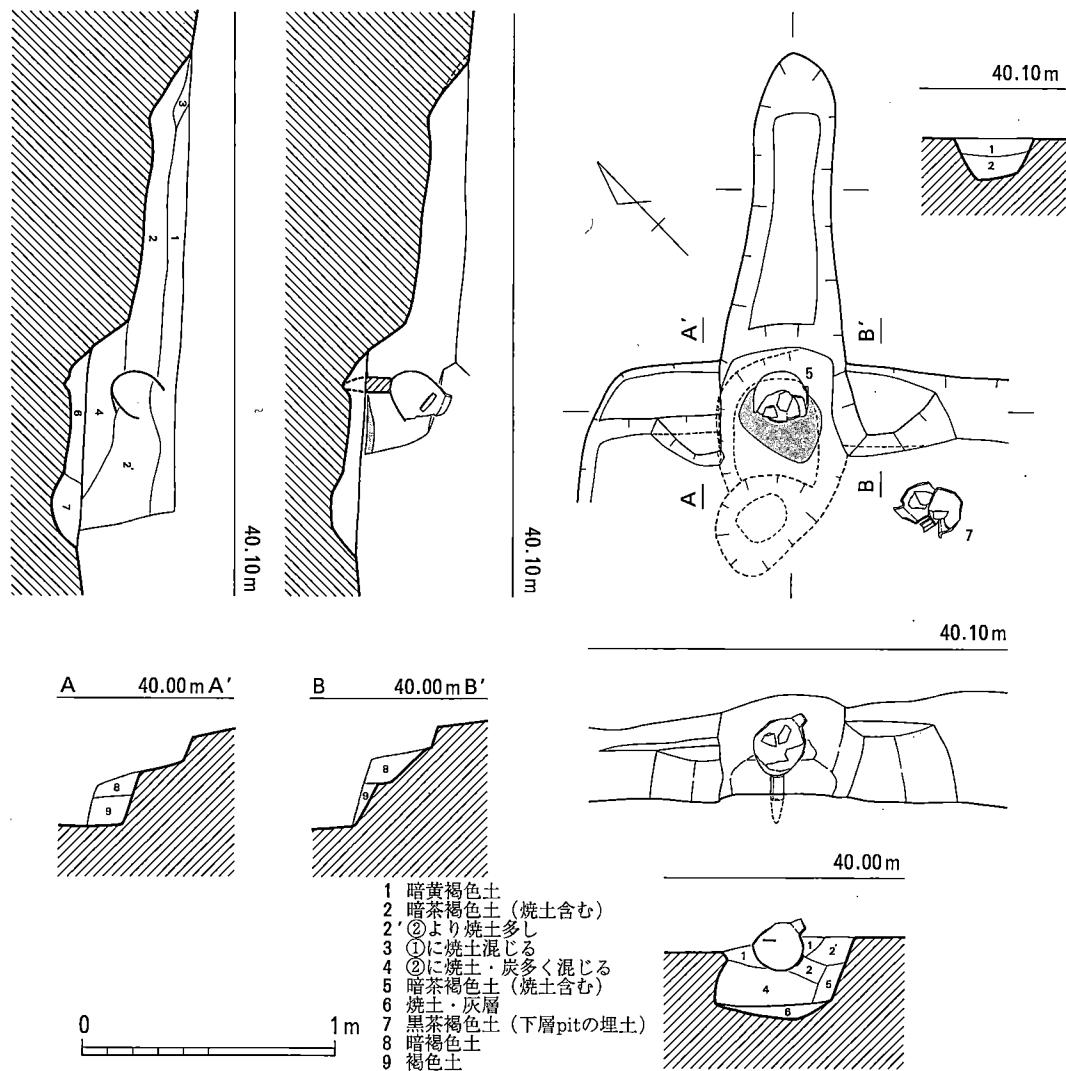
西端住居群の最西端で、60号竪穴住居の2m西側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、北東壁長2.60m、南東壁長2.65mを測る。壁高は東壁側で72cmと遺存状態の良好な住居であった。

主柱穴としたP4はカマド左袖の前面に位置するが、カマドの位置と柱穴間エリアが北隅部に寄っていることは関連し、また、P2南側の下場の線が外側に抉れ、空間的に広く空いていることからこの部分に出入り口を想定したい。

柱穴は掘形径20~35cm、深さ21~38cmを測る。柱間はP1~2間1.20m、P1~4間1.53mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。また、床面には焼土・炭が厚く堆積し、竪穴内部から浮いた状態で出土している土器は、住居廃絶後に投棄されたものである。



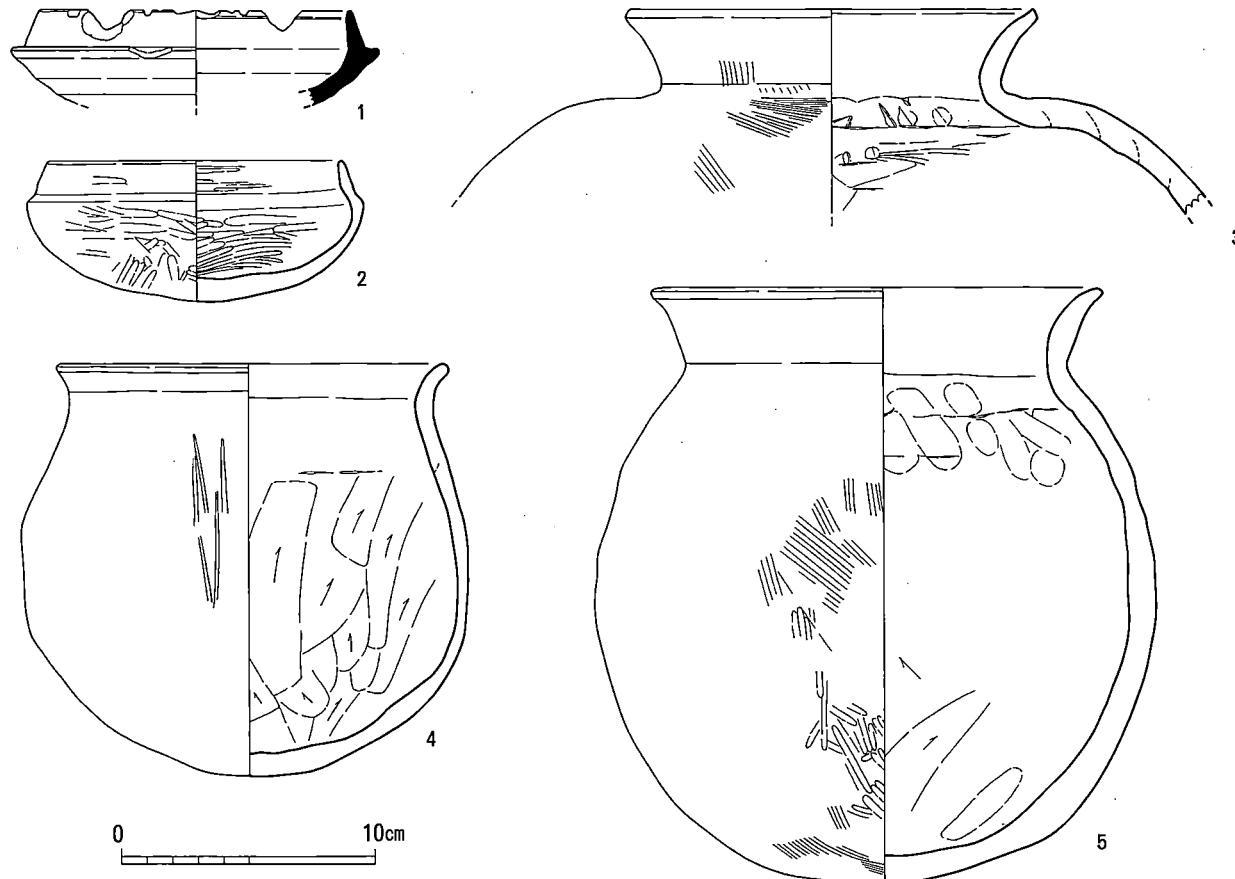
第132図 68号竪穴住居実測図 (1/60)



第133図 68号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

### カマド (図版66-2、第133図)

突出型のカマドで、北東壁隅部寄りに付設される。当カマドで特徴的なのは、袖部の構築方法で、袖部を貼付する部分の住居壁を階段状に掘り残して袖を貼付している点である。右袖は長さ33cm、基部幅52cm、残高31cmで、左袖は長さ20cm、基部幅28cm、残高22cmを測る。火床を掘り下げるタイプではないが、焚口幅は50cmで、奥行43cmを測る。袖の下半部は加熱により赤変しており、火床は支脚の前面30cmの範囲で良く焼けていた。煙道は長さ105cm、先端幅30cmで、煙道底面は焚口側に傾斜している。支脚はカマド奥壁から10cmの場所にあり、長さ19cmの

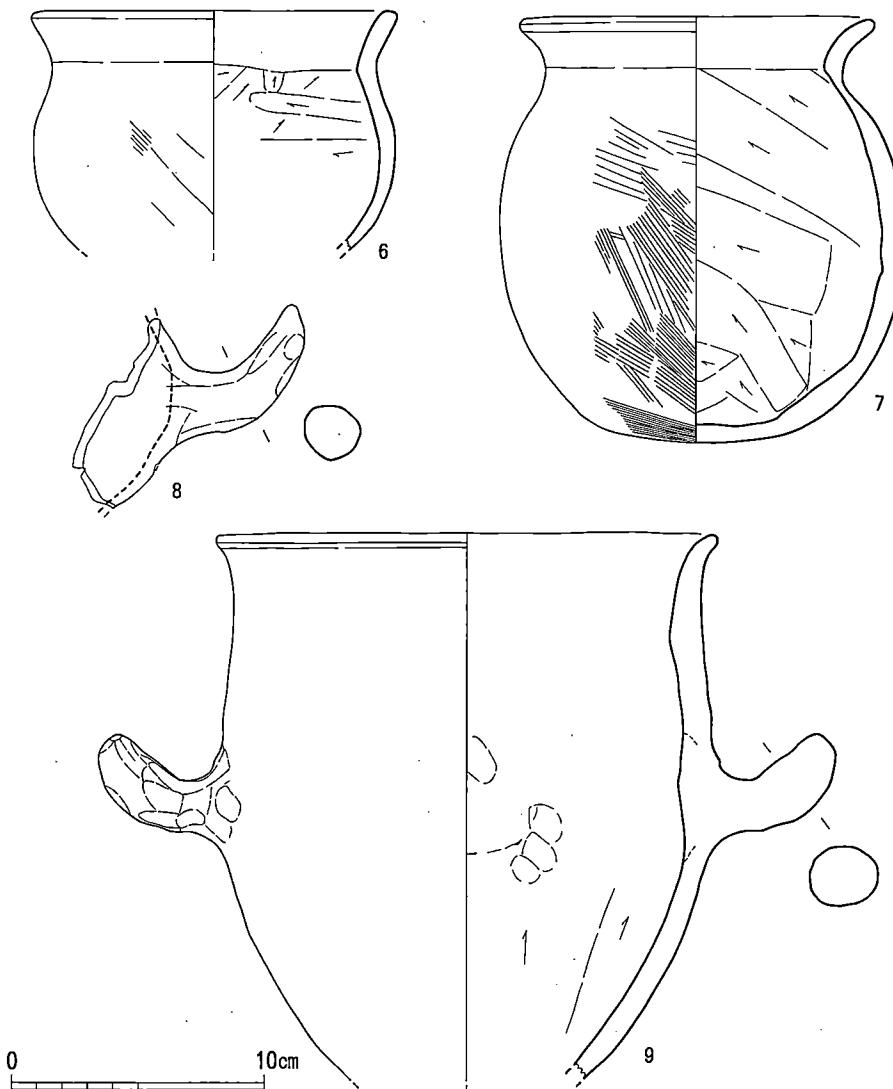


第 134 図 68号竪穴住居出土土器実測図① (1/3)

川原石を立てていた。支脚の上には土師器甕が使用時の状態のままで据えられていた。また、甕の中の土は篩にかけたが、炭化米など出土していない。

**出土遺物（図版69-1、第134・135図）**

**土 器（1～9）** 1は須恵器、2～9は土師器。1は壺身の口縁部小片で、肉厚である。口唇部は内面に僅かな段を有する。口縁部は打ち欠かれており、復原口径は12.0cmを測る。2は壺で、体部との境に段を有する。口縁部は斜め上方に立ち上がる。内外面ともミガキ調整により、口縁部内面には黒色物を塗布している。3は大甕の口縁～肩部破片で、頸部は強く締まる。口径



第 135 図 68号竪穴住居出土土器実測図② (1/3)

は15.8cmに復原した。4~7は甕で、4・6・7は5に比して小型のもの。口縁部は「く」字形に屈曲する。器高は4が16.2cm、5は23.5cm、7は16.7cmで、口径は4が15.0cm、5は17.2cm、7は13.6cmを測る。8は甕の取手部破片。9は甕で、残高21.6cm、復原口径19.4cmを測る。口縁部は短く外反する。また、取手の断面形は丸い。5がカマド内の出土で、他は埋土中の出土。

#### 69号竪穴住居（図版62-1、第123図）

西端住居群で、59号竪穴住居に竪穴部の大半を切られて位置する。北壁長4.72m、壁高0.12mを測る。主柱穴は59号住居の貼床下部で検出したP5~7の3本であるが、1本分を検出し得ていない。掘形径0.4~0.6m、深さ0.3~0.4mと確りしている。柱間はP5~6間2.48m、P6~7間2.13mを測る。カマドは北壁には付設されておらず、東・西壁に付設されていたものか。北東隅部に焼土があるが、位置的にカマドではない。

#### 出土遺物（第131図）

**土 器（1~4）** 1・2が須恵器で、3・4が土師器。1は壺蓋で、器高3.5cm、復原口径11.6cm。天井部はやや低平で、口縁部は直立気味である。2は壺身で、口縁部は底部からそのまま立ち上がる。3・4は甕の口縁部破片で、口径は3が16.2cmで、4は18.4cmに復原した。4の口縁端部は丸く突出しており、須恵器の模倣形態を呈する。肩部はかなり張るようだ。何れも埋土中の出土。

#### 70号竪穴住居（第120図）

調査区の西端部に位置し、58号竪穴住居を切っている。北壁のみの検出で、大半が調査区外にあるため詳細は不明。北壁は3.1mの検出長。

#### カマド（第120図）

北壁に付設される突出型であるが、詳細は不明。突出長26cm、幅80cmを測る。

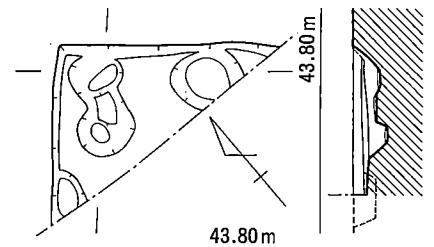
#### 71号竪穴住居（図版63、第124図）

西端住居群で、60号竪穴住居に竪穴部の半分を切られる。また、北壁中央には15号土壙墓が埋葬されている。平面形は方形を呈し、北壁長3.6m、東壁長3.55mで、壁高は東壁側で16cmを測る。当住居の主柱穴は竪穴隅部にあるP1~4で、柱間はP1~2間3.54m、P1~4間3.56mを測り、主柱穴を結んだ線は方形を呈する。また、P1・2は溝状を呈し、住居廃絶の際に柱を抜き去ったものか。カマドは北壁に付設されていたのが15号土壙墓に壊されたものであろう。

#### 79号竪穴住居（第136図）

2次調査区の中央部で、弥生時代の6号溝の直ぐ南側に位置する。北隅部を調査した程度で、

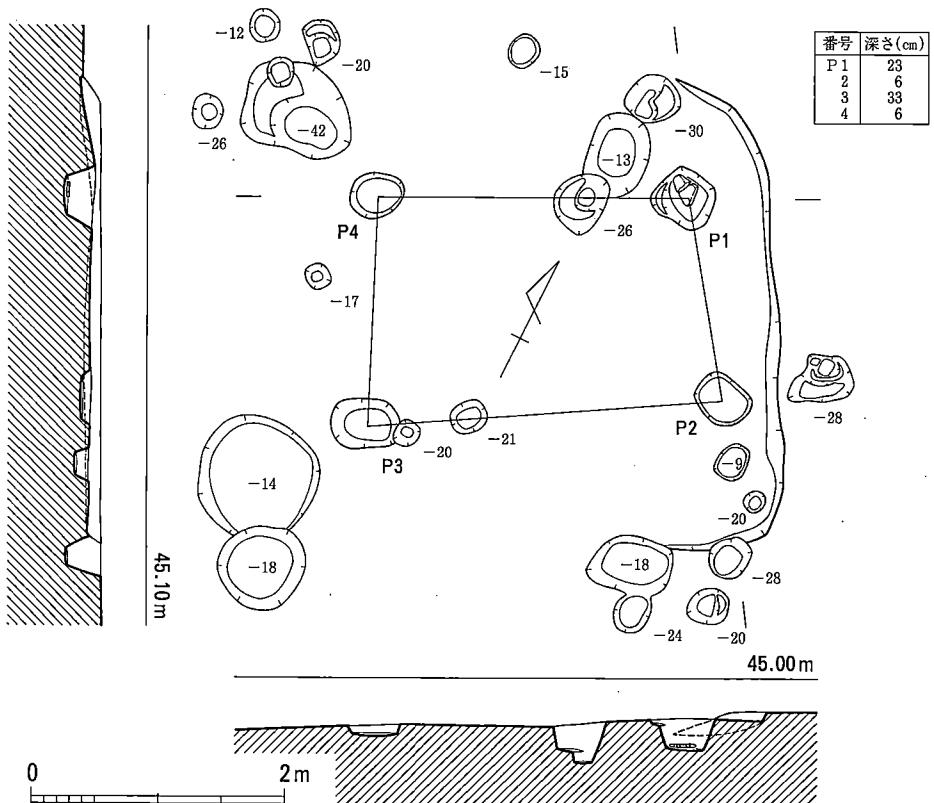
大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長は北東壁が1.7mで、北西壁は1.4m。壁高は北西壁側で6cmと削平が著しい。埋土中から6世紀代の特徴を示す土師器甕小片が出土しており、当該期に属するものと思われる。



### 91号竪穴住居 (第137図)

8号溝と4号通路の間に位置し、弥生時代の88号竪穴住居を切っている。住居壁の残存状況は悪く、東壁を辛うじて残す程度である。東壁長3.42m、壁高は8cm遺存する程度。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径40cm前後、深さは6~33cmとばらつきがある。柱間はP1~2間1.62m、P1~4間2.43mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。カマドは削平されたものか、焼土さえ遺存していない。埋土中から7世紀代の特徴を示す須恵器壊小片が出土している。

第 136 図 79号竪穴住居実測図 (1/60)

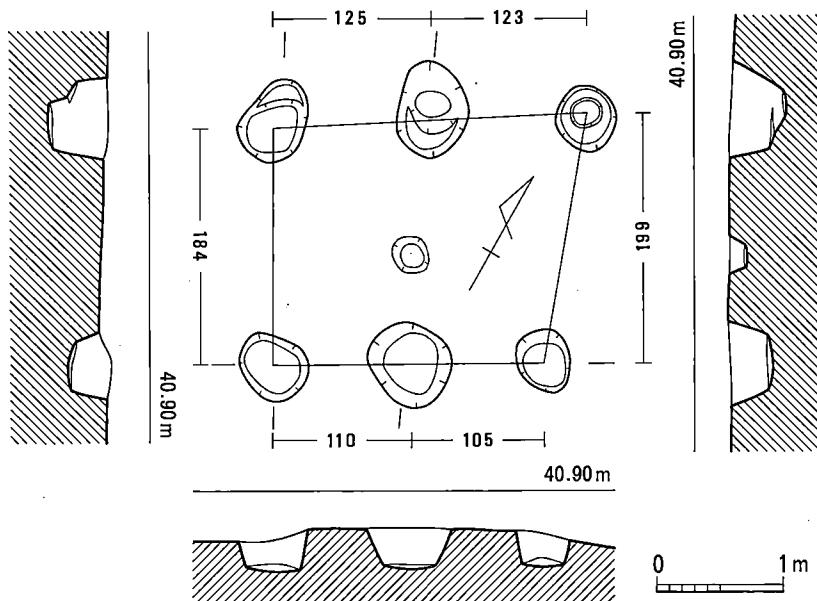


第 137 図 91号竪穴住居実測図 (1/60)

## (2) 掘立柱建物

### 23号掘立柱建物 (第138図)

西端部住居群中央で、56号竪穴住居の直ぐに北西側に位置する。梁行1間 ( $1.98m \approx 2.5$  尺) × 衍行2間 ( $2.46m \approx 8$  尺) 規模の建物で、柱掘形は円形を呈し、径 $0.5 \sim 0.7m$ で、深さは $0.3 \sim 0.45m$ を測る。中央に径 $30cm$ 、深さ $12cm$ の小ピットがあり、床支えの柱穴になろう。建物の方向的には68号竪穴住居とが一番近似する。柱掘形内からは土師器甕小片が出土している。



第138図 23号掘立柱建物実測図 (1/60)

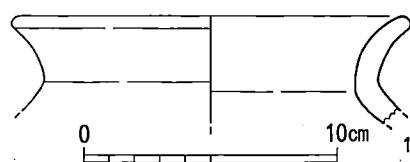
## (3) 土 坑

### 2号土坑 (第140図)

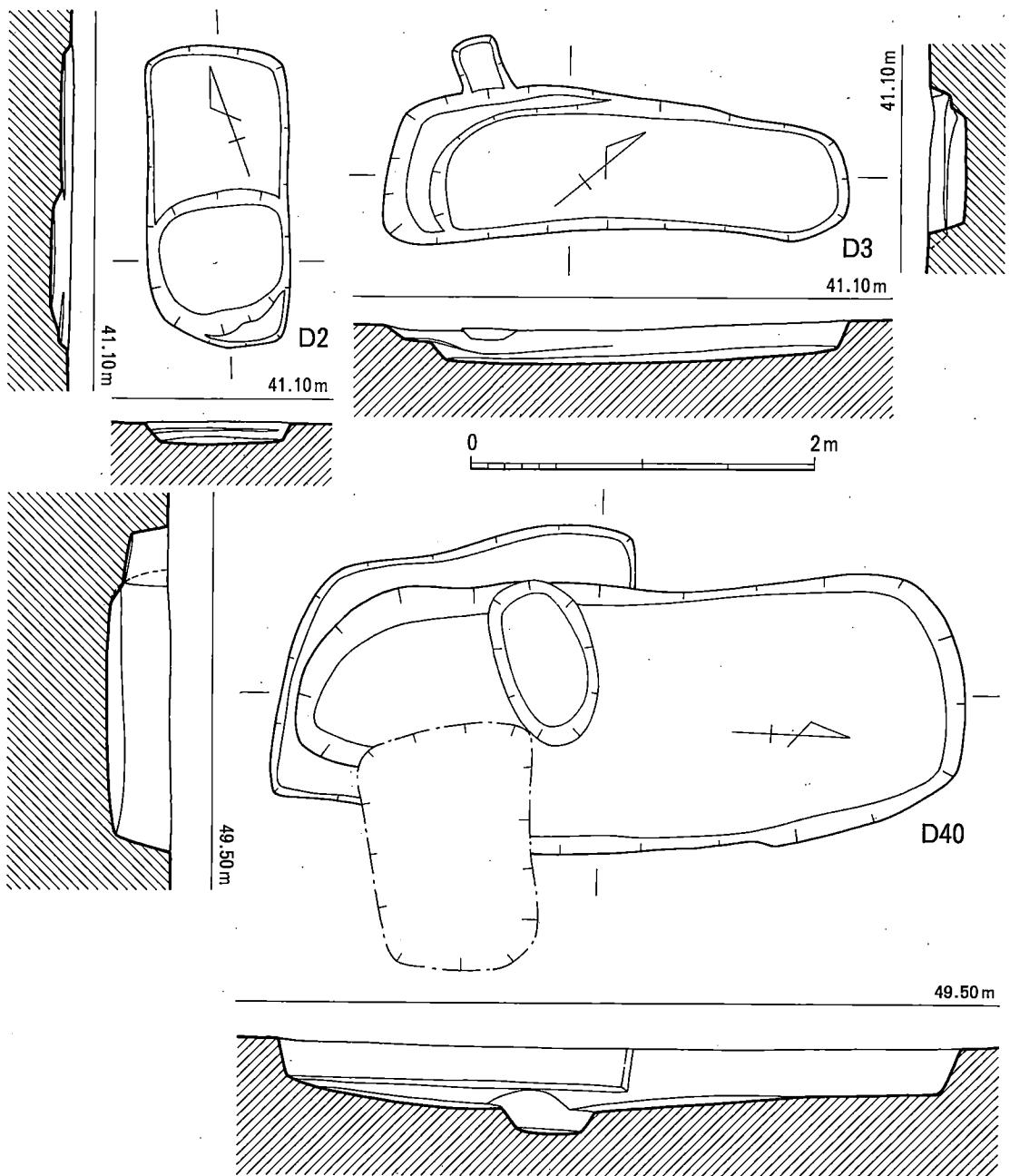
西端部住居群東側で、59号竪穴住居の4m東側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 $1.74m$ 、短軸 $0.82m$ 、深さ $0.05m$ を測る。また、南半部は一段下がっている。埋土中からは土師器小片が出土している。主軸方位は $N19^\circ E$ を示す。

### 3号土坑 (図版67-2、第140図)

西端部住居群東側で、57号竪穴住居の3.5m東側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 $2.71m$ 、短軸 $0.85m$ 、深さ $0.22m$ を測る。南壁側にはL字形に

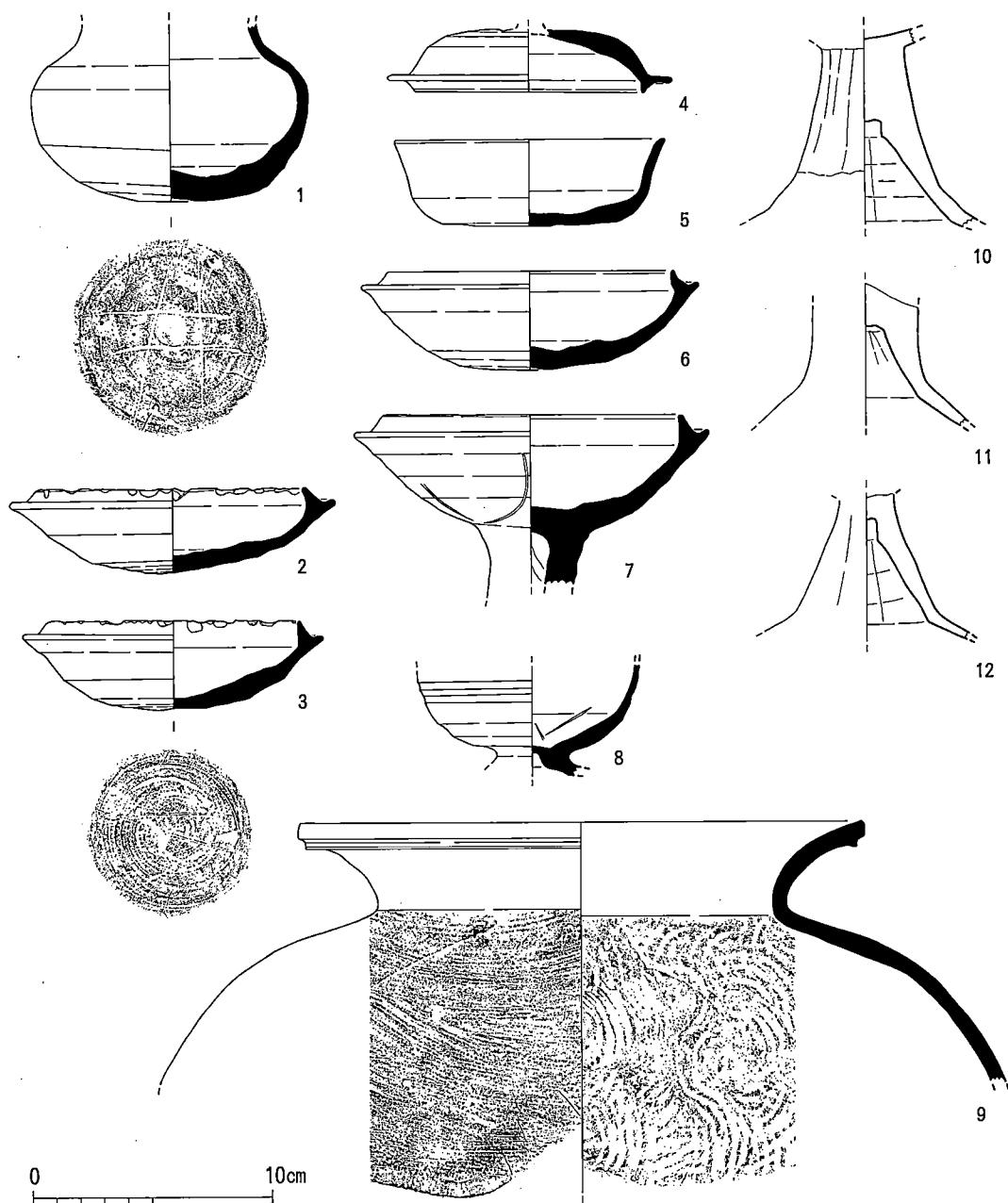


第139図 3号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 140 図 2・3・40号土坑実測図 (1/40)

テラスが付く。埋土中からは土師器甕・土版が出土している。主軸方位はN40° Eを示す。



第 141 図 Pit 他出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (図版69-2、第139・142図)

**土 器 (1)** 1は土師器甕の口縁部破片で、口径は15.2cmに復原した。頸部の締まりは良く、口縁部は鉤形に屈曲する。

**土製品（6）** 6は弥生土器片利用の土版で、径2.1cm、厚さ0.8cm、重さ3.4gを測る。側縁は打欠きのままである。

#### 40号土 坑（第140図）

2次調査区東端部で奈良時代の110号堅穴住居の直ぐ南側に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸4.00m、短軸1.50m、深さ0.37mを測る。また、南壁側はテラスがJ字形に巡る。埋土中からは7世紀後半代の須恵器・土師器片が出土している。

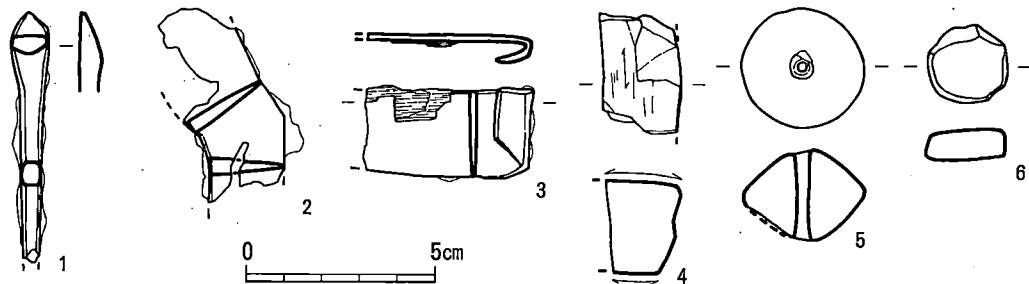
#### （4）その他出土の遺物

ここでは、ピットその他出土の土器を報告する。

#### 出土遺物（第141図）

**土 器（1~12）** 1~9は須恵器、10~12は土師器。1は短頸壺で、口唇部を欠く。外底面には「井」字形のヘラ記号を付している。2・3・6は壺身で、口縁部は短く斜め上方に立つ。2・3の口唇部は打ち欠いている。器高は2が3.5cm、3は3.7cm、6は4.1cmで、口径は2が11.0cm、3は10.4cm、6は11.9cmを測る。1~3は西端住居群北側の段落ちの出土。6は東端部の採集品。

4は壺蓋で、身受けのかえりを有する。受け部は水平に開き、かえり径は9.5cmに復原した。天井部のつまみは欠失する。P11の出土。5は壺身で、口縁部は斜め上方に開く。口唇部はシャープである。器高3.6cm、口径11.4cmを測る。7は有蓋高壺の壺部破片。かえりの付く壺身に脚部を貼付したもの。外面にはヘラ先で円弧状のヘラ記号が付されている。復原口径12.4cm。東端部の出土。8は台付椀で、口唇部を欠く。体部には篦描沈線を2条巡らせている。P71の出土。9は甕の口縁部～肩部の破片で、口径は23.4cmに復原した。口縁部は大きく開き、口唇部の直下に削出し凸帯を施す。外面は平行タタキの後カキ目を施し、内面には円弧文タタキによる。



第142図 出土石器・鉄器・土製品実測図（1/2）

## 5. 奈良時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居

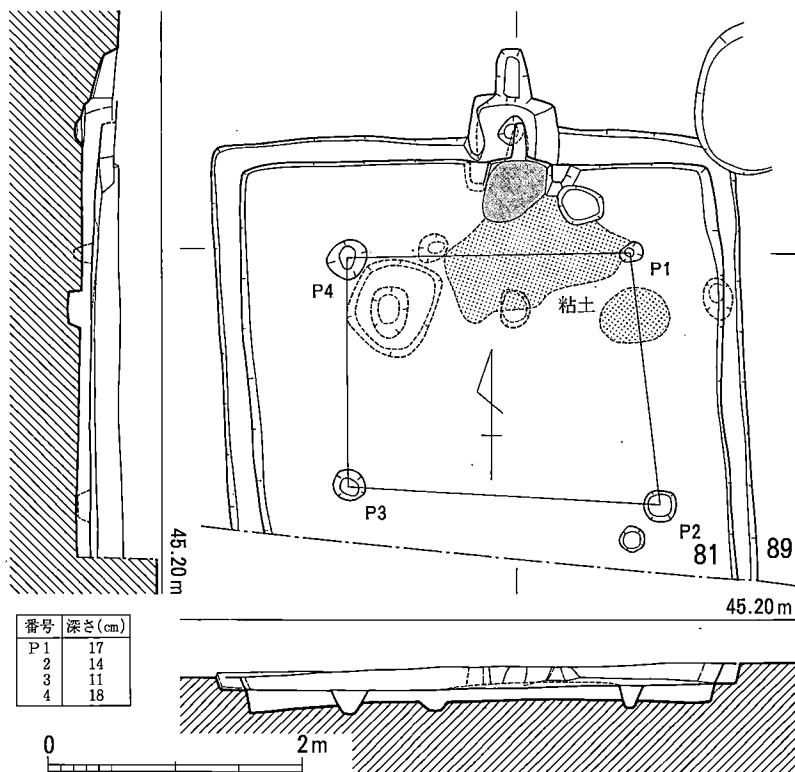
奈良時代の竪穴住居は4号通路以東に散在的に築造され、総数28軒検出した。便宜的にA群—81・83～85・89・90号、B群—98～103・120号、C群—104～116号とする。

#### 81号竪穴住居（図版70-1、第143図）

調査区の中央で4号通路と8号溝の間に位置する。89号竪穴住居と竪穴部が重複しており、同住居の規模を0.2m程縮小している。床面は89号住居を10cmほど埋めて構築する。南壁は調査区外にあるが、平面形は方形を呈するか。北壁長3.64mで、東壁は3.3m程の検出である。主柱穴はP1～4の4本で、掘形径20～30cm、深さ15cm前後を測る。柱間はP1～2間2.02m、P1～4間2.22mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。

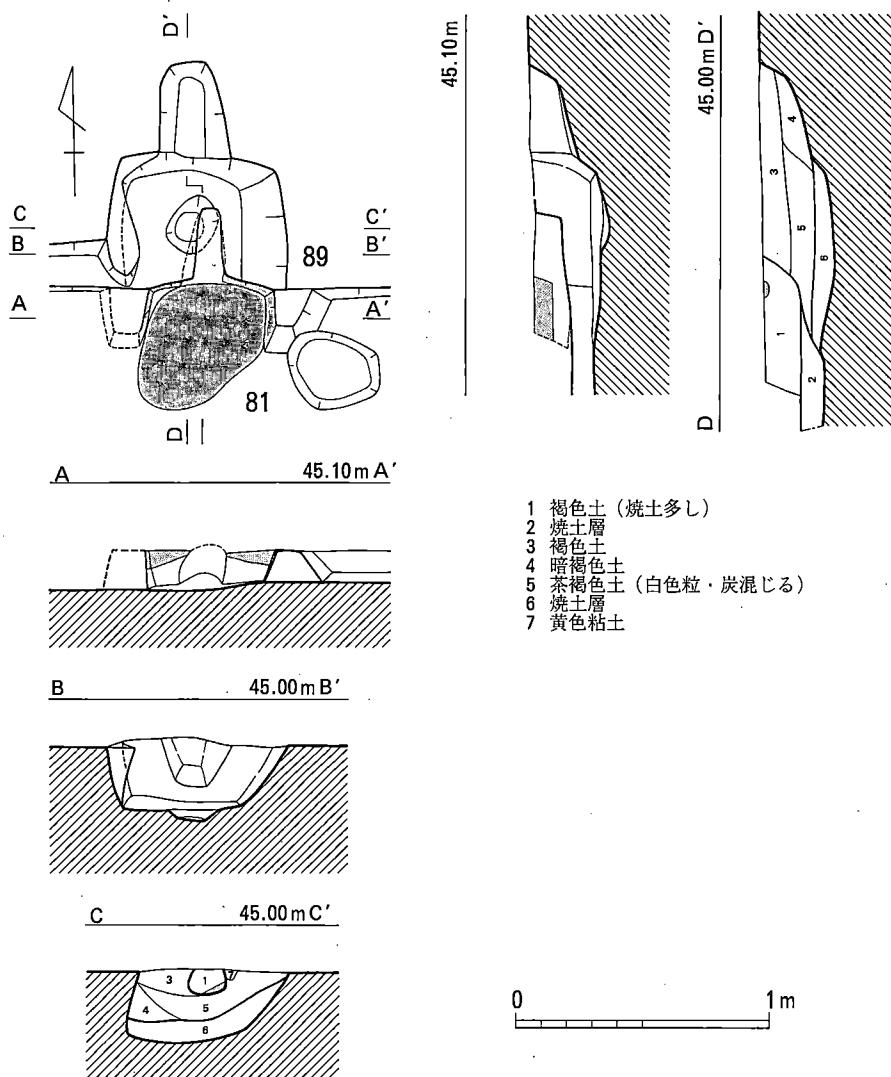
#### カマド（図版70-2、第144図）

作り付型のカマドで、北壁中央に付設する。遺存状況は比較的良好で、両袖部・煙道を留め



第143図 81・89号竪穴住居実測図 (1/60)

ている。右袖は長さ25cm、基部幅26cm、残高13cmを測る。左袖は検出の際、若干とばしてしまったが、長さ16cmを確認できる。また、奥壁から煙道部にかけての上面には壁体の一部とみられる黄色粘土がある。当カマドは焚口を掘り窪めないタイプのもので、焚口幅は47cmを測る。カマド奥壁から47cm手前の部分から奥壁にかけて良く焼けていた。煙道はトンネル式に掘り込まれ、カマド床面から立ち上がる。長さ28cm、煙道口幅12cmを測る。また、カマドの前面には黄色粘土が広がっていた。



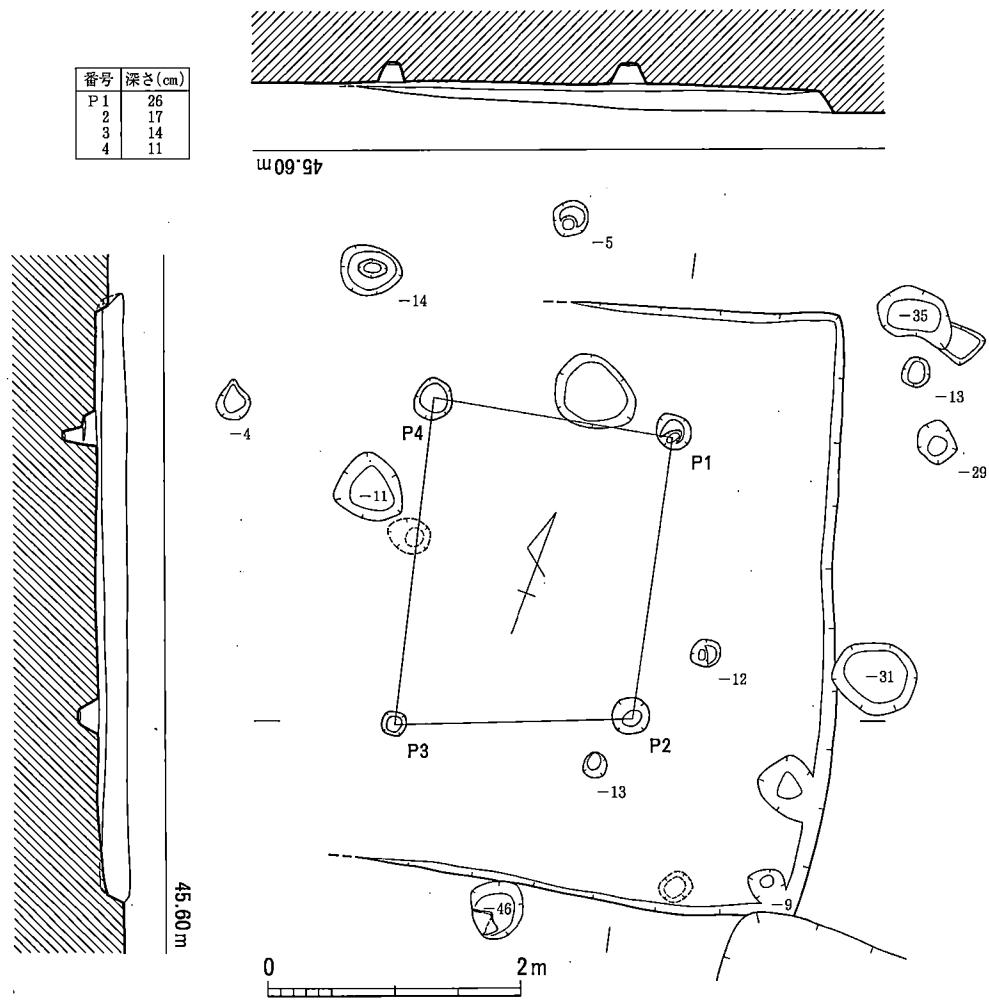
第144図 81・89号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

### 出土遺物（第146図）

**土 器 (1~3)** 1は須恵器、2・3は土師器。1は口縁部の小破片で、高坏にしては立ち上がりが弱く、端部が方形を呈することから壺蓋とした。生焼け品。2は小型甕の口縁部破片で、復原口径15.0cm。口縁部は肥厚する。3は鍋の口縁～胴部破片で、口縁部は水平気味に開く。復原口径32.8cm。器壁は薄く、内外面に煤が付着している。何れも埋土中の出土。

### 83号竪穴住居（図版71、第145図）

調査区の中央に位置し、B群に属する。住居隅部が84号竪穴住居と接するが、前後関係はつかめなかった。住居壁の遺存状況は悪く、西壁を留めていない。東壁は長さ4.75m、壁高は0.17mで、南壁の残存長3.50m。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径20~30cm、深さ15cm前後を測る。

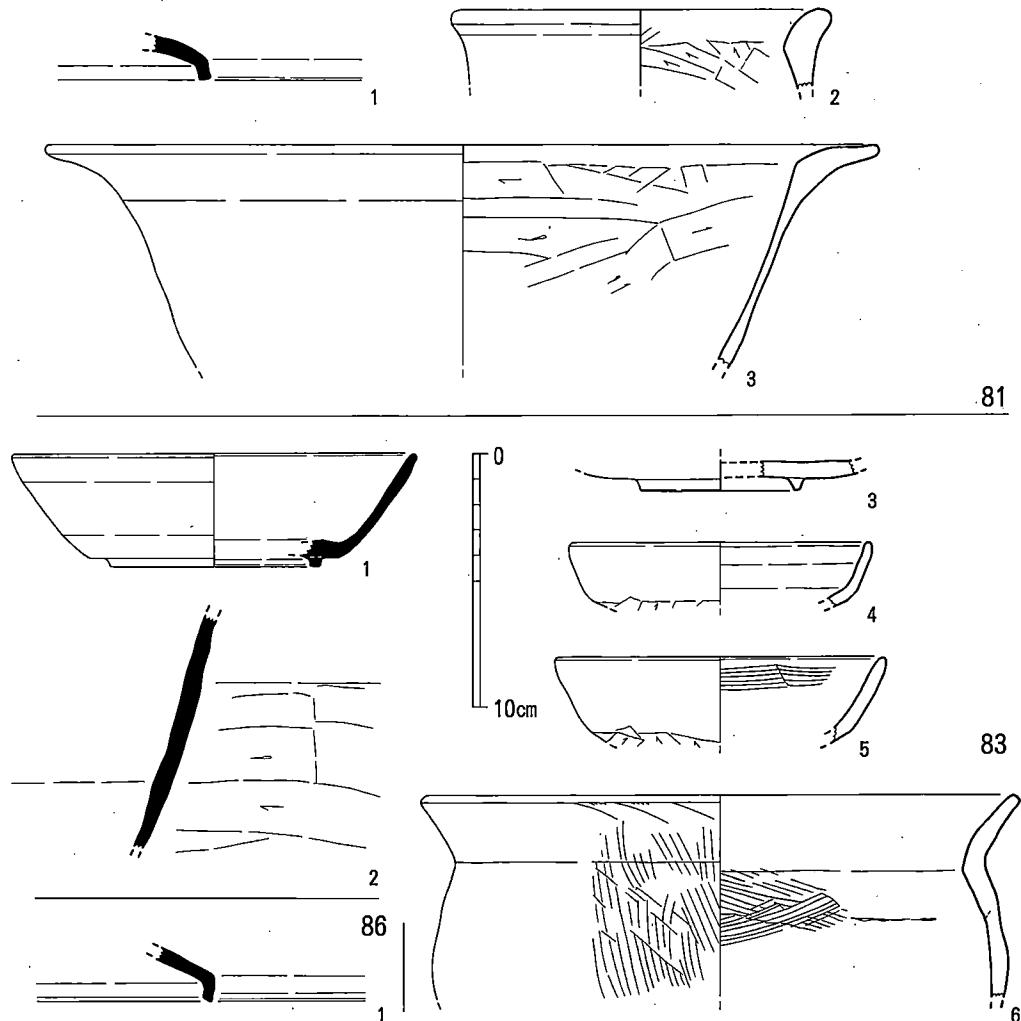


第 145 図 83号竪穴住居実測図 (1/60)

柱間はP1-2間2.25m、P1-4間1.92mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。当初、カマドは東壁側にあるものとして掘り進めたが存在せず、北壁か西壁の何れかに付設されていたものであろう。

#### 出土遺物（図版91-2・92-3、第146・176図）

**土 器** (1~6) 1・2は須恵器、3~6は土師器。1は有高台の壊身で、復原口径16.0cm。口縁部は斜め上方に立ち上がる。2は鉢の胴部破片で、外面は横方向の範ヶズリによる。3は有高台の壊身で、高台はやや細身。4・5は壊の口縁部破片で、5は肉厚。復原口径は4が11.8cm、5は12.8cm。底部は手持ち範ヶズリによる。6は甕の口縁～肩部破片で、復原口径は23.2cm。口縁部は肥厚することなく開く。内外面ともハケ目調整による。3が床面、他は埋土中の出土。

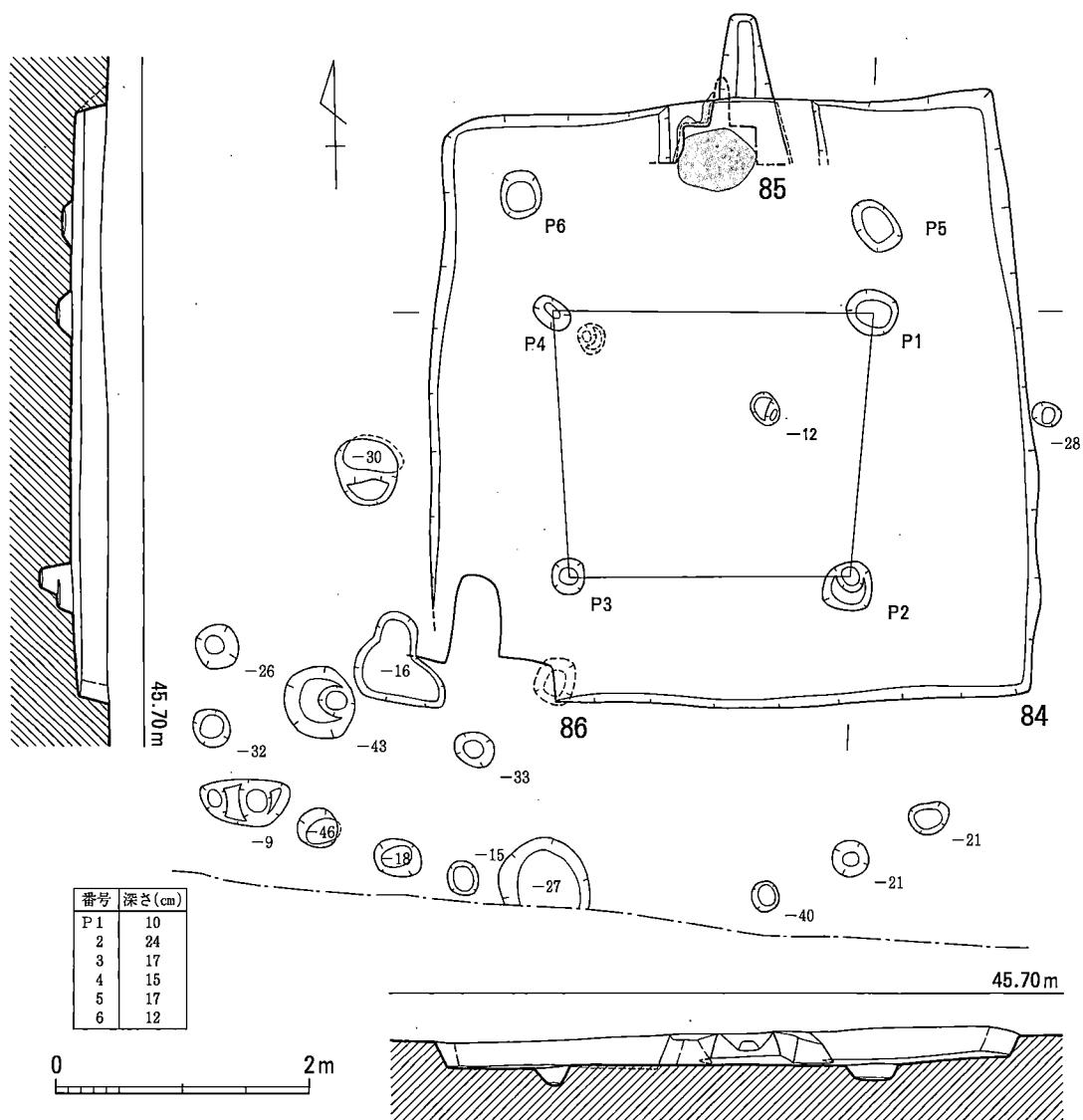


第 146 図 81・83・86号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

**鉄 器 (1)** 1は鎌で、頭部と鎌身以下部分を欠失する。残存長4.0cm、先端側での幅2.9cm・厚さ0.2cm、基部側での幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。床面の出土。

**土製品 (12)** 12は断面蒲鉾形の製品で、先端部に目と思われる二つの穴と口を表現しており、扁平であることから魚を模したものか。残存長3.3cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。

#### 84号堅穴住居 (図版72-1、第147図)



第 147 図 84～86号堅穴住居実測図 (1/60)

調査区中央でA群に属し、当住居跡埋没後に85号竪穴住居が重複して構築される。また、83号竪穴住居とは住居壁を接する。調査した住居の中では比較的遺存状況の良好な住居である。平面形は縦長の長方形を呈し、東壁長4.76m、北壁長4.30mで、壁高は北壁側で0.25mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径30~40cm、深さ10~25cm前後を測る。柱間はP1~2間2.10m、P1~4間2.54mで、柱穴を結ぶ線は方形を呈する。なお、床面から鉄釘が出土しているが、整理段階で紛失してしまった。

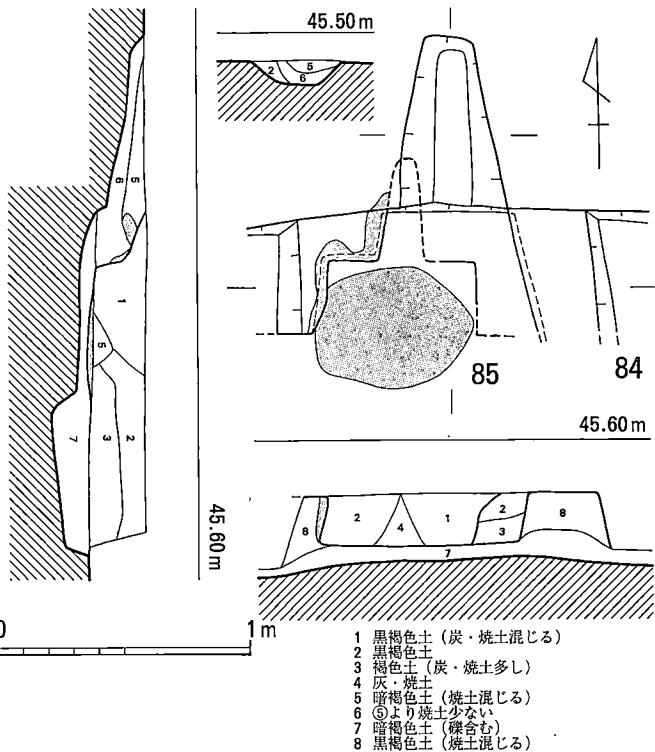
#### カマド（図版72-2、第148図）

作り型のカマドで、北壁中央に付設される。遺存状況は比較的良好で、煙道部を留める。調査当初は、右袖の長さを1.2mほどと考えていたが、85号住居カマドに切られるため残存長は50cmほどであろう。基部幅は右袖が34cm、残高22cmで、左袖は42cm、残高27cm。煙道は長さ66cm、基部幅47cmを測る。支脚については不明。

#### 85号竪穴住居

##### （図版73-1、第147図）

調査区中央でA群に属する。当住居跡は、84号住居のカマ



第148図 84・85号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

ド左袖を断ち割った際、袖部中に別のカマドが存在するのを確認し、住居が重複していたことに気付いた次第である。ために、住居壁はとばしてしまい、規模・柱穴など詳細は判らない。柱穴が確認できていないのは恐らく、柱穴が浅かったためとばしている可能性が考えられる。

#### カマド（図版73-2、第148図）

突出型であり、北壁に付設される。84号竪穴住居の左袖中でその存在を確認した程度で、規模など詳細は不明。しかし、掘形が右袖には及んでいないことから壁体は84号住居のカマド内で収まり、土層縦断面で奥壁の立ち上がりを、横断面で幅を確認しており、火床が60cmを測ることから壁体幅もその程度であったものと推測される。煙道・支脚は不明。

### 86号堅穴住居（図版72-1、第147図）

調査区中央でA群に属する。84号住居の南西隅部を切って位置するが、削平によりカマド部分の痕跡を留める程度であり、規模・柱穴は不明。

#### カマド

煙道部分と壁体が痕跡としてみられる程度であるが、形状からして突出型と思われる。壁体・袖部は不明であるが、煙道は長さ35cm、煙道口幅20cm遺存する。煙道はカマド奥壁からそのまま立ち上がっているようである。

#### 出土遺物（第146図）

**土 器** (1) 1は須恵器の口縁部小片で、高坏にしては口縁部の立ち上がりが弱く、細身であることから壺蓋になろう。傾きはもう少し寝るか。

### 89号堅穴住居（第143図）

調査区の中央部で、81号堅穴住居と重複する。北壁長3.9m、東壁は3.5m程の検出。81号堅穴住居の貼床をはずして当住居の主柱穴検出に努めたが、主柱穴は検出できなかった。本来、柱穴の掘り込みが浅かったものか。

#### カマド（第144図）

突出型で、北壁中央に付設される。比較的遺存状況の良好なカマドで、煙道部を留めている。壁体は住居壁を「コ」字形に50cmほど掘り込み、黄色粘土を貼付し袖部を構築する。右袖は81号住居カマドに切られるが、左袖は長さ19cm、基部幅16cm、残高25cm。煙道はカマド床面から高さ10cmの位置に設けられ、長さ33cm、煙道口幅29cmを測る。また、カマド奥壁から10cmの位置には支脚石の抜き取り穴があり、径20cm、深さ4cmを測る。壁体はさほど焼けていなかった。

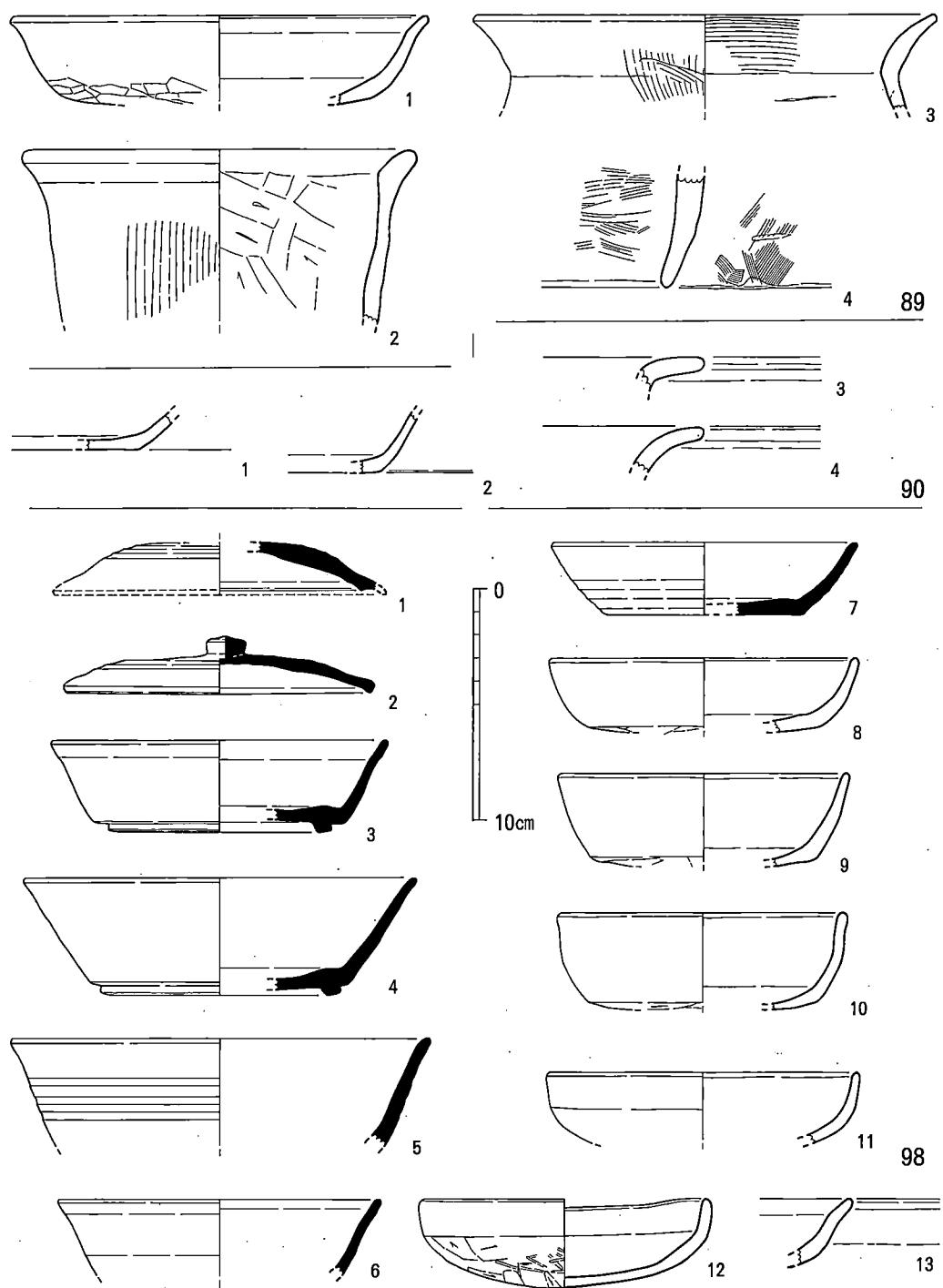
#### 出土遺物（図版91-2、第149・176図）

**土 器** (1~4) 1~4は土師器。1は坏で、口縁部は小さく屈曲する。復原口径17.8cm。外底部は手持ち窓ケズリによる。2は小型甕で、口縁部はやや肥厚する。口径は17.0cmに復原した。3は甕の口縁部破片で、復原口径19.8cm。口縁部は肥厚することなく「く」字形に開く。4は甕の底部小片。何れも埋土中の出土。

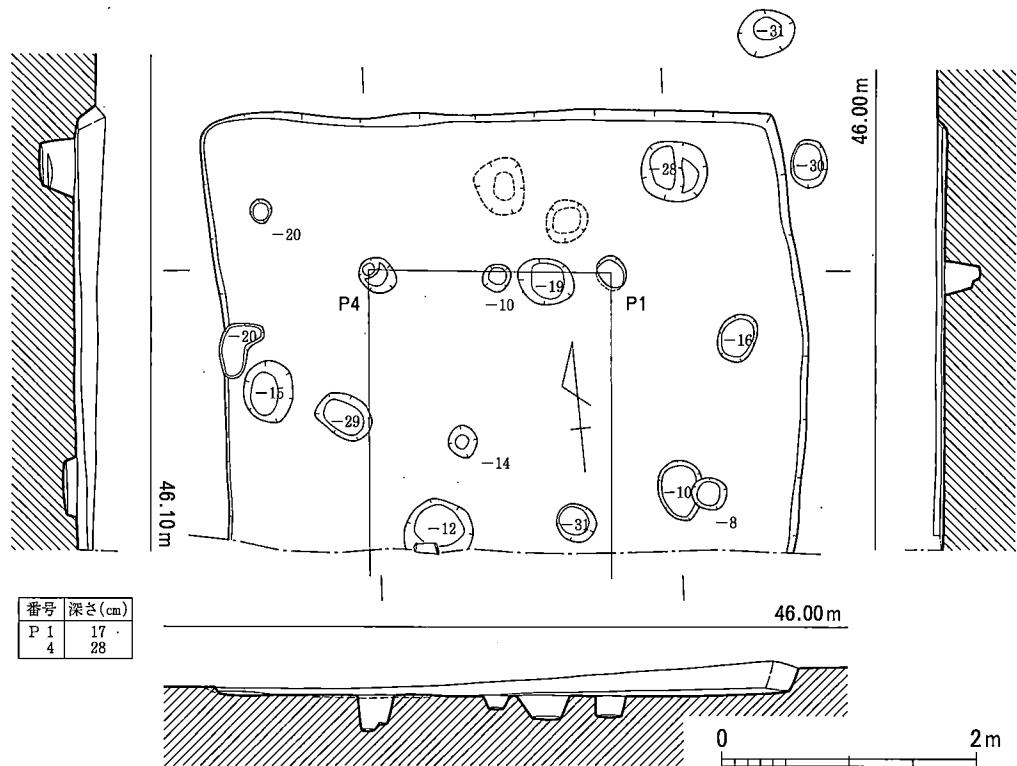
**鉄 器** (6) 6は環状の鉄製品で、上端は欠損し、下端は錆ぶくれ。長径3.1cm、短径2.2cm、厚さ0.5cm。用途不明品で、埋土中の出土。

### 90号堅穴住居（図版74-1、第150図）

調査区の中央部で、A群に属する。84号堅穴住居の1m西側に位置し、南壁部は調査区外にある。北壁長は4.5mで、東壁は3.45m分の検出。壁高は東壁側で、18cmの遺存状況である。主柱穴は4本と思われるが、P2・3の2本は調査区外に位置するのであろう。掘形径20~30cm、



第 149 図 89・90・98号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)



第 150 図 90号堅穴住居実測図 (1/60)

深さ15~30cmを測る。柱間はP1~4間1.82mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈しよう。当初、カマドは北壁側に付設されているものとして調査を進めたが、北壁には付設されておらず、壁高が削平されて浅くなっている西壁側に付設されていたか。

#### 出土遺物（図版92-3、第149・176図）

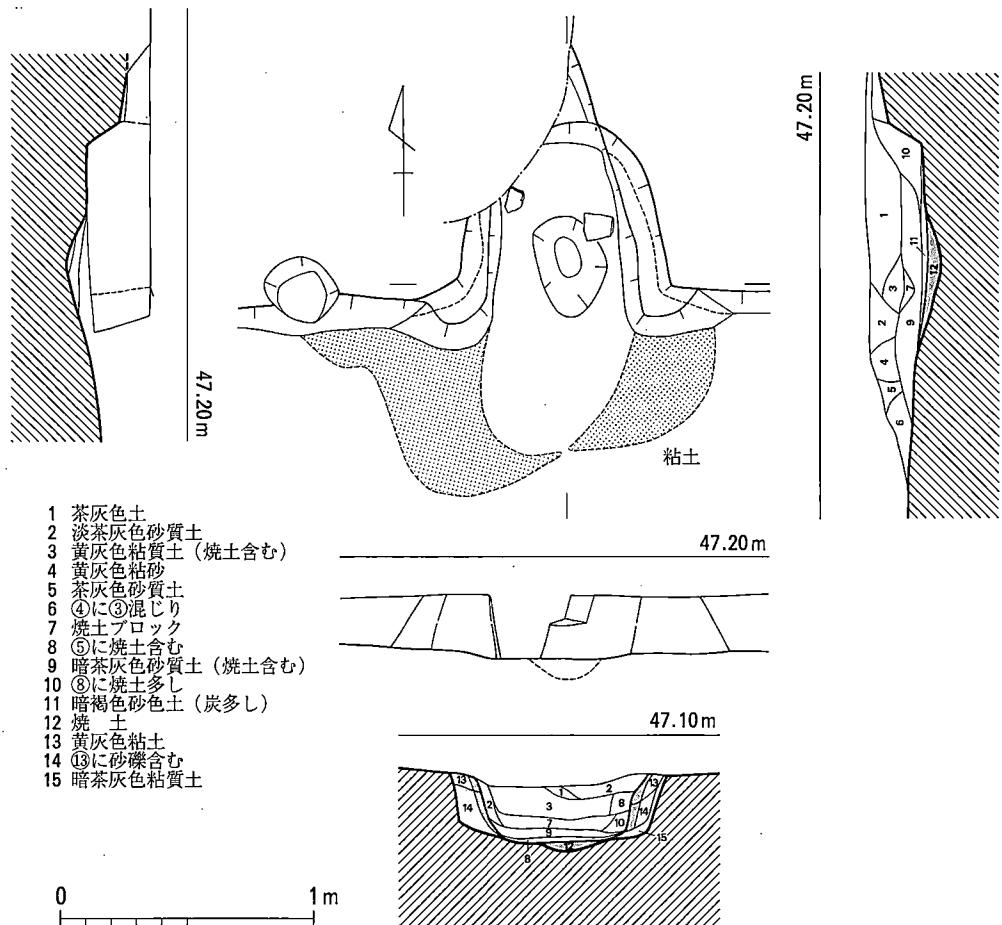
**土 器** (1~4) 1~4は土師器。1・2は壺の底部小片で、1の底部切り離しは笠切りによる。

3・4は甕の口縁部小片で、端部は丸く收める。何れも埋土中の出土。

**土製品** (8) 8は管状土錘で、両端部を欠損する。残存長3.4cm、径1.15cm、重さ4.1g。

#### 98号堅穴住居（図版74-2、第151図）

調査区東寄りのB群に位置し、99A・B号住居を切っている。平面形は方形を呈し、東壁長3.42m、北壁長3.38mで、壁高は西壁側で0.24mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、P1・3・4は2段に掘り込まれる。掘形下段が柱痕で、上段径30~40cm、下段径15cm前後で、深さは20~25cmを測る。柱間はP1~2間1.65m、P1~4間1.82mで、柱間を結ぶ線は方形を呈する。他の堅穴住居に比して割合多くの土器が出土した。また、転用硯・製塩土器が出土している。



第152図 98号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

### カマド (図版75-1、第152図)

突出型で、西壁中央に付設される。壁体は住居壁を「U」字形に66cm掘り込み、掘形に黄灰色粘土を貼付して構築する。右袖は長さ18cm、基部幅43cm、残高25cmで、左袖は長さ18cm、基部幅32cm、残高22cmで、焚口幅は52cmを測る。壁体は良く焼けていたが、火床はさほど焼けていなかった。カマド奥壁から27cmの位置に支脚石抜き取りの穴がある。煙道は中世のピットに切られるため30cmの遺存状況であった。また、袖部の前面には黄灰色粘砂が広がっており、壁体を壊した時のものであろう。

### 出土遺物 (図版90-1・92-1・3、第149・176・189図)

**土器 (1~13)** 1~7は須恵器、8~13は土師器。1・2は壺蓋で、1はかえりを有する蓋であるが、かえりは形骸化している。2は口縁端部が小さく立つ蓋で、口径13.0cm。天井部は低めで、鉗状のつまみを付す。内面には墨痕がみられ、転用碗として使用している。3~6は壺身

で、3・6の口縁部は小さく屈曲する。3・4の高台は低く、体部の外寄りに貼付している。5は口縁部破片で、大型の壊身になろう。外面に範描沈線を3条巡らせてある。復原口径は3が14.4cm、4は16.8cm、5は18.0cm。7は壊の破片で、器高3.1cm、口径13.0cm。8~13は壊で、8・9・11は口縁部が内湾気味のもの。10は若干屈曲するもので、13は復原口縁部が屈曲する。12の口縁部は直立気味に立つ。12は器高3.8cm、復原口径12.4cm。4・9・10はカマド内の出土で、他は埋土中の出土。

**製塩土器** (10・13) 10は口縁部破片で、IV類。13は底部の破片で、厚さ1.6cm。長胴のII類になろう。ともに、胎土に砂粒を多く含みザラつく感じである。13はカマド西側の出土。

**土製品** (9・10) 9・10は土師器片利用の土版で、9は長径3.1cm、短径2.8cm、厚さ0.8cm、重さ5.7g。外縁は打欠後、摺っている。10は半欠品で、径4cmほど。外縁は打欠きのまま。

#### 99号A堅穴住居（第151図）

調査区東寄りのB群に位置し、98号堅穴住居に切られ、100号堅穴住居を切っている。当住居跡は2軒重複しており、新しい方を99A号、古い方を99B号とした。東壁長は3.70mであるが、重複に気付かず掘り下げたため西壁を喪失した。南壁長は3.4mほどになろう。壁高は北壁側で0.24mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径25~30cmで、深さは10~20cmを測る。柱間はP1~2間1.32m、P1~4間1.62mで、柱間を結ぶ線は不整方形を呈する。

#### カマド（図版75-2、第153図）

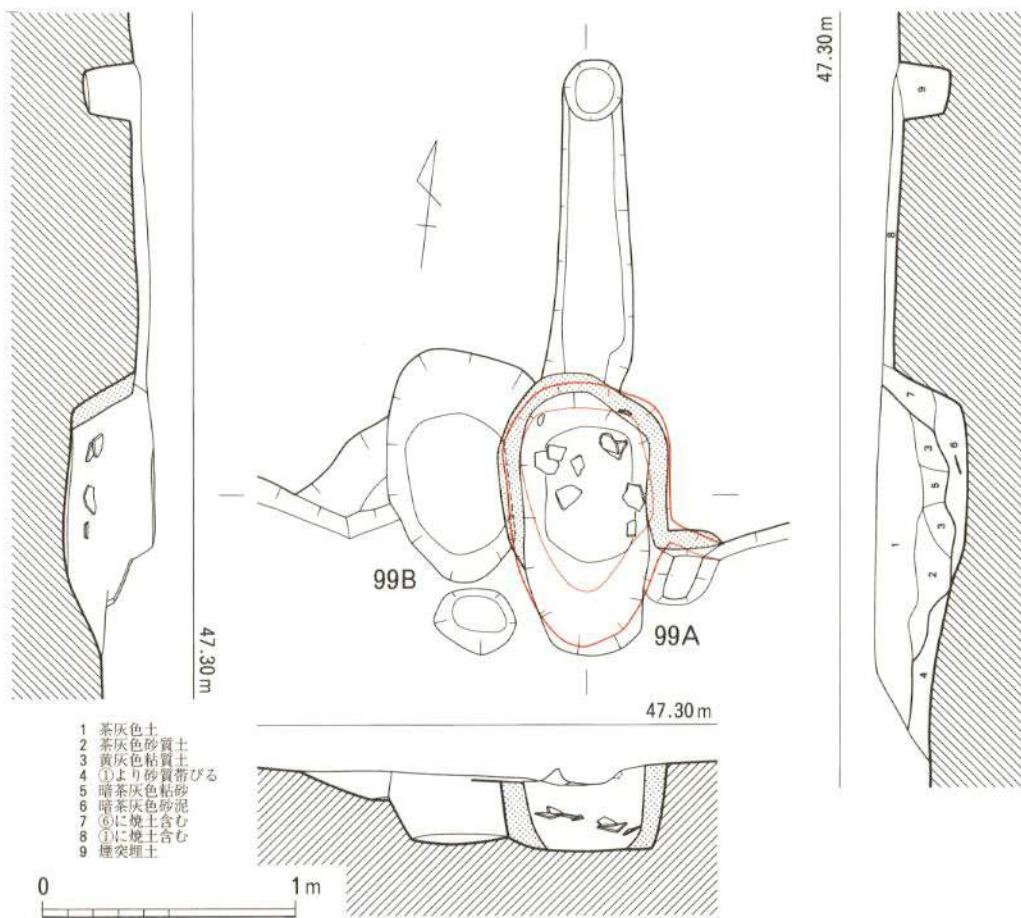
突出型で、北壁中央に付設される。遺存状況は割と良好で、煙道を留める。壁体は住居壁を「U」字形に70cm掘り込み、掘形に黄灰色粘質土を貼付して構築する。右袖は長さ18cm、基部幅28cm、残高10cmであるが、左袖は遺存しない。当カマドは焚口を掘り込むタイプで、焚口幅は45cmを測る。壁体は良く焼けていたが、火床はさほど焼けていなかった。煙道は長さ123cm、煙道口幅32cmで、先端に径22cmの煙突穴を有する。また、煙道は煙出し穴側に下がっている。

#### 出土遺物（第154図）

**土 器** (1~4) 1~4は土師器。1・2は壊で、1の口縁部は直立気味に立ち上がる。2の口縁部は屈曲し、外面には黒色物を塗布している。3は小型の甕で、口縁部はやや肥厚する。復原口径は13.6cm。内外面には煤が遺存している。4は口縁部小片であるが、傾きからして鍋になろう。1~3はカマド内の出土で、4は埋土中の出土。

#### 99号B堅穴住居（第151図）

調査区東寄りのB群に位置し、98・99A号堅穴住居に切られ、100号堅穴住居を切っている。南壁長3.86m、北壁長3.8mで、平面形は方形になる。壁高は南西壁隅部で0.21mを測る。主柱穴はP5~8の4本で、掘形径25cm前後、深さは10~15cmを測る。柱間はP5~6間1.96m、P5~



第 153 図 99A・B 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

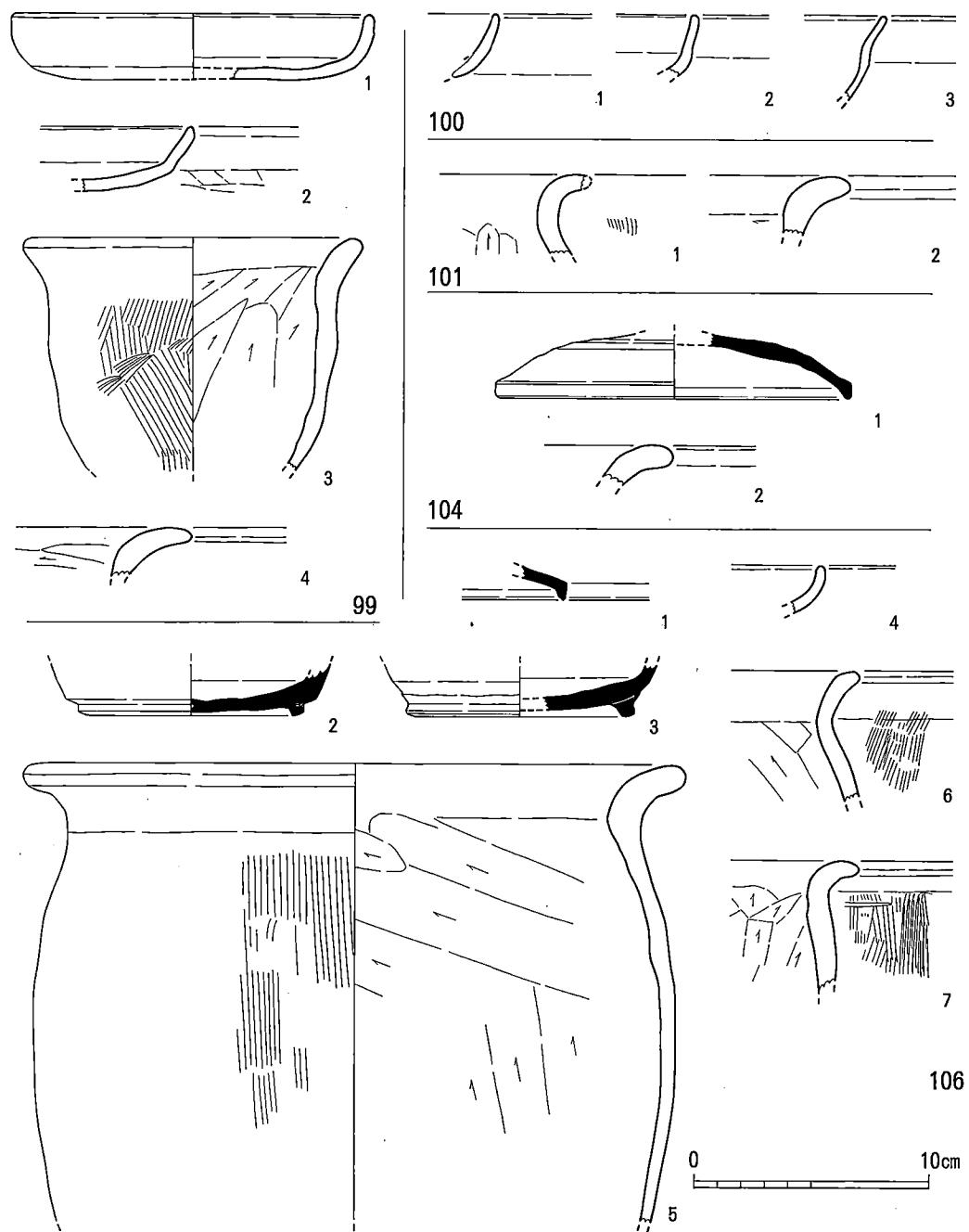
8間1.90mで、柱間を結ぶ線は不整方形を呈する。

#### カマド（図版75-2、第153図）

突出型で、北壁の東寄りに付設される。99A号カマドに切られ、遺存状況は悪い。壁体は住居壁を「U」字形に60cmほど掘り込んでおり、左袖側には地山掘り残しの段があり、この部位から袖を貼り付けたものと思われる。焚口を掘り窪めるタイプで、焚口幅50cmを測る。煙道は遺存しておらず、支脚も不明。

#### 100号竪穴住居（第151図）

調査区東寄りのB群に属し、99A・B号竪穴住居に切られる。東壁長2.80m、南壁長3.38mで、平面形は横長長方形になる。壁高は北壁側で0.16mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘



第 154 図 99・100・101・104・106号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

形径30cm前後、深さは20~24cmを測る。柱間はP1~2間1.46m、P1~4間1.68mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。カマドは北壁若しくは西壁に付設していたものと思われる。南壁中央の貼床下部には30×60cmの方形の穴がある。住居埋土中から製塩土器が出土している。

#### 出土遺物（図版92-1、第154・189図）

**土 器** (1~3) 1~3は土師器坏の口縁部小片、2・3の口縁部は屈曲している。

**製塩土器** (6) 6は口縁~体部下半にかけての破片で、外面には指頭痕がみられる。砂粒を多く含みザラつく感じ。IV a類。

#### 101号竪穴住居（図版75-3、第155図）

調査区東寄りのB群に属し、100号竪穴住居の2m東側に位置し、102・103号竪穴住居を切っている。平面形は横長長方形を呈し、北壁長2.93m、東壁長3.27mで、壁高は東壁側で10cmと遺存状況は悪い。主柱穴はP1~4の4本であるが、P5~8も方形に並んでおり、建て替えられた可能性がある。掘形径は20cm前後で、深さは5~22cmとばらつきがある。柱間はP1~2間1.70m、P1~4間1.48mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。P5~2間1.30m、P5~8間1.80mで、柱穴を結ぶ線は横長長方形を呈する。また、南壁側に30×40cmの範囲で粘土がみられた。埋土中から鉄器・製塩土器が出土している。

#### カマド（図版76-1）

東壁のやや北寄りに付設される突出型で、遺存状況は悪い。壁体は住居壁を「U」字形に掘り込んでいるが、長さが85cmと通常の二倍あることから別遺構と重複している可能性がある。両袖は遺存しないが、焚口を掘り窪めるタイプで、焚口幅35cmを測る。壁体はさほど焼けていなかった。煙道は遺存しておらず、支脚も不明。

#### 出土遺物（図版92-1、第154・176・189図）

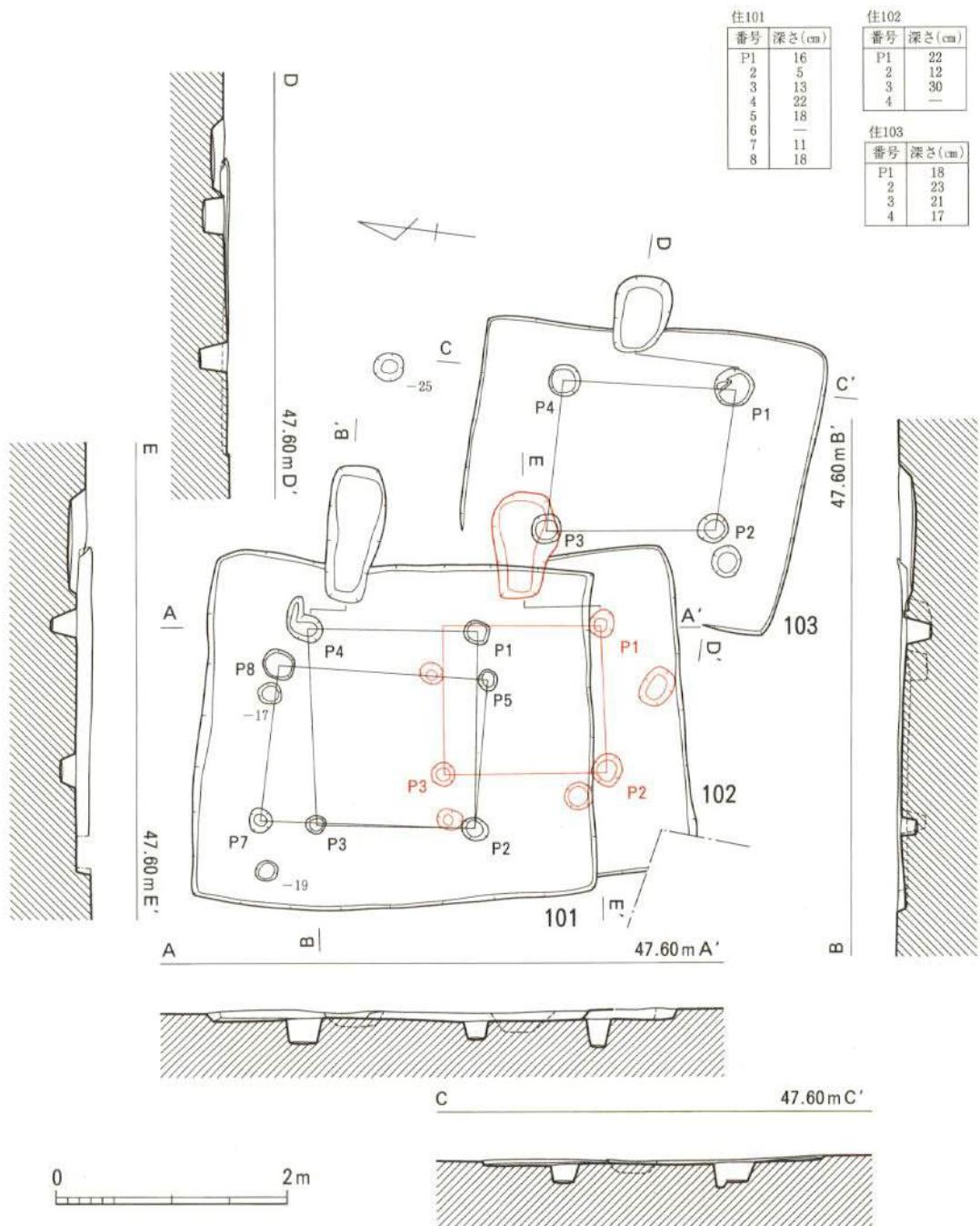
**土 器** (1・2) 1・2は土師器で、1は甕の口縁部小片。口縁部は鉤形に屈曲する。2も口縁部小片であるが、傾きからして鍋になろう。

**鉄 器** (2・3) 2は棒状の製品で、錆化による剥落が著しいが、鏃身であろうか。残長8.8cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。北西隅部の出土。3も棒状製品で、錆化が著しい。断面は方形を呈し、残長2.3cm、厚さ0.5cmを測る。断面方形を呈し、釘になるか。

**製塩土器** (7・8) 7・8とも口縁部破片で、IV a類。7の内面はケズリによる。ともにザラつく感じで、器面の剥落が著しい。また、図示していないが、内面を貝殻腹縁による条痕状のナデを施したものも1点出土している。

#### 102号竪穴住居（図版75-3、第155図）

調査区東寄りのB群に属する。100号竪穴住居の3m東側に位置し、101号竪穴住居に切られ、



第 155 図 101~103号竪穴住居実測図 (1/60)

103号竪穴住居を切っている。南壁部分を残す程度であるが、柱配列からみて方形を呈するものと思われる。南壁長は2.80mで、東壁は1mの検出状況。壁高は南壁側で8cmを測る程度。主

柱穴は4本と思われるが、P4を検出し得ていない。掘形径は20~30cm前後で、深さは12~30cmとばらつきがある。柱間はP1~2間1.37m、P2~3間1.40mで、柱穴を結ぶ線は方形を呈する。

#### カマド（図版76-2）

突出型で、東壁の中央に付設される。遺存状況は悪く、袖部・煙道を留めない。壁体は住居壁を「U」字形に62cm掘り込む。両袖は遺存しないが、焚口を掘り窪めるタイプで、幅40cmを測る。壁体はさほど焼けていない。支脚も遺存しておらず、詳細不明。

#### 103号竪穴住居（図版75-3、第155図）

調査区東寄りのB群に属する。100号竪穴住居の5m東側に位置し、西壁を102号竪穴住居に切られる。平面形は横長の長方形を呈し、南壁長は2.52m、東壁長は2.90mで、壁高は東壁側で5cmと削平が著しい。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径30cm前後、深さは20cmを測る。柱間はP1~2間1.23m、P1~4間1.50mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。

#### カマド（図版76-2）

突出型で、東壁のやや北寄りに付設される。当カマドも遺存状況は悪く、袖部・煙道を留めない。壁体は住居壁を「U」字形に48cm掘り込む。両袖は遺存しないが、焚口を掘り窪めるタイプで、幅43cmを測る。支脚は遺存していない。

#### 104号竪穴住居（図版77-1、第156図）

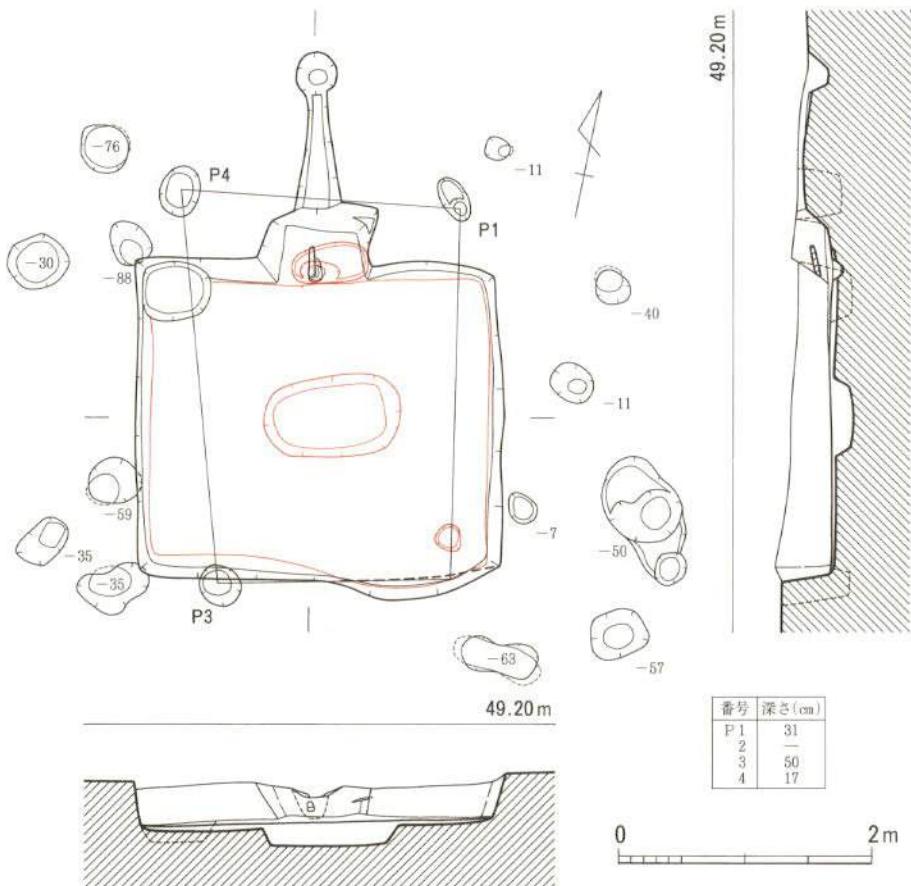
調査区東側のC群に属し、弥生墓地群の13m北西側に位置する。平面形はやや横長の長方形を呈し、東壁長は2.27m、北壁長は2.83mで、壁高は東壁側で0.33mと比較的遺存状況の良好な住居である。竪穴部には柱穴は存在せず、竪穴外のP1~4を当住居の柱穴とみなした。掘形径30cm前後、深さは17~50cmとばらつきがある。柱間はP1~4間2.21m、P3~4間3.09mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。また、貼床下部中央には56×108cmの楕円形の土坑が掘り込まれていた。

#### カマド（図版77-2、第157図）

北壁の中央に付設される突出型のカマドで、袖部は喪失するが、煙道は留めている。壁体は住居壁を「コ」字形に幅91cm、奥行48cm掘り込んでいる。カマド奥壁から24cmの位置に支脚穴があるが、支脚の石は浮いている状況であった。壁体・床面はさほど焼けていなかった。煙道は長さ123cm、煙道口幅38cmで、先端には径32cm、深さ13cmの煙突穴を有し、煙道は煙突穴側に傾斜している。

#### 出土遺物（第154図）

**土 器（1・2）** 1は須恵器壺蓋で、口縁端部は爪先立つ。復原口径14.8cm。2は口縁部小片で、甕になるか。ともに埋土中の出土。



第 156 図 104号竪穴住居実測図 (1/60)

### 105号竪穴住居 (図版78-1、第158図)

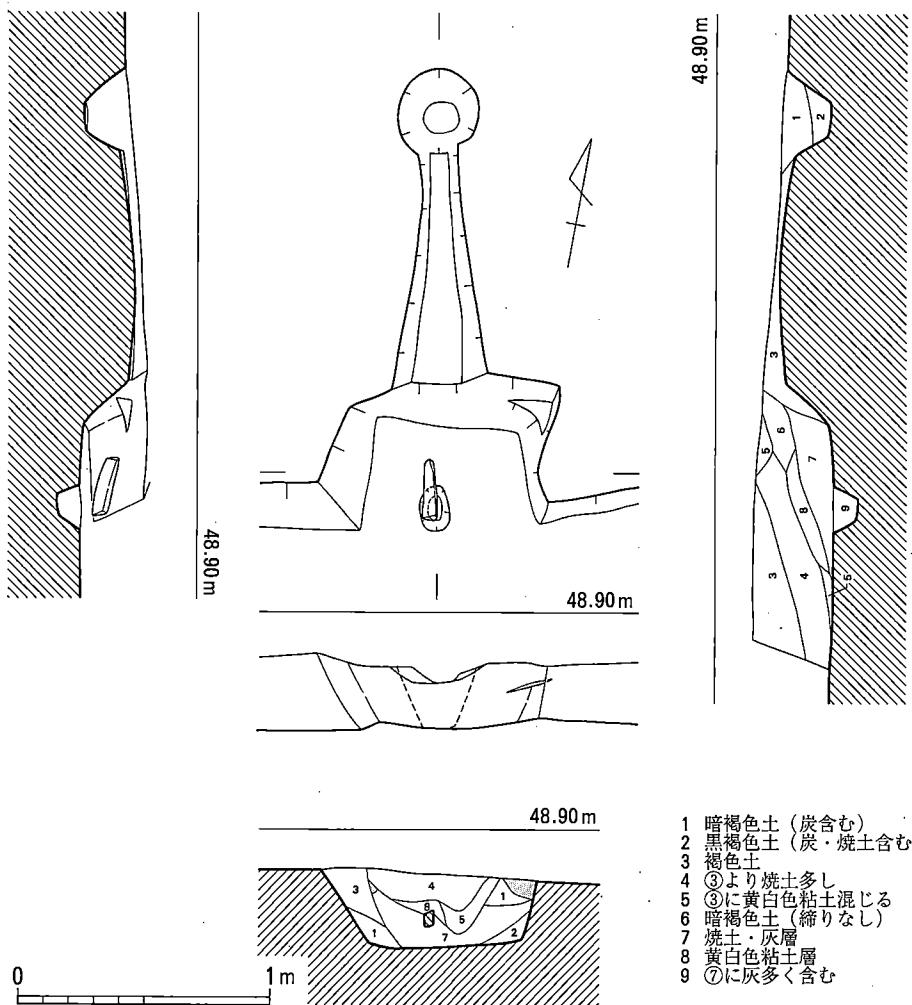
調査区東側のC群に属し、19号掘立柱建物に切られる。平面形は横長の長方形を呈し、西壁長1.70m、北壁長は2.40mで、壁高は東壁側で16cmと遺存状況は悪い。当住居は竪穴部に主柱穴が存在しない小型無柱穴住居である。埋土中から製塩土器が1点出土している。

#### カマド

突出型で、北壁の中央付設される。遺存状況は悪く、袖部・煙道を留めない。壁体は住居壁を「U」字形に幅68cm、奥行52cm掘り込んでいる。支脚は遺存しておらず、不詳。

#### 出土遺物 (図版91-3、第189図)

**製塩土器 (1)** 1は復原口径14.2cmを測り、内面はナデにより、外面には指頭痕を留める。また、口縁部内面には貝殻条痕がみられる。IV a類。器面の剥落が著しい。



第 157 図 104号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

#### 106号竪穴住居 (図版79-1、第159図)

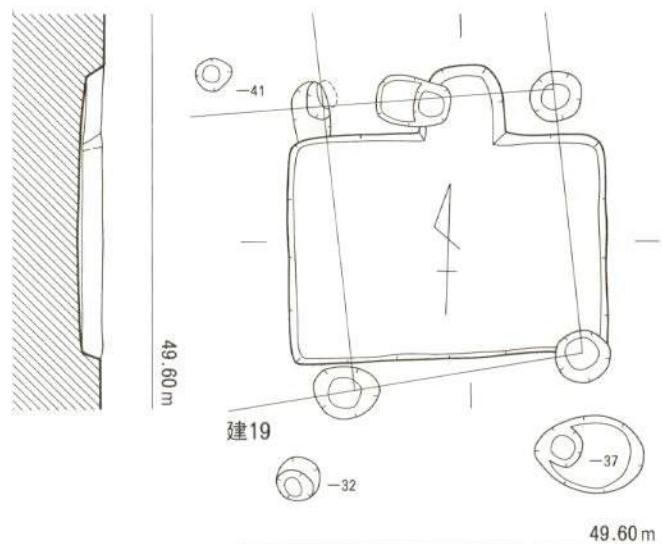
調査区東側のC群に属し、107号竪穴住居を切っている。平面形は横長の長方形を呈し、東壁長2.88m、北壁長3.60mで、壁高は東壁側で0.23mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径20~30cm前後、深さ20~30cmを測る。柱間はP1~2間1.06m、P1~4間1.56mで、柱穴を結ぶ線は不整長方形を呈する。周囲には幅10cmほどの壁小溝が巡っている。また、貼床下部にはピットなどが掘り込まれている。転用硯・製塩土器・フイゴ羽口片などが出土している。

#### カマド (図版79-2、第160図)

突出型で、北壁中央に付設される。遺存状態は割合良好で、両袖・煙道部を留める。壁体は住居壁を「コ」字形に幅83cm、奥行67cm掘り込み、暗褐色土を掘形に貼付して袖部を構築する。

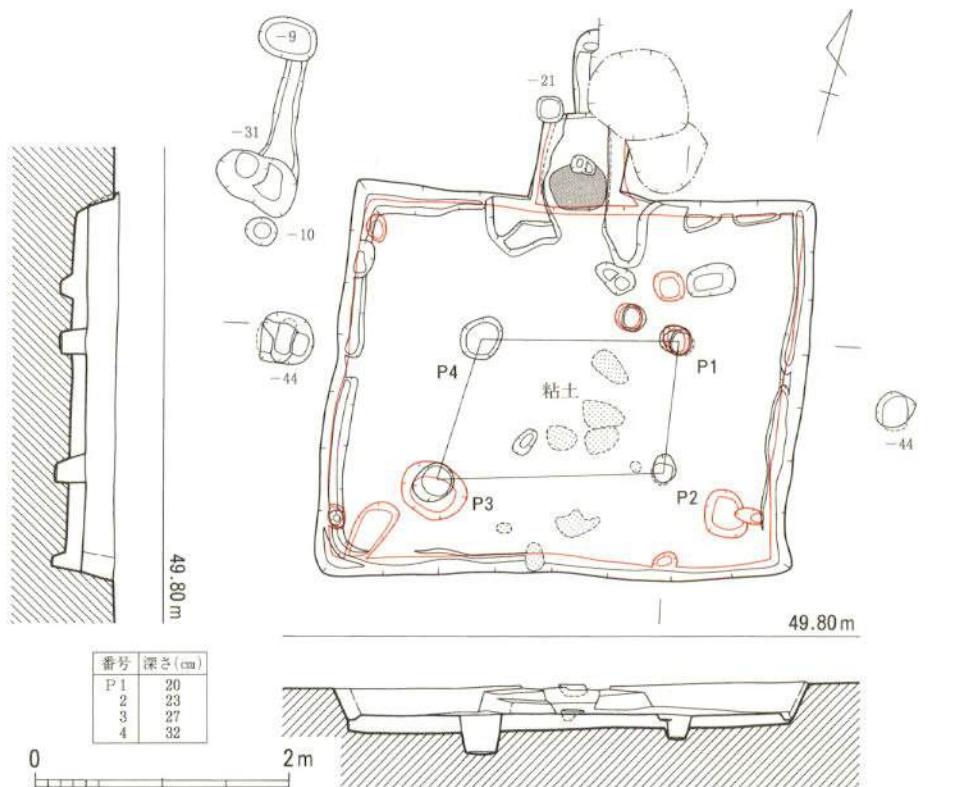
右袖は長さ58cm、基部幅46cm、残高13cmで、左袖は長さ47cm、煙道口幅46cm、残高23cmで、焚口幅は32cmを測る。

カマド奥壁から29cmの位置に支脚穴があり、火床は35×35cmの範囲で良く焼けていた。煙道は攪乱穴に切られるが、長さ65cmで、幅は25cmほどになるか。先端には煙突穴があり、径18cm、深さ4cmで、煙道は煙突穴側に傾斜していた。

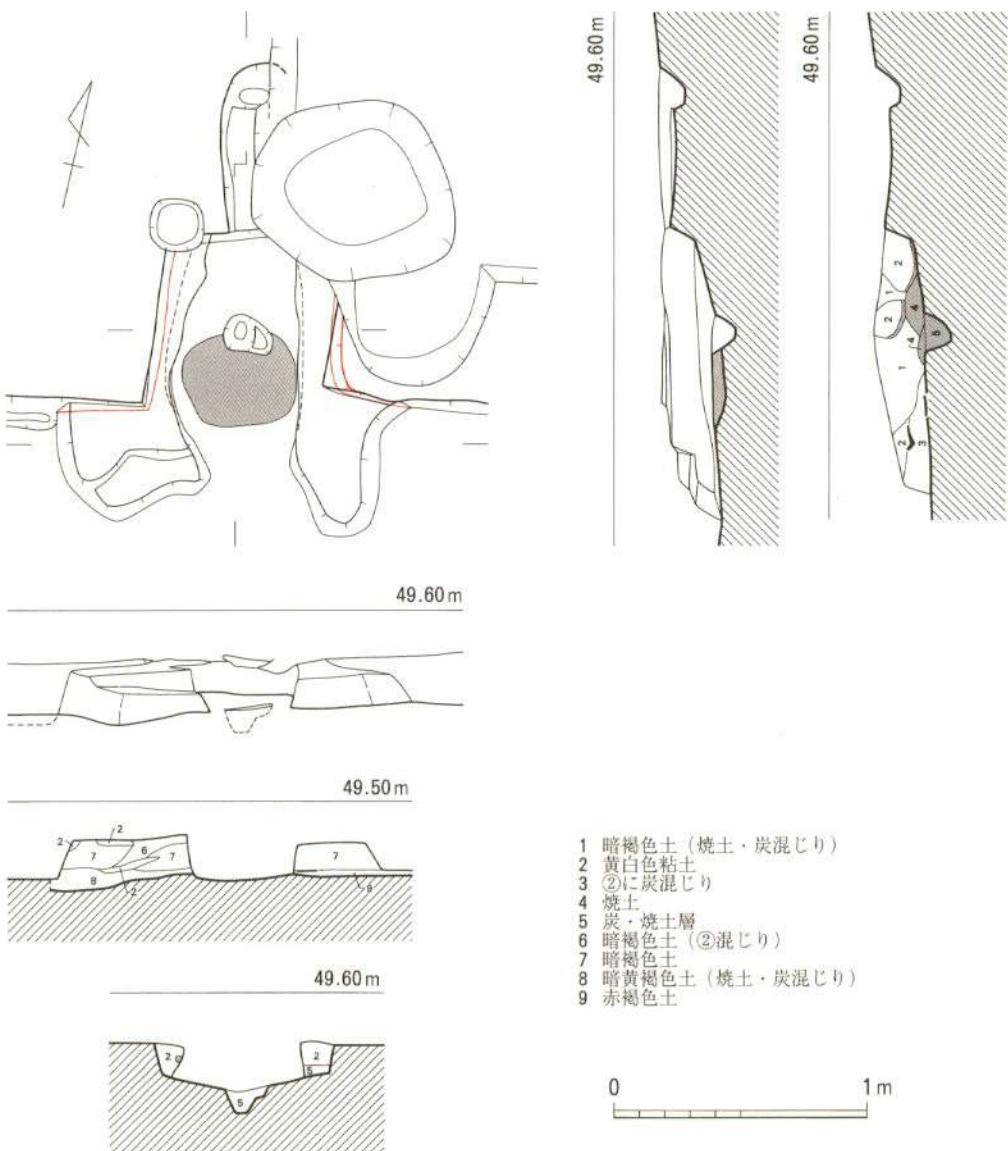


第158図 105号竪穴住居実測図  
(1/60)

0 1m



第159図 106号竪穴住居実測図 (1/60)



第 160 図 106号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

**出土遺物** (図版92-1、第154・176・189図)

**土 器** (1~7) 1~3は須恵器、4~7は土師器。1は壺蓋の口縁部小片で、口縁端部は爪先立つ。2・3は有高台の壺身底部破片で、低めの高台を外寄りに貼付する。2の外底部は良く摺れており、墨痕は不明瞭であるが転用硯として使用したものか。4は壺の口縁部小片で、口縁部は内湾する。5~7は甕で、5の口縁部はやや肥厚する。口径は28.2cmに復原した。5はカマド

内の出土で、1・4・6は埋土中、2・3・7は遺構検出時の出土。

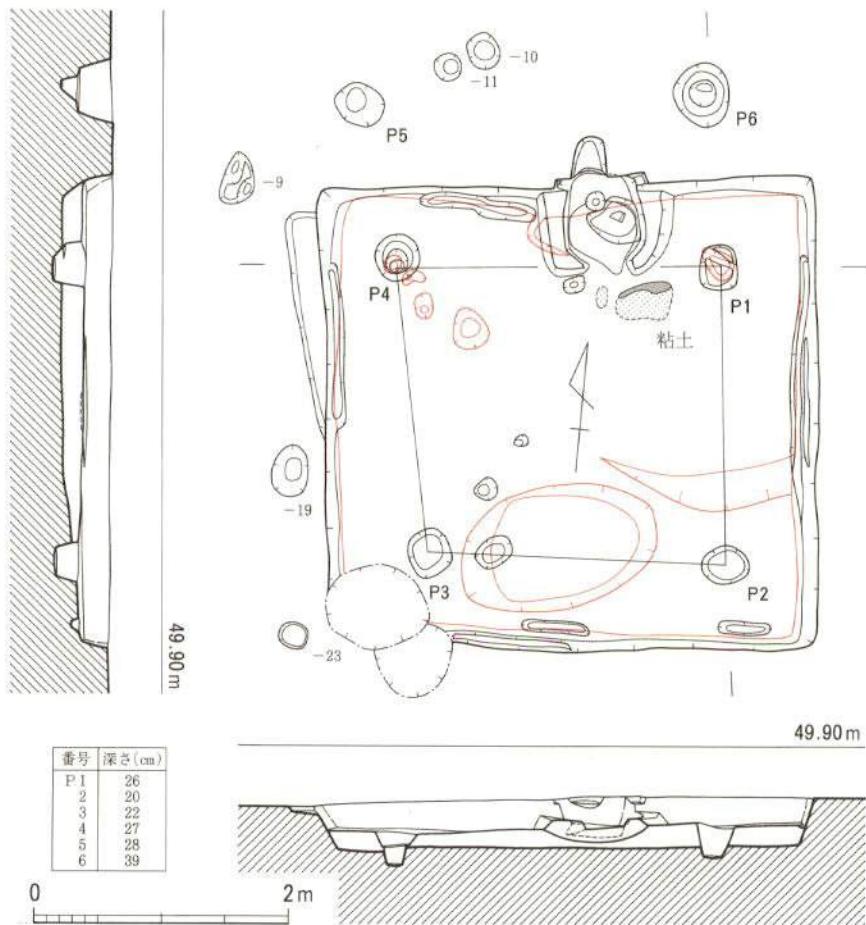
**鉄 器** (4) 4は棒状の製品で、下端を欠く。断面形は丸みを帯び、釘であろうか。残存長3.6cm、頭部幅0.7cm、厚さ0.45cmを測る。埋土中の出土。

**製塩土器** (4) 4は口縁部付近の破片。内面は籠ケズリにより、外面には指頭痕を留める。胎土に白色砂粒・赤褐色粒を多く含む。IV b 類。

**土製品** (14) 14はフイゴ羽口の小破片。外面は高熱により青黒く変色している。径7.0cm。

#### 107号竪穴住居（図版80-1、第161図）

調査区東側のC群に属する。106号竪穴住居の直ぐ北側に位置し、同住居に切られている。平面形は方形を呈し、東壁長3.66m、北壁長3.85mで、壁高は東壁側で0.23mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、住居壁寄りに位置する。掘形径30~40cm前後で、深さ20~27cmを測る。柱



第 161 図 107号竪穴住居実測図 (1/60)

間はP1-2間2.35m、P1-4間2.54mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。周囲には連続しないが幅10cmほどの壁小溝がある。また、南壁側の貼床下部には98×162cmの楕円形の土坑が掘り込まれている。住居埋土中からは製塩土器が出土している。

#### カマド（図版80-2、第162図）

突出型のカマドで、北壁中央に付設される。遺存状態は割合良好で、両袖・煙道部を留める。壁体は住居壁を幅64cm、奥行8cm掘り込んでいるが、突出度は弱い。また、掘形の両脇には小さな段があり、本来この部分から袖部を貼付していたものと思われる。

右袖は長さ68cm、基部幅32cm、残高18cmで、左袖は長さ68cm、基部幅27cm、残高10cmで、先端が内側に屈曲する。焚口幅は29cmを測る。カマド奥壁から17cmの位置に支脚穴があり、火床は50×56cmの範囲で良く焼けていた。煙道は長さ24cm、煙道口幅28cmと小さなものであった。

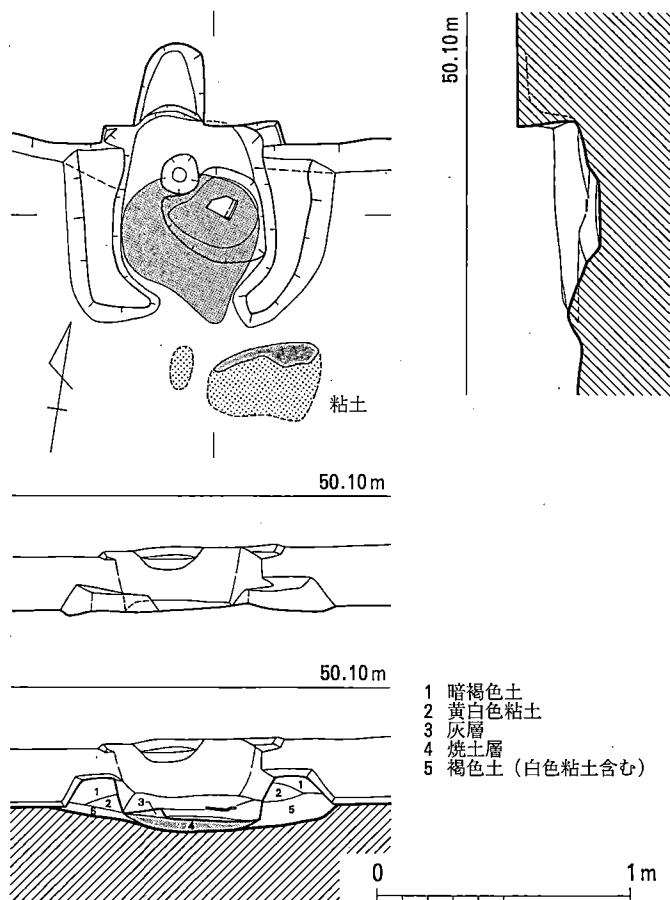
#### 出土遺物（図版90-1・92-1・92-2、第163・176・189図）

##### 土 器（1~7） 1~4は須

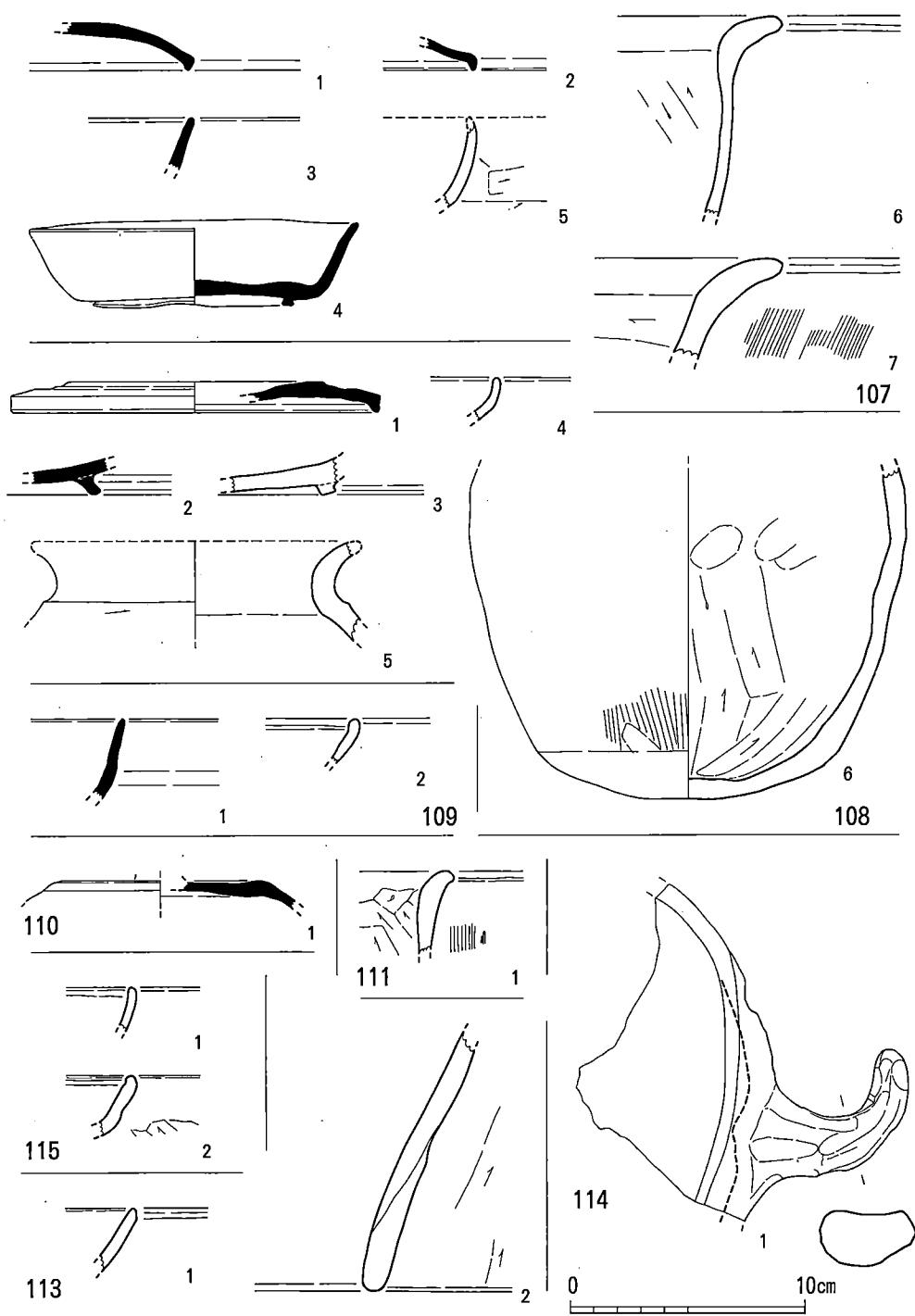
恵器、5~7は土師器。1・2は壺蓋の口縁部小片で、口縁端部は小さく立つ。4は有高台の壺身で、細身の高台を貼付している。器高3.3cm、口径14.0cmで、焼き歪みが著しい。5は深めの器形で、椀になろう。6は甕の口縁部小片。7は鍋の口縁部小片。6はカマド内、3・5はカマド附近、他は埋土中の出土。

**製塩土器（5）** 5は口縁部の破片で、内面には貝殻腹縁による条痕状のナデを施している。口径は12.2cmほどになろう。胎土に白色粒を多く含む。IV a類。

**土製品（11）** 11は土師器利用の土版で、半欠品。外縁は摺っている。



第162図 107号竪穴住居カマド実測図（1/30）



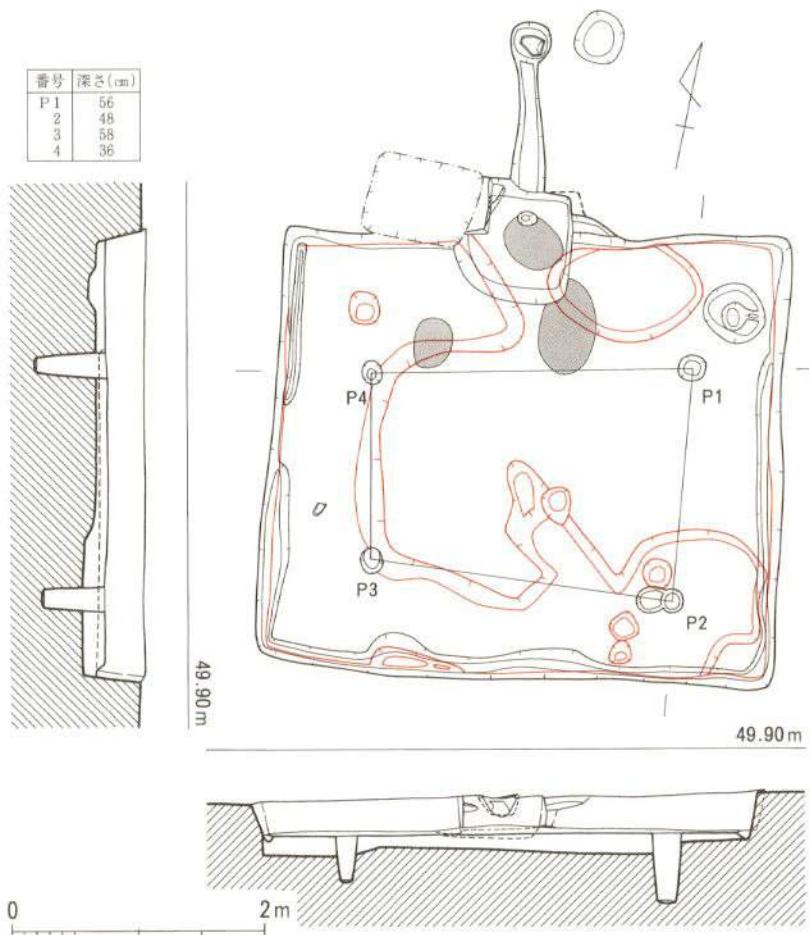
第 163 図 107~111・113~115号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

### 108号竪穴住居（図版81-1、第164図）

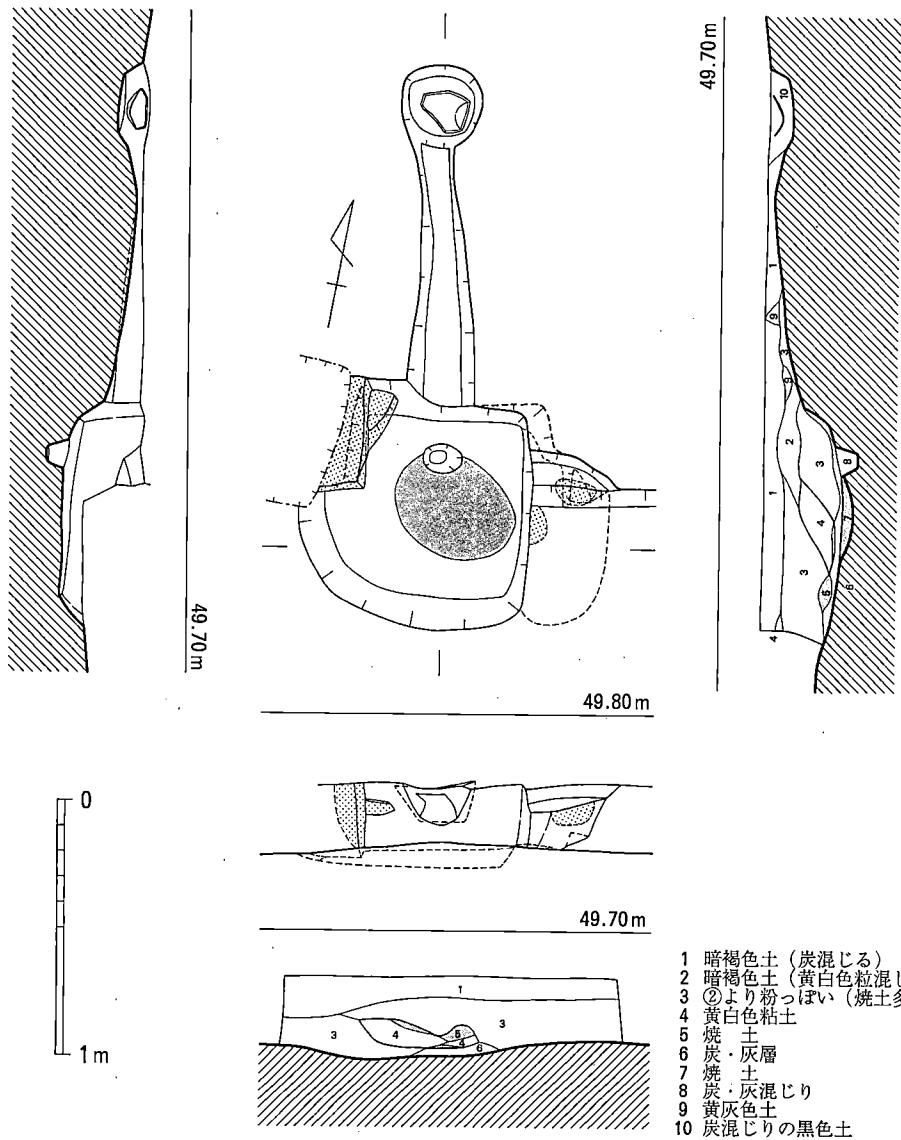
調査区東側のC群に属し、107号竪穴住居の1m東側に位置する。平面形は横長の長方形を呈し、東壁長3.55m、北壁長3.94mで、壁高は東壁側で0.30mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径20cm前後、深さ35~58cmを測る。柱間はP1-2間1.84m、P1-4間2.54mで、柱穴を結ぶ線は不整長方形を呈する。北壁を除く住居壁には連続しないが幅10cmほどの壁小溝がある。また、カマド前面には焼土面が2ヶ所にみられた。貼床下部は西壁から南壁にかけて「L」字形に浅い溝が掘り込まれている。住居埋土中から鉄器が出土している。

### カマド（図版81-2、第165図）

北壁の中央に付設される突出型のカマドで、煙道は留めている。壁体は住居壁を「コ」字形に幅70cm、奥行41cm掘り込む。袖部自体は遺存しないが、袖の粘土を貼り付ける段と粘土の痕



第164図 108号竪穴住居実測図 (1/60)



第 165 図 108号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

跡がみられた。当カマドは焚口を掘り込むタイプで、焚口幅は40cmほどであろうか。カマド奥壁から8cmの位置に支脚穴があり、その前面が火床として40×45cmの範囲で良く焼けていた。また、壁体内壁・煙道口も良く焼けていた。煙道は長さ134cmと非常に長いもので、先端には径32cmで、煙道からの深さ3cmの煙突穴を有し、煙道は焚口・煙突穴両方に傾斜している。また、煙突穴内からは土師器甕の底部が出土している。

### 出土遺物（図版90-1・91-2、第163・176図）

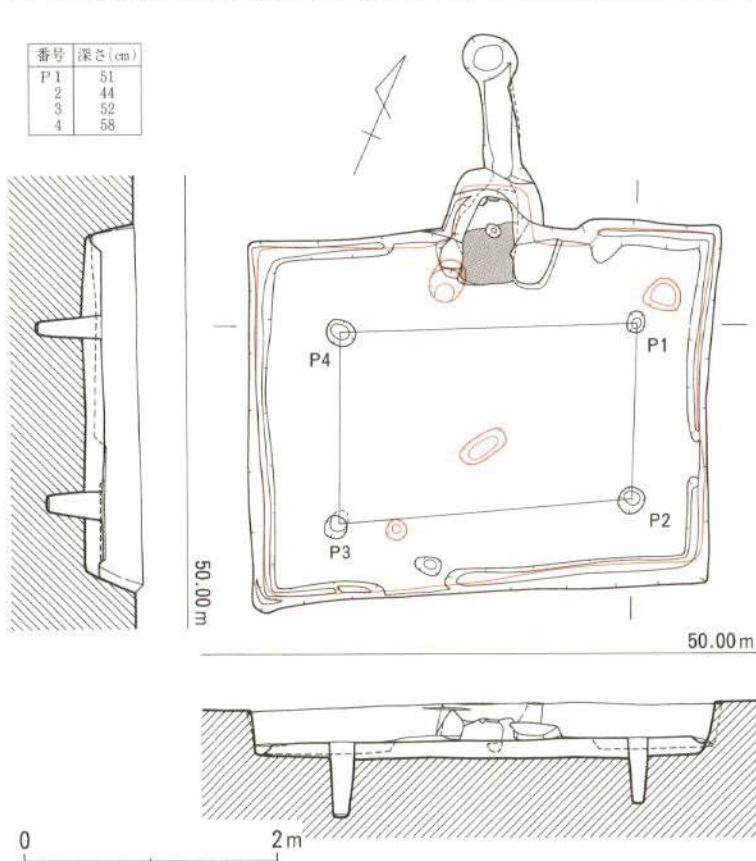
**土 器** (1~6) 1・2は須恵器、3~6は土師器。1は壊蓋で、口縁部は小さく立つ。天井部は低くだれています。内面には墨痕があり、転用硯として使用している。復原口径は15.5cm。2は高台部の小片であるが、高台が高く、混入品であろう。3も高台部の破片。器肉に比して高台は細目である。4は壊の口縁部小片で、口縁部は内湾する。5は甕の口縁部破片。肩部には稜を有し、割と精良な胎土を用いている。6は甕の底部破片で、丸底をなす。外面は二次加熱により器面の剥落が著しい。3はカマド内、6はカマド煙突内の出土。他は埋土中の出土である。

**鉄 器** (7) 7は三角形の製品で、長さ3.6cm、幅3.0cm、厚さ0.7cm、重さ19.9gを測る。鉄素材であろうか。埋土中の出土。

### 109号竪穴住居（図版82-1、第166図）

調査区東側のC群に属し、108号竪穴住居の0.5m東側に位置する。平面形は横長の長方形を呈し、西壁長2.92m、北壁長3.72mで、壁高は東壁側で0.28mを測る。主柱穴はP1~4の4本で、掘形径15~20cm前後で、深さは44~58cmと深めである。柱間はP1~2間1.37m、P1~4間2.35mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。住居壁の四周には連続しないものの幅10cmほどの壁小溝がある。埋土中から鉄器が出土している。

番号	深さ(cm)
P1	51
2	44
3	52
4	58



### カマド（図版82-2、第167図）

突出型のカマドで、北壁中央に付設される。壁体は住居壁を「U」字形に幅80cm、奥行47

第166図 109号竪穴住居実測図 (1/60)

cm掘り込み、掘形に黄白色粘土を貼付し構築する。掛口部は欠落するが、煙道口の天井部分は残っており、カマドの形状・構築方法が判る好例である。

右袖は長さ36cm、基部幅37cm、残高13cmで、左袖は長さ31cm、基部幅22cm、残高21cmを測る。奥壁から27cmの位置に支脚穴があり、その前面が火床として40×45cmの範囲で良く焼けていた。煙道は長さ116cm、煙道口幅12cmで、先端には径42cmで、煙道からの深さ7cmの煙突穴を有し、焚口側に傾斜している。

**出土遺物**（図版91-2、第163・176図）

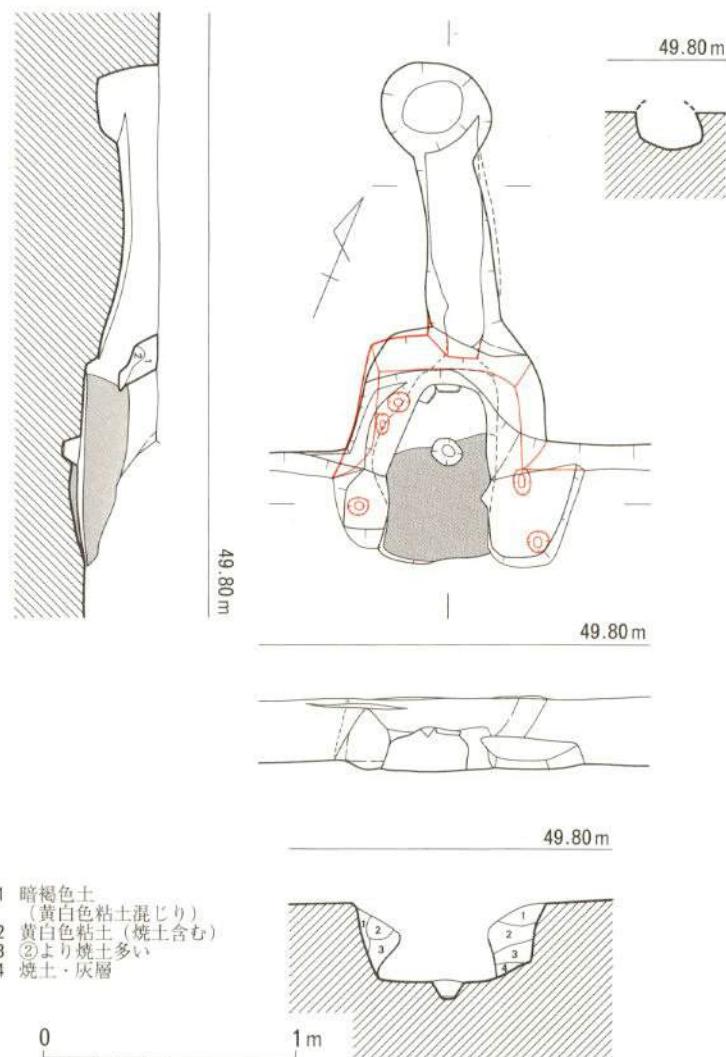
**土 器**（1・2） 1は須恵器坏身の口縁部小片。2は土師器坏の

口縁部小片で、口唇部は丸く收める。ともに埋土中の出土。

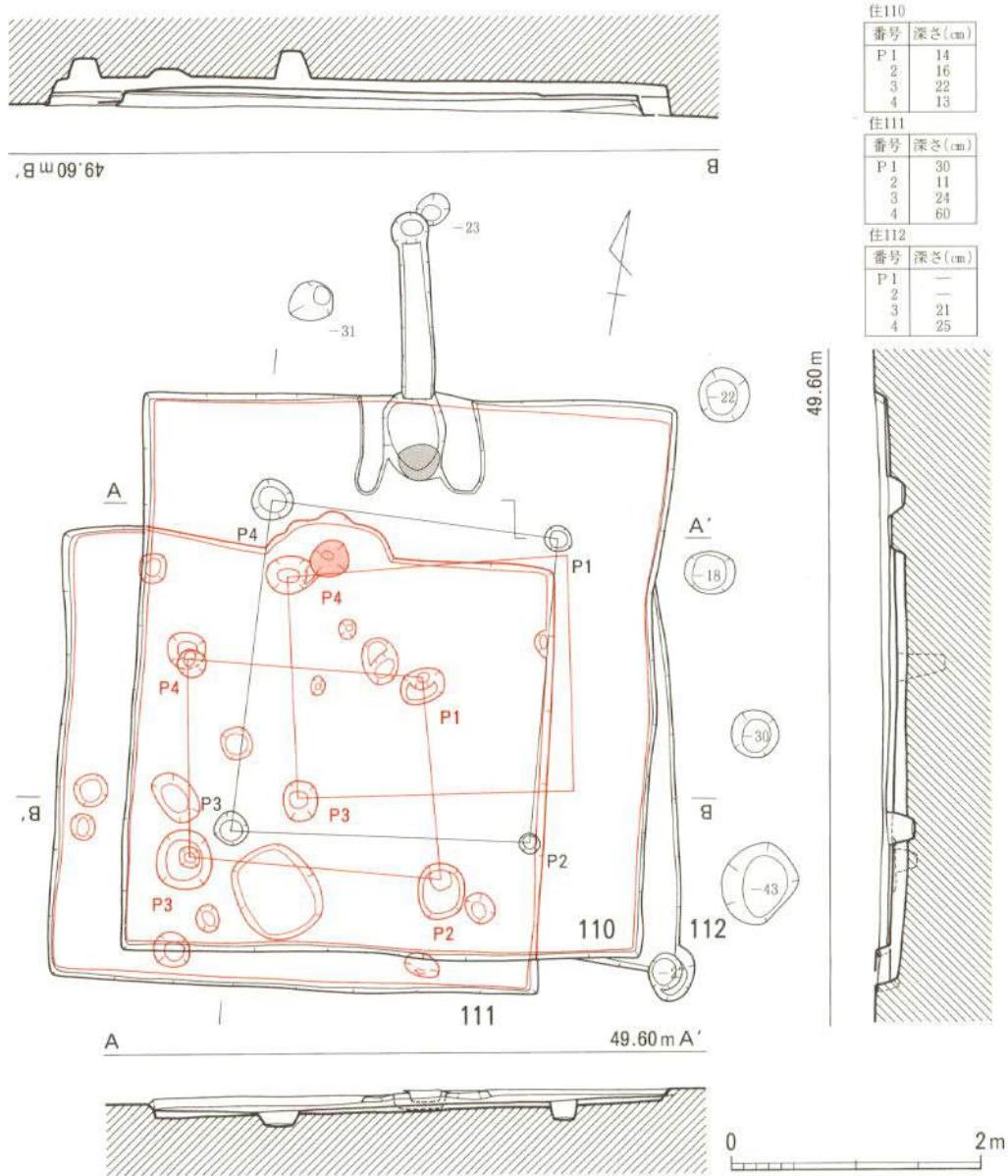
**鉄 器**（5） 5は小型の鎌で、長さ3.9cm、幅0.6cm、厚さ0.45cm、重さ4.5gで、先端は三角形に尖る。埋土中から出土した。

#### 110号竪穴住居（図版83-1、第168図）

調査区東側のC群に属し、111・112号竪穴住居を切っている。平面形は縦長の長方形を呈し、西壁長4.46m、北壁長4.28mで、壁高は東壁側で5cmと削平が著しい。主柱穴はP1~4の4本で、



第167図 109号竪穴住居カマド実測図（1/30）

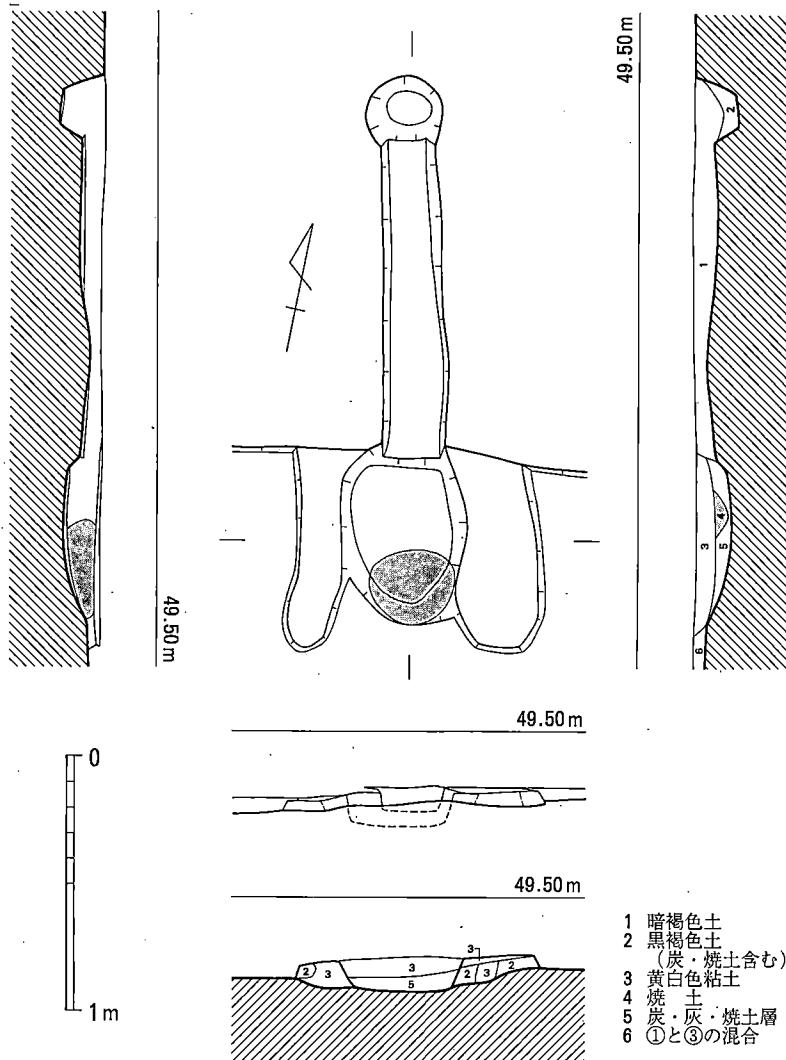


第 168 図 110~112号竪穴住居実測図 (1/60)

掘形径10~30cm、深さ13~22cmを測る。柱間はP1~2間2.45m、P1~4間2.33mで、柱穴を結ぶ線は方形を呈する。

#### カマド (図版83-2、第169図)

作り付型で、北壁中央に付設される。上部が削平されるものの両袖・煙道部を留める。袖部には黄白色粘土を盛っており、右袖は長さ76cm、基部幅35cm、残高7cmで、左袖は長さ81cm、



第 169 図 110号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

基部幅28cm、残高6cmを測る。当カマドは焚口を掘り込むタイプで、火床は焚口の手前にあり、 $30 \times 35\text{cm}$ の範囲で良く焼けていた。煙道はカマド床面から5cmの高さに設けられ、長さ150cm、煙道口幅25cmを測る。先端には煙突穴があり、径25cm、煙道底からの深さ10cmを測る。また、煙道は焚口側と煙突穴側に緩く傾斜している。

#### 出土遺物（第163図）

**土 器** (1) 1は須恵器壺蓋の天井部破片。埋土中の出土。

### 111号竪穴住居（図版83-1、第168図）

調査区東側のC群に属し、110号竪穴住居に切られ、112号竪穴住居を切っている。平面形はやや横に長い長方形を呈し、西壁長3.54m、南壁長3.93mで、壁高は西壁側で13cm残る程度である。主柱穴はP1～4の4本で、掘形径30～50cmで、深さは11～60cmとばらつきがある。柱間はP1～2間1.63m、P1～4間1.87mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。

#### カマド

突出型で、北壁中央に付設している。110号竪穴住居に壊されているので、遺存状況は悪く、掘り込みと火床を留める程度。壁体は住居壁を「コ」字形に幅102cm、奥行25cm掘り込む。火床は奥壁から12cmの位置にあり、30×30cmの範囲で良く焼けていた。また、奥壁の中央には煙道口が辛うじて確認できる。

#### 出土遺物（第163図）

**土 器** (1) 1は土師器小型甕の口縁部破片。口縁部は肥厚し、端部は小さく突出する。貼床下部の出土。

### 112号竪穴住居（図版83-1、第168図）

調査区東側のC群に属する。110・111号竪穴住居に切られ、東壁の一部を残す程度である。当住居の主柱穴は110号竪穴住居の貼床下部で検出したP3・4と考えられるが、P1・2は検出し得ていない。P3・4の柱間は1.76mを測る。カマドは東壁にはみられないで、北壁ないしは西壁に付設されていたのであろう。

### 113号竪穴住居（図版84-1、第170図）

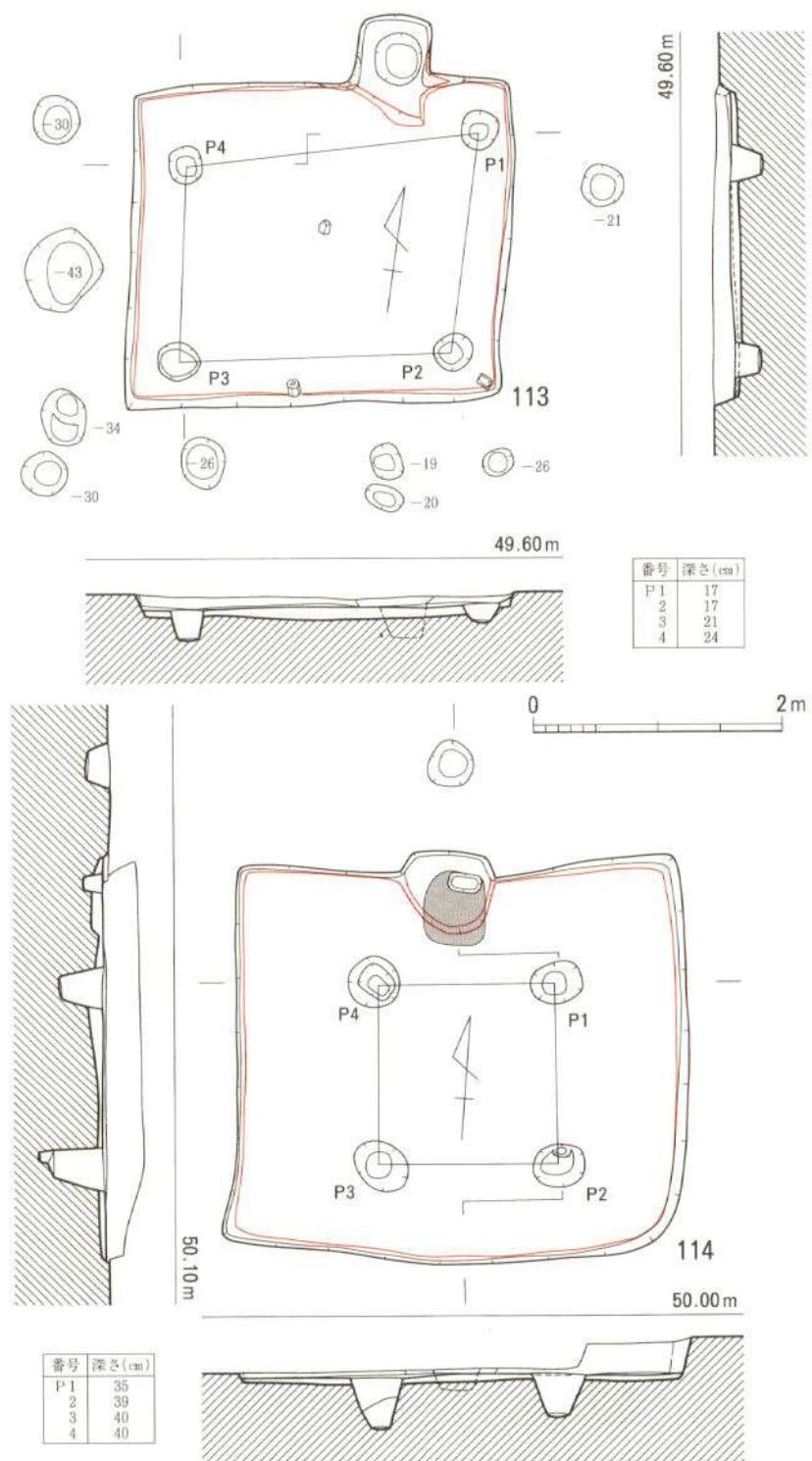
調査区東側のC群に属し、110号竪穴住居の1.5m東側に位置する。平面形は横長の長方形を呈し、西壁長2.50m、北壁長3.0mで、壁高は西壁側で20cm残る程度である。主柱穴はP1～4の4本であるが、住居壁側に寄っている。掘形径30cm前後で、深さは20cm前後。柱間はP1～2間1.77m、P1～4間2.38mで、柱穴を結ぶ線は不整方形を呈する。床面はよく踏み締められ硬くなっている。また、南壁際からはフイゴ羽口が出土している。

#### カマド（図版84-2）

突出型で、北壁中央の東寄りに付設している。壁体は住居壁を「コ」字形に幅62cm、奥行50cm掘り込む。また、角部には袖部の残骸である黄白色粘土が認められた。カマド床面中央には径40cm、深さ25cmの穴があるが、規模的に支脚穴ではない。

#### 出土遺物（第163・189図）

**土 器** (1・2) 1は土師器壺の口縁部小片。2は甕の底部破片で、外面籠ケズリ、内面工具によるナデで、通常の調整と逆である。ともに埋土中の出土。



第 170 図 113・114号堅穴住居実測図 (1/60)

**土製品 (15)** 15はフイゴ羽口で、残存長11.3cm、基部径9.3cm、重さ718.8gを測る。先端部を欠失するが、外面は工具ナデによる。

### 114号竪穴住居（図版85-1、第170図）

調査区東側のC群に属し、C地区46号竪穴住居の2m北西に位置する。平面形は長方形を呈し、東壁長3.16m、北壁長3.50mで、壁高は東壁側で30cmを測る。主柱穴はP1～4の4本で、掘形径40cm前後で、深さは40cm前後と確りしている。柱間はP1～2間1.47m、P1～4間1.42mで、柱穴を結ぶ線は方形を呈する。

### カマド（図版85-2）

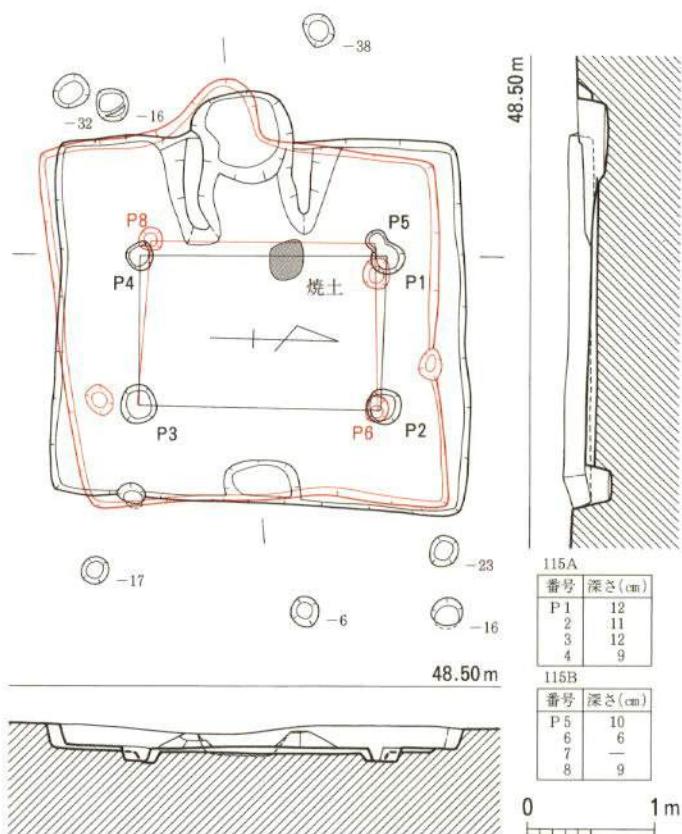
突出型で、北壁中央に付設している。カマドの遺存状況は悪く、掘形・火床を残す程度である。掘形は突出度が弱く、幅77cmで、奥行は20cmを測る。カマド奥壁から13cmの位置に支脚穴があり、その前面が火床で、45×50cmの範囲で良く焼けていた。また、掘形から50cm北側には焼土粒が入っていた径36cmのピットがあり、煙突穴と考えられる。

### 出土遺物（第163図）

**土器 (1)** 1は取手部付近の破片であるが、体部がカーブを描くことから取手付き甕になろう。埋土中の出土。

### 115A号竪穴住居（図版86-1、第171図）

調査区東側のC群に属し、104号竪穴住居の21m北側に位置する。2軒重複しており、新しい方を115A号、古い方を115B号とした。平面形は方形を呈し、東壁長2.85m、北壁長3.12mで、壁高は北壁側で18cmを測る。主柱穴はP1～4の4本で、掘形径20～30cm前後で、深さは10cm前後を測る。柱間はP1～2間1.22m、P1～4間1.95mで、柱穴を結



第 171 図 115号竪穴住居実測図 (1/60)

ぶ線は方形を呈する。主柱穴間には黄色粘土による貼床が認められる。また、東壁中央には35×60cmの楕円形の土坑が設けられている。住居埋土中から製塩土器片が3点出土している。

#### カマド（図版86-2）

突出型で、西壁中央に付設している。掘形は住居壁を「コ」字形に幅80cm、奥行40cm掘り込み、掘形の隅部に暗褐色土を貼り付け袖部を構築する。右袖は長さ65cm、基部幅45cm、残高12cmで、左袖は長さ84cm、基部幅40cm、残高10cm。当カマドは焚口を掘り込むタイプで、焚口幅46cmを測る。煙道・支脚は遺存していない。

#### 出土遺物（図版92-1、第163・189図）

**土 器** (1・2) 1・2は壊の口縁部小片で、2の器肉は厚い。ともに埋土中の出土。

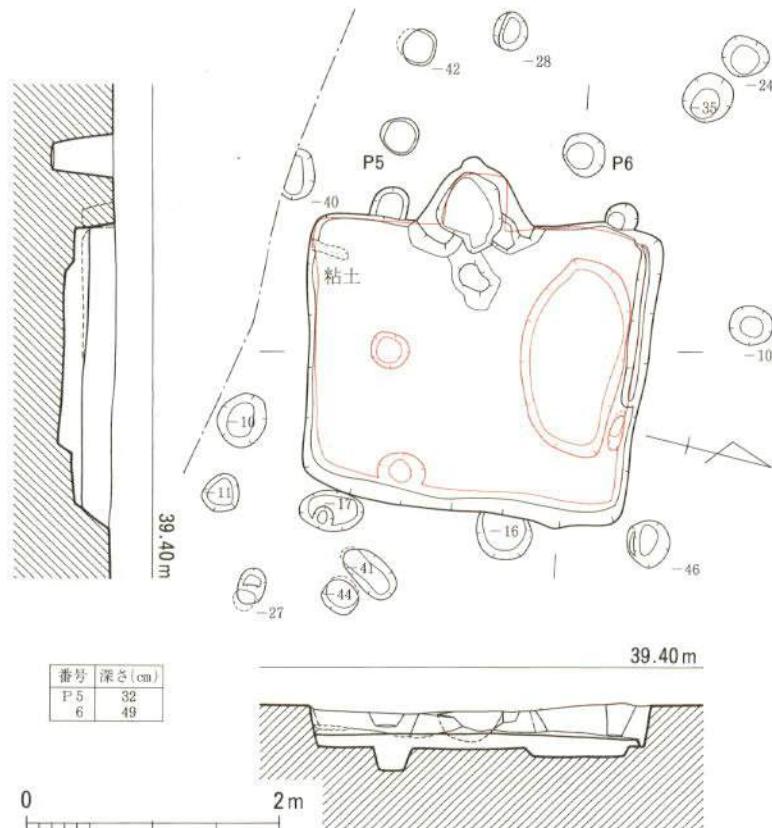
**製塩土器** (11) 11は口縁部の小片でIV類。内面ナデ、外面指頭痕がみられる。薄手で胎土も割と精良。他にIV類の小片が2点出土している。

#### 115B号竪穴住居（第171図）

調査区東側のC群に属する。115A号住居と重複し、同住居貼床下部で検出した。平面形は方形を呈し、東壁長2.70m、北壁長3.10mを測る。主柱穴はP5~8の4本であるが、P7は115A号のP3と重複するものと思われる。掘形径20cm前後で、深さは10cm前後を測る。柱間はP5~6間1.32m、P5~8間1.78mで、柱穴を結ぶ線は長方形を呈する。

#### カマド

突出型で、西壁のやや南側に付設する。115Aカマドと重複するた

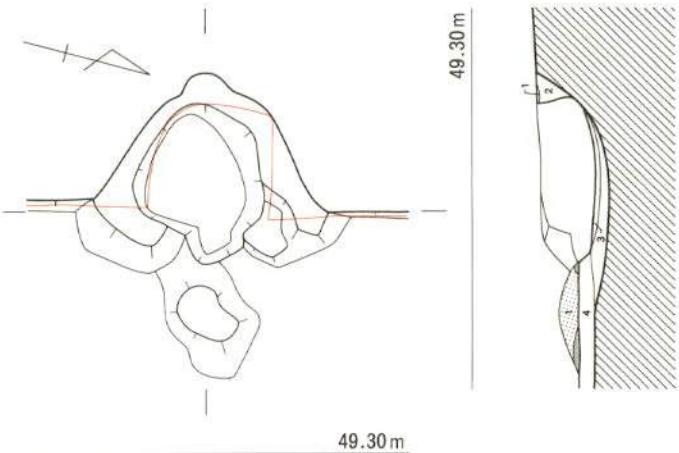


第 172 図 116号竪穴住居実測図 (1/60)

め掘形を留める程度である。掘形は住居壁を「U」字形に幅70cm、奥行45cm掘り込む。

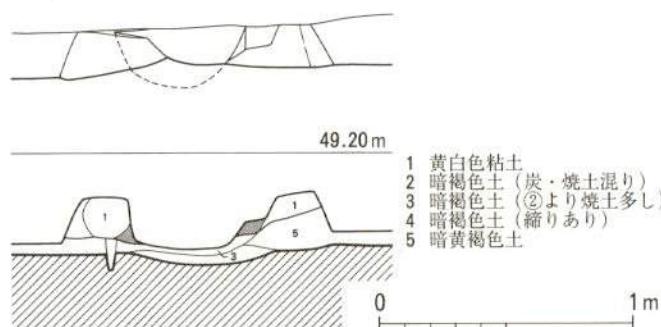
### 116号竪穴住居（図版87-1、第172図）

調査区東側のC群に属し、105号竪穴住居の4m南西に位置する。平面形は横長の長方形を呈し、東壁長2.20m、北壁長2.75mで、壁高は東壁側で28cmを測る。当住居は柱穴が竪穴部に存在しない小型無柱穴住居である。また、貼床下部の北壁側には80×150cmの楕円形土坑が掘り込まれている。



### カマド（第173図）

突出型で、西壁中央に付設している。カマドの遺存状況は悪く、両袖部を残す程度である。壁体は住居壁を「コ」字形に幅80cm、奥行50掘り込み、掘形の周囲に暗黄褐色土を貼付して袖部を構築する。右袖は長さ30cm、基部幅35cm、



第173図 116号竪穴住居カマド実測図(1/30)

残高16cmで、左袖は長さ25cm、基部幅30cm、残高22cmで、焚口幅は25cmを測る。火床はあまり焼けていなかった。また、焚口部付近には天井の崩落土と思われる壁体の残骸がある。

### 117号竪穴住居（第174図）

調査区東側のC群に属し、116号竪穴住居の2.5m西側に位置する。北壁に付設されるカマド部分を調査した程度で、大半が調査区外にある。当住居はカマドを作り替えており、新しい方を117A号カマド、古い方を117B号とした。

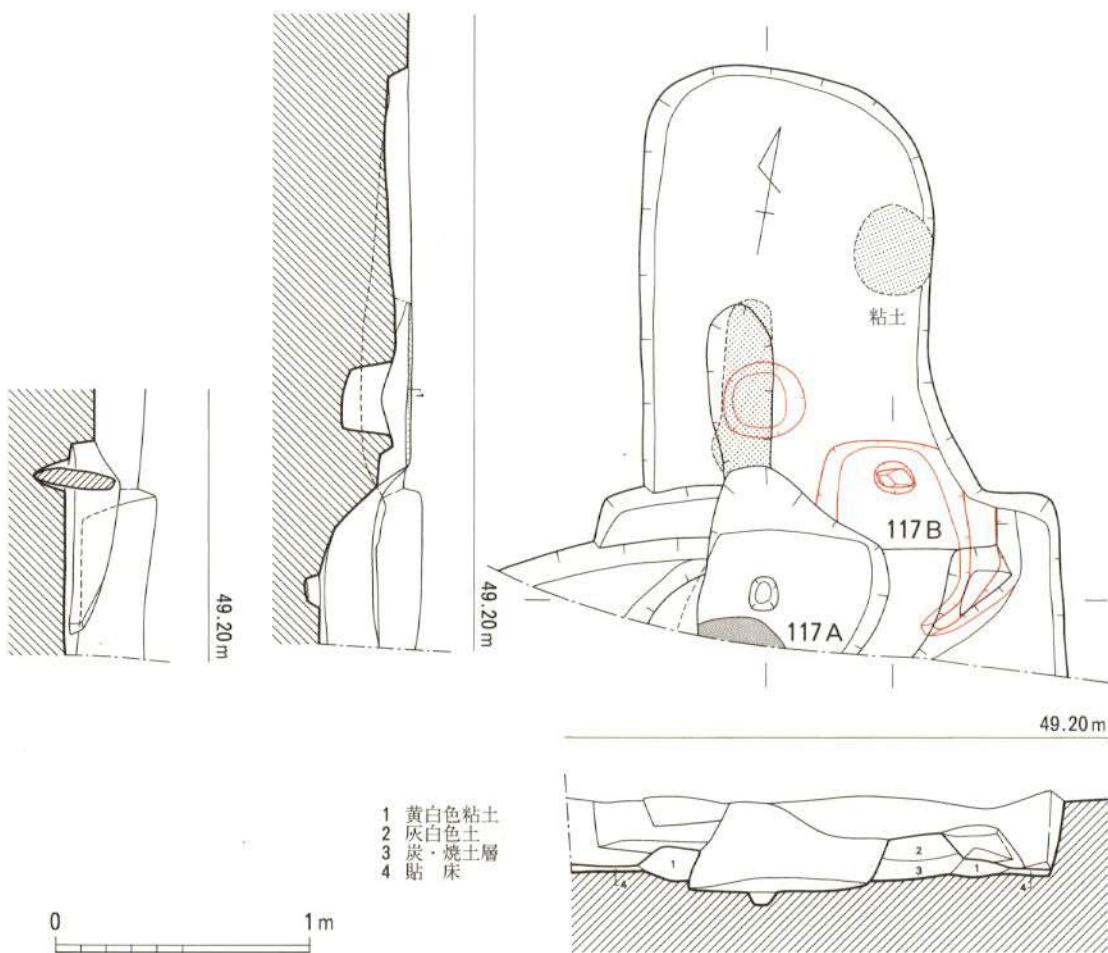
### Aカマド（第174図）

作り付型のカマドで、北壁に付設される。遺存状況は悪く、両袖部を留める程度。右袖は基部幅58cm、残存高15cmで、左袖はオーバーハンプグしている。袖部には灰白色土を盛っていた。

カマド奥壁から18cmの位置に支脚穴があり、その前面が火床となる。掘形上方には長さ65cm、幅26cmで黄白色粘土があり、煙道に関するものであろうか。

#### Bカマド（第174図）

突出型で、北壁に付設している。北壁長は1.75mで、その北側に幅1.34m、長さ1.65mの楕円形の浅い掘り込みを有する。その掘り込みの東寄りに、幅60cm、奥行22cmのカマド掘形を設ける。右袖は長さ56cm、基部幅25cm、残高13cmを測る。支脚はカマド奥壁から5cmの位置に長さ32cmの川原石を立てている。また、掘形の60cm北側には黄白色粘土が円形にあり、煙道に関するものか。



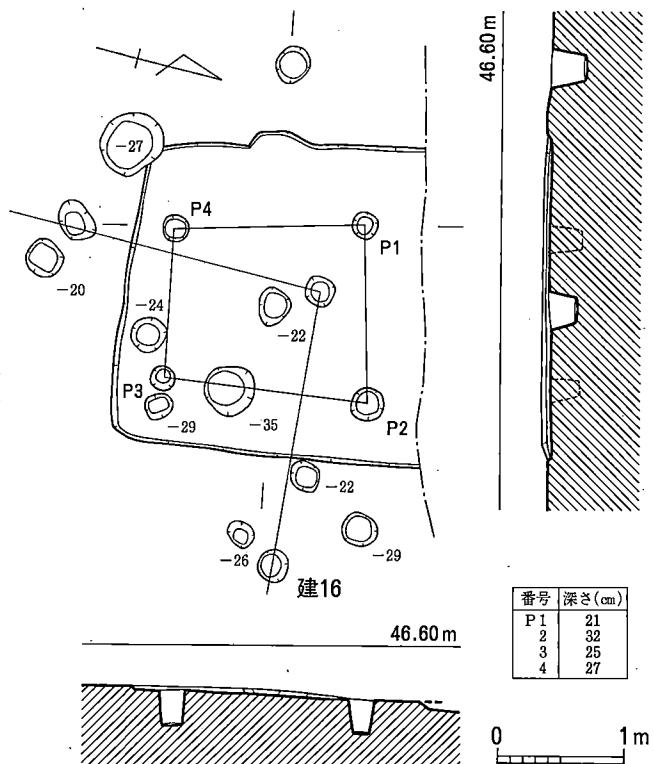
第174図 117号竪穴住居実測図 (1/30)

### 120号竪穴住居（図版87-2、第175図）

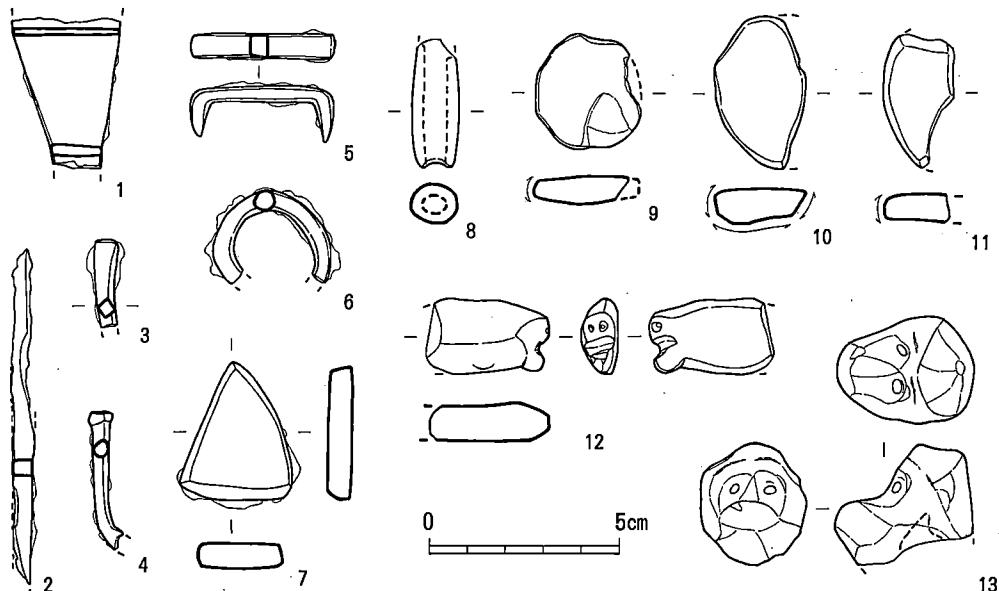
A群の北側に位置し、鎌倉時代の16号掘立柱建物に切られる。北壁は試掘時のトレンチによって失うが、平面形は方形を呈しよう。南壁長2.20mで、東壁は2.45mの遺存状況。主柱穴はP1～4の4本で、掘形径20cm前後、深さ21～32cmを測る。柱間はP1～2間1.40m、P1～4間1.50mで、柱穴を結ぶ線は不整長方形を呈する。

#### カマド

突出型で、西壁中央に付設している。遺存状居は悪く、カマド掘形を残す程度。掘形は住居壁を幅50cm、奥行10cm掘り込む。袖部を喪失し、詳細は不明。



第175図 120号竪穴住居実測図 (1/60)



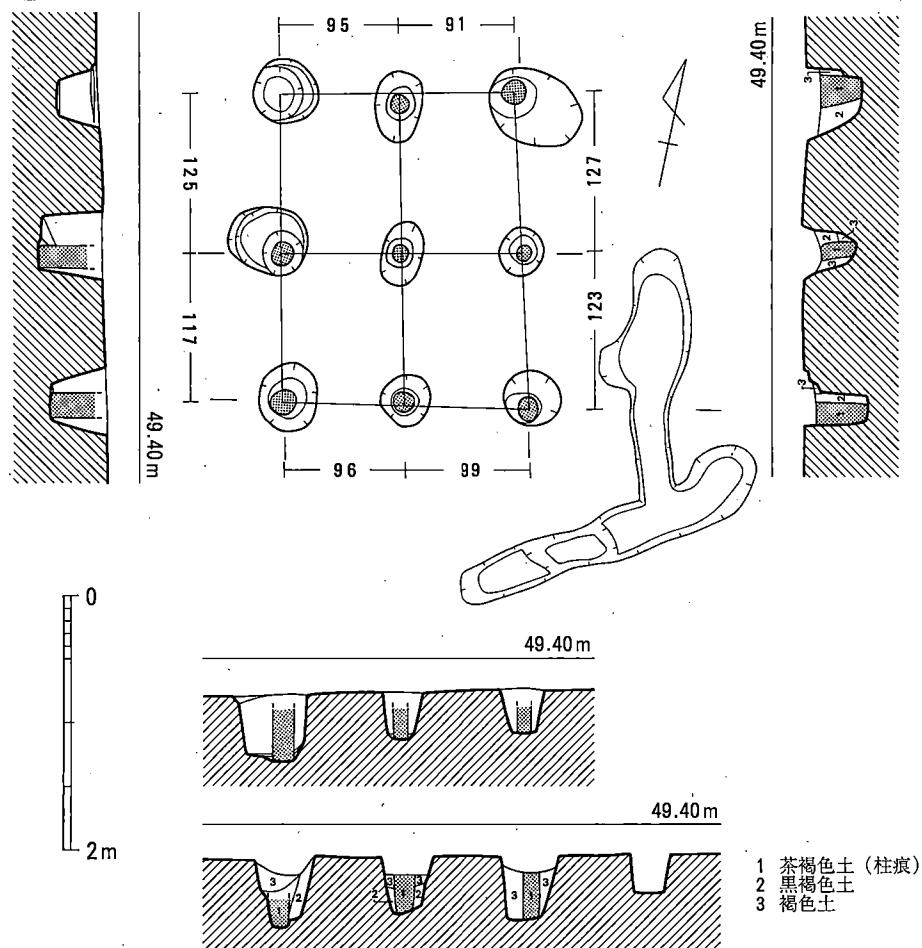
第176図 竪穴住居他出土鉄器・土製品実測図 (1/2)

## (2) 掘立柱建物

調査区の東側でC群に属し、4棟検出した。この4棟は南北方向に直線的に配される。

17号掘立柱建物（図版88-1・2、第177図）

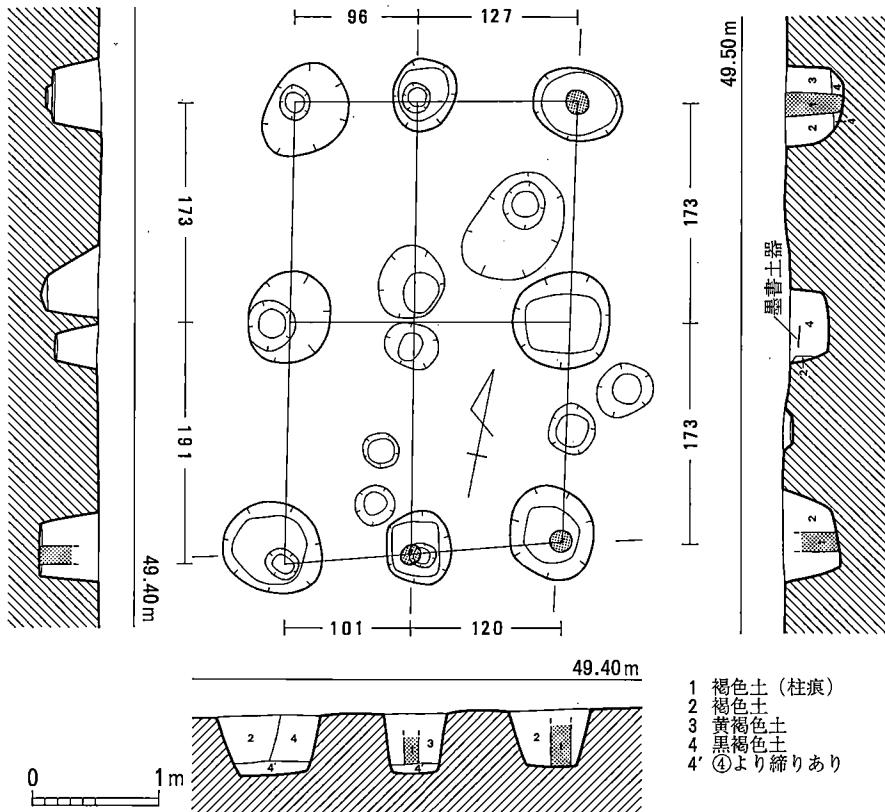
110号竪穴住居の9m西側に位置する。梁行2間（1.95m）×桁行2間（2.50m）の縦柱倉庫である。柱掘形は円形を呈し、径40～60cm、残存高30～50cmで、柱痕は径20cmほどを測る。また、南東隅部には「L」字形の浅い溝があるが、関連するものかは判らない。桁行方位はN15° Wを示す。



第177図 17号掘立柱建物実測図 (1/60)

### 18号掘立柱建物（図版88-1・3、第178図）

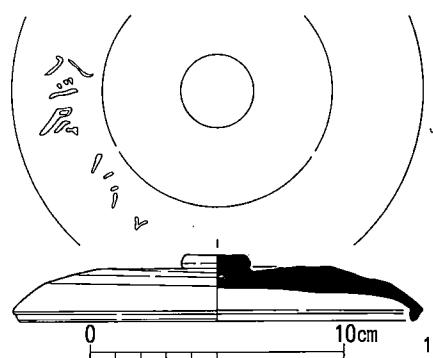
17号掘立柱建物の2.5m南側に位置し、同建物と柱筋をそろえる。梁行2間（2.23m）×桁行2間（3.64m）の総柱倉庫である。桁側の柱間は1.73mであるが、梁側は0.96~1.26mと柱間が狭い。柱掘形は円形を呈し、径70cm前後、残存高40cm前後で、柱痕は径20cm弱を測る。東桁側の中央の柱掘形内から墨書き土器が出土している。桁行方位はN15°Wを示す。



第178図 18号掘立柱建物実測図 (1/60)

### 出土遺物（図版91-1、第179図）

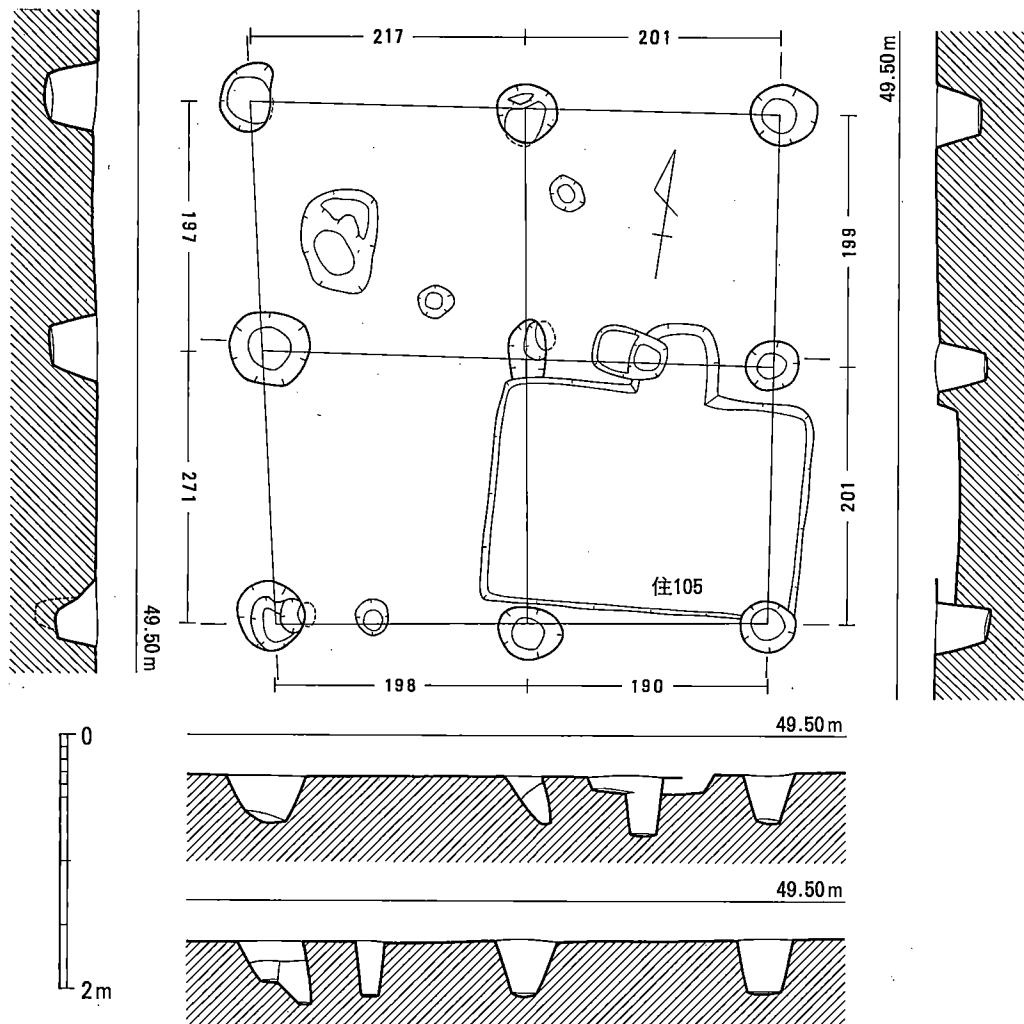
**墨書き土器 (1)** 1は須恵器坏蓋で、口縁端部は小さく立つ。天井部は低平で、鉗状のつまみを付す。口縁部ヨコナデ、外天井部回転鎧ケズリ、内面ナデによる。器高2.5cm、口径15.8cm。外面には2段に文字が墨書きされており、上段に2文字、下段に3文字書かれていたため赤外線カメラによる判読を行ったが、判読し得ていない（註1）。



第179図 墨書き土器実測図 (1/3)

### 19号掘立柱建物（図版89-1、第180図）

18号掘立柱建物の6m南側に位置し、105号竪穴住居を切っている。18号掘立柱建物の中央柱列と当建物の西側柱列は柱筋をそろえている。当建物は東西に若干長く、梁行2間（4.11m）×桁行2間（4.18m）の総柱倉庫である。柱掘形は円形を呈し、径40cm前後、残存高40cm前後で、他の掘立柱建物の掘形と比べて一回り小さい。梁側方位はN8° Wを示す。

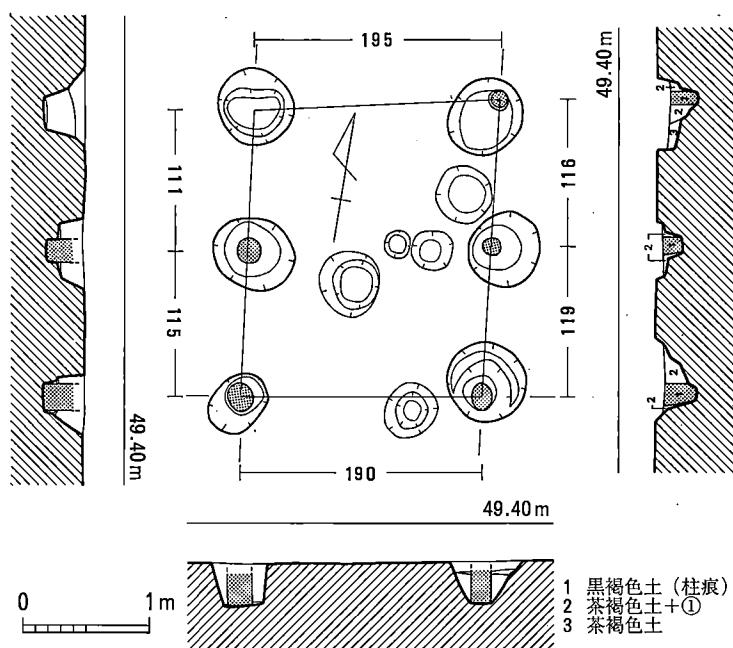


第180図 19号掘立柱建物実測図 (1/60)

## 20号掘立柱建物（図版88-1・89-2、第181図）

18号掘立柱建物の2.5m北側に位置する。同建物と柱筋をそろえるとまではいかないが、計画的な配列をなす。梁行1間（1.95m）×桁行2間（2.35m）の建物である。柱掘形は円形を呈し、径60cm前後、残高30cm前後で、柱痕は径20cm弱を測る。桁行方位はN6°Wを示す。

註1 九州歴史資料館倉住靖彦・石丸洋氏の御教示・御協力による。



第181図 20号掘立柱建物実測図 (1/60)

## (3) 壇 穴

### 3号壇 穴（第182図）

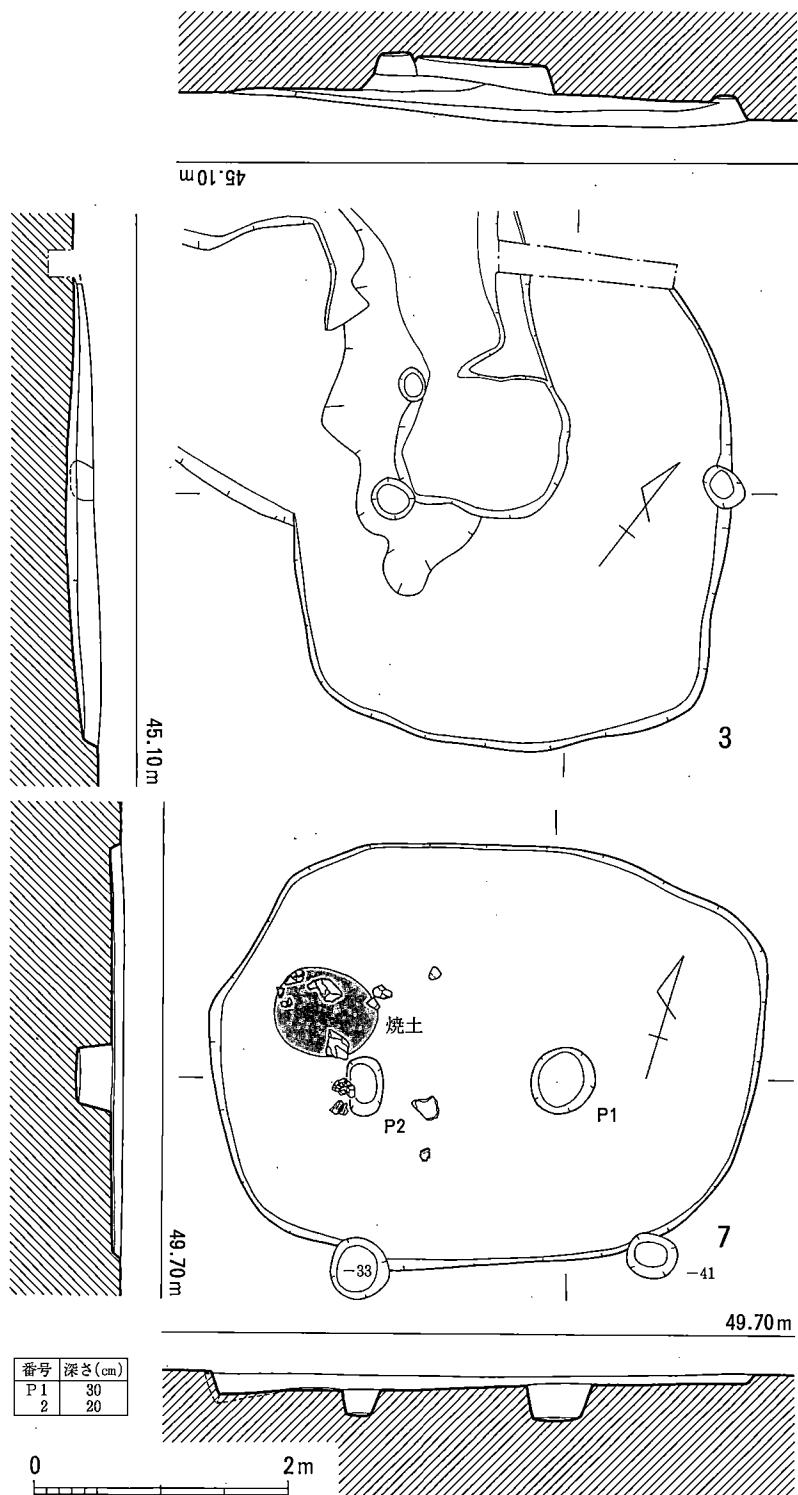
8号溝の北端に位置し、同溝を切っている。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、南東壁長3.0m、北東壁長は3.5mほどになろう。壁高は東壁側で18cmを測る程度。床面は中央部がやや窪んでいる。埋土中から土器が出土している。

### 出土遺物（図版90-2、第183図）

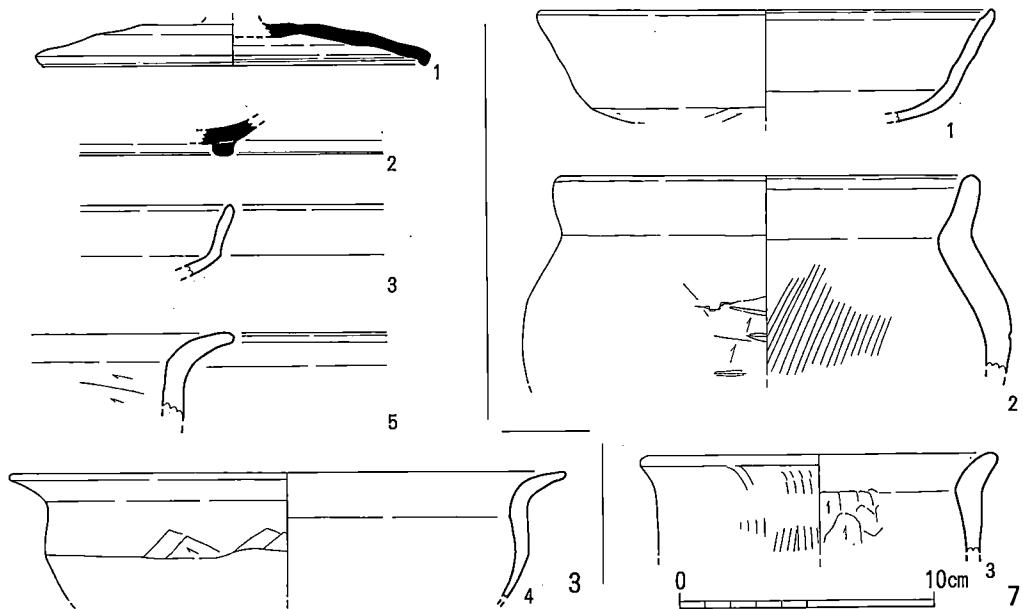
**土 器 (1~5)** 1・2は須恵器、3~5は土師器。1は壺蓋で、口縁部は小さく立つ。口径は15cmに復原した。2は有高台の壺身小片。3は壺で、口縁部との境に稜を有する。4は鉢で、水平気味に開く口縁部はシャープである。体部外面は範ケズリによる。復原口径は22cmを測る。5は甕の口縁部小片。

### 7号壇 穴（第182図）

調査区東側のC群に属し、113号壇穴住居の3.5m南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸4.4m、短軸3.32mで、壁高は西壁側で13cmの遺存状況である。床面にはピットが長軸方向に2個にあり、柱穴になるか。西壁側には焼土があり、土器・礫が散在していた。



第 182 図 3・7号竪穴実測図 (1/60)



第183図 3・7号竪穴出土土器実測図 (1/3)

#### 出土遺物 (図版90-2、第183図)

**土 器 (1~3)** 1~3は土師器。1は壺で、口縁部内面に僅かな段を有する。復原口径は17.8cmを測る。口縁部外面には煤が付着している。2は肉厚の甕で、口縁部は内傾して立ち上がる。口径は16.4cmに復原した。3は小型の甕で、復原口径は13.6cm。口縁部は肥厚する。

#### (4) 土 坑

##### 10号土 坑 (第184図)

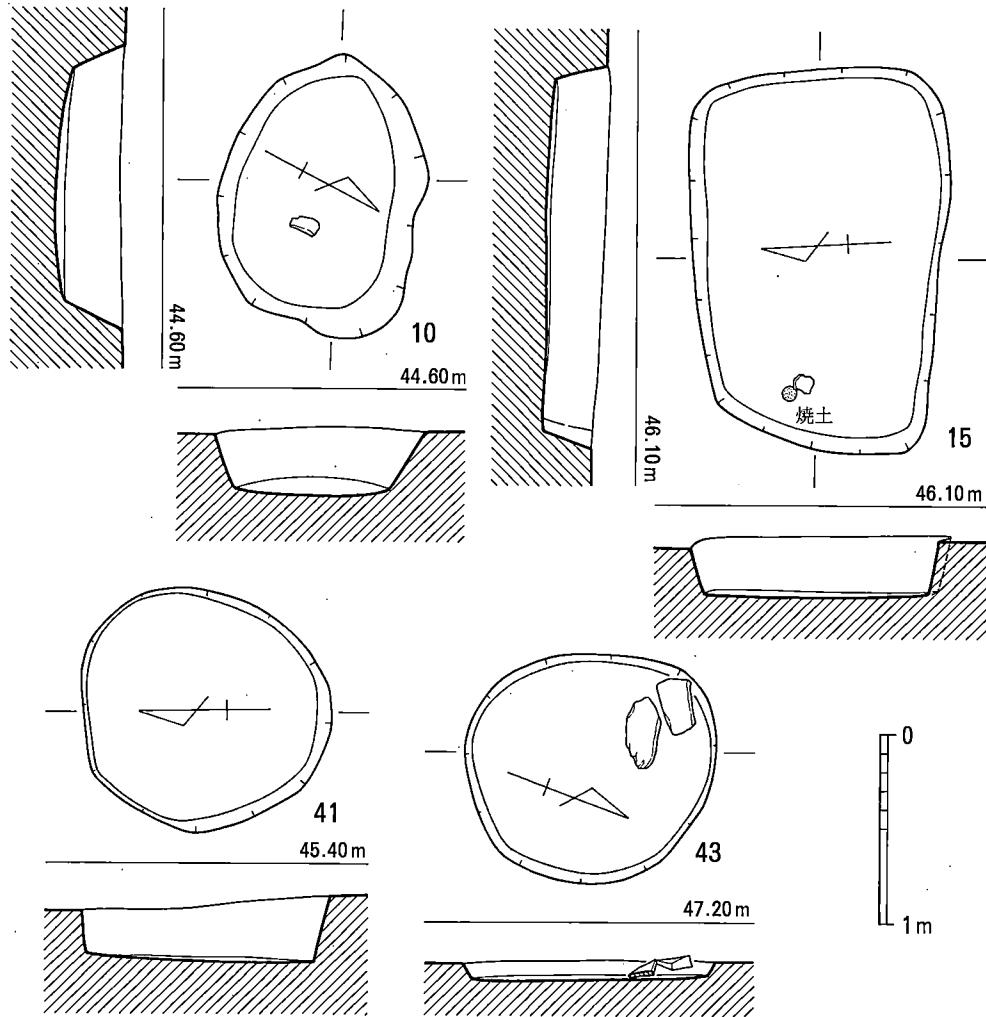
4号通路の中程に位置し、同遺構を切っている。平面形は橢円形を呈し、長軸1.50m、短軸1.10m、深さ0.35mを測る。埋土中から土器が出土している。

##### 出土遺物 (第185図)

**土 器 (1・2)** 1は土師器の有高台壺で、高台は細身で高い。高台径は8.4cmに復原した。高台は壺部の切り離し後に貼付している。2は甕の口縁部小片で。胴部は張りをみせない。

##### 15号土 坑 (第184図)

90号竪穴住居の2m北西に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.03m、短軸1.38m、深さ0.28mを測る。床面は西側にやや傾斜している。埋土中には焼土がみられた。



第184図 10・15・41・43号土坑実測図 (1/40)

#### 出土遺物 (第185図)

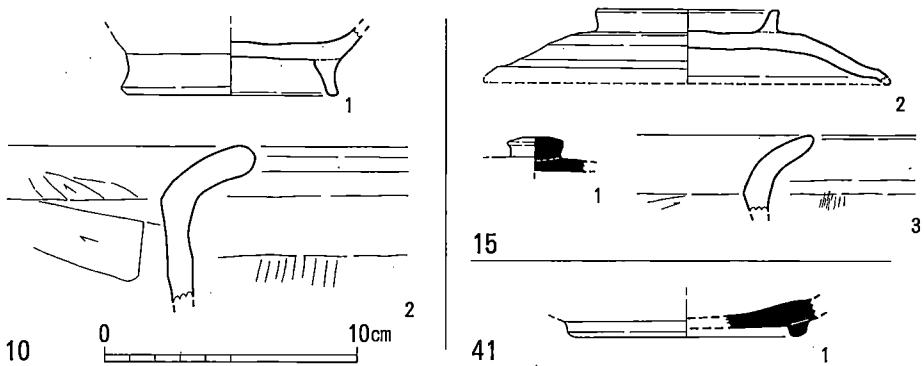
**土 器 (1~3)** 1は壺蓋のつまみ部破片で、鉗状を呈する。2は壺蓋で、口縁部は小さく屈曲する。天井部は低く、環状つまみを貼付する。つまみ径8.2cm。3は土師器甕の口縁部小片。

#### 41号土 坑 (図版89-3、第184図)

83号竪穴住居の13m北側に位置する。平面形は円形を呈し、径1.30m、深さ0.35mを測る。埋土中には弥生土器も多く含まれるが、須恵器壺身が出土しているので当該期に含めた。

#### 出土遺物 (第185図)

**土 器 (1)** 1は須恵器有高台の壺身底部片。復原高台径は9.4cmを測る。



第185図 10・15・41号土坑出土土器実測図 (1/3)

#### 43号土坑 (図版、第184図)

98号堅穴住居の4m西側に位置する。平面形は円形を呈し、長軸1.32m、短軸1.22m、深さ0.10mを測る。北壁寄りには礫があり、埋土中から須恵器片が出土している。

#### (5) 溝状遺構

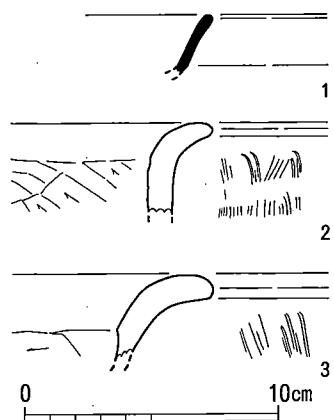
##### 10号溝

調査区の北東側を東西方向に走る溝状遺構で、埋土には地山に近い暗褐色土が入っており、堆積状況も地山との線引きを明瞭にし難い。人為的な溝と言うよりは落込の様相を呈するが、45mと長く続いているので溝状遺構としておく。以上の様な状況であったので完掘していない。幅は東端部で3.0m、西端部で5.5mを測る。深さは中央部で20cmほどであった。

##### 出土遺物 (図版92-2、第176・186図)

**土器 (1~3)** 1は須恵器坏身の口縁部小片。2は土師器甕で、胴部は張りをみせない。3は鍋の口縁部小片。外面には煤が付着している。

**土製品 (13)** 13は動物を模した頭部破片で、頸部以下を欠く。頭頂部は尖り、細い針状のもので目を表している。耳・鼻の表現はなく、口は前に突き出ているが閉じている。側面観は猿そのものであり、頭部が尖っているのは帽子を被っているためか。猿回しの猿を思い浮かばせる。残存長3.6cm、幅2.7cm、重さ21.6gを測る。



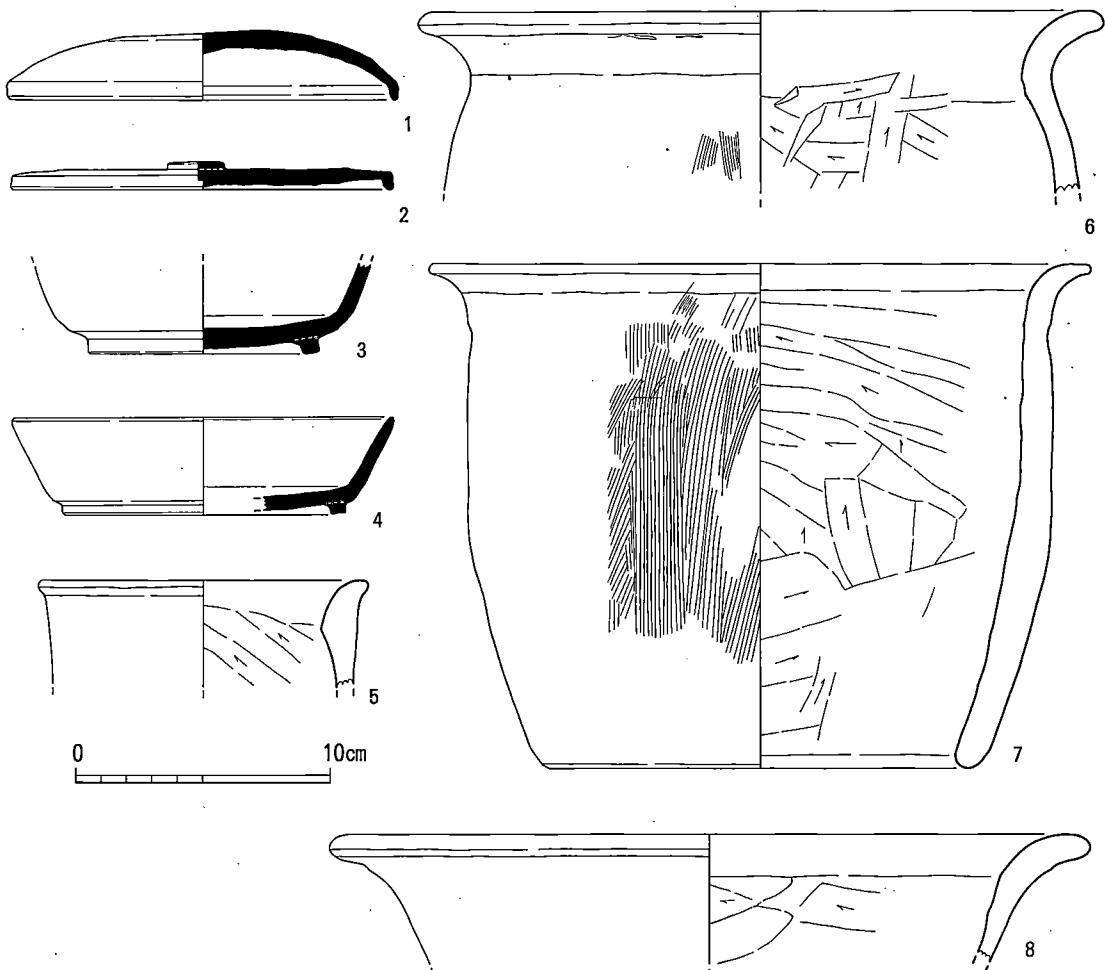
第186図 10号溝出土土器実測図 (1/3)

## (6) その他出土の遺物

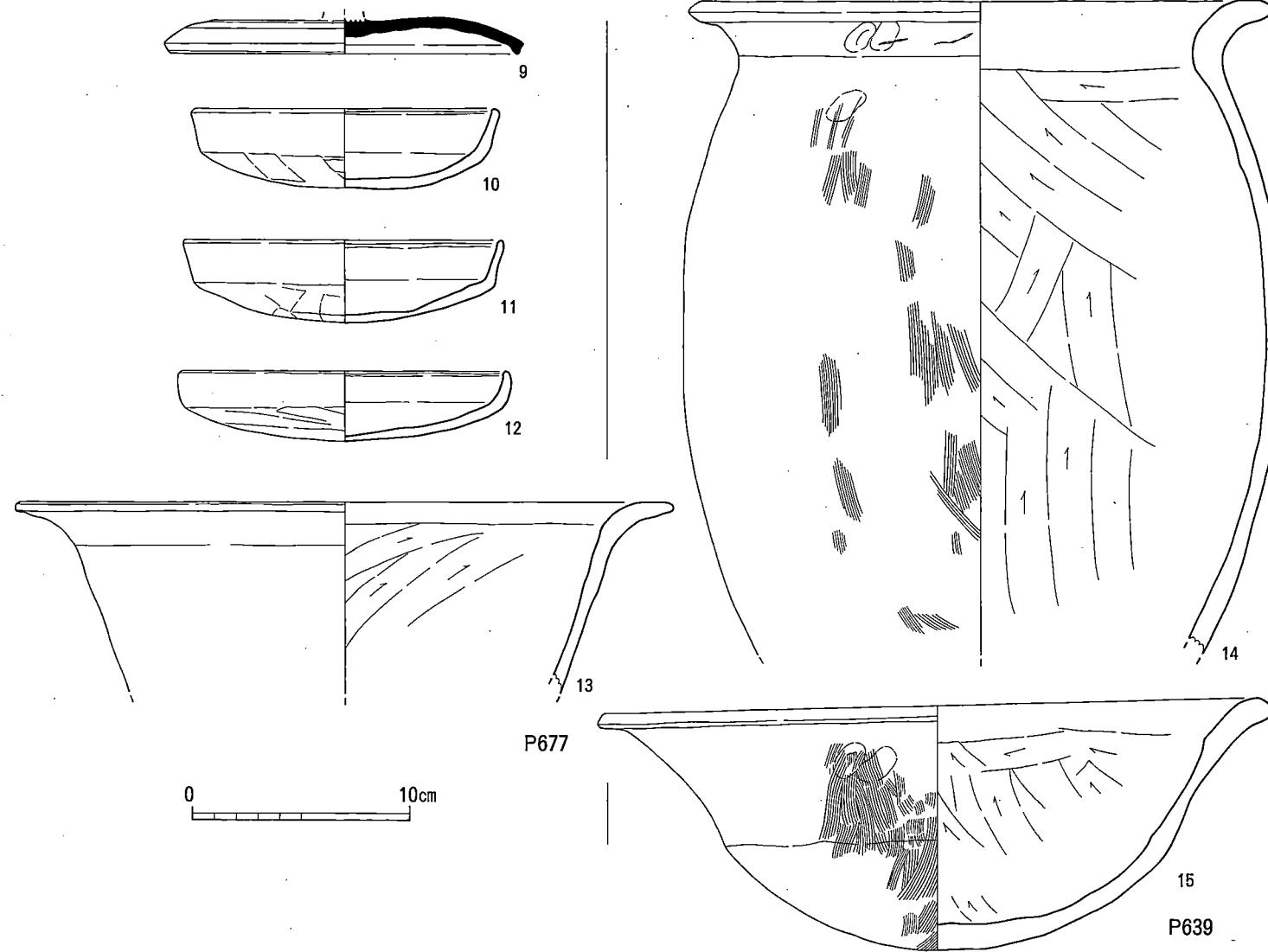
ここでは、ピットその他出土の奈良時代の遺物を掲載する。

### 出土遺物（図版90-3・91-3・92-1、第187～189図）

**土 器** (1～15) 1は須恵器坏蓋で、天井部はアーチ状をなし、つまみは最初から貼付していない。器高2.7cm、口径15.2cm。調査区東側の採集品。2は須恵器坏蓋で、口縁部は小さく立つ。天井部は低平で、扁平なつまみを貼付する。P 590の出土。3・4は須恵器有高台の坏身で、3がP 632、4はP 825の出土。5は土師器の小型甕。口縁部は肥厚し、内面には煤が付着している。P 826の出土。6は土師器甕の口縁部破片で、鉤形に屈曲する。4・5号竪穴付近の出土。7は土師器甕で、寸胴な器形をなす。口縁部は水平気味に開き、端部は細くなっている。器高20.



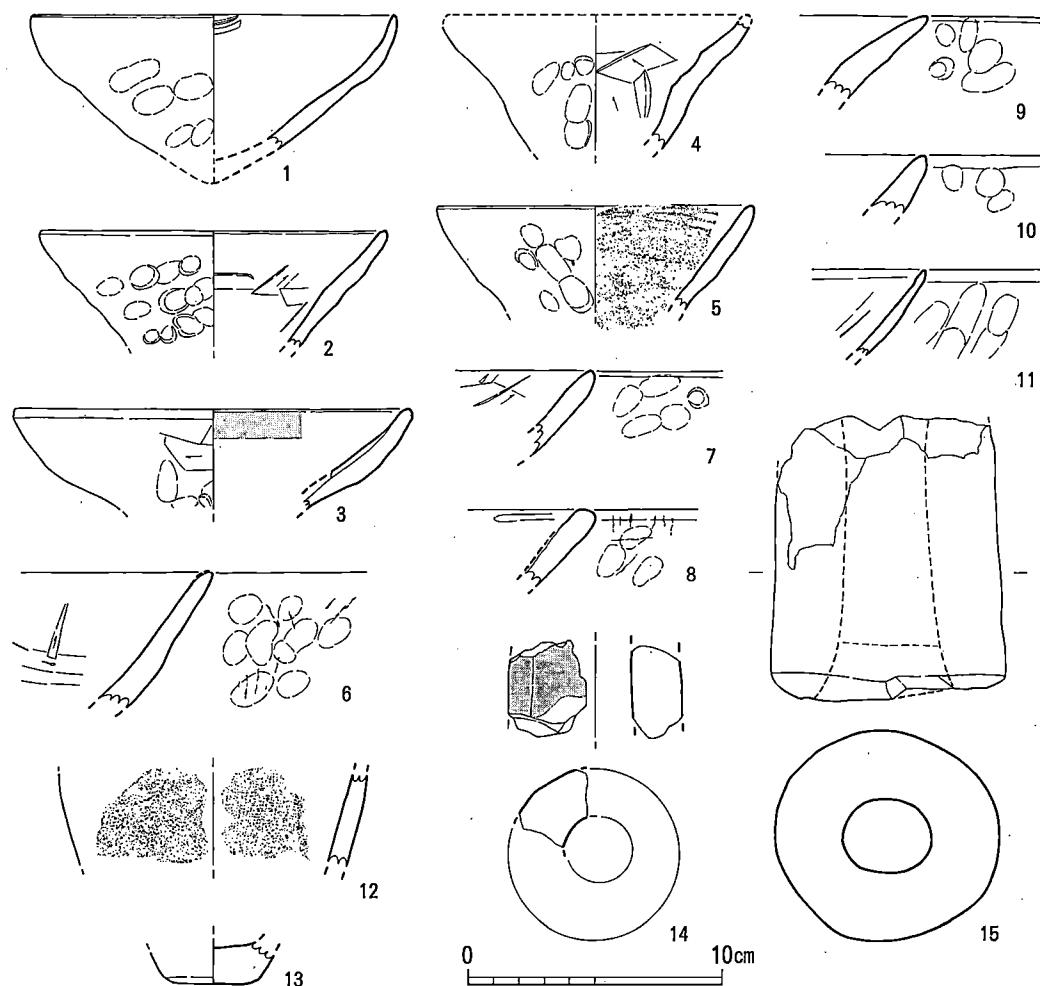
第 187 図 P i t 出土土器実測図① (1/3)



第 188 図 P i t 他出土土器実測図② (1/3)

0cm、口径26.1cm、底径16.6cm。4号通路北端部の出土。8は土師器鍋で、4号通路埋土中の出土。9は壺蓋で、口縁端部は小さく立つ。天井部は低平で、つまみを欠失する。口径は15.8cm。10～12は土師器杯で、口唇部が若干肥厚する。器高3.2～3.8cm、口径13.8～14.8cm。13は口縁部～体部上半部の破片であるが、鍋形を呈するか。復原口径は30cm。9～13はP 677の出土。14は甕で、底部を欠く。口縁部は肥厚し、鉤形に屈曲する。復原口径は26.6cm。外面には煤が付着する。15は洗面器形の鍋で、器高11.1cm、口径30.8cm。口縁部内面には煤が付着する。

**製塩土器 (2・3・9・12)** 2は口縁部破片で、IV b類。胎土は割と良好で、赤橙色を呈する。P 413の出土。3は口縁部破片で、P 69付近掘り下げ時の出土。IV a類。内面ナデで、外面に指頭痕を残す。9は口縁部破片で、胎土は荒くザラつく感じ。IV b類。98号竪穴住居南側付近の出土。12はIII a類の破片で、内面に布目がみられる。P 52付近の出土。



第 189 図 竪穴住居他出土製塩土器・フイゴ羽口実測図 (1/3)

## 6. 鎌倉時代の遺構と遺物

### (1) 掘立柱建物

鎌倉期の建物群は調査区の中程から東側にかけて展開し、7棟検出した。12～16・22号掘立柱建物は東西棟であるが、21号掘立柱建物のみ南北棟である。また、14号掘立柱建物から21号掘立柱建物間にはピットが多数存在し、建物としてまとまる可能性があるが、調査段階で建物として確認したものを報告する。

#### 12号掘立柱建物（図版94-2・95-1、第191図）

建物群の中央北側で、16号掘立柱建物の1.5m南側に配される。梁行2間（4.10m）×桁行3間（6.90m）の東西棟建物である。柱掘形は円形を呈し、径0.3～0.5m、残高0.3m前後を測る。梁行方位はN2° Wを示す。柱穴内からの出土遺物はない。

#### 13号掘立柱建物（図版93-2・94-1、第190図）

建物群の西端側で、14号掘立柱建物の1.5m西側に配される。梁行2間（3.75m）×桁行3間（6.30m）の東西棟建物である。柱掘形は円形を呈し、径0.3～0.6m、残高0.3m前後を測る。梁行方位はN3° Wを示す。柱穴内からは土師器小片が出土した程度。

#### 14号掘立柱建物（図版93-2・94-1、第192図）

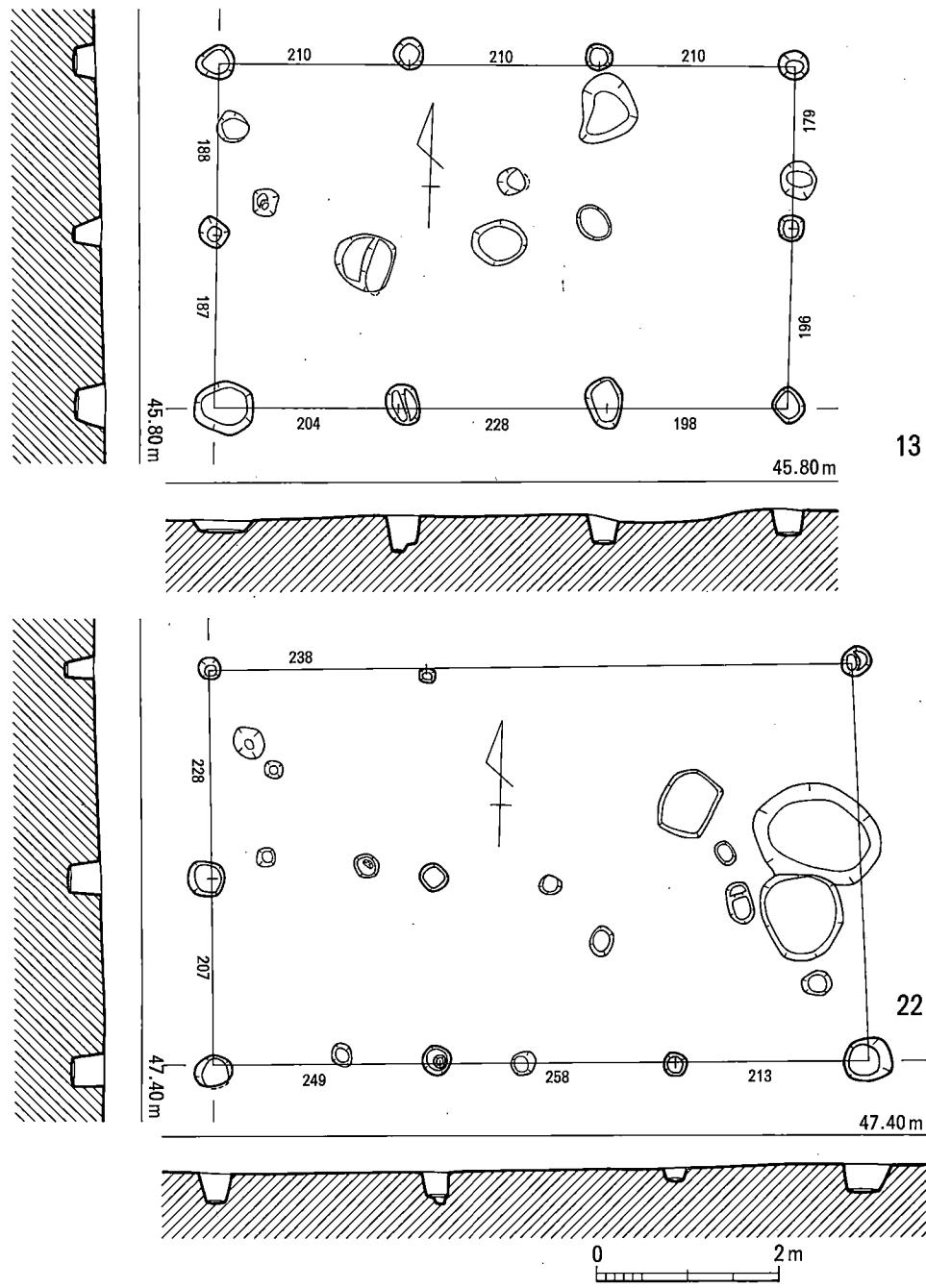
建物群の西側で、13号掘立柱建物の3m東側に位置する。2棟重複しており、南側を14A号、北側を14B号とした。前後関係は不詳であるが、柱穴の形状からすると14A号が後出するか。何れも梁行2間（3.95m）×桁行5間（10.20m）の東西棟建物で、14A号は側柱のみであるが、14B号は東柱を有する。柱掘形は円形を呈し、径0.3～0.4m、残高0.3m前後を測る。梁行方位はN2° Wを示す。柱穴内からは土師器・青磁などが出土している。

#### 出土遺物（第193図）

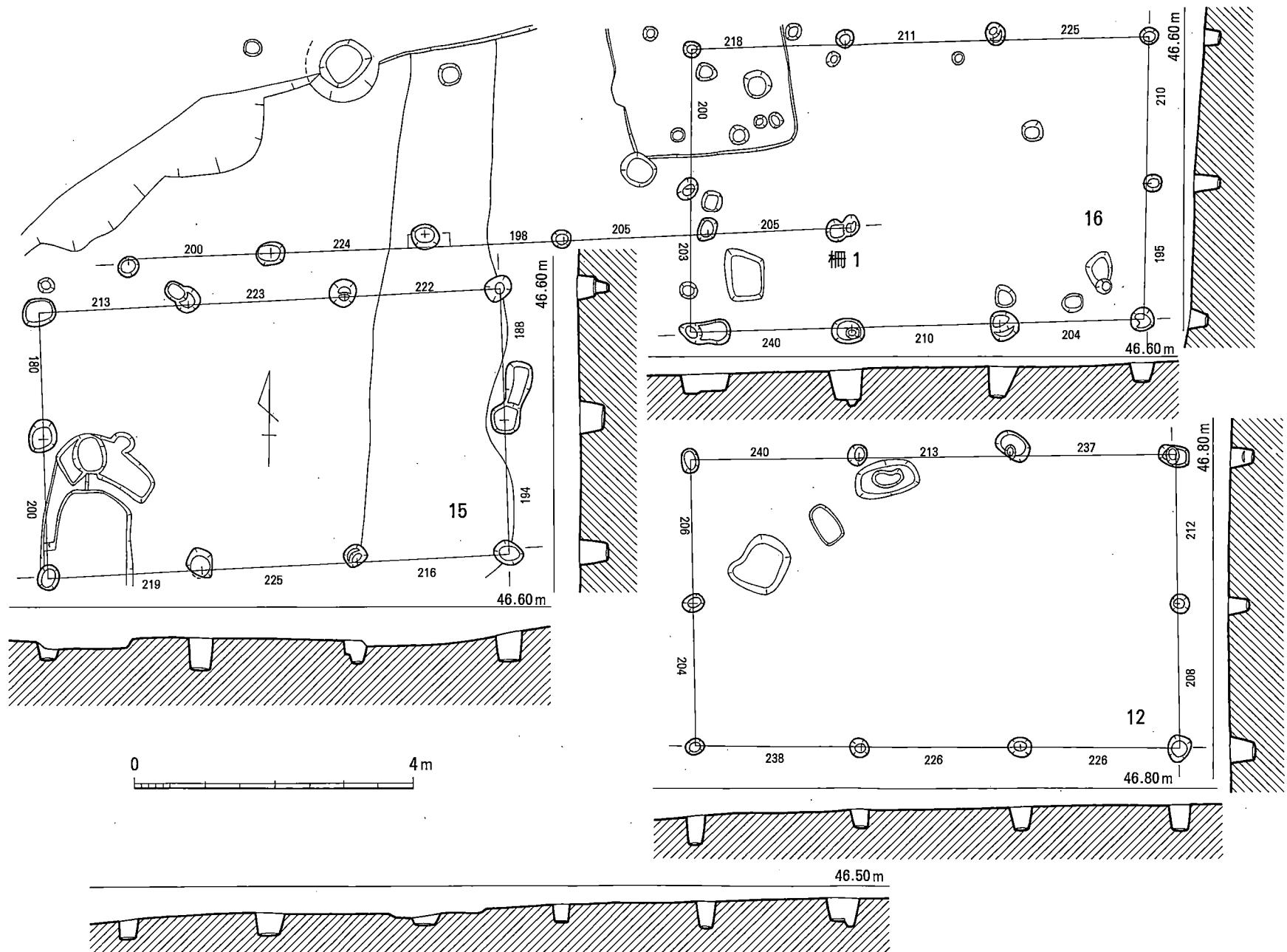
**土 器**（1～4） 1は黒色土器A類椀の高台部破片で、高台径は5.6cm。2は須恵器壺の口頸部破片で、復原口径は11.4cm。口縁部に段を有する。3は青磁壺の口縁部破片で、口唇部は釉剥ぎ。4は龍泉窯系青磁小碗の口縁部小片であろう。1がP 13、2はP 3、3はP 7、4はP 15の出土。

#### 15号掘立柱建物（図版94-2・95-2、第191図）

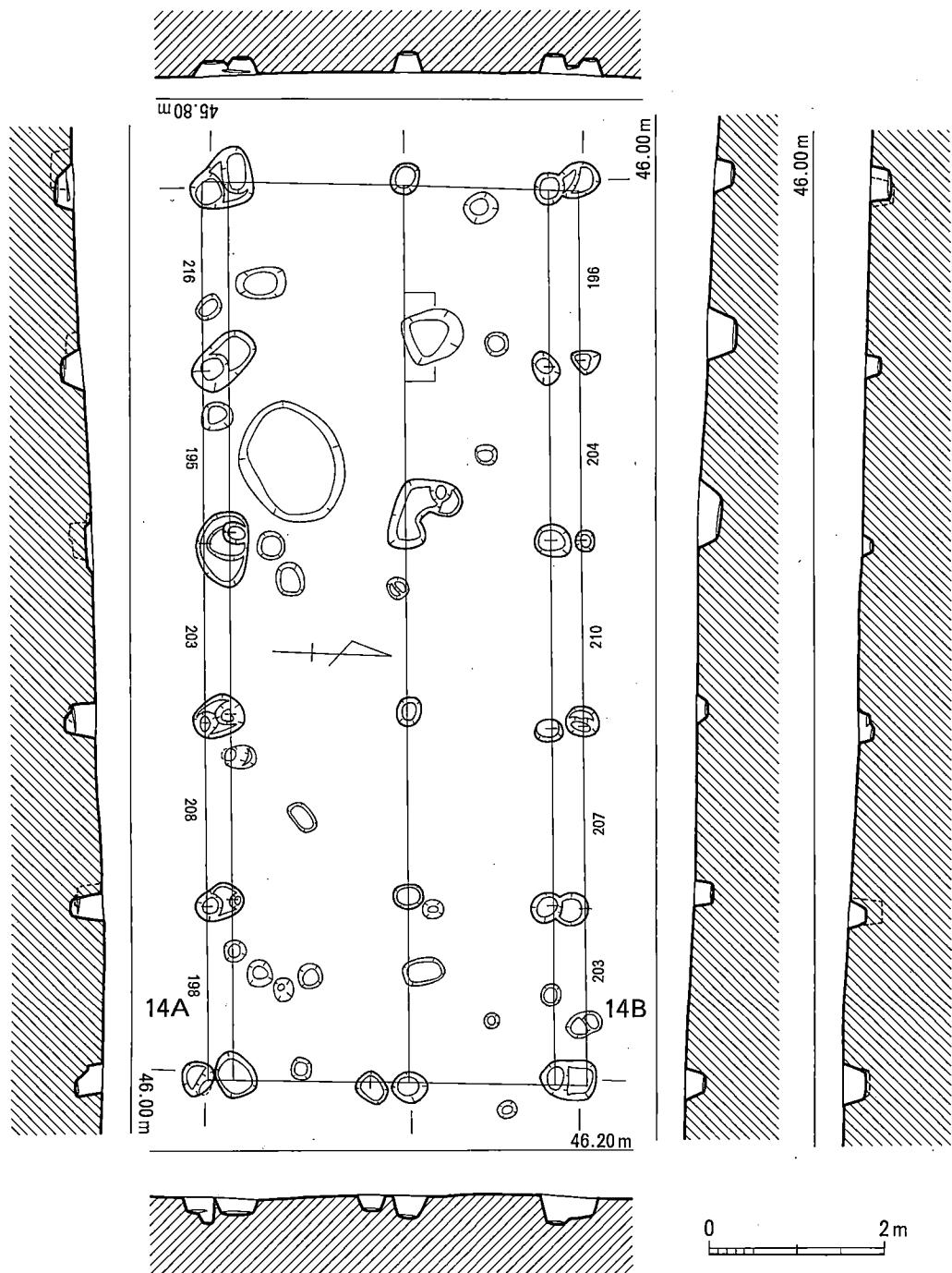
12・15・16号掘立柱建物は一群をなし、16号掘立柱建物の2m西側に配される。梁行2間（3.



第 190 図 13・22号掘立柱建物実測図 (1/80)



第 191 図 12・15・16号掘立柱建物、1号柵列実測図 (1/80)



第 192 図 14A・B 号掘立柱建物実測図 (1/80)

80m) × 桁行3間 (6.60m) の東西棟建物で、前二者に比してやや小振りである。柱掘形は円形を呈し、径0.4m、残高0.4mを測る。梁行方位はN2° 30' Wを示す。柱穴内からは土師器細片が出土したのみ

#### 16号掘立柱建物（図版94-2・95-3、第191図）

建物群の中央北側で、12号掘立柱建物の1.5m北側に配され、1号柵列と重複する。梁行2間 (4.05m) × 桁行3間 (6.54m) の東西棟建物である。柱掘形は円形を呈し、径0.2~0.4mで、残高0.4mを測る。梁行方位はN1° Eを示す。柱穴からは土師器坏片、瓦器椀口縁部小片などが出土しているが、図示に耐えない。

#### 21号掘立柱建物（第194図）

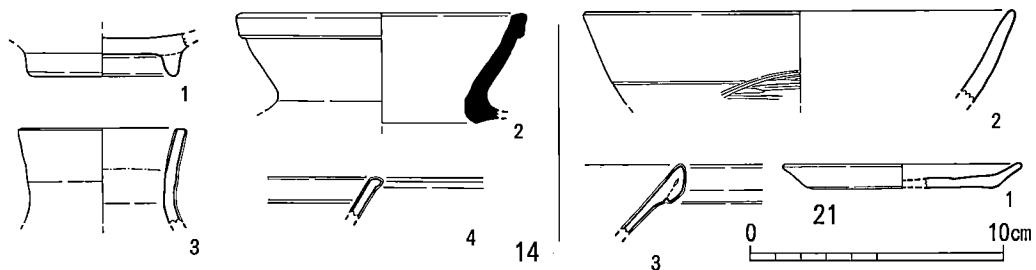
建物群の東端側で、22号掘立柱建物の16.5m南側に配される。この付近はピットが多く、何れの穴を柱穴として採用するか苦慮したが、梁行2間 (4.05m) × 桁行5間 (11.10m) の南北棟建物とした。柱掘形は0.4mの円形を呈し、残高は0.6~0.8mと深い。桁行方位はN 0° 30' Eを示す。柱穴からは土師器坏片、瓦器椀口縁部小片、白磁などが出土している。

#### 出土遺物（第193図）

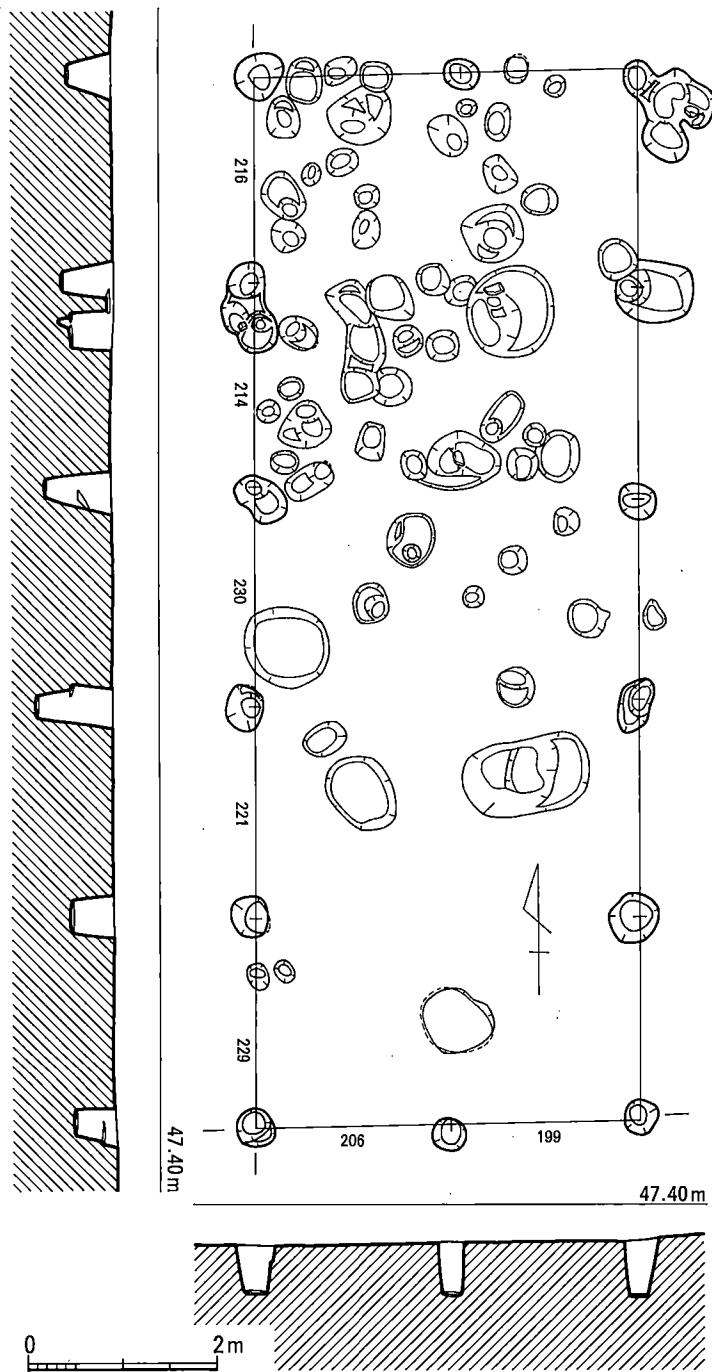
**土 器 (1~3)** 1は土師器小皿で、器高1.2cm、復原口径9.0cmを測る。底部は糸切りによる。2は瓦質の椀の口縁部破片で、口径は17.0cmに復原した。器面の磨滅が著しいが、外体部にはミガキを施している。3は白磁玉縁口縁碗の小片で、玉縁部は大きめ。

#### 22号掘立柱建物（第190図）

建物群の東端側で、16号掘立柱建物の14m東側に配される。やや距離があるものの、同建物の南桁行と柱筋をほぼ揃える。梁行2間 (4.35m) × 桁行3間 (7.20m) の東西棟建物である。柱掘形は円形を呈し、径0.2~0.45m、残高0.3mを測る。桁行方位はN2° Wを示す。



第 193 図 14・21号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)



第 194 図 21号掘立柱建物実測図 (1/80)

## (2) 柵

### 1号柵 (図版95-2、第191図)

15号掘立柱建物の0.5m北側に配される。東西方向に列をなし、5間分を確認した。また、東側は16号掘立柱建物と重複する。柱穴は径0.3m、残高0.3mで、柱間平均は2.06mを測る。柱穴内からは土師器小片が出土した程度。

## (3) 壁 穴

### 1号壁 穴 (第195図)

当初、91号壁穴住居としていたもので、中世建物群中に位置する。北壁部分の調査で、大半が調査区外にある。北壁長5.15mで、西壁は1.25m分の検出。東壁側には幅0.78mのテラスを有する。北壁側には径35cm、深さ12cmほどのピットがあり、或いは柱穴になるか。

#### 出土遺物 (第196図)

**土 器 (1~5)** 1~4は土師器、5は白磁。1は皿で、底径は10.8cmに復原した。2は小皿の小片。1・2とも底部は糸切りによる。3・4は椀の高台部小片。5は玉縁口縁の白磁碗で、復原口径16.0cmを測る。

### 2号壁 穴 (図版96-1、第195図)

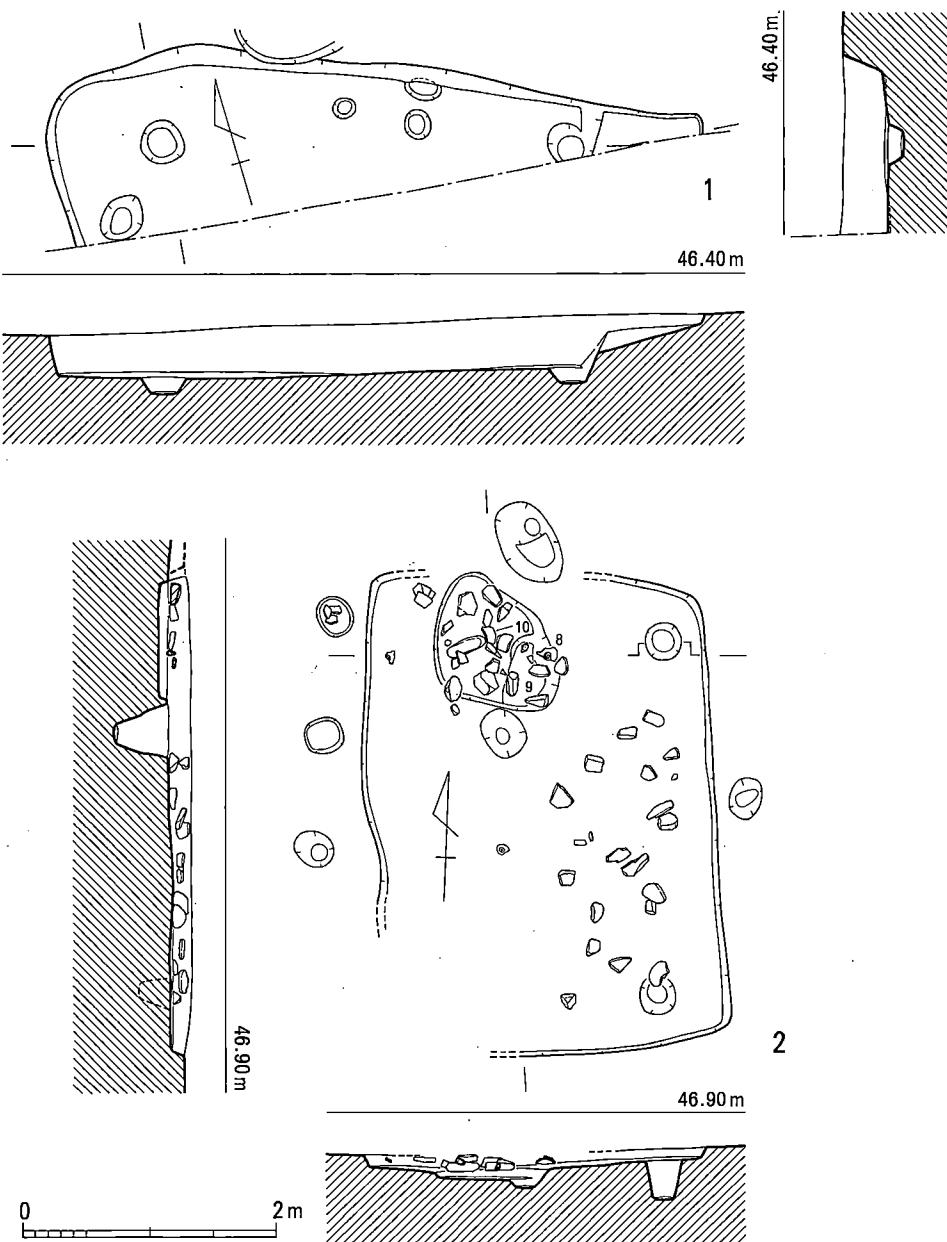
当壁穴も93号壁穴住居として調査したものである。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長2.56m、東壁長3.35m、壁高は西壁側で0.1mの遺存状況である。東壁際には径30cm、深さ30~40cmのピットがあり、上部構造に関わるものであろうか。北壁際には礫が入った土坑があり、焼土・炭が入っていた。また、床面には礫・土器が散在していた。

#### 出土遺物 (第196図)

**土 器 (1~10)** 1~5は土師器、6は瓦質土器、7~10は青磁。1~3は糸切り小皿で、1は口縁部を欠く。外底面には板目圧痕がみられる。2の口唇部はシャープで、復原口径9.8cm。4・5は壊。6は瓦質の鉢で、内面にハケ目を施すことから摺鉢になろう。7は皿で、復原口径10.8cm。8は龍泉窯系青磁碗で、内面に片彫りの蓮華文を有する。器高6.8cm、口径15.9cm、高台径6.1cm。32号土坑出土品と接合した。9・10も龍泉窯系青磁碗で、9の連弁は鎬を有するが、10は鎬がないもの。また、10の見込みには線状の工具痕が放射状につく。

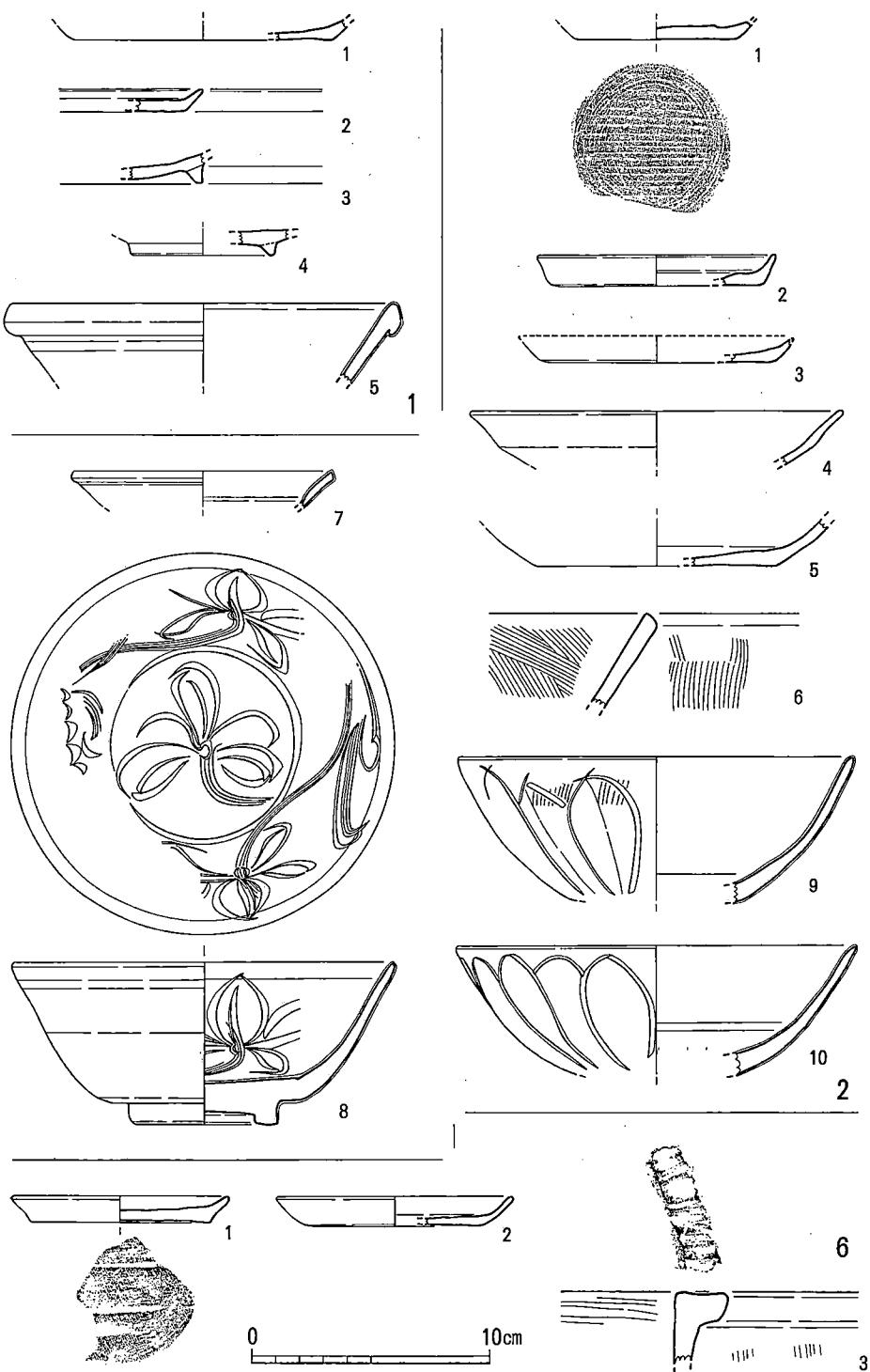
### 4号壁 穴 (図版96、第197図)

調査段階では23号土坑としていたもので、21号土坑と2号壁穴の中間に位置する。平面形は



第 195 図 1・2号竪穴実測図 (1/60)

不整方形を呈し、長軸3.28m、短軸3.10mで、壁高は東壁側で14cmを測る程度である。北壁側には径40cm、深さ25cmほどのピットがあり、上部構造に関わる柱穴であろう。埋土中からは土器・石鍋が出土している。



第 196 図 1・2・6号竪穴出土土器実測図 (1/3)

#### 出土遺物（図版107-1・110-1、第198・228図）

**土 器** (1~18) 1~10は土師器、11~17は瓦器、18は白磁。1~6は小皿で、底部切離しは糸切り。1~3は器高1.5~1.8cm、口径8.7~9.2cm、底径6.4~7.0cm。4・6の口縁部には油煙が付着し、灯火器として使用している。7~10は壺で、器高は7が3.6cmで、8は3.3cmで、口径は7が15.4cm、8は15.6cmを測る。何れも外底面には板目圧痕を留める。11~13は器形的には瓦器であるが、焼成が悪く土師器に近い。11の口縁部は外方に小さく屈曲し、その内面には煤が付着している。14~17は椀で、壺部は深め。高台も高く確りしている。口縁部ヨコナデ、外面回転籠ケズリで、内面は雑なミガキによる。18は碗で、体部は直線的に伸びる。見込みに段を有し、段の内側の釉を輪状に搔き取っている。器高6.2cm、口径15.5cm、高台径6.8cmを測る。

**石 器** (1) 1は砥石で、上・下面には自然面を残し、両側面を砥面としている。残存長6.2cm、幅3.9cm、厚さ1.6cmで、石材は緑簾片岩。

#### 5号堅 穴（図版99-4、第197図）

1号堅穴の3m東側に位置する。調査段階では22号土坑として一連の遺構としていたが、切合い関係を有することから報告段階で別遺構にした。東壁付近が遺存する程度で、壁高は8cmと削平が著しい。また、出土遺物は22号土坑の方に掲載している。

#### 6号堅 穴（第197図）

中世建物群中に位置し、32号土坑の直ぐ北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.06m、短軸2.32mで、壁高は東壁側で7cmと削平が著しい。堅穴内部には数多くのピットがあるが、関連するものは不明。

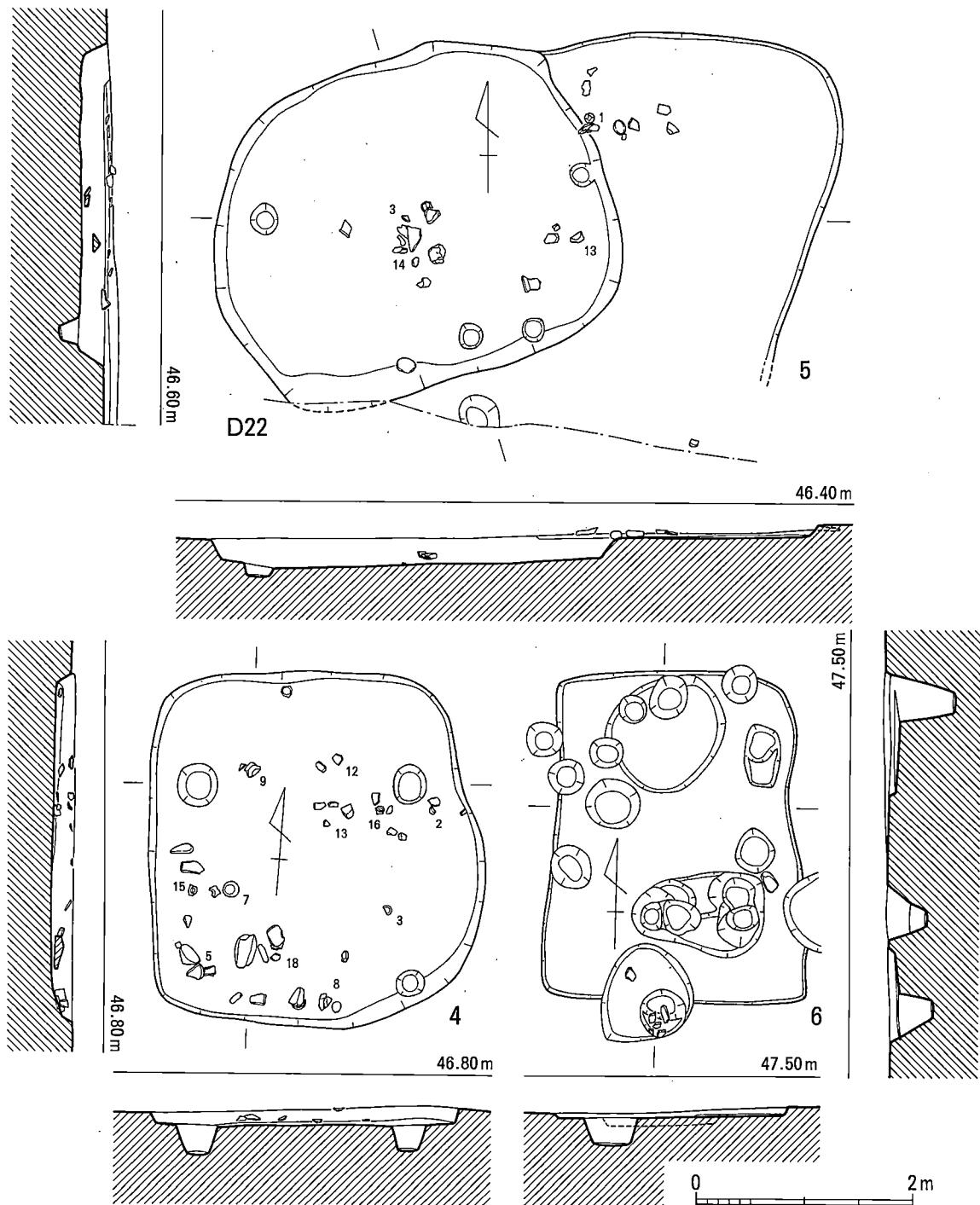
#### 出土遺物（第196図）

**土 器** (1~3) 1・2は土師器小皿で、口縁部はシャープである。3は土師質の「L」字形口縁鍋で、口縁部平坦面には工具による連続押圧痕がみられる。

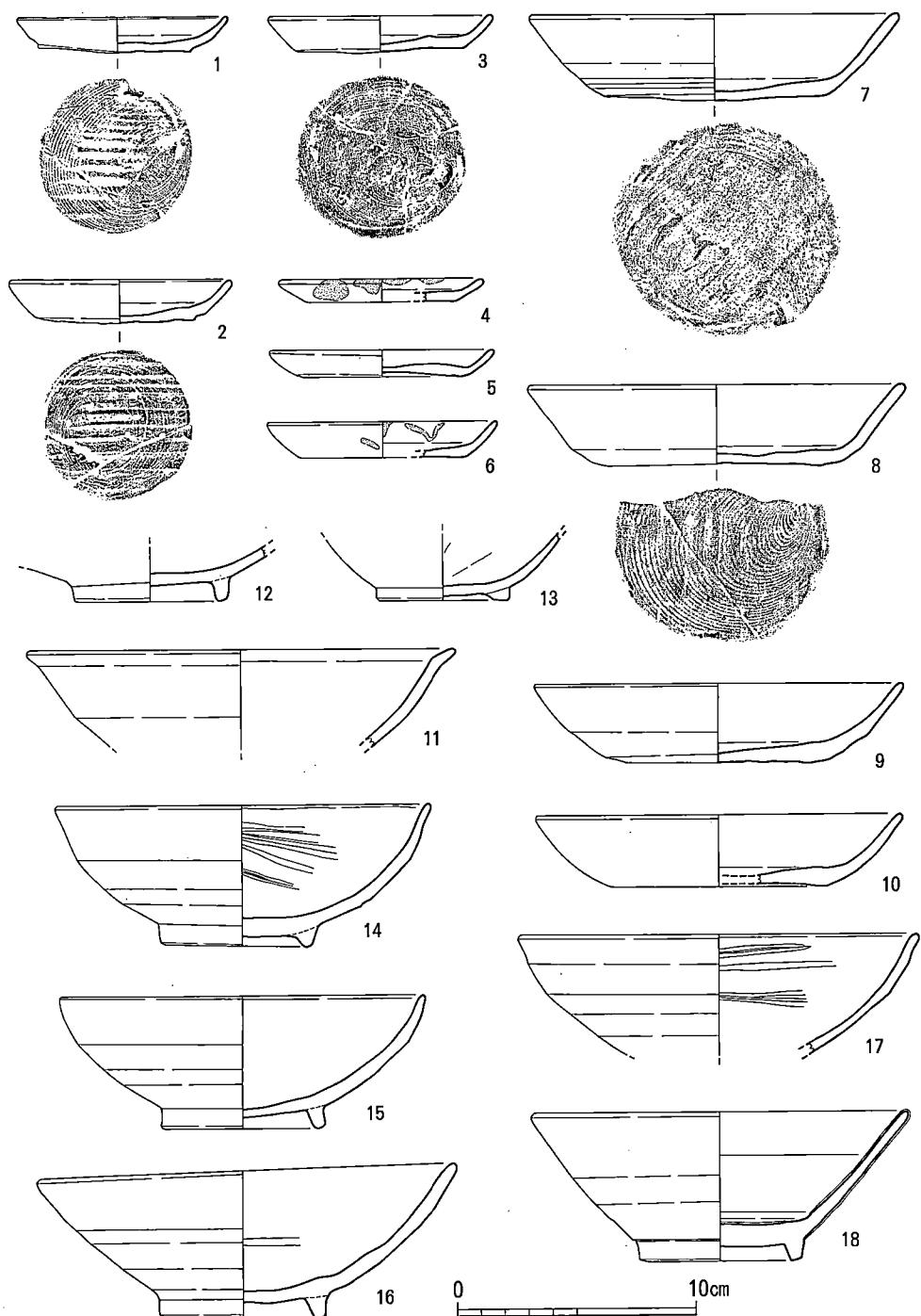
### (4) 土 坑

#### 4号土 坑（図版97、第199図）

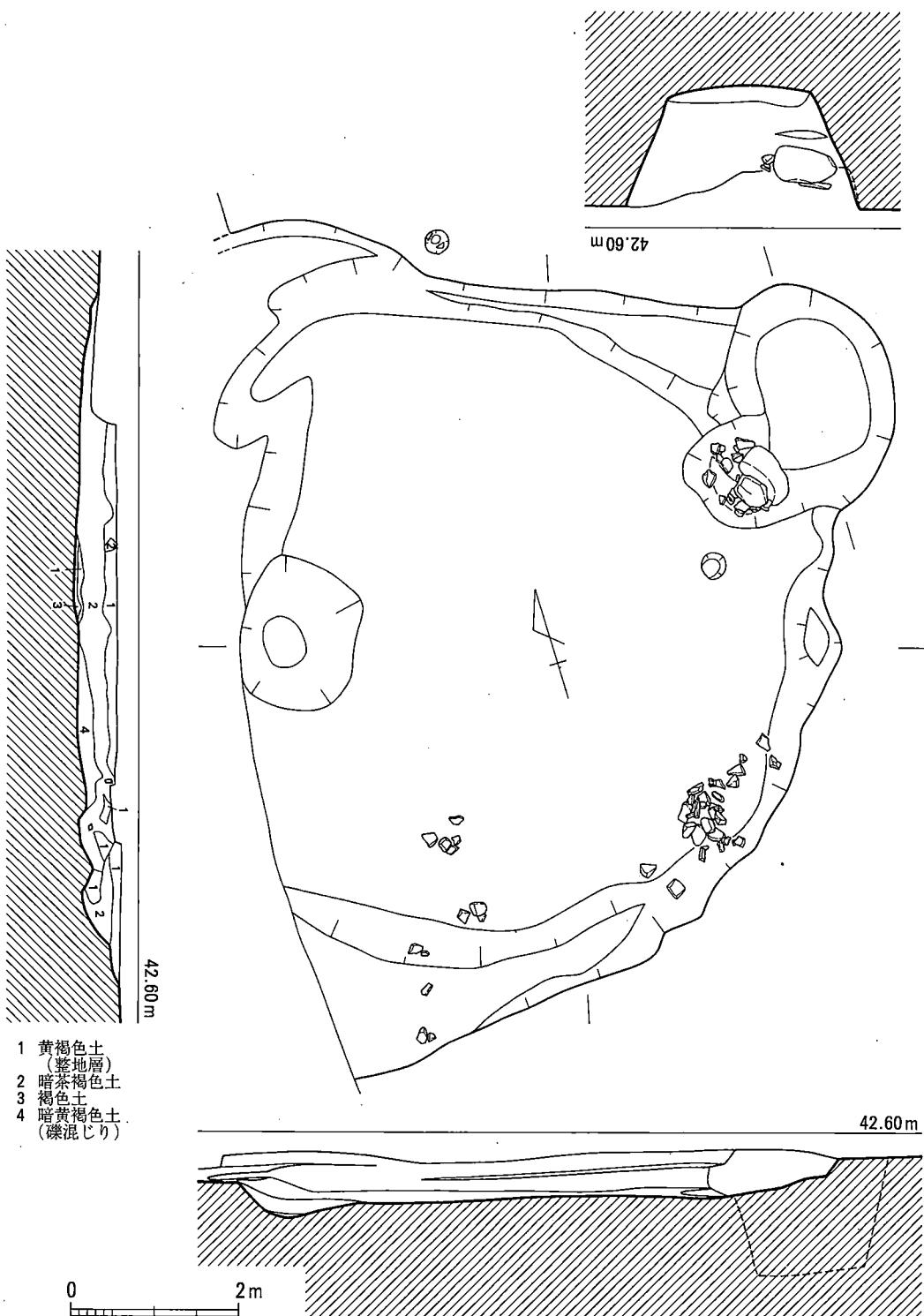
調査区西側で、2号溝と5号溝の中間に位置する。平面形は円形を呈し、南北径は8.6m、東西径は新期の溝に切られるため7m程度。埋土は暗茶褐色粘質土を主体とし、上部は黄褐色土で埋めていた。南東壁際には集石があり、石臼が出土している。また、北東壁側には長軸2.80m、短軸1.90m、深さ1.5mの橢円形の土坑がある。この土坑は南西隅にテラスを有し、水溜の施設になるか。テラス部分から礫が出土している。



第 197 図 4~6号竪穴、22号土坑実測図 (1/60)



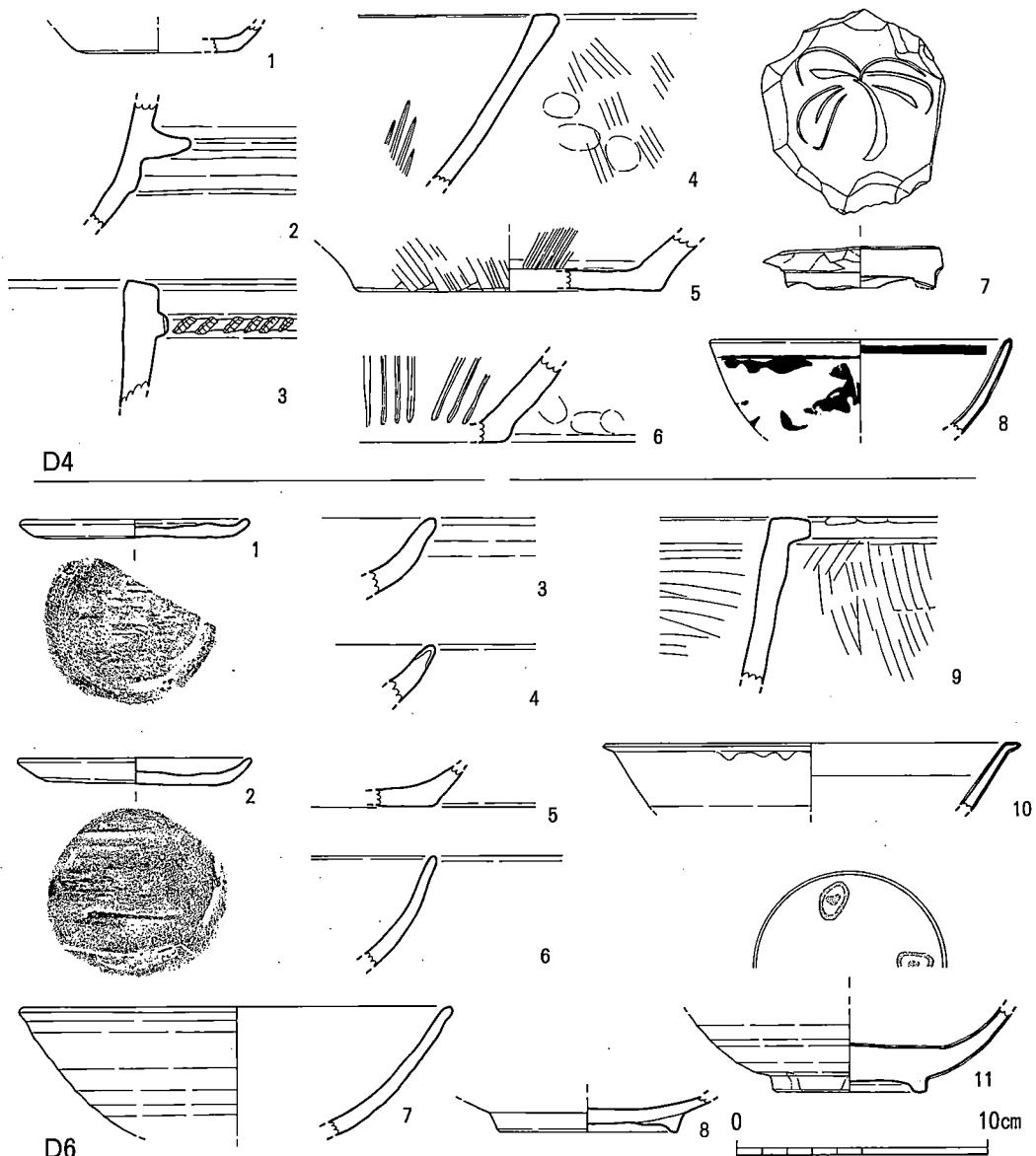
第 198 図 4号竪穴出土土器実測図 (1/3)



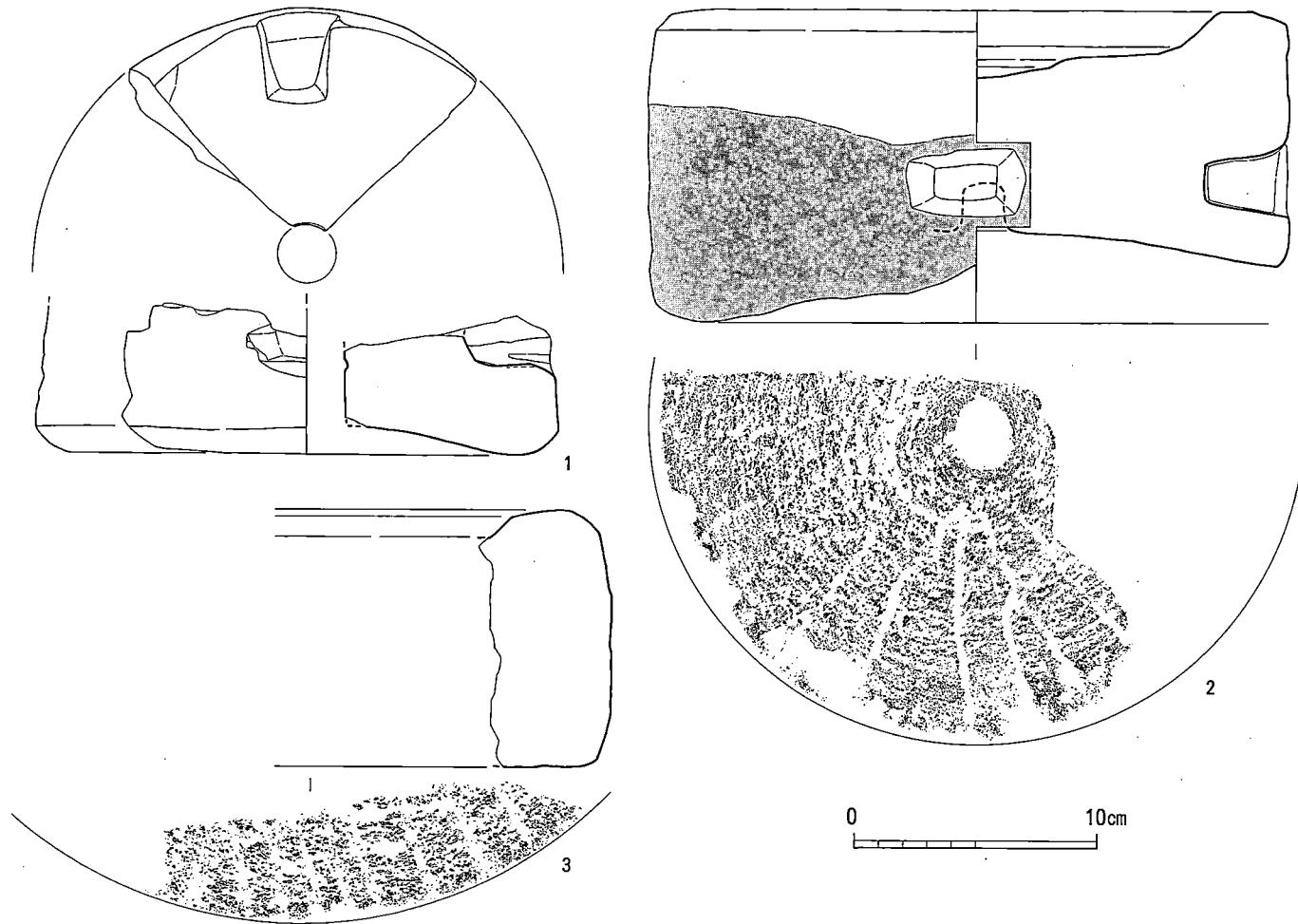
第 199 図 4号土坑実測図 (1/80)

出土遺物（図版110-2、第200・201・228図）

**土 器** (1~8) 1は土師器、2・3は瓦質土器、4・5は須恵質土器、6は土師質土器、7は青磁、8は染付。1は小皿の底部破片。2は羽釜の鍔部分で、鍔の下位はケズリを施す。3は火鉢の口縁部小片で、口縁部の直下に断面蒲鉾型の凸帯を貼付し、キザミ目を施す。4~6は摺鉢で、4の口縁部上面は水平で、片口になるようだ。5・6は底部破片で、5の櫛目は5本、6の櫛目は4



第 200 図 4・6号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 201 図 4号土坑出土石臼実測図 (1/3)

本を単位とする。7は龍泉窯系青磁碗の高台部破片で、周囲は打ち欠いている。見込みには花文を施す。8は碗で、復原口径11.9cm。外面には雲流文を描く。

**石 器 (2・3)** 2は緑簾片岩の砥石で、上面のみを砥面としている。一部欠損するが、長さ12.4cm、幅6.8cm、厚さ3.1cm、重さ472.4gを測る。3は粘版岩製の砥石で、上面のみを砥面としている。残存長13.6cm、幅8.2cm、厚さ2.1cmを測る。

**石製品 (1~3)** 1~3は石臼。1は復原径21.6cmと小型のもので、摺面はよくすり減っている。石材は凝灰岩である。2は高さ13.0cm、復原径27.0cmで、摺面の溝が無くなるほどまでに使用している。また、下半部が焼けて黒変している。材質は安山岩。3は高さ10.7cmで、径は3.5cm程になろう。材質は安山岩で、よく使い込まれている。

#### 5号土 坑 (図版98-1、第202図)

調査区の西側で、4号土坑の15m東側に位置し、新期の3号溝に中央部を切られる。埋土は暗茶褐色土・暗黄褐色土が流れ込みの状況で堆積しており、遺物の出土は無かったが、埋土の感じから中世とした。平面形は不整形を呈し、長軸2.83m、短軸2.65m、残高0.78mを測る。

#### 6号土 坑 (図版98-2、第202図)

5号土坑の8.5m北側に位置する。北壁は丘陵の縁にあたるため喪失する。東西長4.12mで、残高1.10mを測る。底面はほぼ水平で、埋土中から土器・石鍋片が出土している。

#### 出土遺物 (図版107-2・110-2、第200・230図)

**土 器 (1~11)** 1~5は土師器、6~8は瓦器、9は土師質土器、10は白磁、11は青磁。1・2は小皿で、1は口縁部が殆ど立ち上がらず低平なもの。3・4は肉厚の口縁部小片で、5は底部破片。6~8は椀で、口唇部を丸く収める。8は底部破片で、低めの高台を貼付する。9は土師質の鍋で、口縁部は「L」字形に屈曲する。口縁部上面には指頭圧痕がみられる。10は碗で、口縁部は水平に突出する。11は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、高台は低め。見込みには重ね焼きの砂目が2ヶ所遺存している。

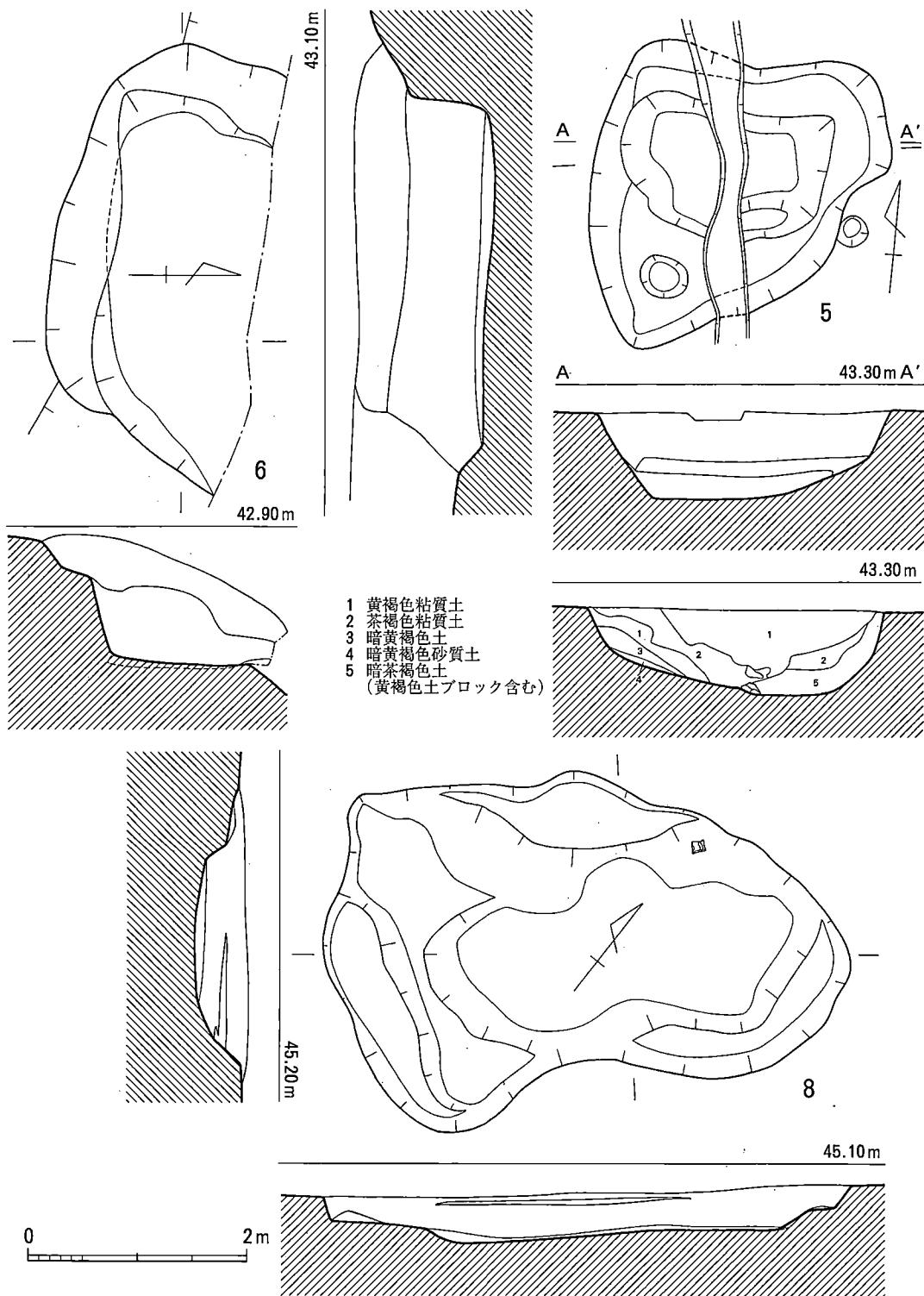
**石製品 (1)** 1は石鍋の破片で、縦型の鎧を持つ。外面は鑿状工具による整形痕が、内面には線状の擦過痕がみられる。また、外面には煤が付着している。復原口径は21.0cm。

#### 7号土 坑 (第204図)

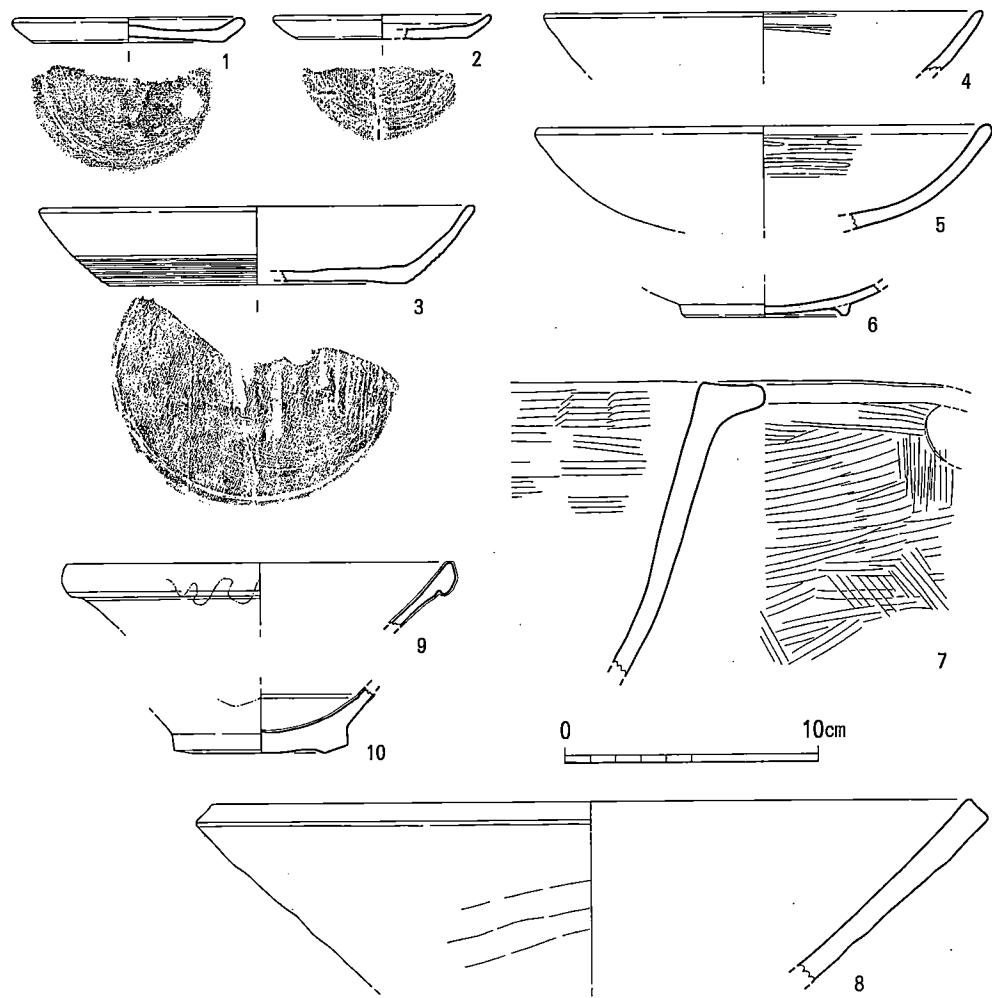
弥生時代の8号溝の北側上面に位置する。溝状を呈し、長軸5.82m、短軸1.34m、残高0.45mを測り、中央が深くなっている。土器の他に鉄滓が出土している。

#### 出土遺物 (図版107-2、第203図)

**土 器 (1~10)** 1~3は土師器、4~6は瓦器、7は土師質土器、8は瓦質土器、9・10は白磁。



第 202 図 5・6・8号土坑実測図 (1/60)

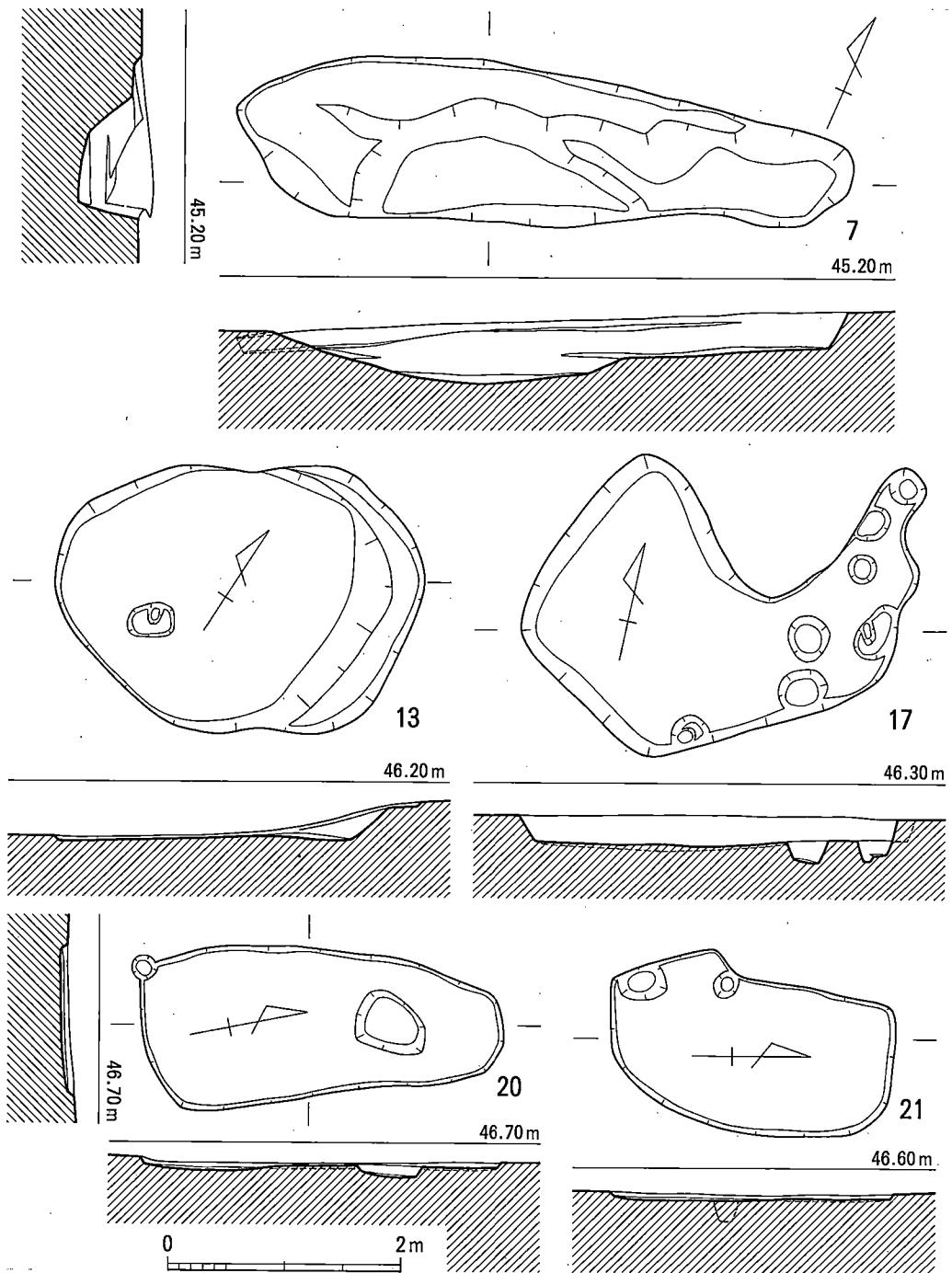


第 203 図 7号土坑出土土器実測図 (1/3)

1・2は小皿で、1は器高0.8cm、口径8.8cm、底径7.4cm。3は壊で、底部付近の外体部にはカンナ状工具による回転ケズリを施す。4~6は椀で、5の口縁部は肥厚する。壊部は浅めの器形。6は底部破片で、低く細目の高台を貼付する。8号土坑出土品と接合関係にある。7は口縁～体部にかけての破片。口縁部は「L」字形に屈曲し、片口を有する。外面に煤が付着しており、鍋になるか。8は瓦質のこね鉢で、口径は29.8cmに復原した。9は玉縁口縁の碗で、玉縁は大きめ。10は底部破片であるが、高台のケズリ出しが弱く、平底状をなす。高台径6.8cm。

#### 8号土 坑 (図版98-3、第202図)

弥生時代の8号溝の上部に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸4.82m、短軸2.67m、



第 204 図 7・13・17・20・21号土坑実測図 (1/60)

残高3.8mを測る。壁面の四周にテラスが付き、底面は中央がやや窪む。土器の他に石鍋の細片が出土している。

#### 出土遺物（図版107-2、第206図）

**土 器（1～7）** 1～3は瓦器、4・5は土師質土器、6は白磁、7は青磁。1は丸底の皿で、器高1.8cm、復原口径9.2cm。外底部はケズリによる。口縁部には油煙が付着しており、灯火器として使用したもの。2・3は椀で、低めの高台を貼付する。4は摺鉢で、器高11.2cm、口径27.8cm、底径11.8cm。内面のハケ目は7条/cm。5は鍋の口縁部片で、外方に屈曲する。6は皿で、口唇部はシャープである。7は碗の口縁部破片で、内外面に鏽なしの蓮弁を施す。

#### 9号土坑（図版98-4、第205図）

8号土坑の1m南側に位置する。平面形は扁円形を呈し、長軸1.67m、短軸1.4m、残高0.22mを測る。底面は水平である。

#### 出土遺物（図版107-2・110-1、第206図）

**土 器（1～3）** 1は土師器小皿で、器高0.8cm、口径8.5cm、底径6.2cmで、焼け歪みが著しい。2・3は瓦器椀で、2の口唇部は丸く收める。3は底部破片で、高台は低め。

#### 11号土坑（第205図）

弥生時代の4号通路の南半部に位置し、96号竪穴住居を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.83m、短軸1.44m、残高0.15mを測る。底面にピットが2個あるが、関連するものかは不明。埋土中から土器が出土している。

#### 出土遺物（第206図）

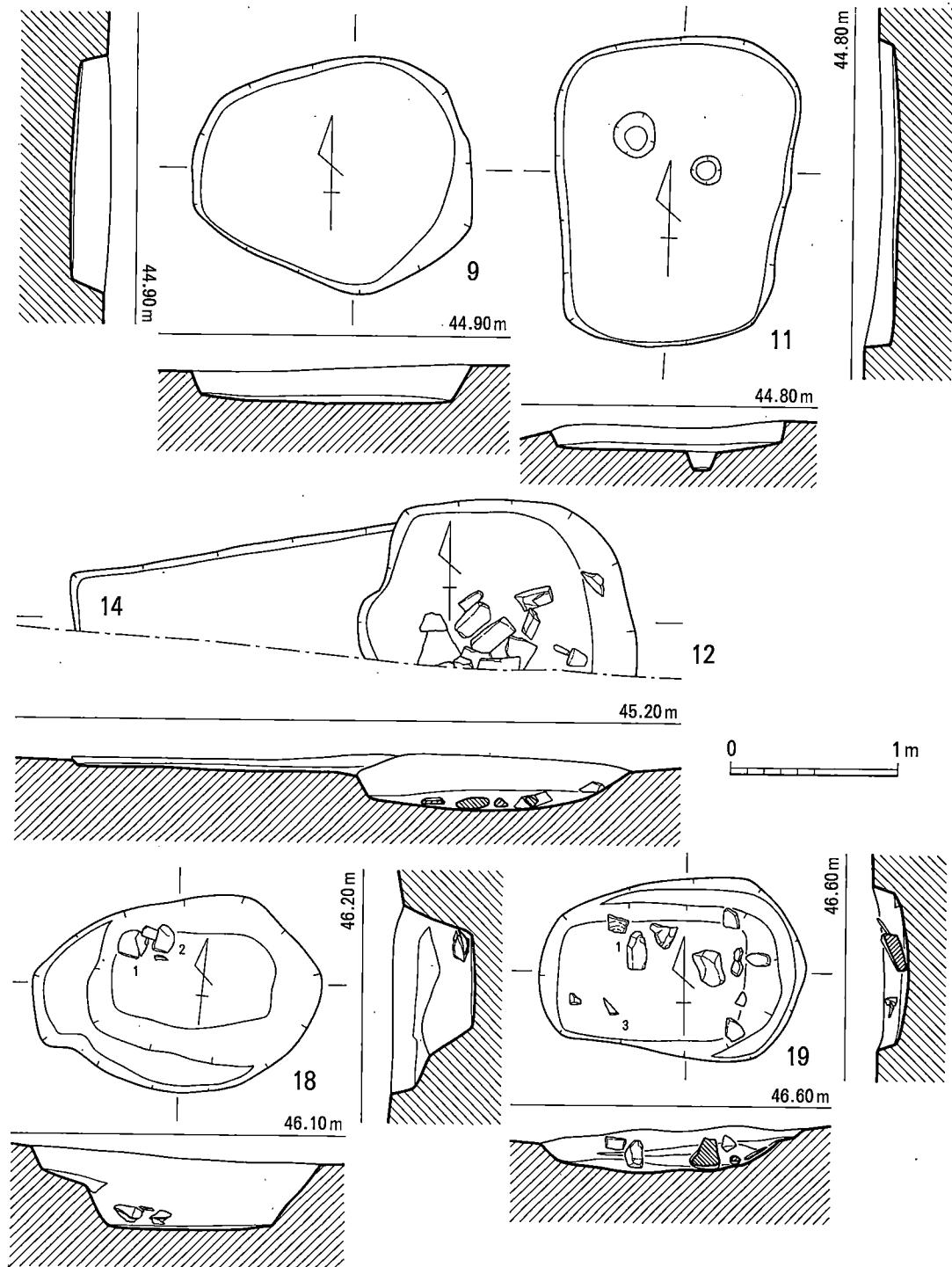
**土 器（1・2）** 1は土師器皿で、復原口径16.0cm。2は瓦器椀の底部破片。高台は高め。

#### 12号土坑（図版99-1、第205図）

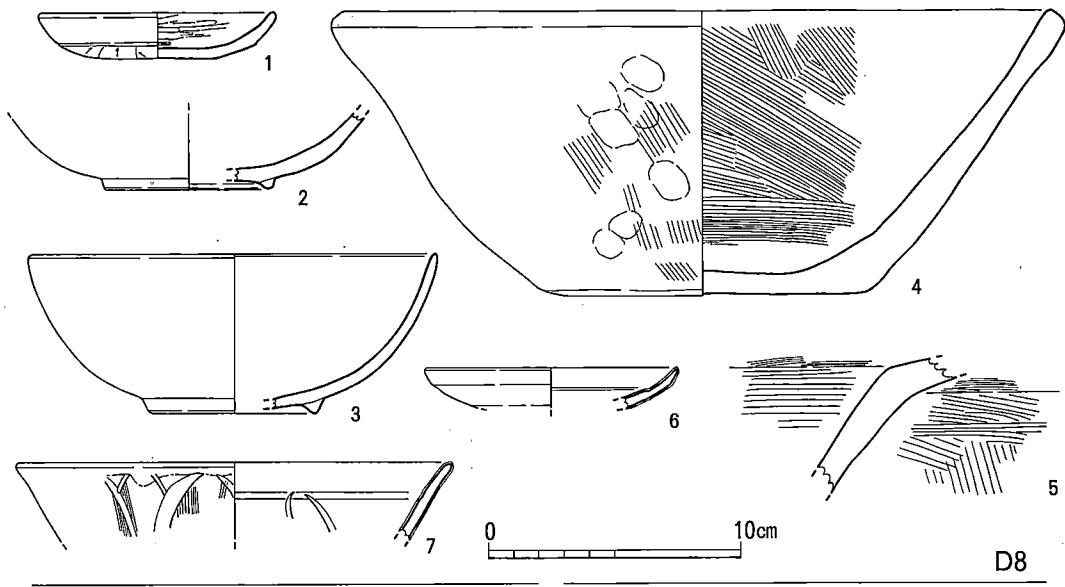
弥生時代の8号溝の南端部に位置し、同溝と中世の14号土坑を切っている。北半部の調査であるが、平面形は円形を呈するか。東西幅1.66mで、南北長は1mほどの検出。底面には焼けて黒くなった礫が13点ほど密着している。

#### 出土遺物（図版107-2、第206図）

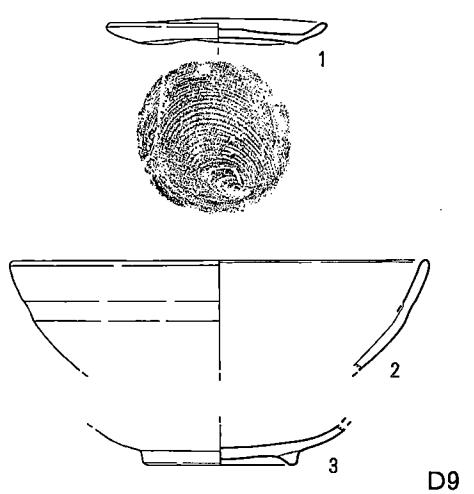
**土 器（1～3）** 1は土師器皿で、内面には油煙が付着しており、灯火器として使用したもの。2は瓦器で、肉厚のもの。口縁部は三角形に尖る。3は青磁の合子片。立ち上がりは短く内傾する。また、受け部を打ち欠く。復原口径7.6cm。



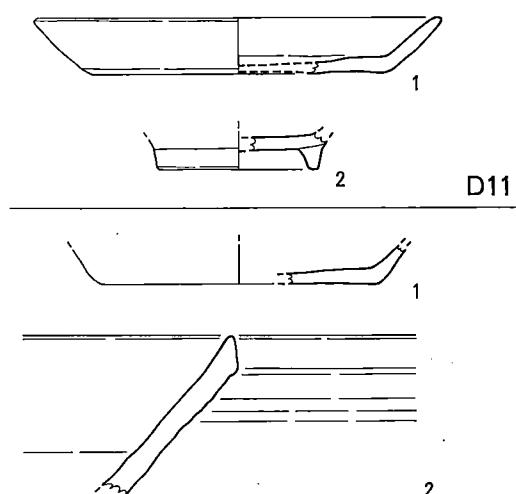
第 205 図 9・11・12・14・18・19号土坑実測図 (1/40)



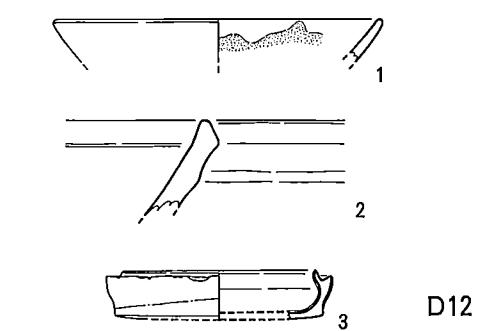
D8



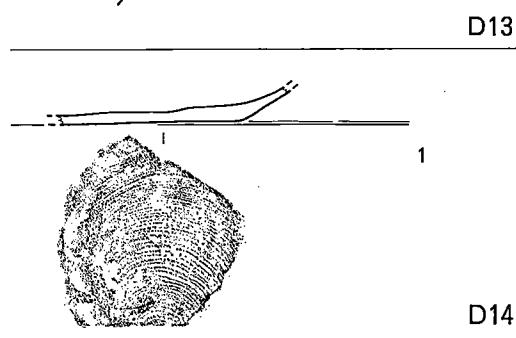
D9



D11



D12



D13



D14

第 206 図 8・9・11~14号土坑出土土器実測図 (1/3)

### 13号土 坑（第204図）

15号掘立柱建物の2m南西に位置する。平面形は扁円形呈し、長径3.12m、短軸2.24m、残高0.3mを測る。東壁側には幅20cmのテラスが付く。底面はほぼ水平である。

#### 出土遺物（第206図）

**土 器（1・2）** 1は土師器皿で、底部は糸切りによる。2は須恵質のこね鉢で、口縁部は三角形に尖る。

### 14号土 坑（第205図）

8号溝の南端部に位置する。東壁を12号土坑に切られるため北壁は2mの遺存状況である。壁高は4cmと浅く、大半が調査区外にあるため詳細は不明。

#### 出土遺物（図版109-6、第206・229図）

**土 器（1）** 1は土師器皿で、糸切りによる。口縁部を欠くが、シャープなもの。

**土製品（16）** 16は土師器片利用の土版で、3.7×3.8cmの大きさ。重さは11.9gを測る。側縁は打欠きのまま。

### 17号土 坑（第204図）

1号豊穴の1m北東に位置する。平面形は「U」字形を呈し、長軸3.43m、短軸2.56m、残高0.29mを測る。底面は西側にやや傾斜している。埋土中から瓦器碗の小片が出土しているが、図示に耐えない。

### 18号土 坑（図版99-2、第205図）

12号土坑の2.5m北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.73m、短軸1.25m、残高0.43mを測る。西壁から南壁にかけてテラスを有する。底面は水平で、やや浮いた状態で瓦器碗が2点出土した。或は土壙墓になるか。

#### 出土遺物（図版107-2・108、第207図）

**土 器（1・2）** 1・2は瓦器碗で、口縁部は若干外方に屈曲している。器高は1が6.0cm、2は5.9cm、口径は1が16.6cm、2は17.3cm、高台径は1が7.0cm、2は6.8cmを測る。2の底部は焼成後に外側から穿孔されている。また、体部外面には「十」字のヘラ記号を付している。

### 19号土 坑（図版99-3、第205図）

中世建物群中で、12号掘立柱建物の8.5m南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.60m、短軸1.10m、残高0.23mを測る。北壁から南壁にかけて幅10cmのテラスを有する。底面は中央がやや窪み、礫が入っていた。

### 出土遺物（第207図）

**土 器（1～3）** 1は須恵質のこね鉢で、内底部はよく摺れている。外面は糸切りによる。底径は12.2cmに復原した。2は白磁小碗で、復原口径12.8cm。内面には櫛目文が描かれる。3は玉縁口縁の白磁碗で、玉縁部は肥厚する。

### 20号土 坑（第204図）

19号土坑の0.5m南側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.07m、短軸1.40m、残高0.22mを測る。底面はほぼ水平で、若干の土器が出土している。

### 出土遺物（第207図）

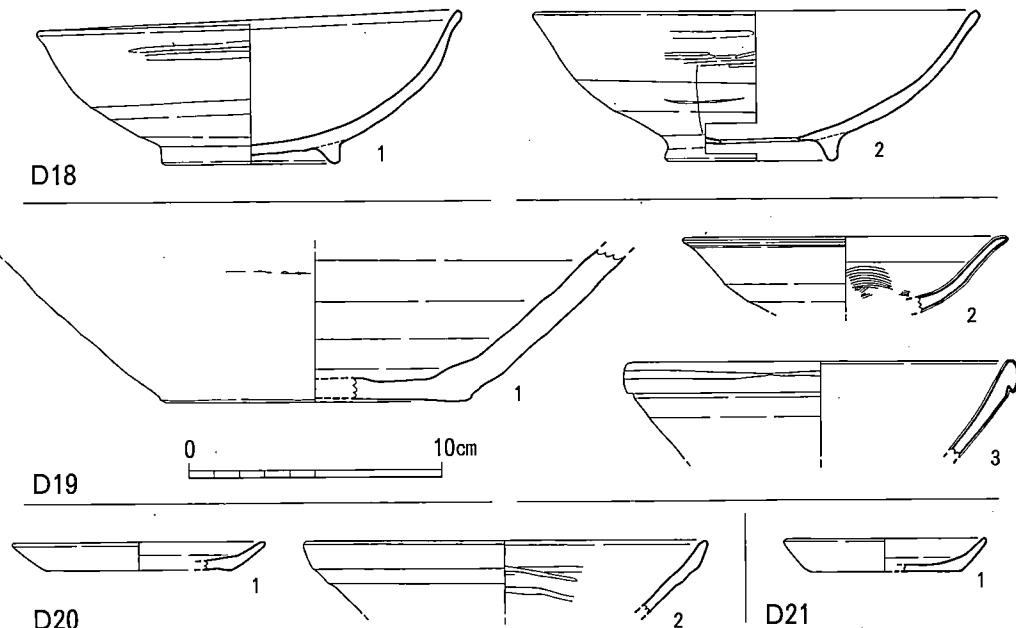
**土 器（1・2）** 1は土師器小皿片。2は瓦器椀の口縁部破片。復原は口径15.8cm。

### 21号土 坑（第204図）

4号竪穴の直ぐ西隣に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.42m、短軸1.29mで、残高は4cmと削平が著しい。

### 出土遺物（第207図）

**土 器（1）** 1は土師器小皿。底部は糸切りで、板目圧痕を有する。



第 207 図 18～21号土坑出土土器実測図 (1/3)

## 22号土 坑（図版99-4、第197図）

1号竪穴の2m東側に位置し、5号建物を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.68m、短軸3.02m、残高0.24mを測る。底面は水平で、多くの土器が出土しているが、浮いた状態である。また、石鍋・鉄滓も出土している。

### 出土遺物（図版110-2・3、第208・230図）

**土 器**（1～21） 1～13は土師器、14・15は瓦器、16・17は須恵質土器、18～21は白磁。1～9は小皿で、器高0.9～1.2cm、口径7.6～8.6cm、底径5.5～6.7cmを測る。4・5の口縁部はシャープである。10～13は壺で、底部付近の外体部にはカンナ状工具による回転ケズリを施す。14・15は瓦器椀で、14の体部は丸みを帯びる。15の高台は低く、断面形は三角を呈する。16・17は須恵質のこね鉢で、16が口縁部、17は底部の破片。17の底部は内外面ともよく摺れている。18は白磁皿で、内面には花文を施している。外底部は高台状に削り出している。19～21は碗で、19の口縁部は玉縁。20は口唇部が外側に突き出るもの。21は底部破片で、高台は細く高め。内面には櫛目文を施している。高台径は6.2cm。

**石製品**（2・3） 2は羽釜形の石鍋。3は羽釜形石鍋の転用品で、三角形状をなす。長さ12.5cm、幅4.0cm、厚さ1.4cm、重さ141.1g。上部には懸垂用の円孔を穿つ。

## 24号土 坑（図版100-1、第209図）

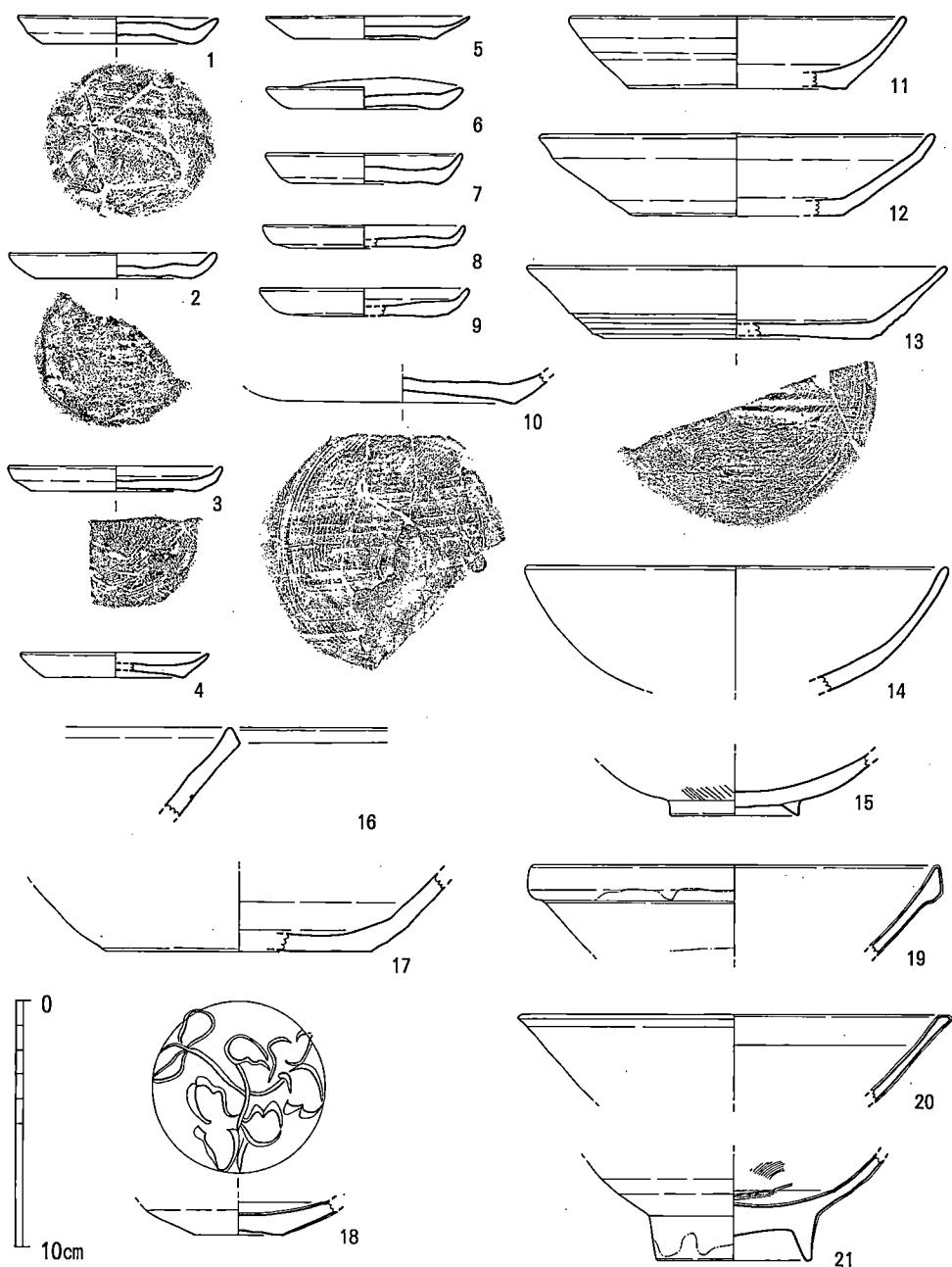
中世建物群中で、17号土墳墓の5m東側に位置する。平面形は長円形を呈し、長軸3.46m、短軸1.62mを測る。残高は8cmと削平が著しいが、礫に混じって多くの土器が出土した。

### 出土遺物（図版108、第210図）

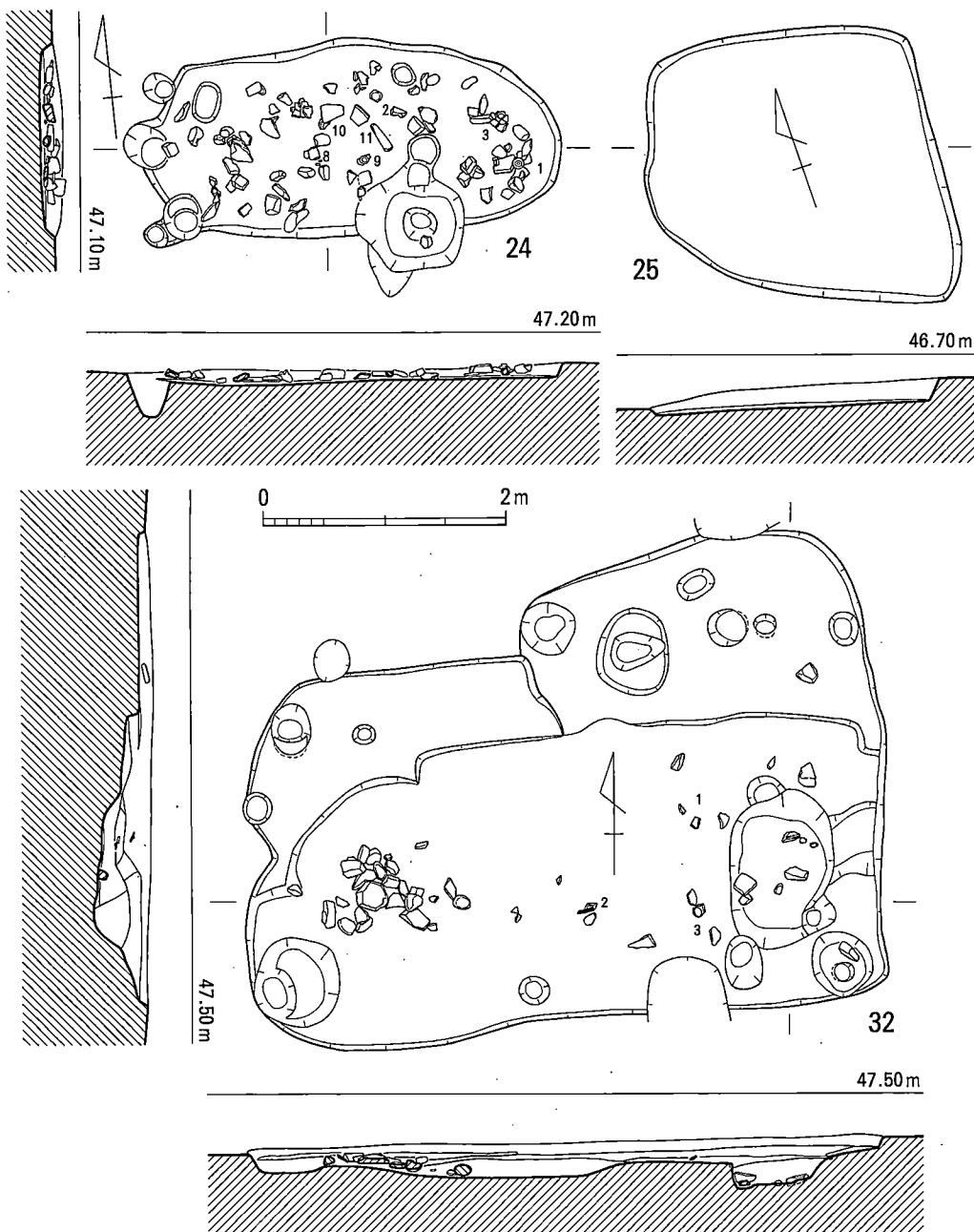
**土 器**（1～13） 1～5は土師器、6～10は瓦器、11は土師質土器、12・13は白磁。1～4は小皿で、1～3は器高1.3～1.8cm、口径9.2～9.5cm、底径6.7～7.0cm。1の内面には油煙が付着しており、灯火器として使用したもの。4は前者より口径は大きいが、低平なもの。5は口縁部を欠く。6～10は椀で、6・7の口縁部は丸く肥厚する。器高6が5.8cm、7は6.3cmで、口径は6が15.4cm、7は16.0cm。細身の低い高台を貼付する。内底面には重ね焼きによる黒変部がみられる。また、7の体部外面には「×」のヘラ記号を付している。11は土師質の鍋で、口縁部は水平に屈曲する。内外面には指頭による圧痕が著しい。12・13は白磁碗で、口唇部は12がそのまま開くのに対し、13は小さく突出する。12の高台は細身で高い。器高は12が6.5cm、13は7.2cmで、口径は12が17.2cm、13は13.0cm、高台径は12が5.8cm、13は6.3cmを測る。

## 25号土 坑（第209図）

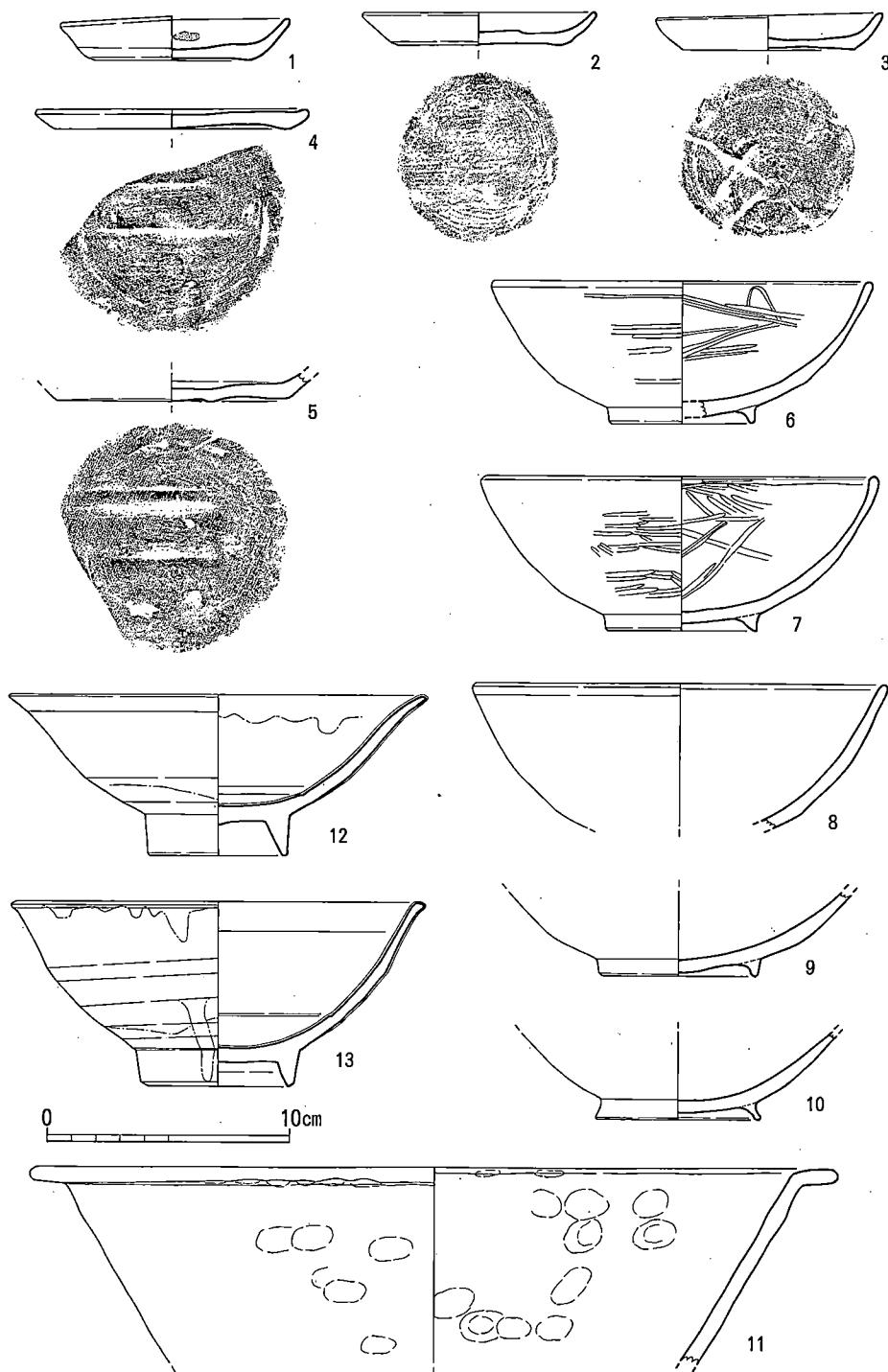
12号掘立柱建物の南側で、同建物と接して位置する。平面形は不整方形を呈し、長軸2.39m、短軸2.30m、残高0.18mを測る。埋土中から鉄器が出土しているが、紛失してしまった。



第 208 図 22号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 209 図 24・25・32号土坑実測図 (1/60)



第 210 図 24号土坑出土土器実測図 (1/3)

## 26号土 坑（図版100-2、第211図）

24号土坑の1.5m東側に位置し、27号土坑を切っている。平面形は長円形を呈し、長軸2.55m、短軸1.36m、残高0.17mを測る。浮いた状態で、土器・礫・石鍋片が出土している。

### 出土遺物（図版108、第212図）

**土 器（1～8）** 1～3は瓦器椀で、1は器高7.8cm、口径15.8cm、高台径5.8cm。体部は深めで、丸みを帯びる。3の高台は幅広で低め。4～6は土師質土器で、4・5は鍋。5の口縁部平坦面には連続して工具を押圧している。6は摺鉢で、内面はよく摺れている。器高9.9cm、復原口径30.0cm、底径12.5cm。7は完形の龍泉窯系青磁皿で、内面には櫛目による文様を施している。器高2.1cm、口径9.6cm、底径3.5cmを測る。8は龍泉窯系青磁碗で、内面には片彫りの飛雲文を施している。高台は太めで低い。器高6.5cm、口径16.2cm、高台径6.0cm。

## 27号土 坑（図版100-2、第211図）

24号土坑の2m東側に位置し、26号土坑に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.50m、短軸1.40m、残高0.19mを測る。

### 出土遺物（第212図）

**土 器（1～3）** 1は土師器小皿。2は瓦器椀の高台部破片。3は土師質の鍋で、口縁部は「L」字形を呈する。また、口縁部上面には工具による押圧がみられる。

## 28号土 坑（図版100-3、第211図）

21号掘立柱建物の2m東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.82m、短軸1.34m、残高0.30mを測る。底面は水平で、浮いた状態で土器・石器などが出土している。

### 出土遺物（図版109-3・110-1、第214・228・229図）

**土 器（1・2）** 1・2は土師器壺で、底部切離しは1が糸切りで、2はヘラ切りによる。2は前時代の遺物が混入したものであろう。

**石 器（4）** 4は砥石の破片で、残存長7.1cm、幅5.3cm、厚さ4.7cmを測る。砂岩製。

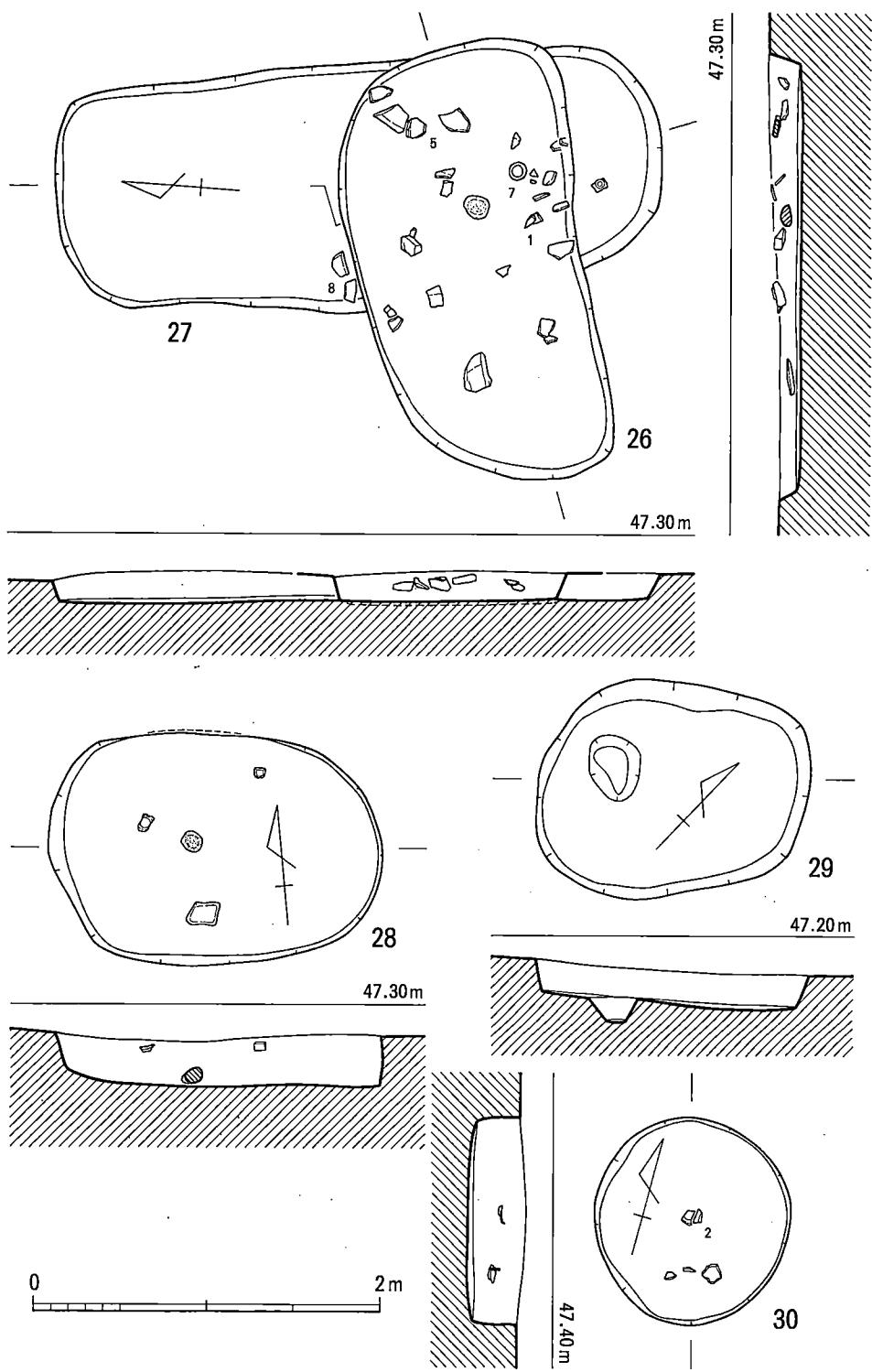
**鉄 器（4）** 4は断面長方形の棒状品で、基部は生きており、先端部が蒲鉾形に細くなるところから鉈になろう。長さ5.6cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm、重さ7.1gを測る。

## 29号土 坑（第211図）

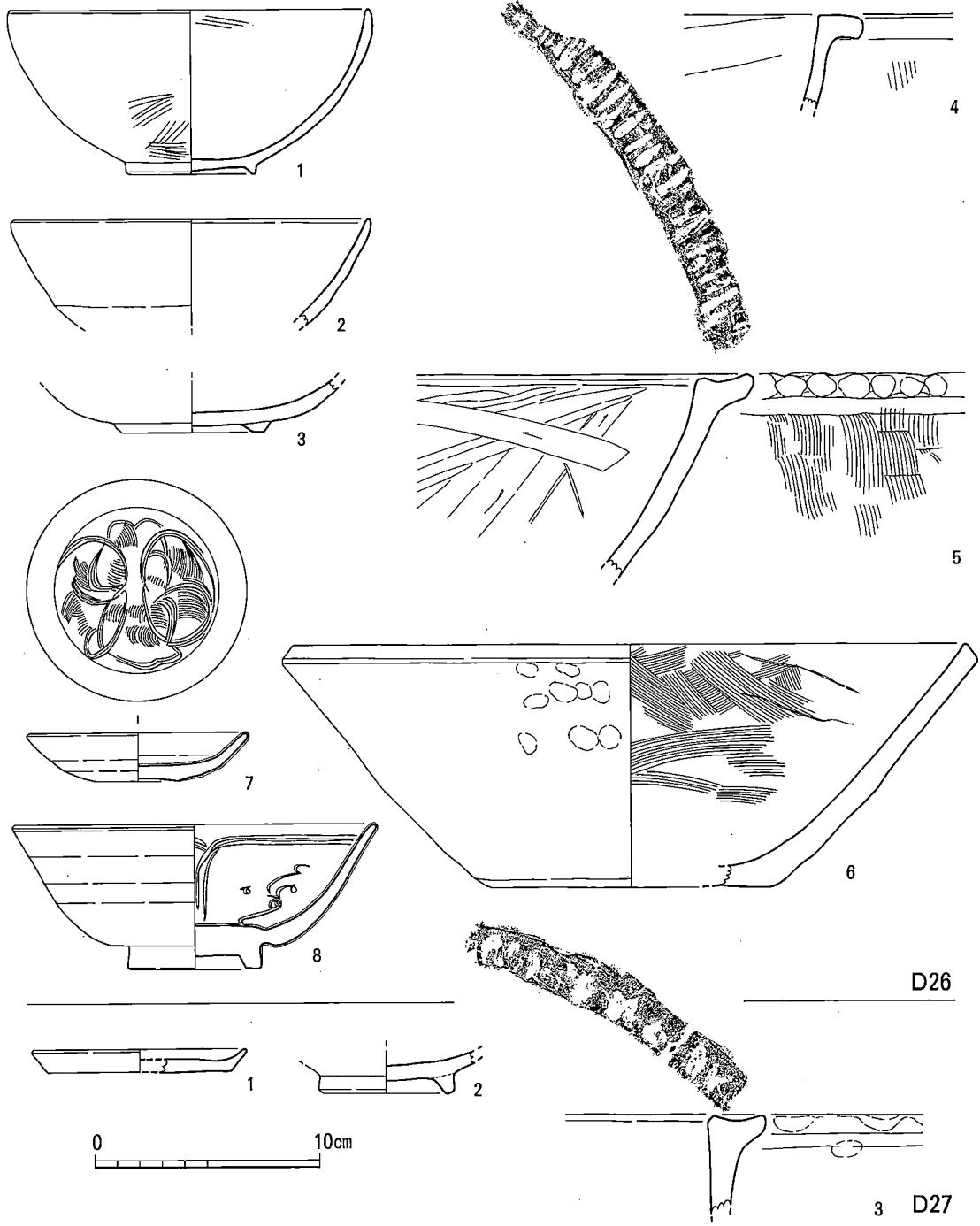
28号土坑の0.5m北西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.56m、短軸1.25m、残高0.20mを測る。底面は東側に傾斜している。

### 出土遺物（図版108、第214図）

**土 器（1）** 1は土師器小皿で、口縁部は内湾して立ち上がる。底部は糸切り。



第 211 図 26~30号土坑実測図 (1/40)



第 212 図 26・27号土坑出土土器実測図 (1/3)

### 30号土 坑（図版100-4、第211図）

32号土坑の3.5m南側に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.18m、短径1.14m、残高0.33mを測る。浮いた状態で遺物が出土している。

#### 出土遺物（図版108、第214図）

**土 器（1～4）** 1～4は土師器。1・2は小皿で、底部は糸切り。3・4は壺で、3・4とも底部に板目圧痕がみられる。4は器高3.3cm、口径15.5cm。

### 32号土 坑（図版101-1、第209図）

中世建物群東端部で、21号掘立柱建物の2.5m東に位置する。三つの遺構が切り合っているようで、平面形は不整方形を呈する。東西長5.30m、南北長3.85m、残高0.26mを測る。南半部分には礫の集石があり、鉄鋸・石鍋・鉄滓が出土している。

#### 出土遺物（図版108・109-3・110-2・3、第214・229・230図）

**土 器（1～3）** 1は瓦器碗で、体部は丸みを帯びる。高台は細身で低い。2・3は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、2の外体部には連弁を施しているようである。3は見込みに「金玉満堂」の文字がスタンプされる。ともに底部は厚く、高台は低い。

**鉄 器（1・2）** 1は鋸で、先端部と茎部を欠失する。残存長11.5cm、基部幅2.5cm、背の厚さ0.4cmで、中程で折り曲げられている。2は刀子の先端部付近の破片で、断面楔形を呈する。残存長3.1cmで、背の厚さ0.5cmを測る。

**石製品（4～6）** 4～6は石鍋。4は口縁端部を欠くが、鉢形の器形を呈し、体部に輪状の取手を削り出している。5・6は横方向の锷を有し、羽釜形を呈する。6の口径は31.4cm。锷から下が黒変している。

### 33号土 坑（図版101-2、第213図）

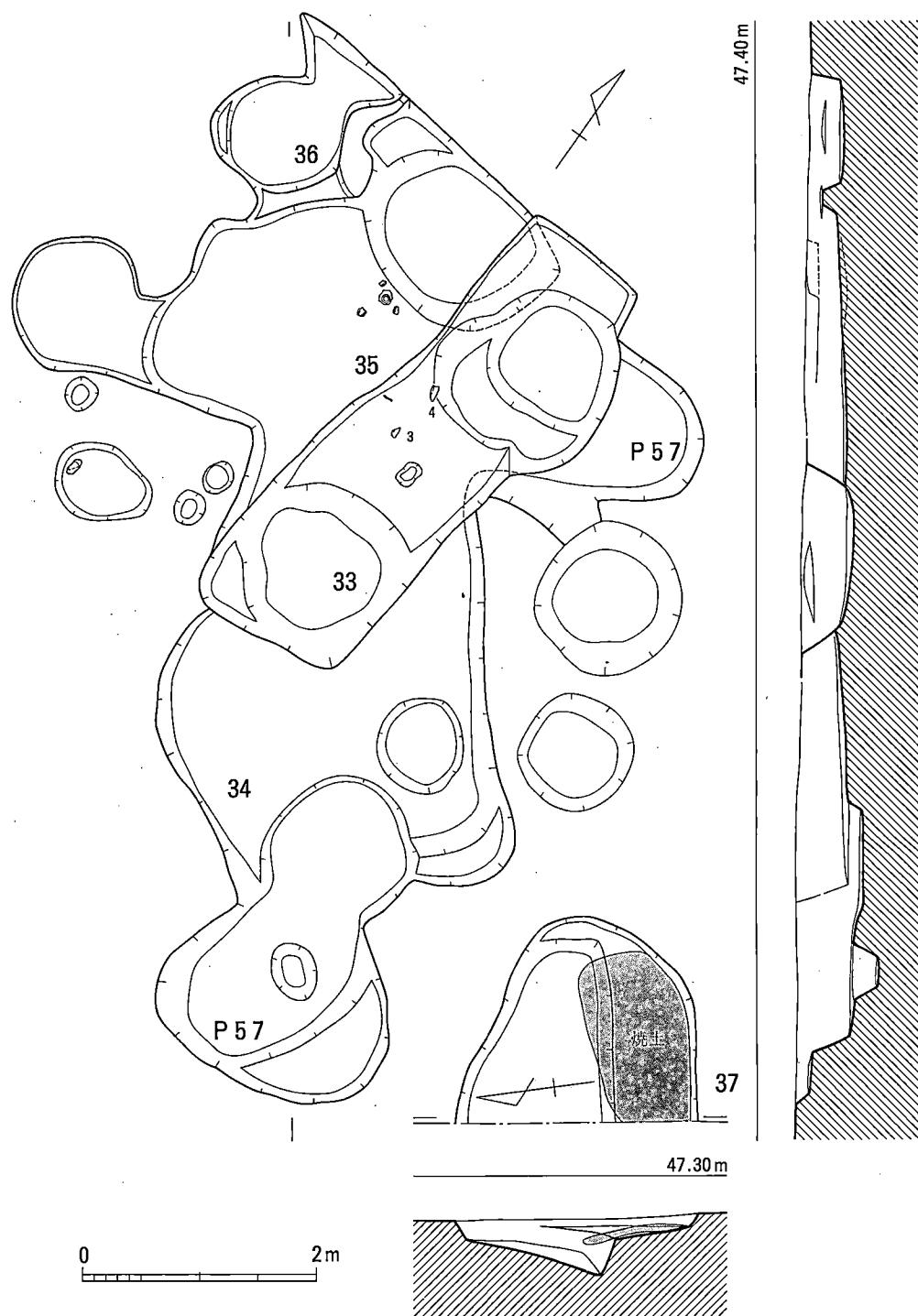
中世建物群の東端部に位置し、34・35号土坑を切っている。この周辺には土坑・竪穴が密集している。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.35m、短軸1.38m、残高0.39mを測る。また、両端部には径1.5m、深さ0.46mの穴が掘られている。

#### 出土遺物（図版108、第214図）

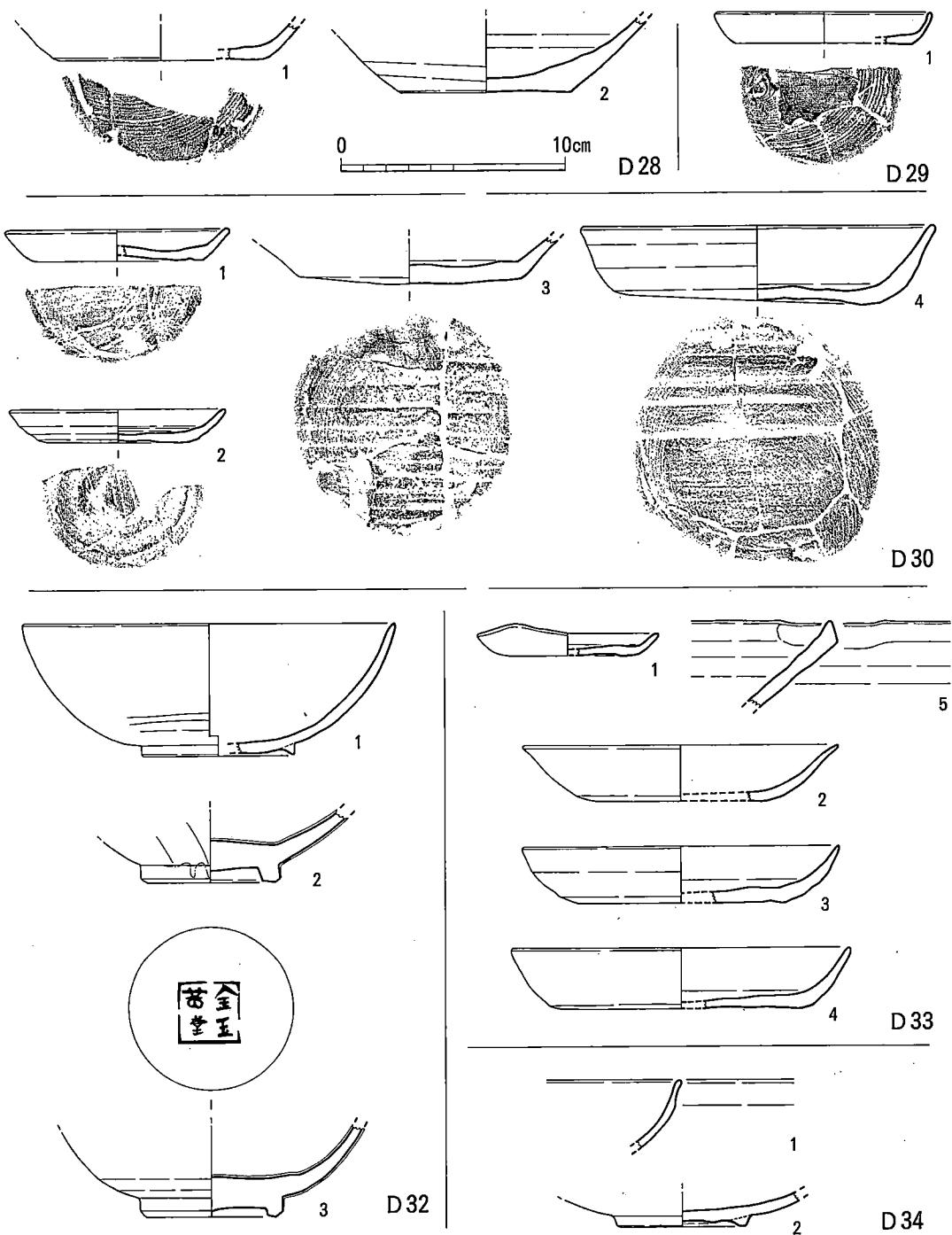
**土 器（1～5）** 1は土師器小皿で、底部は糸切り。2～4は土師器壺で、2の口縁部は外方に開くが、3・4は内湾する。5は須恵質土器のこね鉢で、片口になる。

### 34号土 坑（図版101-2、第213図）

33号土坑に切られている。また、南東側には別の穴と重複している。平面形は不整方形を呈し、南北幅2.96m、残高0.39mを測る。埋土中から鉄滓が出土している。



第 213 図 33~37号土坑実測図 (1/60)



第 214 図 28~30・32~34号土坑出土土器実測図 (1/3)

#### **出土遺物（第214図）**

**土 器（1・2）** 1・2は瓦器椀で、1が口縁部、2は底部の破片。1の口縁部は細め。

#### **35号土 坑（図版101-2・102-1、第213図）**

34号土坑の西側に切られて位置する。平面形は不整形を呈し、残長2.0m、残高0.37mを測る。埋土中から若干の土器が出土している。

#### **出土遺物（第215図）**

**土 器（1・2）** 1は土師器の底部破片で、底部は糸切りによる。2は須恵質土器の底部破片で、摺鉢になろう。

#### **36号土 坑（図版101-2、第213図）**

35号土坑の直ぐ北西側に位置する。平面形は円形状を呈し、長径1.0mで、残高0.39mを測る。埋土中から若干の土器が出土している。

#### **出土遺物（第215図）**

**土 器（1・2）** 1は底部の小破片で、糸切りによる。2は瓦器椀の底部破片。高台は低く、三角をなす。

#### **37号土 坑（第213図）**

22号掘立柱建物の3.5m南西側に位置する。西半部は調査工程の都合で未掘となってしまった。楕円形を呈するようで、南北長2.05m、残高0.30mを測る。南壁側には焼土がみられた。

#### **38号土 坑（第216図）**

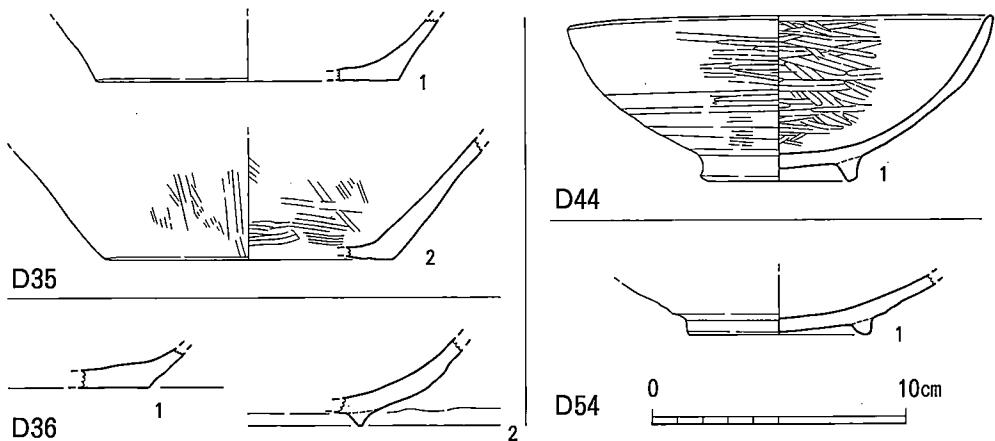
15号掘立柱建物の1m西側に位置する。平面形は楕円形を呈する。2段に掘り込まれており、上段は長軸2.40m、短軸1.16m、残高0.08mを測る。下段は長軸1.60m、短軸0.68mで、上段からの深さ0.2mを測る。埋土中からは青磁碗の小片が出土している。

#### **44号土 坑（第216図）**

奈良時代の115号竪穴住居の1.5m東側に位置する。平面形は円形を呈し、径1.12m、残高0.18mを測る。埋土下層から礫・土器が出土している。

#### **出土遺物（図版108、第215図）**

**土 器（1）** 1は瓦器椀で、器高6.5cm、口径16.8cm、高台径6.2cmを測る。体部外面は籠ヶズリ後ミガキによる。外面には煤が付着している。



第215図 35・36・44・54号土坑出土土器実測図 (1/3)

#### 46号土 坑 (第216図)

44号土坑の3.5m東側に位置する。平面形は円形を呈し、径1.05m、残高0.52mを測る。底面は中央がやや窪む。埋土中から土師器片が出土している。

#### 47号土 坑 (第216図)

46号土坑の1mほど東側に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.13m、短径1.02m、残高0.53mを測る。底面は水平である。埋土中から土師器片が出土している。

#### 50号土 坑 (第216図)

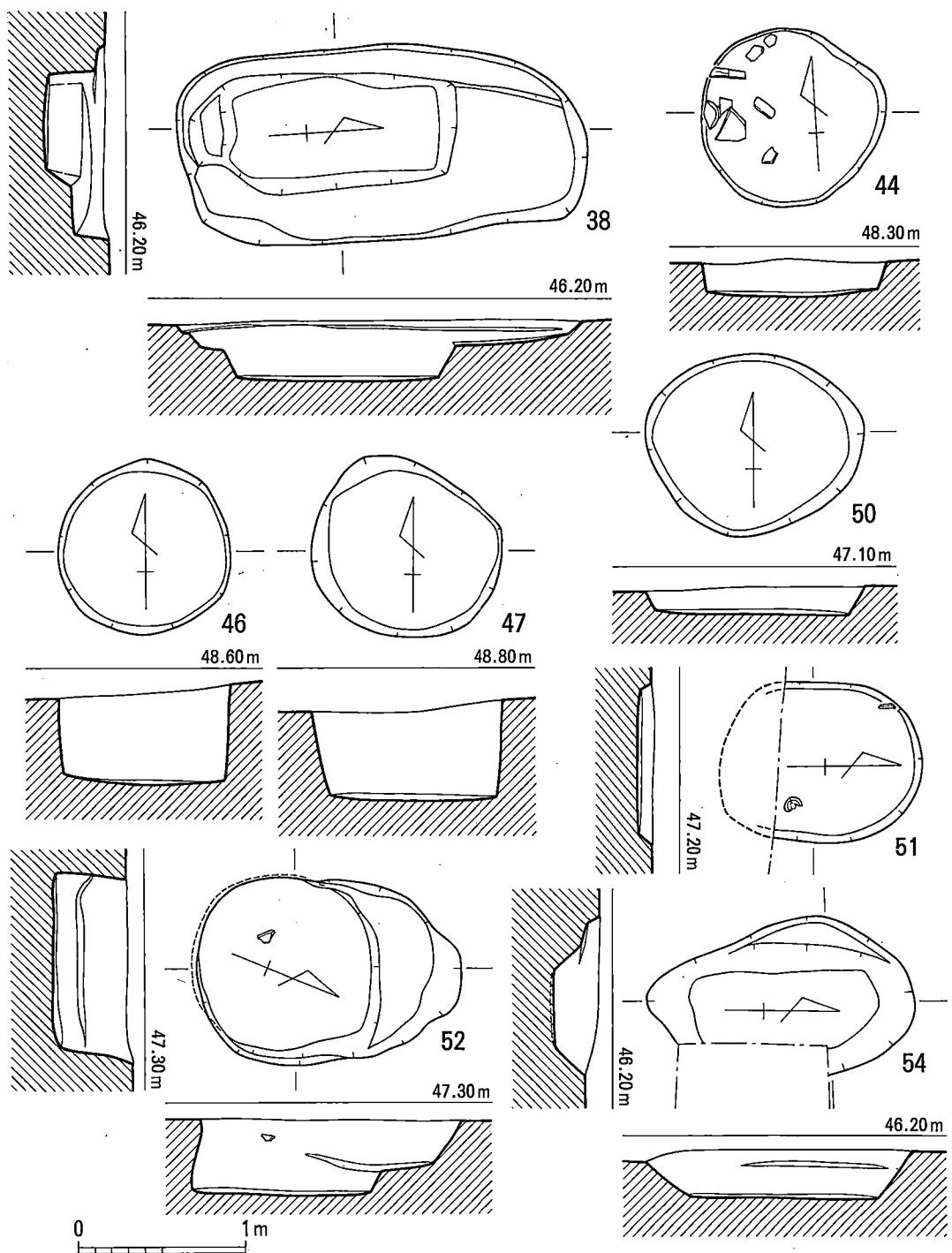
43号土坑の3m南側に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.32m、短径1.06mで、残高は12cmと削平が著しい。埋土中から土師器小皿小片が出土している。

#### 51号土 坑 (第216図)

50号土坑の1mほど東側に位置する。南半分は未掘のままとなってしまった。平面形は円形を呈しよう。東西長0.94mで、残高は7cmと削平が著しい。埋土中から土師器小皿小片が出土している。

#### 52号土 坑 (図版102-2、第216図)

32号土坑の0.5m東側に位置する。平面形は長円形を呈し、長軸1.58m、短軸1.12m、残高0.43mを測る。また北壁側には幅30cmのテラスが付く。埋土中から土師器が出土している。



第 216 図 38・44・46・47・50~52・54号土坑実測図 (1/40)

### 54号土坑（第216図）

19号土坑の5.5m東側に位置する。平面形は橢円形を呈し、長軸1.49m、短軸0.95m、残高0.27mを測る。埋土中から瓦器碗が出土している。

### 出土遺物（第215図）

**土器** (1) 1は瓦器碗の底部破片で、低い高台を貼付する。

### (5) 溝

### 2号溝（第23図）

調査区の西側で、弥生時代の73号竪穴住居を切っている。北東一南西方向に大きくカーブする溝で、南端部分は幅0.65m、残高0.20m程度であるが、住居部分では幅4.1mと大きくなる。埋土中から土器・フイゴ羽口が出土している。

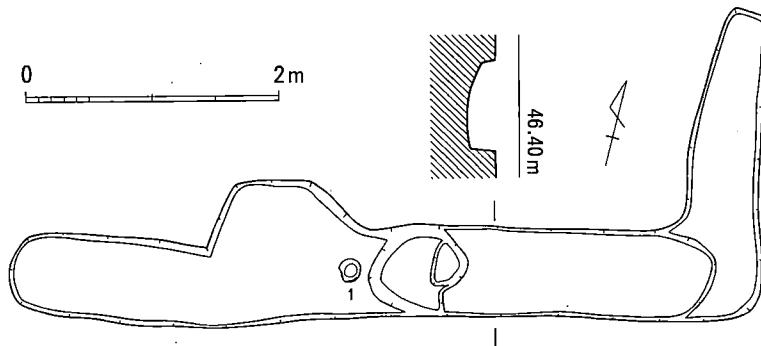
### 出土遺物（図版109-4、第218・229図）

**土器** (1~5) 1は瓦質の鉢で、口縁部は直立し、口唇部を丸く收める。2は土師質の湯釜で、肩部はなで肩を呈する。胴部には断面蒲鉾型の凸帯を貼付する。頸部の直下には竹管による刺突文があり、焼成後の穿孔を施している。復原口径は16.0cm。3は瓦質の火鉢口縁部破片で、口縁部外面に断面台形の凸帯を2条貼付し、その間に花弁形のスタンプを施している。4は白磁の玉縁口縁碗。5は白磁の皿で、高台は細身でシャープである。

**土製品** (7) 7はフイゴ羽口の先端部小片で、径6.6cm、孔径2.4cmに復原した。先端部は高温による加熱を受けてガラス質状となっている。

### 5号溝（第40図）

弥生時代の4・6号溝の中間に位置する。北東一南西方向に走る溝で、長さ7.2m分を調査した。幅0.7mで、残高は8cmと削平が著しい。



第217図 9号溝実測図 (1/60)

### 出土遺物（第218図）

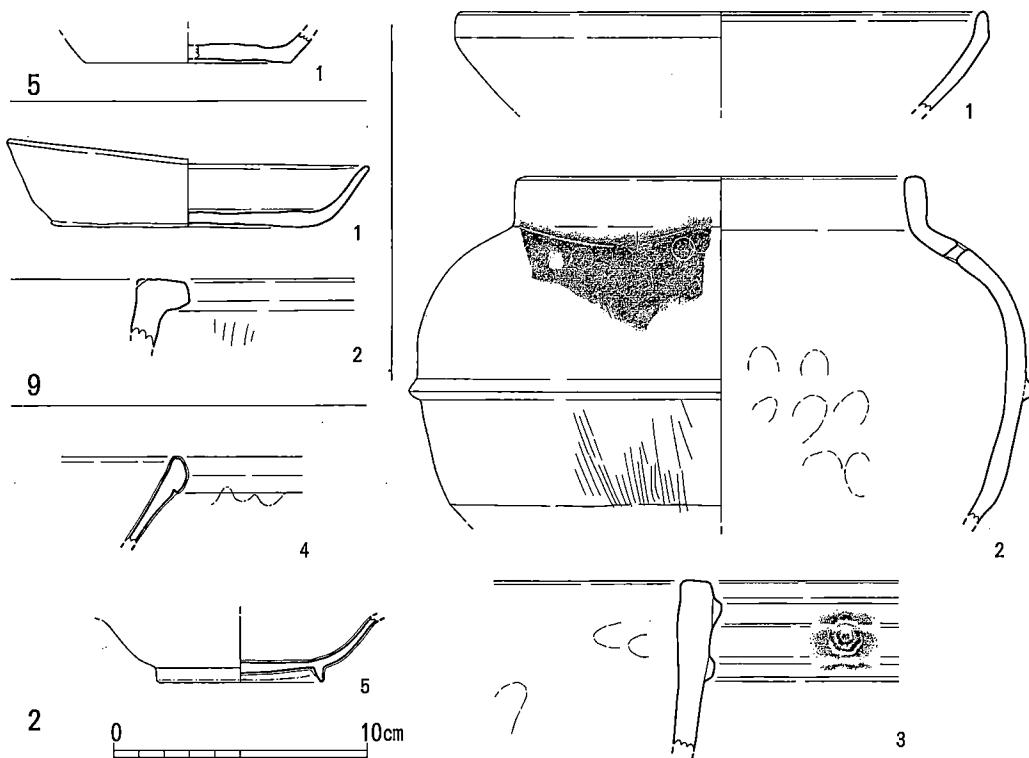
**土 器 (1)** 1は土師器小皿の底部破片で、口縁部を欠く。磨滅しているが糸切りか。

### 9号溝（第217図）

15号掘立柱建物の5.5m南側に位置する。平面形は「L」字形を呈し、長さ5.93m、幅0.70m、残高0.20mを測る。埋土は黒褐色土で、土師器小皿が出土している。

### 出土遺物（図版109-1、第218図）

**土 器 (1・2)** 1は土師器坏で、器高3.5cm、口径14.2cm、底径10.4cmを測る。口縁部の歪みが著しい。2は土師質鍋で、口縁部は「L」字形を呈する。



第218図 2・5・9号溝出土土器実測図 (1/3)

## (6) 通路

### 2号通路（図版103、第219図）

4号土坑の7m東側で、丘陵の北辺に設けられている。長さ13m分を調査した。「Y」字形に2本の通路が分岐している。恐らくB号が直線であることから古く、A号が造り替えられたものと考えられる。幅は1mほどで、分岐点からのステップの数は両者とも8段を数える。埋土からは多くの遺物が出土している。

#### 出土遺物（図版109-6・110-1、第224・228・229図）

**土器** (1~7) 1は土師器、2~4は瓦器、5は瓦質土器、6は土師質土器、7は白磁。1は小皿で、口縁部は小さく立つ。2は瓦器の小皿で、器高1.9cm、復原口径10.2cm。3・4は椀で、4の高台は3に比して高く、底部も垂れていない。5は瓦質の火鉢で、口縁部外面の下位に断面蒲鉾形の凸帯を2条貼付し、上段凸帯にはハケ状工具によるキザミ目を付している。6は土師質の底部破片で、鉢になるか。外体部はケズリにより、底部はヘラ切り。7は碗で、高台は低い。

**石器** (5・19) 5は凝灰岩製の仕上げ砥石で、残存長11.2cm、幅4.5cm、厚さ1.8cm。四周を砥面としている。19は砂岩系の石を丸く加工したもので、径2.5cm、厚さ1.7cm、重さ8.0gを測る。下段の出土。

**土製品** (9) 9は管状土錐で、長さ2.8cm、径1.0cm、重さ1.8gを測る。下段より出土した。

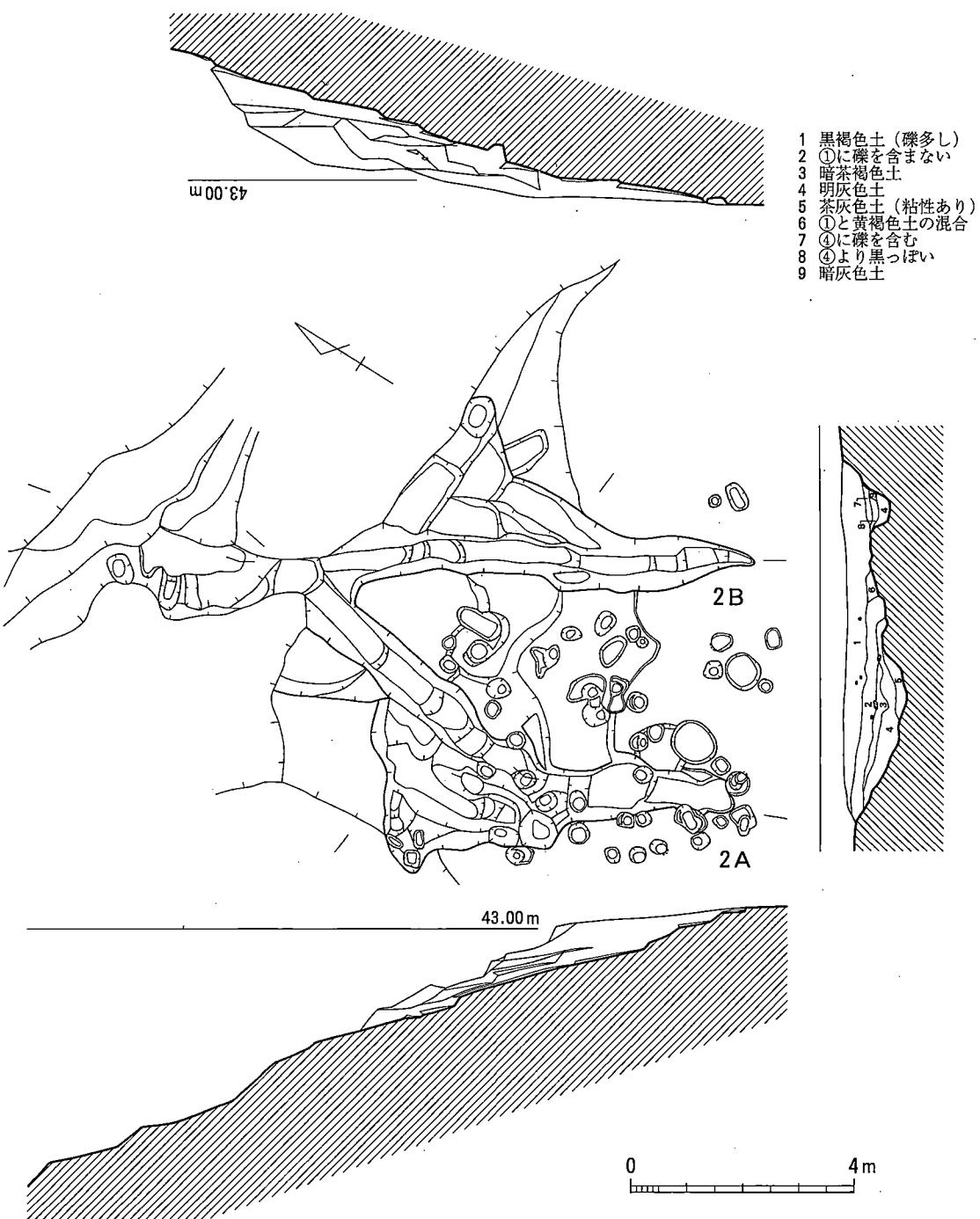
### 3号通路（図版104・105-1・2、第220図）

2号通路の12m東側に位置する。規模的には2号通路よりも大きく、丘陵縁部での幅5.5m、長さ13.2mを測る。丘陵縁部で「く」字形に折れ曲がり、谷部に続く。埋土上層からは礫・土器が多量に出土しており、通路の廃絶後に投棄されたものである。通路最下層から底面に密着して瓦器椀が出土している。

#### 出土遺物（図版109-6・110-2・3、第221・222・229・230図）

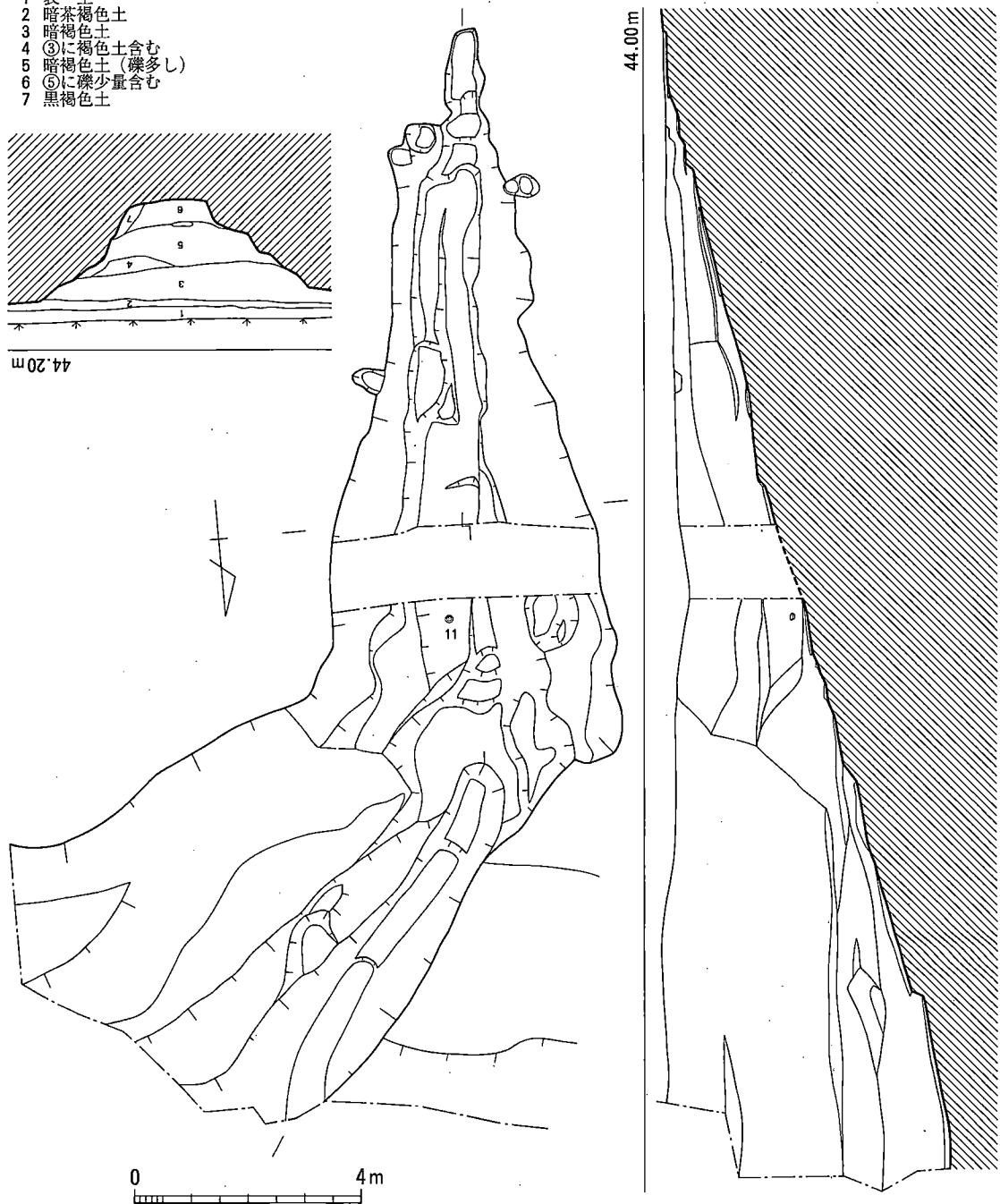
**土器** (1~32) 1~8は土師器、9・10は土師質土器、11~16は瓦器、17~20は須恵質土器。21・23~26・31は白磁、22・27~30は青磁。1~3は小皿で、何れも底部は糸切りによる。4の底部は外方に突出しており、灯火器になるか。5~8は壺で、底部は糸切り。9・10は鍋で、9の口縁部平坦面には工具による連続押圧を施す。ともに口縁部外面には煤が付着している。11~16は瓦器椀で、11は器高5.7cm、口径16.3cm、高台径5.9cmを測る完形品。高台は低い。埋土最下層の出土。16の外底面には「十」字のヘラ記号が付される。17~20は須恵質の摺鉢で、18は内面にハケ目を施す。また、17の内底部はよく摺れている。19は片口になるもので、器高11.5cm、口径26.5cm、底径12cmになろう。

21は白磁の小皿で、口唇部の釉を搔き取る。底部は平底である。22は青磁の小皿の小片。23・

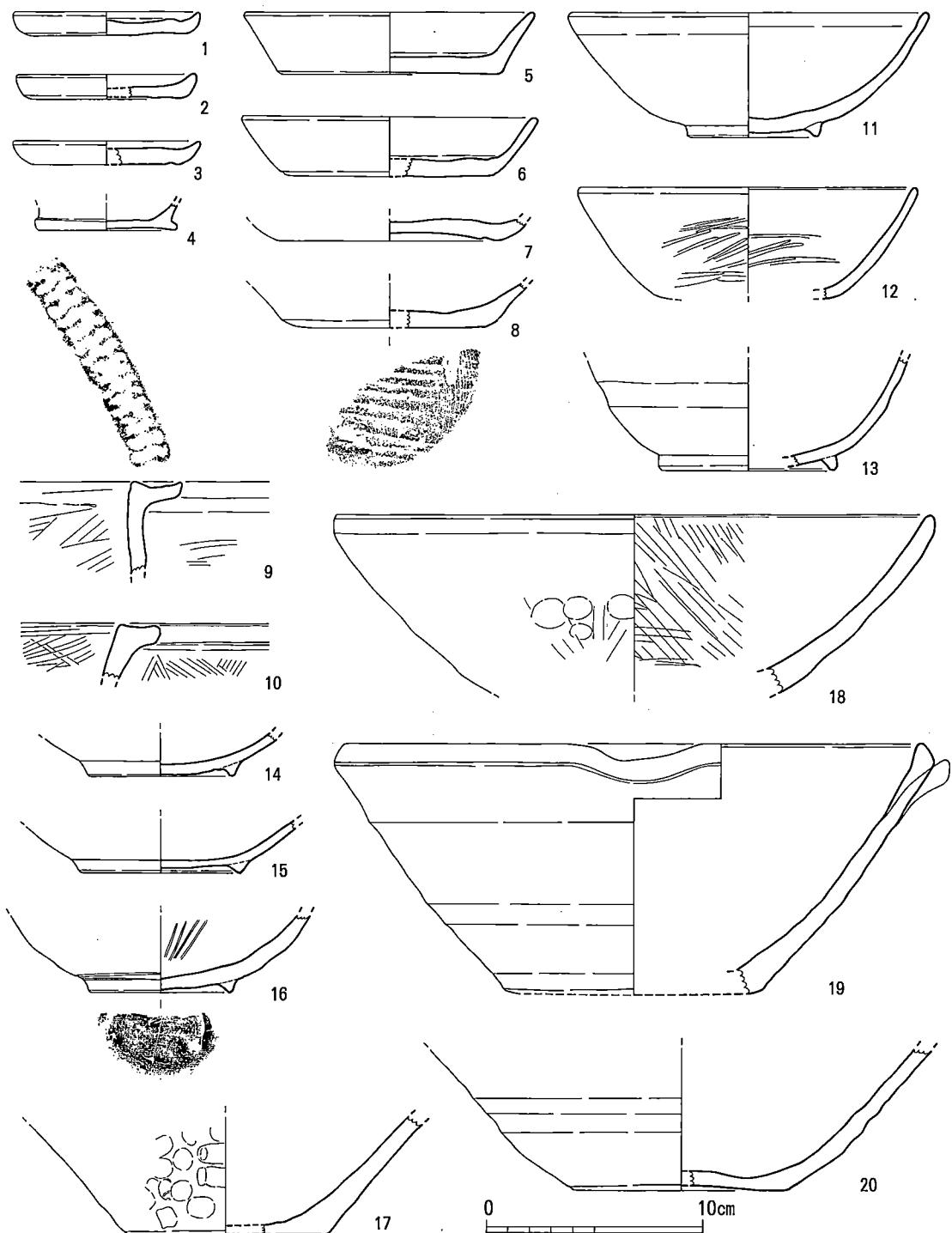


第 219 図 2号通路実測図 (1/120)

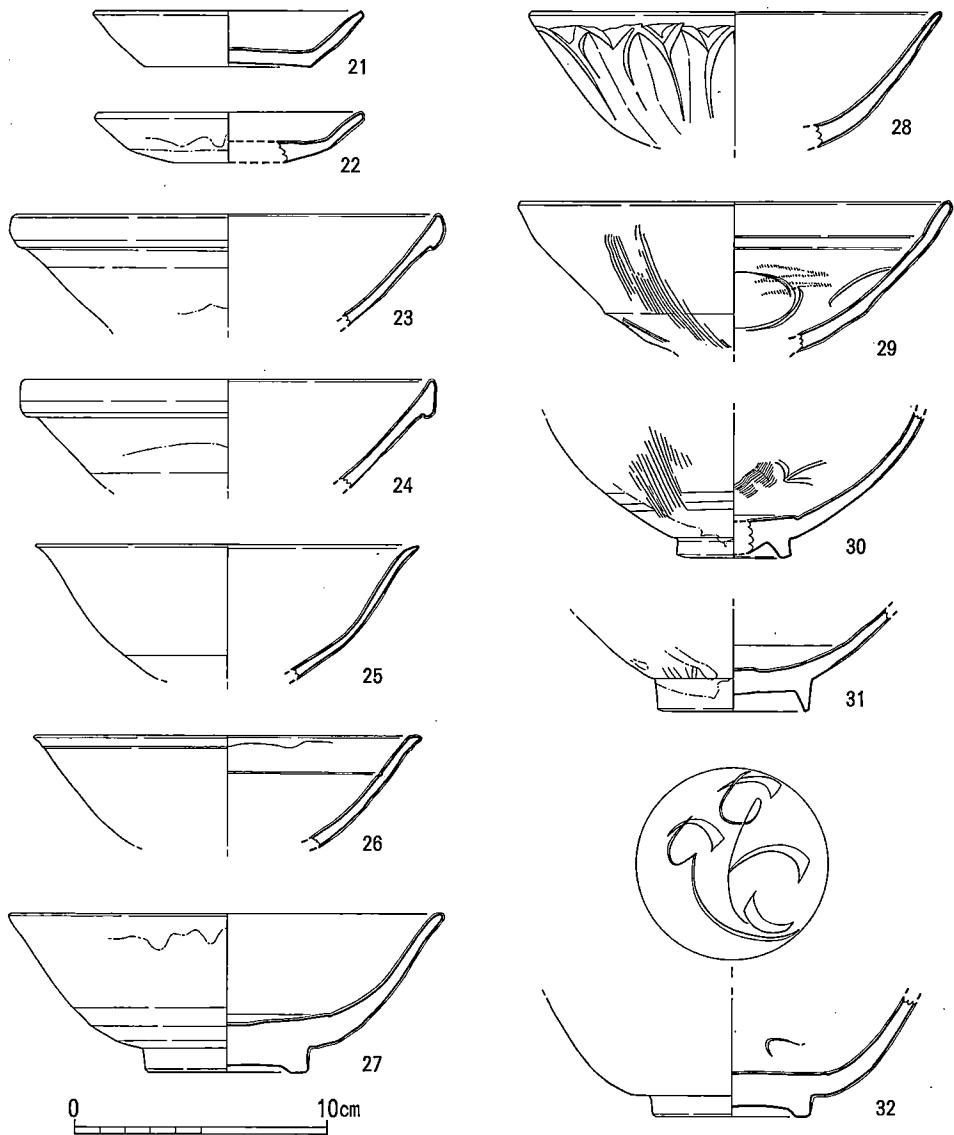
- 1 表土  
 2 暗茶褐色土  
 3 暗褐色土  
 4 ③に褐色土含む  
 5 暗褐色土(礫多し)  
 6 ⑤に礫少量含む  
 7 黒褐色土



第 220 図 3号通路実測図 (1/120)



第 221 図 3号通路出土土器実測図① (1/3)



第 222 図 3号通路出土土器実測図② (1/3)

24は玉縁口縁碗で、玉縁は大きめ。25の口縁部は外方に開き、口唇部上面の釉を掻き取るため口唇部はシャープである。26の口唇部は上部に小さな平坦面を有する。31は白磁碗の底部破片で、高台は細く高めである。27・28・32は龍泉窯系青磁碗。27は無文であるが、28は体部外面に鎬連弁を施している。32は内面に雲流文、見込みに花文を施す。27・32の高台は低く太め。27は器高6.2cm、口径17.0cm、高台径6.5cm。29・30は同安窯系青磁碗で、内外面とも櫛目によ

る文様を施している。

**石製品** (7~9) 7は石鍋の破片で、縦方向の鍔を有する。外面は工具によるケズリ痕が付く。8は横方向の鍔を持つもので、鍔径は28.8cm。9は底部破片で、外面には煤が遺存する。

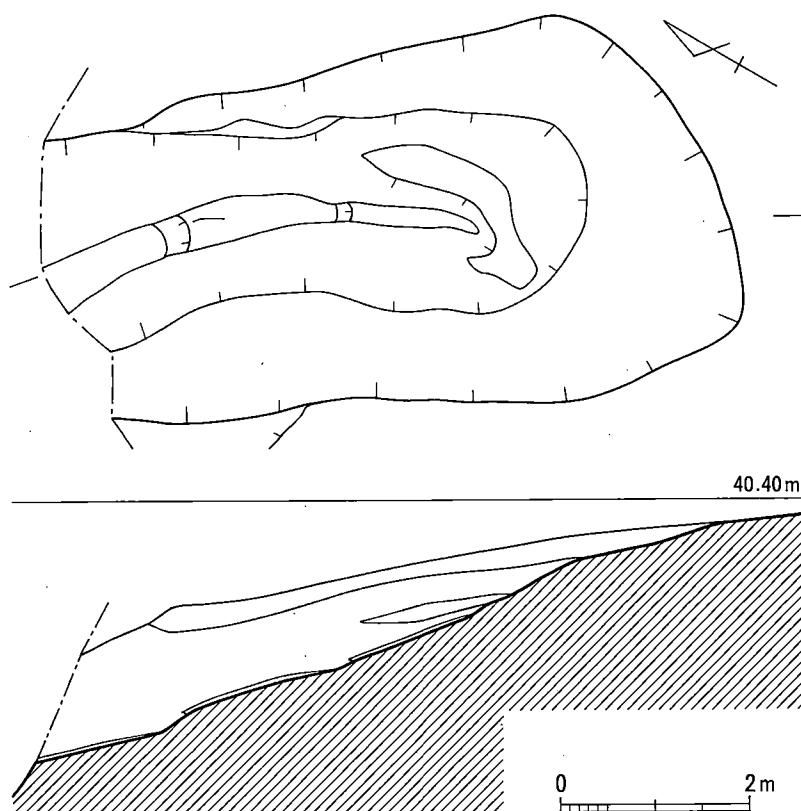
**土製品** (10) 10は管状土錐で、残存長3.5cm、径1.2cm、重さ3.7gを測る。3号落込の出土であるが、形態的に当遺構に伴うものと考えたい。

#### 5号通 路 (図版105-3、第223図)

丘陵西端部に設けられている。長さ7m分を調査した。通路幅3.4mで、4段のステップを有する。埋土中から土器・石器などが出土している。

#### 出土遺物 (図版109-1・109-6・110-2、第224・228・229図)

**土 器** (1~8) 1・2は土師器小皿で、底部は糸切りによる。3は瓦器小皿で底部は丸底を呈する。外底面には工具痕が付く。4~6は瓦器椀で、高台は何れも低い。7は白磁の皿で、口

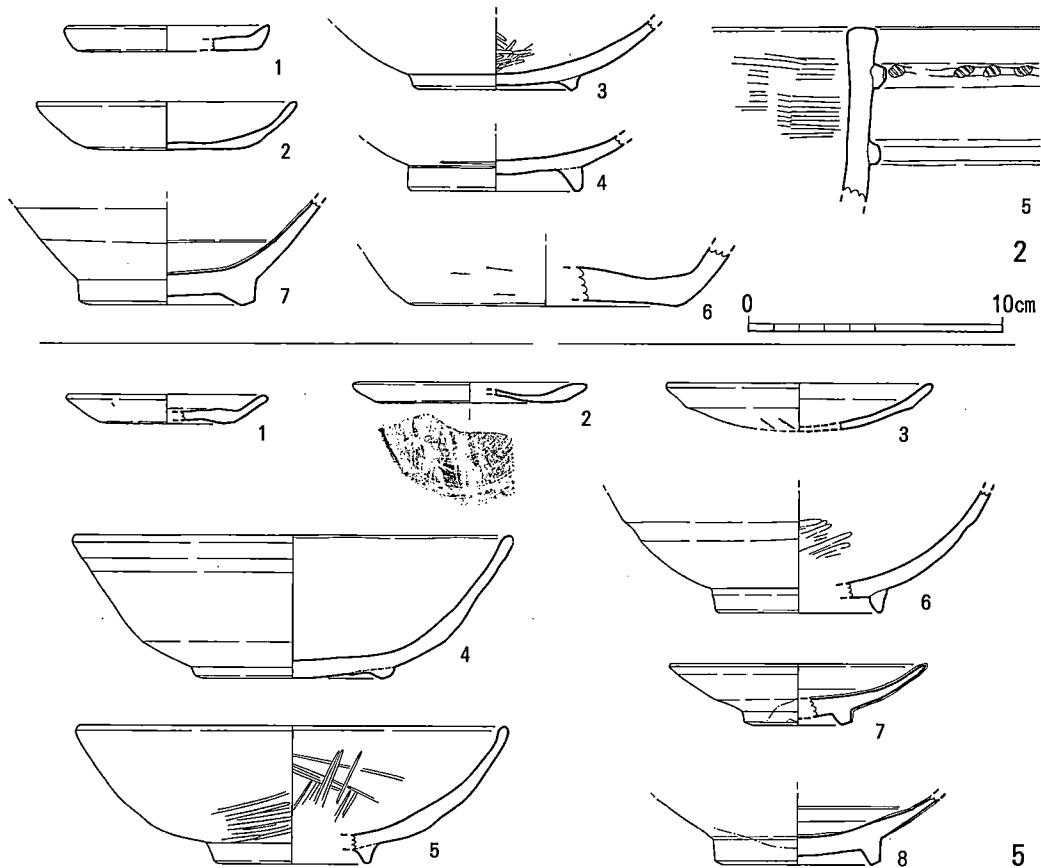


第 223 図 5号通路実測図 (1/80)

縁部は斜め上方に立ち上がる。8は白磁碗の底部破片。

**石 器 (6・7)** 6は砂岩製の砥石で、使い減りにより三角形状をなす。四周を砥面としている。最大幅11.1cm、厚さ3.1cm。7は緑簾片岩を加工したもので、残長19.5cm、幅8.0cm、厚さ2.2cmで、中程を両側から摺って窪ませている。

**土製品 (17・18)** 17・18は弥生土器片利用の土版で、17は外縁を摺っているが、18は打欠きのままである。重さは17が5.9g、18は8.1gを測る。



第 224 図 2・5号通路出土土器実測図 (1/3)

### (7) 落込

#### 1号落込(付図)

4号土坑北西側の丘陵縁辺に位置する。不整形を呈し、長さ10.2m、幅4.2mの範囲に黒色土が堆積しており、土師器小片が出土していることから落込とした。

## (8) 土壙墓

### 15号土壙墓（図版106-1、第226図）

西端住居群中に位置し、古墳時代の71号竪穴住居の北壁を切って埋葬される。墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ1.92m、幅0.82m、残高0.39mを測る。埋土は締まりのない褐色土であった。死床面はほぼ水平で、掘形幅のやや広い北側が頭位になろう。頭位方向はN24° Eを示す。

### 出土遺物（図版109-2、第225図）

**土 器 (1)** 1は土師器坏で、器高2.8cm、口径14.8cm、底径11.2cmを測る。

### 16号土壙墓（図版106-2、第226図）

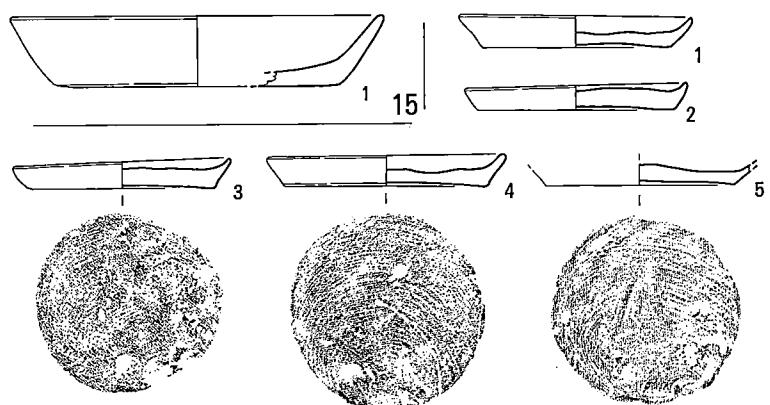
当土壙墓も調査区西端住居群中にする。墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ1.66m、幅0.85m、残高0.52mを測る。埋土は粘性のある暗褐色土であった。死床面は中程が若干窪み、掘形幅のやや広い北側が頭位になろう。頭位部分からは土師器小皿が5点床面から5~10cmほど浮いた状態で出土しており、遺体を埋葬する過程で入れられている。頭位方向はN23° Eを示す。

### 出土遺物（図版109-2、第225図）

**土 器 (1~6)** 1~5は土師器小皿で、器高1.2cm、口径8.6~9.2cm、底径7.3~8.0cmを測る。何れも口縁部はシャープである。6は瓦器椀の口縁部破片で、内外面ともミガキによる。

### 17号土壙墓（図版106-3、第226図）

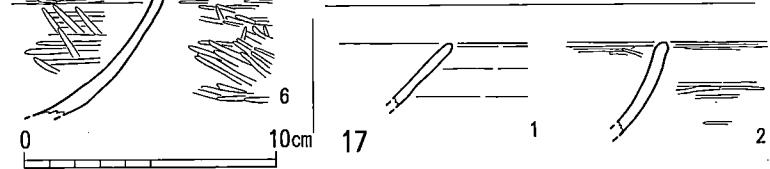
24号土坑の5m西側に位置する。墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ1.17m、幅0.55m、残高0.76mと小さいことから小児を埋葬したものであろう。埋土は暗褐色土であった。長軸方位はN2° E。を示す。



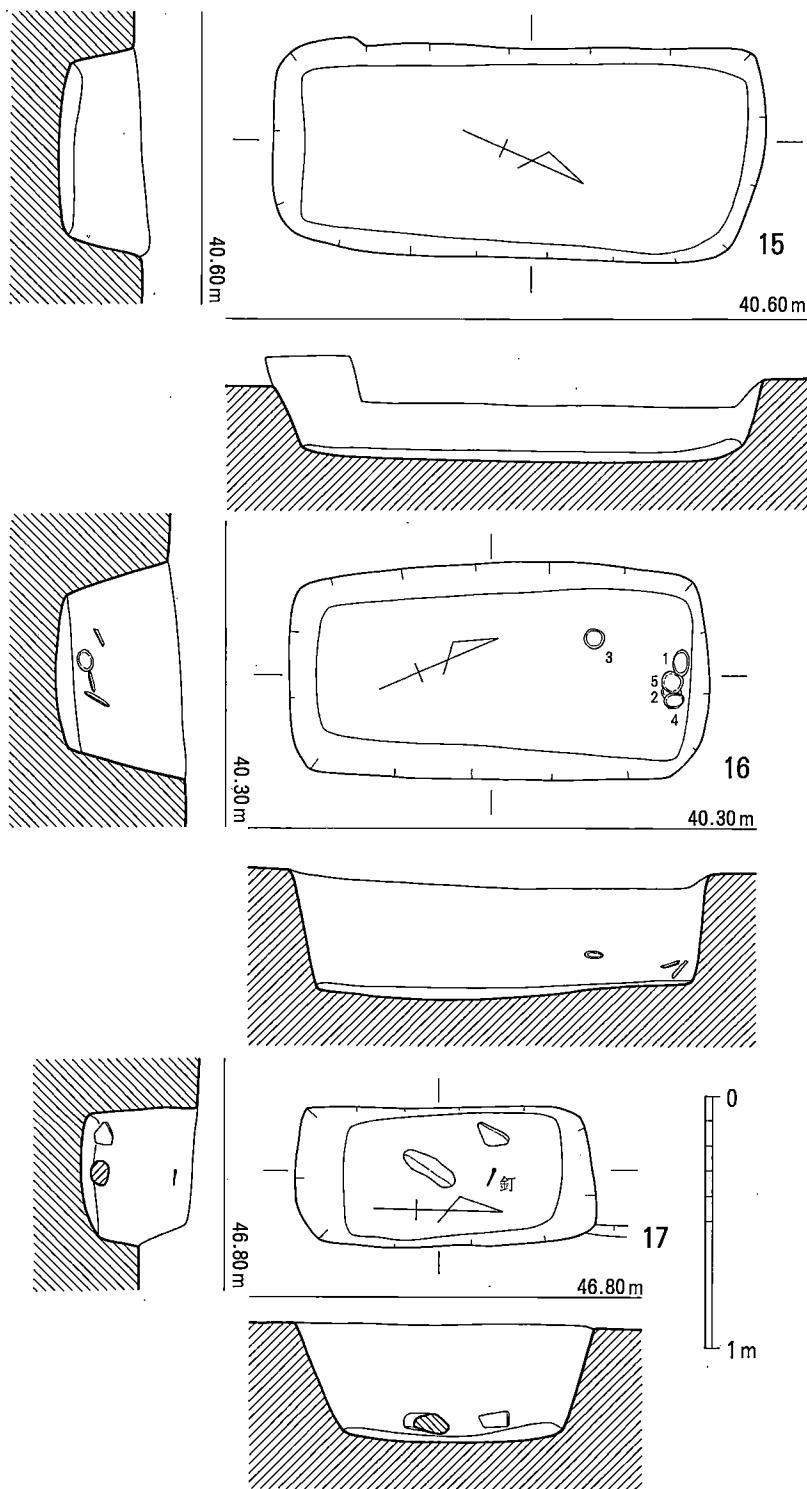
### 出土遺物（図版109-3、第225・229図）

#### 土 器 (1・2)

1は土師器坏の口縁部



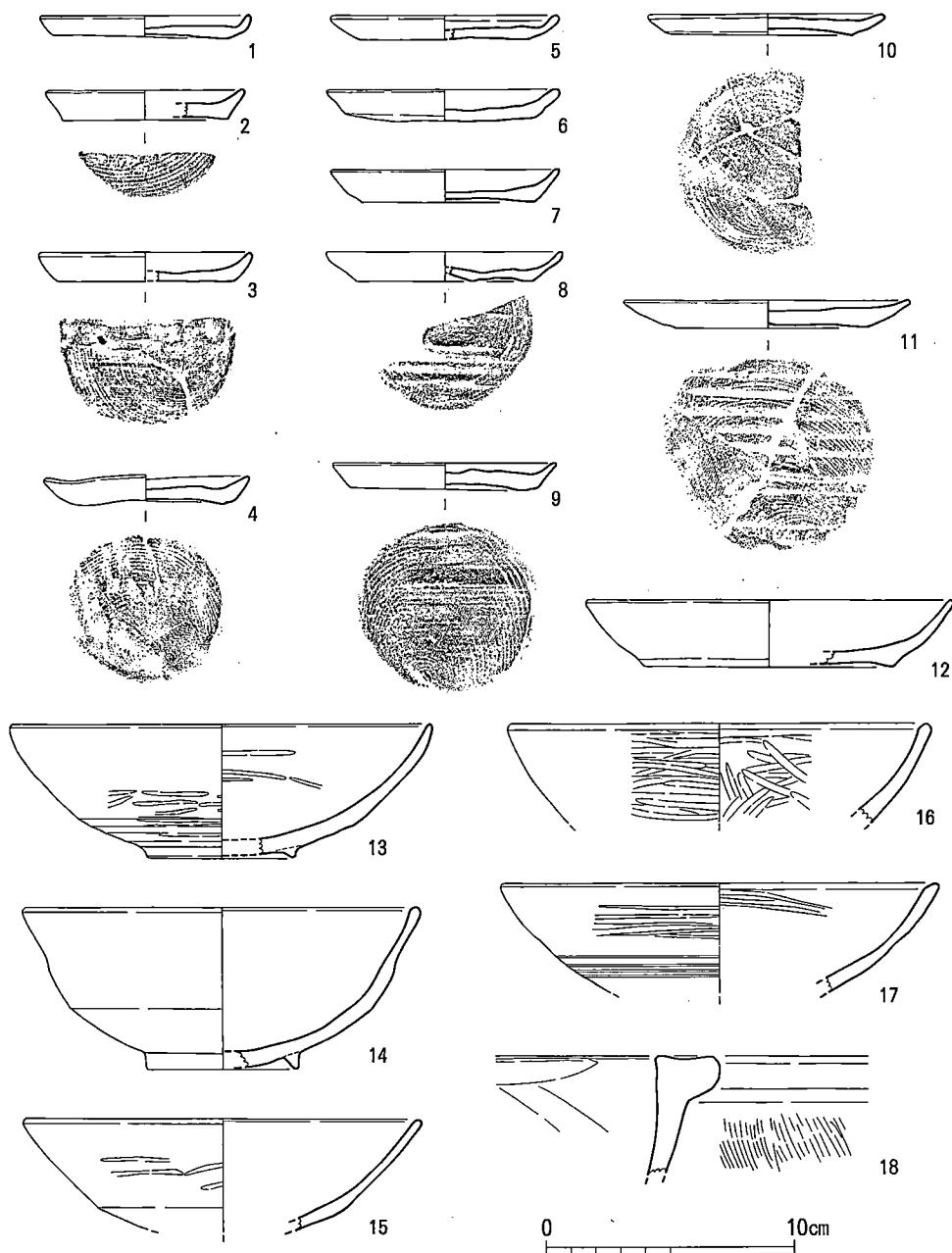
第225図 15~17号土壙墓出土土器実測図 (1/3)



第 226 図 15~17号土壙墓実測図 (1/30)

小片。2は瓦器椀の口縁部小片で、細かいミガキを施している。

鉄 器 (5) 5は釘で、断面形は長方形を呈し、長さ7.0cm、幅1.0cm、厚さ0.9cm、重さ17.9gを測る。先端部は使用によるためか屈曲している。

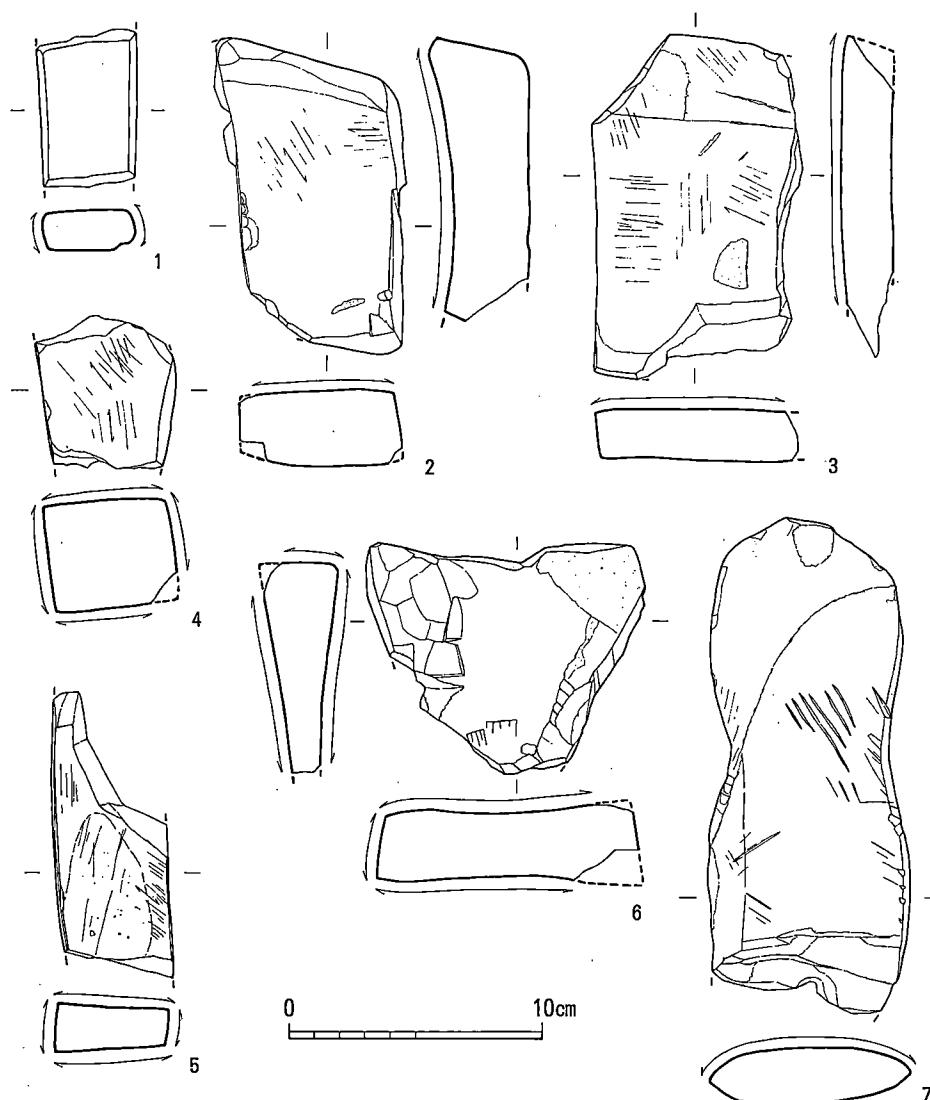


第 227 図 P i t 他出土土器実測図 (1/3)

(9) その他出土の遺物

出土遺物（図版109-1・3~6・110、第227・229・230図）

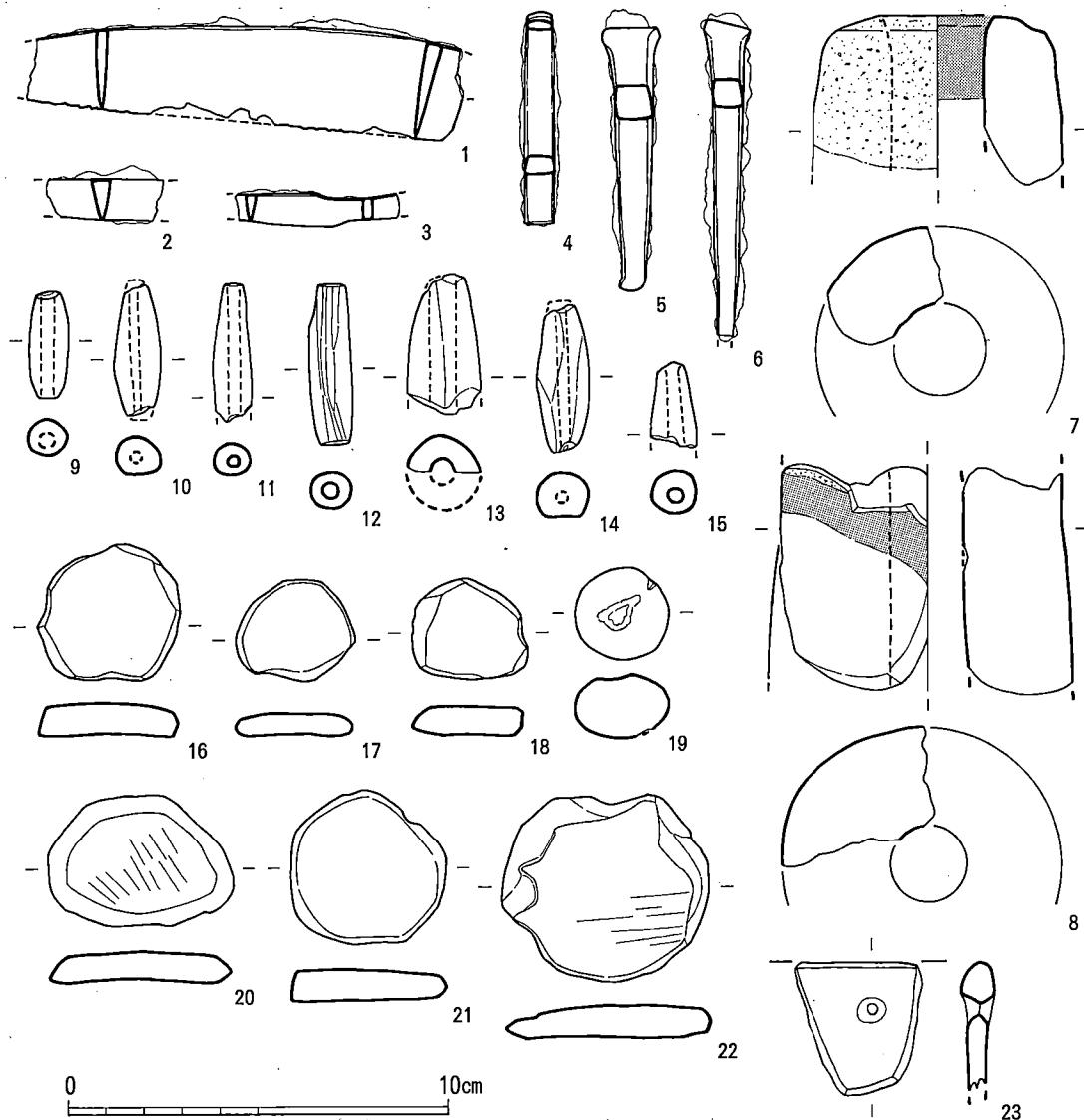
**土 器 (1~18)** 1~12は土師器。1~4は口径7.8~8.4cm、器高0.8~1.2cmの小皿で、5~10は口径9.2~9.6cm、器高0.8~1.2cmと前者より口径が一回り大きい。1はP 303、2はP 217、3はP 442、5はP 335、6はP 365、7はP 478、8はP 384、9はP 446、10はB 8区 P 9の出土。11も皿



第 228 図 出土砥石実測図 (1/3)

で、口径11.5cmを測る。P 555の出土。12は壊で、口縁部はシャープである。4・12は掘り下げ時の出土。何れも底部は糸切りによる。

13～17は瓦器椀で、13は器高5.5cm、復原口径16.8cmで、14は器高6.5cm、口径15.8cm。13の高台は細身である。16・17の口唇部は肥厚し、17は口唇部に黒漆状の黒色物を塗布している。13はP 390、14はP 455、15はP 570、16はB 11区P 1、17は4号通路下段の出土。18は土師質鍋の口縁部破片で、口縁部平坦面には工具による連続押圧を施す。P 398の出土。



第 229 図 出土鉄器・土製品実測図 (1/2)

**鉄 器** (3・6) 3は刀子の破片で、残存長4.3cm。身の幅0.9cmと使い込みによるものか細身である。P 184の出土。6は釘で、断面長方形を呈し、残存長8.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm、重さ16.9gを測る。B 6・7区 P 23の出土。

**土製品** (8・11~15・20~23) 8はフイゴ羽口小片で、高温の加熱によりガラス質状になっている部分がみられる。杭46~49間の遺構検出時の出土。

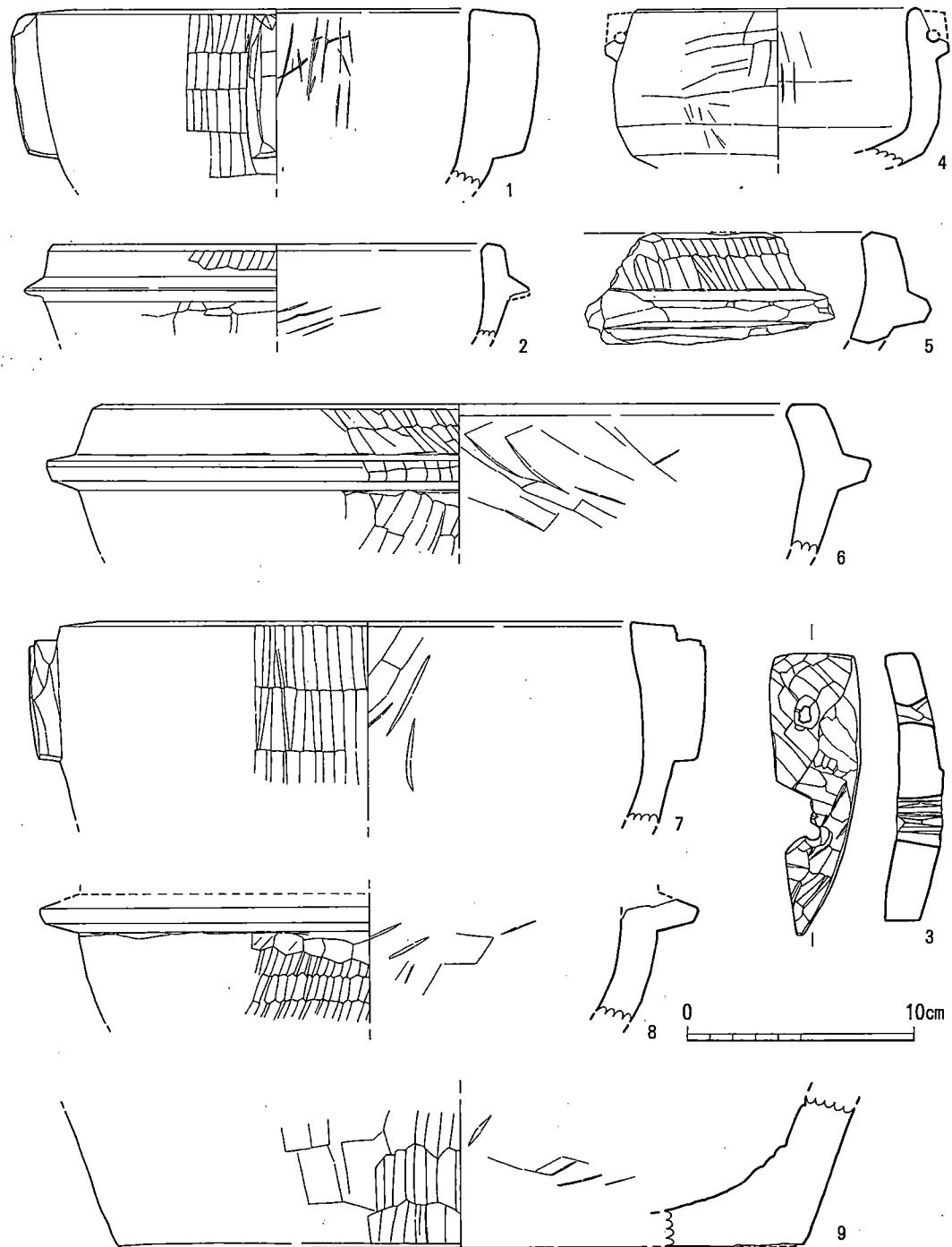
11~15は管状土錐で、12は長さ4.3cm、径1.1cm、重さ5.1gで、14は残存長3.9cm、径1.4cm、重さ5.1gを測る。11はB 8区 P 6の出土。12は杭42付近の採集品。13はB 区採集品。14はS T A 199付近の採集品。15は南包含層中 P i t の出土。

20~22は土版で、20・22は弥生土器片の利用で、21は縄文土器片を再加工している。20は長さ4.9cm、幅3.4cm、重さ15.3gで、P 401の出土。21は4.1×4.6cmの円形を呈し、重さは16.6g。杭68付近の出土。22は4.9×5.5cmで、重さ24.7g。杭29付近の出土。

23は土師器片に両側から円孔を開けたもので、垂飾品であろうか。4号通路埋土北半部の出土。



fig 1. 石棺墓調査状況



第 230 図 出土石鍋実測図 (1/3)

## V 自然科学的分析

### — 1・7号石棺墓出土の弥生時代人骨 —

九州大学大学院 比較社会文化研究科 中橋 孝博

#### [資料]

ここに報告する弥生人骨は以下の表に示す、長島遺跡からの2体である。

表4 出土人骨一覧

遺 跡	番 号	時 代	年 齢	性 別	赤色顔料	抜歯	備 考
長 島	S-1	終末期	成 年	女 性	○	?	
	S-7	終末期	熟 年	女 性	○	○	

#### S-1 (女性・成年)

弥生終末期の石棺墓中に検出された人骨で、下顎や乳様突起部等の頭蓋片の他は、右橈骨の遠位半を残すのみで、保存状態は非常に悪い。出土状況から見て、一応、仰臥伸展位であった可能性を窺わせるが、確認はし難い。

頭蓋片の大きさ、形状から女性とみなされ、また、蝶後頭縫合は癒着しているものの歯の咬耗がごく弱く、20歳前後の若い個体と推定される。

#### S-7 (女性・熟年)

やはり弥生終末期の石棺墓に見いだされた人骨で、保存状態は不良ながら、頭蓋と下肢の一部が遺存している。頭蓋の出土状況から仰臥位であったとみなされ、また下肢の位置関係から伸展位であったことが窺われる。

頭蓋はかなり小さく、各所に女性的特徴を表しており、また歯や縫合の状況から既に熟年に達した個体とみなされる。

頭蓋の計測表を表5に示した。全体的にかなり小さいが、頭型は中頭型（78.6）に属し、顔面でも示数上は北部九州の他の弥生人に類似して、かなり狭顔傾向が見られる。

なお、頭人骨には抜歯を疑わせる歯槽吸収像が見られた（図版参照）。歯式を以下に示す。

/	/	M <sup>1</sup>	/	/	○	○	○	○	×	×	×	×	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	×
/	/	/	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	/	/	/	/

(○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖、/：欠損、●：遊離歯)

表5 頭蓋計測値

S - 7 女性		
1	頭蓋最大長	(164)
8	頭蓋最大幅	(129)
17	B a - B r 高	—
8/1	頭長幅示数	78.6
17/1	頭長高示数	—
17/8	頭幅高示数	—
5	頭蓋基底長	—
9	最小前頭幅	91
25	正中矢状弧長	—
40	顎 長	—
45	頬骨弓 幅	—
46	中 顎 幅	90
47	顎 高	(109)
48	上 顎 高	65
47/45	顎示数 (V)	—
47/46	顎示数 (K)	121.1
48/45	上顎示数 (V)	—
48/46	上顎示数 (K)	72.2
51	眼窩幅 (左)	40
52	眼窩高 (右)	35
52/51	眼窩示数 (右)	87.5
54	鼻 幅	27
55	鼻 高	45
54/55	鼻 示 数	60.0
69	オトガイ高	31
70	下顎枝高 (左)	—
71	下顎枝幅 (左)	—
71/70	下顎枝示数 (左)	—



fig 2. 上 : S - 7 号 (女・熟年) 下 : 同、拔歯痕

# V ま と め

## — 長島遺跡の集落変遷 —

長島遺跡では、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が検出された。ここでは、各時代ごとの集落変遷をみてゆこう。

### [縄文時代]

当該期の遺構としては、円形竪穴2基、屋外炉1基、集石土坑1基、甕棺墓1基があり、調査区の中程に展開する。円形竪穴は竪穴内部に炉を伴っていないので竪穴としたが、屋外炉も存在することから住居とみられなくはない。時期的には晩期を主体とするが、押型文土器も数点出土していることから、早期の遺構が存在した可能性もある。

### [弥生時代]

当該期の遺構には、竪穴住居16軒、土坑2基、溝4条、通路1本、落込3基、石棺墓8基、甕棺墓1基、土壙墓4基があり、後期終末の時期を主体とする。住居は調査区の西端部にまとまる一群（61・66・72・74～76号）と7・8号溝近辺にまとまる一群（77・78・80・95～97号）とに大別できる。住居形態は長方形を呈し、主柱穴は2本で、柱と柱の中間に炉を有する。また、ベット状遺構を東壁側の一辺に付設している。

溝・通路・落込からは夥しい量の土器が出土しており、集落としては大規模であったことを物語っている。また、住居・落込からは鉄製鋤先が6点ほど出土しているが、刃先が潰れたり、使い減りしており、鉄製農具による開墾が広範囲に行われたことの傍証となろう。

墳墓群は石棺墓・甕棺墓・土壙墓が8号溝以東に列をなして造墓され、居住域と墓域とを明確に区別している。1・7号石棺墓には女性が埋葬され、1号石棺墓から管玉、4号石棺墓から小型無文鏡と鹿角装刀子、5号石棺墓からガラス玉、7号石棺墓から管玉・ガラス玉が出土している。小型仿製鏡は面径3.9～4.15cmで、文様は鋳出されていない。また、理由は明らかにし難いが、鈕の上部は擦り切られている。当仿製鏡が鏡本来の姿見としての機能を果たしたか疑わしいが、墓に副葬されていることから宝器的意味合いがあったものと理解されよう。

小型仿製鏡の存在意義に関して、高倉氏は「流入の停滞によって舶載鏡（長宜子孫内行花文鏡を主とする）の絶対数が不足し、旧甕棺墓地域では伝世することによって鏡数の維持をはかることができたものの縁辺部では入手が困難となり、仿製鏡あるいは舶載鏡片をもって代用したと言える」とされている（註1）。

### [古墳時代]

当該期の遺構としては、竪穴住居37軒、掘立柱建物1棟、土坑3基がある。時期的には6世紀後半と7世紀中頃～後半の二時期に大別でき、6世紀後半の住居は調査区の西端部において密集して築造されている（57～60・62～65・68～71号）。7世紀中頃～後半の住居は、主として調査区の東側に展開し（3～7・11・19・21・24・31・32・34・35・41・43～47号）、奈良時代の集落と居住域が重複し、時期的にも連続するものである。

住居形態は、一辺5mほどの隅丸方形を呈し、4本の主柱穴を有する。また、柱穴が竪穴部の隅に寄る5・68号竪穴住居は一辺3mほどであり、特徴としてカマド煙道部が長く伸びている。56号竪穴住居は主柱穴を竪穴内部に設けていない小型無柱穴住居である。

カマドは北・東・西壁の何れかに付設され、住居壁を若干掘り込む突出型である。カマドの構築方法は、先ず、壁体の掘形を住居壁から床面にかけて掘り込み、貼床下部から掘形壁面にかけて黄褐色土を巻き付ける様に貼付し、壁体を構築する。また、袖部先端に石を立てる11・35号例もみられる。煙道は遺存状態の良好なもので、長さ1mほどを測るが、上部が削平されているためトンネル式であるか、掘込み式であるかの判断はつけ難い。

掘立柱建物は調査区東側に存在するものの出土遺物に乏しく、古墳時代に帰属するものか奈良時代に帰属するか明らかにし難い。当該期の確実なものとして西端部に位置する23号掘立柱建物がある。1×2間の建物であるが、床支えの柱穴を有することから高床式倉庫になるものと思われる。主な出土遺物としては、鎌・鎌の鉄器と鉄滓、土製品がある。

### [奈良時代]

当該期の遺構としては、竪穴住居56軒、掘立柱建物5棟以上、土坑5基、通路1基がある。時期的には8世紀初頭～後半で、7世紀後半から8世紀初頭にかけてが集落のピークを迎える。住居は散在し、3～4軒で小群を構成する。

住居形態は、一辺4mほどの隅丸方形を呈し、4本の主柱穴を有するが、前時代と比較してやや小型化している。また、8・12・18・20・23・26・28・33・107・109・113号住居の主柱穴は竪穴部の隅に寄っており、その分竪穴部が縮小化している。27・39・41号住居は2本柱のもので、104・105・116号竪穴住居は主柱穴を竪穴内部に設けていない小型無柱穴住居である。

カマドは北・東・西壁の何れかに付設され、住居壁を「匚・匚」字形に掘り込む突出型である。構築方法的には前時代と大差はみられないが、掘込みの度合いが大きくなり、かつ、煙道も長く伸びる傾向にある。

掘立柱建物は調査区東側に存在するものの出土遺物に乏しく、帰属時期を明らかにし難い。当該期の確実なものとして18号掘立柱建物がある。2×2間の総柱建物で、高床式の「倉」と考えられる。柱穴掘形内からは8世紀前半頃の須恵器壊蓋が出土しており、文字は判読不可であつ

たが、外面に5文字程墨書きされていた。また、18・19・20号建物は主軸方位を等しくして直線的に配されることから18号建物と同時期の築造とみられる。

特殊品として、銅鎔帶、墨書き土器・転用硯の文字に関する遺物、鉄器・鉄滓・フイゴ羽口の製鐵関連遺物、及び製塙土器がある。銅鎔帶は24号竪穴住居の出土で、住居規模も6.3×6.8mと当該期の住居としては大きい部類に属する。転用硯は106・108・116号竪穴住居の出土で、3点確認した。また、製塙土器は98・100・101・106・107・115号竪穴住居、8号土坑、ピット、包含層の出土で、内面に布痕を留めるII類及び椀型を呈するIV類が出土している（註2）。

以上、当該期にあっては、鎔帶・転用硯・墨書き土器・製塙土器などの特殊遺物の存在から里長が起居した拠点集落と捉えたい。

### 〔鎌倉時代〕

当該期の遺構には掘立柱建物7棟、柵1列、竪穴5基、土坑43基、溝、通路3本、落込、土壙墓3基などがある。時期的には鎌倉時代を主体とする12~13世紀で、調査区の中央部に集中する。建物は東西棟の12~16・22号と南北棟の21号があり、建物規模は2×3間を主体とし、14・21号は2×5間規模である。また、建物を取り巻くように竪穴・土坑があり、土師器・瓦器・舶載陶磁器類が出土している。

2・3・5号通路は丘陵の縁辺部に設けられ、丘陵（集落）と平野部（生産地）とを往来するためのものである。谷地形になったヶ所をV字形に開削し、急斜面部においてはステップを数段設けている。また、地形的にみて、調査区外の丘陵南半部に2ヶ所想定される。

以上、各時代ごとに概観してきたが、長島遺跡の集落は縄文晩期、弥生終末期、6世紀後半、7世紀後半~8世紀後半、12~13世紀と各時代において営まれており、特に弥生時代・奈良時代・鎌倉時代にあっては主体となる集落であったことが遺構・遺物から窺われよう。

古代においては、上座郡には把伎・壬生・広瀬・祚田・長淵・何束・三島の7郷が『和名抄』にみえ、朝倉町古毛地区の小字に三島があるので古毛から山田付近にかけてが三島郷に比定される（註3）ことから、長島遺跡は三島郷における拠点集落と理解したい。

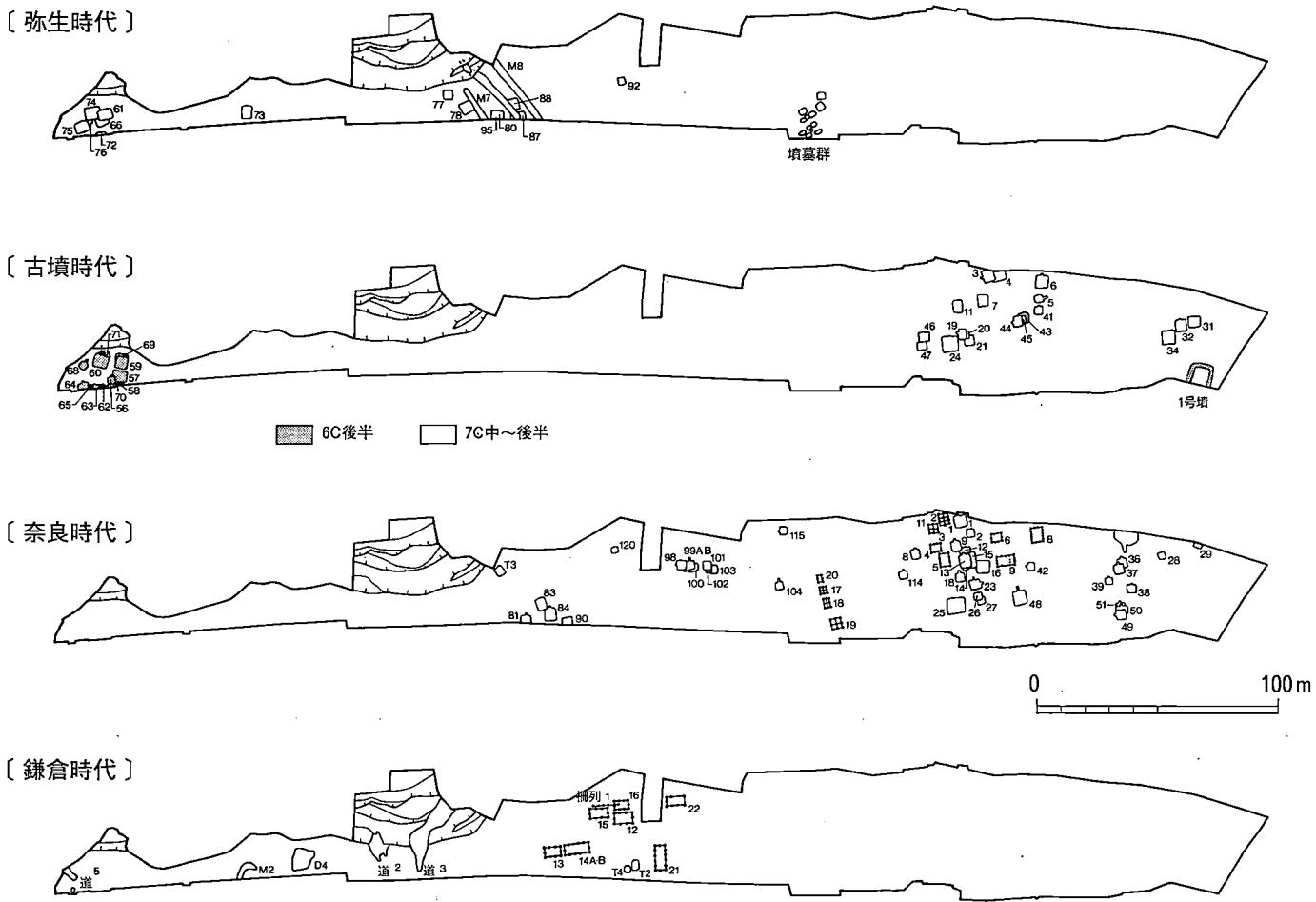
また、長島遺跡における鎌倉時代の建物群は居宅とみられるが、平安~鎌倉期には当地に長淵庄（朝倉町大字長淵）、黒島庄（朝倉町入地字黒島）の荘園が設けられ（註4）、或いはそれらの荘園に関わる人物が住まいしていたものであろう。

註1 高倉洋彰『弥生時代社会の研究』 1981 寧楽社

註2 拙著 「製塙土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』 1996

註3 甘木市史編纂委員会『甘木市史』 1982

註4 註4に同じ



第 231 図 長島遺跡集落変遷図

# 図 版



長島遺跡周辺航空写真(国土地理院 KU-76-2X C12-34)

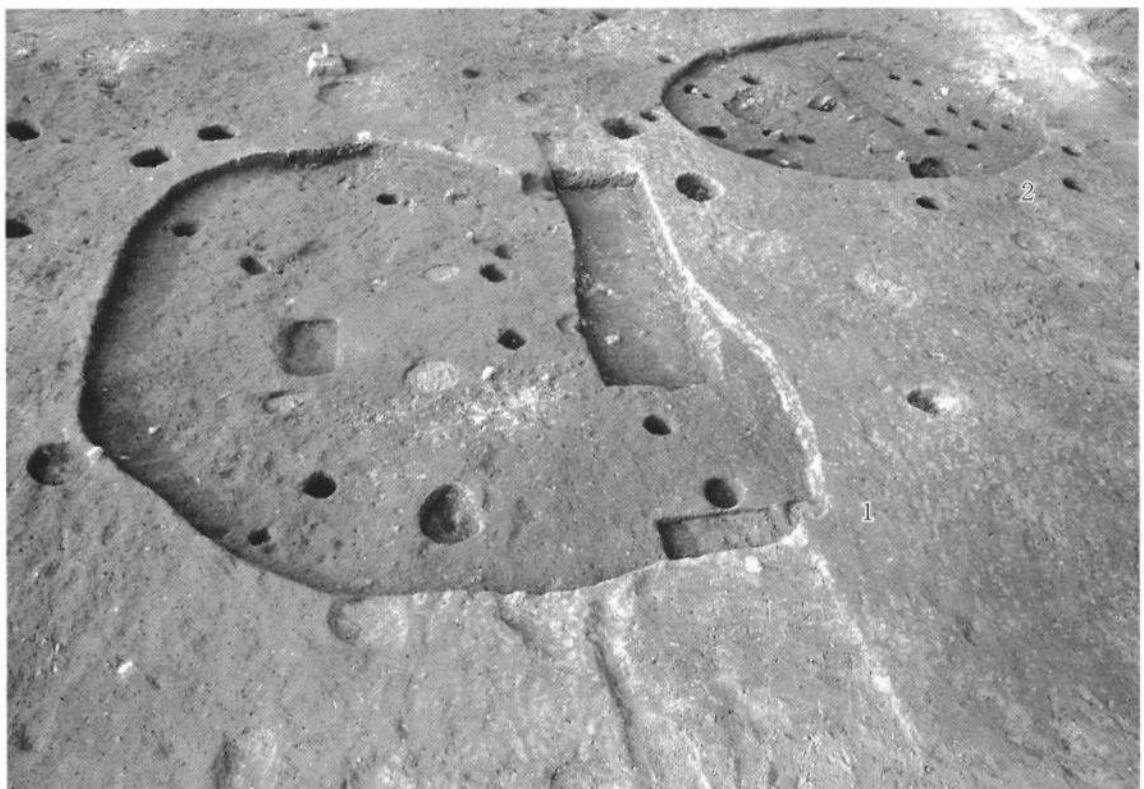
図版 2



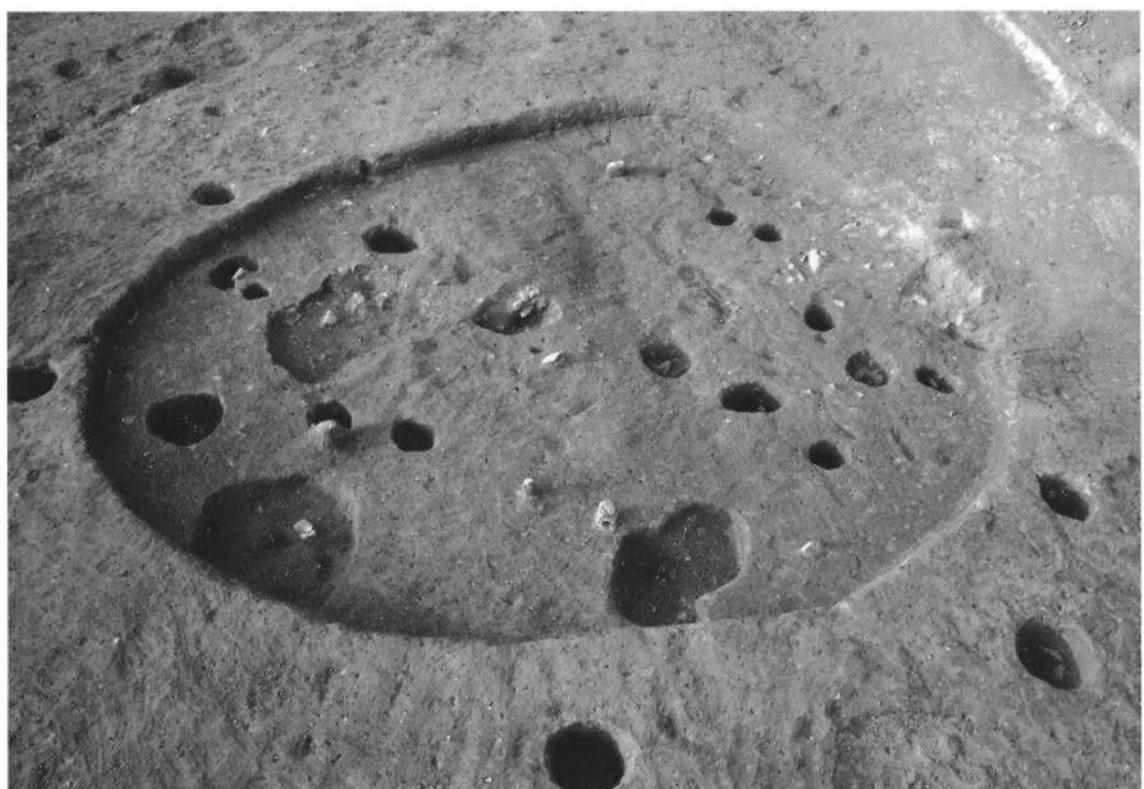
(1) 長島遺跡遠景(航空写真 南西上空から)



(2) 長島遺跡2次調査区全景(気球写真 東上空から)

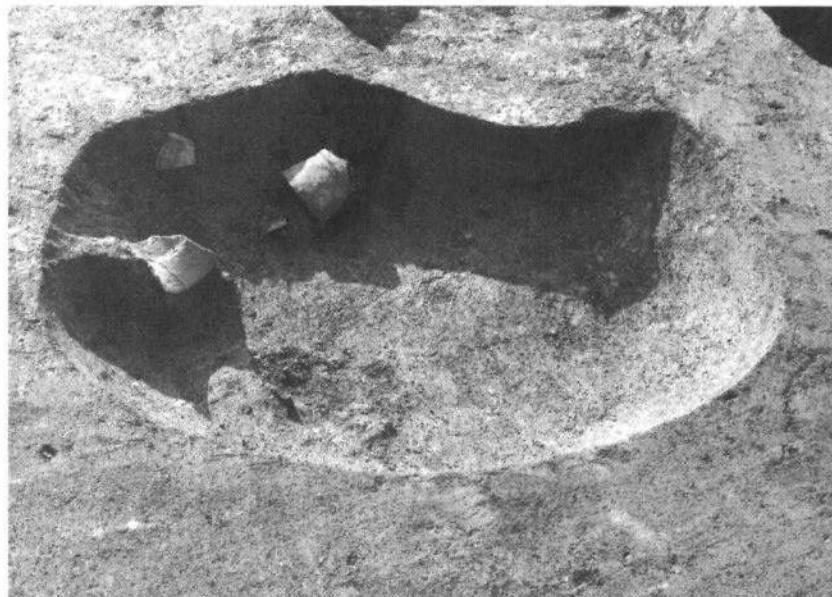


(1) 1号円形豎穴(南から)

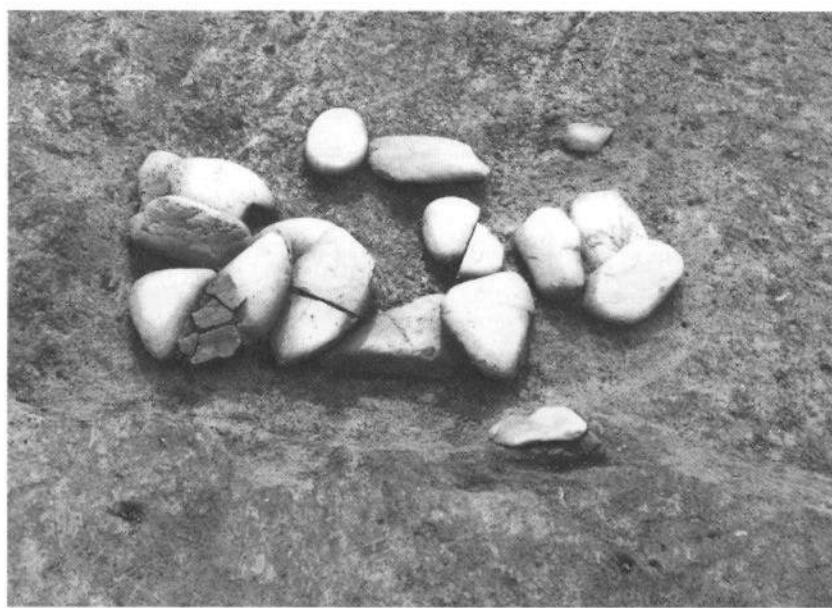


(2) 2号円形豎穴(南から)

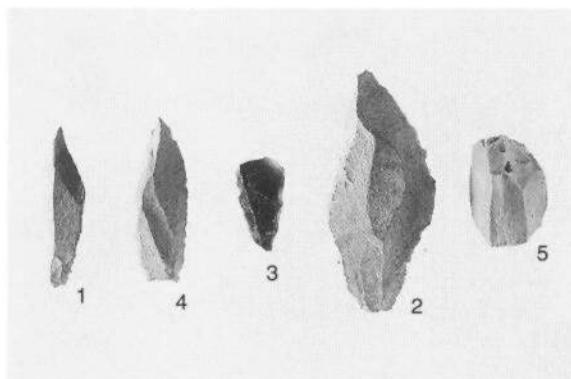
図版 4



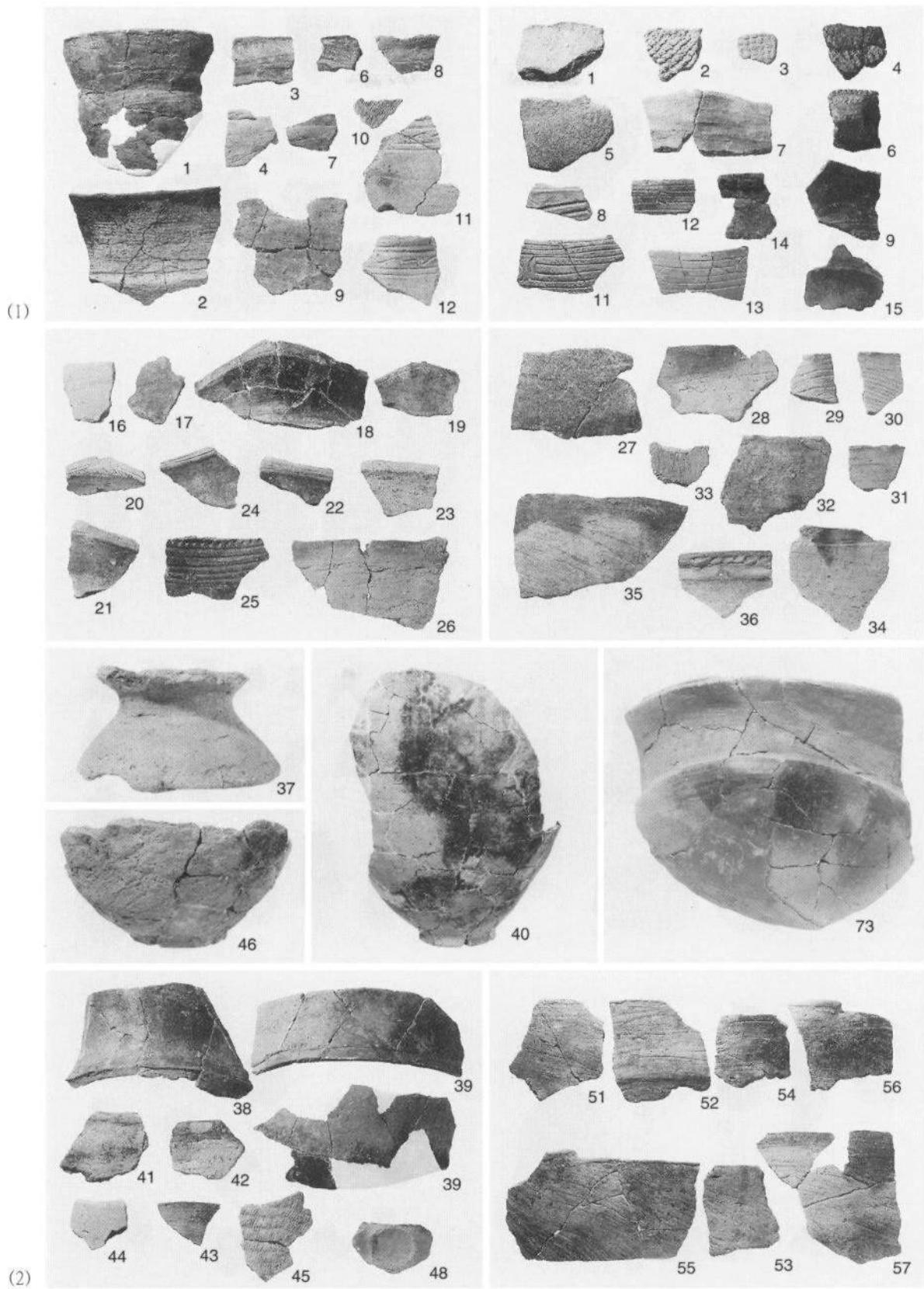
(1) 1号屋外炉(北から)

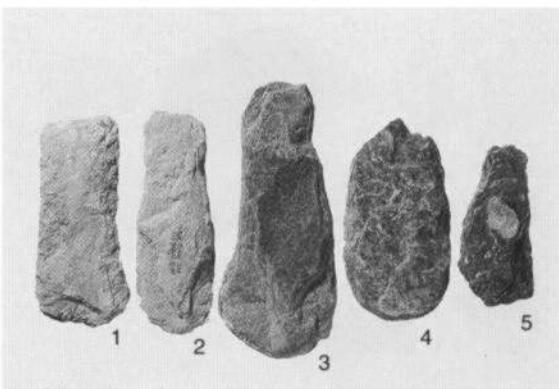
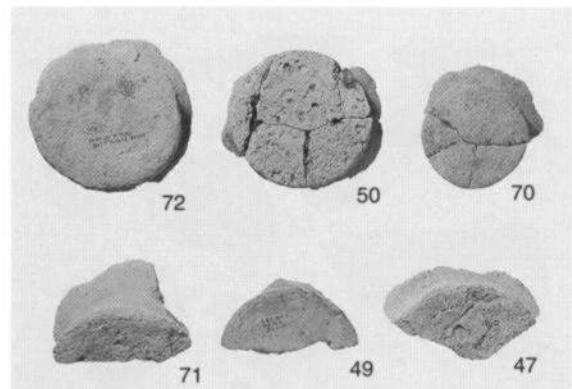
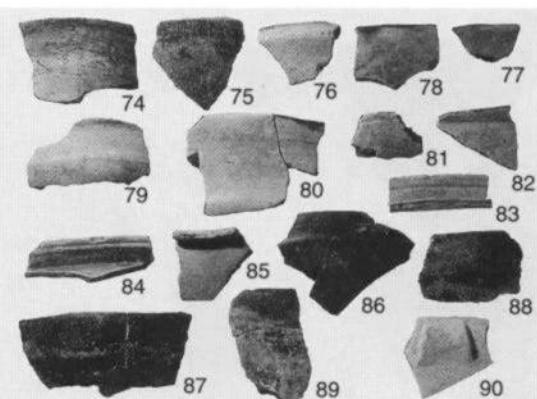
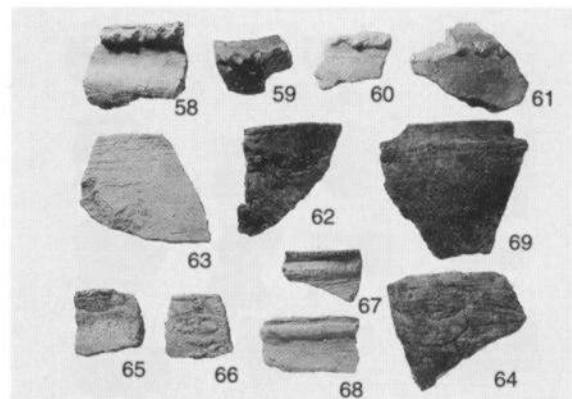


(2) 1号集石土坑(北から)

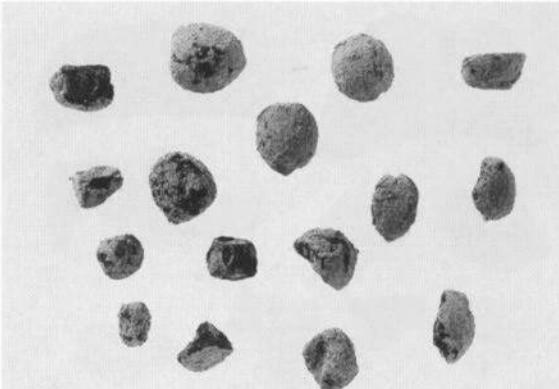
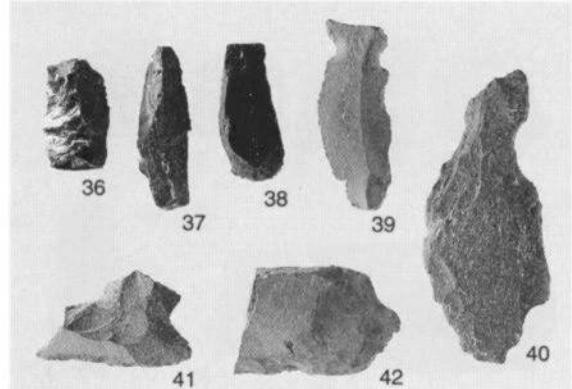
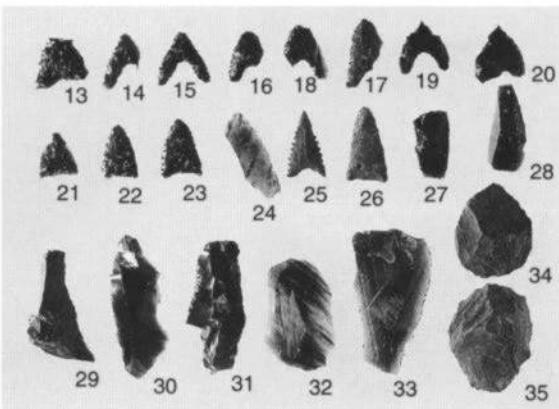
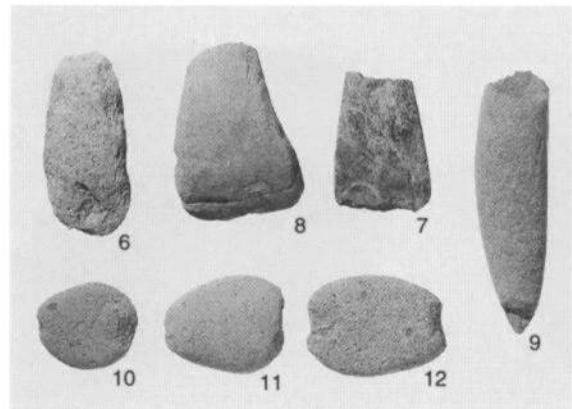


(3) 旧石器とみられる石器





(1)



(2)

(1) 包含層等出土縄文土器②

(2) 包含層等出土石器

(3) 包含層出土植物遺存体

(3)



(1) 61号竪穴住居(南西から)



(2) 66号竪穴住居(北東から)

図版 8



(1) 66号竪穴住居遺物出土状況(北西から)



(2) 73号竪穴住居、2号溝(東から)



(1) 75号竪穴住居(北東から)



(2) 遺物出土状況(北西から)

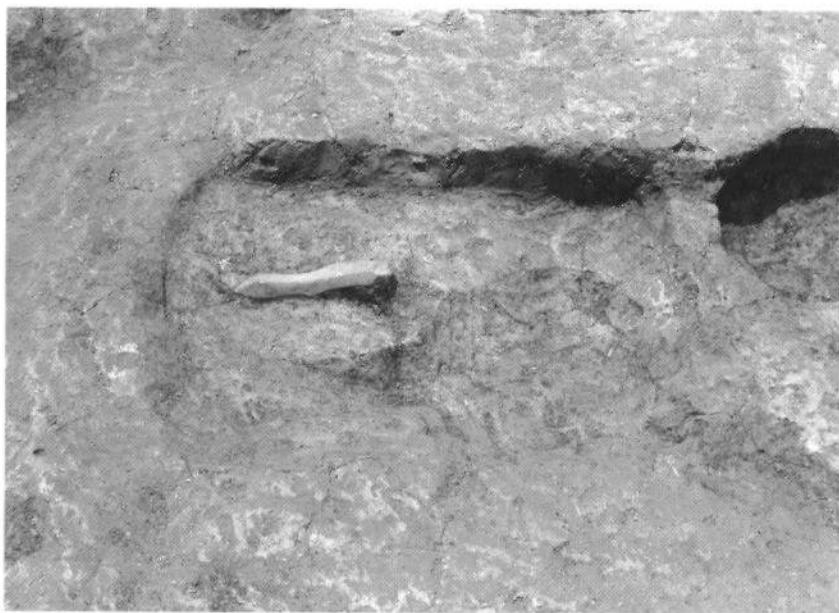


(3) 屋内土坑遺物出土状況(北西から)

図版 10



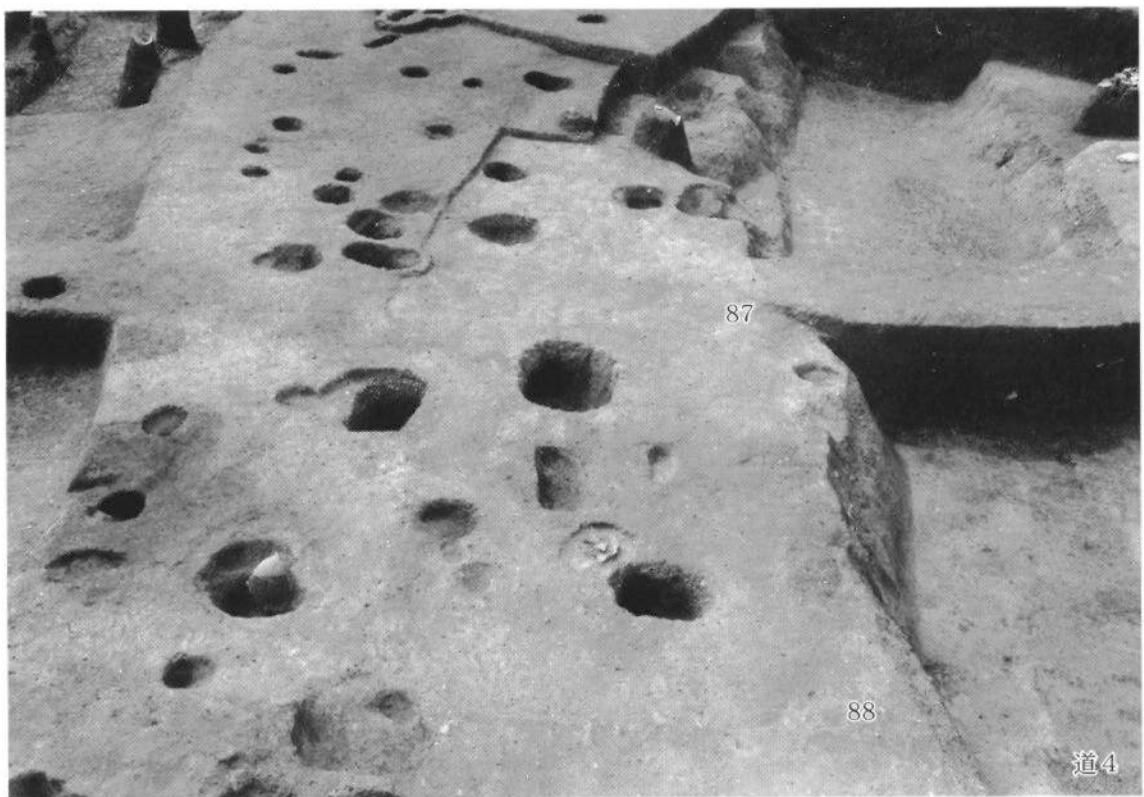
(1) 77号竪穴住居(南から)



(2) 屋内土坑砥石出土状況(北から)



(1) 78号竪穴住居(北東から)



(2) 87・88号竪穴住居(北西から)

道4

図版 12



(1) 92号竪穴住居(西から)



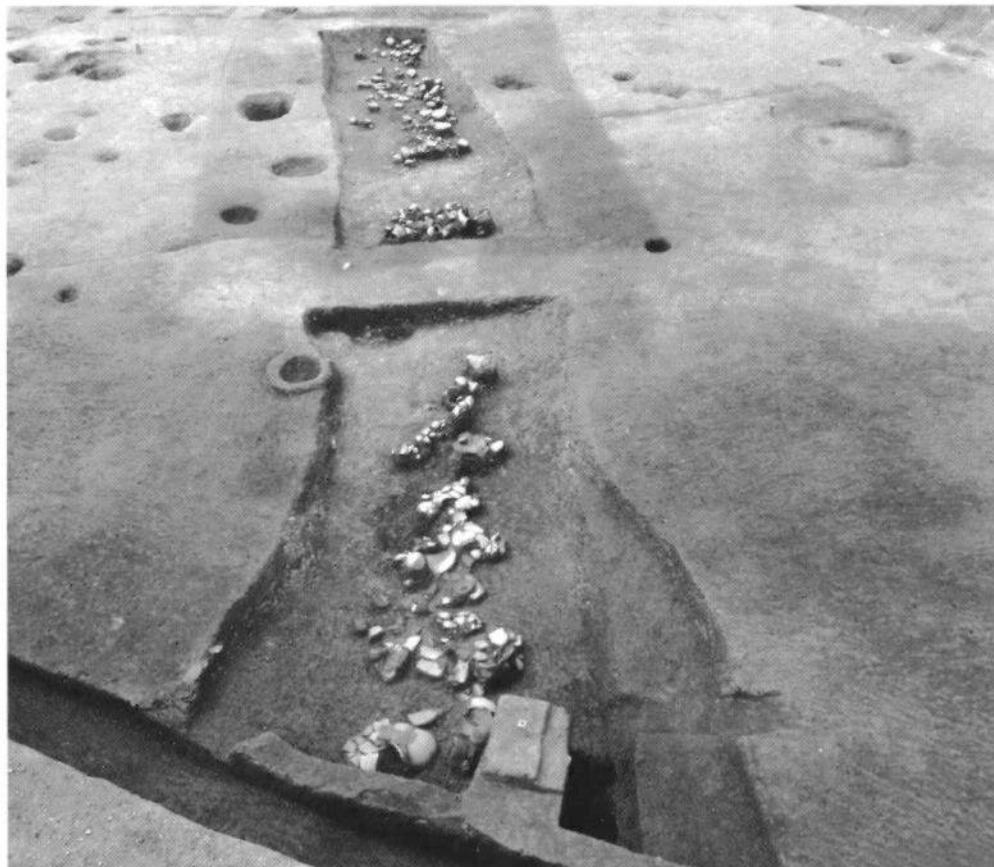
(2) 1号土坑(北から)



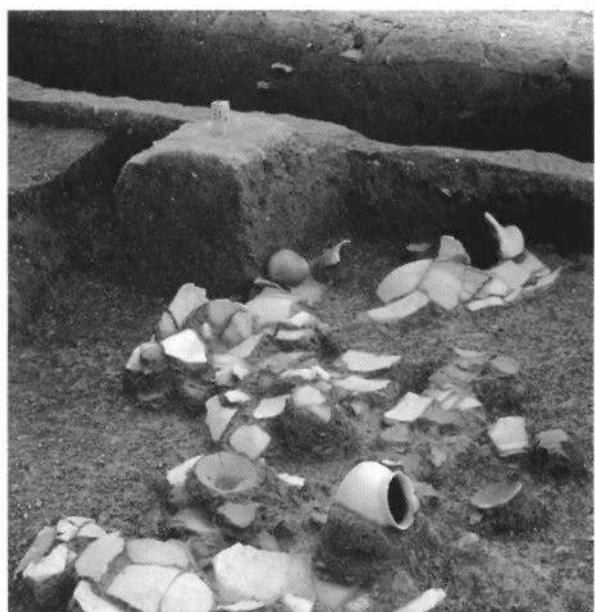
(1) 7・8号溝、4号通路(西上空から)



(2) 7号溝周辺部(西から)



(1) 7号溝(南東から)



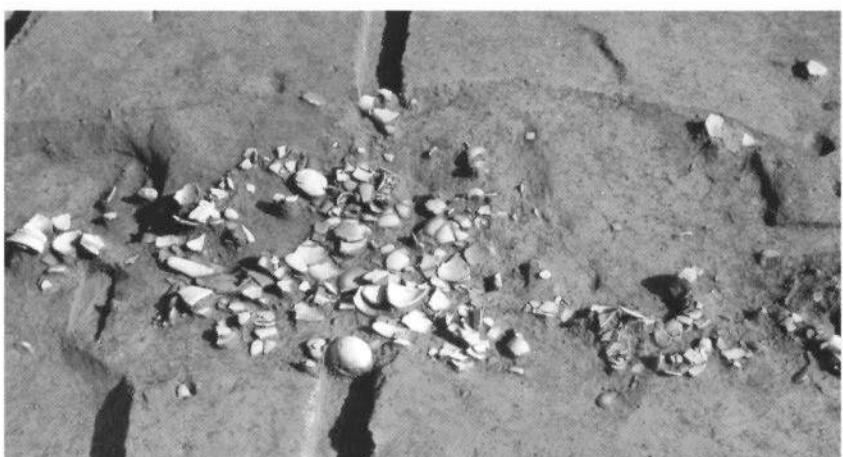
(2) 南端部遺物出土状況(北から)



(3) 中央部遺物出土状況(西から)



(1) 8号溝(南から)



(2) 北端部遺物出土状況  
(西から)



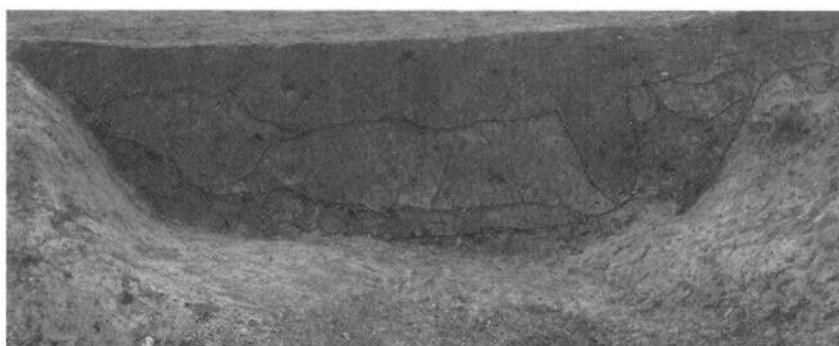
(3) 南端土層断面  
(北から)



(1) 4号通路(南東から)



(2) 北端部遺物出土状況  
(南西から)



(3) 北端土層断面  
(北西から)



(1) 4号通路出入口部、4号落込（北西から）



(2) 4号通路南端土層断面（北から）

図版 18



(1) 2号落込周辺部(西から)



(2) 遺物出土状況(北から)



(1) 3号落込土層堆積状況(西から)



(2) 遺物出土状況(北から)



(1) 4号落込(東から)



(2) 土層堆積状況(北東から)



弥生時代墳墓群全景（北東から）



(1) 1~7号石棺墓、20・21号土壙墓(北東から)



(2) 1~6号石棺墓、18号土壙墓(北西から)



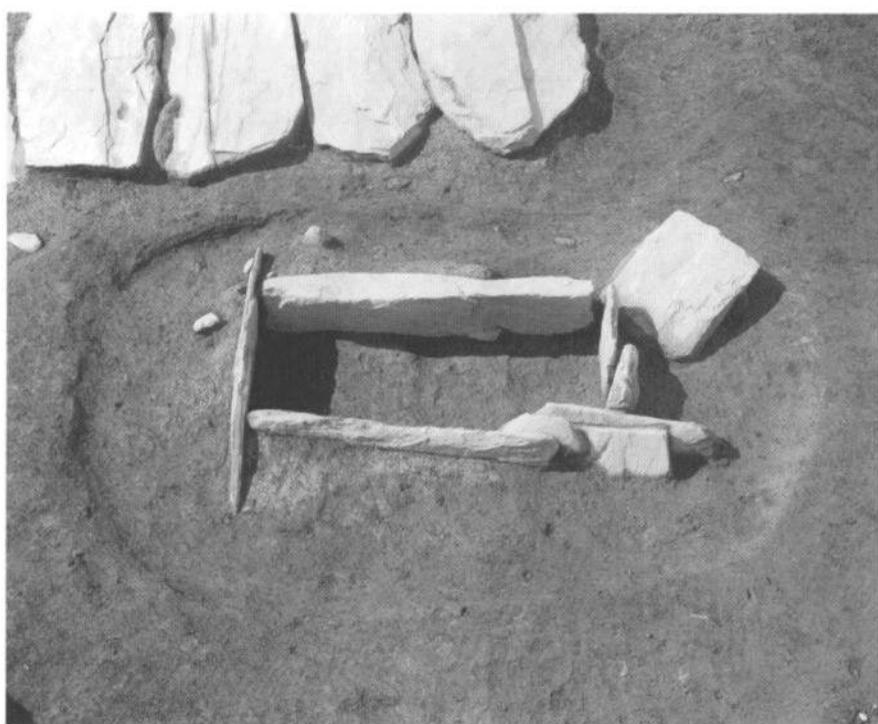
(1) 1・2号石棺墓(北西から)



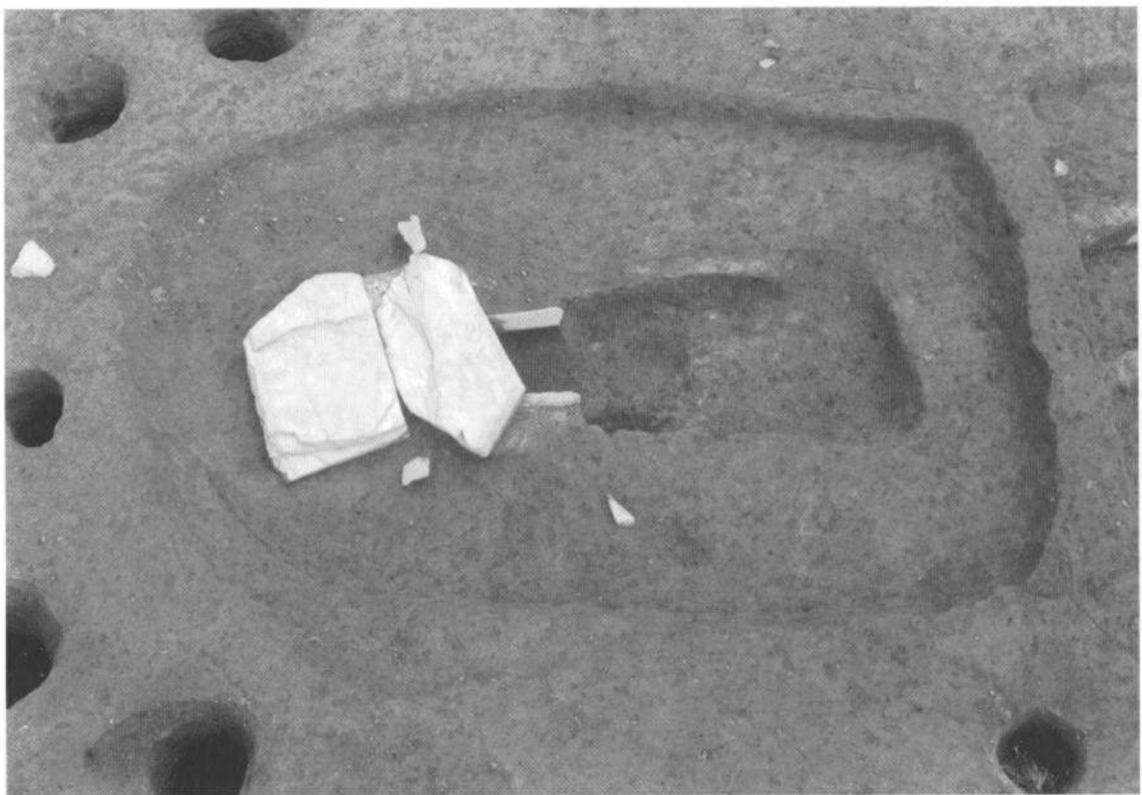
(2) 1号石棺墓蓋石除去後(南西から)



(1) 1号石棺墓人骨出土状況(南西から)



(2) 2号石棺墓(南東から)



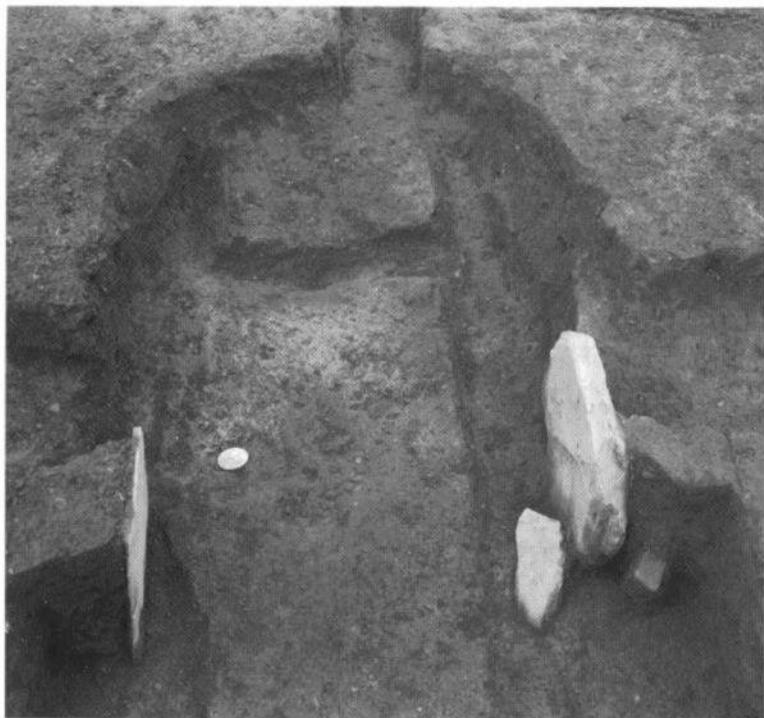
(1) 3号石棺墓（北西から）



(2) 蓋石除去後（南西から）



(1) 4号石棺墓(北西から)



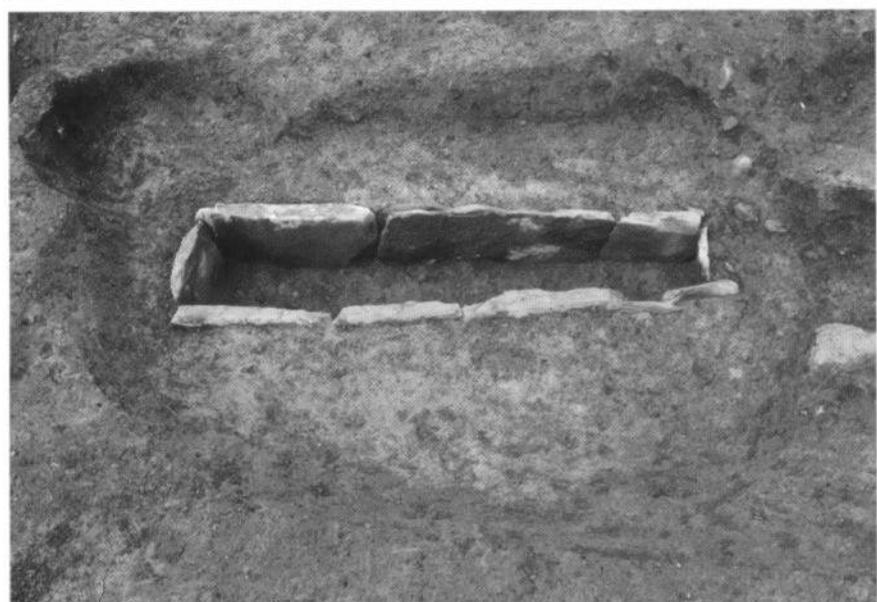
(2) 仿製鏡出土状況(南西から)



(3) 仿製鏡出土状況(北から)



(1) 5号石棺墓  
(南から)



(2) 蓋石除去後  
(南から)



(3) ガラス玉出土  
状況(東から)



(1) 6号石棺墓検出状況(北東から)



(2) 完堀状況(北西から)



(1) 7号石棺墓土層断面(北西から)



(2) 標石の状況(北西から)



(1) 7号石棺墓、21号土壤墓  
(北西から)



(2) 人骨出土状況 (南西から)



(1) 管玉出土状況(南西から)



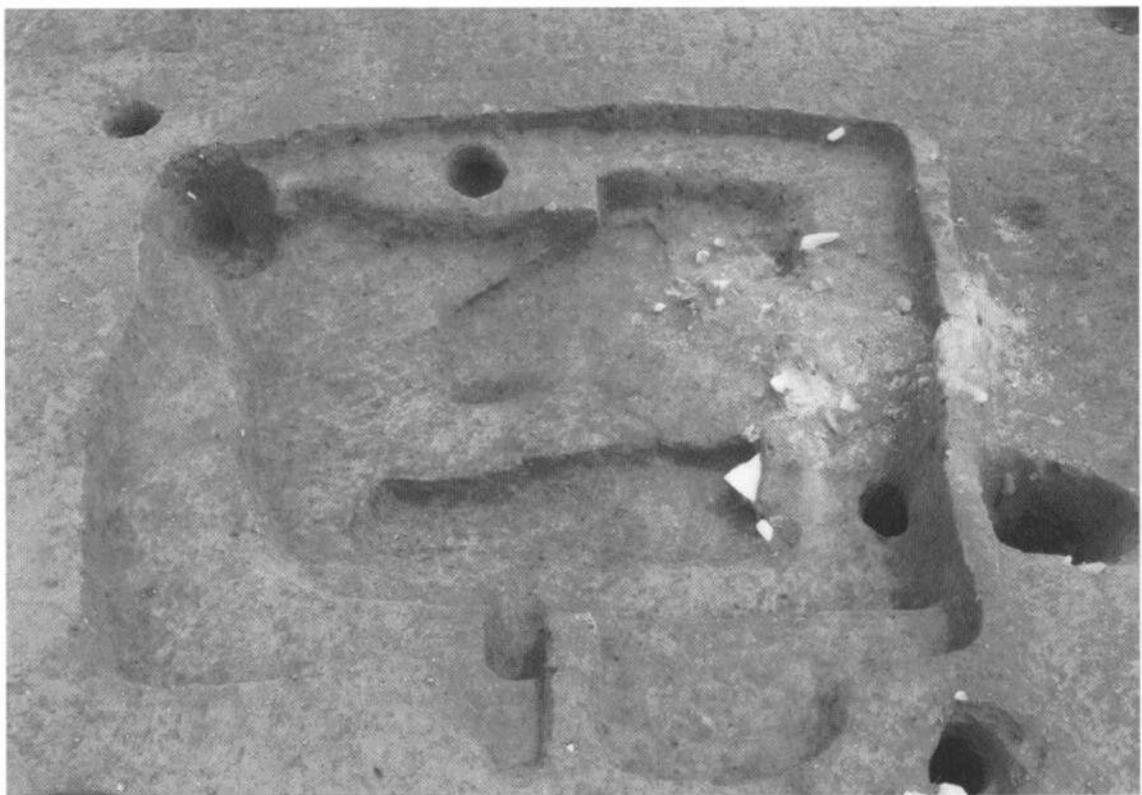
(2) 8号石棺墓(南東から)



(1) 1号甕棺墓(南西から)



(2) 1号甕棺墓埋置状況  
(北東から)



(1) 18号土壙墓(北西から)



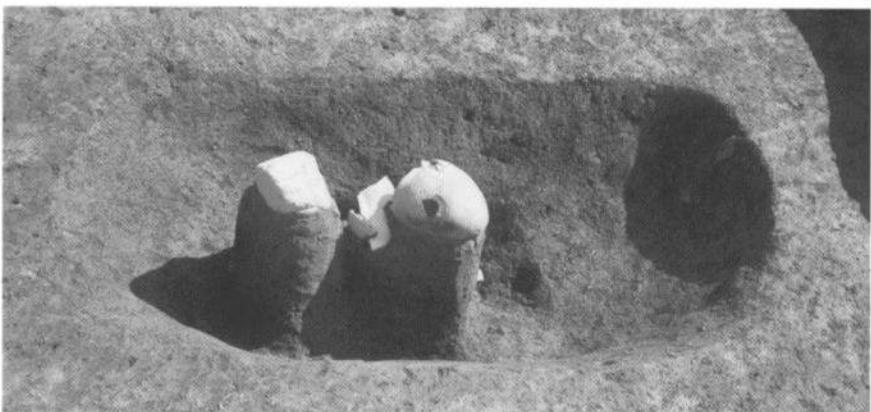
(2) 19号土壙墓(北から)



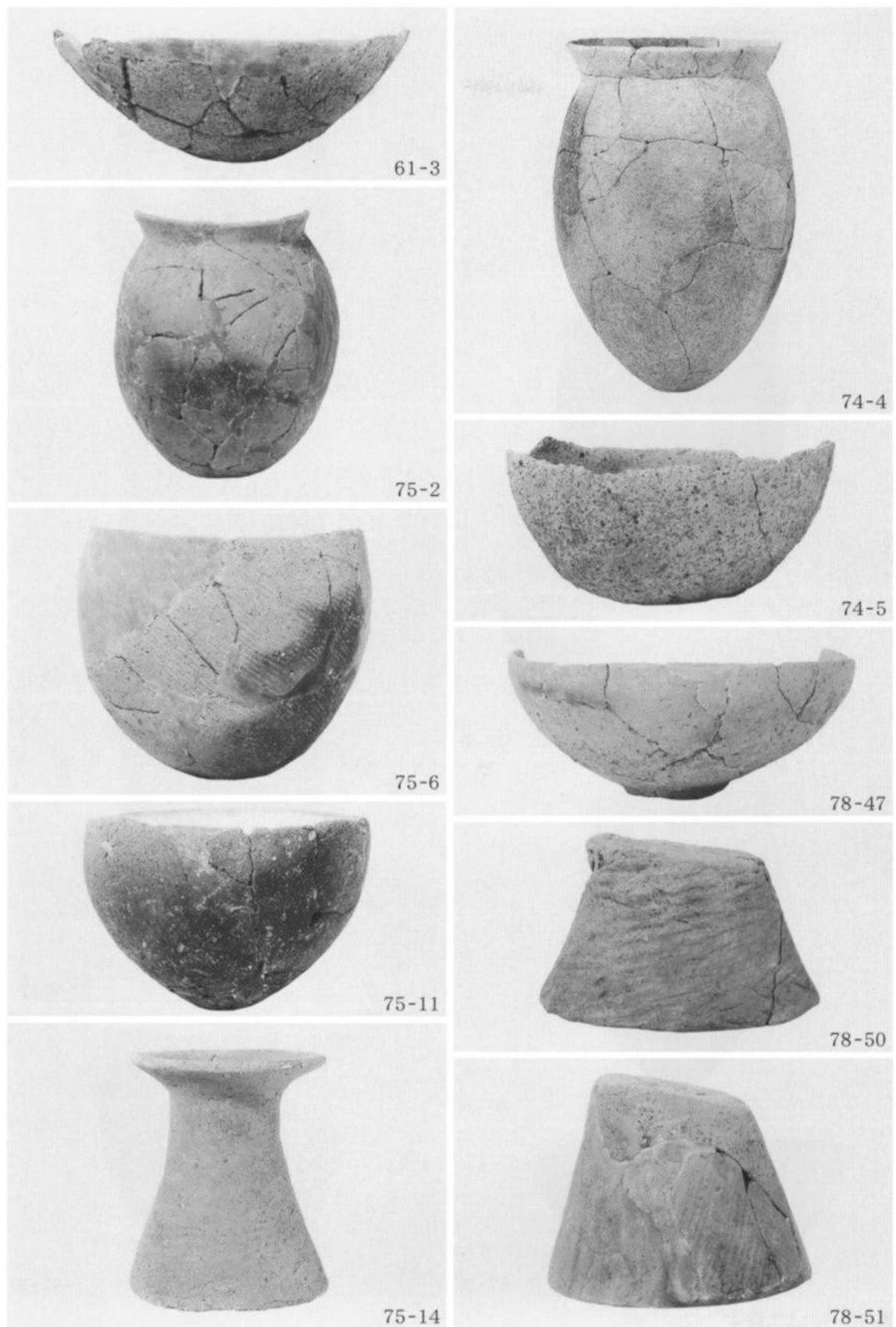
(1) 20号土塚  
(南西から)



(2) 21号土塚  
(北東から)



(3) 遺物出土状況  
(北西から)



竪穴住居出土土器①



80-2



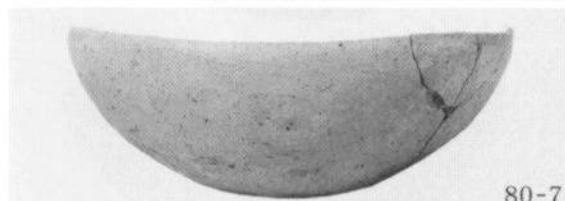
95-2



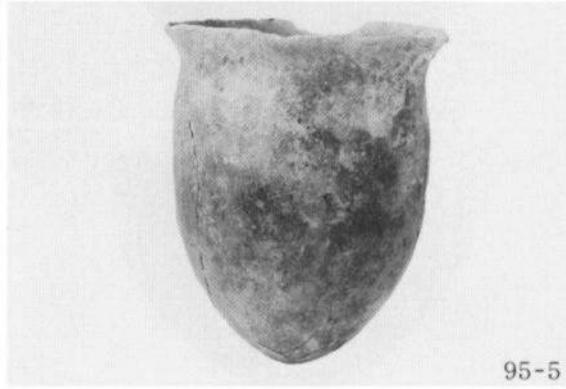
80-3



95-3



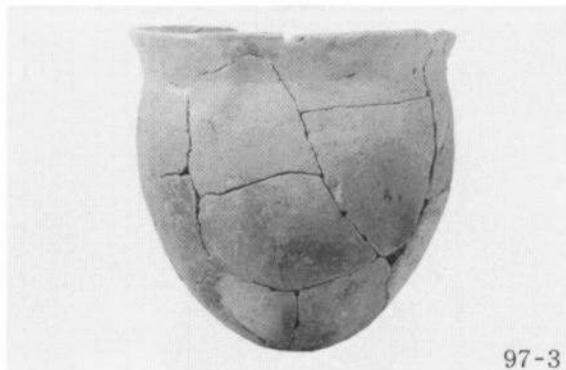
80-7



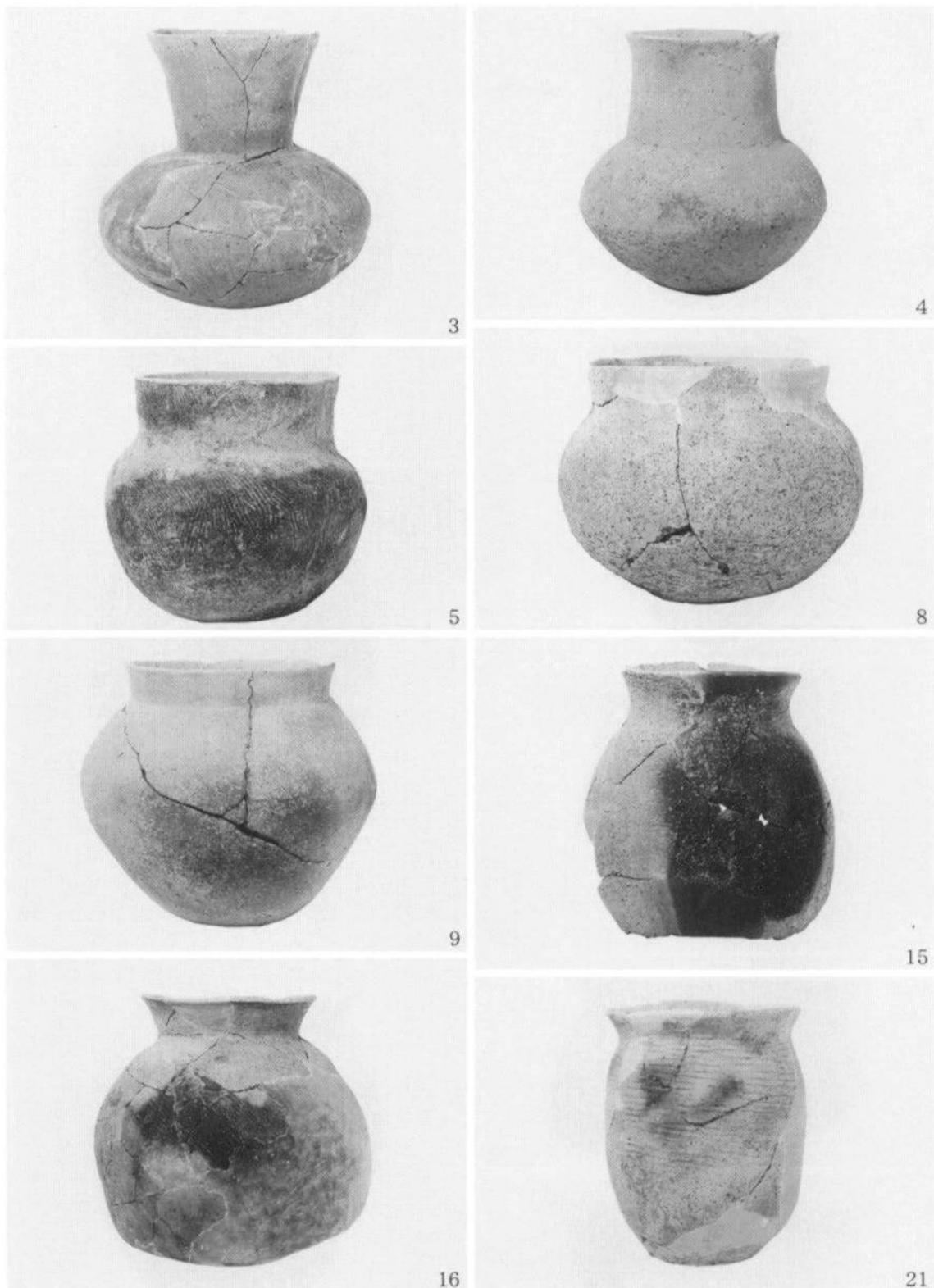
95-5



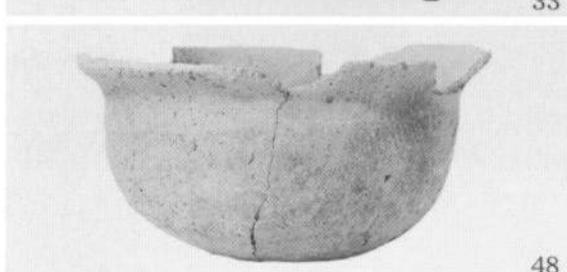
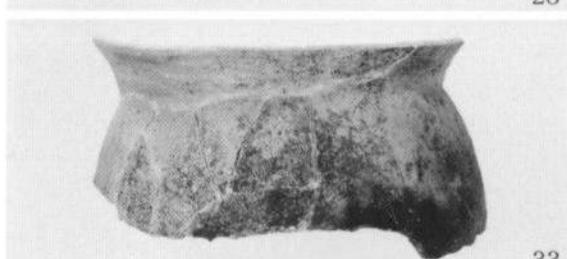
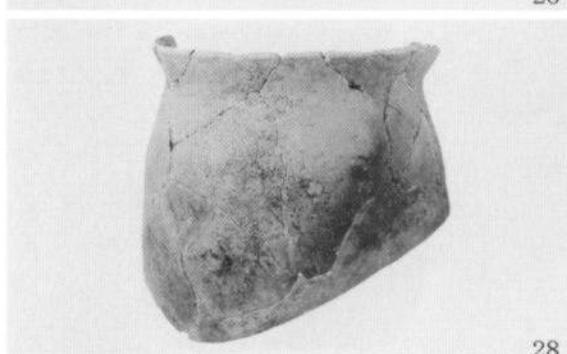
87-1

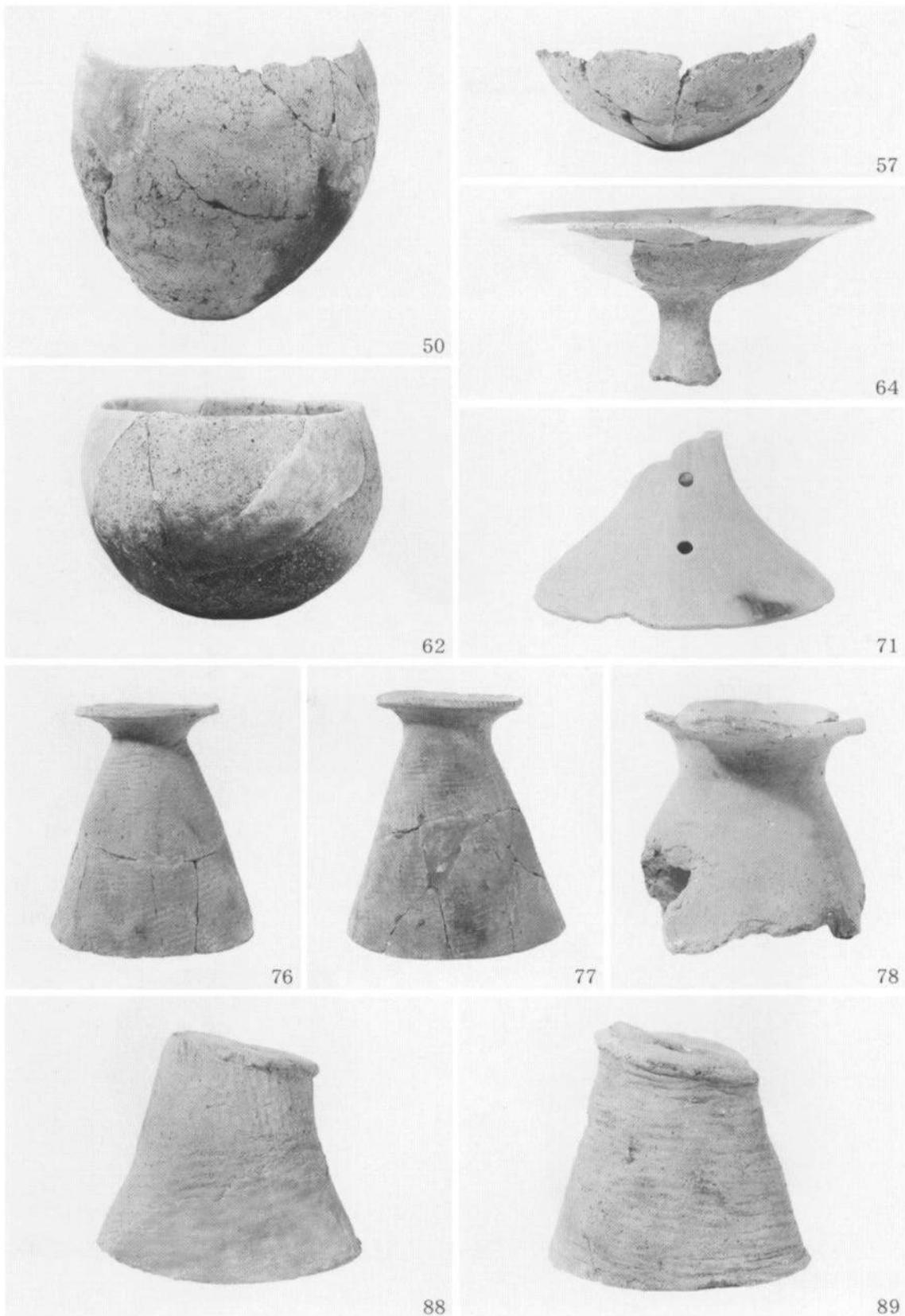


97-3



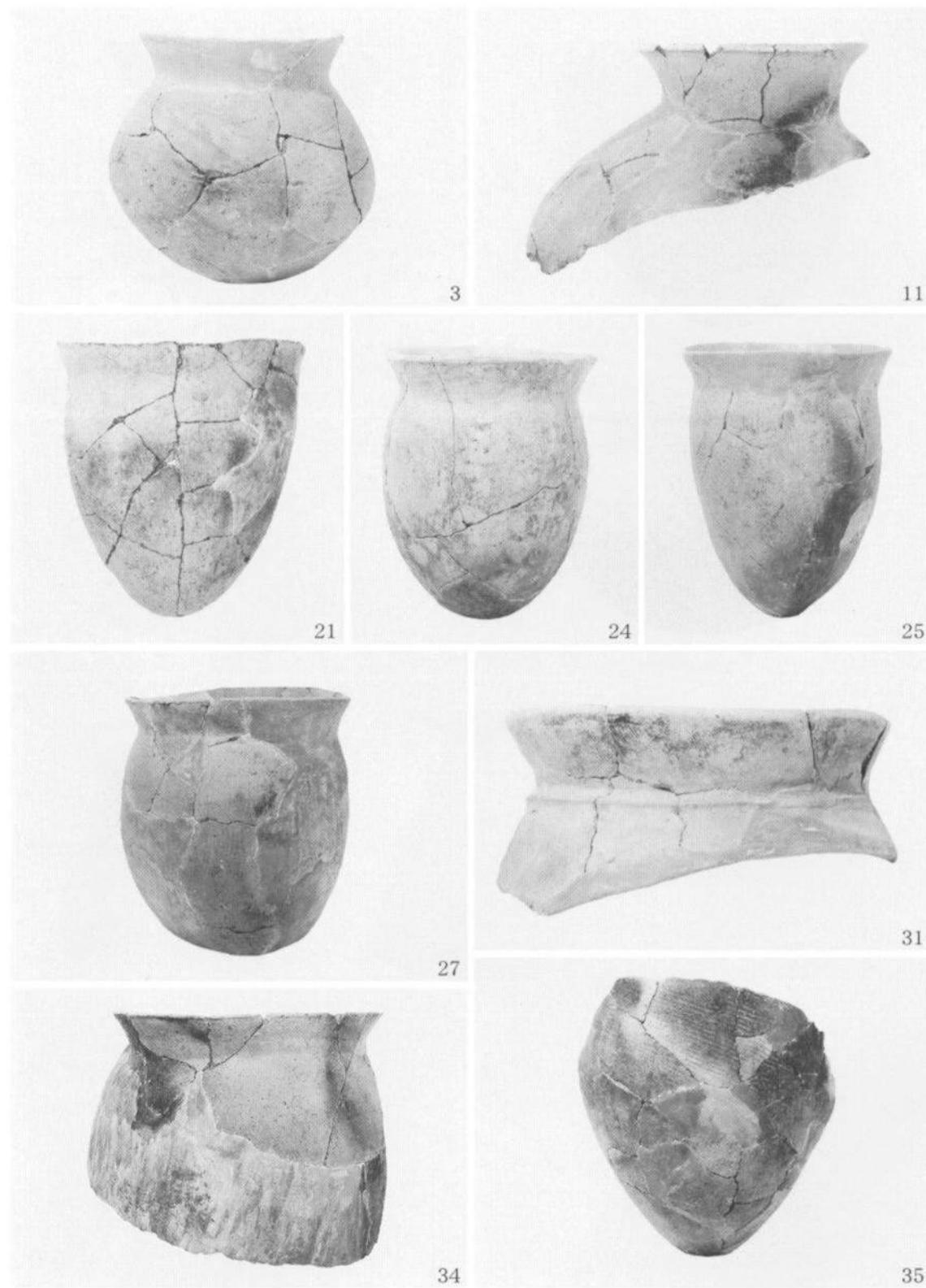
7号溝出土土器①



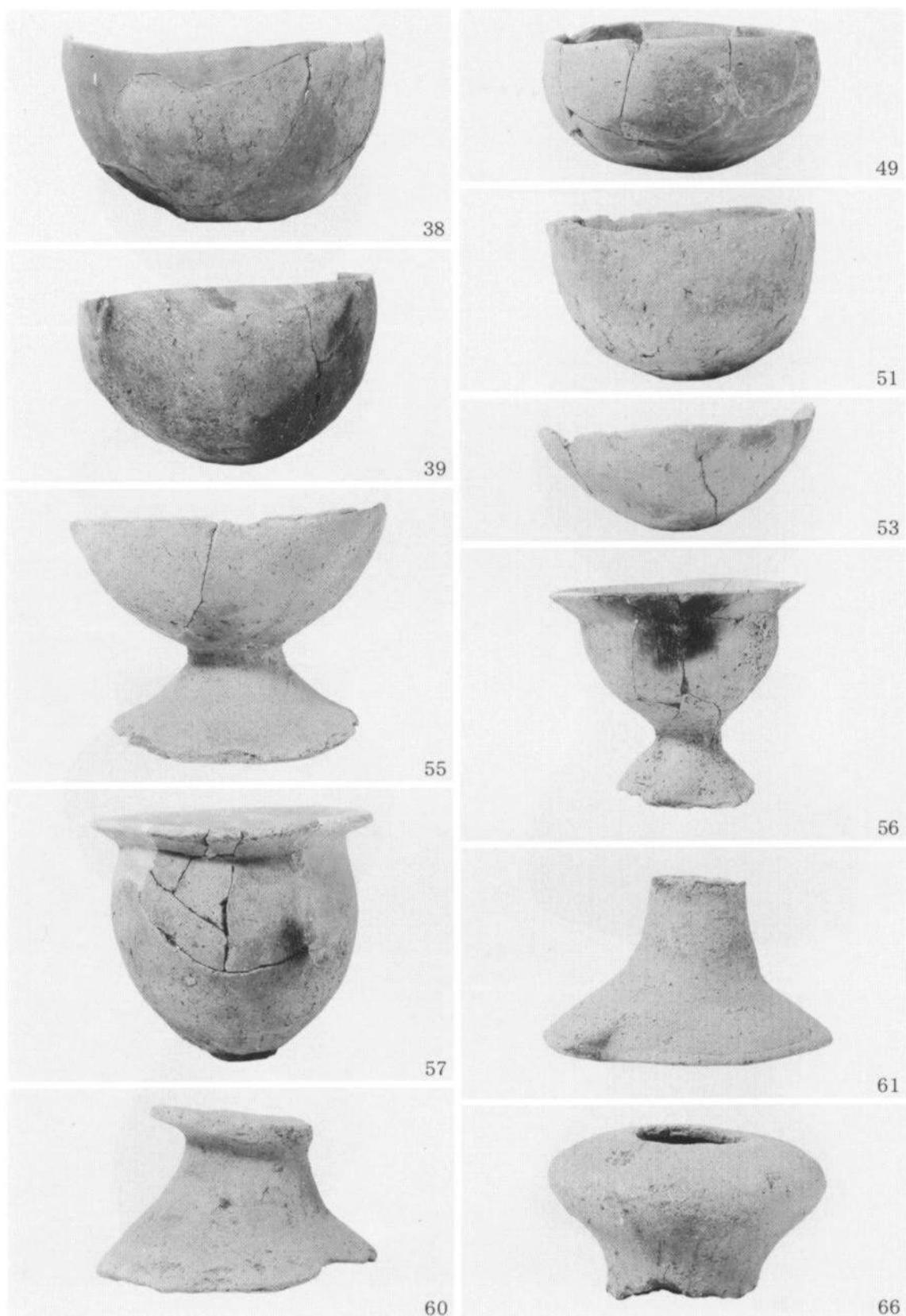


7号溝出土土器③

図版 40

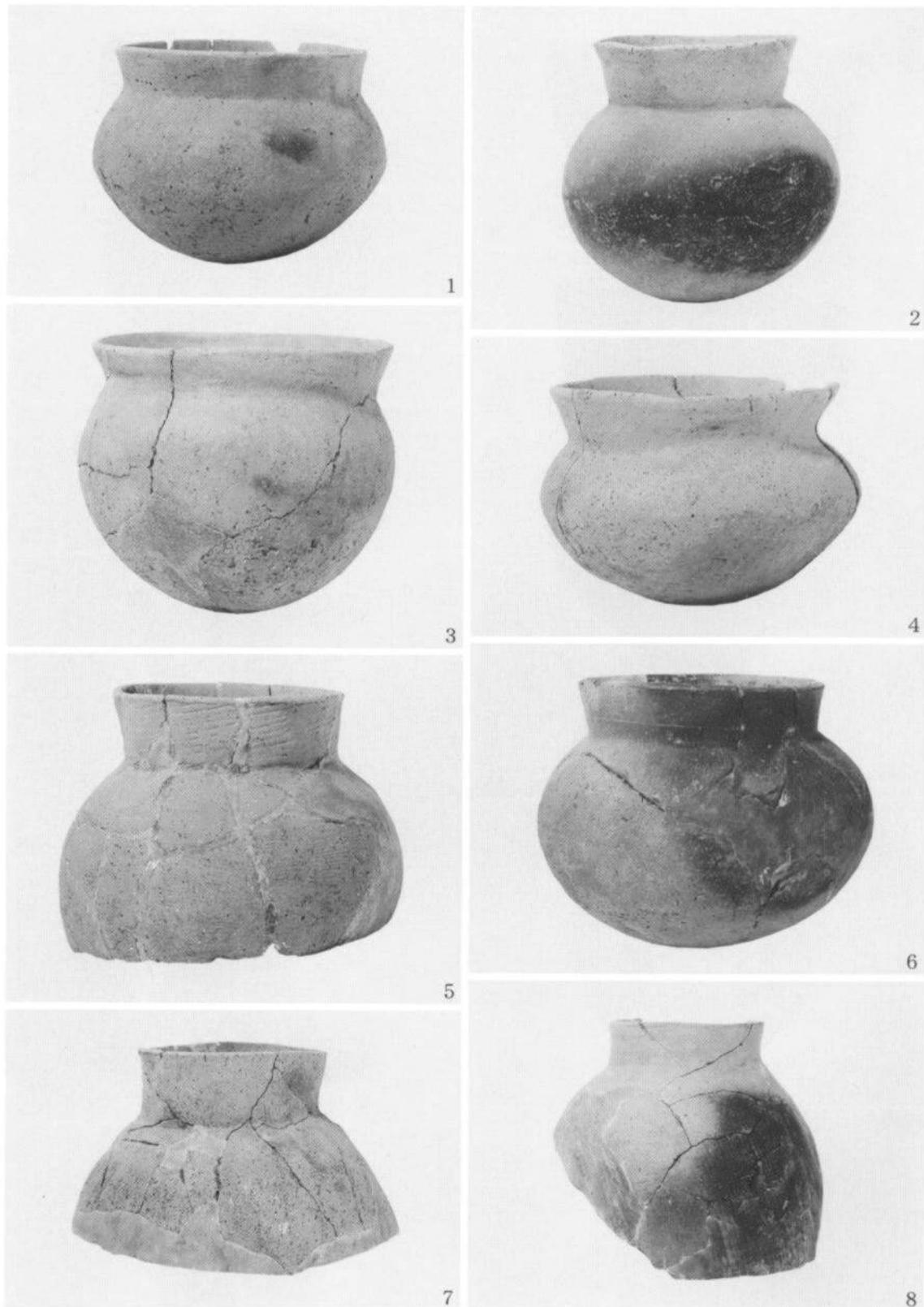


8号溝出土土器①

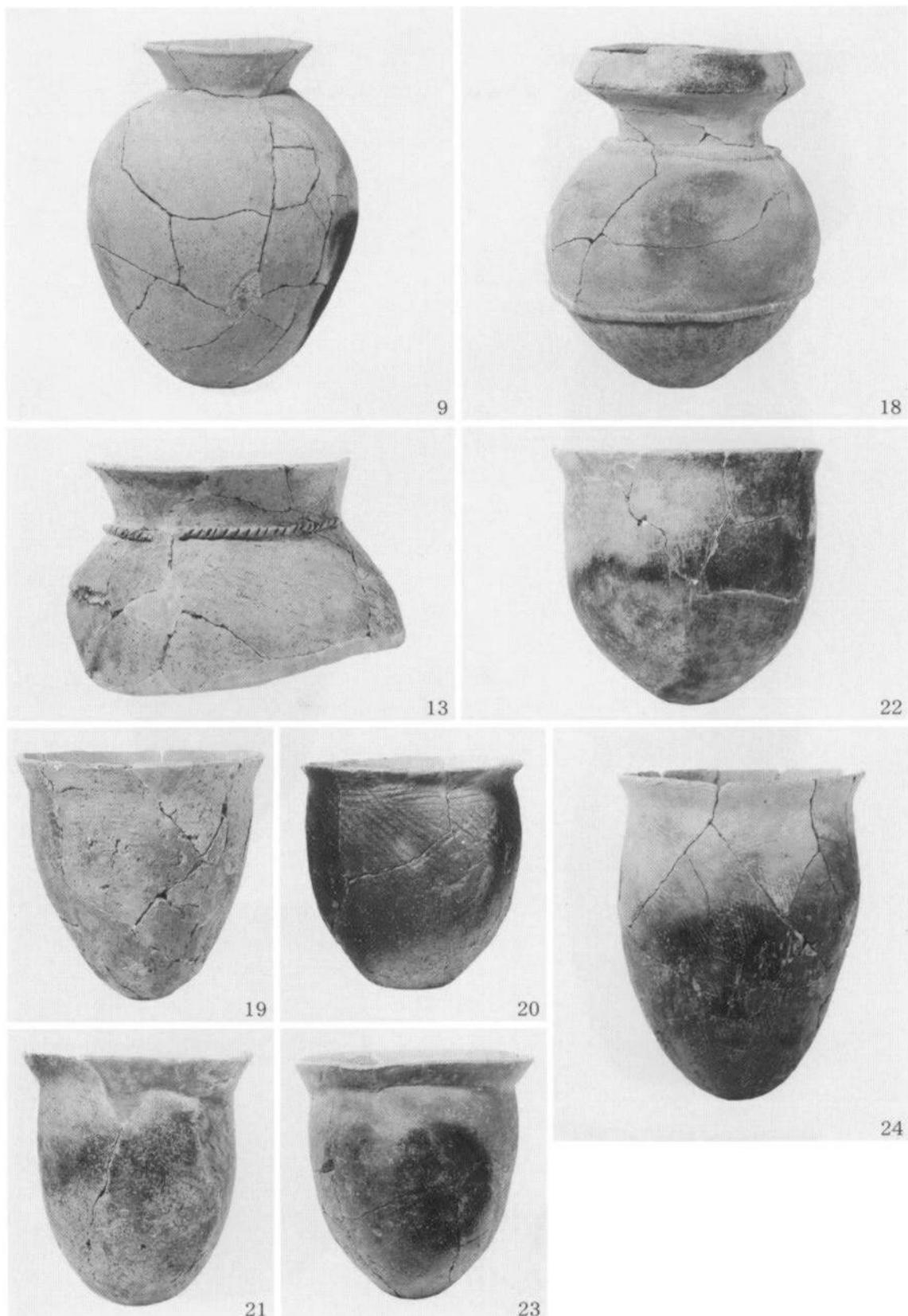


8号溝出土土器②

图版 42



4号通路出土土器①



4号通路出土土器②



28



40



43



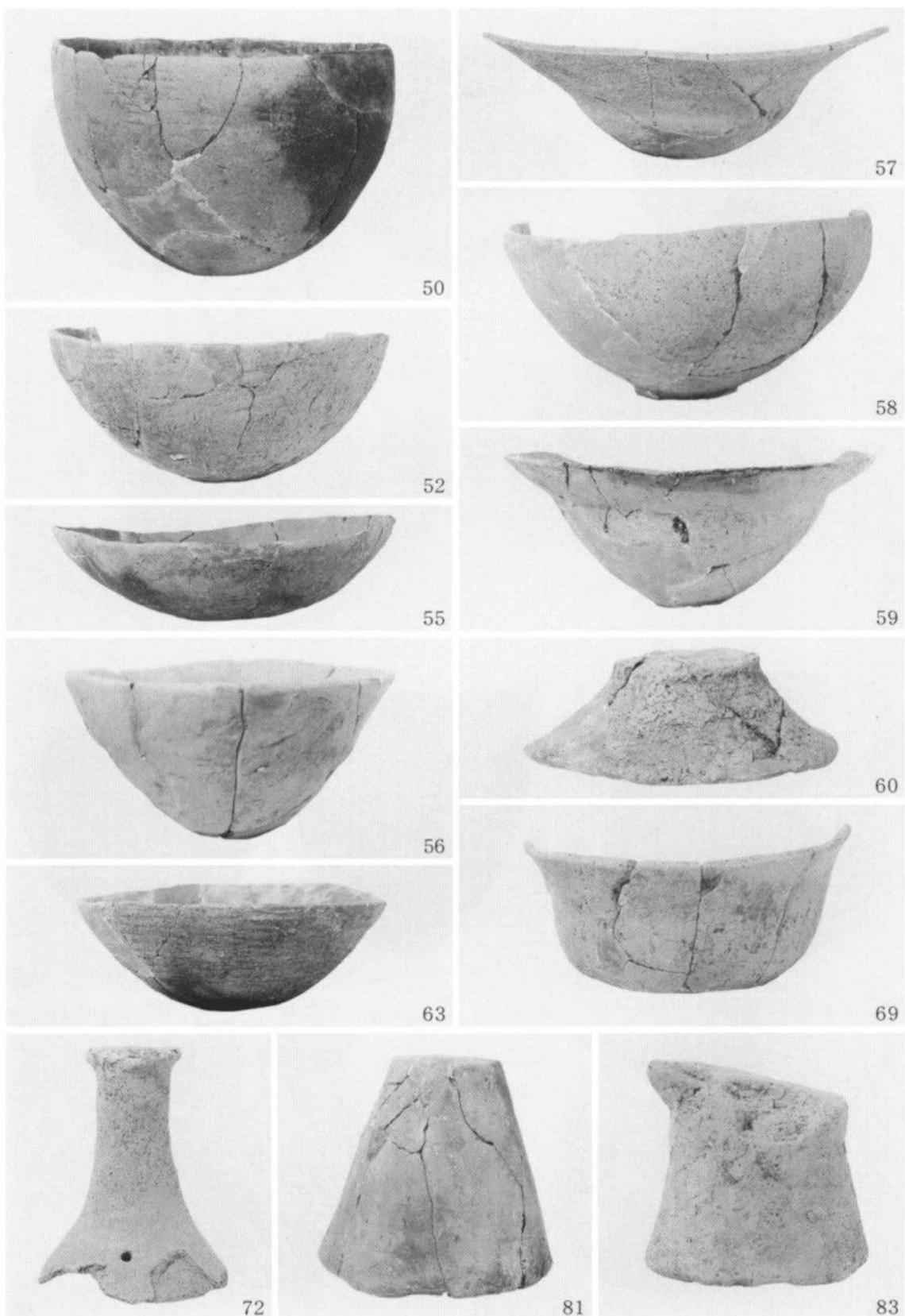
47



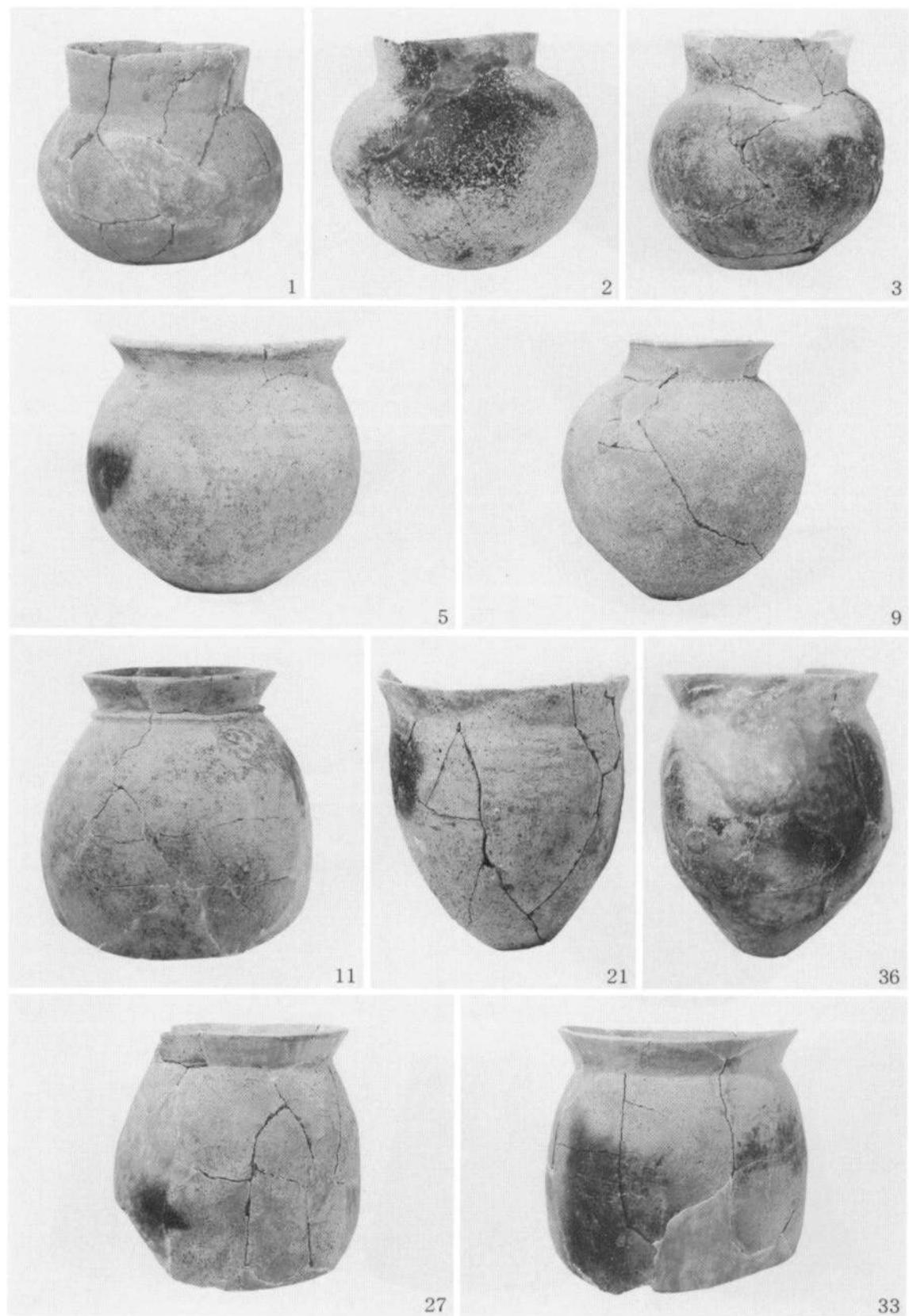
38



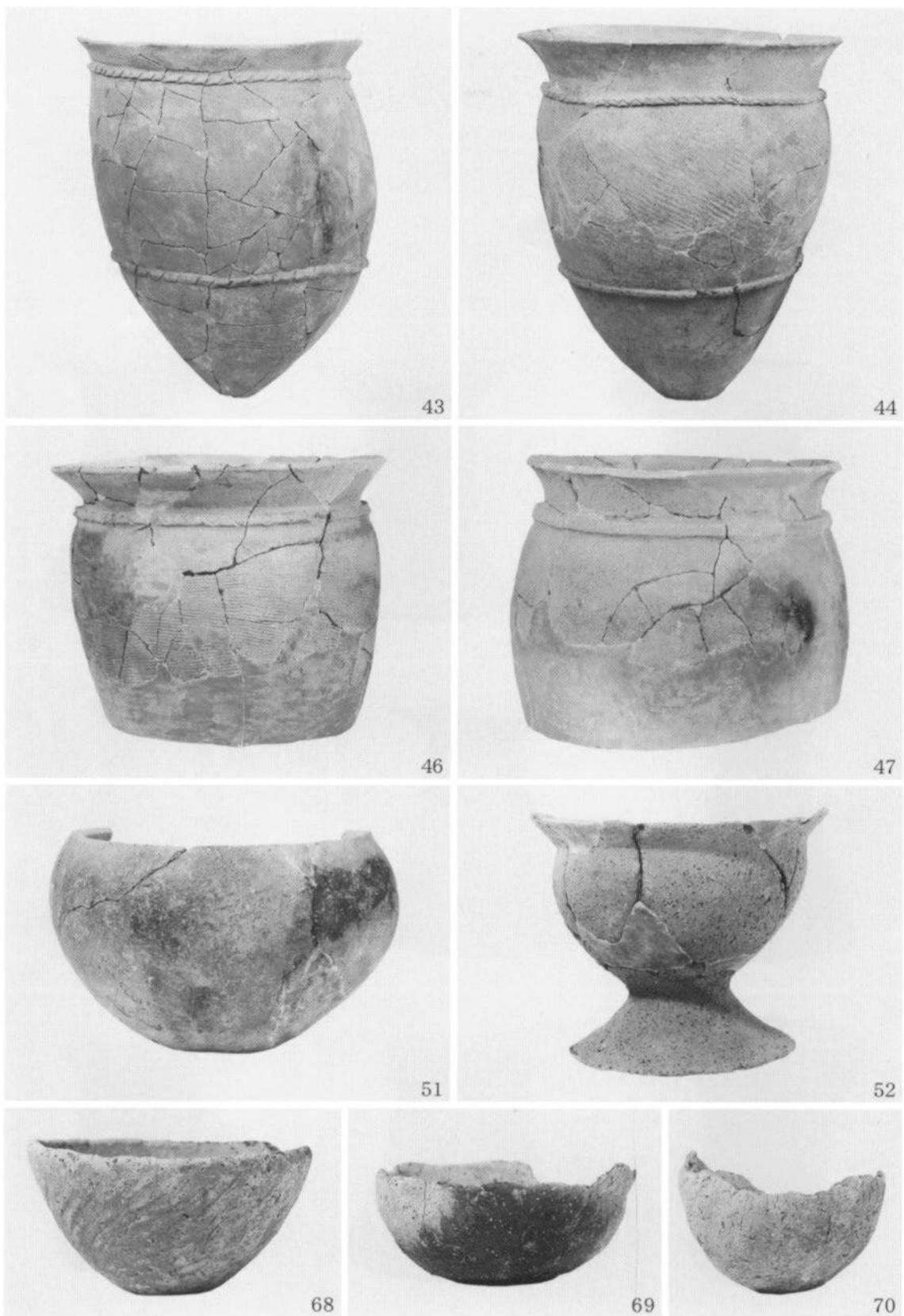
42



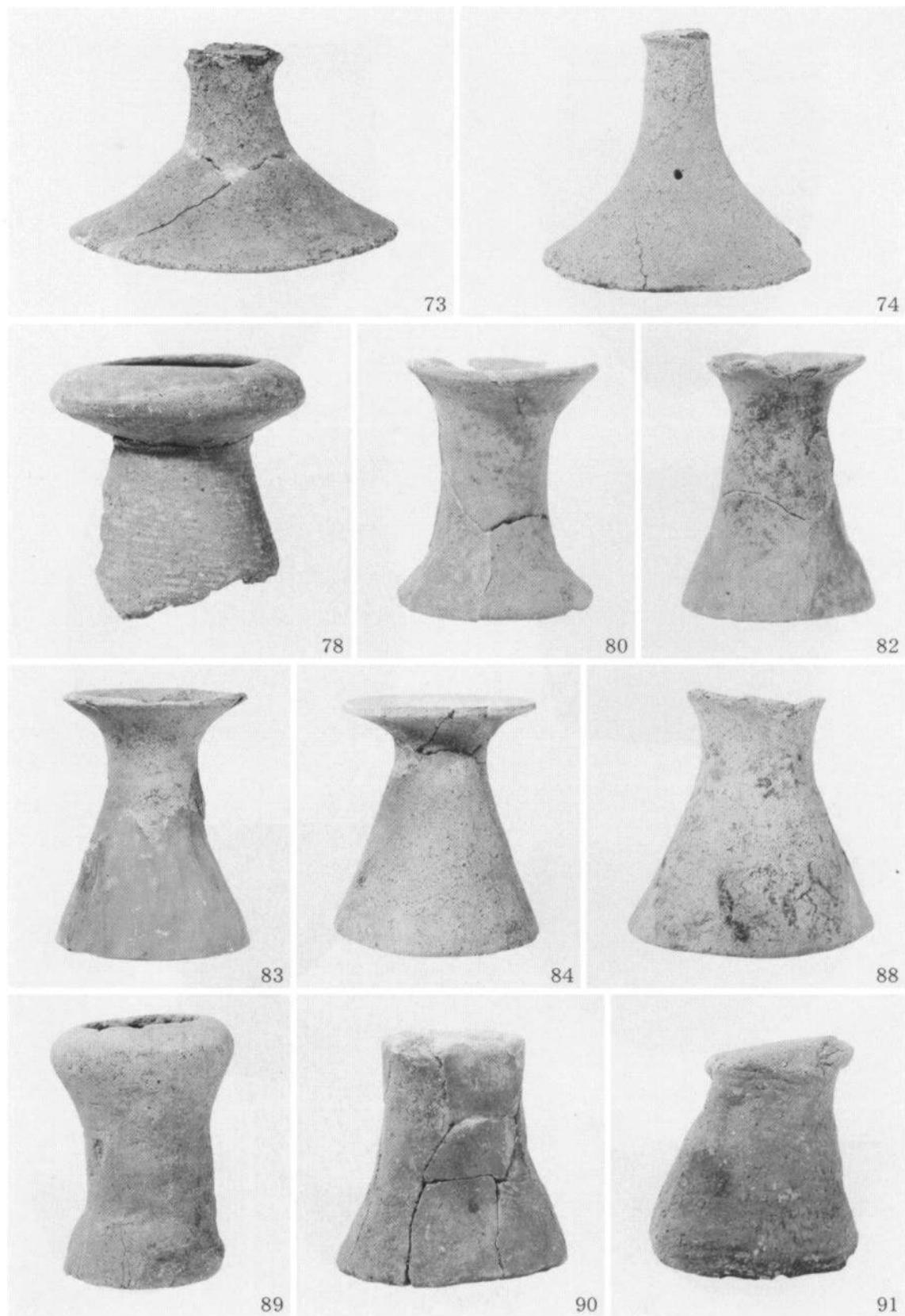
4号通路出土土器④



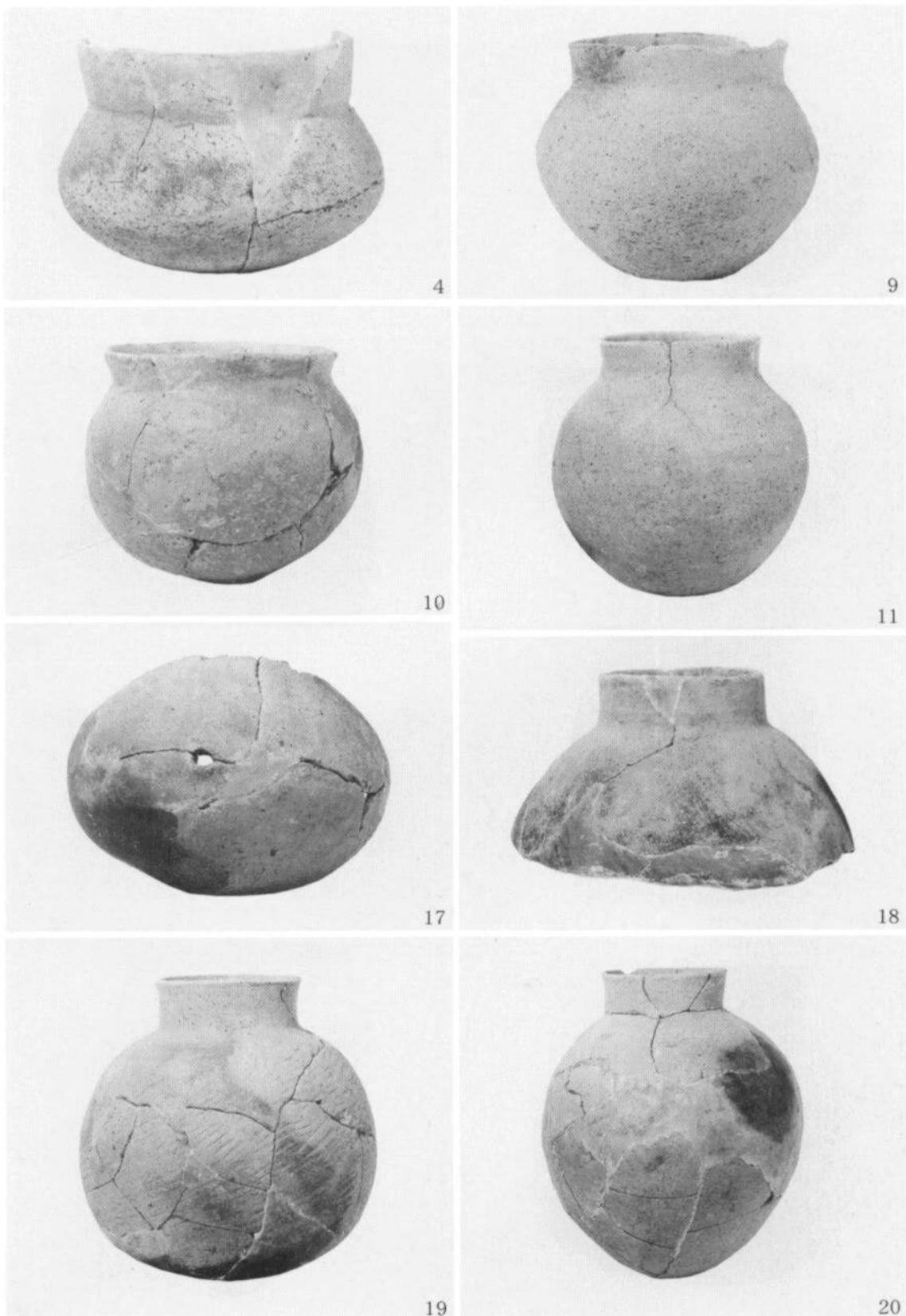
2号落込出土土器①



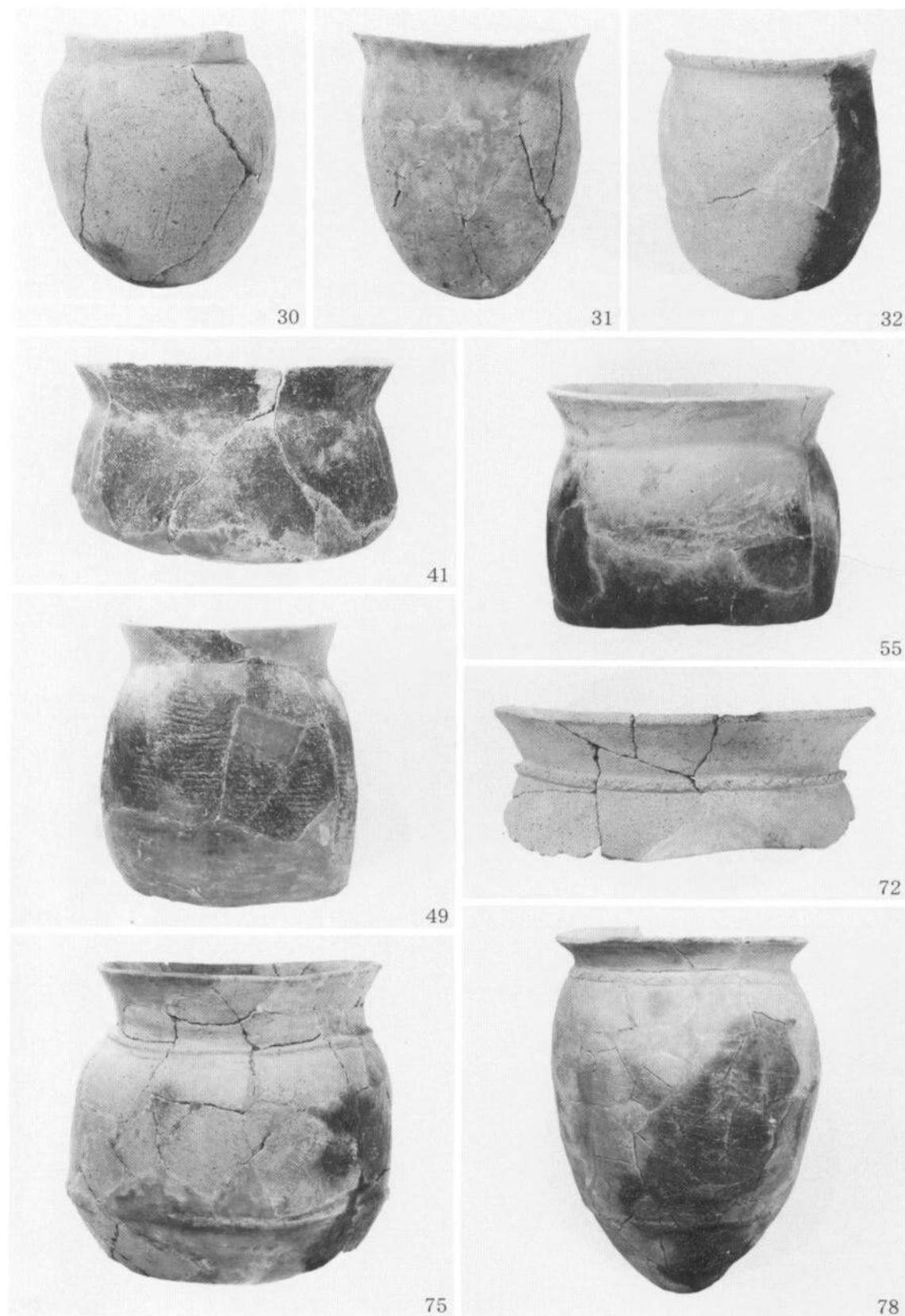
2号落込出土土器②



2号落込出土土器③



3号落込出土土器①



3号落込出土土器②



81



82



85



86



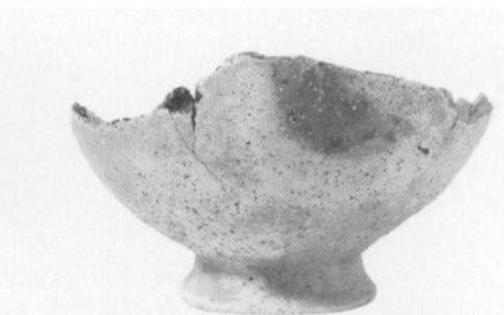
87



89



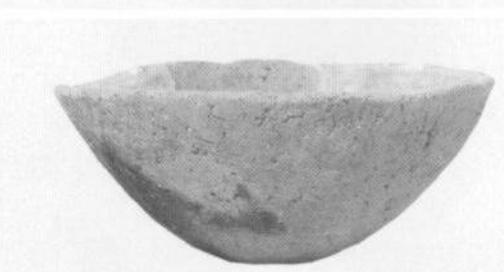
90



91

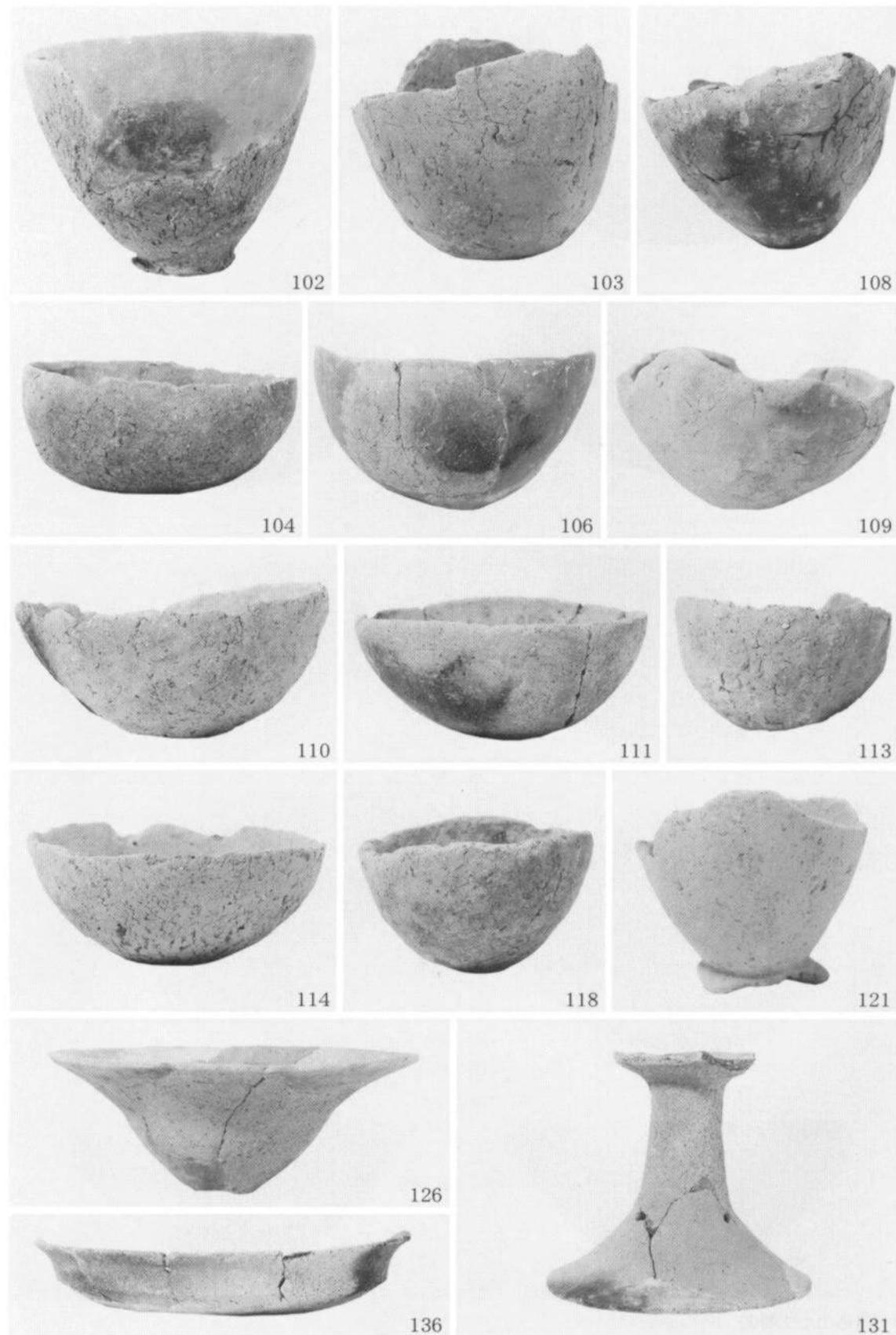


97

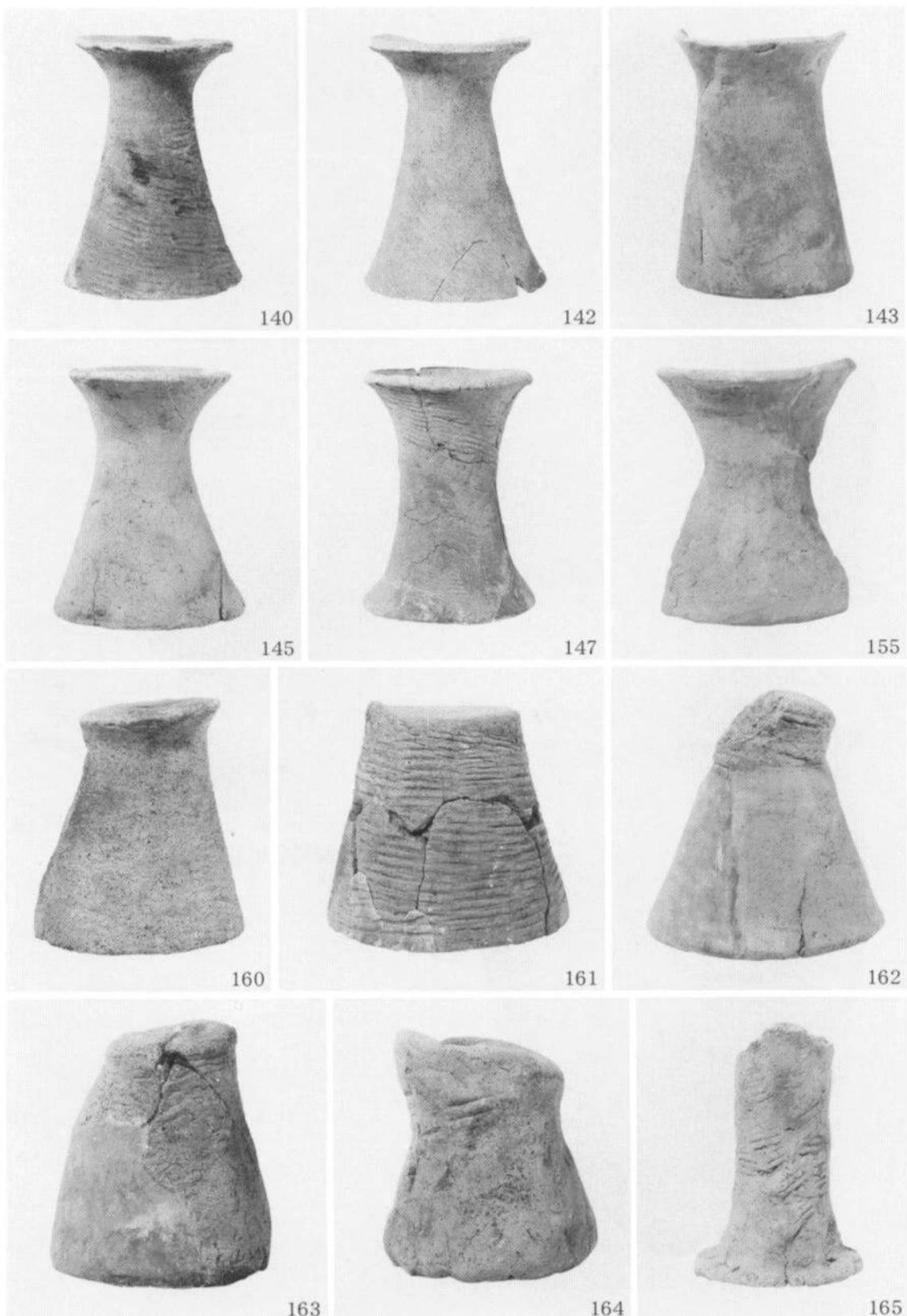


99

図版 52



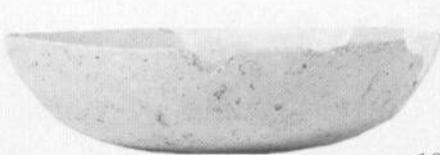
3号落込出土土器④



3号落込出土土器⑤



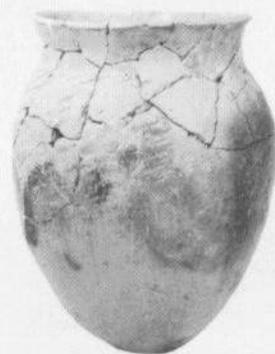
1



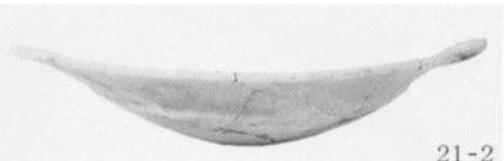
18-1



20-1



21-1



21-2

(2) 土壙墓出土土器

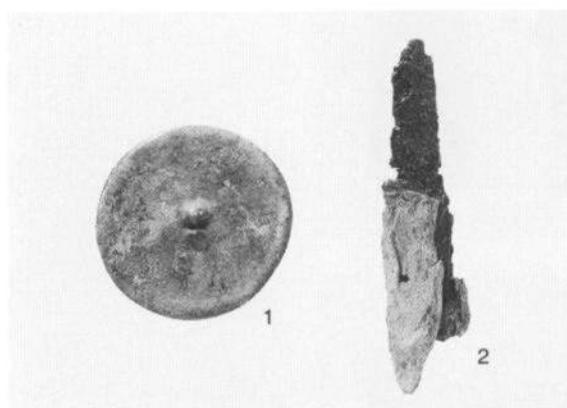


2

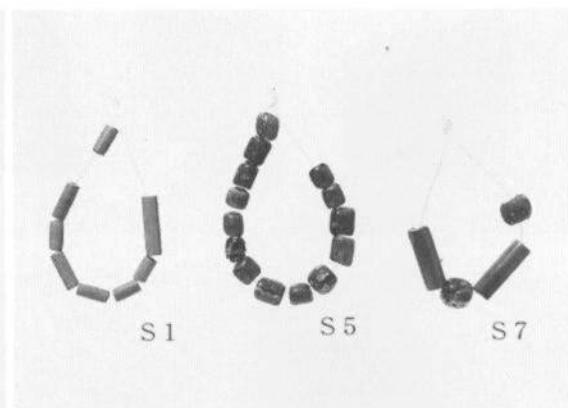
(1) 1号甕棺



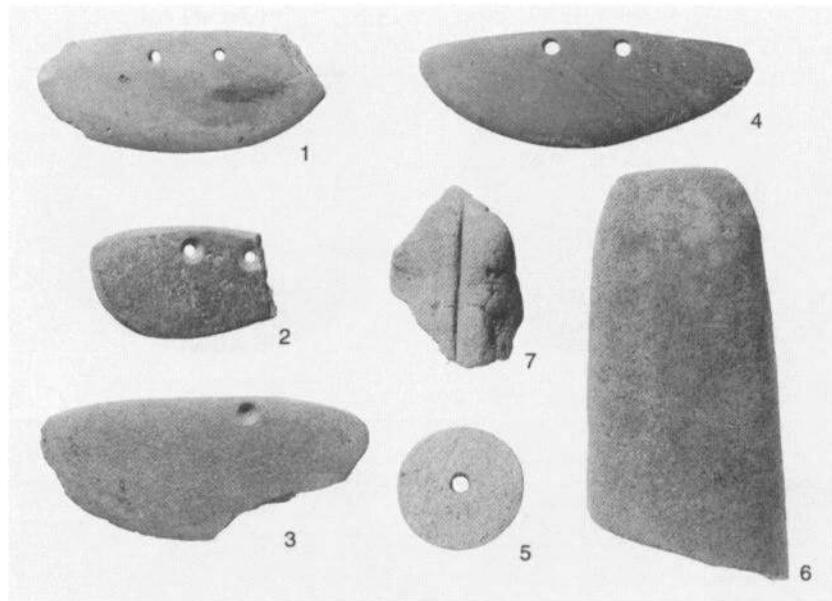
(1) Pit 出土土器



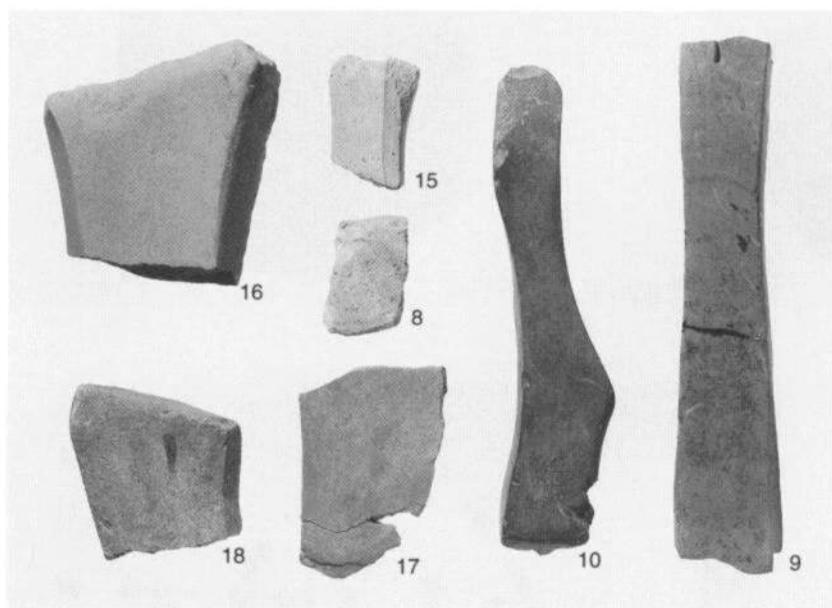
(2) 4号石棺墓出土副葬品



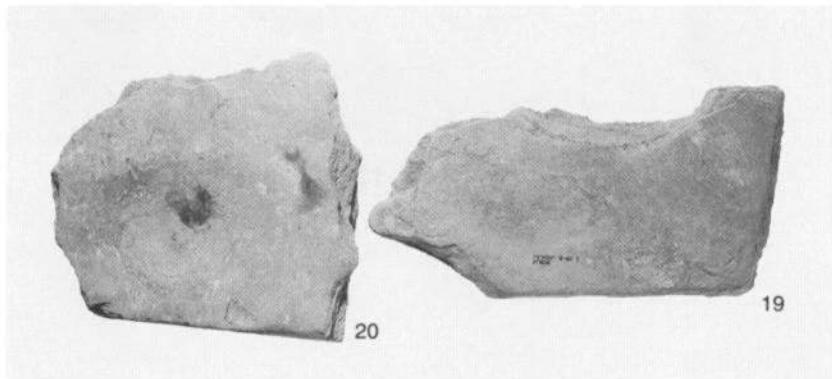
(3) 石棺墓出土玉類



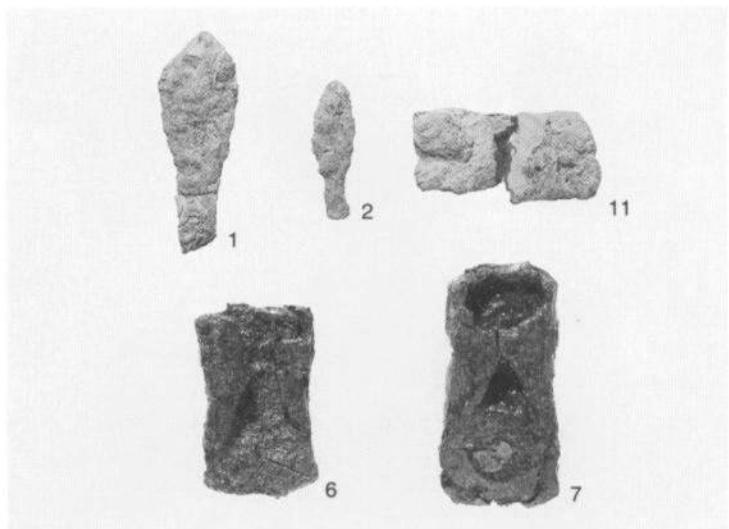
(1) 出土石包丁他



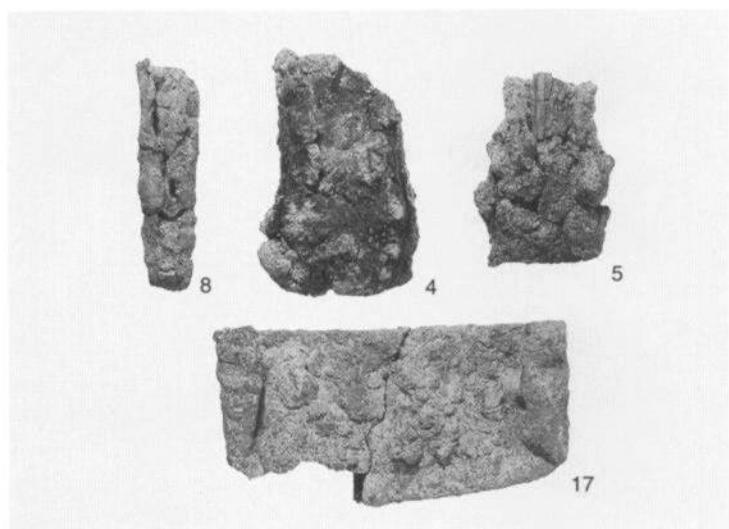
(2) 出土砥石



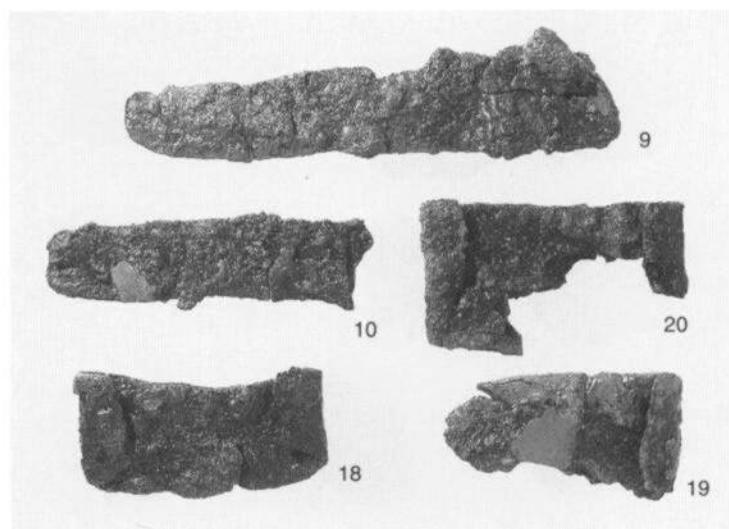
(3) 出土台石



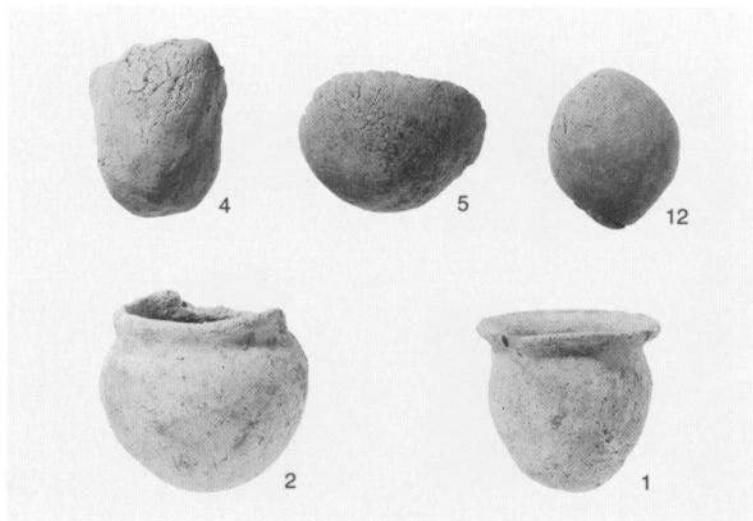
(1) 出土鉄器(鎌・鎌斧)



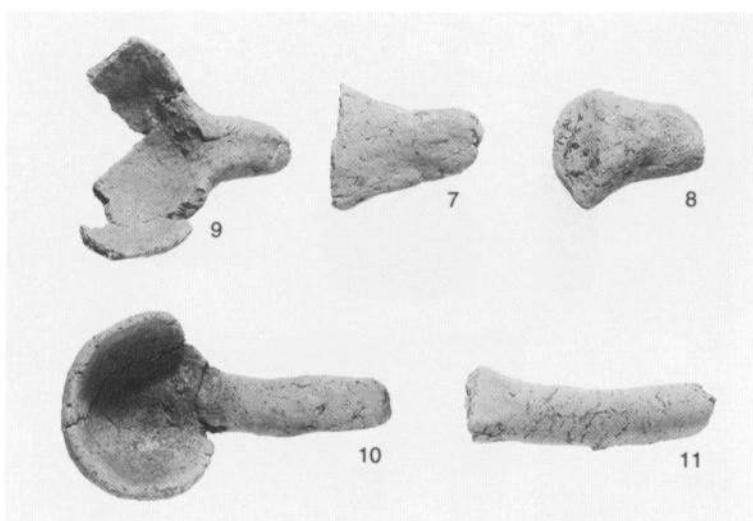
(2) 出土鉄器(鑿斧・鋤先)



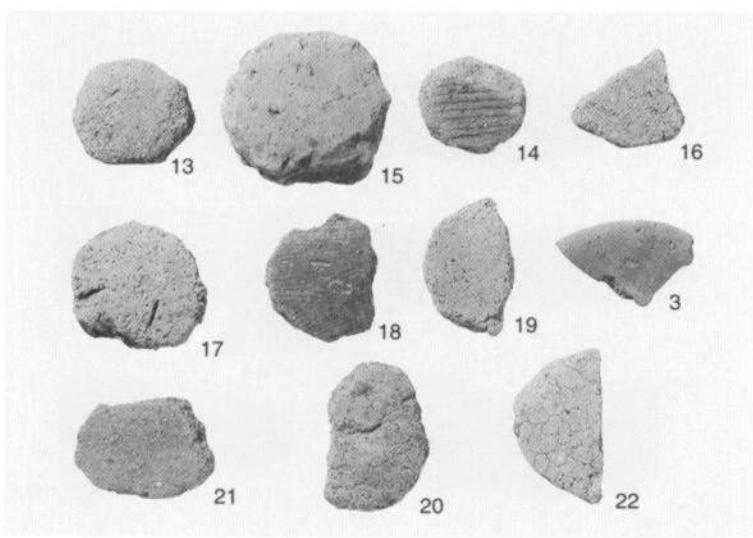
(3) 出土鉄器(鎌・鋤先)



(1) 出土ミニチュア土器他



(2) 出土柄杓形土製品



(3) 出土土版他



西端部古墳時代竪穴住居群(東から)



(1) 56・57・59・60・71号竪穴住居(東から)



(2) 56・57号竪穴住居(東から)



(1) 56号竪穴住居カマド (南から)



(2) 57号竪穴住居カマド (南から)



(1) 59・69号竪穴住居(南から)



(2) 59号竪穴住居カマド(南から)



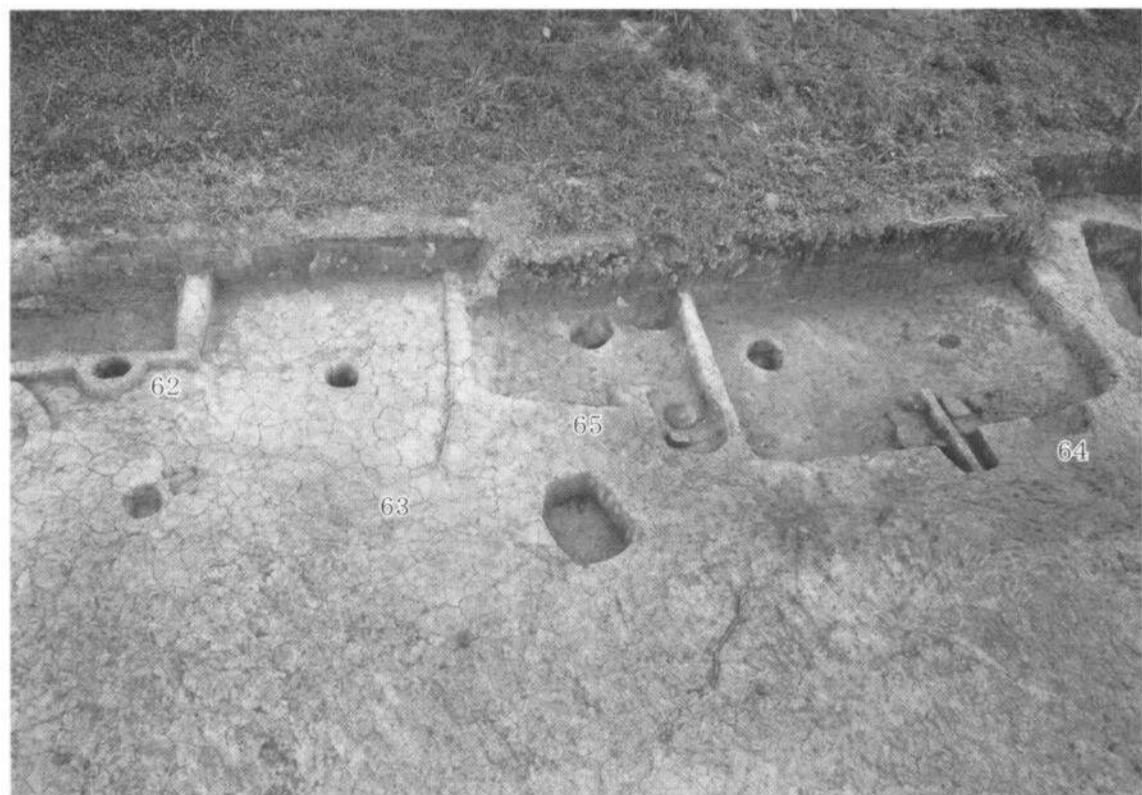
(1) 60・71号竪穴住居(南から)



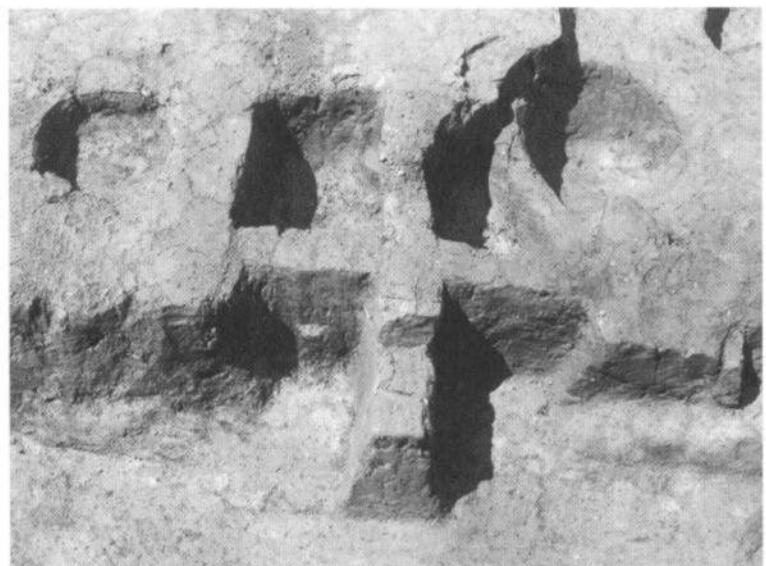
(2) 60・71号竪穴住居貼床下部(東から)



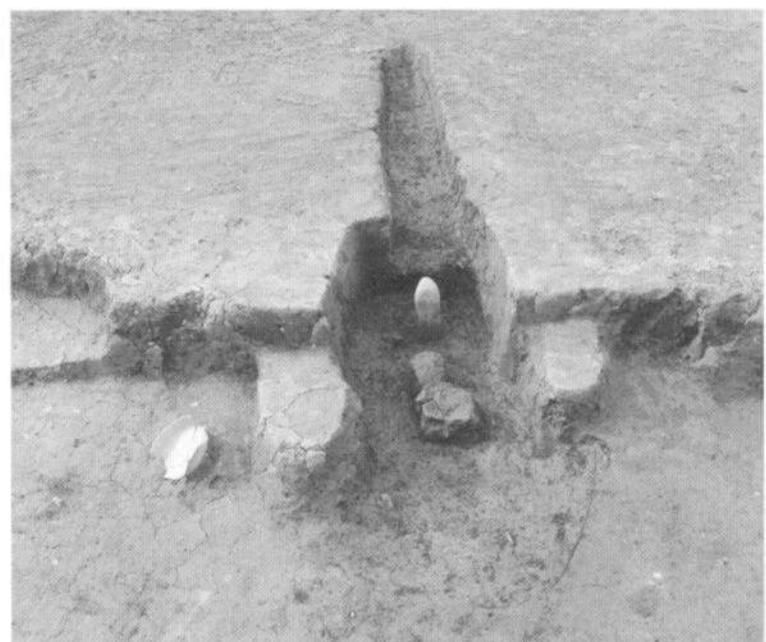
(1) 60号竪穴住居カマド(南から)



(2) 62~65号竪穴住居(北から)



(1) 62号竪穴住居カマド  
(南から)



(2) 64号竪穴住居カマド  
(南から)



(3) 65号竪穴住居カマド  
(南から)



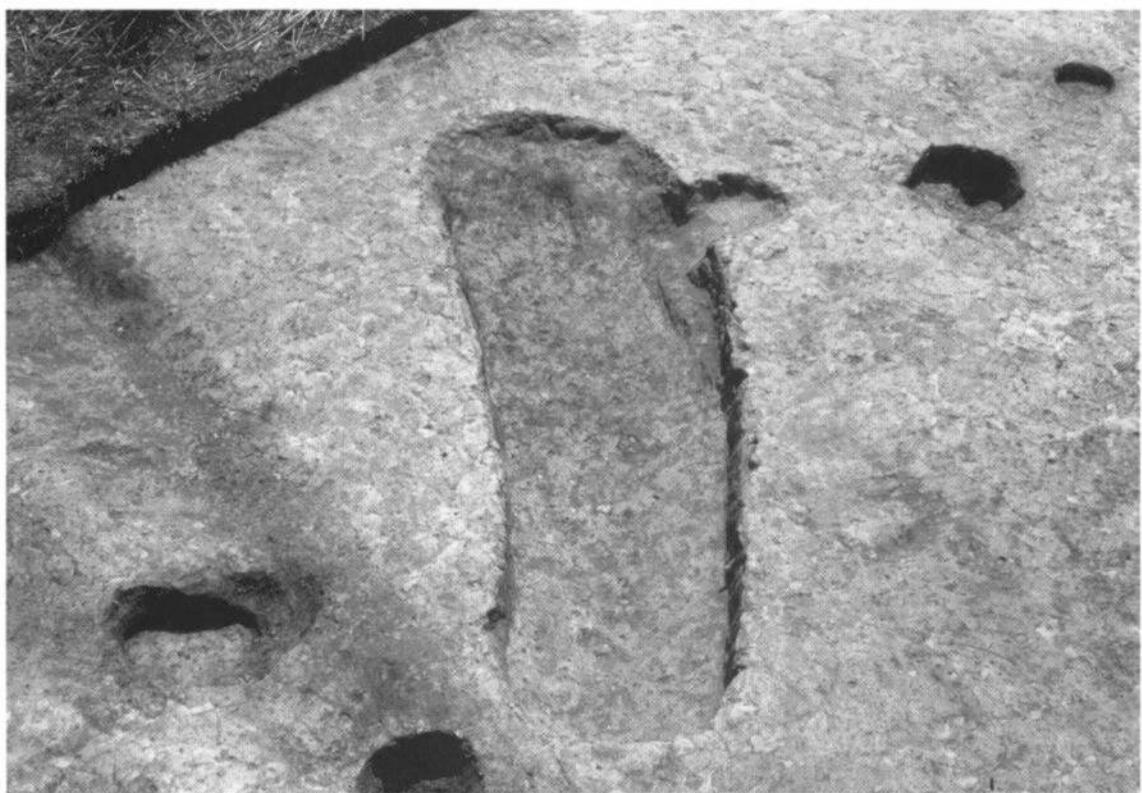
(1) 68号竪穴住居 (南東から)



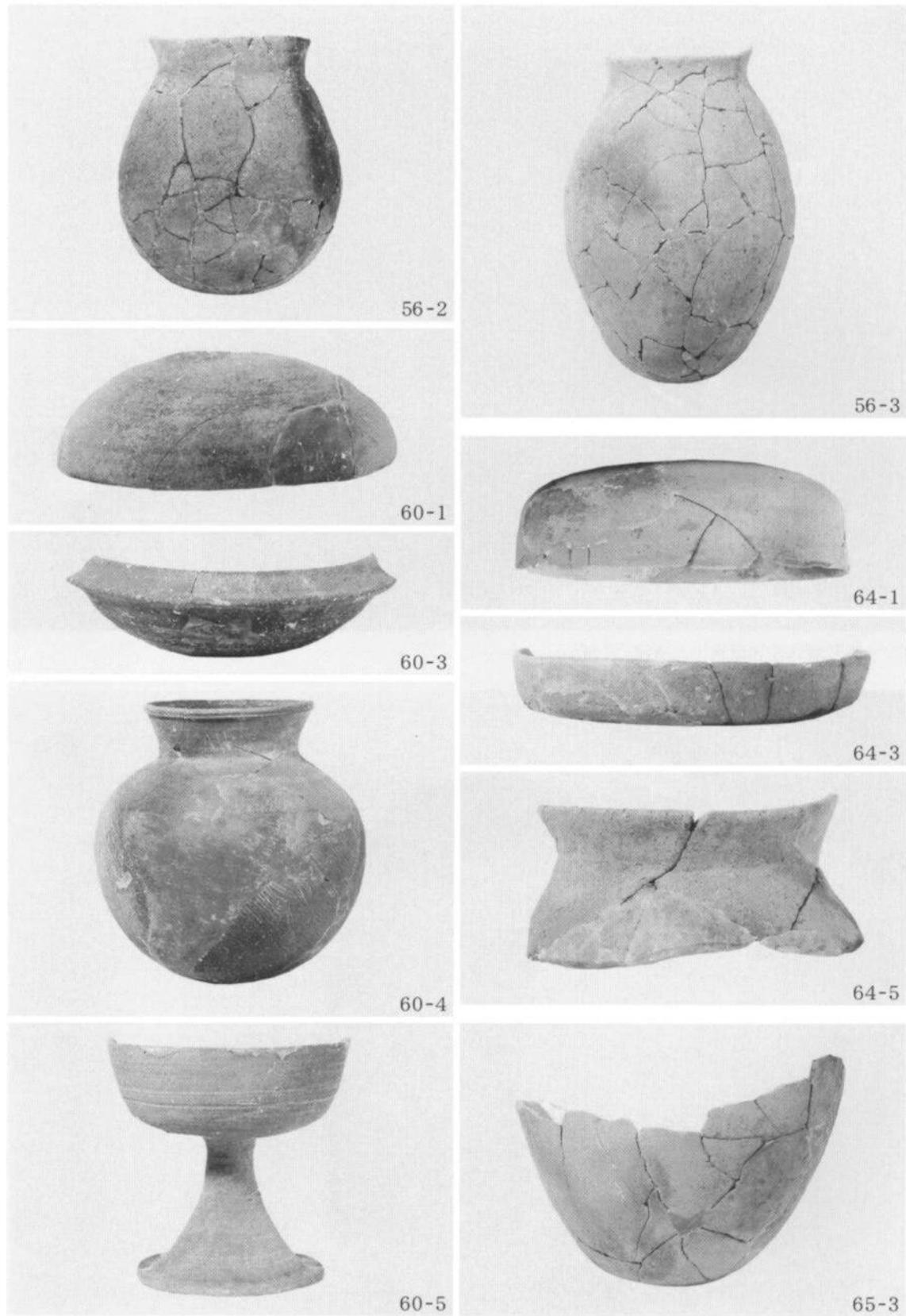
(2) 68号竪穴住居カマド (南西から)



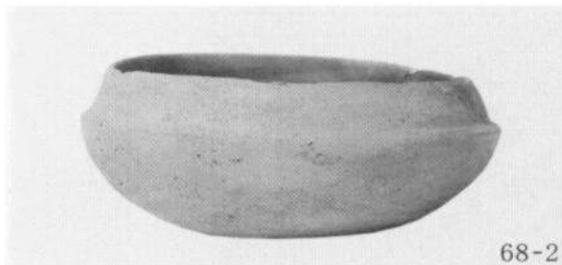
(1) 68号竪穴住居遺物出土状況(北西から)



(2) 3号土坑(北東から)



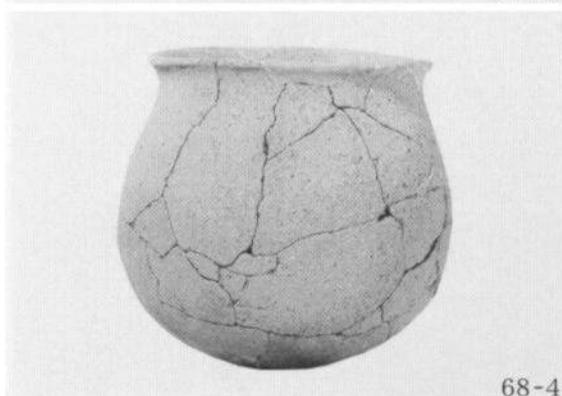
竪穴住居出土土器①



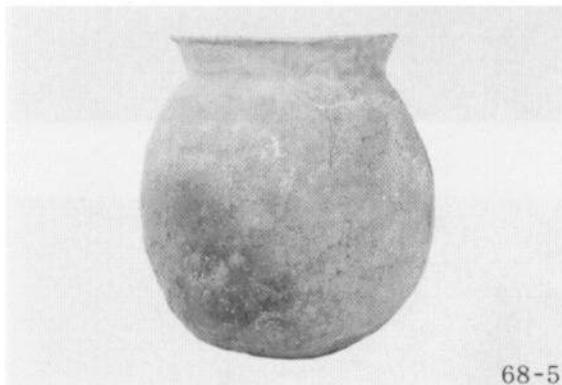
68-2



68-7



68-4

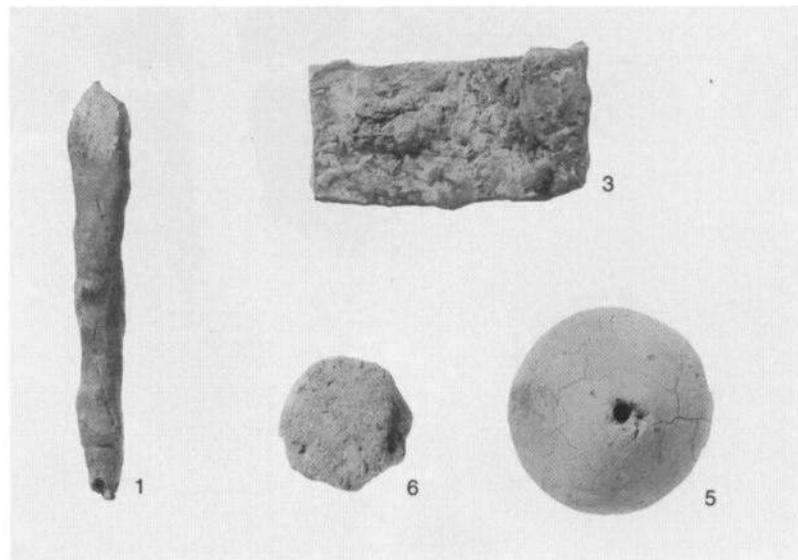


68-5



68-9

(1) 整穴住居出土土器②



(2) 出土鉄器・土製品



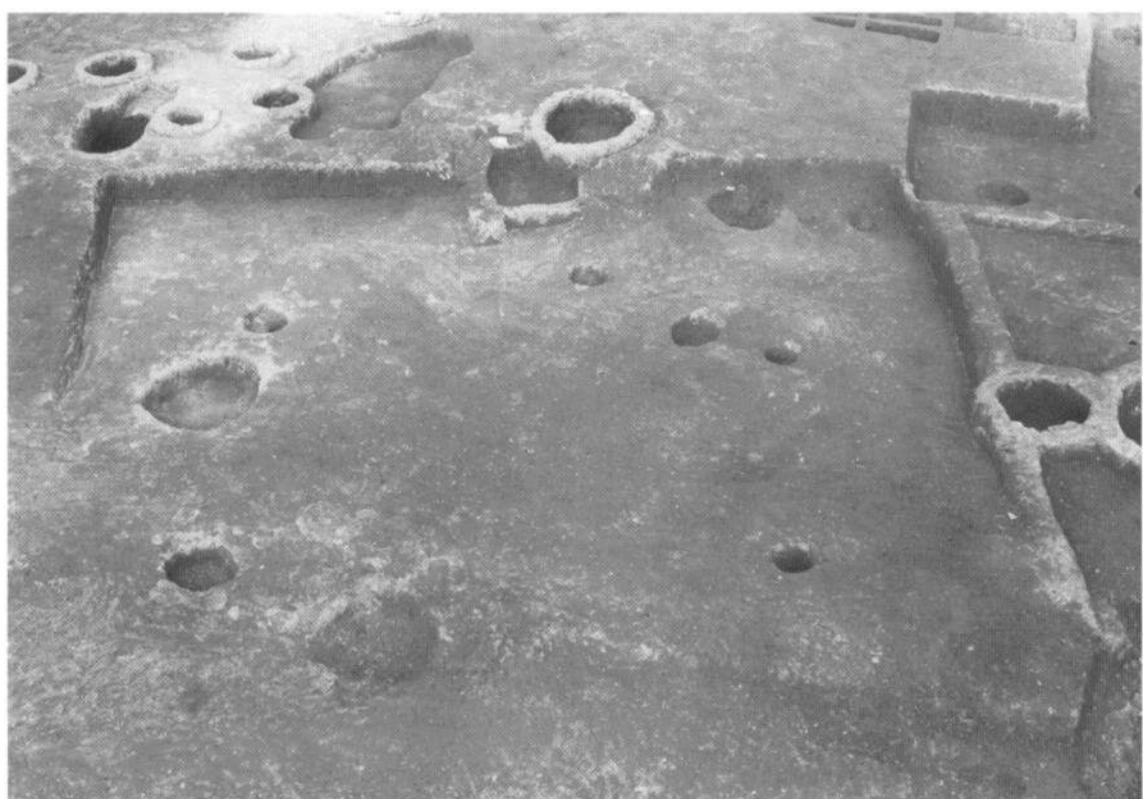
(1) 81号竪穴住居（南から）



(2) 81号竪穴住居カマド（南から）



(1) 83・84号竪穴住居、12・14・18号土坑（南西から）



(2) 83号竪穴住居（西から）



(1) 84・86号竪穴住居(南から)



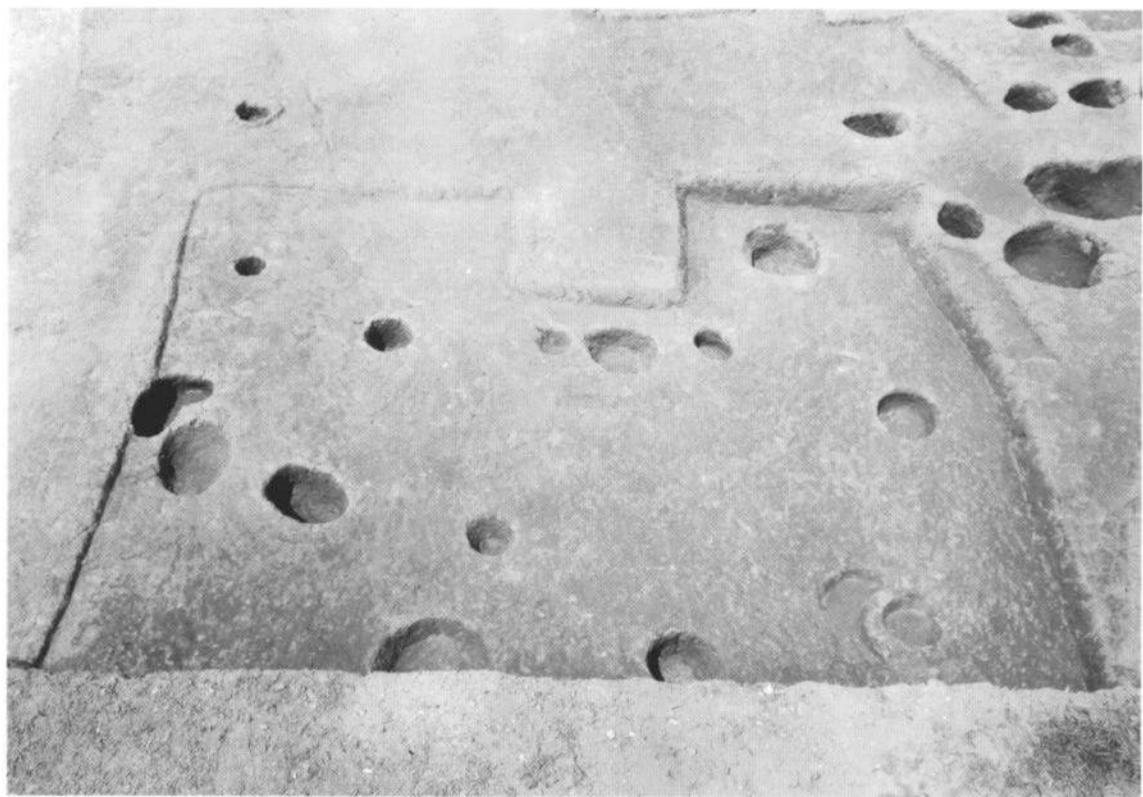
(2) 84号竪穴住居カマド(南から)



(1) 85号竪穴住居(南から)



(2) 85号竪穴住居カマド(南から)



(1) 90号竪穴住居(南から)



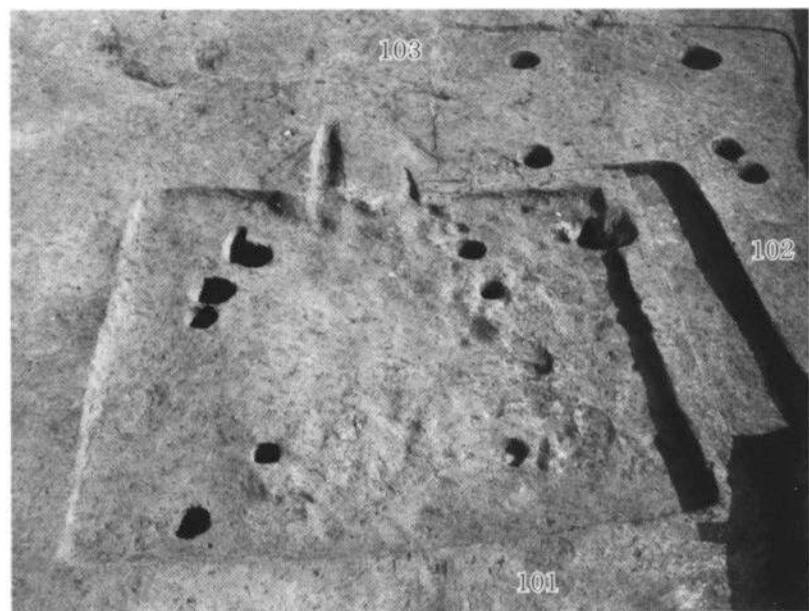
(2) 98号竪穴住居(東から)



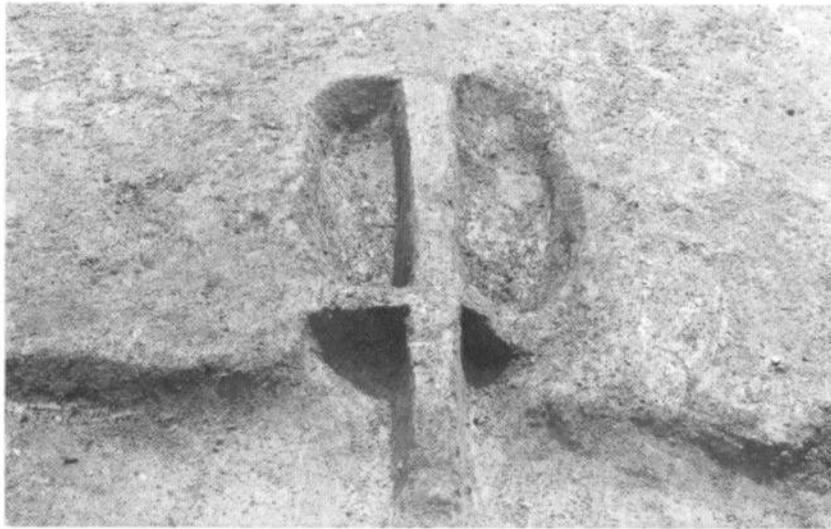
(1) 98号竪穴住居カマド  
(東から)



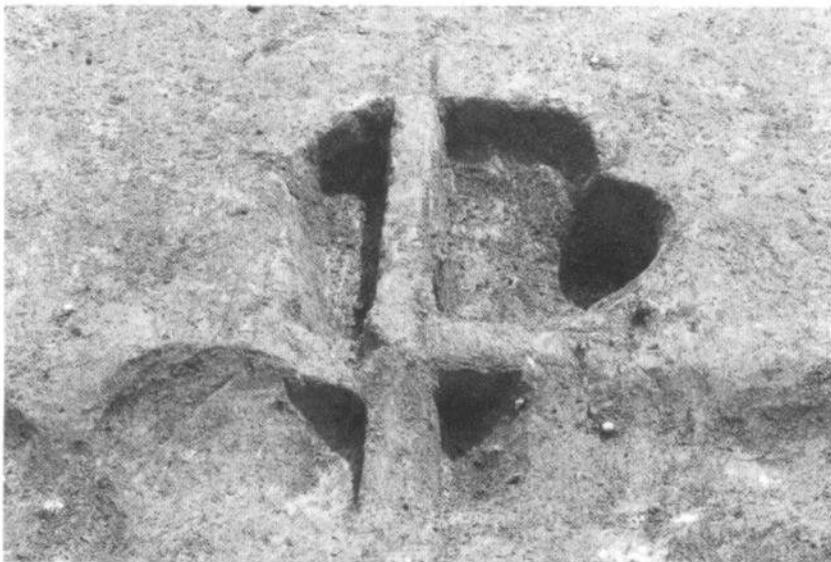
(2) 99号竪穴住居カマド  
(南から)



(3) 101~103号竪穴住居  
(西から)



(1) 101号竪穴住居カマド  
(西から)



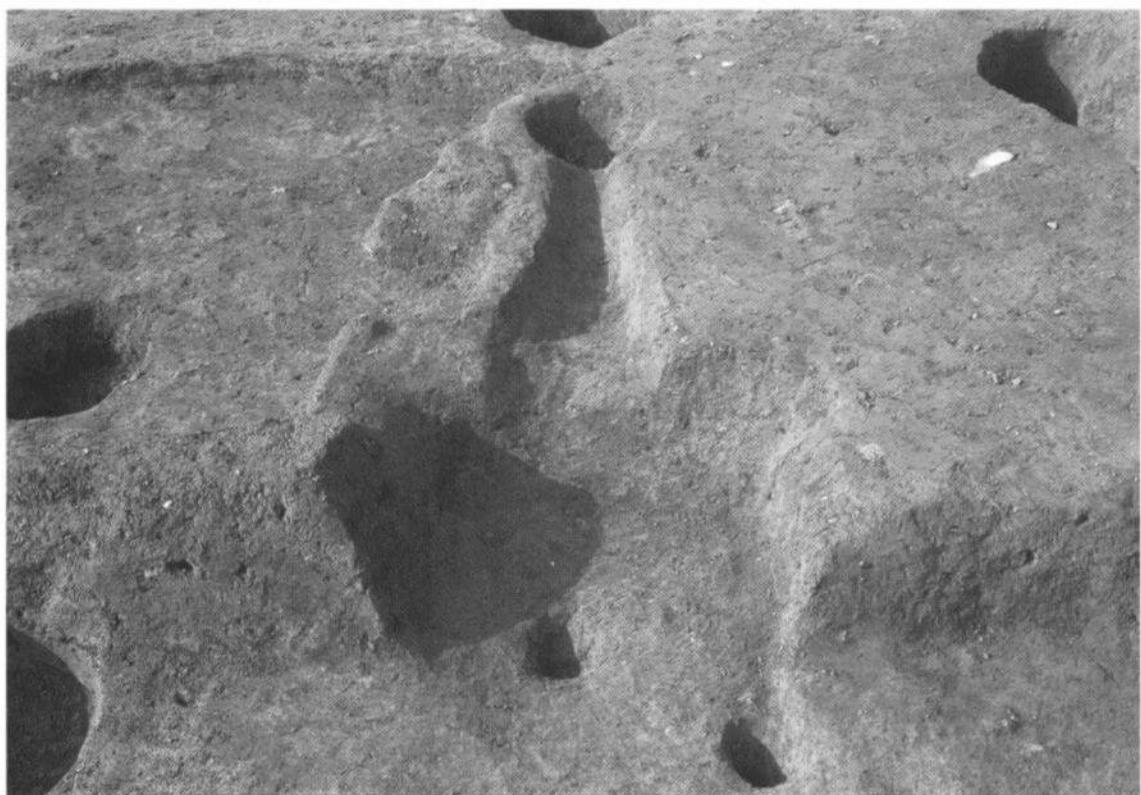
(2) 102号竪穴住居カマド  
(西から)



(3) 103号竪穴住居カマド  
(西から)



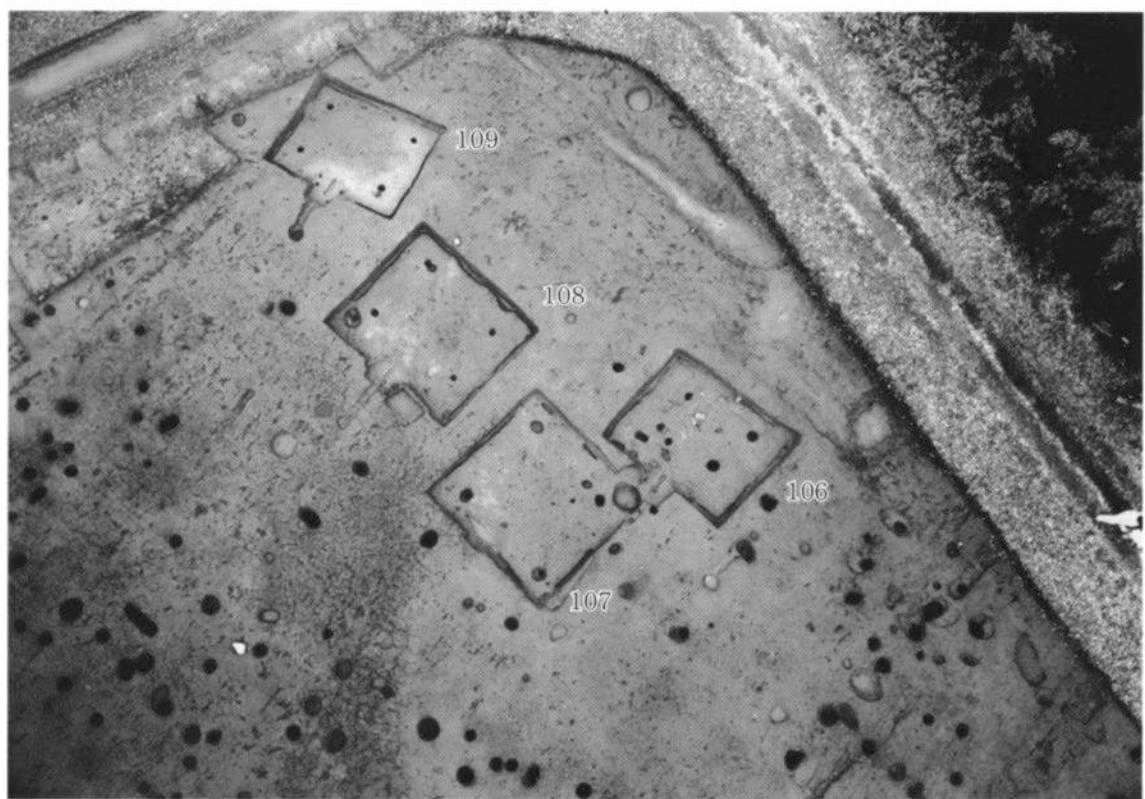
(1) 104号竪穴住居(南から)



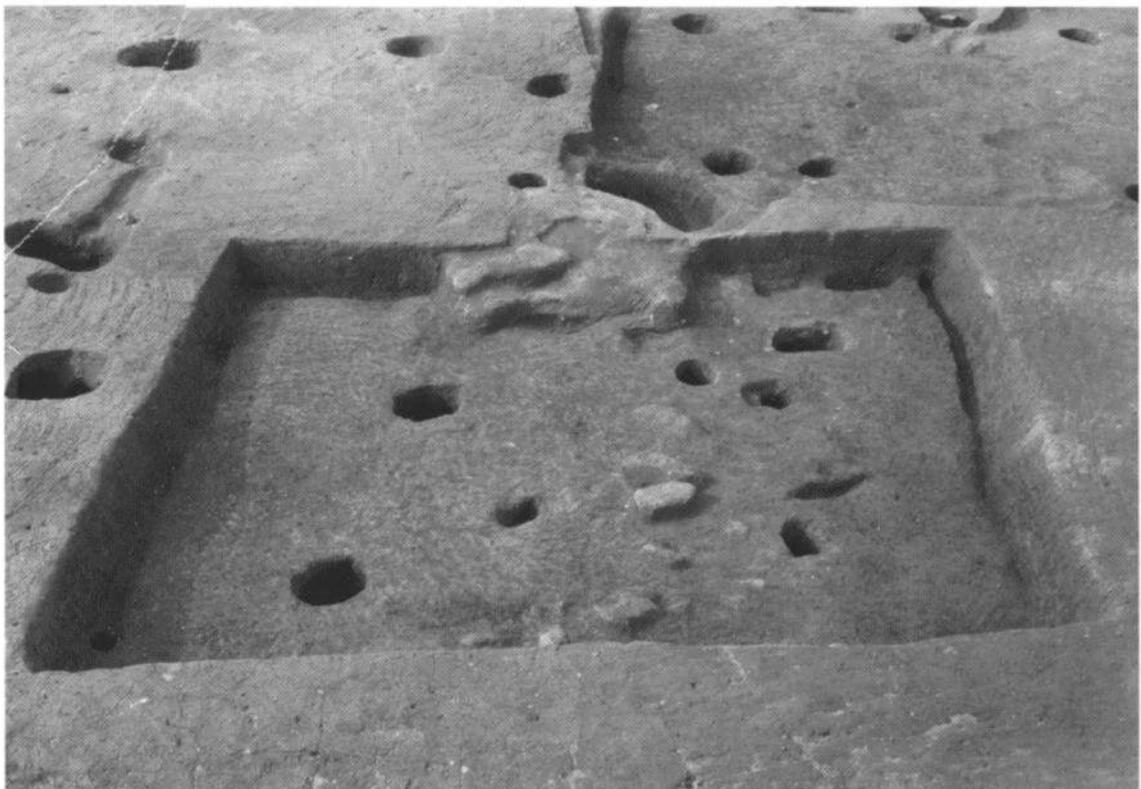
(2) 104号竪穴住居カマド(南から)



(1) 105号竪穴住居(南から)



(2) 106~109号竪穴住居(北西上空から)



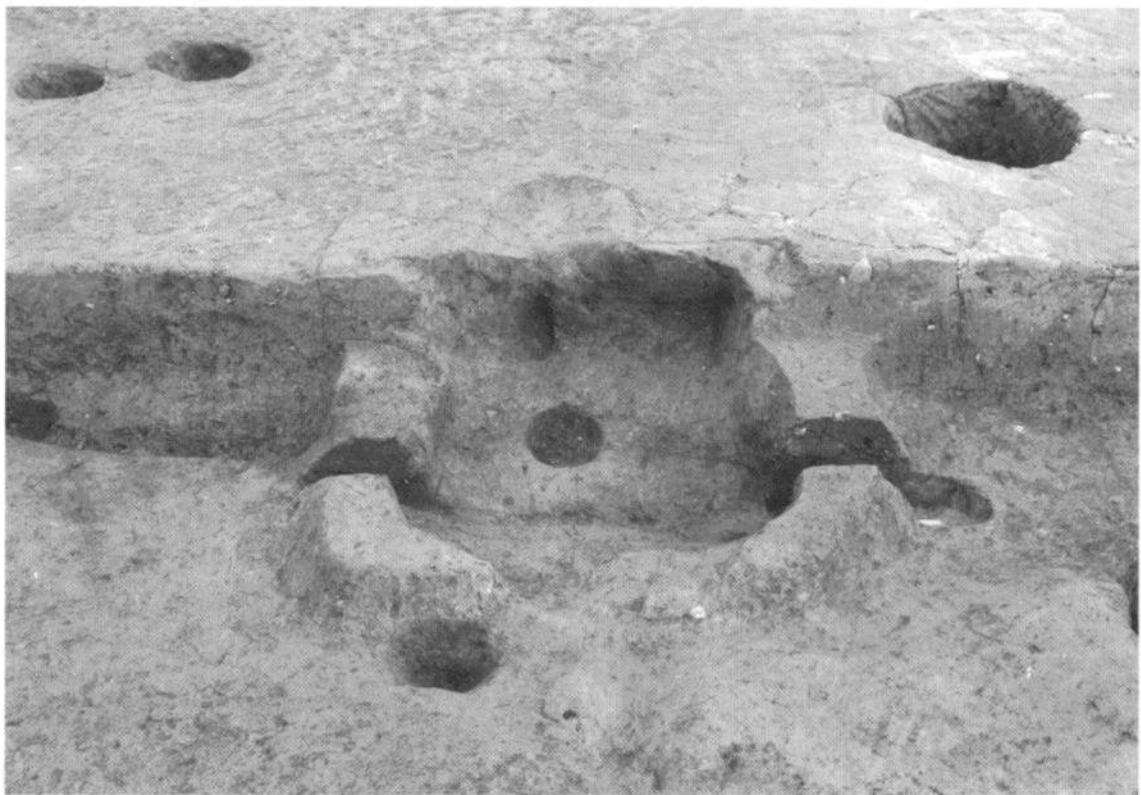
(1) 106号竪穴住居(南から)



(2) 106号竪穴住居カマド(南から)



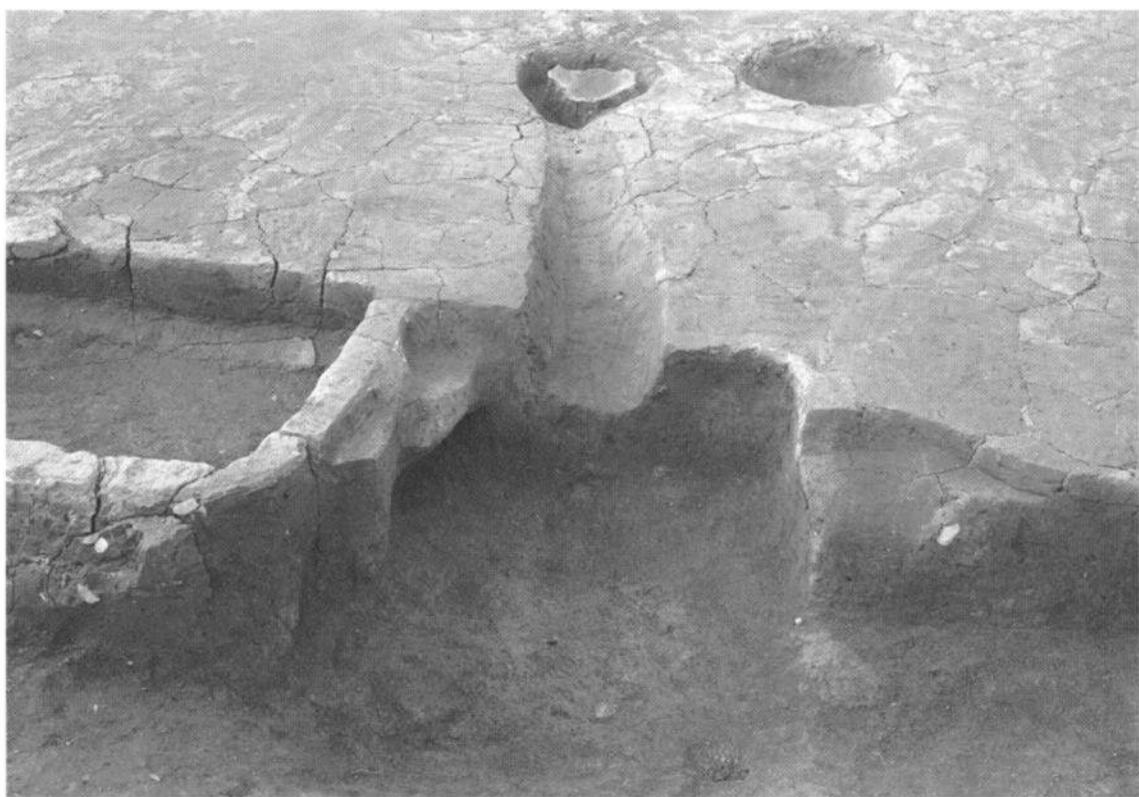
(1) 107号竪穴住居(南から)



(2) 107号竪穴住居カマド(南から)



(1) 108号竪穴住居(南から)



(2) 108号竪穴住居カマド(南から)



(1) 109号竪穴住居 (南東から)



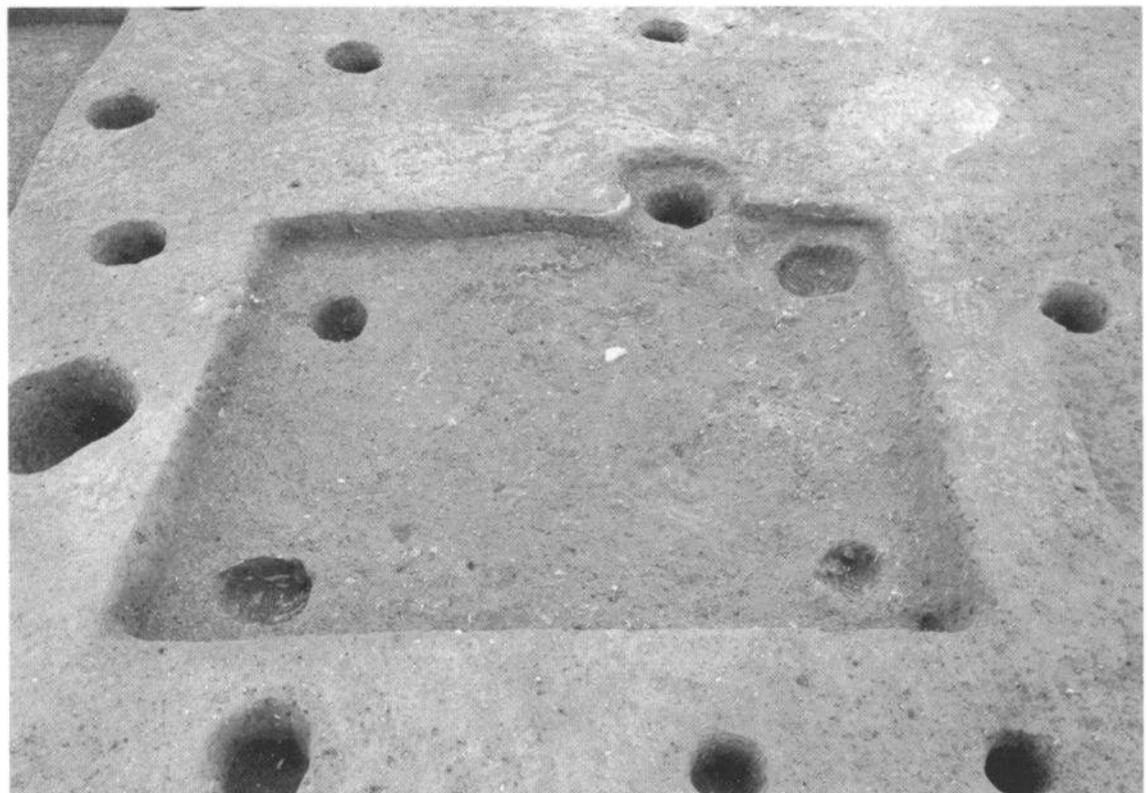
(2) 109号竪穴住居カマド (南東から)



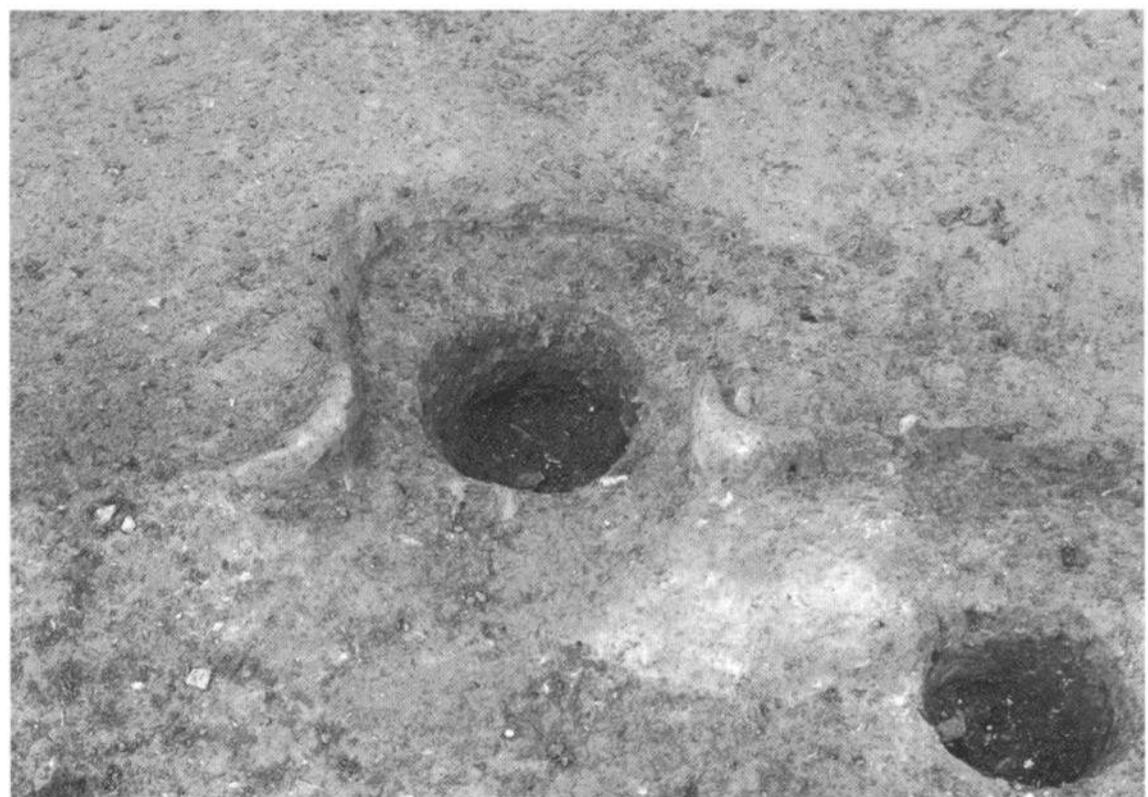
(1) 110～112号竪穴住居(南から)



(2) 110号竪穴住居カマド(南から)



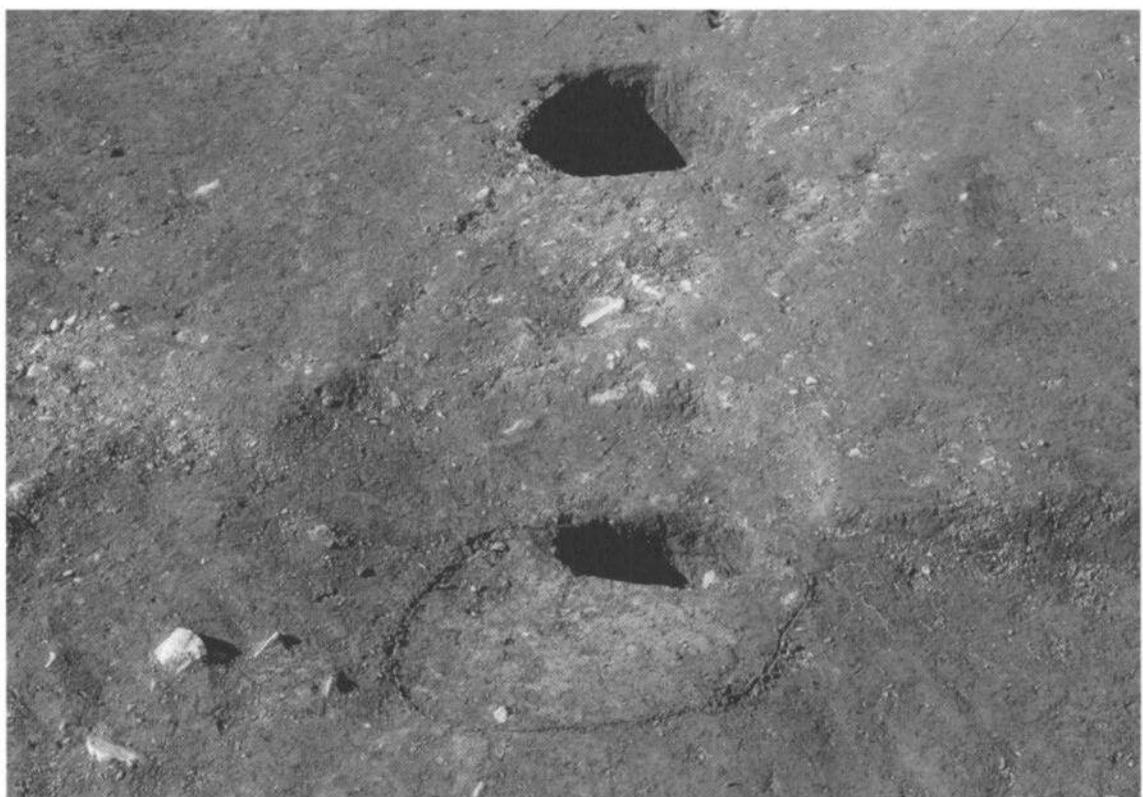
(1) 113号竪穴住居（南から）



(2) 113号竪穴住居カマド（南から）



(1) 114号竪穴住居 (南から)



(2) 114号竪穴住居カマド (南から)



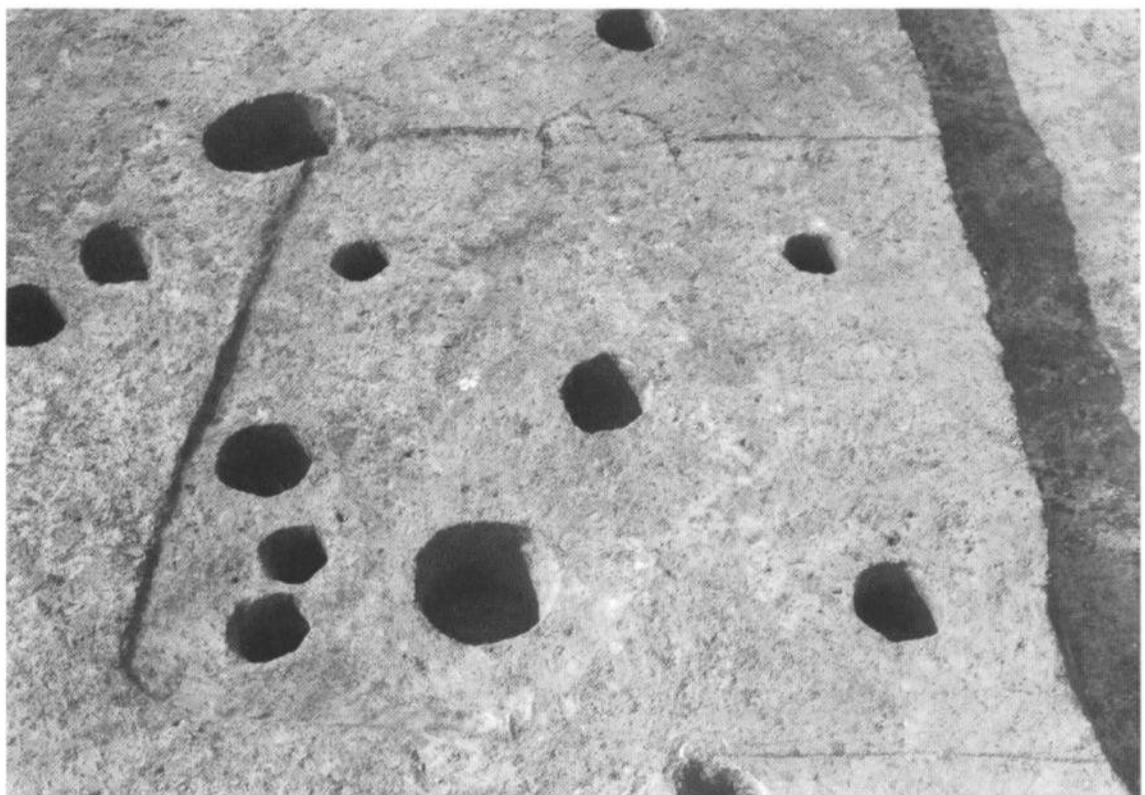
(1) 115号竪穴住居(東から)



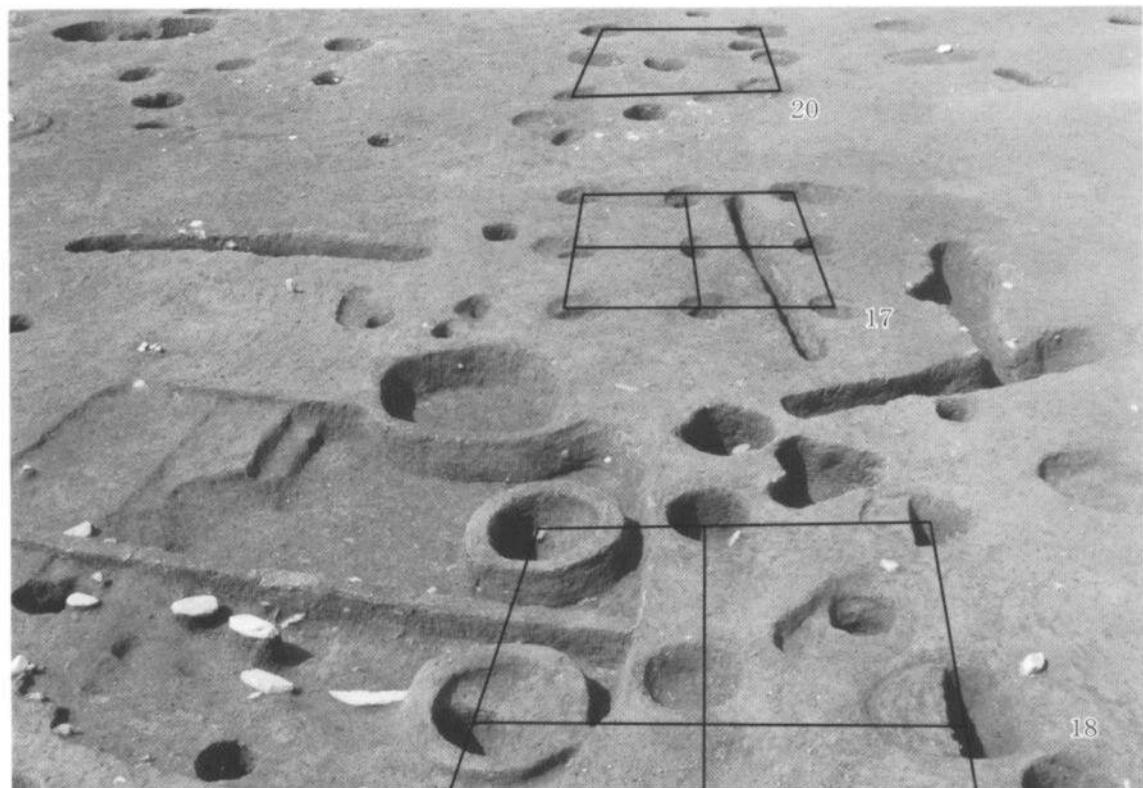
(2) 115号竪穴住居カマド(東から)



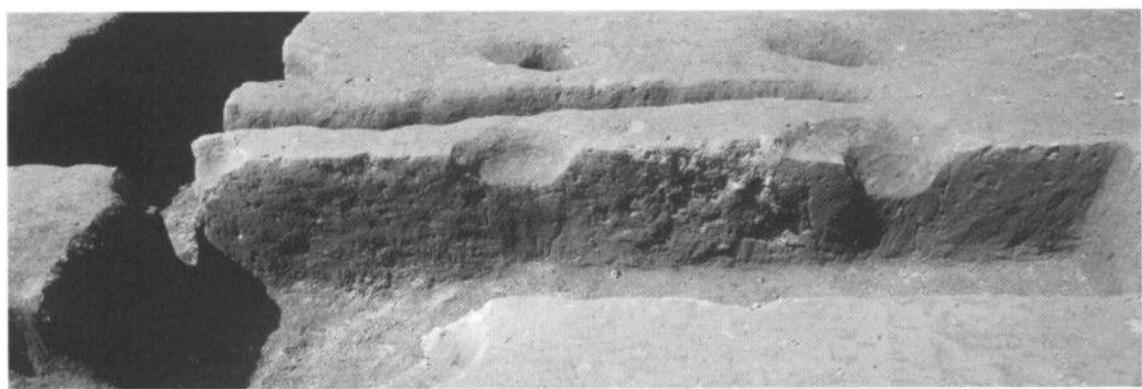
(1) 116号竪穴住居(東から)



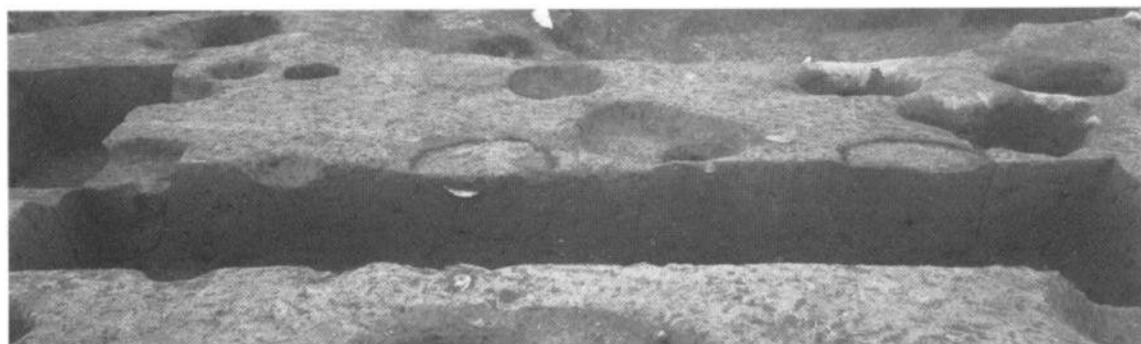
(2) 120号竪穴住居(東から)



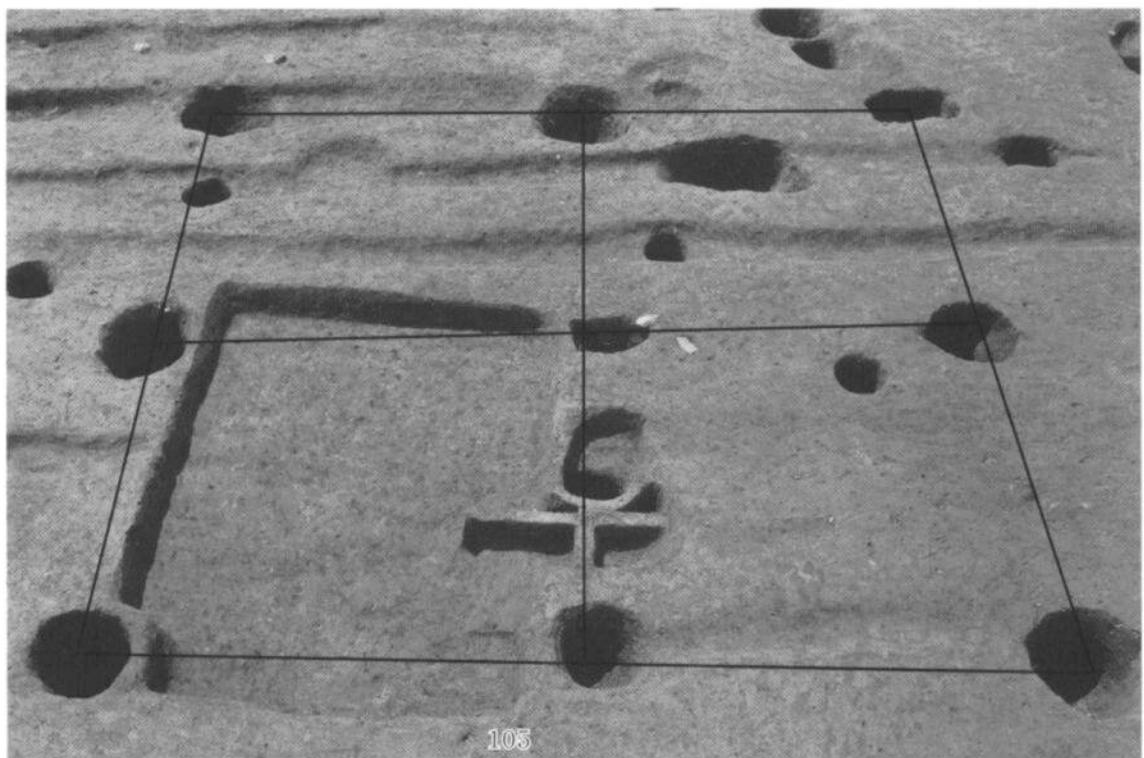
(1) 17・18・20号建物(南から)



(2) 17号建物柱掘形断面(東から)



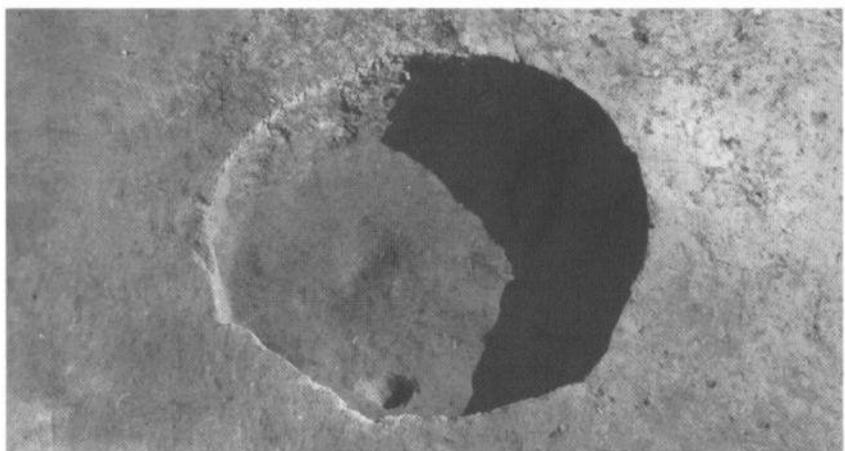
(3) 18号建物柱掘形断面(東から)



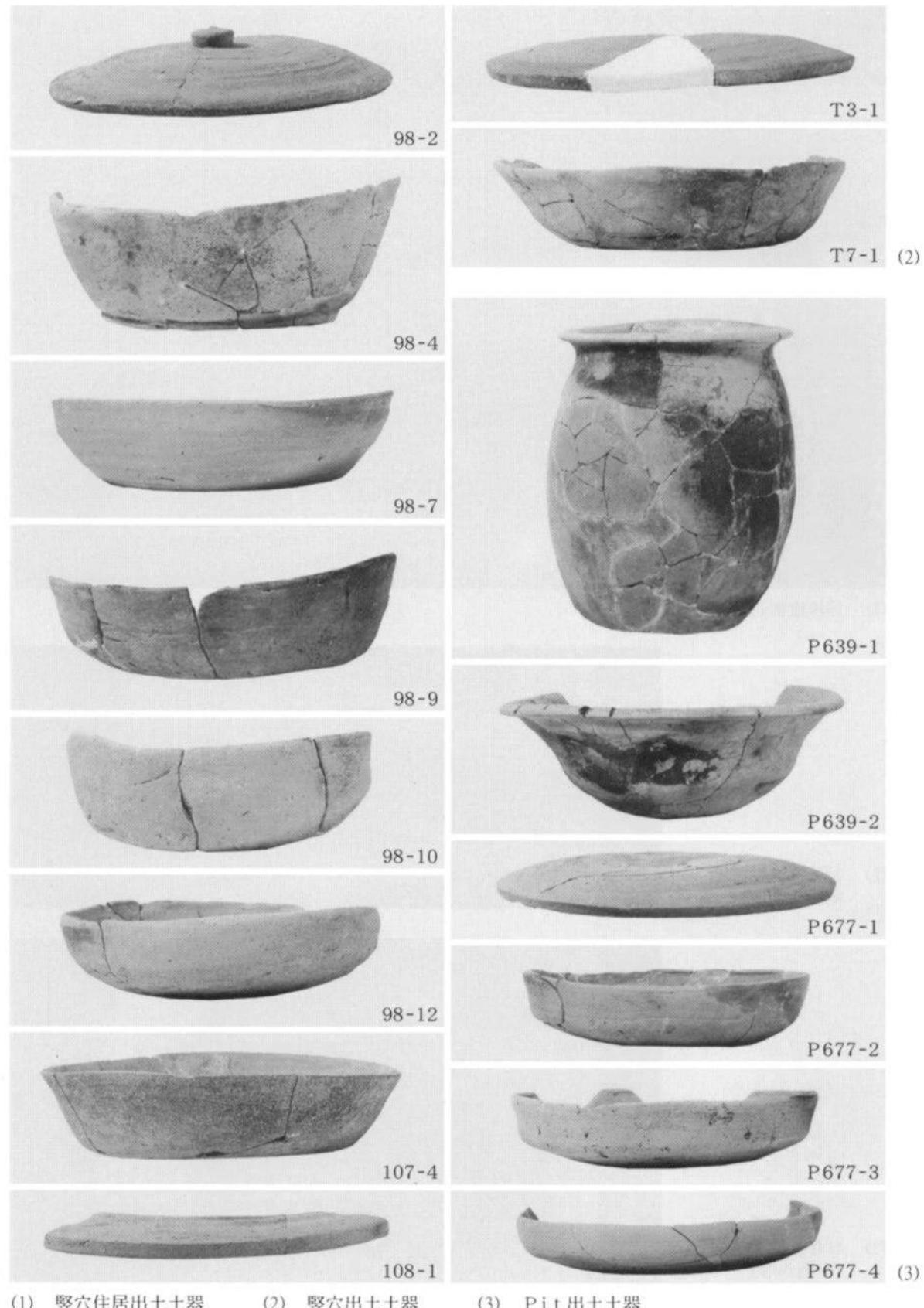
(1) 19号建物(東から)



(2) 20号建物柱掘形  
断面(東から)



(3) 41号土坑  
(北西から)



(1)

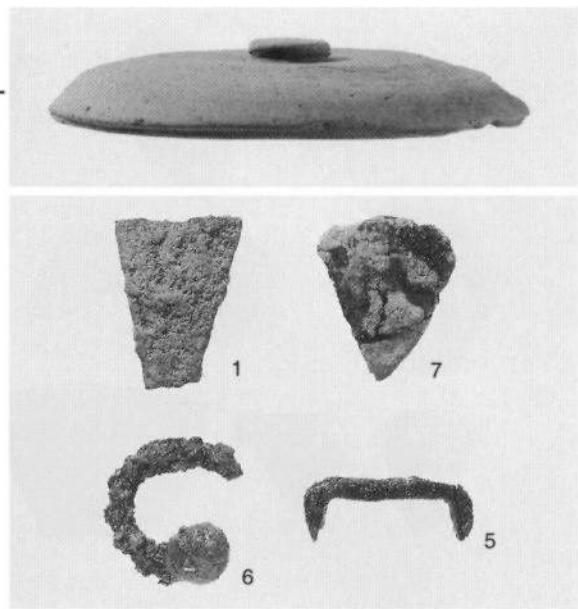
(1) 壺穴住居出土土器

(2) 壺穴出土土器

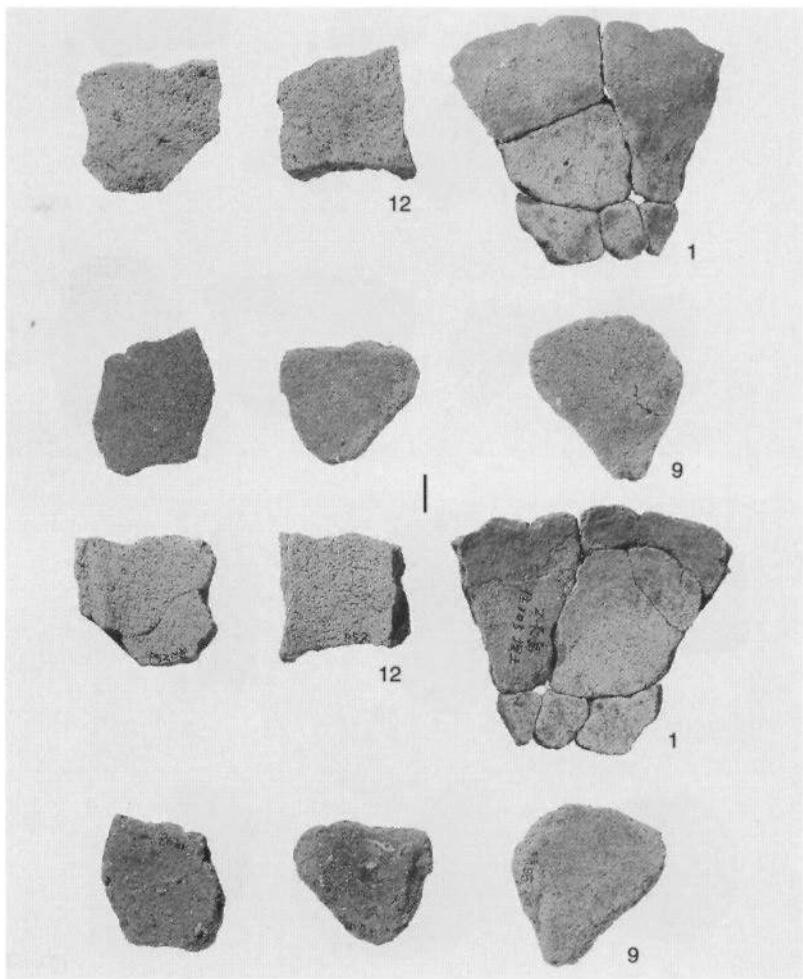
(3) Pit 出土土器



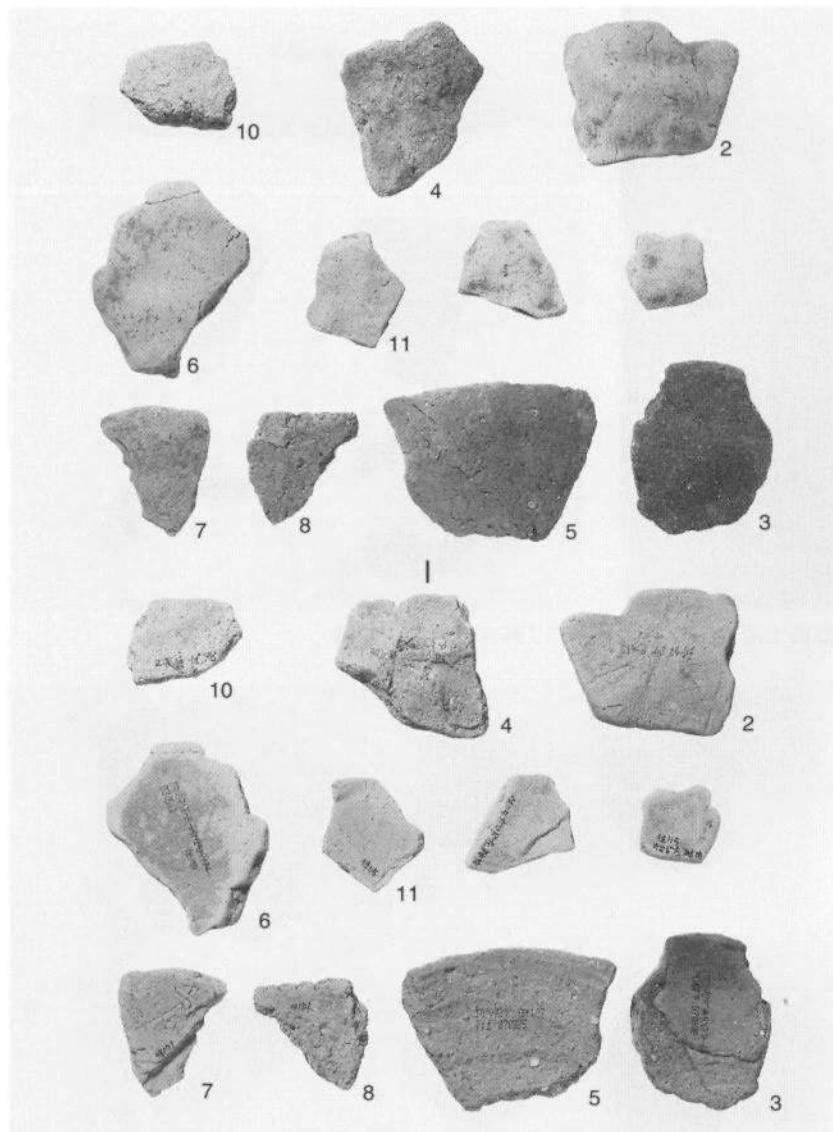
(1) 18号建物出土墨書土器



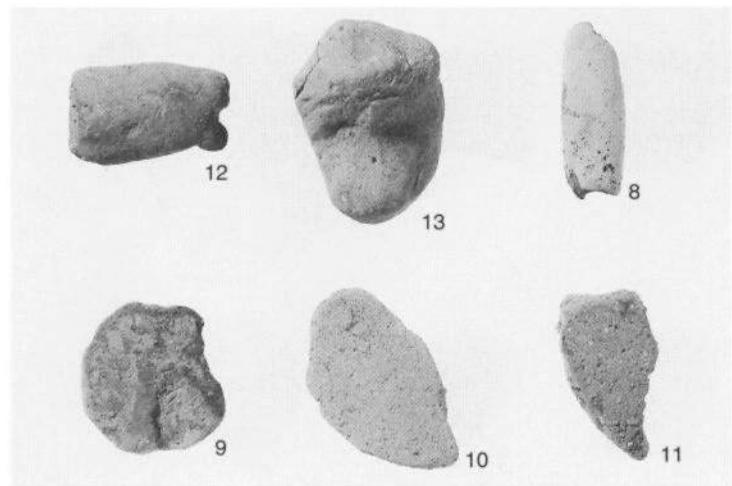
(2) 壺穴住居出土鉄器



(3) 壺穴住居他出土  
製塙土器①



(1) 堪穴住居他出土  
製塙土器②



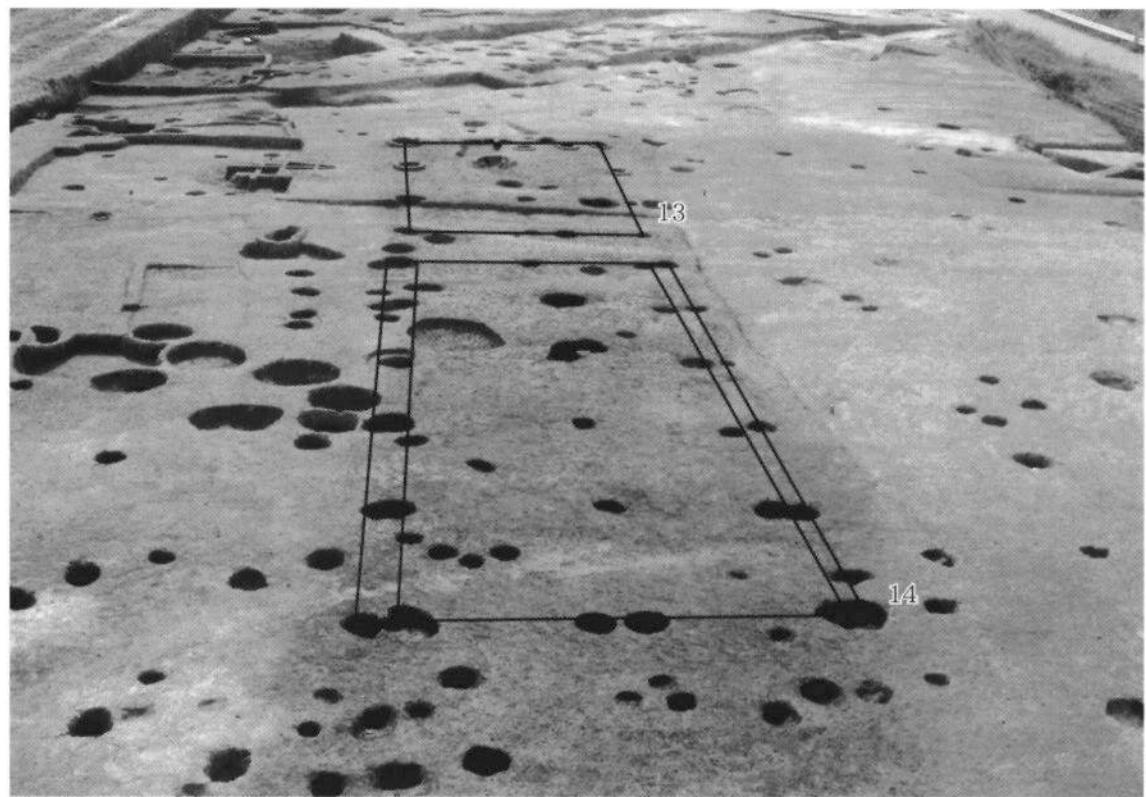
(2) 堪穴住居他出土土製品



(1) 中世遺構群(東から)



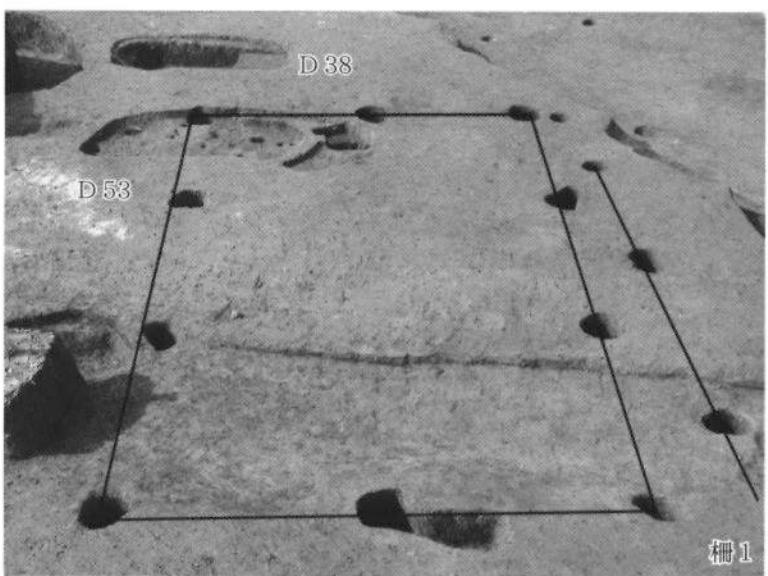
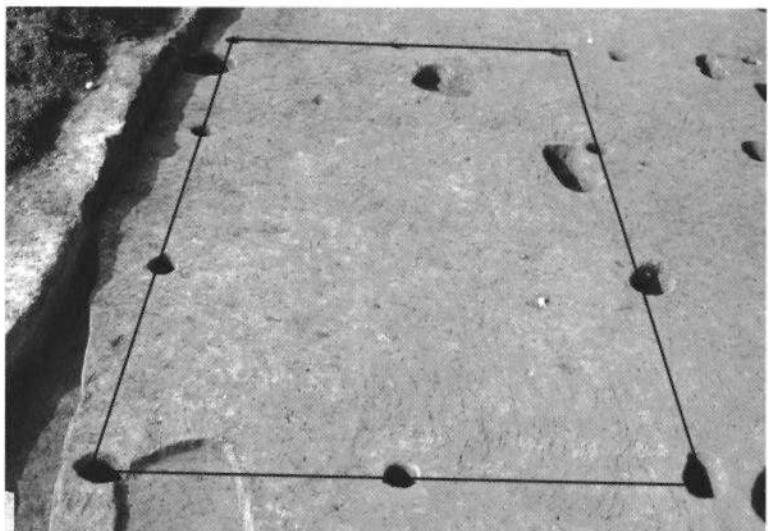
(2) 13・14号建物周辺(東から)



(1) 13・14号建物(東から)

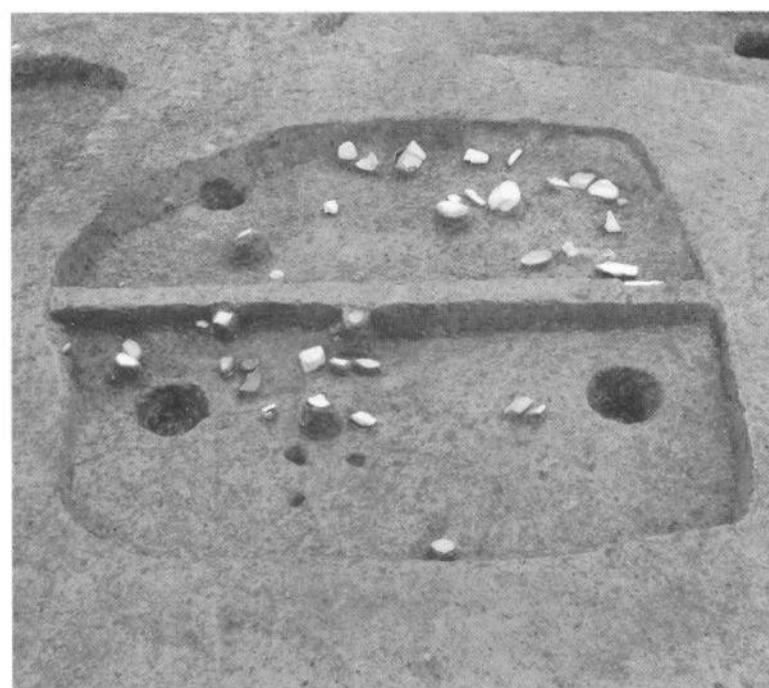


(2) 12・15・16号建物(東から)





(1) .2・4号竪穴(北西から)



(2) 4号竪穴(北から)



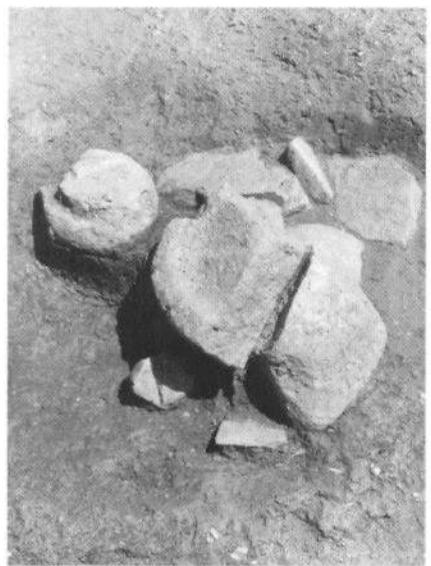
(3) 遺物出土状況(南東から)



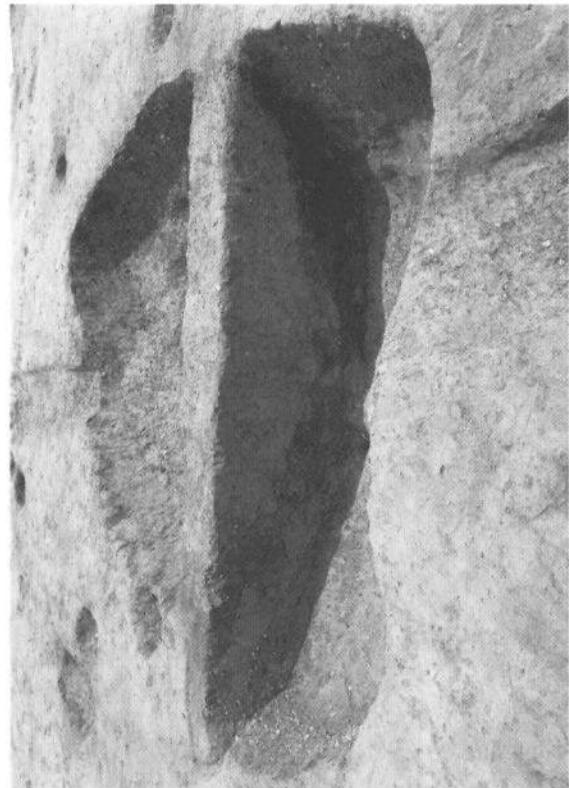
(1) 4号土坑(西から)



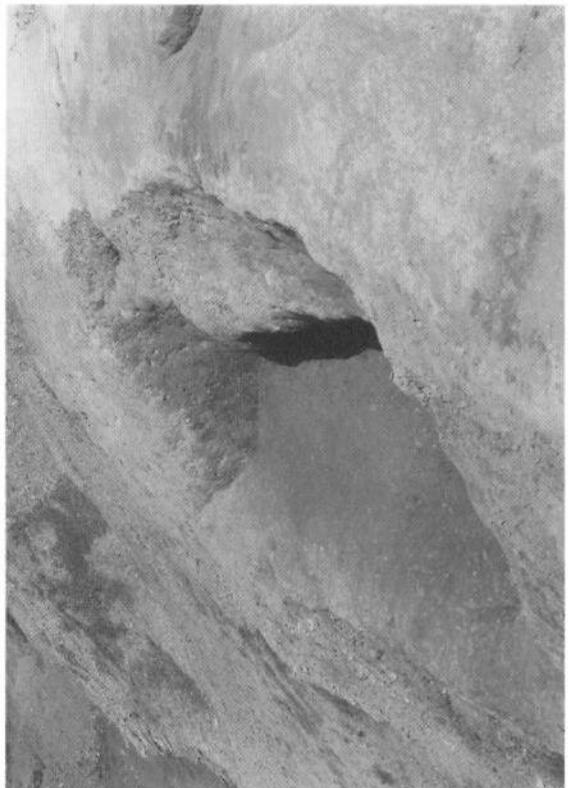
(2) 土坑内Pit(南から)



(3) 石臼出土状況(北から)



(1) 5号土坑(北から)



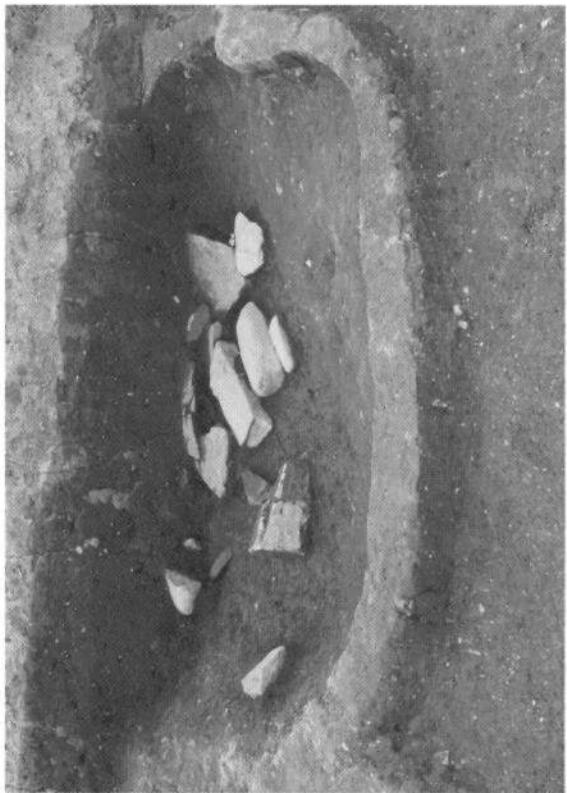
(2) 6号土坑(西から)



(3) 8号土坑(北東から)



(4) 9号土坑(北から)



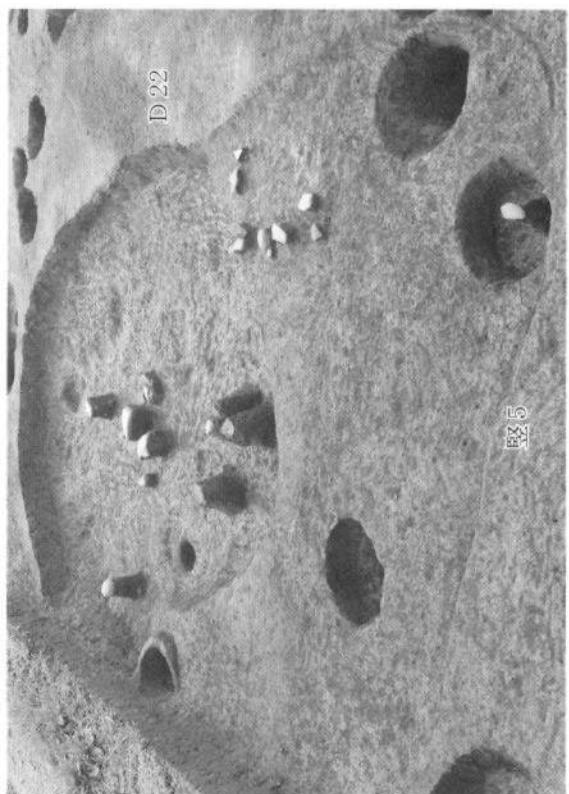
(1) 12号土坑(北から)



(2) 18号土坑(東から)



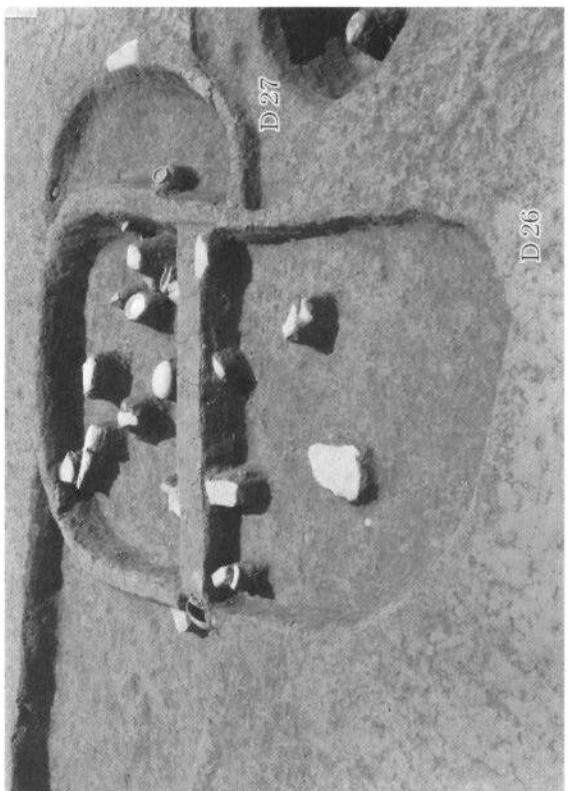
(3) 19号土坑(北から)



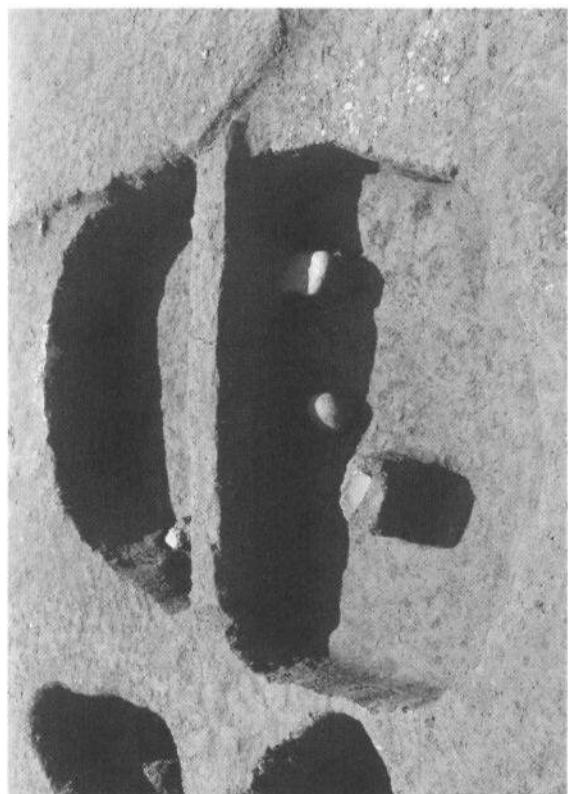
(4) 22号土坑、5号竪穴(東から)



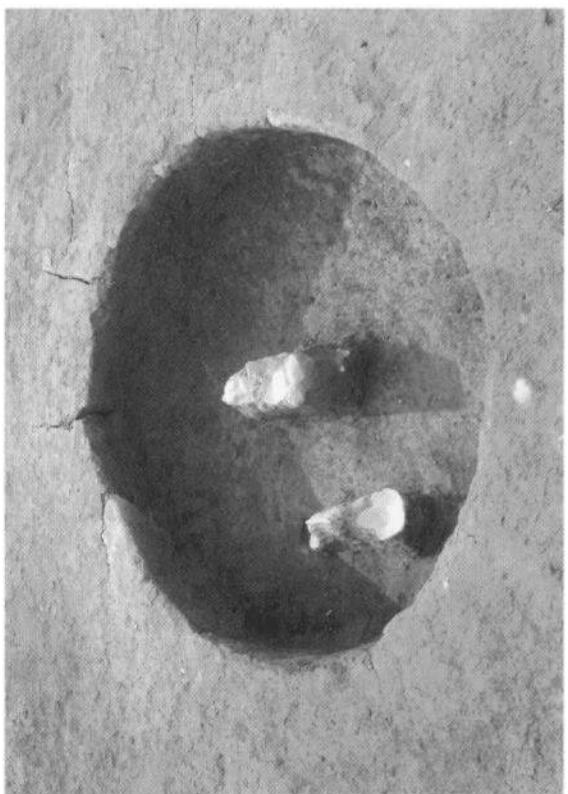
(1) 24号土坑(西から)



(2) 26・27号土坑(西から)



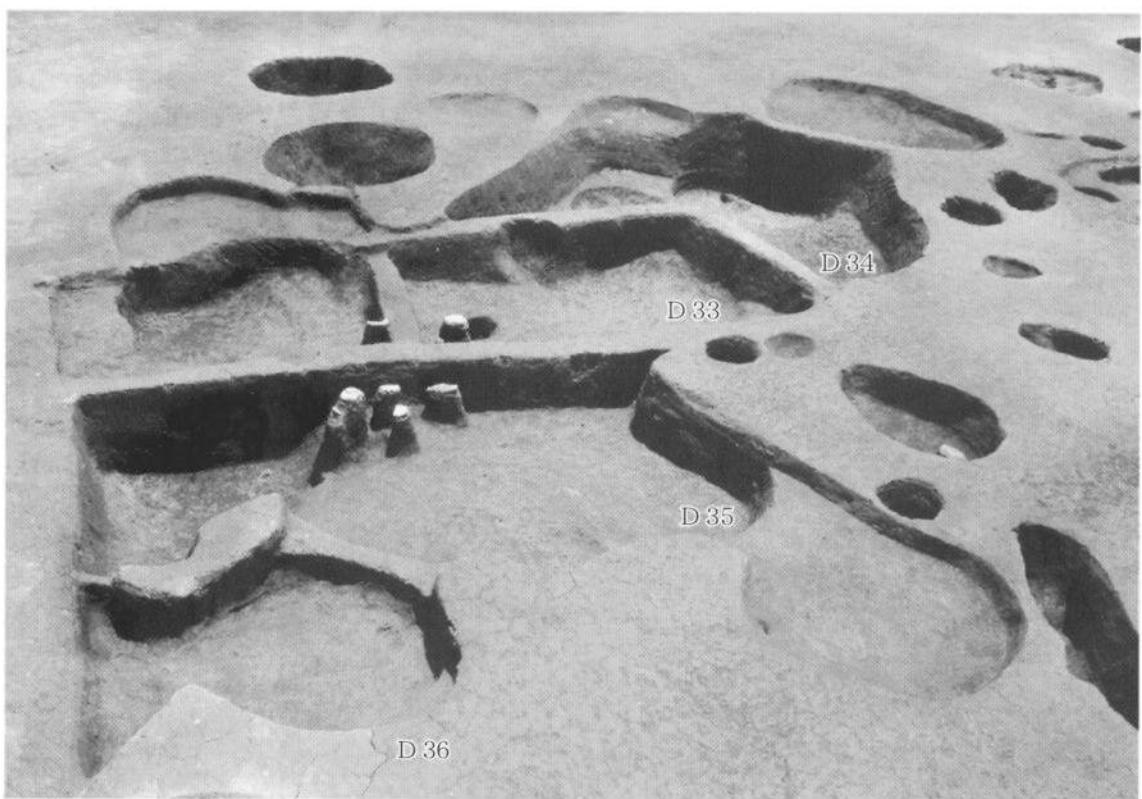
(3) 28号土坑(西から)



(4) 30号土坑(西から)



(1) 32号土坑(南から)



(2) 33~36号土坑(西から)



(1) 35号土坑遺物  
出土状況(西から)



(2) 52号土坑  
(東から)



(3) P 455  
(南東から)



(1) 2~4号通路周辺(北西上空から)



(2) 2号通路(南から)



(1) 3号通路(西から)



(2) 川原石出土状況(北から)



(1) 3号通路(北から)



(2) 3号通路最下部遺物出土状況  
(北西から)



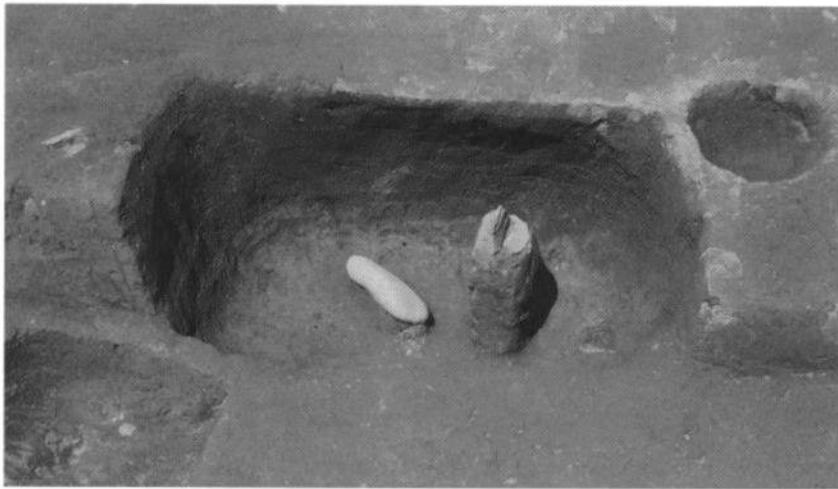
(3) 5号通路(南東から)



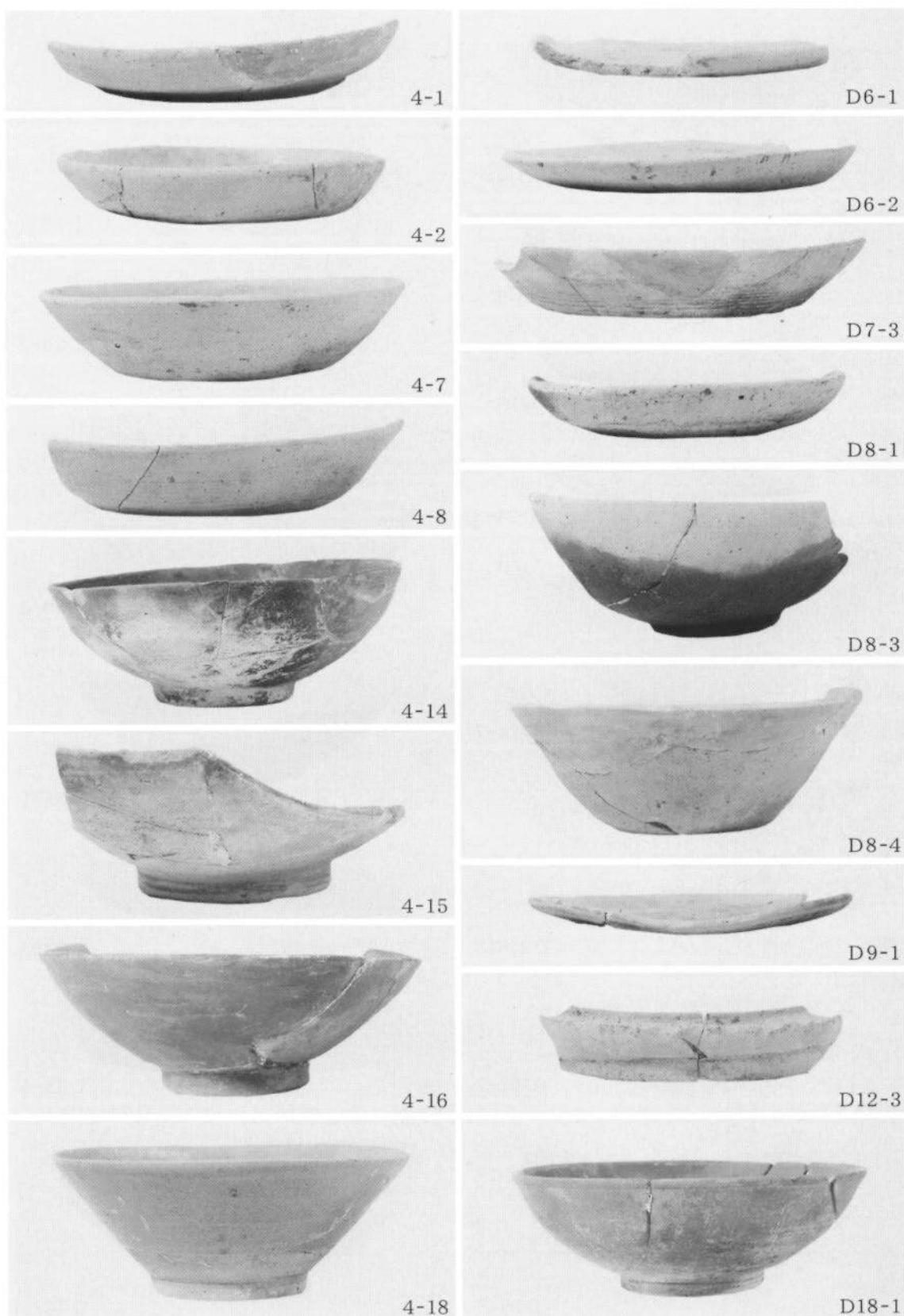
(1) 15号土壙墓  
(南から)

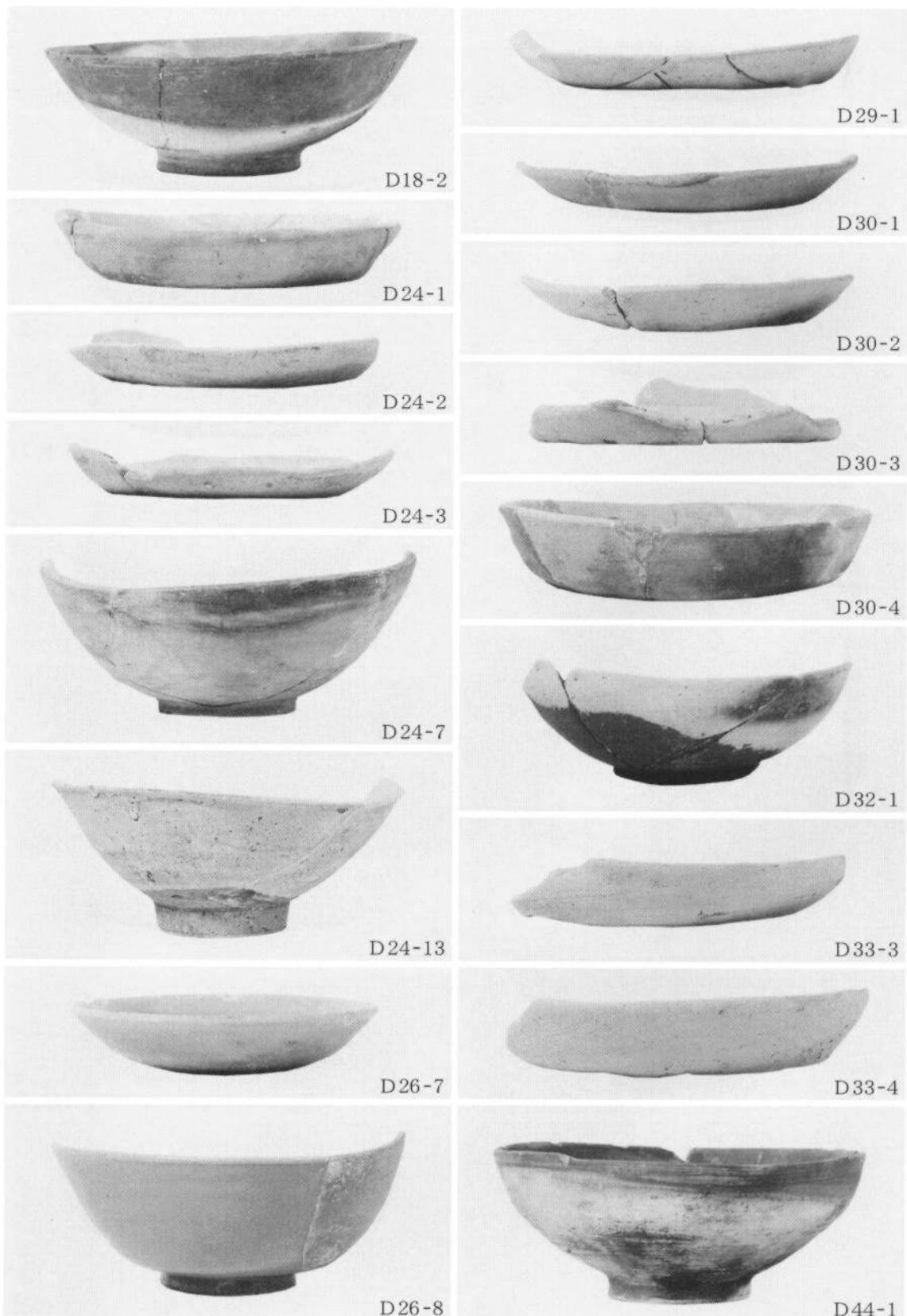


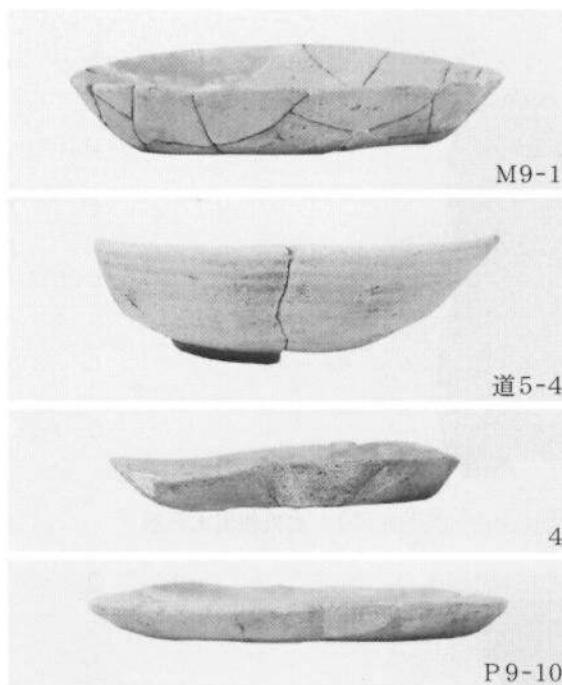
(2) 16号土壙墓  
(東から)



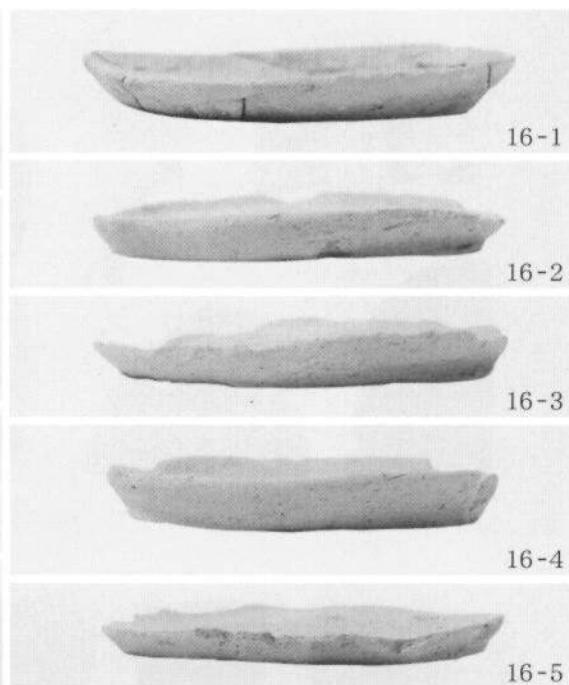
(3) 17号土壙墓  
(東から)



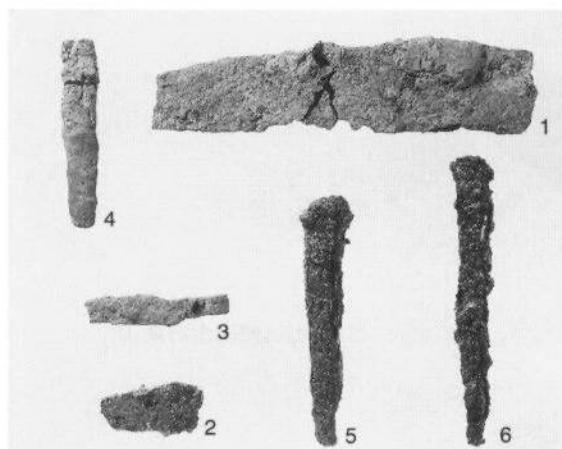




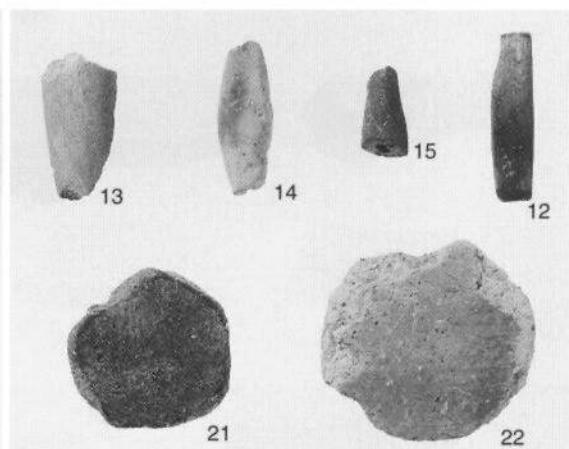
(1) 溝・通路・Pit 他出土土器



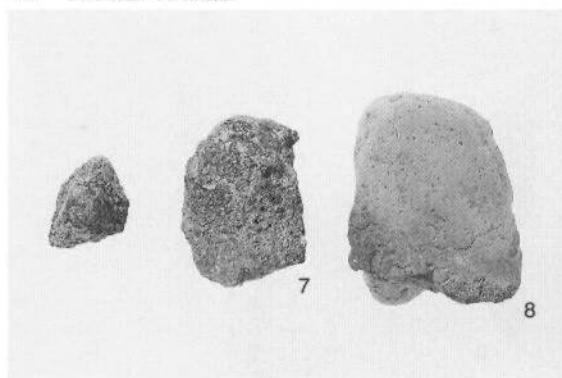
(2) 16号土壤墓出土土器



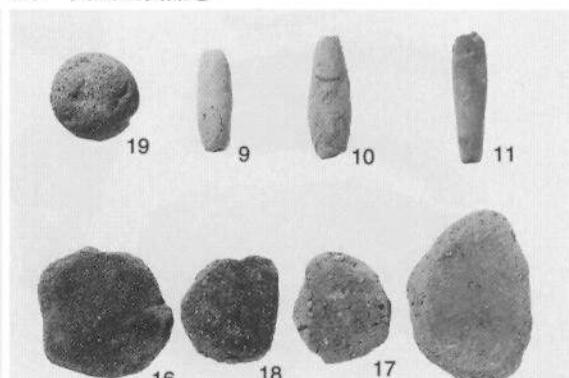
(3) 土坑他出土鉄器



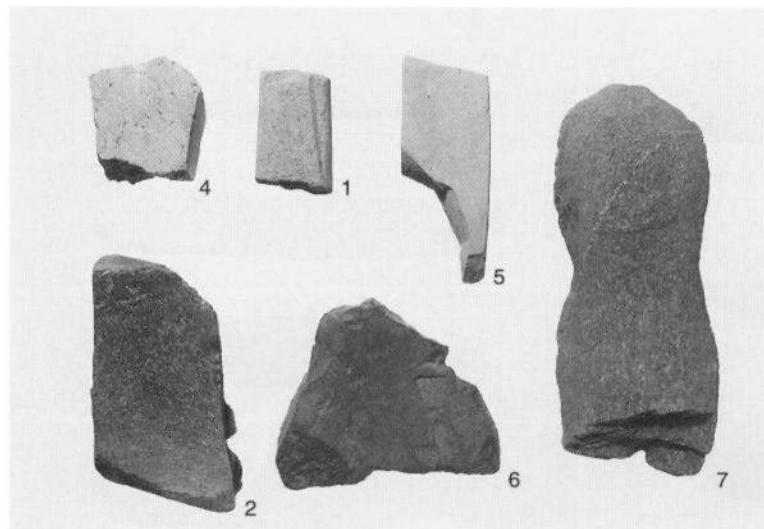
(5) 出土土製品①



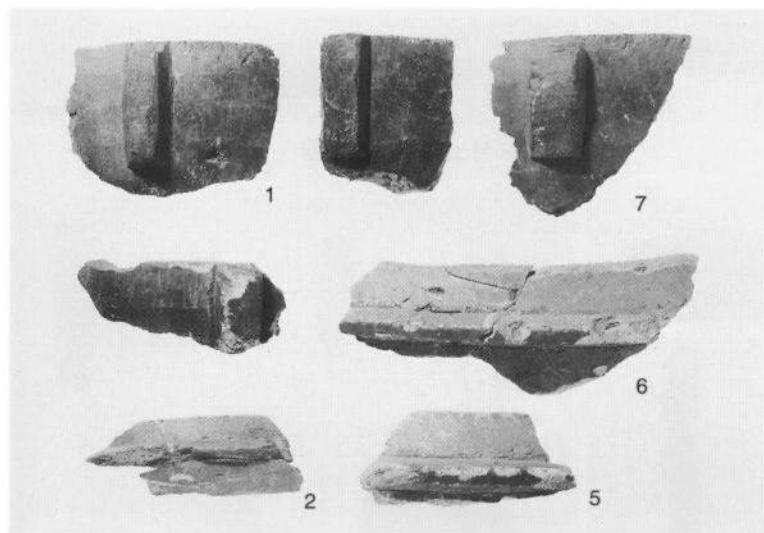
(4) 出土フイゴ羽口



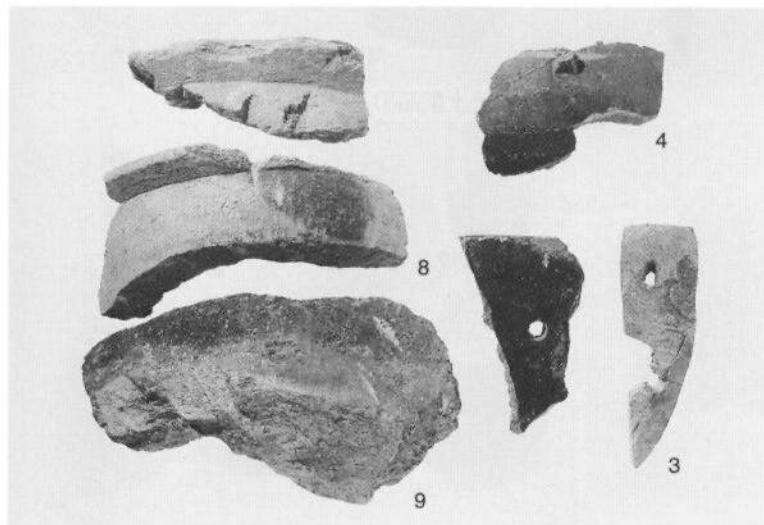
(6) 出土土製品③



(1) 土坑他出土石器



(2) 土坑他出土石錫①



(3) 土坑他出土石錫②

## 報告書抄録

フリガナ	アサ克拉グンアサ克拉マチショザイナガシマイセキノチヨウサ						
書名	朝倉郡朝倉町所在長島遺跡の調査						
卷次	II						
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	-55-						
編集者名	小田和利						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7						
発行年月日	1999年3月31日						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ナガシマ 長島 II	アサクラマチオオアザ 朝倉町大字 スガワアザナガシマ 須川字長島  1943~1954 · 1960~1968 · 1990 · 1991 · 1966~ 2014	404420 570366	35°22'45" · ·	130°44'40" · 19831003 · 19870422 · 19871027	19821001 · ·	5,500m <sup>2</sup>	九州横断 道建設
主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
旧石器	——	剥片尖頭器・ナイフ形石器					
縄文	円形竪穴 2 屋外炉 1 集石土坑 1	石鏃 石鏃					
弥生	竪穴住居16 溝 4 落込 3 石棺墓 8 土壙墓 4	土器、石器、鉄器 〃 〃 仿製鏡、鹿角装刀子、玉類					
古墳	竪穴住居 16 掘立柱建物 1	土器、鉄器、土製品					
奈良	竪穴住居 28 掘立柱建物 4 土坑 5	土器、鉄器、土製品			墨書き土器、転用硯、製塩土器		
鎌倉	掘立柱建物 7 竪穴 5 土坑 43 通路 3 土坑墓 3	陶磁器 〃、鉄器 〃、鉄器 土師器、鉄器					

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H 10	登録番号 10

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－55－

平成11年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡県福岡市博多区東公園7-7

印刷 栄光印刷株式会社

福岡県福岡市東区松田1-9-30

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

—55—

長島遺跡Ⅱ

付 図

